
ポケットモンスター ホクシン地方への挑戦

ミジュマル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ホクシン地方への挑戦

【Nコード】

N3658P

【作者名】

ミジユマル

【あらすじ】

イツシユ地方から帰ってきたサトシ。シンオウリーグ、イツシユリーグともにベスト4で終わるが次のリーグにベスト4以上に入るとワールドリーグに出場できるのだ。そしてホクシン地方へ旅立つ。

第1話 再会の果てに（前書き）

またまた新作小説です。

第1話 再会の果てに

あくる日のこと一人の少年がマサラタウンに帰ってきた。そのことをいち早く知った人物二人がいた。

カントー・ハナダシティ

???「いよいよ会えるのね。楽しみだわ」

シンオウ・フタバタウン

???「よし、準備完了。ほんと、久しぶりだわ。はあ、緊張する。

ううん、きつと大丈夫、大丈夫」

2人「いざ、マサラタウンへ！」

この二人は、ある人物に思いを寄せていた。

二人は、マサラタウンへ出発した。

サトシ「ハクション！」

別に寒いわけでもむずがゆいわけでもないのにくしゃみが出る。誰かが噂をすればくしゃみが出ると言うが、噂でもされているのだからが彼は、鈍感なためそこまで考えることは、ほとんどない。

さて彼の名前は、サトシ。ポケモンマスターを夢見る少年である。つい先日イツシュ地方から帰ってきて家でのんびりするものの暇でしよすがなかった。

ピンポーン

サトシ「ん？ 誰だろ？」

チャイムが鳴ったので、扉を開けるため玄関へ向かう。

サトシ「今開けまーす。」

扉を開けると、そこにはサトシと旅をしてきたある少女が立っていた。

???「ひ、久しぶりサトシ。」

そこに立っていた人物とは・・・

サトシ「ヒ、ヒカリ？ 一体どうしたんだ？」

玄関に立っていたのはヒカリ。サトシがシンオウ地方を旅していたときに一緒にいたトップコーディネーターを目指している少女である。

サトシ「久しぶりだな、ヒカリ。ポツチャマはどうしたんだ？」

ヒカリ「さっき偶然会ったポケモン川柳のお孫さんがポツチャマに興味を示したみたいで預けてきたの」

ヒカリは、そう言う。

ちなみにポケモン川柳のお孫さんとは、シゲルのことである。余談ではあるがポケモン川柳の人がオーキド博士である。これも余談だがポケモン川柳とは、オーキド博士が作った公認の川柳で世界中に愛好者がいる。そのためオーキド博士をほとんどの人が「ポケモン川柳で有名な人」とイメージが強いため先輩研究員であるナナカマド博士にしかられることがある。本当は、世界的ポケモン権威者だがそれを知っているのは、ポケモン研究員やオーキド博士をポケモン権威者だと知っている人のみである。

サトシ「そっか。俺、今日用事もないし、一緒に研究所に行くか？」

オーキド博士に聞きたいことがあるし」

ヒカリ「じゃあ行こうか（ヤッター。今日は、付いてるわ）」

心の中では、とても喜んでいるヒカリなのであった。

そして相棒のピカチュウを連れてオーキド研究所へむかうのであった。

第1話 再会の果てに（後書き）

サトカス系の小説書いてきた俺ですけど今回の小説は、サトカスだけじゃなくサトハル、サトヒカ、サトアイを書いてみようと思いましたが。一応言つときまですけどこの誰かさんの小説に対抗心を抱いて書いたわけじゃありませんので、そこるところご理解してください。

第2話 オーキド研究所

サトシとヒカリは、研究所にやってきた。

研究所には、ジゲルがいた。

久々のポツチャマとピカチュウの再会に2匹とも喜ぶが一番喜んでいたのはミミロルであった。知つての通りミミロルはピカチュウに対して好意を持っている。そしてポツチャマを押しつけてピカチュウに抱きつくミミロル。当のピカチュウは、赤くなっていた。

ヒカリ「ポツチャマの面倒を見ていただきありがとうございます。

ポケモン川柳のお孫さん。」

シゲル「どういたしました。ところで、ヒカリさんだけ。いい加減名前を覚えてくれないか・・・」

サトシ「(やつぱり、気にしてたんだ・・・)」

シゲルの言葉に苦笑をするサトシ。

シゲル「ところで何しに来たんだい？サートシ君」

サトシ「その呼び方やめてくれないか。まあいいや。シゲル単刀直入に聞くがオーキド博士はいるか？」

シゲル「おじいちゃん？おじいちゃんならさつきケンジとともに出かけて行ったぞ」

サトシ「そうか」実は、オーキド博士に他のリーグは無いか、聞きに来たんだが」

シゲル「他のリーグ・・・そうか！サートシ君は、確かシンオウリーグに続いてイッシュリーグもベスト4だけ？」

サトシ「そうだよ、だから次のリーグベスト4以上ならワールドリーグに無条件で出場できるだよ。それに勝ち上がって優勝すればポケモンマスターになれるんだよ」

サトシは、シゲルにそう言う。

ワールドリーグとは、4年に1度行われるポケモンマスターになるための大会である。出場できるのは、各大会でチャンピオンリーグ

に出場経験を2回以上か大会で3回連続ベスト4以上の成績者のみ出場できる。これらの厳しい条件をクリアした人のみがワールドリーグに出場できるのだ。ワールドリーグは、まずリーグ戦が行われて4人ずつ分けられて勝ち越し者のみ次に進める。次も同じくリーグ戦を行いここでも勝ち越し者のみ次に進めそして次は、試験官との勝負である。試験官は、各地の四天王をランダムで3人決めてそして最後の一人が各地のチャンピオンマスターが相手となる。誰になるかは、3人を倒さない限りわからないのである。このステージは、一発勝負で負ければ即終わりとなる。

トルトルトルトルトルトル。

ガチャ。

シゲル「はい、オーキド研究所です」

ケンジ「ジケル？ケンジだ」

電話の相手は、ケンジであった。そして何かを告げて電話を切る。

サトシ「ケンジ、なんだって？」

シゲル「今日は、帰って来れないって」

サトシ「そうか」

そう言っているうちに日が暮れる時間になった。オーキド博士は、今日は帰って来ないと言うことでサトシ達は、帰ることにした。

サトシ「ところでヒカリ。今晚どうするんだ？」

ヒカリ「えっ？」

こんな時間帯なので、一人外を出歩くわけにはいかない。女の子なら尚更だ。

サトシ「泊るところないんなら、今夜家に泊らないか？」

ヒカリ「サ、サトシの家に!？」

そういわれてヒカリは、赤くなる。何故かと言うとヒカリは、サトシに好意を抱いているが当のサトシは、ご存知の通り恋愛には鈍感なためそんなことは、わかるはずがない。

この状況を見ていたシゲルは……

シゲル「(まったく。相変わらずの鈍感だなサートシ君)」

シゲルは、心の中でそう言う。

こうしてサトシは、オーキド研究所をあとにしてサトシの家に向かった。

その途中のこと。ヒカリは、不安と好奇心、行為という感情で心がいっぱいであった。

第3話 お邪魔します

なんだよサトシとヒカリがサトシの家についた。

サトシ「ただいま」

????「お！お帰り、サトシ」

サトシとヒカリを出迎えたのは、サトシのママではなく・・・

サトシ・ヒカリ「ヤストシ!?!」

そこにいたのはヤストシである。

一応この少年 ヤストシのことを説明しておこう。

ヤストシは、ハナダにあるウチダ博士というポケモン権威者の息子である。ちなみにウチダ博士は、ポケモン権威者だけでなくポケモン協会副会長を務めている。さて話を元に戻してヤストシとサトシは、サトシが旅を始めた頃に出会い今では、親友兼ライバルである。また性格もポケモン第一に考えてポケモンには、優しくしている。カントー、ジョウト時代は、水・草中心でホウエンの頃は、草中心そしてシンオウでは、バランス中心だったがリーグ直後、イツシュの頃は、草系マスターを目指そうと再び草地中心に集め育てている。ちなみに成績は、カントーリーグベスト8、ジョウトリーグベスト4、ホウエンリーグ準優勝、シンオウリーグ優勝しチャンピオンリーグチャンピオンマスター戦で敗退。イツシュリーグベスト4と好成績を残している。

ヒカリ「なんで、ヤストシがいるの?」

ヤストシ「久しぶりにサトシの家に来てみればサトシは、ヒカリと出かけているてママさんから聞いて家で待たせてもらったんだ」

ヒカリ「そうなんだ」

ヤストシ「ところでサトシ。カスミ見なかったか?」

ヤストシの発言にサトシは、一瞬赤くなる。

サトシ「カ、カスミ?見ていないけど」

サトシの声が完全に裏声になって言う。

ヤストシ「そうか。おかしいな。あいつ今朝は焼くマサラに行ったってサクラさんから聞いたけどな」

ヤストシは、そう言いながらサトシの顔をチラッと見る。

サトシ「きつと、トキワの森で虫に追いかけられてるじゃないのか？」

サトシは、そう言う。

さてここでカスミを紹介しておこう。

カスミとは、アニメを初期の頃から見ている方はわかる人もいるが知らない人のために簡単に説明しておこう。サトシが旅立った日ピカチュウがまだサトシになつていなかったときピカチュウは、オニスズメに攻撃しそれがきっかけでオニスズメが仕返しとばかりにサトシとピカチュウを襲う。そして川に飛び込みその時助けてくれたのがカスミである。余談だがこのとき事情を知らないカスミは、傷ついたサトシのピカチュウを見てサトシのほっぺに1発たたかれたのは有名な話である。そしてサトシは、カスミの自転車を借りそして壊してしまう。それがきっかけでカントー、オレンジ諸島、ジョウトを旅に付き合いハウエンを旅立ち直前カスミのお姉さん達が旅行に行くためジムを任せられたのである。またカスミは、虫ポケモンが嫌いなのである。ちなみにもう一つ付け加えるとカスミはサトシに好意を持っている。

サトシ「さてと、部屋のベットで寝転がるか」

そういつてサトシは、部屋に向かう。

ヤストシ「あれ？ピカチュウは？」

ヒカリ「ピカチュウならミニロルと一緒に外にいるわよ」

ヤストシ「ミニロルも相変わらずだな。ピカチュウもそろそろミニロルのアプローチを受ければいいのにな。まあ相手サトシと同じく鈍感だからな。ミニロルが可愛そうだ」

ヤストシは、ヒカリにそう言ってリビングに入る。

ヒカリ「さてと私は、サトシの部屋にいきますか」

そういつてヒカリは、サトシの部屋に行く。

第3話 お邪魔します（後書き）

更新したし今日は、この辺で・・・

????????「ちよつと、待ったあゝ!!!」

げ！ハルカにカスミ!?

ハルカ「なんでヒカリだけおいしいところとられるのよ」

カスミ「私なんて1話の二言のみしか出てないわよ。作者あんた、サトカス派なのになぜ私を出さないのよ」

ヒカリ「え！そうなの!？」

ヒカリ!？いつの間に!？

ハルカ「あんたサトカスばかり書いてサトハルとサトヒカのファンが怒るわよ」

そんなの十分承知で何作も書いてるじゃないかよサトカス系の小説を。

カスミ「じゃあ、なんであたしよりヒカリを先に書いてるのよ」

それは、三角関係なんて面白いからこういうふうにさせたんだ。だから心配するなカスミ。次回お前にオイシイ思いさせてあげるからカスミ「ならいいけど」

ヒカリ「それより作者。サトヒカ(?)のネタ乏しくない?」

ヒカリ何度も言わせるな。俺は、サトカス派だ。サトヒカ派のネタなんてこれぽつちもないんだから。

ヒカリ「なによそれ?!サトヒカのファン誤りなさいよ」

そんなことで誤ったら俺と同じサトカスファンが怒るぞ
ハルカ「それと作者。イツシュから帰ってきた設定になっているけどいつオリジナルの地域に行くの?」

ずつーと先だ。それとアニメも新しいシリーズ始まつてるからこの物語に女の子をもう一人つけることにしたから。

ヒカリ「もう一人?」

そう、4代目ヒロ・・・あ!

カスミ「4代目!？」

ハルカ「ま・さ・か?!」

ヒカリ「と言うことは・・・あの色黒女ね」

えゝ嫌な状況になってきたので次回もお楽しみに。

???「ハクシユン。誰かが噂しているのかな？」

「キバキバ」

第4話 世界の美少女(前書き)

今年最後の話は、3話連続でお送りします。

第4話 世界の美少女

ヒカリがサトシ宅を訪問していたその頃カスミは、トキワの森にいた。それは、まさしくサトシの発言が当たったと言う不幸なことになっていた。

カスミ「キャーキャーキャーキャーア。助けて!？」

カスミは、自転車のかごに入っているルリリと供に逃げていた。追われていた虫は、キヤタピーだった。逃げるカスミだった。

カスミ「どこまで着いて来るのよ」

懸命に逃げるカスミ。

カスミ「作者、面白がっていない?」

それは、どうかな

カスミ「楽しんでないで助けてよ」

しょうがないな。まあ、サトカスの俺だ。助けてやるよ。

カスミ「ありがとう作者」

出てきなさい、ドレディア、エルフーン、ハハコモリ、キヤタピーを追い払って。

カスミ「助かった〜虫がいなくな・・・あ!」

どうしたんだカスミ?

カスミ「作者の・・・バカーーーーー」

いたたたたなんで怒るんだよ?

状況を理解できていない作者であった。(＊b yナレーション)

その頃サトシとヒカリは、部屋にいろいろな話していた。

サトシ「それで、ヤブクロンときなんか・・・」

もちろん話の内容は、ポケモンや旅ばかりである。

ヒカリは、退屈していたがサトシと二人きりと言う状況を楽しんでいた。

ヒカリ「(こんな状況がずーと続くといいな)」

しかしヒカリの幸せもここまでである。

ピンポン

サトシ「はい」

サトシは、チャイムが聞こえ急いで玄関に向かう。

ヒカリ「誰よ。せつかく二人きりだったのに」

そう文句をたらしながらもヒカリも玄関へ向かった。

サトシは、玄関に向かって扉を開けてみるとそこには、息切れして今にも倒れそうなカスミの姿があった。

サトシ「カスミ！どうしたんだよ」

サトシは、カスミの体を揺さぶった。そこへちょうどヤストシがやってくる。

ヤストシ「どうしたんだサトシ？」

サトシ「カスミが、カスミが」

ヤストシは、カスミを抱えるサトシを見るとかすみは、ハアハアと息を切らしそして顔が真っ青であった。

ヤストシ「大丈夫だ。ただの酸欠だ、ソファに少し横にさせておけば大丈夫だろう」

サトシ「よかった」

サトシは、肩を下ろす。

ヤストシ「ということサトシ、カスミをソファまで運んでおけよ」
サトシ「え！ちよつとヤストシ」

大きい声で言うがヤストシは、聞こえないフリをしてキッチンのほうへ消えていく。

サトシ「しょうがない」

サトシは、カスミを抱えて家に入る。サトシの抱え方は、お姫様抱っこだが鈍感のサトシには、そんなことわかるわけがなかった。そんなことをヒカリが全て見てしまった。

ヒカリ「（なんでよ。ルアーの人がお姫様抱っこされてるのよ。私もされたいわよ）」

とジェラシーを焼いているヒカリ。

ちなみにルアーの人とは、カスミのことである。随分前にシンオウで一回釣りしたときにカスミルアーを使用したときにカスミのことを教えてもらったヒカリは、それ以降カスミのことをルアーの人と呼んでいる。オーキド博士といいシゲルといいカスミといい年上の人に変な呼び方をするヒカリ。まあ、それは、いいとしてカスミの登場でヒカリは、どのような行動をとるのかはお楽しみに！

第4話 世界の美少女（後書き）

カスミ約束通りにオイシイ思いさせたぞ。

カスミ「ありがとう作者。さすがサトカスファンね やるところが違いわ」

ヒカリ「それより作者。なんで私だけあんな思いさせられるのよ」
まあまあ、落ち着けヒカリ。初回からだしてるんだからサトシに対する独占欲なんて捨てちゃいなさいよ。

ヒカリ「す・て・ま・せ・ん・よ。作者がサトカス派でも私は、必ずサトシとくつついて見せるわ」

おいおい。話を決めるのは、俺だぞ。

カスミ「そうよ、ヒカリ、作者のいうとおりよ」

ヒカリ「それはどうかなルアーの人？私は、必ずサトシに告って見せるから」

カスミ・作者「聞いてないしこの3代目ヒロイン」

第5話 爆弾発言

カスミは、目を覚ますとそこは、サトシの家のソファだった。

カスミ「ここって・・・」

ヤストシ「目覚めたか？」

カスミ「ヤストシ!? なんでここにいるのよ?!」

ヤストシ「なんでって行っちゃ悪いかよ。それよりなんであんなに息切れしてんだ？」

カスミ「実はね・・・」

カスミは、さっきの出来事を話し始めた。

ヤストシ「トキワの森でキヤタピーたちに追いかけられたところを作者にね」

カスミ「そうなんだよ。助けてくれたのはいいけど出したポケモンが・・・」

ヤストシ「出したポケモン? 一体作者は、何を出したんだ？」

カスミ「ドレディア、エルフーン、ハハコモリ」

カスミが3匹の名を出す。

ヤストシ「ドレディア、エルフーン、ハハコモリか。全部草ポケ・・・

・あ! ハハコモリは、確か・・・」

カスミ「止めてよ思い出しただけでソワソワするわ」

ヤストシ「どうやら出すポケモンを1匹間違いたようだな作者」

ハハコモリは、可愛くて強いのかな

カスミ「それでサトシは？」

ヤストシ「サトシか? サトシは、さっきヒカリが無理矢理サトシの部屋に連行されたぞ」

カスミ「ヒカリって誰？」

カスミは、ヤストシにたずねる。

ヤストシ「あ! そうかカスミは、シンオウの旅のこと話していなかったな」ヒカリは・・・」

ヤストシは、ヒカリについてカスミに話した。

カスミ「そうなんだ」

ヤストシ「意外と冷静だな。ヒカリとサトシが二人きりなのに」

カスミ「まさかヒカリちゃんがあのお子ちゃまに恋を抱くなんて思わないよ」

そういうがヤストシは、その考えは、間違っていると心の中で言う。ヒカリがサトシに好意を抱いていることは、ヤストシは知っていたがあえてカスミの前では否定しなかったのは、サトシをめぐって争奪戦が起きることが目に見えたからなのだ。

ヤストシ「さてと、飯の仕度も用意できたしヒカリとサトシを呼びますか」

カスミ「あれ？サトシのママさんは？」

ヤストシ「サトシのママさんならいないぜ。今日は、町内の人と一緒に旅行に行ったんだ。だから俺が代わりに家に来て料理したんだ」カスミ「あんた、料理できたっけ？」

ヤストシ「悪いけどカスミ、タケシやデントほどじゃないけど、簡単な料理ぐらい俺にだって出来るさ。今キッチンで手作りの寿司を作ったぞ」

カスミ「デントって誰なの？」

ヤストシ「イッシュで出会ったソムリエさ。あとでヒカリと一緒に話すから、テーブルの前で待ってて。おいサトシ、ヒカリ飯できたぞ」

キッチンのところから大きい声で叫ぶヤストシ。せめて階段のところから叫びなさいよ。

サトシ「おいしいな、ヤストシの料理」

ヤストシ「だろう、自慢じゃないけどこのぐらいの料理は作れるぞ。誰かさんとは違ってね」

ヤストシは、サトシの隣に座るカスミを見る。ちなみにヒカリは、サトシの前で食っていた。

カスミ「ところでヤストシ。さっき言っていたデントっていう人の話だけだ」

ヤストシ「そのことならサトシが詳しいぞ」

ヤストシは、あえてその話をサトシに振る。

サトシ「ヤストシ?!」

ヒカリ「ねえ聞かせてよ」

カスミ「あたしもよ」

二人の女の子と攻められるサトシだが何回も言うけどサトシは、恋愛に対しては鈍感である。

サトシ「しょうがないな」

こうして二人のさめに骨が折れてサトシは、イッシュのことを話す。カスミ「デントってサンヨウジムのジムリーダーでポケモンソムリエなんだ」

ヤストシ「しかも三つ子で交代ずつにジムリーダーやってるんだぜ。偉いものだカスミのお姉ちゃんも見習って欲しいよな」

カスミ「それは、いえているわ」

ヒカリ「ところでポケモンソムリエってなんなの?」

ヤストシ「ポケモンとトレーナーの相性の診断や、友好を深めるためのアドバイスを行うのがポケモンソムリエさ」

ヒカリ「じゃあ二人で旅したの?」

サトシ「いやもう一人アイリスがいるぜ」

その言葉にヒカリトカスミが反応しヤストシは、苦笑する。

カスミ・ヒカリ「アイリスって誰よ」

サトシを問い詰めるカスミとヒカリ。

サトシ「デントに会う前に勝手に勝手についてきてそれでデントが仲間入りしたときに正式に仲間になったんだ」

カスミ「まさかあんたアイリスの自転車壊して仲間に・・・」

サトシ「自転車じゃなくてその・・・」

二人の攻めに言い辛そうになったサトシ。

ヤストシ「サトシがアイリスをポケモンと間違えてモンスターボー

ルを投げたことがきつかけでついてきたんだ」と余計なことを言うヤストシ。

ヒカリ・カスミ「それ本当なのサトシ」

サトシ「ああ、本当はアイリスのキバゴに凶鑑が反応したんだけど、たまたま投げたところにアイリスがいたんだ。あの時は本当に申し訳ないと思ったよ。それでカスミとヒカリは、どうしてたんだ？」

サトシは、イツシュの話題を逸らそうとする。

ヒカリ「私は、相変わらずよ。トップコーディネーターになるために特訓中。ミニロールのモデルの仕事が大変だから、あまり休めないの」

カスミ「あたしは、ジムリーダーを勤めてるけどお姉ちゃんたちがなかなか手伝ってもらえなくておまけにショーをやってくれと頼んでくるし」

サトシ「大変だな二人とも」

カスミ「それより、サトシはどうなの？」

サトシ「俺か？俺は、シンオウ、イツシュに続いてベスト4だったから次の大会でベスト4以上の成績を取ればワールドリーグ出場だぜ」

ヤストシ「俺は、もうワールドリーグに行ける資格は歩けどあのリーグは、4年に1度だからな」

カスミ「サトシ、ワールドリーグ出るんだ、実はあたしも出場する予定よ」

サトシ「そうか、長年の夢の水系マスターをか？」

カスミ「そうよ。それにあんたがいない間ジムが暇なときにカントーとジョウトのコンテストに挑戦したの」

ヤストシ「カ、カスミがコンテストに?!」

サトシ「それで結果は？」

カスミ「ジョウト、カントーともにトップコーディネーターになったの」

サ・ヒ・ヤ「えーーーーーー!?!」

ヤストシ「マジですか!？」

ヤストシもサトシも驚くが一番驚いたのはヒカリだった。トップコーディネーターを指摘していた彼女だがまさかジムリーダーが2冠取るとは夢にも思わなかったからだ。

サトシ「すげえな」

サトシは、いまだに驚きを隠せなかった。

その後はなしは、盛り上がったが事件は、飯を食い終わった後に起きた。

きっかけは、ヤストシだった。

ヤストシ「サトシ、風呂沸いたぞ」

ヤストシがサトシに言う。

この時ヒカリは、トイレに行っていた。ヤストシは、サトシにお風呂が沸いたよと言った後後片付けをしていた。

そしてリビングにはサトシとカスミ二人だけである。

サトシ「カスミ」。お風呂沸いたみたいだから、入るか」

カスミ「へっ?」

突然のサトシの発言に赤くなってしまふカスミ。

普段なら素直になれないカスミだがあれから年月が経ち今は、ある程度は素直になれる。

カスミ「(お風呂って、サトシと一緒に?そ、そんないきなり大胆すぎるよ。なに考えてるのよあのおこちゃまは)」

カスミの脳内では、混乱と妄想が広がっていた。

カスミ「(でもヒカリにサトシを取られないためにも頑張るしかないわ)」

カスミは、心の中出そう自分に言い聞かせて風呂場に向かう。

しかしヒカリが聞いてないわけもなかった。ヒカリは、トイレから出たあとサトシの言葉が聞こえてさらにカスミの行動でサトシとカスミが二人で風呂に入ることを知した。

ヒカリ「(このままだとルアーの人にサトシが取られるわ。ここは、なんとしても邪魔してやるわ)」

そつ心の中行ってヒカリは、行動を始めた。

第5話 爆弾発言（後書き）

ヤストシ「なんか嫌な予感しないか作者？」

そうか？

ヤストシ「これじゃあ事実上のサトシ争奪戦じゃないか」
そうなるな。まあいいじゃんか面白くなってきたし。

ヤストシ「それもそうだな」

それじゃあ読者の皆様方感想を

ヤストシ「お待ちしています」

第6話 お風呂場での大事件

サトシは、お風呂に入っていた。まさかこのあととんでもないことになるとは、本人は、気づきもせずじゆうたり肩まで浸かっていた。カスミ「サトシ、入るよ」

そう言つてカスミが風呂場の扉を開けた。

カスミ「え！ちよつとカスミ!？」

サトシは、驚きを隠せなかった。実は、さっき言つた発言は、サトシがカスミに冗談で言つたのだ。どうせ受け入れるわけがないと思つていたがまさか入つてくるとは、予想外でサトシは、頭の中が混乱する。

サトシ「待つてカスミ。さっき言つたは・・・」

カスミは、徐々にサトシに近づいた時。

ヒカリ「ちよつと待つた」

そこへヒカリが乱入してきた。

サトシ「ヒカリ!？」

ヒカリ「ルアーの人、一人だけ抜け駆けするなんて許さない」

カスミ「なによルアーの人つて、あたしの名前はカスミよ。ヒカリちゃんだつてあたしは、サトシに誘われて風呂に入ったのよ」

ヒカリ「いくらサトシに誘われたからといって私は、認めないからね」

お互い火花を散らす。

サトシ「ちよつと待つて二人とも落ち着け」

懸命に落ち着かせようとするサトシ。

しかし・・・

ヒカリ「私がサトシの背中を流すのよ」

カスミ「そんなこと勝手に決めないのでヒカリちゃん」
まったく収めるどころかドンドンヒートアップして行く。

風呂を出ることができずにいるサトシ。

ヒカリ「こうなったらポケモンバトルで決着よ」
カスミ「望むところよ」

こうしてポケモンバトルまでに発展したサトシ争奪戦。
しかしずーっと風呂に入りばなしでいたサトシは、ついにダウンしてしまふ。

ヒカリ「サトシ!？」

バトルから一転しサトシを介護しようとするヒカリ。

カスミ「すきありルリリ、ヒカリに水鉄砲」

どこに待機させていたのかルリリが出てきてヒカリの足に直撃し壁に頭をぶつけて気絶する。

カスミ「サトシーー!」

意外と腹黒い性格を見てしまった俺なのであった。

カスミ「待っててサトシ」

サトシを抱えたカスミ。

カスミ「サ、サトシ」

このときカスミの頭の中は妄想で広がっていた。

そしてその妄想でカスミはサトシの唇に注目した。

カスミ「サ、サトシ・・・」

そうカスミは、サトシにキスがしたいと思い始めていた。それは、カスミの理性であろうか？

カスミ「あ!心の準備しなきゃ」

カスミは、一呼吸しそしてカスミは、サトシにキスしようとした。

その時ヤストシがやってきた。

ヤストシ「おいサトシ。いつまではい・・・あ!」

ヤストシは、風呂場を見ると完全に伸びているサトシと気絶しているカスミそして妄想に浸ってたカスミが鼻血を吹きだしながら気絶していた

サ「サ、サトシ、カスミ、ヒカリ!?すっかりしろ!?!」

ヤストシは、慌てて3人をベットに運んだ。

その後3人は、翌日までの朝まで目覚めなかった。

第6話 お風呂場での大事件（後書き）

ヤストシ「あと1時間で2010年も終わりだって言うのに何だこの締めくくりは」

まあまあ、キャラの性格を何とか崩壊しないように努力したぞ。

ヤストシ「そうかな？」

それでは、皆さんあと1時間ですけどよいと・・・イタ、誰だ物を投げたのは（怒）

????????「終わるな作者」

げ！ハルカにアイリス！？

ハルカ「ここまで全部登場してるのはカスミとヒカリだけよ」

アイリス「そうよ。登場させなさいよ。ほんとその辺が子供ね」
なに言ってるんだやお前も子供じゃないかアイリス。

アイリス「なに言ってるのよ作者。キャラこそ10歳だけど声優は作者と同じ年よ」

ハルカ「それは言ってるかも」

それで二人とも何しに来たんだ？まあ、大体わかるけどな。二人とも早く登場したいんだらう？

アイリス「そうよ。早く登場させてよ」

ハルカ「同じく」

もちろんお前らの出番はあるよ。ただ、待ってくれ、サトシとカスミとヒカリがあんな状態だから、出せるわけし。

ハルカ「ヒカリ達をあんな状態にしたのは、アンタでしょ作者」

アイリス「まあいいわ。もう2010年も終わりだしそろそろお開きにしましょう。除夜の鐘が聞きたいし」

大人ばいねーアイリス。それじゃ皆様よいお年を。

ハルカ・アイリス「よいお年を」

第7話 ホウエンの舞姫登場（前書き）

新年明けましておめでとございます。
本年もよろしくお願いいたします。

第7話 ホウエンの舞姫登場

はるかサトシの自宅にヒカリとカスミそしてヤストシがいた頃もう一人サトシに好意を持った少女がカントーのクチバ港にやってきた。ハルカ「やつと着いたわ。久々のカントー、懐かしいかも」

そういつて背伸びするハルカ。

さて彼女の名は、ハルカ。ヒカリと同じくポケモンコーディネーターの一人でジヨウトのグランドフェスティバルで準優勝しさらにシンオウも準優勝し今ではトップコーディネーターに最も近い少女だと話題となりいつしか彼女のことをホウエンの舞姫とカントー、ジヨウト、ホウエン、シンオウに知られる。ちなみに彼女はとても食べるのが大好きでグルメの情報には昔から素早くまた新しい街や道中の有名飲食店などは常に雑誌で事前にチェックしているほど食べるのが好きである。ちなみに食べることが好きなのにどうして太らないかと言うと女性に対しては失礼も知れませんが読者達が疑問に思っているので一応答えるとハルカは、徒歩や走ったりと適切な運動をしているので太らないのです。たぶん・・・

さてハルカは、なぜカントーに来たのかと言うともちろん目的は、サトシに会うことですが他にも目的は、あった。それはもちろん・・・

ハルカ「まずは腹ごしらえね。お腹ペコペコかも」

そういつてグルメブックを見始める。

するとある記事を見つける。

ハルカ「え！『今トキワ空港にて全国各地の特産品のうまいもの市開催中』！！これは、行かないと」

こうしてハルカは、全速力でトキワに向かう。

普通クチバからトキワまで時間はかなりかかるがクチバの東側にデイクダの穴がありその穴に入るとトキワの森のトキワ側の入口の近くに出れるためハルカは、そこへ向かった。もちろんなぜそんなこ

とを知っているのかは不明である。

ハルカ「おいしいもの　おいしいもの」

機嫌よく走ってディグダの穴を通るハルカ。

そして半日もしないうちにトキワの森の近くにあるディグダの穴に出っして駆け足でトキワシティに向かった。

ハルカ「あれがトキワ空港ね。意外と大きいかも」

ハルカは、そう言う。

トキワ空港は、先月開港したばかりの空港でジョウトはもちろんシンオウ、ホウエン、イツシュにいけるカントーの新しい玄関口として沢山の利用者がいる。

ハルカ「あれがうまいもの市ね」

空港に入ると入口のすぐそばに大きく看板が立ってあった。

そしてハルカは、そこへ向かった。そこには、各地の特産の料理がたくさん屋台として並んでいてハルカは、食いまくった。

ハルカ「おいしかったかも」さてと腹越しらいも済んだことだしサトシへのお土産も買ったし、そろそろマサラタウンへ行こうと」

そしてハルカは、サトシの家に向かうがこのとき家にヒカリトカスミがいるは、もちろん知らずに向かう。そしてこのとき一人の少年がハルカを目撃した。

???「まさか君までいるとは・・・どういう運命だろうか？」

その少年は、ハルカに好意を抱いていたがいまだに告白ことができずいた。

???「まあ、今はまだいいか」

少年は、そう言ってその場を去る。

緑の髪を輝きながら・・・

第7話 ホウエンの舞姫登場（後書き）

ハルカ「作者何よこれは！」

え？大食いでホウエンの舞姫って言うのがイメージだけどこか違うのか？

ハルカ「ホウエンの舞姫はともかくこれじゃあ私は、ただの食いしん坊じゃない！」

実際そうじゃないかよ。AGのナマケ口園やヤマブキシテイのラーメンの件やミツクリカップ前日に7つ星レストランのとき大食いしてたじゃないかハルカ・・・

ハルカ「そんな話だけで大食いって決めないでよ」

アイリス「それより最後に出てきた少年一体何者なのよ」

ハルカ「私もそう思っていたところよ。誰なのよ私に好意を持っている少年って？」

それは今は、言えませんが緑髪の少年しかいえません。それでは、次回もお楽しみに」

第8話 全員集合？（前書き）

今回は、ハルカを無理矢理何とか出演させました。これでサトカス、サトハル、サトヒカの3大勢力がそろえました。

第8話 全員集合？

マサラタウン

サトシ「ん〜。今日もいい朝だ。おはよう、ピカチュウ」

ピカチュウ「チャア〜」

軽く背伸びをしてピカチュウに挨拶をする。ピカチュウもそれに返事を返す。

サトシ「下に降りるか。ピカチュウおいで」

サトシはピカチュウとしたのリビングへ向かった。そこには・・・

ヒカリ「あつ、サトシおはよう」

カスミ「おはようサトシ」

サトシ「おはよう、カスミ、ヒカリ」

先に起きていたカスミとヒカリは、リビングでくつろいでいた。ちなみにあの騒動以降サトシは知らないがカスミとヒカリの仲はゴタゴタとなっていた。

それからサトシ達は、ヤストシが作った朝食で朝飯を済ましリビングで談笑をしていた。と、そこへ・・・

ピンポ〜ン

サトシ「ん？ 誰だろ。こんな朝早くから。ヒカリ、カスミ。ちょっと俺行ってくる」

ヒカリ「うん。（なんだろ、このもやもやは）」

カスミ「（なんだろうこの感じは?）」

二人は、心の中で違和感を感じていた。

サトシ「どなたですか〜?」

玄関の扉を開けると・・・

ハルカ「久しぶりかも。サトシ」

サトシ「ハ、ハルカ!? どうしたんだ。こんな朝早くから」

ハルカ「うん、サトシに会いたくなって。思わず来ちゃった。迷惑

だった？」

サトシ「迷惑だなんて。逆に嬉しいくらいだぜ。まあ上がれよ。先客も紹介するから」

ハルカ「（先客って、誰かしら？）それじゃあ、お邪魔します」
サトシはハルカを家の中へと招き入れる。

ヒカリ「サトシ、誰だっ……って、ハルカ!？」

カスミ「え！ハルカだって!？」

ヒカリもカスミも久々に会った仲間に驚く。

ハルカ「ヒカリにカスミ!？久しぶりかも」

ハルカもサトシの言っていた先客がヒカリとカスミだということに驚く。

サトシ「そっか……。ハルカとヒカリはミクリカップ以来だもんな。」

サトシはそう言いながら、3人に飲み物を出そうとリビングを離れる。

ちなみにヤストシは、3人から見えないところで寝そべりながら様子をうかがっていた。

ヒカリ「ほんとに久しぶりね」

カスミ「ハナダ以来でわね。元気だった？」

ハルカ「元気いっぱいかも。ヒカリもカスミも元気そうね」

ヒカリ「うん、ミミロルの仕事とコンテストの特訓で休めてないんだけどね。」

ハルカ「ミミロルのことは雑誌で見たわ。ほんとにすごいかも」

カスミ「あたしもその雑誌なら見たことあるわ。素敵じゃないの」
思わぬ再会に喜び合い、断章をする。

ハルカ「ヒカリもカスミが来たのって、サトシに会いに？」

カスミ「そうよ」

ヒカリ「そういうハルカもでしょ？」

ハルカ「うん。でもヒカリとカスミにはサトシは譲れないかも」

ヒカリ「こっちだって、負けないわ。」

カスミ「同じく」

親友でもありライバルでもある3人。同時に、同じ相手に好意を持っている。いわゆる恋敵同士でもある。

ヤストシ「（あれじゃあまるで三角形の中にサトシがいてその外側をカスミ、ハルカ、ヒカリが囲んでるって感じだぜ）」

心の中でそう思うヤストシ。それはまるで楽観的立場から言っているように・・・

サトシ「何が負けないんだ？」

そこへ、グッドタイミング（？）で、サトシ登場。

ヒカリ・ハルカ・カスミ「サ、サトシ!？」

突然の登場に、顔を赤くしながら驚くカスミとハルカとヒカリ。

ヒカリ「お、驚かさないでよ。ピツクリした」

ハルカ「心臓止まりそうになったかも」

カスミ「入るなら入るって言ってよ」

サ「（そんなに驚くことか？）ごめんごめん。飲み物持ってきたけど、オレンジジュースでよかったか？」

ヒカリ「う、うん。ありがとう」

カスミ「ありがとうサトシ」

ハル「ごめんね、気遣わせちゃって」

3人は顔を赤くさせつつ、サトシからオレンジジュースの入ったグラスを受け取る。

ヤストシ「（いつになったらあの鈍感直るんだろうな?）」

そう心に言いながら苦笑するヤストシ。

サトシ「いいって、いいって。それよりもシゲルから博士が今日帰ってくるって昨日聞いたから研究所に行こうかと思うんだけど、3人も一緒に行くか？」

ヒカリ「うん。特に用事もないし、行くわ」

カスミ「あたしも行くわ」

ハル「博士達に会うの、久しぶりかも」

サトシの突然の誘いに、快く承諾するヒカリとハルカとカスミ。そ

して、3人は一通りの準備を済ませ、研究所へと向かうためサトシ宅を後にした。

第8話 全員集合？（後書き）

ヤストシ「3人集まったな、ついに」

そうだな。

ヤストシ「このまま安泰でいて欲しいけどな俺としては……」

そうはいかないぞ。面白くしなと読者だって楽しめないからな。それが小説ってもんよ。

ヤストシ「そうか。それじゃあで次回も」

お楽しみに」

第9話 積極的派と消極的派

オーキド研究所に着くとシゲルがサトシ達を出迎えた。研究所に入るとサトシのミジユマルとヒカリのポツチャマがいた。水ポケモンマスターを目指すカスミに興味を示した。

カスミ「きゃ〜!!! このミジユマルとポツチャマかわいい〜!!!」

ポツチャマ「ポチャ」

ミジユマル「ミジユ」

カスミは慣れた手つきでミジユマルとポツチャマを抱き上げた。不思議と2匹は恥ずかしそうにしながらも、カスミを気に入ったようだ。

サトシ「カスミも相変わらずだな・・・」

かつての仲間の行動をほほえましく思うサトシ。他の者もその光景に笑みを浮かべる。

カスミ「そりゃ、アタシは水ポケモンのジムのジムリーダーだもの。

これくらいは朝飯前よ」

ハルカ「さすがはジムリーダーかも」

ヒカリ「なんかこっちまで楽しくなるわ」

カスミ「それにしても噂どおり可愛いわポツチャマにミジユマル」

サトシ「それだけじゃないぞカスミ。そのミジユマルなんか面白いんだぜ。バトルのときなんか、自分にやらせろって感じでボールから勝手に出てくることもあるし」

ヤストシ「あと付け足すと自分より強い相手だとピカチュウらバツトもタツチする癖を持ってるんだぜ」

ハルカ「へえ〜まるでサトシの性格とカスミのコダツクの性格がミックスしたみたいな性格だわ」

サトシ「そ、そうか？」

そんな時だった。

ピンポーン

シゲル「誰だろう？はい、今行きます」

シゲルが玄関を開けて見る。

「???」「初めましてオーキド研究所はここでいいのかな？」

シゲル「そうですね、どちら様ですか？」

「???」「申し送れました僕はデントです。ヤストシがこちらにいると聞いたもんで伺いしました」

シゲル「そうですね。まあ、こんなところで立ち話もなんですからあがってください」

デント「それでは、失礼いたします」

そう言つてデントは、研究所にあがる。

ヤストシ・サトシ「あ！デント!!」

デント「久しぶりだねサトシにヤストシ」

ヒカリ「ねえ？知り合いなの？」

ヒカリ「ただでなくハルカ、カスミ、シゲルも「この人誰ですか？」という顔をする。

サトシ「そうかみんな知らないもんな」

ヤストシ「彼の名前は、デント。サンヨウジムのジムリーダーを務めていたけどポケモンソムリエを究めるために一緒に旅をすることになったんだ」

ヒカリ・ハルカ・カスミ「ポケモンソムリエ?????」

聞いたことのない職業に？マークがつくヒロイン3人。

デント「ポケモンソムリエとは、ポケモンとトレーナーの相性の診断や、友好を深めるためのアドバイスをを行う職業さ。イッシュ以外じゃあ知られてないからね」

カスミ「へえ、そんな職業があるんだ」

ハルカ「しかもうちのパパとカスミとタケシと同じくジムリーダーなんてすごいかも」

デント「え！それってどういう事？」

カスミ「私は、水専門のハナダジムリーダーなの」

ハルカ「うちのパパもノーマル専門のジムを務めてるの」
デント「へえ、カスミやハルカのお父さんは、ジムリーダーなのか」
ヒカリ「それよりソムリエさん、イツシュにいた頃のサトシの話し聞かせてください」
ドテツ

その場にいたヒカリ以外の人たちが一斉にこけてしまう。

デント「ソムリエって……(汗)」

ハルカ「私も聞きたいかも」

カスミ「そうね。サトシの話だけじゃあ隠ぺいされているところありそうだし」

サトシ「それどういうことだよ」

デント「まあまあ、とりあえず紅茶でも飲みながら話しましょう」

ヤストシ「い、いつの間に紅茶を用意していたんだ？」

デント「ご心配なくみんなの分もありますから」

こうしてデントがサトシ旅をしたころの話が始める。

それから30分後デントの長話が終わった後サトシ達はポカブやツタージャなどサトシがイツシュ地方で捕まえたポケモン達と遊んでいた。ただ……

ツタージャ「ツタージャ……」

ベイリーフ「ベイベイ……」

ベイリーフとツタージャがどちらがサトシと遊ぶかで火花を散らしていた。ご存知の通りツタージャとベイリーフは、でありサトシが好きである。この光景には、サトシ以外が苦笑していた。

カスミ「ポケモンにも好かれるなんて、さすがサトシね……」

ハルカ「ある意味、モテモテかも……」

ヒカリ「でも当の本人は相変わらずだし……」

デント「もう少し直したほうがいいと思うけどね僕としては」

ヤストシ「同感だ。デント」

サトシは、ベイリーフとツタージャを止めるため近寄った。

サトシ「おいおい、どうしたんだ、ベイリーフとツタージャ。仲良くしなきゃだめじゃないか。」

ベイリーフ「べーい、ベイベイ。」

ツタージャ「タジャタジャ。」

サトシ「そんなに俺と遊びたかったのか？分かったから、仲良くしてくれよ。」

2匹に向けて満面の笑顔をしながらこう言った。すると、2匹は顔を赤くした。

2匹の脳内・・・

ベイリーフ「はあく、サトシの笑顔ってやっぱ素敵。この笑顔を独り占めしたいのに、邪魔な新入りが入ったものね。ただでさえサトシを誑かす女たちがいるのにこんなじゃサトシに振り向いてもええないじゃない」

ツタージャ「この子もサトシのことが・・・。どれ程、サトシと一緒にだったか知らないけれど、最近のサトシをよく知っているのはアタシのほうなんだからね」

ベイリーフ・ツタージャ「こいつには負けられない」

お互いを睨み付けながら、決意を新たにする2匹。この光景には、他のポケモン達は苦笑を浮かべるしかなかった。もちろんサトシは、そんなことになっていとは思ってもいないようだった。ちなみにサトシのポケモンは、ツタージャとベイリーフ以外にもう1匹いたが・・・

マメパト「まったくそんなことで争うなんてまだまだ子供ね」

大人ぽい言い方をするマメパト。カスミ達やベイリーフ、ツタージャのような積極的にサトシを振り向かせようとする女子とメスだがその中で一番の消極的なマメパトだった。

第9話 積極的派と消極的派（後書き）

ヤストシ「なんだか争いがカスミ、ハルカ、ヒカリ以外に拡大して
るぞ作者」

いいだろっ面白そうだし。

デント「それよりタケシより僕を先に出したのはどういう経緯かな
？」

だってデントは、タケシと違ってナンパはしない、少ない食材で美
味しい料理を作りオマケに道に迷わない。いい点のほつが多いから
先に出したんだ。

デント「すごい理由だな（汗）」

ヤストシ「それより作者少し話の内容がどこかの小説に似ていない
か？」

き、気のせいだよヤストシ。

ヤストシ「気のせいならいいけど・・・」

（危ない危ない）それでは、次回もお楽しみに

第10話 よつやく旅に出る？（前書き）

サトシ「おい作者」

なんだサトシ？

サトシ「いつになったら旅に出るんだよ。もう10話目だよ」
ヤストシ「いくらなんでもマサラに居過ぎだろう」

心配するな。もうすぐ旅に出させてあげるから落ち着け。

サトシ・ヤストシ「わかったよ」

それでは、本編をどうぞ。

第10話 ようやく旅に出る？

こんな一悶着の後、夕方までポケモン達と遊びつくした一行。そんな時だった。

オーキド「シゲル、戻ったぞ」

シゲル「あ！おじいちゃんが帰ってきた」

そう言うのとシゲルとサトシは、玄関に向かう。

シゲル「お帰りなさいおじいちゃん」

サトシ「オーキド博士お久しぶりです」

オーキド「お！サトシ、久しぶりじゃのう」

サトシ「博士実は、イツシュリーグ以外に他のリーグは無いか、聞きに来たんです」

オーキド「お！お！そういうことじゃったか。それならいっぱい有るぞ。さあこっちにきなさい」

オーキド博士は、サトシをパソコンがある部屋に案内した。

オーキド「さあこの中から自由に選びなさい」

と言って、パソコンを見せてくれた。ざっと見ただけでも、10〜20程度の数ではない。

サトシ「う〜んそうだなあ。これがいい！」

オーキド「ホクシンリーグか。如何してじゃ？」

サトシ「なんとなくです」

オーキド「…で、サトシはいつ出発したいんじゃ？」

サトシ「明日にでも行きたいです」

オーキド「わかった。明日船のチケットを用意しよう」

サトシ「ありがとうございます」

そう言うてサトシは、カスミたちのところに行く。

ヤストシ「オーキド博士に何しにいったんだ？」

サトシ「実は、次のリーグを探したんだ。それでホクシンリーグに決めたんだ」

デント「と言う事は」

サトシ「ホクシンリーグに出てベスト4以内に入りワールドリーグに出場するんだ」

カスミ「そうか！サトシは確かシンオウ、イツシュともにベスト4だったね」

ハルカ「次のリーグでベスト4に入ればワールドリーグに出場することね」

ヒカリ「頑張つてよサトシ」

ヤストシ「とりあえずサトシの家で詳しく聞こうか」

サトシ「そうだな」

こうしてサトシは、家に帰ることになった。もう遅いので全員サトシの家へ泊まることになった。その際、ヒロインたちは顔を赤らめていたが、当然サトシがその様子に気づくことはない。

ヤストシ「（このまま何もなければいいのだが・・・）」

ヤストシは今後の安泰を願っていた。しかし、そう簡単にはのぼのと終わらせる作者ではない。

その日の夜飯が出来るまでヒロイン一同とヤストシは、部屋でのんびりしていた。

ハルカ「へえ、ヒカリとカスミって昨日からサトシの家に泊つたのね。羨ましいかも」

カスミ「アタシ、その時サトシに彼女ができたのかと思っちゃった」
ヒ「ア、アタシとサトシはそんなんじゃないってば（赤）」

ハルカとカスミは皮肉混じりにヒカリをからかう。

ハルカ「でも、ヒカリ達には負けないわ。サトシはアタシのものにして見せる」

カスミ「ア、アタシだって、サトシが好きな気持ちは変わらないわ」
ヒカリ「アタシもよ。・・・でも、サトシを好きな子は他にもいるのよね・・・」

ヒカリの言葉を聞き、2人はあくと頷く。ヒカリの言うとおり、サトシに好意を持っている人物はアプローチの度合いに違いはあるも

のの他にもいる。

ヤストシ「（なんだか面白くなってきたなこの状況）」

遠くで3人の会話を聞いていたヤストシは、ニヤニヤ笑っていた。タケシと違いヤストシは、人の恋路に介入するほど心情の持ち主である。

3人が談笑していたところへ・・・

サトシ「お〜い、晩御飯ができたから食べないか？」

ヒカリ「ハイ今行きます」

ハルカ「あれ？確かサトシのママさんって留守だったよね」

カスミ「ヤストシが料理作ったじゃないの？」

ハルカ「そうだろうねきつと」

ヒカリ「サトシなんか料理作れっこないしな」

そういつて下に降りて行く3人だがヤストシは、3人を遠くから見守っていたもちろんサトシには料理は、出来ないとする料理を作ったのは・・・

デント「さあ、どうぞ召し上げれ」

カスミ「これ全部デントが作ったの!？」

ハルカ「豪華な料理ばかりだわ」

ヤストシ「そうだ!1つ言い忘れていたけどデントのジムは、高級レストランも経営しているんだ。そんな豪華な料理の1つや2つ彼の腕なら手易い物よ」

ヒカリ「ジムリーダーとソムリエにレストラン経営ってすごいわ」

デント「さあ、熱々のうちに召し上げれ」

5人「頂きます」

一斉に食い始めるサトシ達。

そこにちよつどオーキド博士とシゲルそしてケンジが訪ねてる。

オーキド「こりゃ美味しそうな料理ばかりだのう」

ケンジ「ほんとです。タケシやママさんより豪華な料理ですね」

サトシ「あ!博士何の御用ですか？」

オーキド「サトシは、確かシンオウ、イッシュともにベスト4じゃ

たのう」

サトシ「はい。次のホクシンリーグに出場しベスト4以内に入るとワールドリーグの出場権が得れます」

オーキド「そうじゃのう。知っての通りワールドリーグは、世界中のリーグから集まった曲者が多い一次リーグ、二次リーグともに勝ち越さなければならん。そして残ったものがポケモンマスター検定リーグに進め各地の四天王がランダムで選ばれた3人と勝負を挑みそして各地のチャンピオンマスターと対決し勝った者のみがポケモンマスターの称号を得るのじゃ」

ハルカ「結構複雑なのね」

ヒカリ「ヤストシもワールドリーグに出場するの？」

ヤストシ「いいや、俺は、マスターズ大会に出る」

ヒカリ「マスターズ大会？」

ヤストシ「マスターズ大会とは、ワールドリーグと同じ年に開催される大会で専門マスターつまり俺やカスミのように1つのタイプにこだわる人のための大会でそれに勝つと草マスターとか、水マスターなど専門マスターの称号を得ることが出来るんだ。この大会は、ワールドリーグとは、違って難度は、低くて1大会でベスト16以上の成績を収めた方のみが出場できるんだ。そして試験官は、各地の四天王かチャンピオンの専門マスター2人が相手となるんだ」

ハルカ「と言う事はカスミもマスターズに出場するの？」

カスミ「もちろんよ。ホクシンリーグに出場しベスト16に収めてみせるわ」

ヤストシ「まあ、俺の場合は、もう出場権は、得ているしな」

ヤストシは、ベスト4以上の成績を4回しているためワールドリーグにもマスターズにも出場できる条件をそろえている。

ヤストシ「でも俺も旅をしたいしサトシについていくよ」

カスミ「私も」

ヒカリ「同じく」

ハルカ「私もよ」

3人がサトシに付いて行くことという事は争奪戦は激しくなるだろうとヤストシは、心の中でそう思う。
サトシ「デントは、どうするんだ？」
デント「僕も付いていくよ。ポケモンソムリエの修行したいし」
サトシ「というわけで今夜は、早めに寝よう」と
こうして明日ホクシンリーグに旅立つことになったサトシ達であった。

その夜サトシとデントは、サトシの部屋で寝ることになりヤストシは、何故かカスミとハルカ、ヒカリと寝ることになったが・・・
カスミ「これって作者の陰謀だよ」
ハルカ「なんでサトシじゃなくてヤストシと寝なきゃあいけないのよ」

ヒカリ「同感よ」
ヤストシ「悪かったな寝る相手がサトシじゃなくて」
不機嫌そうに言うヤストシ。

ヤストシ「ところでお前らサトシのことどう思ってるんだ？」
カスミ「ハルカ・ヒカリ「えっ？」
突然のヤストシの言葉に驚く3人。

ヤストシ「だってよ。お前らサトシと長く旅したからどうかなって思ってた聞いたんだで？同なんだよ実際に」
ヤストシの鋭い質問に先に答えたのは、カスミだった。

カスミ「それは・・・とても仲間思いだし頼りになるし」
ヒカリ「私も、コンテストで失敗続きだったときに励ましてくれたりあのときは本当にサトシには感謝しているわ」

ハルカ「仲間思いなのはいいけれど、無茶して自分を犠牲にするのはちょっと・・・」

ヒカリ「あつ、それアタシも思った」
カスミ「頼りになるのはいいけれど、冷や冷やさせられることもあるわ・・・」

ヤストシ「確かになあいつは、そういう性格だし可愛いお前らを傷つけたくないからだろうな」

ヤストシが「可愛い」の一言にカスミ達は・・・

カスミ「そ、そんな可愛いだなんて・・・（赤）」

ヒカリ「からかわないですよヤストシ（赤）」

ハルカ「・・・（赤）」

3人は顔を赤くした。ハルカに関しては、言葉にもならないようだ。

ヤストシ「俺が冗談で言う男に見えるか？」

3人「大いに見えます」

ヤストシ「そんなこと言うなよ」（T|T）」

ヤストシは、3人の言葉に落ち込んだ。

それから4人は、眠りについた。

いよいよ明日は、ホクシン地方に旅立つ日である。

第10話 よつやく旅に出る？（後書き）

アイリス「ちょっと、歴代のヒロインばかり出して現ヒロインの私
が1度も本編にて出ないわ」

まあまあ落ち着け。次回は、お前を主役として出す予定だから心配
するな。

アイリス「本当！！ヤッター」

そついうことで次回をお楽しみに

第11話 野生児少女とポケモンドクター（前書き）

すっかり忘れられている4代目ヒロインとナンパ男に今回視点を当
ててお送りします。

第11話 野生児少女とポケモンドクター

ヒロイン3人がサトシの家にお手ずれて明日ホクシン地方に旅立とうとしていた頃・・・

???「は、お腹すいた・・・ようやくカントーへ来たのもののサトシの家があるマサラタウンは、どこなのよ」

彼女の名は、アイリス。サトシ、ヤストシ、デントとともにイツシユ地方を旅した少女である。サトシに会いに行きたいらしいが、カントーへ行くのに1ヶ月かかりまたマサラの位置がわからず2週間カントーをさまよっていた。しかも追い討ちをかけるようにお腹が空いて仕方がなかった。ちなみに彼女がいるのは、ちょうどおつきみ山のニビ側の洞窟の入口付近である。

アイリス「も、もうダメ・・・」

と言って、アイリスは空腹のあまり倒れた・・・

アイリス「ん、んん・・・あつ、アタシ道端で倒れて、つてここどこ？」

アイリスが今いるのは、とても家具等が綺麗に整頓された部屋だった。

アイリス「とりあえず、ここまで連れてきてくれた人に御礼言わないと・・・」

と思い、アイリスは部屋を出た。すると・・・

???「あ！お兄ちゃん、女の人が目を覚ましたよ」

???「そうか。君もう大丈夫か？」

アイリス「は、はい。あ！それよりここどこ！？アタシを助けてくれたのは誰!？」

???「落ち着いて、落ち着いて順に話すから(汗)。ここは、ニビジムだよ。君が倒れていたところにたまたまおふくろが見つけてくれて運んできたんだ」

アイリス「そうだったの。ありがとう。ところであなたの名前は？」
助けてくれたのに敬語を使わないアイリス。

タケシ「俺は、タケシ。ポケモンドクターとポケモンブリーダーさ」
アイリス「あたしアイリスよろしくね」

そう言うアイリス。

ちなみにタケシは、ご存知の通り前シリーズまで約10年間レギュラーを務めたポケモンブリーダーである。今は、ポケモンドクターになるため勉強中であったが今は、見習いだがポケモンドクターの夢は、かなった。

アイリスは、少し落ち着いたとき・・・
グウ

ある意味グッドタイミングでアイリスの腹の中の虫が鳴った。

タケシ「お腹空いたんだな。これさつき作った料理だが、食うか？」

アイリス「もちろんです。いただきます」

アイリスは、まるでギャ 曾根みたいにバクバク食っていき数分足らずで完食してしまう。

アイリス「お腹いっぱい。どうもありがとうございます。こんな料理は、デント以来よ」

アイリスは、タケシにそう言う。

タケシ「どういたしまして。ところでアイリスは、どこへ行くつもりだったんだい？」

アイリス「あ、うん。サトシのいるマサラタウンに行こうとしてたんだ。」

タケシ「サトシに会いに!？」

アイリス「タケシ!サトシのこと知ってるんの!？」

サトシ「知ってるも何もサトシと旅したことがあるんだ」

アイリス「そうなの!サトシ、昔旅したことあんまり話さないから」

タケシ「しょうがないよ。あいつは、そういう性格だからそれサトシに会いに行くっていったよね」

アイリス「うん・・・」

アイリスは少し顔を赤らめながら答えた。タケシは、何故サトシに会いに行きたいか彼女の顔でわかった。アイリスは、サトシのことが好きだつと言うことに・・・

タケシ「(あいつ。イッシュでまたこんな女の子と旅をするなんて) また自転車壊したな)」

そう思うタケシだが実際は、自転車を壊したのではなく彼女をポケモンと間違えて(実際は、ポケモン図鑑がアイリスの髪の中にいたキバゴに反応したため)モンスターボールを投げつけたことがきっかけでサトシとともに旅をしたのである。

アイリス「で、でも・・・」

タケシ「でも？」

アイリス「マサラタウンってどこだっけ？」

ズデーン！！！！

アイリスのマヌケな発言に、盛大にズッコケたタケシ。

タケシ「まさかアイリス。ずっと知らないで歩いてたのか？」

タケシの問いに頷いたアイリス。

アイリス「だって、カントーに行くのに1ヶ月かかったのよ」

タケシ「い、1ヶ月!？」

アイリス「カントーにやつと着くもマサラタウンがどこにあるかさまよってたところよ。それでタケシ。あんた、確かサトシと知り合いなよね」

アイリスの問いに首を縦に振るタケシ。

アイリス「なら、話は早いわ。サトシの家の電話番号教えて」

タケシ「いいけど」

そういつてタケシは、アイリスにサトシの家の電話番号を教える。

アイリス「ありがとう。後、電話機貸してもらおうよ」

タケシ「どうぞ・・・って！おい！アイリス、今何時だと思ってるだよ」

しかしタケシの静止も聞かすサトシの家に電話をかけた。

アイリスがサトシの家に電話をかけてきた頃サトシ達は、眠りについていたがアイリスが電話をかけてきたことでサトシ達が目を覚ましそして受話器を取ったのはヤストシであった。

ヤストシ「こらー（怒）こんな時間にかけてくるやつは誰だ（怒）」
受話器を持ちそう言うヤストシ。

アイリス「ヤストシ！！」

ヤストシ「その声は、アイリス!？」

その言葉にサトシとデントが反応する。

ヤストシ「アイリス。今何時だと思ってるだよ。今夜中の1時だぞ」

アイリス「ご、ごめんごめん」

ヤストシ「それで今どこにいるんだ？」

アイリス「今？ニビジムにいるけど？」

ヤストシ「ニビジム!？という事はタケシの家か!？」

アイリス「そうよ。マサラタウンに行こうとした時に倒れちゃってそれで私が倒れてるところをタケシのお母さんに助けてもらってちゃてね」

ヤストシ「それより何しにカントー（ここ）に来たんだ？」

アイリス「サトシに会いに来たのよ」

ヤストシ「サトシに会いに来ただと!？」

思わず大きい声で言っつてしまひヤストシは、後ろを振り向くとヒロイン3人の機嫌がものすごく悪かった。

アイリス「ねえヤストシ」そこにサトシがいるんでしょ。代わって欲しいけど・・・」

ヤストシ「サトシに代わって欲しい!？」

またしても大きい声を出してしまひもう一回後ろを向くと3人は、サトシの周りに来ていた。

カスミ「サ・ト・シ!!!」

ハルカ「誰なのよアイリスって（怒）」

ヒカリ「なんでここにきているのよ（怒）」

3人の怒りに苦笑するしかないサトシ。

そしてその雰囲気で状況を理解できてるデントは、ただ苦笑するしかなかった。

アイリス「ねえ、ちょっと電話から女の子3人の声が聞こえるんだけど？」

ヤストシ「そ、そんなことないぞ」

アイリス「でも、他に誰かいるんでしょ？」

ヤストシ「そりゃ、俺やデント、カスミ、ハルカ、ヒカリがサトシの家に来ててね、3人もサトシにこういい抱いてて収めるのに・・・は！」

アイリス「ひっかかたわね、ヤストシ」

ヤストシ「しまった！！！」

アイリス「今すぐサトシの家に行くから待ってなさい」

ヤストシ「ちよ、ちよっとアイリス。タケシ、そこにいるだろう。」

悪いけどアイリスともに来てくれ、お前にも責任があるぞ」

一方的に言っただけ電話を切るヤストシ。

タケシ「まったく、口を滑らせたのはヤストシだろう・・・しょうがないな」

こうしてタケシも準備をしてニビを弟達に任せたとってアイリスの後を追いかけた。

第11話 野生児少女とポケモンドクター（後書き）

デント「なんか、変な状況になってきたよ」

ヤストシ「本当に申し訳ございません」

謝って済む問題じゃないぞヤストシ。

タケシ「作者が言うな作者が」

ヤストシ「それでこれからどうなるだろう？」

デント「恐らくサトシ争奪戦が始まるね」

人事だねデント・・・

タケシ「それよりこのまま穏便で済ませばいいけど・・・」

ヤストシ「作者からの性格だと穏便どころか争奪戦を大きくしそう
だ」

デント「たしかに・・・」

ヤストシの言うとおり。

3人「笑顔で答えるな（怒）」

ご、ごめんなさい

第12話 旅立ちから波乱万丈？

夜中の騒動から5時間後。

サトシは今日に限って起きるのは早かった。こういふときは、起きるのが早いらしい。

サトシ「みんな準備できたか？」

ヒカリ「もちろん」

ハルカ「OKかも」

カスミ「準備万端よ」

デント「僕も支度できたよ」

ヤストシ「それじゃあ、ホクシン地方に向かって・・・」

???「ちよつと待った!!!」

一人の少女が玄関をけり破るように現れた。

ヤストシ「あ、アイリス!？」

デント「本当に来たんだ・・・」

カスミ「この子ね、昨夜サトシの家に電話してきた女の子って」

ハルカ「サトシやヤストシから聞いた通り」

ヒカリ「野生児並みの性格ね」

アイリス「あんた達が、サトシを一人いじめしようとしている女どもね」

カスミ「なんですって!!!」

ヒカリ「あなただけには言われたくないわ」

ハルカ「この野生児女め」

アイリス「私とやる気？」

強気で言うアイリス。

ヤストシ「アイリス。止めないか」

アイリス「うるさいわねヤストシ」

サトシ「だから、アイリスこれからホクシン地方に行くんだ」

アイリス「ホクシン地方に!?!この私を置いていつてこの女3人と

ベタベタするき?」

そう言うがサトシは、恋愛に鈍感なためそんなことはわかるはずがない。

タケシ「まあまあ、落ち着けアイリス」

サトシ「あ!タケシ」

タケシ「久しぶりだなサトシ。そちらがデントだな」

デント「初めましてポケモンソムリエのデントです」

タケシ「俺は、ポケモンドクターのタケシだ」

アイリス「のんきに挨拶してないで、この3人を倒して私がサトシとともに旅をするわ」

ハルカ「そんな勝手なこと言わないでかも」

ヒカリ「そうよ」

カスミ「そんなに言うなら相手になってあげるわ」

アイリス「望むところよ」

サトシをめぐって争奪戦寸前のヒロイン4人。

ヤストシ「おい!作者この状況何とかしなさい」

えゝ面白くなってきたのにゝ

タケシ「面白いところじゃないぞ」

ヤストシ「早く止めないとロケット団のように星にするぞ」

ひえええええ。わ、わかったよ。この紙をくれるから許してゝ

ヤストシ「この紙か?」

作者から渡されたのは、文書が書いてあった紙である。

ヤストシ「えゝ4人とも止めなさい。止めないと連れて行かないぞ。

なあ?サトシ」

サトシ「う、うん」

サトシが頷いた。

ヒカリ「それは、いやだ」

ハルカ「しょうがない止めよう」

カスミ「そうね」

アイリス「サトシ。私も連れてって」

サトシ「しょうがないな」

アイリス「やった」

タケシ「俺もついてっていいかな？」

サトシ「もちろんだぜ」

こうして8人で旅することになったと思いきや・・・

???「おーい」

ヤストシ「あ！ケンジ」

サトシ「どうしたんだケンジ？」

ケンジ「実は、オーキド博士からホクシン地方にお使い言って来いといわれてね、だから僕も連れてて」

サトシ「もちろんいいぜ」

こうして9人で旅することになったサトシー一行はマサラを旅立っていった。

第12話 旅立ちから波乱万丈？（後書き）

サトシ「ようやく12話目でマサラを旅立ったな」

ヤストシ「長すぎるよ作者」

しよ、しょうがないだろう？こうなっちゃったんだから・・・

タケシ「これからどうなるんだろう？」

ケンジ「男5人と女4人で旅をするとは・・・」

デント「特にアイリス達が大変になるかもしれないね」

まあ、とりあえず頑張れよ男五人組。

5人「人事のように言っな（怒）」

第13話 ホクシン地方へ(前書き)

いよいよ旅の始まり始まり

第13話 ホクシン地方へ

サトシ達一行は、ホクシン地方へ行くためクチバシテイを目指していた。9人がクチバシテイに着いたとき、運よく船が泊まっていた。9人は急いで船に乗り、出航時間を待つことにした。

船の中

サトシ「タケシいゝ出航時間まだなのかあゝ」

タケシ「まだ一時間ぐらいある」

デント「別に急いで乗らなくても良かったね」

因みに、今は九時半、そして、出航時間は十時半なので、今から一時間なのである。

その上、クチバから、ホクシン地方へ行くのに約三時間、合計約四時間かかるのである。

ヤストシ「その間どうしようか？」

この言葉に反応したのがカスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリスのヒロイン4人組である。

カスミ「（船の中で4時間！という事は・・・）」

ハルカ「（サトシと二人きりにいられる唯一の時間ね）」

ヒカリ「（これは絶好のチャンスだわ）」

アイリス「（でも邪魔が多いわ。何とかしてこの人たちを蹴り落とさないと一緒に入れないわ）」

この4人はあくまでもサトシと二人きりになりたいという意識で他のメンバーにいろいろとけん制をかけようとする。

しかし・・・

サトシ「俺は部屋で寝るっ！」

と言って、サトシは自分の部屋に戻っていった。

ヒロイン達は、啞然としていた。

ヤストシ「（よかったよかった。争奪戦にならなくて）」
その様子を見ていたヤストシは、そう心の中でつぶやいた。
ケンジ「ところでカスミ達は、どうするの？」

ケンジにそう聞かれて困る4人。

本当ならサトシとともにどこかへ行きたかったが肝心なサトシは、
部屋で寝てしまったためどうしようかと迷う4人。

カスミ「あたしは、その辺ブラブラしてくるわ」

ハルカ「私は、ロビーでくつろいでるわ」

ヒカリ「私は、ホクシン地方のついて調べてくるわ」

アイリス「私は、散歩してくる」

そう言つて4人は、別々に分かれて進んで行つた。

ヤストシ「あの様子だとよっぽどサトシと一緒にいたかったみたい
だなタケシ、デント、ケンジ」

ヤストシの言葉に3人は、頷いた。

タケシ「さてと、自分はきれいなお姉さん探してこようと」

そういつてタケシは、いつものようにきれいなお姉さんをナンパし
に行つた。

デント「タケシつて、ナンパするんだね」

ヤストシ「まあ、心配するな。ナンパしようとしたらグレックルが
止めてくれるよ」

デント「そうなんだ・・・」

ヤストシ「ナンパといえば誰かさんは、ナンパする行為は、直接し
ないけどきれいな人だけは、絵を書く癖のある人がいたな」

そういつてヤストシは、横目にしながらケンジを見る。

ケンジ「はははは。それじゃあ僕は、海にいるポケモンたちを観
察してくるよ」

そういつてケンジは、その場を立ち去つた。

ヤストシ「デント、お前はどうするんだ？」

デント「僕は、その辺を歩いてくるよ」

そう言つてデントは、歩いていく。

ヤストシ「それじゃあ、俺は、ポケモンバトルが出来る相手を探しますか」

そう言つてヤストシは、バトルの相手を探しに行った。

それから数時間の間何事もなく船は、あと30分でホクシン地方のツルヤタウンに到着する。

そんな時ヤストシは、サトシの部屋へ行く。

ヤストシ「おい、起きろよサトシ」

サトシ「なんだよヤストシ」

ヤストシ「サトシ、1つ聞いていいか？」

ヤストシは、サトシに思い切つて聞いてみた。

ヤストシ「お前、好きな女の子とかいるか？」

ヤストシは、大胆にも直球でサトシに聞いてみる。

サトシ「す、す、好きな女の子だと!!!?」

サトシは、顔を真っ赤になる。

いくら鈍感なサトシでもこのぐらいは、知ってるんだなと思うヤストシ。

ヤストシ「それで入るのか？」

サトシ「い、いないに決まつてるんだらう」

ヤストシ「(怪しい)。怪しすぎる」

サトシの真っ赤の顔を見ながらヤストシは、心の中でそうつぶやいた。

でもサトシは、とても素直じゃない。

そこでヤストシは、あることを思いつき聞いてみる。

ヤストシ「あ！わかった。アイリスが好きだらう」

サトシ「違うよ、誰があんなやつと」

ヤストシ「それじゃあ、ハルカか？」

サトシ「んなわけないだらう」

ヤストシ「だったらヒカリか？」

サトシ「なんだよヤストシ。俺は、さっきも言ったが好きな女の子

なんか」

ヤストシ「それともカスミが好きなのか？」

サトシ「……！」

ヤストシは、サトシの言葉を無視し言い続けた時ヤストシが、カスミの名前が出した時サトシが一瞬反応する。

ヤストシ「（今、一瞬反応したぞ。こいつはまさか……）」

ヤストシは、深追いしようとした時。

タケシ「お〜いサトシ〜。着いたぞ〜！」

サトシ「本当か！」

タケシが言った瞬間、サトシはもうそこに居なかった。ヤストシは外を見るとサトシは、デッキのところにいる。

ヤストシ「サトシは秒速何mなんだ？」

そう疑問に持ちながらもヤストシもデッキに向かう。

サトシ「お〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜すげ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

〜〜〜〜！！！！あれがホクシン地方か！！！！」

その時9人全員が揃った。そしてまもなくホクシン地方に到着し船から降りるのであった。

第14話 いい思いする人と思わない人

ついにツルヤタウンに到着した9人は、参加登録するためツルヤタウンのポケモンセンターに寄った。

因みに、ここツルヤタウンでは、ここからポケモントレーナーになる人が多いが、ここにはマサラタウンみたいに、研究所が無い。だから、この街では、ポケモンセンターでポケモンを貰うことになっている。特に関係ないのだが一応説明しておく。

サトシ「すみませ〜ん」

ジョーイ「何でしょうか？」

その時タケシは高速移動をしようとしたが、カスミ、グレックルに止められた。

サトシ「ホクシンリーグの参加登録をしたいんですけど」

と言って、ポケモン図鑑を渡した。

ジョーイ「分かりました。ちょっと待ってて下さいね」

十分後

ジョーイ「はい、出来ましたよ」

サトシ「ありがとうございます。ジョーイさん」

ジョーイ「他には、いませんか？」

そう言われるとカスミもホクシンリーグの登録を済ませる。

その後とりあえず、9人のポケモンの回復も終わり、次の街、エミモシテイに向かった。

サトシ「デント。エミモシテイにつくには、どれぐらい時間がかかるんだ？」

サトシがデントにたずねる。ちなみに何故デントが地図担当かというところ知っての通りタケシは、地図の位置を間違えて道に迷うことが多いため道に絶対迷わないデントが地図担当に抜擢された。

デント「そうだね。今が二時だから、四時間もあつたら着くと思つよ」

サトシ「じゃあ早く行こうぜ！」

サトシが早歩きになった為、他の8人も早歩きになった。

なので、普通に歩いて四時間なのだから、早歩きなので、五時にエミモシティに着いた。

しかし、これからすぐ次の街へ行くことは不可能だ。今、この街を出て次の街へ向かったら野宿を二回はしなければならぬだろう。なので、9人は、エミモシティのポケモンセンターで一夜を過ごすことになった。

しかしこの後とんでもないことが起きる。

ジョーイ「ごめんなさい！部屋が足りないの！」

ジョーイさんはサトシ達の前で謝った。

今日は、なぜか人が多く部屋が足りないのだ。

ヤストシ「今なん部屋あるんですか？」

ジョーイ「えゝ3人部屋が1部屋あと2人部屋だけよ」

それを聞くとヤストシは、ヒロインたちのほうへ向く。

ヤストシは、予感は、的中した。

カスミ「仕方ないわね。じゃああたしがサトシと一緒に寝るわ」

サトシ「へ？」

カスミの言葉にサトシは啞然とする。

ハルカ「カスミは無理しなくていいの。あたしがサトシと一緒に寝るから」

サトシ「はい？」

ハルカの言葉にサトシはまた啞然する。

ヒカリ「二人とも無理しないのよ。私がサトシと一緒に寝るから」

サトシ「え？」

ヒカリの言葉にサトシはまたまた啞然する。

アイリス「三人とも無理しないで。私がサトシと一緒に寝るから」

サトシ「は？」

アイリスの言葉にサトシはまたまたまた唾然する。

タケシ「実にうらやましいぞサトシ」

デント「僕もモテモテの君がうらやましいよ」

ケンジ「観察させてもらいます」

タケシは、ナンパをずっーと失敗しているためサトシのことをうらやましがってでんとは、普通サトシを見守っててケンジは、その様子を観察する。

ヤストシは、ヒロインたちのやり取りを面白かって見ていた。

そのヒロイン達は、睨み合いをしていた。

カスミ「あたしがサトシと寝る」

ハルカ「いいやあたしよ」

ヒカリ「私がサトシと寝るわ」

アイリス「あなた達は、引っ込んでいて私がサトシと寝るの」

ハルカ「なによ」

ヒカリ「引っ込むのはあなたよ色黒女」

アイリス「色黒女ですって！？生意気よあなた達」

ヒカリ「生意気は、あなたよ」

カスミ「そうよそうよ」

アイリス「なんですって」

ハルカ「何か文句でもありますか」

アイリス「望むところよ」

ヒロイン達によるサトシ争奪戦勃発。原因はサトシと一緒に誰と寝るということだ。サトシ本人は、なぜヒロイン達が言い合っているのか分かっていないようである。しかしそれでも女の子と一緒に寝るのでそこは意識がある。そんな様子にヤストシは・・・

ヤストシ「（少しは、自覚しろよサトシ）」

呆然と見ている。

サトシ「・・・」

サトシは為す術なしのご様子である。というよりも女子達が出す雰囲気に出せない状況になっている。しかしさすがにここは、ポ

ケモンセンターこれ以上騒ぎを大きくするわけにはいかない。

デント「ちょ、ちょっと4人と落ち着いて」

4人「デントは、黙ってて！」

デント「はい」

全く聞く耳をもっていない4人であった・・・

それを見ていたヤストシは、あきれてこう言った。

ヤストシ「デントの言う通りだぞ！それに、おまえら、ケン力をするの場所を考える！」

ヤストシが4人の間に入り込む。

ヤストシ「これ以上騒ぎを大きくするならサトシと一緒に寝かせないぞ」

4人「はい」

ヤストシの言葉にさすがに静まるヒロイン達。

ハルカ「しょうがないわ。こうなったらバトルで決めましょう」

カスミ「望むところよ」

ヒカリ「絶対に勝ってサトシと一緒に寝るのよ」

アイリス「私だって」

デント「（あれ？アイリスってバトルできったけ？）」

こうしてサトシとともに寝る人をバトルで決めることにした。

バトルシーン書くと長くなるため簡略でお送りします。

試合形式は、トーナメント戦でバトルは、1対1の勝負である。

1回戦第1試合は、アイリスVSヒカリの試合は、アイリスがバトルに不慣れなのでヒカリの圧勝である。第2試合は、ハルカVSカスミの試合は、一進一退の勝負であったが最後は、ハルカの判断ミスが原因でカスミが勝利を収める。そして決勝戦カスミVSヒカリの試合は、激しいバトル戦となっていた。

カスミ「スターミー、サイコネシス」

ヒカリ「ポッチャマ、ハイドロポンプ」

水タイプ同士の対決は、まさに激しいバトルである。

特にこの二人前に風呂場でけんかの件もあり燃えていた。

ヒカリ「ポツチャマ、うずしおよ」

ポツチャマは、うずしおを繰り出す。

カスミ「スターミー、サイコネシスでうずしおを止めてポツチャマに返すのよ」

そう言つてスターミーは、サイコネシスでうずしおを受け止めてそれをポツチャマに返した。返した渦潮は、ポツチャマに命中しそのまま木に激突する。そしてポツチャマは、完全に伸びていた。

デント「ポツチャマ、戦闘不能。スターミーの勝ち。よって、勝者カスミ」

カスミ「やったわ」

ヒカリ「はは」。結局ジムリーダーのルアーの人には、勝つてないのね」

こうして勝つたカスミがサトシとともに寝ることになった。ちなみにヒカリは、ハルカとアイリスは、デントとともに寝ることとなった。

深夜：サトシは自分のベットで寝ていた。しかもそのベッドにカスミがいた。そう、サトシとカスミは一緒のベッドで寝ている。カスミ自身がサトシに好意を抱いているためという理由もあるが、一番の理由は、寒いからである。なぜ寒いのかについての理由は聞かないでください。このとき、サトシのピカチュウとカスミのルリリは寄り添つて床で寝ていた。

サトシは、ぐっすりと熟睡をしていたがカスミは、まだ寝ていないというより好きな相手の隣だと寝れないと言つたほうが正しいだろう。

カスミ「（眠れないわ）」

カスミは、何とか寝ようとしたが眠れない。

そんな時ちょうどサトシが寝返りをうちカスミの腕にサトシの頭が乗かった。

カスミ「（・・・きゃ）・・・サトシに腕枕されてるう）・・・

（「

カスミの興奮は収まるところを知らないそれどころかうれしくてたまらないのである。

カスミ「……サトシを好きになって……こんな風になるなんて……サトシ、これからもずっと一緒にいようね……」
そう言ってカスミは、こっそりとサトシに口付けをして、そして抱き締めながら眠りについた。

それから30分後サトシは、フツと目を覚まし見てみると目の前にカスミがいることにびっくりしたがカスミを起こすわけに行かないので何とか抑えた。

そんな時だった。

カスミ「サトシ……好きだよ……」

カスミは、不意に寝言をサトシの耳元で言う。

サトシ「カスミ」

サトシは、それに応えるのかのように、カスミをそっと抱き締めながら眠りについた

翌日の朝。

ヤストシ「サトシ、カスミ……あ！」

ヤストシが部屋に入るとサトシとカスミは、お互い抱きしめていた。しかもカスミは、サトシの腕で寝ていた。するとヤストシは、どこに隠していたのかカメラを取り出し1枚採る。

そしてこっそり部屋を後にした。

それから30分後サトシが寝ている部屋にヒカリがやってきた。

まさにバッドタイミングとはこのことを言うのだろう。

ヒカリ「サトシ、カスミ！そろそろ朝……」

朝食だということを伝えようと、ヒカリが部屋の扉を開けたのはその時だった。

ヒカリは、サトシとカスミがお互い抱き合っていてサトシの腕の上にカスミが寝ているを見てしまったヒカリは、怒りをあらわにした。

ヒカリ「サ・ト・シ……!!!」

ヒカリの声にサトシとかすみは、目を覚ます。

ヒカリ「カスミ。これは、どういうこと？」

カスミ「いや、その・・・」

見られてしまった以上言い訳が出来ない。

ヒカリは、カスミとケンカを始めた。

その後アイリスとハルカも事情を知りヒカリ側に参戦する。

事態が収めるのに1時間かかったのはまた別の話である。

第14話 いい思いする人と思わない人（後書き）

よし更新したぞ。

ハルカ「ちよつと何これ！？なんでカスミがいい思いしてる気がするんだけど」

ヒカリ「なんだかサトカス寄りなのは気のせい？」

それは、許してよ。作者の俺は、純粹なサトカス派なんだから。

カスミ「そうよ。三人とも諦めなさい」

カスミ、いつの間に・・・。

アイリス「サトヒカ、サトハル、サトアイのファンからクレーム来ても知らないわよ」

そんなのわかっていたら、サトカス系の小説なんて書きませんよ。ていうか何度も言わせるなよ。

アイリス「何よそれ（怒）」

ヒカリ「そうよ。末っ子でゲームやパソコンばかりやって勉強もろくに出来ず赤点を出ししかも期末で0点出すポケモンバカに言われたくないわ（怒）」

ヒロインには、何もしないからと言いたい放題言いやがってもう許さん。ガブリアス、ヒカリにほのおのキバ（怒）

ヒカリ「え！ちよつ・・・熱ーーーーーい
ポーチャン。」

ハルカ「ああ、作者がキレちゃったかも」

本当ならロケット団のように星にしてあげたいところだけどそれは我慢した。

アイリス「それにしても都合よく池があるなんて」

ハルカ「小説だからね」

カスミ「それよりもう少し攻めればよかったのに」

これ以上やると18禁になりそうだから止めたの。

カスミ「サトカス派ならもうちよつと描写濃くしたら？」

そうだな。もう少し濃くして書いてみるよ。

カスミ「ホント！？やったぁー！！！」

ハルカ「宣戦布告したわ」

ヒカリ「サトハル、サトヒカ、サトアイのファンを敵に回したよ。今ので」

悪いけどサトヒカの描写は、天の河さんに頼んでくれ・・・（汗）。

俺じゃあサトヒカを書くに変になるから・・・」

ヒカリ「そうさせてもらうわ」

それでは、次回もポケモン・・・

ヒロイン達「ゲットだぜ（かも）（で大丈夫）」

第15話 一難去つてまた一難？

エミモシテイを後にしたサトシ一行は、最初のジムがあるマイタケタウンを目指していたが・・・

ヤストシ「大丈夫かカスミ？」

カスミ「大丈夫じゃないわよ。これ」

カスミがヤストシの肩を貸しながら言う。

先ほどのケンカで随分カスミは、ハルカ、ヒカリ、アイリスにて痛い目に遭いケガは、たいしたことはないが痛みがなかなか消えずヤストシの肩を借りながら歩いてきた。

そのサトシは、現在ハルカ、ヒカリそしてアイリスがくつついて歩いてきた。

そして当のサトシは・・・

サトシ「お〜い、早く行こうぜ!!!」

状況をまったく読めていなかった。

タケシ「ところで、デント。次の町は、いつ着く予定だ」

デント「このまま、スムーズに行けば、明日の朝早くにはつけるだろうね。もつとも、スムーズに行けばの話しだけだ」

カスミ「ということは、一泊野宿？」

デント「そうなるね」

カスミ「しかもその野宿の場所って・・・」

ハルカ「あのエミモの森ね」

ハルカが嫌味にカスミに言う。

カスミにとって、最も聞きたくなかった言葉だろう。なんせ、森ということ、虫がいる。しかも、そこで一泊しなければならぬとなれば、もつとやばい状況になるのだ。

カスミが落ち込んでる一方で、物凄くテンションの高い人がいた。

ハルカ「（カスミは、虫嫌い・・・）」

アイリス「（虫さえうまく使えばカスミをサトシから遠のくことが

出来る！」

ヒカリ「（そして私がサトシと一緒に・・・）」

3人は、そんな風に悪いことを考えていた。

そんな3人を見ていたケンジ達は・・・

ケンジ「これは、サトシ争奪戦が激しくならないか。この森で？」

タケシ「虫を使ってカスミをサトシに近づけさせずに、あの3人でサトシの奪い合いってところかな？」

デント「そうなるね。それにしてもあの3人ってあんなキャラだったのかい？」

タケシ「いつもは、あんなキャラじゃないよ」

ヤストシ「（たぶんハルカ達をあんなキャラにしたのは作者のせいだと思うけど・・・）」

男性達（サトシを除き）は、そう思いながらエミモの森に入っていた。

エミモの森

デント「よし、この辺でお昼にするか。タケシ、手伝ってくれ」

タケシ「はいよ」

ケンジ「僕も手伝う」

ヤストシ「それじゃあ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、悪いが薪を拾ってきてくれ」

3人「はい」

そう言つてハルカ、ヒカリ、アイリスは、薪を探しに行った。

ヤストシ「サトシ、カスミ、お前達は、川から水を汲んできてくれ」
そうヤストシに言われるとカスミは、顔を赤く染める。

何しろ好きな人と側にいられるからである。対するサトシは、相変わらず鈍感であるが一瞬カスミを何かを気にしている仕草を見せたがそれは、カスミはもちろんヤストシ達は、気づかなかった。
そしてサトシとカスミは、近くの川から水を汲み始める。

サトシ「冷てえ〜」

カスミ「ホント、冬もう越したはずなのにね」

サトシ「よ・っつと、カスミそっちはどうだ？」

カスミ「ん・もう少し」

サトシは2つのバケツに水をカスミは3人の水筒に水を汲んでいた。もちろん、ルリリを抱きながらのため少し汲みにくい

サトシ「カスミ、落ちんなよ」

サトシがさりげなくカスミにそう言った。

イジワルにも聞こえるがサトシなりにきつと、心配してくれているんだらうと思うカスミ

カスミは最後の水筒のフタを締める。

サトシ「よし、じゃ行こうぜ」

カスミ「ピカチュウ、ルリリをお願い」

ピカ「ピ？」

カスミ「サトシ、バケツ一個持つわよ」

サトシ「別に大丈夫だから、気にするなつて」

そう、言ってるサトシの顔は笑顔だが額には凄い汗・・・無理しちやつてるのが見え見えである。

カスミ「（全く、誰にでも優しいんだからアンタは・・・）」

カスミは思わず笑ってしまった

サトシ「なに、笑ってんだよ」

カスミ「ごめんごめん、なんでもないよ。ほら、一つ貸しなさいよ」
サトシ「カスミだつて一応女の子だから力仕事は、任せれないつて」

カスミ「一応つてなに？一応つて？・・・全く、なに水臭い事言つてんのよ。ほら、いいから渡す」

カスミは半分無理やりにサトシからバケツを一つ渡してもらう

カスミ「（う〜ん・ちよつと重いかな？）」

でも、そんな弱気なことはカスミは、言えないな。

カスミ「（サトシにまた心配かけちゃうだろうしここまで、してもサトシは気づく事はないんだらうな・きつと）」

そう心の中で思ったときだった。

「ケムケム」

そこに1匹のケムツソが現れた。

ということとは・・・

カスミ「きゃあああああ！！！！！！！！！！虫は無視いいいいいいいいいい！！！！！！！！！！」

カスミの声は森中に響いた。

サトシ「大丈夫か！カスミ！」

カスミ「大丈夫、じゃない…」

カスミは、自分が昨日、サトシに口付けし抱きついた本人サトシに心配されたので、顔が真っ赤になった。

サトシ「お、おいカスミ！」

カスミの顔が真っ赤になったので、余計に心配するサトシ。
すると・・・

ハルカ「何々今の悲鳴声は？」

アイリス「あ！カスミ。あんたまた・・・」

ヒカリ「サトシに抱きつくなんてずるいわ。私も抱いて」

そういつてヒカリは、サトシの後ろ側をとり抱きしめた。

ハルカ「ちよつと2人とも。サトシから離れてかも」

アイリス「そうよ。サトシを見るなり興奮しちゃって、ホント子供なんだから。」

ハルカとアイリスが怒ったようにヒカリとカスミに言う。

ヒカリ「別にいいじゃない」

カスミ「サトシと離れるなんてい・や・よ。そんなに抱きたいなら2人もやってみたら？」

カスミがからかうように言う。

しかし一言に、ハルカとアイリスはカアアと顔を赤くさせる。

ハルカ「そ、そんなの恥ずかしくて出来ないかも！！！！」

アイリス「そんな大胆なこと出来るわけないじゃない！！！！」

2人ともあたふたしながら答える。顔は2人ともリンゴのように真

っ赤になつてゐる。カスミの悲鳴声を聞きつけたヤストシは、その様子にやれやれと呆れて見守るしかなかった。

デント「あの、僕も離れた方がいいと思うけど……(汗)」

タケシ「サトシ……、意識が飛びかけているぞ……(汗)。」

デントとタケシは言う。サトシの様子は、カスミとヒカリに強く抱きつかれているせいか、苦しそうにしている。心なしか顔も少し青ざめている。

ヒカリ「あっ、ごごごごめん。サトシ、大丈夫？」

カスミ「し、しっかりして」

サトシ「……あんまりだいたいじゃないかも……」

ハルカとヒカリの口癖が若干入っていたがそんなことは、どうでもいいがサトシは、ようやく解放されたときには、サトシは、ぐったりしてしばらくは、動けなかった。

第15話 一難去ってまた一難？（後書き）

今日はこれにて終了！

ハルカ「ねえ、作者。サトヒカを書きたいの？」

んなわけないだろ。今回はそれっぽくなってしまったけど、でも俺は、サトカス派だ。まあ天の河さんの影響でサトヒカのネタを使っているのは、事実だけだね。

アイリス「やっぱり！」

カスミ「サトヒカのネタはともかく、サトカスのネタは、ちゃんとあるんでしょっかね」

それは、もちろん。サトカスのネタは、冬物一掃セール並みにネタがあるから心配するな。

ハルカ「冬物一掃セールって・・・すごい例えかも」

それでは、最後となりますがサトカスファンの皆様そして読者の皆様方。

カスミ・ハルカ・アイリス「感想をお待ちしています」

第16話 思わぬ災難

エミモの森を歩いていたサトシ達は、昼を食い終えた後マイタケタウンに向けて歩いたところに広い花畑があった。

アイリス「うわ〜きれい」

デント「もう遅いし、今日は、この辺で野宿だよ」

カスミ「お花畑で野宿なんて」

ハルカ「ロマンチストかも」

ヒカリ「それは、言ってるわ」

ヒロイン達は、花畑を見てそんな風に言う。ちなみにサトシは、ロマンチストなんて無縁である。

カスミ「私、花大好きなんだ」

ハルカ「私もよ」

ヒカリ「私だって」

アイリス「私もお花は大好きよ」

ヤストシ「へえ、意外だなカスミが花が好きだなんて」

カスミ「え？おかしい？」

ヤストシ「別におかしくないけどなサトシ」

サトシ「ううん。ヒカリやハルカそれにアイリスは、とにかくカスミにも女の子らしい一面があるんだなあって思っただけだよ」

カスミ「あ、なによそれえ！」

サトシ「ははは、だってそうだよ？」

カスミ「む〜」

ヤストシ「からかうなよ。サトシ」

サトシ「悪い悪い、ところでカスミやハルカ、ヒカリにアイリスは何が好きなんだ？」

ヒロイン達「え!?!」

サトシ「ん？何おどろいてんだよ何の花が好きなのかって聞いてるだけだよ？」

カスミ「あ、そうかそうだよね」

ハルカ「あははははは」

ヒカリ「好きな花ね」

アイリス「（私。何を勘違いしてるんだろう？）」

サトシ「？」

サトシは、頭に？がつく。

この時カスミ達には「何が好きなんだ？」が「誰が好きなんだ？」に聞こえたらしく動揺したのだ。

もちろん、サトシはどんなにの花が好きなのか？と聞いたためカスミ達の驚きにはサトシも驚いた。

カスミ「私は桜かな・・・」

サトシ「桜？」

カスミ「うん、でも花だったらなんでも好き何か心が和むから」

サトシ「へえ」

ハルカ「私は、スイートピーよ」

ヒカリ「私は、チューリップ」

アイリス「私は、どんな花も好きよ」

ヤストシ「へえ」ヒカリは、ともかくハルカとアイリスは、花なんか無縁と思っていたけどな」

ハルカ「何よそれ！」

アイリス「そうよそうよ」

ヤストシ「それよりサトシは、何が好きなんだ？」

サトシ「俺か？俺は、カスミ」

カスミ「！！！！！！」

カスミが顔を真っ赤に染めた。

カスミ「わ、わ、わ、わ、わた」

ハルカ「何勘違いしてるのカスミ。サトシの好きなのは、カスミじゃなくてカスミ草よ。カ・ス・ミ・草」

ハルカがカスミにツッコミを入れた。

そういわれるとカスミは、恥ずかしくて顔をしょげる。

カスミ「あ、あつちの花も綺麗！」

カスミは、誤魔化すように別の花を見に行く。

この時カスミは、足元付近にあった「この先ガケ危険」と書かれた板を見落とす。どうやら、もともと立っていたものが倒れてしまったらしいのだ。

しかし、カスミは、もちろんハルカ、ヒカリ、アイリス、タケシ、デント、ケンジ、ヤストシは、気づくこともなくカスミがガケの方へと走っていく。

それに気づいたのは、サトシだけで言葉よりも体が先に動いた。

サトシ「し、しまった！カスミ！」

カスミ「え？な・キヤツ！」

サトシ「くっ！！！」

サトシはカスミに飛びかかり、ガケギリギリのところでカスミを抱き寄せたため、カスミが落ちることはなかった。

サトシ「危なかった・・・それより大丈夫かカスミ？」

カスミ「う・うん・・・」

サトシ「そっか、よかった」

サトシは、胸をなでおろす。

ヒカリ「サトシ、いつまでカスミを抱き寄せてるの」

ハルカ「離れなさいよ」

アイリス「ホント子供なんだから」

3人は、サトシとカスミの抱き寄せに嫉妬する。ヤキモチ

3人の大声に思わずびっくりしサトシは足元を滑らせカスミを巻き込みガケから落ちていってしまった。

サトシ「うわああああ！！！」

カスミ「キヤアア！」

ピカチュウ「ピカピーー！！ピチュピーー！！！」

ピカチュウとハルカ達が急いで駆け寄るが、サトシとカスミはガケの中へと消えていった・・・。

ハルカ「どうしよう私達のせいでサトシが落ちちゃったよ・・・」

ヒカリ「ハルカやアイリスがあんなに大声出すからいけないのよ」
アイリス「なに言ってるのよ。元々の原因は、カスミが・・・」
ヤストシ「いい加減にしろ三人とも」

この責任の擦り付け合いにキレたヤストシ。

ヤストシ「みんな人のせいばかりして。いい加減にしろ」

ケンジ「ヤストシの言うとおりだ」

タケシ「とにかく今は、サトシとカスミを助けるのが先だ」

デント「でもどうやって降りるんだい？」

ヤストシ「それなら俺に考えがある」

そういつてヤストシがあるものを準備し始めた。

はたしてサトシとカスミは、無事であろうか？

第16話 思わぬ災難（後書き）

次回、サトシとカスミは、はたして無事なのか？
次回をお楽しみに！

第17話 脱出に二苦勞？（前書き）

久しぶりの更新です。

第17話 脱出に一苦勞？

サトシ「うわあああ〜〜〜」

カスミ「きゃあ〜〜」

ガケから落下したサトシ達はどンドン、すいこまれるように落下して行った。

そして、次ぎの瞬間森の木がへとつっこんだ。

ガサガサと大きな音を立てたと思うとサトシとカスミは、地面にぶつかった。

幸い、森の木がクッションになったためケガをしなくて済んだ2人だった。

サトシ「テテテ・・・カスミ大丈夫か？」

カスミ「なんとかね」

ゆっくりと立ちあがったカスミ。

サトシ「それより・・・ここどこだ？」

カスミ「さあ・・・ガケから落ちたのは確かだけがけの場所もよく分からないし・・・」

サトシ「よじ登るなんて無理だし・・・あ！」

カスミ「どうしたのサトシ？」

サトシ「ちよつと待っててカスミ」

カスミ「サ、サトシ!？」

そう言つとサトシは、どこかへ行ってしまつ。

カスミが見えなくなるとサトシは、2つのモンスターボールを持ち・

・

サトシ「ツタージャ、クルミル。君に決めた」

「ツタージャ」

「クルクル」

サトシが出したのは、ツタージャとクルミルであった。

ここまで話せば読者の方はもうお分かりでしょう。

クルミルは、草と虫タイプを持っている。

虫嫌いのカスミにクルミルを見せるわけには、いきませんからね。

サトシ「クルミル、あそこに向かっていとをはく」

サトシは、ちょうど机ぐらいの広さの道を見つけてそこに向かつてクルミルにいとをはくを指示する。

サトシ「よし、クルミル、ツタージャにいとをはくでツタージャを上へ上げてくれ」

そう指示するとサトシは、カスミのところへ戻っていく。

サトシ「お待たせ、カスミ」

カスミ「遅いじゃないのよサトシ！」

サトシ「わりわり、少し手間がかかってね」

カスミ「手間？」

サトシ「まあ、話すより見るほうがいいかもしれないね」

そう言つてクルミルとツタージャがいる場所へ移る。

その頃タケシ達は・・・

ヒカリ「これで降りるの!？」

ヤストシ「しょうがないだろう。これしかないんだから」

ヤストシが用意したのは、丈夫なロープである。

ハルカ「これで下に降りるの?」

アイリス「他にないの下に降りる方法?」

ヤストシ「文句を言うな。俺から先に降りるからタケシとデント、

ケンジは、そのあとをついて来い。女子達は、俺たちが降りた後降りて来い」

そう言つてヤストシは、ロープをつたって降りていった。

一方その頃サトシとカスミは・・・

サトシ「ツタージャ。いるか?」

ツタージャ「ツタージャ」

サトシ「ツタージャ、つるのむちで俺を上げてくれ」

そう言つてツタージャは、つるのむちでサトシを持ち上げる。
そして通路の上に到着したサトシ。

サトシ「ツタージャ、次は、カスミを持ち上げてくれ」
ツタージャ「ツタージャ」

そういうとツタージャは、カスミを持ち上げてた。

カスミ「ありがとうサト

」

お礼を言つとしたカスミだが・・・

クルミル「クルクル」

カスミ「キヤーーーーーア!!!!!!!!!!虫は、無視!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!」

サトシは、クルミルをしまうのを忘れていてカスミは、悲鳴を上げてしまい驚いたツータジャとクルミル、そしてサトシは、再び落ちてしまう。

第17話 脱出に一苦勞？（後書き）

どうでしたか久しぶりの話は？

ヒカリ「まあまあかな？」

ハルカ「それよりクルミルを出しね」

まあ、ちよつと無理矢理だけだね。

アイリス「それで今後の予定はどうなっているの？」

まあ、クルミルとズルツクの話は、もちろんだけど昨日のD.P.のサイドシリーズとあと次回のソムリエの話のネタを参考にして構成するつもりだよ。

ヒカリ「楽しみにしてるわよ」

それじゃあ次回も・・・

ヒカリ・ハルカ・アイリス「お楽しみに」

俺の台詞をとるなよ。

第18話 二人きり野宿

崖から再び落ちたサトシとカスミ。その影響でカスミが気絶してしまふ。多分別の理由で気絶したと思う

それでカスミをおんぶししげみのところでカスミを降ろす。

そしてモウカザルを出し火をたく。

ちなみにサトシの現在の手持ちポケモンは、ピカチュウを入れてゴウカザル・ヨルノズク・ミジュマル・ツタージャ・クルミルの6匹である。

するとカスミがようやく気がつく。

サトシ「カスミ、起きたか？」

カスミ「そういえば、私がクルミルを見て驚いてそのまま崖から落ちて・・・そこから記憶がないけどもしかしてサトシが運んだの？」

そうカスミが聞かれるとサトシは、頷いた。すると顔を真っ赤に染めるカスミであった。

一方そのころヤストシ一行は・・・

ヤストシ「ここは、どこなんだタケシ？」

タケシ「えーと、えーと、わかりません」

タケシ・ケンジ「ピカピカの一年生。ビシッ」

パチーンパチーンパチーンパチーン

ケンジ「なんで僕まで・・・(涙)」

ヤストシ「何ドリ のネタやっているんだよ」

ヒカリ「しかも古いし・・・」

アイリス「そんなことは、どうでもいいよ。早くサトシを探さないと大変なことになるわよ」

ハルカ「大変なこと？」

アイリス「今サトシは、カスミと二人つきりなのよ」

ハルカ・ヒカリ「あー！ー！ー！ー！！！」

アイリスの説明に理解したハルカとヒカリ。

ハルカ「早く見つけないと」

ヒカリ「またルアーの人がサトシに何をしでかすかわからないわ」

アイリス「こんなところでゆうちようしている暇はないわ。先を急ごう」

ハルカ「サトシ。待っててね」

ヒカリ「ルアーの人。サトシに何かしたら私とサトヒカファンがただじゃすみませんよ」

そういつてヒロイン3人は、どんどん先へ走っていった。

デント「大変なことになってきたね」

ヤストシ「穩便に収まってほしいな」

デント「僕たちも行きますか」

ヤストシ「そうだな。おい、タケシ、ケンジ、寝てないでさっさと行くぞ」

タケシとケンジにそういつてヤストシとデントは、ハルカたちを追って行った。

サトシ・カスミ「ハックシユン」

一斉にくしゃみをするカスミとサトシ。

サトシ「風邪かな？」

カスミ「寒くなってきたからね」

二人は、そう思っているがまさか自分達の噂とは、思ってもみなかった。

サトシ「ハアー！。眠い」

カスミ「そうだね。もう遅いしね」

そついつとサトシは、ジャージを脱ぎカスミに渡す。

サトシ「ほら、寒いだろう」

カスミ「でも、サトシが・・・」

サトシ「俺は、男だ。心配するな」

そついつとカスミは、サトシのジャージを貸してもらい眠りについ

た。

サトシ「可愛い寝顔」

そう言ってサトシも眠りについた。

翌朝。

サトシが珍しくカスミより早く起きた。

そして1分足らずでカスミも起きる。

サトシ「おはよう、カスミ」

カスミ「おはよう、サトシ。あ！これありがとうね」

サトシ「別にいいんだよ。カスミが風邪を引かなきゃ」

相変わらずの素直さがないサトシ。

カスミ「サトシ！」

サトシ「ん、なにカスミ？」

サトシはカスミに呼ばれたので横を向くと・・・

チュッ

カスミはサトシの唇にキスをした。いわゆる「おはようのキス」である。

丁度その時だった。

ハルカ「ようやく見つけ・・・」

バッドタイミングでハルカがサトシとカスミの前に現れる。

すると。

アイリス「ちょっと、どうしたん・・・」

アイリスもハルカに続いて二人の前に現れる。

カスミ「キャッ！！！！」

サトシ「うわあっ！！！！」

サトシとカスミは突然現れた2人に驚き、お互いに離れた。

ハルカ「サトシ、カスミ。これはどういふことが説明してほしいかも・・・」

ハルカは怒り交じりにサトシとカスミに言う。

アイリス「ホントどういふことなの・・・」

アイリスも続いて、サトシとカスミを責めるように言う。

サトシ「お、俺にもさっぱり・・・」

サトシはいきなりカスミにキスをされたので、何が何だか分からない。

ハルカ・アイリス「ちゃんと答えて！」

ハルカとアイリスは息をぴったり合わせながらサトシに言った。

サトシ「ひいひい!!!」

サトシは2人の鬼のような形相に恐怖を感じた。

そこへヒカリが、やってくる。

ヒカリ「どうしたの二人とも。サトシは、見つけたの」

ハルカ「実は・・・」

ハルカは、ヒカリに先ほどのことを話す。

ヒカリ「なんですって!!!サトシ、どういふことよ。説明しなさいよ」

ヒカリは、ハルカとアイリスより怒り交じりで言う。

するとカスミが・・・

カスミ「ちよつと3人とも、サトシがかわいそうじゃないのよ!!!」

サトシをフォローするカスミだが・・・

ハルカ「カスミはだまって!!!」

ヒカリ「あなた達のために寝ないで一晩中探し回ったのよ」

アイリス「そうよそうよ」

ハルカとヒカリとアイリスはカスミの言葉を遮るように言った。

カスミ「もしかして3人とも、サトシにキスしたアタシに妬いてるの？」

カスミは自慢混じりに興奮状態の3人に言う。

ハルカ「べ、別にそんなんじゃないわよ／＼／」
ヒカリ「わ、私もハルカと同じよ／＼／」

アイ「そんなことで調子に乗らないでほしいわ。ホント子供ね！！」

ハルカとヒカリとアイリスは顔を赤くしながら答える。

カスミ「アイリスだって子供じゃない。それに妬いてるって3人の顔に出てるわよ」

ハルカ「だから、そうじゃないってば！！！！」

ヒカリ「そうよそうよ！！！！」

アイリス「カスミだって顔赤いじゃない！！！！」

カスミ「そ、そんなことないよ／＼／」

ハルカとヒカリとアイリスの興奮状態は最高潮に達していた。カスミは勝ち誇ったような顔をしているが、実際はサトシにキスをしたことで恥ずかしい気持ちでいっぱいである。

サトシ「・・・・・・・・・・」

サトシは3人の雰囲気圧倒され黙り込んでいた。

ヤストシ「結局穏便ですまなかつたな」

デント「まったくだ」

タケシ「サトシー。お前がうらやましいよ」

ケンジ「妬かない妬かないタケシ」

遠くからサトシ達の様子を見守るしかなかったヤストシたちであった。

第18話 二人きり野宿（後書き）

どうだ、カスミ。本気を出せばこんなものだって描写で出来るぞ。

カスミ「さすがサトカス派の作者ね」

ハルカ「これでサトハル、サトヒカ、サトアイを完全に敵に回したわよ」

批判してみるものなら批判してみる。耐えて見せるぞ。

ヒカリ「なんだか今の民 政権みたい・・・」

カスミ「アタシとしては、もう少し攻めて欲しいんだけど」

これ以上攻めると18禁になるからダメだよ。

アイリス「ねえ、作者。サトカス以外のCP書いてよ」

ダメだよ。それじゃあ「総受け」だよ。

ハルカ「総受け」にしなさいよ。そうすれば、ファンだって不満を抑えることができるから」

いや〜。俺サトカス以外に書くことのアまりないからな。

カスミ「それに変になると帰って不満が上がるからダメよ」

（カスミ、ナイスフォロー）

ヒカリ「それでもいいから書いてちよ」

それでは、次回もお楽しみに〜〜〜。

ハルカ・ヒカリ・アイリス「あつ、逃げた!!!待ちなさ〜〜〜

〜い」

ひえええええ〜〜〜。やな感じ〜〜〜。

第19話 ようやく到着マイタケタウン

サトシ達は、ようやくエミモの森を抜け出しマイタケタウンに到着する。

ヒカリ「ようやく街に到着したわ」

ハルカ「早速ポケモンセンターへレッツゴー」

ヒロイン達は、一目散にポケモンセンターへ走り出す。

サトシ達男性組は、呆れていたがヒロイン達の後を追うようにポケモンセンターへ向かう。

ポケモンセンターで一休みするサトシ達。

ヒロイン達は、ポケモンセンターに備えているシャワールームでシャワーを浴びてタケシは、いつものようにジョーイさんをナンパしケンジは、ポケモンの観察、デントは、いろいろなトレーナーと情報交換をしていた。そしてサトシは、電話をしていた。

サトシ「もしもしオーキド博士」

オーキド博士「おー。サトシ、ちょうどよかった今おまえ達のところに電話しようとしたところなんだ」

サトシ「俺たちに？」

オーキド博士「実は、ちょっと訳ありでしばらくゴウカザルを貸してもらえないかの？」

サトシ「え！ゴウカザルを？」

オーキド博士「そうじゃ。それでゴウカザルの変わりは、何にするんじゃ？」

サトシ「それじゃあ・・・ポカブで」

オーキド博士「わかった。すぐゴウカザルを転送装置においてくれ」
そう言ってゴウカザルが入ったモンスターボールを転送装置に置いてそして転送されそして代わりにポカブが入ったモンスターボールが送られてくる。

オーキド博士「しっかり受け取ったぞ。それじゃあサトシ、しっかりジム戦もがんばるのじゃぞ」

そう言つて電話が切れる。

サトシ「しかしオーキド博士は、ゴウカザルを送れなんて・・・まあいいか」

深く考えずにサトシは、その場をあとにする。

オーキド博士「ふう。まさかガス管が故障して火もたけないところだったがサトシがゴウカザルを貸してもらつて助かったわ。サトシには、感謝しないとう」

そうつぶやいたオーキド博士であつた。

その頃サトシ達は・・・

ヤストシ「へえ。ポカブと変えたんだ」

サトシ「そんなんだ」

デント「ところでサトシ。マイタケジムに挑戦するの？」

サトシ「もちろんさ。それでそのジムは、どんな使い手なんだ？」

デント「聞いた情報によるとマイタケジムは、炎使いだそうだ」

サトシ「炎か。なら最初は、ミジュマル決定だな」

タケシ「相性もいいいな」

サトシ「それじゃあ行くか」

ヤストシ「おい、ヒカリ、ハルカ、カスミ、アイリス。サトシがジム戦行くから支度しろ」

ヒロイン達「はい」

こうしてサトシ達は、マイタケジムに向かった。

第19話 ようやく到着マイタケタウン（後書き）

今回は、ジム戦をお送りします。

第20話 マイタケジム戦（前書き）

予告通りジム戦をお送りします。

第20話 マイタケジム戦

マイタケタウンのポケモンセンターをあとにしたサトシ達は、マイタケジムにきていた。

サトシ「たのもー！ー！！！」

????「おー、久しぶりの挑戦者だー」

ヤストシ「ひ、久しぶりの挑戦者!?!」

????「ここ最近ジムへの挑戦者がパタリと来なくなっとな。まあそんなことより久しぶりのジム戦だ・・・といたいところなんだが・・・」

カスミ「といたいところなんだが?」

そうカスミが言うとジムリーダーは、一問あけて言う。

????「お腹が空いて死にそうなんだ・・・」

スズーン!!!!!!

ジムリーダーの発言に盛大にズッコケるサトシ達。

ヒカリ「お、お腹空いてるんだ・・・」

ヤストシ「しょうがないな。デント、タケシ、料理作ってあげて」

デント「命令口調だね・・・」

サトシ「俺からも作ってあげて。でないとジム戦が出来ないよ」

タケシ「わかったわかった。作るからちよつと待っててください」

????「本当か!これで助かった。あ!俺の名前は、コウヘイだ」

サトシ「サトシと言います」

カスミ「世界の美少女のカスミです」

ハルカ「ハルカです」

ヒカリ「初めまして。アタシはヒカリ、よろしくね」

アイリス「アイリスです」

タケシ「ポケモンドクターのタケシです」

デント「僕は、デント。ポケモンソムリエをしています」

ケンジ「僕は、ケンジ。ポケモンウォッチャーをしています」

ヤストシ「俺は、ヤストシって言います」

コウヘイ「サトシ君にカスミちゃん、ハルカちゃん、ヒカリちゃん、アイリスちゃん、タケシさん、デントさん、ケンジさん、ヤストシさんか！宜しくね！」

9人「はい！」

こうしてサトシ達は、ジムに入っただけだった。

その後食事を済ましたコウヘイは、バトルフィールドへ立つ。

審判「これより、マイタケジムリーダーのコウヘイと、マサラタウンのサトシの公式試合を始める！使用ポケモンは三体！どちらか先に二体とも戦闘不能になったら負け、ポケモンの交代は、挑戦者のみOKだ！両者！準備は良いか！」

サトシ＆コウヘイ「はい（おう）！」

審判「始めっ！」

コウヘイ「いけっ！キウウゴン！」

サトシ「いけえ！ミジユマル」

ミジユマル「ミジユ。ミジユミジユマル」

相変わらず派手な登場の仕方をするミジユマル。

一方観客席では・・・

ヤストシ「サトシ、頑張れよ！」

カスミ「サトシは、大丈夫かなあ・・・」

タケシ「あいつなら大丈夫だよ」

ハルカ「そうよ。サトシが簡単に負けるわけないよ」

アイリス「心配要らないわよ」

ヤストシ「そうだよカスミ」

カスミ「そう・・・ね」

そう心の中でつぶやくカスミ。カスミ達は、普通に応援するが1名と2体だけは、他よりテンション高く応援していた。

ヒカリ「サトシ、ファイト！」

ポッチャマ「ポチャ！」

ミミロル「ミンミロ！」

サトシ以外の男性陣「……………」

タケシとデントそしてケンジは少しだけヒカリの性格がうらやましく思えてきた。ちなみに、DPを見ていた人ならお分かりだと思うが、サトシがジム戦の時は必ずと言っていいほど、ヒカリがポケモン達とチアリーダー姿で応援していた。そしてヤストシは、チアリーダー姿で応援しているヒカリを見た瞬間カスミ、ハルカ、アイリスを見た。

ハルカ「ヒカリだけチアリーダー姿ってどういうこと!？」

アイリス「アタシだってチアリーダー姿で応援するわ」

カスミ「この世界の美少女のカスミ様だって似合うものはないわ。

サトシをチアリーダー姿で応援するわ」

3人は、ヒカリを見てチアリーダー姿になろうとしている。

そんな時ヤストシがハルカとカスミ、アイリスのチアリーダーを想像する。

ヤストシ「オエ〜」

想像しただけで吐きそうになったヤストシ。

ハルカ「何なの今の？」

ヤストシ「だって、お前たちがチアリーダー姿なんて想像しただけで吐き……あ!」

思わず口が滑ってしまうヤストシ。

カスミ・ハルカ・アイリス「ヤ・ス・ト・シ!!!!!!!!!!」

ヤストシ「え〜とその……ごめんなさー……………い!!!
!!!!!!」

カスミ・ハルカ・アイリス「許さない!!!!!!!!!!」

3人は、ヤストシをボコボコにした。タケシとデントそれにケンジは、見て見ぬふりをする。

サトシ「ミジユマル、シエルブレード」

コウヘイ「かわして電光石火!」

お互い一歩も引かない勝負だ。

サトシ「ミジユマル、水鉄砲」

コウヘイ「キュウコン！神秘の守り！」
カキーン

コウヘイ「き、キュウコン！」
タケシ「神秘の守りを打ち破った！」

サトシ「ミジユマル。とどめのアクアジェット」
ドバアーリーン

審判「キュウコン！戦闘不能！ミジユマルの勝ち！」 かなり早い
コウヘイ「よくやった。キュウコン。サトシ君！なかなかやるな！
2体目は、いけっ！ブースター！」

サトシ「ミジユマル、水鉄砲」

サトシは、先制攻撃をいきなり仕掛ける。

コウヘイ「ブースター！火炎放射！」

カスミ「水タイプに炎技！？」

カスミは、コウヘイの指示に驚く。普通は、炎タイプの技は、水タイプには、効果は、薄い。

しかし・・・

ドーン

ヤストシ「打ち消した！？」

なんと火炎放射が水鉄砲を打ち消したのだ。

コウヘイ「そのままシャドーボール！」

サトシ「アクアジェット！」

シャドーボールとアクアジェットは、ほぼ同時に発射された。

そして相殺された。

コウヘイ「ブースター！影分身」

サトシ「なにっ！本物はどれだ！」

コウヘイ「シャドーボール！」

サトシ「後ろか！ミジユ・・・」

ドカーリーン

サトシ「ミジユマル！」

審判「ミジユマル！戦闘不能！ブースターの勝ち！」

サトシ「ミジユマル、ゆつくり休んでくれ。いけえ！ピカチュウ！」
コウヘイ「ブースター！火炎放射！」
サトシ「かわせ！ピカチュウ！」
コウヘイ「シャドーボール！」
サトシ「10万ボルト！」
これまたお互い一步も引かないバトルだ。
サトシ「影分身！」
コウヘイ「こっちも影分身！」
お互いが影分身をした為、どちらかが攻撃を仕掛けたら、本物がばれてしまう。
その為、お互い動くことが出来なくなった。

二十分後

ヤストシ「長いな・・・」
デント「まるで合戦だ」
タケシ「どっちかが動いたとき・・・」
カスミ「勝負が決まるわね」
ハルカ「そうだね・・・」
ヒカリ「サトシ・・・」
なかなかバトルが動かない状況にそれぞれ固唾をのんで見守っていた。
そして両者同時に動いた。
サトシ&コウヘイ「右端から」
サトシ「10万ボルト！」
コウヘイ「火炎放射！」
二匹とも、攻撃をしている為、途中で攻撃を止め、本物を狙おうとする、二匹の攻撃は早い為、攻撃が当たってしまう。
だから、右端に近いものが当たる、といって良いだろう。
バーレーン

コウヘイ「ブースター！」

サトシ「ピカチュウ！もう一発10万ボルト！」

ドカーーン

コウヘイ「ブースター！」

審判「ブースター！戦闘不能！ピカチュウの勝ち！よって勝者、マサラタウンのサトシ！」

サトシ「いよっしゃあ~~~~~！！！！！」

サトシは、雄叫びおたけを叫ぶ。

バトルが終わった時、上でバトルを見ていたタケシ、デント、ケンジ、ヤストシ、カスミ、ハルカ、アイリス、ヒカリ、そして一緒に応援していたポッチャマ、ミミロルが近づいてきた。

カスミ「サトシ~~~~！！！！！」

カスミは、そのまま威勢よくサトシへ飛びつこうとしたが……

パチリス「チパチパチー！！！」

パチリスがカスミにスパークが当たりそのまま後ろへ飛んで行き後ろにいたハルカ、アイリスそして可哀想なことにヤストシも巻き込まれてしまう。

パチリス「チパチパチ〜」

アイリス「何するのよパチリス〜」

ハルカ「いたたたたたた……」

カスミ「おのれ〜。ひ、ヒカリ……」

ヤストシ「俺まで巻き込むなよ……」

目を回しながら言うカスミ、ハルカ、アイリス、そしてヤストシ。

ヒカリ「サトシ~~~~！！！！！」

ミミロル「ミンミロ〜」

ポッチャマ「ポチャツ!?!」

ヒカリはカスミ達がのびている隙にサトシに抱きついた。ミミロルもポッチャマを押しつけてバトル直後のピカチュウに抱きついた。

サトシ「おわっ、ってヒカリ!?!」

サトシはヒカリの行動に驚いていたが、ヒカリはすぐさまサトシか

ら離れた。

ヒカリ「凄いバトルだったわ、サトシ」

サトシ「アハハハ。あ、ありがとう」

ヒカリは、笑顔で言うがサトシは、この時思わず苦笑いで言うがヒカリは、サトシの顔が苦笑いだとは、ぜんぜん知らずに笑顔だと思
い込む。

コウヘイ「負けたよ、サトシ君。これがフレイムバッジだ」

サトシ「ありがとうございます！よし！フレイムバッジ、ゲット
だぜ！」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

こうしてサトシは、ホクシン地方で始めてのバッジをゲットする。

そしてこの先恋は、どんな展開を見せるのか？

物語は、まだまだ続く。

第20話 マイタケジム戦（後書き）

カスミ・ハルカ・アイリス「ちょっと、待ったー（怒）！！！！！」
ゲッ！？来た。

カスミ「何よ今回は！ヒカリだけいい思いして」

落ち着け落ち着くんだカスミ。

カスミ「これが落ち着いていられますか。作者は、サトカス派ですよ。なのになんで美味しいところをヒカリに持っていかれるのよ」

たまには、こんなのも言いかなって・・・。

アイリス「なんか言い訳にしか聞こえないけど・・・」

ハルカ「あら？何か落ちてるわよ？」

あ！見ちゃダメだ。

ハルカ「えーと、『私とサトシのCPを書きなさい。さもないと作者の秘密を暴露するわよ ヒカリより』だって」

カスミ「なるほどヒカリに脅されたわけね・・・」

そういうことだ。許してくれよカスミ。

カスミ「わかつたわ。今回は、許してあげるけど次は、アタシにおいしいところを頂戴」

も、もちろんだよ。俺は、サトカス派の作者だからな。

ハルカ「いいな」。私も作者を脅そうかな」

アイリス「その前に作者の秘密を見つけないと」

ハルカ「それもそうかも」

こいつら・・・。

カスミ「心配しないでアタシが作者の秘密を隠して見せるから」
本当か！それは、ありがたい。

カスミ「どういたしまして」

それじゃあカスミ締めヨロシク。

カスミ「ハイ。それでは、次回もポケモンゲットしてね」

第21話 ヤストシの企み

マイタケジムで勝利し1つ目のバッジをゲットしたサトシは、マイタケタウンから少し離れた場所にあるアタムタウンのポケモンセンターにいた。

サトシ「疲れた〜」

カスミ「今日は、ここで泊まるのね」

ヒカリ「そうね」

ヤストシ「ところでデント。次の街へは、どうやって行くんだ？」

デント「次のジムがあるピカリーシティは、ここから2、3カ月かかるよ」

デント以外の人「2、3ヶ月以上?!」

ハルカ「どうしてそんなにかかるのよ!!」

デント「ここには大きな山脈がたくさんあるんだ。それを避けて遠回りしてピカリーシティへ行くんだ。だから2、3ヶ月はかかるんだ」

ヒカリ「他にないの？」

デント「あるには、あるんだけど・・・」

アイリス「どうしたのよデント。はつきり言いなさいよ」

そうアイリスがデントに言う。

デント「この街には、ピカリー鉄道という鉄道があるんだ。そこには、快速、特急、急行、各駅の4つがあるんだ」

アイリス「それならそれに乗ればいい話じゃない」

デント「アイリス、簡単に言ってるけど電車賃は、とても高いんだよ」

タケシ「一体どのくらいなんだ？」

そういうとデントは、口を開き行った。

デント「ここアタムタウンからピカリーシティまで一人1万円ぐら이다」

8人「い、1万円!!!!」

デント「それに急行と快速は、また別にお金がかかるんだ」

サトシ「なら、各駅でいいじゃないか」

デント「そういうが各駅は、直通がないんだ。途中の駅で降りてその先は、急行か快速に乗り換ええないといけないんだ」

ケンジ「そういえば、特急があるって言ってたよね」

デント「ああ。寝台特急ピカチュウ号ね。この列車は、走るホテルと呼ばれている豪華列車さ」

カスミ「走る豪華列車か」

ハルカ「一度乗ってみたいかも」

ヒカリ「私も」

ヤストシ「お前達そう言うけど。この列車は、予約制でしかも簡単には、手に入られないだぞ」

カスミ・ハルカ・ヒカリ「なんだ」

ハルカ「しょうがないかも」

ヒカリ「諦めるしかないか」

アイリス「他の方法を考えて」

タケシ「ピカリーシティへ行かないとな」

ケンジ「眠」

そう言つてヒカリ、ハルカ、アイリス、タケシ、ケンジは、ベットに眠りについた。もちろんサトシ達も寝るがヤストシだけ何か企んでいるような顔をして眠りについた。

翌日。

ヤストシは、起きてみるとサトシ、カスミ、デントの三人がすでに起きていた。

ヤストシ「おはようさん。サトシ、カスミ、デント」

サトシ「おはよう。ヤストシ」

カスミ「珍しいわね。あんたがあとから起きるなんて」

ヤストシ「それよりいい話があるんだけど」

デント「いい話？」

ヤストシ「実は、昨夜お母さんが寝台特急ピカチュウ号のチケット4枚手に入れたのよ」

カスミ「本当なのヤストシ!!」

サトシ「これでピカリーシテイまでいける」

デント「でも、4枚しかないんだろう」

ヤストシ「そうだよ。だから俺とサトシ、カスミ、デントだけで列車に乗ろうて言う寸法さ」

サトシ「カスミ・デント「ウソ!!」

ヤストシ「それに・・・」

ヤストシは、カスミの耳元で言う。

ヤストシ「邪魔な3人がいなくなればサトシをゲットできるチャンスじゃないの」

そう言うときカスミは、思わず顔を真っ赤に染める。再三言うが、カスミはサトシに好意を持っている。二人きりになれるチャンスが増えるというわけである。

ヤストシ「それじゃあ五人を起こさずにアタム駅へ出発」

カスミ「おー」

そう言うときヤストシを先頭にサトシ、カスミそしてデントがついて行く。

デント「（本当に大丈夫かな？この選択肢は、何かやな予感が感じるのよ、僕の気のせいかな？）」

そう思うデントだがその予想は、後到的中することをこの時誰も知るよしかなかった。

デントが不安げな中サトシ達は、駅へと向かうのであった。

第21話 ヤストシの企み（後書き）

カスミ「しばらくは、サトカスが続くのね」

ああ。どうやったらあいつらを切り離せるのかなと悩みに悩んでこ
うしたの。

カスミ「それより豪華列車なんて読者の皆さんも想像つかなかっ
たじゃないの？」
多分ね。

カスミ「それにしても、薄いよねサトカスの描写」

そう心配するな。18禁すれすれを書く予定だ。

カスミ「すごい作者。でも楽しみにしているわ」
と言うことで次回もお楽しみに。

第22話 意外な再会

サトシ、カスミ、デント、ヤストシは、アタム駅にいた。

ヤストシ「え」と。寝台特急ピカチュウ号があるのは確か3番ホームだな」

カスミ「早く乗ってみたい」

デント「慌てなくていいよカスミ」

カスミがはしゃいだ時だった。

???「あ！サトシ、カスミ、ヤストシ」

3人の名前を呼ぶ声が聞こえサトシ達は、振り向くとそこには、メガネをかけた少年がいた。

サトシ・カスミ・ヤストシ「マサト!!」

そこにいたのは、マサトであった。

知っている人もいるとも思うが一応説明しておこう。マサトとは、ハルカの弟でサトシとは、ホウエン、カントーで旅と一緒にし、カスミとヤストシは、旅の途中で知り合った。

ヤストシ「マサト。久方ぶりだな。^{ひさかた}どうしてホクシン地方に？」

マサト「僕、ようやく10歳の誕生日を迎えて旅をしているの。最初は、ジョウト、次にホウエンを回ったの。2大会連続でベスト4を収めたんだ。それで次の旅先をホクシンにしたの」

サトシ「2大会連続でベスト4って!!」

カスミ「マサトってすごいわ」

ヤストシ「初出場でベスト4、さらに次の大会もベスト4をとるなんて、さすがセンリさんの子だ・・・」

デント「話してるところすまないけどこの子は、誰なの？」

サトシ「こいつは、マサト。ハルカの弟でトウカジムのジムリーダーの息子なんだ」

デント「へえー。そうなんだ」

マサト「ところでサトシ。後ろにいる男の人は誰なの？」

サトシ「こっちはデント。俺がイツシユ地方で出会った仲間だよ」
デント「初めまして。デントです」

マサト「こちらこそよろしく」

ヤストシ「ところでマサト。おまえは、どうしてアタム駅にいるんだ？」

マサト「パパが、たまたま寝台特急ピカチュウ号のチケットを手に入れたの。だから乗ることにしたんだ」

ヤストシ「へえ」

マサト「ところでヤストシ。お姉ちゃんは、どうしたの？一緒にいるってママが言っていたから」

そのことを聞かれると思わず苦笑するヤストシ。なんて答えればいいのかわからないときだった。

アナウンス「3番戦に停車中の電車は、9時36分寝台特急ピカチュウ号ピカリーシテイ行きです。まもなく発射します。お急ぎの方は、お早めにお乗りください」

ヤストシ「もう発車時間だ。急ごうか」

カスミ「そうだね」

デント「ああ」

サトシ「早く乗ろうか」

マサト「あ！待ってよ」

そう言っただけピカチュウ号が止まっている3番ホームへ向かう。

そしてホームに着いたときだった。

チャラチャラチャラランチャラチャララン

東京駅の京浜東北

線のベル

サトシ「急げ！……！」

アナウンス「ドアが閉まります。次は、***に停車します」

ピイピイピイ……。

そして車掌が笛を吹いたと同時にサトシ達は、列車に乗り込んだ。ピカチュウピカピカピカ ドアの閉まる音

そして列車は、走り始めサトシ達は、ピカリーシテイへ向かう。

しかしこの列車で事件が起ころことをこの時知るよしもなかった。

第22話 意外な再会（後書き）

サトシ達が乗った列車内で事件が起ころうとしていた。

第23話 列車内での出来事

寝台特急ピカチュウ号に乗り込んだサトシ達は、まず自分が泊まる部屋に向かった。

ピンポンパンポン

車掌「たいへんならたくお待たせをいたしました。ただいまアタム駅を時間通り発車をいたしました。これからピカリー鉄道シモリク線を経由いたしましてピカリー駅まで運転します。列車の運転距離と所要時間は、ピカリー駅が2580キロで75時間と30分と運転をいたします。次は、***に停車いたします。***を出ますと***、シンラ駅に停車いたします。なお***からシンラ駅まで停車をいたしません。シンラ駅で寝台特急ミジユマル号を連結いたしましたして終点のピカリー駅に向かいます。車は、前から1号車2号車で一番後ろが8号車となっております。宿泊のできる部屋があります車両は、1号車、2号車、4号車、6号車、8号車となっております。お手持ちの寝台特急をお確かめの上部屋にお入りください。車の番号は、出入り口付近でお確かめください。また他の車両は、3号車がバトルフィールド専用の車両。5号車が食堂車、6号車がポケモンセンターとフレンドリーショップを兼ねそろえております車両となっております。お客様にお願いいたします車内でのバトルは、3号車のバトルフィールド以外でのポケモンバトルは、周りのお客様のご迷惑となります。また運転に危険をもたらす恐れもありますので、ご遠慮いただきますよう、ご協力をお願い致します。またいつも連れで歩きますポケモンにつきましては、技等を出さないようにしてください。ただいま車掌によりまして乗車券、寝台特急券の拝見に参っております。お客様の協力をお願いいたします。

次は、***です」

サトシ「長いな。車掌の放送・・・」

ヤストシ「しょうがないだろう」

カスミ「それより部屋を探そう」
マサト「え〜と、僕の部屋は・・・」
デント「僕の部屋は、ここだ」
ヤストシ「お！デントと一緒にだな」
マサト「僕は、この部屋か」
サトシ「ちよつと、待って！」
ヤストシ「なんだサトシ？」
サトシ「なんでカスミと同じ部屋なんだ!？」
サトシがヤストシに言う。
そうサトシは、カスミと同じ部屋である。
ヤストシ「というとなんだ。カスミと同じ部屋じゃあ嫌だというのがサトシ？」
サトシ「そうじゃなくて、仮にも年頃の男と女と一緒に寝るってのはまずいだろ」
超が何個もつくほど鈍感なサトシでさえ、そのことには多少認識している。
ヤストシ「そんなことないよなデント」
ヤストシは、デントに振る。
デント「何故、僕なの？」
ヤストシ「デント。サトシは、カスミと一緒に寝るべきだよな」
ヤストシは、威圧感たっぷりデントに問いかける。
デント「や、ヤストシ言うとおりだと思っよサトシ」
デントは、ヤストシの無理矢理な同調で賛成に回る。
マサト「僕もそう思っよサトシ」
マサトもヤストシの何かを感じて賛成に回る。これで3対1となる。
サトシ「デント、マサト」
ヤストシのせいで助け舟となるはずだったデントとマサトがヤストシ側につきガツクリとするサトシ。
そして止めとして・・・
カスミ「あ、アタシと寝るのが嫌なの？」

カスミの涙目＋上目遣いでサトシを見つめて言った。

サトシ「はあ、分かったよ。」

カスミの止めが効いたのかサトシは折れて、カスミと一緒に部屋で寝ることを承諾した。

カスミ「ありがとうサトシ」 (これでサトシを独り占めできるわ！)

カスミは嬉しくなり、サトシに飛びっきりの笑顔を見せた。カスミは他の女子達がいらない間にサトシと良い関係を気付きたいと思っていた。玉砕覚悟でこの提案をしたが、その提案が受け入れられたので嬉しくてたまらないようだ。そして早速サトシを引張って部屋へと向かった。結局二人部屋は、サトシとカスミペアとヤストシ、デントペア、そして一人部屋は、マサトが使うことになった。カスミとサトシが部屋に入ったあと、デント、マサト、ヤストシは、部屋でこんな会話をする。

デント「ところでヤストシ。どうしてあの二人をくつつけようとするんだ？」

マサト「僕も疑問に思っていたところよ」

ヤストシ「それは、あの二人が両想いだったことよ」

デント・マサト「両想い!？」

ヤストシ「そう。実は・・・」

ヤストシは、船のときにサトシが聞いたときのことを話す。

デント「なるほどね。そう言う事か」

ヤストシ「そうさ。だからあの二人をくつつけるべきなんだよ」

マサト「でも超がたくさんつくほど鈍感なサトシが気がつくのかな？」

ヤストシ「両想いだから心配ないさ。後は、告るだけだ。まあこれではばらくは、二人きりになれる時間が増えたとし幸い電車内に知り合いもない。あいつらは、そう簡単には、追ってこれない。俺の計画が順調に進んでいる。俺の立てた計画は完璧だ。狂いは、10%ない」

ものすごく自信で言うヤストシ。そしてヤストシは、その後どこかへ出かけていき二人きりとなったデントとマサトは、こんな会話をしていた。

デント「ねえ、マサト。このことはみんなには内緒にしておいた方がいいと思うよ。」

マサト「うん。僕もそう思う。特にお姉ちゃんに知られたら・・・」

デント「知られたら？」

マサト「ぼ、僕が殺される・・・」

デント「・・・」

マサトの発言に、デントは言葉を失った。会話の内容通り、もしサトシとカスミが同じ部屋で寝ているという事がサトシ好きの女子達の耳に入ったらただ事では済まされない。ハルカに関しては、阻止できなかったマサトをしばくのはほぼ間違いないだろう。

マサト「あとさ、ヤストシのことなんだけど・・・」

デント「言いたいことは、わかってるよ。ヤストシは、間違えなくヒカリ達に殺されるだろうな」

マサト「僕もそう思う」

ヒカリ、ハルカ、アイリスは、一番先にしばかれるのは、まず間違えなく計画立案者であるヤストシだろう。サトシとカスミを二人きりにする計画を作り遠ざけてしかも完璧に3人を見捨てていった。

これらの条件は、まず間違えなくヤストシは、殺されるだろうと思うデントとマサト。

噂をすれば、と言ってヤストシが部屋に帰ってくる。

デント「ヤストシ。この世で100%の計画なんてほとんどないよ。どこかに盲点があると思うよ僕は」

マサト「僕もそう思うよ」

ヤストシ「そんなわけないよ。それに追いつこうなんて早々無理さ。そういつたヤストシ。」

しかし二人の予感、このあとの中することをヤストシは、知るよしもなかった。

第23話 列車内での出来事（後書き）

サブタイトルが全然思いつかずこんなタイトルになりました・・・。

第24話 置いてきぼりされたヒロイン3人+男子2人

さてさてサトシ達が寝台特急に乗った頃……。

アタムのポケモンセンターでは……

ハルカ「ん〜、ちよつと寝過したわね。」

まず、最初に起きてきたのはハルカだった。まだ目覚めて間もないせいか、目がトロンとしている。

アイリス「あ！ハルカ。おはよう」

ハルカ「おはようアイリス」

アイリスの姿が見えたので、ハルカは挨拶を返した。その後、ヒカリ、タケシ、ケンジが起きて食事を取る。そして朝食を終えて全員ロビーでくつろいでいたところ、ハルカがふとあることに気付いた。ハルカ「ところで朝起きたらカスミの姿が見えなかつただけど、何処にいるのかしら？」

ケンジ「そういえば……」

ヒカリ「サトシもいないみたいだし」

アイリス「デントもいないよ」

タケシ「ヤストシも」

その場にいたヒロイン3人+男子2人は、サトシ、カスミ、デント、ヤストシの4人がいないことに気付いたようだ。

ジョーイ「あら、サトシ君達ならあなた達が起きてくる前に旅に出ていったわよ」

そこにたまたまいたジョーイさんが5人に言う。

ハルカ「へえ〜、そうなんだ」

ヒカリ「早いね。4人とも」

アイリス「旅立つの」

タケシ「ちよつとお前達。何か気づかないか？」

ヒロイン達「え？」

タケシにそういわれると頭を回転させる3人。

ケンジ「僕たち置いてきぼりにされたんだよ」

そうケンジが言うと3人は、ハツとする。

ハルカ・ヒカリ・アイリス「お、置いてきぼり!!」

アイリス「そんな。置いてきぼりなんて」

ヒカリ「サトシがそんなことするはずがないよ」

ハルカ「いや、こんなことをサトシがするはずがない」

ヒカリ「こんなことをするのは、ただ一人」

3人は、ある人物に心当たりがあった。その人物とは、もちろん・

・
ヒカリ・ハルカ・アイリス「ヤストシ!!!!!!」

一斉にその人物の名前を言うヒロイン3人。

アイリス「確かにヤストシなら考えそうね」

ハルカ「ヤストシは、サトシ達3人を連れて私たちを置いてきぼりにするなんて最低かも」

ん？ サトシ達3人？

ヒカリ「ねえ、ハルカ。サトシ達3人ってことは、カスミも一緒だよね。」

ハルカ「そ、そうだよ」

ハルカ・アイリス・ヒカリ「てことは・・・」

3人の脳内には、ある流れ図が完成していた。

<3人の脳内>

1・ヤストシは、サトシ、デント、カスミと共に旅に出た。

2・そのうちカスミはサトシに好意を持っている。

3・カスミがサトシに間違いなく何らかのアプローチを仕掛けてくる。

4・鈍感なサトシだが、カスミの想いに気付かないという保障はない。

5・自分達がいなかったため、サトシとカスミが2人きりになる機会が増え、2人の仲は親密になる。

6・そしてカスミがサトシに告白しめでたしめでたし(へへ)

ハルカ・ヒカリ・アイリス「めでたくなーーーーー」

「ーーーーい(怒)」

ごめんねごめんねごめんね　　某芸人のものまね

ハルカ・ヒカリ・アイリス「カチッ(怒)」

え！ちよつとまっ・・・ぎゃーーーーー

ハルカ「作者をなぐたらなんだかスッキリしたかも」

ヒカリ「ほんと」

アイリス「自業自得よ」

ヒカリ「ジョーイさん。サトシ達は、いつ出て行きましたか？」

ヒカリが切羽詰まったかのように、ジョーイに聞く。

ジョーイ「サトシ君なら少し前に出て行ってアタム駅に向かったわ。なんでも寝台特急ピカチュウ号のチケットが4枚手に入れたからって」

ハルカ「ヤストシ。寝台特急券持っていたの!!」

アイリス「しかも4枚!!」

ヒカリ「どうしよう。このままじゃあ追いかけれない」

電車に乗る大金など持っていないヒカリたちは、悩んでいたが・・・

???「あ!ヒカリちゃん、ハルカちゃん、アイリスちゃん、タケシ君にケンジ君じゃないの」

そこに現れたのは、一人の緑髪の白衣を着た美少女がいたがヒカリ達は、よく知っている人物であった。

5人「アヤノさん!」

5人が声をそろって言う。

アヤノとは、「ポケットモンスター マイスターズ」を読んでいる方ならわかるだろうが一応説明しておこう。アヤノは、エブチ博士の助手である。とてもキレイな人で優しい性格の持ち主であるがそれは、仮の姿で正体は、セレビィである。普段から化身姿でいる。ちなみにその正体をしているものは、限られている。

ヒカリ「アヤノさん。どうしてここに?」

アヤノ「エブチ博士の用事でピカリーシティまで行かなくちゃいけないの。それよりどうしてのあなた達。何か悩んでいるならいつてみて」

ハルカ「実は・・・」

ハルカは、先ほどの話をアヤノに言う。

アヤノ「そうなの。ヤストシ君らしいわ」

ヒカリ「何とか追いつくてはないですか?」

アヤノ「あるわよ」

アイリス「本当ですか!」

アヤノ「実は、寝台特急ミジュマル号のチケットを持っているの。

ミジュマル号は、ピカチュウ号と同じく走る豪華ホテルなの。シンラ駅でピカチュウ号と連結するのこれなら追いつけるわよ」

ヒカリ「本当ですか」

アイリス「それなら早く行きましょう」

ハルカ「善は、急げよ」

アイリス「カスミ、抜け駆けは許さないわよ」

ハルカ「カスミ、サトシに変なことしたら承知しないからね」

サトシ好きの女子達は、自分達の荷物を猛スピードで取りに行くとポケモンセンターを後にする。

タケシ「お、おい。ちよつとお前ら!!!」

タケシは女子達を落ち着かせようと呼び止めたが、一步遅かったよっだ。

アヤノ「あらら・・・」

ケンジ「ハハハハハ・・・」

アヤノとケンジは、ものすごく呆れる。すると後ろからヒカリがやってきてこうつぶやいた。

ヒカリ「待っていなさいよルアーの人。もしサトシにへんなことしたらただじゃあ済まさないよ。それとヤストシ。覚悟しな。会ったあかつきには、あの世へ送ってやるわ」

タケシ・ケンジ・アヤノ「（ヒカリ（ちゃん）怖いよ。顔が・・・）」

ヒカリの本音に思わず引いてしまうタケシとケンジ、アヤノ。

こうしてヒカリと共にタケシ、ケンジ、アヤノは、ハルカ達の後を追ってアタム駅に向かったのだった。

一方、その頃、

サトシ・カスミ・ヤストシ「ハークション!!!」

デント「どうしたの？3人とも」

マサト「一斉にくしゃみなんかして」

サトシ「風邪でも引いたかな？」

カスミ「誰かがアタシ達の噂してるわよ。きっと」

ヤストシ「（でも、なんだろう。この物凄い悪寒は）」

アタムタウンであんなやり取りが繰り返られていたとは、微塵も思っていないサトシ一行であった。

第24話 置いてきぼりされたヒロイン3人+男子2人(後書き)

さてさて物語は、変な方向へ向かっています。はたしてヤストシとカスミは、無事で済むだろうか？次回に続く。

第25話 ミジユマル号で追いかける

ようやくアタム駅に着いたヒカリたちは、早速ミジユマル号が発車するホームへ行く。

ハルカ「これがミジユマル号ね」

アヤノ「そうよ。ミジユマル号は、ピカチュウ号と違ってカミリク線を経由してシンラ駅でピカチュウ号と連結してピカリー駅へ行くの」

ヒカリ「そうなんですか・・・」

アイリス「これならサトシ達に追いつくわね」

ハルカ「それじゃ、早速乗りましょう」

ヒカリ達は、ミジユマル号に乗る。

アイリス「豪華だわ」

タケシ「まさしく走るホテルだ」

アヤノ「このミジユマル号は、去年から走り始めた列車だからピカチュウ号より豪華に作られているの」

ケンジ「そうなんですか」

タケシ「ところで自分達の部屋は、どこなんですか？」

アヤノ「あそこよ」

そう言うとハルカとヒカリ、アイリスは、部屋に入る。

アイリス「広い」

ハルカ「しかもトイレ、風呂付きだわ」

ヒカリ「ホント」

3人は、目をキラキラさせながら言う。

アヤノ「この部屋は、6人部屋なのよ」

ケンジ「だからこんなに広いんだ」

そうケンジが言ったときだった。

アナウンズ「まもなくミジユマル号ピカリー駅が発車いたします。

次の停車駅は、シンラです」

ピーピーピーーーーーー。

そして車掌が笛を吹く。

ミジュミジュミジュ ドアの閉まる音

そして列車は、走り始める。

ヒカリ「待つてなさいよカスミ」

ハルカ「思い通りにさせないかも」

アイリス「ついたときが楽しみだわ」

3人は、そう楽しみながらミジュマル号は、シンラ駅に向けて走り出す。

第25話 ミジユマル号で追いかける(後書き)

後書きコーナーは、今回お休みいたします。

第26話 バトルの約束

ヒカリ達がミジユマル号でサトシ達を追いかけ始めた頃、そのサトシ達は、部屋で休んでいた。

マサト「サトシ、あの約束を覚えている？」

デント「あの約束？」

マサトの発言に？マークをつけるデント。

サトシ「覚えてるよ。俺とバトルすることだろう？」

デント「どういうことなんだい？」

カスミ「アタシも。約束ってなんなの？」

マサトとサトシとかわした約束がわからないデントとカスミ。

マサト「実は、カントーの旅を終えたときに僕がサトシに『ポケモントレーナーになったら、一番にバトルしようね』って約束したんだ」

カスミ「『ポケモントレーナーになったら、一番にバトルしよう』か。よく覚えてたじゃんサトシ」

サトシ「なんだよその言い方。まるで俺が約束事を覚えてないような言いかたして」

カスミの言葉に反論するサトシ。

ヤストシ「まあまあ。とりあえずバトル専用の車両へ行こうか」

こうしてサトシ達は、バトル専用車両に移った。

ちなみにバトル専用車両とは、電車内でバトルが出来るように作った車両である。この車両は、外見からは、他の車両と変わりないが内部は、他の車両より分厚くたいあたりやひっかくは、もちろんかえんほうしゃやハイドロポンプ、10万ボルトといった車両が壊れてしまう技でも耐えることができる車両である。

そしてサトシ達は、バトル専用の車両に入る。

????「ようこそ、ポケモンバトルクラブへ」

マサト「うわっ！」

デント「誰かと思ったたらドン・ジョージさんじゃないですか!？」

ドン・ジョージ「ほく。私のことを知っているようだね」

ヤストシ「イツシユ地方でよく見かけましたから」

カスミ「ところでサトシ。この人誰なの？」

カスミとマサトは、ポケモンバトルクラブは、もちろんドン・ジョージのことは、知らない。

サトシ「そうか!カスミやマサトは、知らないんだよな」

デント「彼は、ドン・ジョージと言ってポケモンバトルクラブの責任者なんだ」

カスミ・マサト「ポケモンバトルクラブ？」

デント「ポケモンバトルクラブって言うのは、イツシユ地方の各所に存在する、ポケモントレーナー同士が自由にバトルすることができる施設で施設内の掲示板には各トレーナーのポケモンのプロフィールと、どのような相手と対戦を希望するかが登録されていんだ。

ちなみにこの施設を運営してるのがこのドン・ジョージさんだけどドン・ジョージは、沢山の親戚がいてその人たちが施設を支配、運営しているんだ」

カスミ「たくさんさんの親戚がいるの!？」

ドン・ジョージ「そうじゃ。私には、こんなに私に顔に似た親戚や兄弟がいるんじゃ。ほら」

そう言つて写真を見せる。

カスミ「確かに似ている……」

マサト「まるでジョーイさんやジュンサーさんの男バージョンだ……」

ヤストシ「それにしてもポケモンバトルクラブもホクシン地方にもあるんだ」

ドン・ジョージ「最近ポケモンバトルクラブを広めようとまずホクシン地方から始めたんだ」

デント「そうなんですか……」

ドン・ジョージ「それでポケモンバトルクラブに来たということは、

バトルしに来たんじゃな」

サトシ「そうです。このマサトと勝負する約束してたので」

ドン・ジョージ「それなら今空いてるから使いたまえ。それで対戦方法は？」

マサト「もちろんフルバトルで」

サトシ「同じく」

サトシとマサトは、フルバトルで勝負することとなった。

果たしてこの勝負どちらが勝つのか？

第26話 バトルの約束（後書き）

いよいよ次回は、サトシとマサトのフルバトル戦。
果たしてどちらが勝つのか？次回のお楽しみに！。

第27話 フルバトル対決！（前書き）

変更のお知らせ

マメパト ハトーボ―

クルミル クルマユ

第27話 フルバトル対決！

ピカチュウ号内にあるバトル専用の車両でサトシとマサトのポケモンバトルが行われようとしていた。

ドン・ジョージ「これよりマサラタウンのサトシとトウカシティのマサトによるポケモンバトルを行う。使用ポケモンは、6体。全てのポケモンが戦闘不能になったじてんでバトルを終了とする。ポケモンの交換は、自由である」

サトシ「手加減しないぜ。マサト」

マサト「もちろんだよ。この日をずいぶん待ったからね」

お互いそう言うサトシとマサト。

カスミ「この勝負どっちが勝つんだろう？」

デント「実力と経験から言えばサトシが有利だけど・・・」

ヤストシ「でも、バトルは、野球と同じくなにが起るかわからないからな」

カスミ、デント、ヤストシは、二人の様子を見てそう思う。

ドン・ジョージ「それでは、バトル開始！」

マサト「行け、ユキメノコ！」

サトシ「なら、ポカブ。キミに決めた」

マサトは、ユキメノコ、サトシは、ポカブを繰り出した。

デント「ポカブとユキメノコか」

カスミ「相性ならサトシの方が有利だね」

そう言うカスミ。

サトシ「ポカブ、ひのこだ」

先制攻撃は、サトシからだ。サトシは、ポカブにひのこを指示する。マサト「ユキメノコ、まもる」

しかしポカブのひのこは、ユキメノコのまもるで回避される。

ヤストシ「あのユキメノコ。まもるを覚えてるんだ」

感心そうに言うヤストシ。

マサト「ユキメノコ、シャドボール」

ユキメノコは、シャドボールを放つ。

サトシ「ポカブ、避けるんだ」

ポカブは、シャドボールを避ける。

サトシ「そこからニトロチャージ！」

ポカブは、ニトロチャージを繰り返す。この技は、使用後すばやさ
が上がるので少々厄介やっかいな技である。

マサト「ユキメノコ、あやしいかぜ」

ポカブがニトロチャージで攻めてきた時ユキメノコは、あやしいか
ぜをポカブに繰り返す。

ポカブ「ポカ！」

サトシ「ポカブ！」

ユキメノコ「ユキ・・・」

マサト「ユキメノコ！」

技は、お互いに当たりダメージを受ける。特にユキメノコは、炎タ
イプの技を受けたため効果抜群である。

サトシ「ポカブ、大丈夫か？」

ポカブ「ポカ」

サトシ「よし、ならもう一度ニトロチャージ」

ポカブは、もう一度ニトロチャージを繰り返した。

マサト「ユキメノコ、みずのはどう」

サトシ「なっ！」

なんとユキメノコがみずのはどうを覚えておりポカブは、避けれず
見事に当たる。水タイプの技であるみずのはどうは、炎タイプであ
るポカブには、効果抜群である。

ポカブは、ぐったりしてしまふ。

ドン・ジョージ「ポカブ、戦闘不能！ユキメノコの勝ち！」

デント「あのユキメノコ、みずのはどうを覚えてたんだ」

カスミ「ずいぶん腕がありそうだねマサト」

サトシ「ポカブ、ゆっくりお休み。次は、こいつだ。ミジユマル君

に決めた」

ミジユマル「ミジユミジユマル」

サトシが次に出したのは、ミジユマルであった。

デント「サトシは、ミジユマルを出してきたね」

カスミ「それにしてもいつ見ても可愛いわ。あのミジユマル」

ヤストシ「おいおい」

水ポケモン好きなカスミに呆れながらツッコミをするヤストシ。

サトシ「ミジユマル、水鉄砲」

ミジユマル「ミジュージユマル！」

マサト「ユキメノコ、まもる」

しかしミジユマルの水鉄砲は、まもるで防御される。

マサト「そこからシャドーボール」

ユキメノコは、シャドーボールを発射する。

サトシ「避ける、ミジユマル」

そういうとミジユマルは、ホタチを取り出しシャドーボールを弾きホタチで見事ガードする。

カスミ「すごいわあのミジユマル」

マサト「ホタチでガードするなんて・・・」

サトシ「ミジユマル、アクアジェット」

ミジユマルは、アクアジェットを繰り返した。アクアジェットは、必ず先制攻撃できる技なのでユキメノコは、避けれず見事命中しユキメノコは、倒れる。

ドン・ジョージ「ユキメノコ、戦闘不能！ミジユマルの勝ち」

マサト「お疲れ様ユキメノコ。次は、このポケモンだ。行け、ゼブライカ」

マサトが次に出してきたのは、ゼブライカである。

ヤストシ「電気タイプのゼブライカか」

デント「水タイプのミジユマルには、かなり不利だね」

サトシ「ミジユマル、もどれ」

サトシは、ミジユマルを戻した。

サトシ「クルマユ、君に決めた」

クルマユ「クルマユ」

カスミ「い、いやああああー……。虫は、無視！……！！！」

サトシがクルマユを繰り出したと同時に騒ぎ始めるカスミ。

ヤストシ「相変わらずの虫嫌いだ……」

その光景にかなり呆れるヤストシ。

デント「落ち着いてよ。カスミ」

虫嫌いのカスミを落ち着かせようとするデント。

そんなことは、無視してバトルが始まる。

マサト「ゼブライカ、電光石火」

サトシ「クルマユ、いとはくで避ける」

ゼブライカの電光石火をクルマユは、いとはくで避ける。

サトシ「はっぱカッター！」

そう指示するとクルマユは、はっぱカッターを繰り出しゼブライカに当たる。

マサト「ほうでんだ！ゼブライカ」

そう言うとゼブライカは、ほうでんを繰り出すが草タイプも持っているクルマユには、効果はいまひとつである。

サトシ「クルマユ、いとはくでゼブライカを捕まえる」

マサト「ゼブライカ、高速移動で避けて」

クルマユがいとはくを仕掛けるがゼブライカが高速移動で避けられる。

マサト「そこからニトロチャージ！」

ゼブライカは、ニトロチャージを繰り出す。炎タイプの技は、草・虫を持つクルマユには、効果は、大抜群である。

サトシ「いとはくで避ける」

しかしクルマユは、いとはくで避ける。

サトシ「クルマユ、エナジーボール」

そしてクルマユは、エナジーボールを発射しゼブライカに直撃する。

マサト「ゼブライカ！？」

そして煙が晴れるとゼブライカがぐったりしていた。

ドン・ジョージ「ゼブライカ、戦闘不能！クルマユの勝ち」

マサト「戻ってゼブライカ。サトシ、すごいよ。こんなに腕を上げたんだ」

サトシ「マサトも結構やるじゃないか」

マサト「でも僕の力は、こんなもんじゃないよ。次は、このポケモンだ。行け、リザードン」

なんとマサトが繰り出したのは、リザードンである。

ヤストシ「り、リザードンだと!？」

驚きを隠せないヤストシ。

マサト「このリザードンは、ナナシマを旅したときに野生のヒトカゲを捕まえて育てたのさ」

サトシ「なるほどその力見せてもらうか。クルマユもどれ。ハトーボー、君に決めた」

ハトーボー「ボー」

デント「ハトーボー!？」

ヤストシ「なんでミジュマルを出さないんだよ」

カスミ「なんか、サトシらしいね」

サトシ「行くぜ、マサト。ハトーボー、エアカッター」

マサト「リザードン、エアスラッシュ」

お互い飛行タイプの技を繰り出しわざと技がぶつかり合う。

サトシ「ハトーボー、電光石火」

マサト「リザードン、こっちも電光石火」

今度は、電光石火を繰り出しお互いダメージを負う。

サトシ「ハトーボー、かぜおこし」

ハトーボーは、かぜをおこしを繰り出すが・・・

マサト「リザードン、ほえる」

サトシ「なっ!」

カスミ「ほえる!？」

デント「あのリザードン、ほえるを使えるのか!？」

そう驚きながらもハトーボーは、ほえるで強制的にモンスターボールに戻される。しかし出てきたポケモンは……。

ミジュマル「ミジュマ」

なんとミジュマルであった。

マサト「しまった！」

マサトの計画では、ここでクルマユカッタージャといった草ポケモンを繰り出すつもりだったが出てきたのは、ミジュマルである。マサトは、大誤算を起こしてしまう。

ヤストシ「ほえるを使ったのは、いいが」

デント「ミジュマルが出てくるとは」

カスミ「マサトにしては、大誤算だろうね」

そうつぶやくヤストシ、デント、カスミ。

マサト「でも、相性だけがポケモンバトルじゃない。リザードン、火炎放射」

サトシ「ミジュマル、水鉄砲で迎え撃て」

ミジュマルは、水鉄砲を繰り出すがリザードンの火炎放射のほうに威力が上でそのままミジュマルに直撃する。

サトシ「大丈夫かミジュマル？」

ミジュマル「ミジュ」

しかしいくら威力がすごかったとはいえ水タイプのミジュマルのダメージは、あまりながかなりまともに食らってしまっている。

サトシ「ミジュマル、アクアジェット」

ミジュマルは、アクアジェットを繰り出す。

マサト「リザードン、きりさくで迎え撃て」

そしてリザードンは、きりさくをミジュマルに攻撃し当たる。食らったミジュマルは、ぐったりしてしまう。

ドン・ジョージ「ミジュマル、戦闘不能！リザードンの勝ち」

デント「これでお互い残りのポケモンは、4体か」

カスミ「これは、わからなくなってきたわ」

サトシとマサトのフルバトル対決。

相性の悪いミニジューマルでさえ退けられたマサトのリガードン。
はたしてサトシは、このマサトのリガードンをどう攻略するの？

第27話 フルバトル対決！（後書き）

カスミ「すいぶん激しいバトルじゃないね」

デント「この勝負。どっちが勝つんだろう？」

マサト「でも言っとくけど僕もサトシも切り札出してないよ」

ヤストシ「え！あのリザードン、切り札じゃないの!？」

当たり前じゃないか。まさか序盤で切り札出すなんてありえないよ。

ヤストシ「それもそうか」

カスミ「それよりサトカス要素は、どうなるの？」

それは、バトルが終わるまで待ってくれ。

カスミ「はい」

それじゃあ、今日の締めは、俺がやるぜ。

マサト・カスミ・デント・ヤストシ「どうぞお勝手に」 棒読み

それじゃあ、みんなもポケモンゲットでドドンガドン

ズーン

ヤストシ「なに、アイリスの決め台詞を言ってるのこの作者!」

第28話 両者の意地

ミジユマルの戦闘不能によりお互い残り4体ずつとなる。

そしてサトシが3体目に出したポケモンは・・・

サトシ「ピカチュウ、言ってくれるか？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

サトシは、切り札のピカチュウを投入する。

ヤストシ「3体目でピカチュウを投入か」

デント「あのリザードン。かなり手強いてこわからな」

カスミ「でも、マサトは、ピカチュウの手の内は、知っているから

サトシは、かなり苦戦すると思うよ」

カスミの勘は、見事に的中してしまふ。

サトシ「ピカチュウ、10万ボルト」

ピカチュウは、10万ボルトを発射する。

マサト「リザードン、電光石火で避けるんだ」

そう言うとりザードンは、すばやく電光石火で10万ボルトを回避

する。

サトシ「ピカチュウ、電光石火」

ピカチュウは、電光石火を仕掛ける。

マサト「リザードンも電光石火だ」

サトシ「そこからアイアンテール」

マサトがりザードンに電光石火を仕掛けと同時にピカチュウは、ジ

ヤンプしアイアンテールを繰り出す。しかしマサトは、顔色1つも

変えなかった。

マサト「今だリザードン、そこから火炎放射！」

サトシ「なっ!？」

マサトの指示に驚くサトシ。

リザードンは、火炎放射を発射する。至近距離だったのでピカチュ

ウは、回避できず火炎放射をまともに食らう。

サトシ「ピカチュウ、大丈夫か？」

ピカチュウ「ピカ！」

サトシ「よし、ピカチュウ、電光石火」

マサト「リザードン、エアスラッシュ」

リザードンは、エアスラッシュを繰り返す。

サトシ「ピカチュウ、ジャンプして避ける」

そう言うとピカチュウは、ジャンプして避ける。

マサト「また引かなかったね。リザードン、きりさく」

リザードンは、きりさくを繰り返す。

サトシ「引かなかったのは、どつちかなマサト？」

マサト「えっ!？」

その言葉に驚くマサト。

サトシ「ピカチュウ、エレキボール」

ピカチュウは、エレキボールをリザードンに向けて発射。リザード

ンは、避けれずそのままにもエレキボールを食らう。

カスミ「ピカチュウ、いつの間にエレキボールなんて覚えたの!？」

ヤストシ「なるほど、これは、サトシのほう^{うわて}が上手だったな」

デント「サトシらしい作戦だな」

マサト「さすがピカチュウ。僕が知らない間にエレキボールなんて

覚えるなんて」

サトシ「俺だって成長しているんだ。ピカチュウ、もう一回エレキ

ボール」

マサト「負けるなりザードン。めざめるパワー」

リザードンは、めざめるパワー、ピカチュウは、エレキボールを繰

り出し互いの技が当たり回りは、煙に包まれる。

サトシ「ピカチュウ！」

マサト「リザードン！」

そして煙が晴れるとピカチュウとリザードンは、倒れていた。

ドン・ジョージ「ピカチュウ、リザードン、両者戦闘不能！」

これでお互い3体ずつとなるサトシとマサト。

カスミ「これで残り3体か」
デント「さて、次は、なにを出して来るんだらうサトシは？」
サトシ「ハトーボー、君に決めた」
マサト「行け、ガブリアス」
ヤストシ「カブリアスか。これは、わからない試合展開になってきたな」
そうつぶやくヤストシ。
サトシ「ハトーボー、エアカッター」
マサト「ガブリアス、りゆうのいかり」
2匹が出した技は、お互いにダメージを受ける。
サトシ「ハトーボー、かぜおこし」
マサト「カブリアス、ドラゴンクロー」
ハトーボーは、かぜおこしを仕掛けようとしたがカブリアスのドラゴンクローのほうが高く早くハトーボーに命中し倒れる。
ドン・ジョージ「ハトーボー、戦闘不能！カブリアスの勝ち」
サトシ「ハトーボー、ゆっくり休め。クルマユ、君に決めた」
サトシは、再びクルマユを繰り出す。
カスミ「いやーーーーー！！！！虫、無視！！！！」
ヤストシ「騒ぐな騒ぐな。カスミ！」
虫を見て騒ぐカスミ。ヤストシは、落ち着かせようとする。
サトシ「クルマユ、いとをはく」
マサト「カブリアス、避けるんだ」
サトシ「エナジーボール」
いとをはくを避けたガブリアスだがクルマユのエナジーボールを食らう。
マサト「カブリアス、かわらわり」
カブリアスがかわらわりを仕掛ける。
サトシ「クルマユ、いとをはく」
クルマユは、いとをはくを仕掛け糸は、ガブリアスに絡まる。
マサト「ガブリアス！？」

サトシ「クルマユ、エナジボール連発だ」

クルマユは、エナジホールを連発しカブリアスは、戦闘不能になる。
ドン・ジョージ「ガブリアス、戦闘不能！クルマユの勝ち」

マサト「カブリアス、お疲れ様。行け、ラグラージ」

マサトの5体目は、ラグラージである。

マサト「ラグラージ、水鉄砲」

サトシ「クルマユ、いとをはくで避ける」

クルマユは、いとをはくで避ける。

マサト「ラグラージ、ばくれつパンチ」

サトシ「えっ!?!」

ラグラージは、ばくれつパンチをクルマユに攻撃しクルマユは、混乱する。

サトシ「クルマユ!?!」

マサト「今だ。ラグラージ、アームハンマー」

ラグラージは、アームハンマーを止めに刺しクルマユは、ぐったり倒れる。

ドン・ジョージ「クルマユ、戦闘不能！ラグラージの勝ち」

サトシ「もどれ、クルマユ」

デント「これでサトシは、後がないな」

カスミ「サトシ・・・」

サトシ「次は、こいつだ。ツタージャ、君に決めた」

サトシが最後に出したのは、ツタージャである。

マサト「（ツタージャか。相性は、悪いけどでも、僕は、最後まで全力で行く!）ラグラージ、ここえるかせ」

ラグラージは、ここえるかせを打ち出すがツタージャは、軽かる避ける。

サトシ「ツタージャ、メロメロだ」

マサト「なっ!?!」

カスミ「メロメロ!?!」

二人は、驚く。ラグラージは、メロメロを食らう。

こうなればサトシのおもうつばである。

サトシ「ツタージャ、つるのむち」

ツタージャは、ラグラージにつるのむちを連発する。

ラグラージは、メロメロ状態なのでどうしよもなく戦闘不能となる。

ドン・ジョージ「ラグラージ、戦闘不能！ツタージャの勝ち」

これでバトルは、お互い1体ずつとなる。

はたして最後に勝つのは、どっちか？

第28話 両者の意地（後書き）

カスミ「これでお互い1体ずつね」

ヤストシ「作者らしいな。ここまでバトルを長引きさせるなんていいだろう別に。」

カスミ「今回は、サトシ対マサトのバトルの最終章ね」

ヤストシ「どっちが勝つか楽しみだな」

それじゃ皆さんか。感想、ご意見。

カスミ・ヤストシ「よろしくお願いします」

第29話 ツタージャ対サーナイト

サトシのツタージャがラクラージをメロメロで見事倒しついにお互い1体ずつとなる。

デント「これでマサトも残り1体」

カスミ「マサトの最後のポケモンは、なんだろう？」

マサト「僕の最後のポケモンは、この子だ。行け、サーナイト」

マサトが最後に出したのは、サーナイトであった。

サトシ「ツタージャ、メロメロ」

ツタージャは、メロメロを繰り返すがサーナイトは、メロメロにならなかった。

マサト「残念でした。このサーナイトは、なのでメロメロなんて効かないよ」

サトシ「なに!？」

マサト「サーナイト、シャドボール」

サトシ「ツタージャ、リーフブレード」

ツタージャのリーフブレードとサーナイトのシャドボールがぶつかり爆発する。

サトシ「ツタージャ、つるのむち」

マサト「サーナイト、テレポート」

ツタージャは、つるのむちを繰り返すがサーナイトは、テレポートで回避する。

そしてサーナイトは、ツタージャの後ろに現れる。

マサト「サーナイト、サイコネシスでツタージャを持ち上げる」

サーナイトは、サイコネシスでツタージャを持ち上げる。

マサト「そのままたたきつける」

サーナイトは、そのままツタージャを地面にたたきつける。

サトシ「ツタージャ!？」

マサト「サーナイト、でんじほう」

サーナイトは、ツタージャに向けてでんじほうを繰り出す。

サトシ「ツタージャ、つるのむちで避ける」

ツタージャは、つるのむちをつまき使い回避する。

マサト「やるねサトシ」

サトシ「マサトこそ」

マサト「なら、サーナイト、かげぶんしん」

サーナイトは、かげぶんしんを繰り出す。

サトシ「ツタージャ、リーフストームでかげぶんしんを削れ」

ツタージャは、リーフストームを繰り出しサーナイトのかげぶんしんを減らしていく。

マサト「サーナイト、マジカルリーフ」

サーナイトは、マジカルリーフを繰り出しツタージャに命中する。

サトシ「ツタージャ!？」

マサト「サーナイト、でんじほう」

サーナイトは、でんじほうを放ちツタージャに当たる。

ツタージャ「ツタージャ」

ドン・ジョージ「ツタージャ、戦闘不能!サーナイトの勝ち。よって、勝者マサト」

マサト「やったー!よくやったサーナイト」

嬉しさのあまり、サーナイトに抱きつくマサト。

そして、負けたツタージャを抱えるサトシ。

サトシ「ごめんな。ツタージャ」

サトシは、ツタージャに謝るがツタージャは、気にしていなかった。

デント「それにしてもそのサーナイト、よく育てているね。コクが

とても良くていいテイステイングだよ」

マサト「そんなことないよ。このサーナイトとは、ずっと待たせてトレーナーになった頃から一緒に旅をしているんだよ」

それを効くとサトシがあることを思い出す。

サトシ「そのサーナイトは、もしかして・・・」

サトシは、マサトのサーナイトに心当たりがあった。

マサト「そうさ。このサーナイトは、イザベ島で約束を交わしたラルトスさ」

そう答えるマサト。

デント「どういうことだ？」

カスミ「意味がさっぱりわからないけど・・・」

この件に関してまったく知らないカスミとデント。

ヤストシ「実は、昔ホウエン地方のトクサネシティとルネシティの間の海に浮かぶイザベ島に立ち寄った時に病気で倒れていたラルトスと出会ったんだ」

サトシ「それをマサトの献身的な看病の末、ラルトスは無事に回復させたんだ」

マサト「でも僕はまだ自分のポケモンを持ってなかったから、一緒に生活していたサーナイトとキルリアの元に返したんだ」

ヤストシ「その時マサトとラルトスが約束を交わしたんだ。」「ポケモントレーナーになったら迎えに行く」と・・・」

マサト「僕は、約束を守りラルトスを迎えにいったんだ。そして一緒に旅をし続けているんだ」

カスミ「いい話じゃない」

デント「コクのまるやかない話した」

そう絶唱するデントとカスミ。

ドン・ジョージ「さあ、ポケモンたちをポケモンセンターでゆっくり休めるんだ」

サトシ「確かポケモンセンターは、6号車にあるんだっけ？」

カスミ「そうだよ」

ヤストシ「それじゃ、ポケモンセンターに行きますか」

デント「ああ」

マサト「行こう行こう」

こうしてフルバトルは、マサトの勝利で納める。

そして5人は、5号車のポケモンセンターに向かった。

第29話 ツタージャ対サーナイト (後書き)

マサト、おめでとう。

マサト「いや、そんな〜」

てれるなてれるな。

カスミ「それよりサトカス要素は、どうなっているの?」

それは、次回のお話にサトカス要素たくさん仕込んでるから心配しないで。

カスミ「ならいいけど」

それじゃ今回も締めは、俺で行く。次回もポケモンゲットで大丈夫

夫

ズテーン

カスミ「今度は、ヒカリの台詞使ってるし!」

マサト「(しかも気持ち悪い〜)」

第30話 二人っきりの部屋（前書き）

久しぶりのサトカスのCPです。

第30話 二人っきりの部屋

サトシ達がポケモンセンターでポケモンたちをゆっくり休ませた頃には、すでに9時前になっていた。

ヤストシ「眠い〜」

デント「もうこんな時間か。そろそろ部屋に戻って寝るか」

マサト「そうだね」

ヤストシ「お休み、マサト、カスミ、サトシ〜」

そう言つてヤストシとデントは、部屋に入りマサトも自分の部屋に戻り眠りにつく。

一方のサトシとカスミも就寝したが・・・

サトシ「寝にくい・・・」

サトシは、まだ起きていた。

と言うより寝れない状況であつた。

なぜなら・・・

カスミ「スウウウ・・・」

カスミがサトシの横で寝ていたからだ。

実は、この部屋のベットは、マサトやヤストシとデントの部屋にある二段ベットでなくダブルベットであつた。実は、この列車、1両の車両に二段ベットとダブルベットを半分ずつ分けてあるのだ。

サトシ「(ヤストシ〜!!)」

ものすごく後悔するサトシだがもう後の祭りである。カスミが静かな寝息を立ててながら自分の腕をサトシの腕と絡ませながら、幸せそうに寝ていてそのせいなのか？サトシは、緊張と興奮で眠れないのだ。前回はサトシとカスミは、寝たこともあつたが今回は、前回以上である。超が数十個、いいや数百個つくぐらいの鈍感なサトシでさえ、年頃の女の子と寝ることには多少意識している。

サトシ「(それにしても、カスミの寝顔、結構可愛いなあ・・・)」

つて、何考えてんだ俺は!?)」

色恋沙汰に全く興味のないサトシがカスミの寝顔に見惚れている。
サトシ「とにかく寝よう」

心の中でそう言い聞かせるサトシであったが・・・
カスミ「んっ・・・うーん・・・」
カスミが寝返りを打ち、彼女の腕が、足がサトシにのしかかってきた。
た。

ちょうどサトシに抱きつく格好だ。

サトシ「ちよ、ちよっ・・・腕が、足が、体があああ！」
どうしても意識してしまう部分に接触しサトシは、さらに寝れなくなる。

おまけにサトシの耳元からカスミの寝息がかかる。こうなるとサトシの理性は、崩壊寸前である。

サトシ「このままじゃあ、18禁に・・・」
その言葉をなぜか知っているサトシ。

サトシ「とりあえずと、トイレ行こうと・・・」
理性崩壊寸前だったサトシは、カスミの腕と足を何とか取り除き部屋に備わっているトイレに駆け込んだ。

そこで自分の理性を何とか立て直そうとするが時間がかかりトイレからで出来たのは、30分後であった。
そして再びベットの中へ入る。

サトシ「あ、暖かい・・・」
カスミが寝ているのでベットの中は、とても暖かった。

サトシ「可愛い・・・」
カスミの寝顔に再び見惚れるサトシ。サトシにも、そのような気持ちが生えてきたのだろうか・・・
サトシ「少しなら、ばれないかな。」

サトシはそう言うと、カスミの顔に近づきそして頬に触れるだけのキスをした。そして、赤くなった顔を隠しながら眠りについた。

翌朝、サトシとカスミはほぼ同時に起きた。

カスミ「ん〜、あつ、サトシおはよう／＼／」
サトシ「あ、うん。おはよう、カスミ／＼／」

カスミとサトシはお互いの顔を見て朝の挨拶をするが、恥ずかしさのあまり目をそらしてしまった。

サトシ「食堂車へ行くこうか・・・」

カスミ「そうね。アタシ、着替えるから先行つてて・・・」

サトシ「分かった」

そう行つてサトシは、部屋を後にした。

はたしてこれから先どうなることやら・・・

サトシが食堂車へ向かった頃、ピカチュウ号の8号車のある部屋に怪しい二人組みのメンバーがいた。

???「オダワラ、シンラ駅には、いつ着くんのだ？」

オダワラ「シンラ駅には、夕方に到着する予定だ。そこでミジユマル号と合流し連結する。ミジユマル号が到着するのは、ピカチュウ号到着後10分後だ」

???「でもそれじゃあ時間が足りなくない？」

オダワラ「心配するな。考えがある」

???「さすが兄貴」

オダワラ「これもボスのためだ。俺らがやらないとな」

???「そうだな。われらロケット団は、最近ピカチュウを連れた黒髪の少年に邪魔されている。そのためにも10年前にわがロケット団が隠した例の物を無事にボスのところへお届けせねば」

オダワラ「そうだな。グヒヒヒヒヒ」

とても怪しいメンバー。一体こいつらは、何者なのか？

とりあえず今回はこの辺で・・・

第30話 二人っきりの部屋（後書き）

いかがでしたが、こんなオチですが・・・。
次回は、アニメキャラ登場します。

第31話 シンラ駅到着で・・・(前書き)

久しぶりの全員集合です。

そして予告どおりアニメキャラが登場します。

第31話 シンラ駅到着で・・・

食事を取った後サトシ達は、のんびりすごしていた。

そして夕方になった頃、ピカチュウ号のとある部屋・・・

???「オダワラ、もうすぐシンラだぜ」

オダワラ「ああ。準備は、整った」

???「しかし、うまくいくのか？」

オダワラ「心配するな。あそこを破壊しちやえはしばらくは、列車は、動かんよ」

???「でも、いつまでも列車をシンラに止めておくわけには、いかないじゃん」

オダワラ「それも計算のうちさ。このシンラ駅には・・・」

オダワラは、相手の耳にヒソヒソとつぶやく。

???「なるほど。それなら、心配ないな」

相方が納得した時だった。

ピンポンパンポン

車掌「まもなくシンラ、シンラです。お出口は、左側です。シンラに到着しますと寝台特急ミジユマル号と連結するため10分間停車いたします。シンラ、シンラに停車いたします」

オダワラ「さあ、いくぞ」

???「おっ！」

そういつて二人は、部屋を後にした。

そして列車は、シンラ駅に停車する。

車掌「シンラ、停車。定着」

そう車掌が確認しドアを開く。

ピカチュウピカピカ　　ドアの開く音

サトシ「ひさしぶりの外だぜ」

マサト「ずっと、部屋の中にいたからね」

カスミ「10分間は、外で美味しい空気を吸えるのね」

デント「そうだな」

そうデントが言った時だった。

「???」「サトシくん!」

誰かがサトシの名を呼んだので、サトシ、カスミ、マサト、デント、ヤストシは、声のする方へ向くとそこには・・・

サトシ「べ、ベル!？」

サトシがイツシュ地方を旅してた時に出会ったトレーナー・ベルが手を振って立っていた。彼女と面識のあるデントとヤストシ、その他の面々もベルの突然の登場にきよとんとしていた。

ベル「やっぱりサトシ君だ。久しぶり。」

ベルがサトシ達の方へ近づいてきた。

サトシ「ひさし・・・って、えええ!？」

走っていたベルは躓き、よろよろしながらサトシ達に向かってきた。

ベル「って、ちよつと。あわわわわ!？」

サトシ「どわ!？」

そして、ベルはサトシにぶつかった。サトシ以外全員はあちゃ〜と言わんばかりに顔を覆った。

ベル「いたたた。あつ、デントとヤストシも久しぶり。他の人は知らないから、私から自己紹介するね」

ベルはデントとヤストシに挨拶をした後、カスミとマサトに勝手に自己紹介を始めた。カスミとマサトはベルに啞然としていたものの、ベルにこちらこそと言った。

デント「久しぶり、ベル。自己紹介のところ悪いんだけど、そろそろどいてくれないとサトシがかわいそうだよ」

ヤストシ「ああ、サトシ苦しそうだぞ。」

ベルとぶつかったサトシの様子は、ベルの下敷きになっているわけだが、サトシの顔はベルの胸によって押しつぶされている状態である。この光景に、カスミは顔を赤くしていた。

ベル「サ、サトシ君!？ 大丈夫!？」

サトシ「大丈夫だから！これ以上はやめて・・・」

本人はそう言っているが、大丈夫なわけがない。鈍感サトシとて男である。顔がいろんな意味で真っ赤だ。そんなサトシを乱暴に揺さぶるベル。なんとという自分勝手である。

カスミ「随分と変わった子ね・・・」

ヤストシ「許してあげて。根はいい子だから」

ベルの人間性に呆然とながら、カスミは言った。

そう言う前にサトシを助けてあげてください。 by 作者

サトシ「今綺麗な川を渡りかけた・・・」

ヤストシ「その川は渡るな」

ベルから解放されたサトシはそう呟いた。

デント「ところでベル。どうしてホクシンに？」

ベル「もちろんホクシンリーグに挑戦よ。でも、まさか、サトシ君

に会えるなんてうれしいわ」

サトシ「そつか、俺もベルに会えて嬉しいぜ」

サトシが思わず言った一言に、ベルはもじもじしながら顔を赤らめた。

カスミ「・・・ねえ、ヤストシ？まさかあの子もサトシのことを？」

ヤストシ「ああ。イツシユの時もアプローチが凄かったからな」

カスミ「（ライバルがまた増えた・・・）」

ヤストシの一言でそう心の中でつぶやくカスミ。

その時だった。

ピンポンパンポン

アナウンス「まもなく1番線に寝台特急ミジユマル号が到着します。

危ないですから黄色線の内側までお下がりにください」

そしてミジユマル号がやってきて列車が止まる。

そして人が多くでできる。

ハルカ「あ！サトシ！」

ヒカリ「ほんとだ！」

アイリス「サトシ」

ヤストシ「げっ！ハルカ、ヒカリ、アイリス!?」

三人のヒロインの姿を見て驚くヤストシ。

ハルカ「見つけたわヤストシ！」

ヒカリ「よくも置いてきぼりにしたわね」

アイリス「絶対に許さないから！」

三人の登場にヤストシは、登場にビクツとする。三人には、ドス黒いオーラを身に纏っている。それを感じたサトシ達は、いつの間にか遠くに避難している。そこには、ヒカリ、ハルカ、アイリスと同行していたケンジ、タケシ、アヤノがいる。

カスミ「あんな3人見たの初めてだわ」

タケシ「俺も初めてだ...。」

カスミとタケシが今のハルカ、ヒカリ、アイリスについての感想を漏らす。

ヤストシ「(おゝい、誰か助けて〜)」

ヤストシは、サトシ達に助けを求めるが...

7人「(正直、恐くて止められない!!!)」

同じことを思ったのだ。

そして...

ヤストシ「アハハハハ、逃げる！」

そしてヤストシは、逃亡を始めた。

ハルカ・ヒカリ・アイリス「待ちなさい!!!」

ハルカ、ヒカリ、アイリスはものすごい剣幕でヤストシを追いかけた。その様子にサトシ達は呆然としていた。その後、タケシとデントの仲裁でなんとかハルカ、ヒカリ、アイリスを落ち着かせるまでかなりの時間を費やした時には、ピカチュウ号とミジユマル号が連結し終えた。

そのピカチュウ号とミジユマル号が連結が連結する5分前こと。

????「兄貴、まだですか？」

オダワラ「あと少しだ！」

「????」「早くしないと駅員が来ちゃいますよ」
オダワラ「待ってる。ここをこうしてこうやれば・・・よし!これでOKだ」

「????」「これで心おぎなく探せますね」

オダワラ「さあ、逃げるぞ」

「????」「アイアイサー」

二人は、不気味に笑ってその場を後にした。

駅員「さてと、さんばし 棧橋を降ろさない」と

そう駅員が棧橋を降ろすスイッチがある部屋へ行こうとしたその時だった。

トガーーーーー

なんと残橋を降ろすための部屋から爆発した。

デント「なんだ!今の爆発!」

マサト「あつちからだ」

ハルカ「行ってみよう」

そしてサトシ達は、爆発したほうへ向かう。

駅員「ああ。どうしよう」

サトシ「どうしたんですか?」

サトシが駅員にたずねる。

駅員「実は、棧橋を降ろすための部屋が爆発したんだ」

ヒカリ「棧橋を降ろすための部屋?」

駅員「ああ。これは、向こうにある棧橋を降ろすための部屋なんだ。

ピカリー方面、アタム方面へ向かう列車のためにこの棧橋を使うん

だ。でも、部屋が吹き飛んで降ろすべがなく直すのに1、2週間

かかってしまうわ」

カスミ「そんな!」

ベル「どうにか棧橋を降ろせないの?」

駅員「1つだけある」

ケンジ「1つだけ?」

駅員「ああ。向こう側にある古い駅舎があるだろう？その地下に昔使っていた古い栈橋を降ろす機械があるんだ」

ハルカ「なら、それを使えばいいじゃないですか？」

駅員「そう言うがこの駅舎ずいぶん使われなくて最近じゃあ、野性のポケモンが住み着いちゃっている状態なんだ。それに地下にいくエレベーターは、鍵式で鍵があるのは、駅舎のずっと奥に行った階段を下りた場所の一番奥の部屋にあるんだ。そこも野生のポケモンが住み着いてとくに凶暴なポケモンがいるんだ。だから僕たちじゃあ、近づけないんだ」

そう言う駅員。

サトシ「わかりました。それなら俺達が栈橋の機械を作動させます」

駅員「本当ですか!？」

カスミ「ええ、もちろんです」

デント「僕にお任せを」

ハルカ「私もやるわ」

ヒカリ「アタシも」

タケシ「自分も」

ケンジ「僕も」

アイリス「私もよ」

ベル「同じく」

マサト「僕も」

ヤストシ「俺だって」

駅員「皆さん〜。ありがとうございます〜」

サトシ「それじゃ、みんな、栈橋を下ろす機械作動へ行くぞ」

10人「おー!」

こうしてサトシ達は、栈橋を降ろす部屋へ向かう。

はたしてサトシ達は、無事に栈橋を降ろすことができるのか？

第31話 シンラ駅到着で・・・（後書き）

ヒカリ「久しぶりの登場ね」

ハルカ「まったくかも」

アイリス「私もよ、ハルカ」

カスミ「それより、この先、サトカス要素あるんでしょうね」

もちろんさ。ほのぼのからすれすれなものまで構想を練ってるから安心しろ。

ハルカ「サトカスだけじゃなくて他のCPもあるんでしょうね」

それは、ちよつとな。サトカス派の俺だから出来に関しては保障できないけどサトヒカに関しては、天の河さんの作品を参考に書くつもり。

ヒカリ「ありがとう。作者」

おいおい、言っておくけど俺は、サトカス派だ。サトカスの要素が最優先だからな。

ヒカリ「は〜い」

アイリス「作者、もう4月だけど進学先の準備できてるの？」

もちろんだ。俺の住む静岡県工豆の国市は、震災の被害もないから準備万端さ。

ハルカ「張り切っている作者かも」

それじゃあ、今回も締めは、俺で行くぜ。次回もポケモンゲットでドドンガドーン！

アイリス「ちよつと！アタシのセリフ取らないでよ！」

第32話 野性ポケモンに苦戦？

栈橋さんばしを作動させる機械が何者かに破壊されて駅舎の地下にある古い
栈橋を作動させる機械を作動させるためにサトシ達は、駅舎へ入っ
て行く。

サトシ「なんかすごい駅舎だ・・・」

カスミ「あっちこっち古びているわ」

アイリス「その前にエレベーターを作動させるための鍵を取りに行
かないと」

そう地下へ行くためのエレベーターは、鍵式で鍵は、ずいぶんと奥
の部屋にある。

ハルカ「なんか、何かが出そうよ」

タケシ「確かに・・・」

ヤストシ「ゴーストや虫が出そうって雰囲気だな」

カスミ「嫌なこと言わないで・・・」

ヒカリ「相変わらずの虫嫌いねカスミは」

ケンジ「僕も、そろそろ治ったらいいのに」

デント「僕も同じく」

カスミ「何よ。二人そろって!」

マサト「まあまあ、カスミ。落ち着いて」

ハルカ「それより、マサト。どうしてサトシと一緒に?」

マサト「それは・・・」

こんな雰囲気です歩いてきたときだった。

ベル「ワアアアアアアアア、ワア!!!」

ベルが足がもつれて壁に激突する。

すると上から黄色いクモのようなポケモンが落ちてきた。

ヤストシ「で、デンチュラ!?」

カスミ「キャーキャーキャーキャーア!? 虫は、無視!!!!!!」

虫系が苦手のカスミは、思わず悲鳴声を上げる。

するとその悲鳴声が聞こえたのか(？)デンチュラの他にカイロス、アリアドス、ドクケイル、ツチニン、ピークイン、ベントラーと虫系が集まってくる。

サトシ「カイロス、アリアドス、ドクケイル、ツチニン、ピークイン、ベントラー!?」

ハルカ「どれも虫ポケモンかも!」

カスミ「なんで、集まってくるのが虫ばかりなのよ(泣)」

タケシ「落ち着けよ、カスミ」

デント「とにかく、このポケモンたちを退けないと」

ヤストシ「そうだな。よし、行け、エルフーン、アゲハント」

サトシ「ポカブ、ハトーボー、君に決めた」

ハルカ「バシャーモ」

ヒカリ「マグマラシ」

アイリス「エモンガ」

ベル「チャオブー」

ヤストシ、サトシ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、ベルは、虫と相性のいいポケモンを出す。

ヤストシ「エルフーン、ぼうふう。アゲハントは、かぜおこし」

サトシ「ポカブは、ニトロチャージ、ハトーボーは、エアカッター」

ハルカ「バシャーモ、ほのおのパンチ」

ヒカリ「マグマラシ、火炎放射」

ベル「チャオブー、ニトロチャージ」

4人は、相性のいい技を繰り出しデンチュラ達虫ポケモンを攻撃する中・・・

アイリス「エモンガ、アタシ達も行くわよ。めざめるパワー」

エモンガは、アイリスの指示通りめざめるパワーを繰り出す。

アイリス「エモンガ、続けてメロメロ」

エモンガは、メロメロを繰り返すがデンチュラは、避けてカイロスに直撃しメロメロとなる。そしてデンチュラは、エレキボールをエモンガに放つがエモンガは、軽々避けるが・・・。

エモンガ「エモ!?!」

アリアドスは、エモンガにいとをはくでエモンガの動きを封じ込める。

アイリス「エモンガ!?!」

そしてデンチュラは、エレキボールを繰り出す。

しかしエモンガは、アイリスの指示なく技を繰り出しデンチュラに当たる。

するとエモンガは、そこからいなくなり代わりにカスミのコダックが現れる。

カスミ「コダック!?!」

ヤストシ「まさか、ボルトチェンジしたのか!?!」

そう、エモンガは、ボルトチェンジを繰り出したのだ。

実は、このエモンガ、バトルを面倒くさがる性格なのか、アイリスの指示も無いのに勝手に「ボルトチェンジ」を使って他のポケモンと入れ替わることがものすごくある。ちなみにこのボルトチェンジは通常のものとは異なり、アイリスのポケモンだけではなく、サトシやデント達のポケモンとも交代してしまい、更に自分はボールに戻らないと言うちよつと変わった技である。

そしてデンチュラのエレキボールをコダックに発射し見事命中する。

コダックは、水タイプなので効果は、抜群である。

タケシ「一発KOか・・・」

そう思われたその時だった。

コダックは、立ち上がりサイコネシスを発動させる。

ヤストシ「締めた!頭痛がひどくなってエスパー、技が発動したんだ。これで勝機が見えた」

ヤストシは、そう思った。

そしてサイコネシスでデンチュラを捕らえそして飛ばしてアリアドス、カイロス、ペンドラーまで当たり戦闘不能となる。

サトシ「ハトーボー、エアカッター」

ヤストシ「エルフーン、ぼうふう」

飛行タイプの技を繰り出しドクケイル、ツチニン、ビークインは、
戦闘不能となる。

デント「今のうちに逃げるよ」

そうデントが言ってそばを逃げ去る。

カスミ「ムシコワイムシコワイサトシタスケテ・・・」

カタコトにしゃべるカスミは、逃げるさいにサトシの腕をギュウと
握り締めて走る。

周り（特にヒロイン）は、そんなことを見る暇もなく逃げて行くの
だった。

第32話 野性ポケモンに苦戦？（後書き）

カスミ「サクシャ、ナンデ、ムシヲタイリヨウニダシタノ？」

ハルカ「カスミく、しっかりして！」

そうだぞカスミ。

アイリス「あんたね〜（怒）」

ヒカリ「やめなさい、アイリス。この作者になにを言っても無駄だよ。人の話をろくに聞かないから」

ろくに話を聞かないないからは、余計だ（怒）

ハルカ「それより、なんで虫ポケモンなの？」

いい質問ですね〜。

ヒカリ「池 さんか！」

アイリス「ツツコまないツツコまない」

それは、エモンガのポルトチェンジの話を見てひらめいて作ったの。

ハルカ「それ、全然虫ポケモンと関係ないかも」

ヒカリ「カスミが、かわいそう〜」

そう言うなよ二人とも。

アイリス「ダメだこりゃ」

それでは最後になりましたが、最後の締めは俺が担当でいきます。

次回もポケモンゲットでグッドティスト！

ハルカ・ヒカリ・アイリス「それ、デントのセリフ（かも）・・・」

第33話 災難？

虫ポケモンから何とか逃げてきたサトシ達は、息をハアハアしていました。

サトシ「つ、疲れた〜」

カスミ「当分は・・・虫は、見たく・・・ない」

息切れしながらそう言うカスミ。

タケシ「それより、ここは、どこなんだ？」

ヤストシ「確か、ズーっつと真っ直ぐ逃げてきたから・・・」

ベル「あれ？この扉なんだろう？」

そう言っつてベルが扉を開けるとそこは、外であった。

デント「この扉、外に出れるんだ」

ケンジ「そういえばあの駅員さん、ずっと真っ直ぐ行くと階段があるって言っていたな」

アイリス「とりあえず、先へ進みましょう」

ヒカリ「賛成！」

ハルカ「私も！」

と言うことで先へ進むことにしたサトシ達。

マサト「待ってよ〜」

サトシ「なんか道幅が狭いな〜」

タケシ「しかも道が所々崩れかけてるしな」

ヤストシ「当たり前だろ。何年も使われてないんだから」

ヤストシの言うとおり、この駅舎は、何年も使われていないのであ

っちこっち傷んでいたり崩れかけているのだ。

デント「とりあえず気つけて歩こうか」

アイリス「そうだね」

サトシ達は、注意しながら歩いてたその時！

「ワシ！」

カスミ・ヒカリ「きゃ！」

突然サトシ達の横を謎の飛行ポケモンが飛んできてそれに驚いたカスミ、ヒカリが体勢を崩し道の下へ落ちる。

サトシ「カスミ！ヒカリ！」

サトシは、無意識のうちにカスミとヒカリの腕をつかむ。

カスミ・ヒカリ「サトシ！」

カスミとヒカリは、好意を抱いてるサトシの手を握られて思わず顔を赤く染める。

サトシ「手を離すんじゃないぞ」

そう言つてカスミとヒカリを引つ張りあげようとした時。

「ワシ」

サトシ「うわ！！」

またしても謎の飛行ポケモンがサトシの目の前を飛びサトシは、思わず落ちてしまつがかるうじて足をかけてハルカ、ベル、アイリスが足を持つ。

ハルカ「なんなのあのポケモンは？」

マサト「みんな、あそこを見て！」

そう言つてマサトの指の方角を見るとそこには、ワシボンがいた。

デント「あれは、ワシボンじゃないか！？」

ケンジ「ワシボン？」

デントのポケモンの名に首をかけじけるケンジ。

ワシボンは、元タイツシユのポケモンのためカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウには、いないポケモンだから仕方がないのだ。

ヤストシ「仕方がない応戦だ！」

デント「イシズマイ・・・」

デントがイシズマイを出そうとした瞬間だった。

ワシボンがエアスラッシュで攻撃しその反動でなぜか大きな岩が落ちてきてサトシとヒロイン+ベルの間に落ち道を塞ぐ。

ケンジ「しまった！！」

マサト「サトシ！カスミ！お姉ちゃん！ヒカリ！アイリス！ベル！
そう大きい声で叫ぶマサト。

ハルカ「マサト！」

するとワシボンは、狙いをサトシとヒロイン＋ベルに向けエアスラ
ッシユを繰り出す。

サトシ「うわー！ー！ー！？」

ヒロイン＋ベル「キャー！ー！ー！ー！？」

エアスラッシユは、サトシ達をかすって当たる。

カスミ・ヒカリ「助けて！」

この状況に混乱し出すカスミとヒカリ。

ヒカリ「サトシ、もういいよ。手を離して」

カスミ「サトシ！ヒカリの言うとおりよ。この手を離して！このま
まだとサトシも一緒に・・・」

ヒカリとカスミは、このままでは、サトシもまきぞいになって落ち
ることを嫌がり手を離すようと言うが・・・

サトシ「俺は、俺は、仲間を見捨ててまでも俺は、助かるつもりは
ない！！！」

カスミ・ヒカリ「（サトシ！！）」

その言葉に思わず赤くなるカスミとヒカリ。

ハルカ・アイリス・ベル「（なんて、かっこいいこと言うのサトシ
！！！！）」

ハルカとアイリス、ベルは、サトシのかっこいい発言にカスミとヒ
カリ同様思わず赤く染める。

するとワシボンは、再びサトシとヒロイン＋ベルに攻撃を仕掛ける。
サトシ「ピカチュウ！10万ボルト」

待機していたピカチュウがワシボンに向けて10万ボルトを発射し
ワシボンに命中する。

ヤストシ「お！ラッキー。ワシボンゲットだ」

岩の上を何とかよじ登ったヤストシが空のモンスターボールをワシ
ボンに当てる。

ボールは、1回、2回、3回と揺れ動きそしてカチツと言ってボールの揺れが収まる。

ヤストシ「ワシボンゲットだぜ！」

ヒカチユウ「ピカチユウ」

ピカチユウも思わず合いの手を入れる。

サトシ「それは、俺の台詞だ!!!」

ハルカ「それより助けてよ」。ヤストシ

ベル「もう限界」

アイリス「なんですけど」

ヤストシ「わかった、いくぞ。デント、タケシ、ケンジ、マサト」

よじ登りきったケンジたちは、急いでサトシとヒカリ、カスミを引っ張りあげる。

そしてようやく救出に成功する。

カスミ「ごめん。サトシ・・・」

ヒカリ「手を離せなんて言って・・・」

サトシ「いいさ、全然気にしていないぜ。それより二度と言っなよ」

カスミ・ヒカリ「サトシ・・・」

その発言にカスミとヒカリは、顔をほんのり赤く染まる。

サトシ「・・・なあ、あれ大丈夫なのか。カスミとヒカリ、顔赤いぞ」

タケシ「ああ、顔は赤くなってるが、あれは病気じゃないぞ」

サトシ「じゃあ、どうしてみんな顔赤くなってるんだ」

デント「・・・今は、気にしないほうがいいよ」

サトシ「そうか、でも気になる・・・」

ヤストシ「さあさあ、先に進もうぜ」

超が何個もつくほどの鈍感で仲間思いなサトシにヤストシ達男子組は、苦笑を浮かべながら、先へどんどん進んだ。

第33話 災難？（後書き）

次回から、争奪戦要素を取り入れて面白くしていきます。

第34話 謎の女登場（前書き）

今回は、オリジナルキャラが登場します。

第34話 謎の女登場

いろいろと災難にあつてようやくエレベーターの鍵が置いてある部屋に通じる階まで来たサトシ達。

そしてその階にゆっくりと入っていた。

ベル「なんか、この階。不気味すぎる」

タケシ「なにしろ、何年も使われてないんだ。不気味に感じて仕方がない」

ヒカリ「こう言う所には、幽霊ポケモンが出そうだわ」

ヤストシ「幽霊ポケモンといえば、えらい目に遭ったんだよな」

ヤストシが苦笑しながらある体験を思い出す。

ヒカリ「なにがあつたの？」

ヒカリが聞いたので、ヤストシはイツシュで体験したあの出来事をカスミ、ハルカ、ヒカリ、ベルとタケシ、ケンジに話した。あの出来事とは、イツシュ地方のとある屋敷で雨宿りしたがそこで怪奇現象が起こりびっくりしたサトシとアイリス、デント、ヤストシだが怪奇現象を起こしたのは、ヒトモシであつたがヒトモシは、霊界へ連れて行きました人やポケモンの生命エネルギーを吸い取るという死神並みに恐ろしいポケモンである。幸いロケット団との協力で何とか退けることに成功した。

ヒカリ「そ、そんなことがあつたんだ・・・」

カスミ「聞いただけで恐ろしいわ」

ハルカ「大変だったかも」

サトシ「大変つて言うレベルじゃないわよ」

アイリス「あの場でそのままいたら・・・」

ヤストシ「俺たち・・・」

チーン

パチンパチンパチン

アイリス「作者！縁起の悪い音を出さないでよ」

ヤストシ「つてか、俺たち死んでないぞ」

どうもすいません 某芸人のネタ

アイリス「そんな謝り方しないでよ!」

サトシ「アイリス、誰と喋っているんだ?」

アイリスの突然の発言に首を傾げるサトシ。

そんな時だった。

シューン

ヒロイン+ベル「!!!」

デント「どうしたの?カスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、ベル?」

カスミ「なんか今・・・」

ハルカ「なにかが」

ヒカリ「ヒラリ」と

アイリス「私たちの前を」

ベル「通って言ったわ」

ヒロイン+ベルは、震えながら言う。

ケンジ「カスミ達の気のせいじゃないの?」

カスミ「気のせいじゃないわ」

ヒカリ「もしかして幽霊ポケモンが・・・」

ヤストシ「まさか。あれは、冗談で」

???「いるわよ」

突然喋り声が聞こえた。

サトシ「カスミ、何か喋ったか?」

カスミ「あたしじゃないわよ」

ヒカリ「同じく」

ハルカ「私じゃないかも」

ベル「私もよ」

アイリス「そんなことを聞くななんて子供ね」

ヤストシ「じゃあ、だったら今の声は」

ケンジ「まさか!?!」

マサト「そのまさかじゃない」

デント「ゆ、ゆ、ゆ、ゆ・・・」

タケシ「幽霊ポケモンだーーーーー!!!!!!」

タケシの大きい声にサトシ達は、一斉に逃げようとする。

???「待つて待つて、落ち着きなさいよ。私は、幽霊ポケモンじゃないわ」

その声にサトシ達は、走るのをやめる。

ヤストシ「幽霊ポケモンじゃなきゃ、誰なんだ!!」

???「ごめんなさい。私は、アカリ、ゴーストタイプがダイスキな女の子よ」

そう自己紹介する。

タケシ「うおーーーーー!!!アカリさんって言うんですか。自分は、タケシといます。どうでしょうか?これが終わったからお茶でも一杯」

マサト・カスミ「はいはい、あとであとで」

マサトとカスミがタケシの両耳を引っ張っていく。

ハルカ「あの癖、直してほしいかも」

そう思うハルカ。

アカリ「ところで君達何しに来たの?」

アイリス「え」と、実は・・・」

アイリスがアカリに説明しようとしたが・・・。

アカリ「なるほど、君達は、壊れたつり橋を降ろす機械に代わって古い栈橋を降ろす機械を降ろすためエレベーターの鍵をとりに行く途中・・・かしら?」

ヤストシ「あ、あっている!」

アカリ「信じてもらえないと思うけど私、実は、超能力者なの」

男子陣+ヒロイン+ベル「えーーーーー!!!!!!超能力者!?!?」

アイリス「超能力者って・・・」

ハルカ「信じられないかも」

デント「僕もだよ」

デントは、他のメンバーと違い非科学的な物は信用せず、科学的な視点で物を見るタイプで幽霊やお化けは、もちろん超能力も信用しないほどの人である。

ヤストシ「う〜」

ベル「どうしたのよ。ヤストシ」

ヤストシ「いやさ、超能力者って大抵は、エスパータイプのポケモンだけ」

サトシ「そうか？」

ヤストシ「だってよ、同じ超能力者のナツメやイツキさん、ゴヨウさん、カトレアさんは、エスパータイプのポケモンを持っているじゃないか」

アイリス「そういえばそうだね・・・」

アカリ「そうだよ。普通は、そう考えるよね。私は、超能力者なのにエスパーは、苦手なのよ」

ケンジ「また、どうして？」

アカリ「実は、姉さんが原因なの」

マサト「アカリさんのお姉さんが？」

アカリ「そうよ。私の家、姉さんが三人いるんだけど私が小さい頃姉さんのポケモンと遊ぼうとしたら姉さんのポケモンがびっくりして私に攻撃したの。それで・・・」

タケシ「それでエスパータイプが苦手になったんだ」

アカリ「そうなんだ。それである日野生のエスパーポケモンに出くわしてその時ゴーストタイプのポケモンが私を助けてくれたんだ。

あれ以降ゴーストタイプが好きになったの」

ハルカ「いい話かも」

アカリ「でも、姉さん達は、エスパーの天敵の一つであるゴーストを受け入れなくてよくからかわれたりされて我慢できず私は、10歳のときに家を飛び出したの」

カスミ「まるで、アタシみたい・・・」

アカリの経験を重ねて言うカスミ。

アカリ「あれ以降私は、ゴーストのポケモンを磨いてたの。最近は、悪タイプのポケモンを育てているの」

サトシ「いい話ですね」

ヤストシ「サトシ、こんなところで長話してていいのか？」

サトシ「あ！エレベーターの鍵！！」

アイリス「とにかく急ぎましょう」

アカリ「なら、私も手伝うわよ」

カスミ「ありがとうございます」

アカリ「どういたしまして」

そう言ってサトシ達は、さらに置くへ進んでいった。

第34話 謎の女登場（後書き）

カスミ「ちょっと、作者」

なんだ、カスミ？

カスミ「争奪戦要素とりこむと言って入れてないじゃない」

まあまあ、そのうち入れるから心配するな。

アイリス「そのうちね」

ベル「それより作者」

なんだ、ベル？

ベル「ヒロイン+ベルってどう言う事よ。差別に等しいわよ」

だって、ベルは、ヒロインじゃないから、分けたの。

ベル「ヒロインじゃないからってこんな差別で・・・」

ヒカリ「あ！泣かせた」

ハルカ「作者、謝りなさいかも」

ああ。頭が痛くなる前に終わりにしよう。皆さんの感想をお待ちしています。

アイリス「謝る前に終わらせないでよ」

第35話 謎の人物達の正体

サトシ一行は、ようやく鍵のある部屋へと向かっている。

タケシ「そういえば、アカリさんは、どうしてここに？」

タケシは、アカリが何故ここにいるのかをたずねる。

アカリ「実は、この駅舎にあなた達以外の人が忍び込んだのよ」

ヤストシ「俺たち以外にですか!？」

アカリの事実には驚くヤストシ。

アカリ「その人達が何しに入っただかは、知らないが何かくさいにお
いがしたのでついてきたらあなた達と出くわしたの」

ヒカリ「そうなんですか・・・」

ハルカ「その怪しい人物って一体誰なんだろう？」

アイリス「あの二人じゃない？」

ケンジ「あの二人ってムサシとコジロウのことか？」

ケンジの問いにアイリスは、頷く。

アカリ「ムサシとコジロウって？」

わからないアカリのためにデントが説明する。

アカリ「ロケット団の人達なの!？」

マサト「知っているんですか？」

アカリ「ここ最近、ホクシン地方に姿を現すのよ。その人たち・・・」

「カスミ「ロケット団が!？」」

ヤストシ「またくでもないことを考えてるなああの連中」

アカリ「とにかく、先を急ぎましょう」

そしてサトシ達は、ペースを上げてようやくその部屋に到着した。

サトシ「さあ、早速中へ・・・」

サトシがドアノブに手をかけようとしたときデントが止めた。

サトシ「デント、何で止め」

デント「しっ! 静に部屋の中に誰かがいる」

ヒカリ「え！」

デントかそう言うともみんな静かに部屋の中にいる人達の声を聞く。

「???」「しかし、兄貴。よかったですね」

オダワラ「ああ。当時盗んだときとほとんど変わってない」

「???」「早いところサカキ様にお届けせねば」

オダワラ「そうだな。しかし、サカキ様も我々強襲部隊を送るとは

・
・
・

「???」「仕方がないですよ。ヤマトやコサンジ、最近株を上げてきたムサシ、コジロウじゃ荷が重過ぎますからね。今回の任務」

オダワラ「そうだな。我々強襲部隊は、ロケット団の軍隊的存在の部隊だ。言わばポケモンソルジャーだからな」

「???」「さあ、そろそろ引き上げましょう。ここにいると幽霊ポケモンに出会いそうだ」

オダワラ「そんな時は、このライフルで・・・」

「???」「兄貴、幽霊ポケモンには、鉄砲も機関銃も効きませんよ」

オダワラ「わかってるって、ほれ、行くぞ」

「???」「はい！」

オダワラ達がサトシ達の方へ向かって歩いてくる。

アカリ「隠れっ」

そうアカリから言われるとすばやく隠れる。

そしてオダワラ達が出て行きそして音を立てずにサトシ達は、部屋へ入る。

ベル「よかった、気づかれなくって」

ハルカ「でも強襲部隊ってなんだろう？」

ヒカリ「私は、ポケモンソルジャーって言葉も気になるし」

タケシ「ヤストシは、知らないか？」

ヤストシ「そういえば、前にエブチ博士から聞いたことがある」

カスミ「エブチ博士が？」

読者の人たちに一応説明しておこう。エブチ博士とは、この小説の作者が生み出したオリジナルキャラでウチダ博士を手伝いながらさ

さまざまな研究、開発する元ロケット団の研究者である。

ヤストシ「エブチ博士によると、ロケット団の強襲部隊は、普段表の活動をほとんどしない部隊で本当に重要なときにしか出ない部隊だっただけのこと、あるぜ」

アイリス「つまり、あの人たちは、軍隊ってこと？」

ヤストシ「そうだ。抵抗するなら人やポケモンも殺し任務を達成する部隊だ」

カスミ「人やポケモンを殺してまでも任務を達成させるなんて・・・」

ヤストシ「でも、確か抵抗しなければ命をとったりとポケモンを盗んだりはしない。あいつらは、任務を達成する。人殺しやポケモンを盗むのが目的じゃないって言うてた」

ヒカリ「それでも、人やポケモンを殺すなんて許せないわ」

ヤストシ「それが軍隊ってもんだ」

サトシ「ヤストシ、ポケモンソルジャーってなんだ？」

サトシの問いかけに一回ため息をついて話し始める。

ヤストシ「ポケモンソルジャーは、トレーナーとポケモンとともに戦う兵士の事を指すんだ」

11人「トレーナーとポケモンとともに戦う兵士!？」

ヤストシ「昔は、どこも戦^{いく}好きなバカが多くトレーナー達にお金を出すから兵士になってくれと言う甘い誘惑で誘い軍隊とともに戦をする。それで大量のポケモンやトレーナーが命を落として行った。

そして協会は、若くて夢のある子供達の犠牲をこれ以上出したくないするために協会が重い腰を上げて雇い主に戦をすることを禁じた。もちろん雇い主たちは、ほとんどが反対しポケモン協会と戦を始めようとしたが協会は、これを予想して雇い主たちのところに先制攻撃を仕掛け潰して行きそして半年後には、協会に反対していた雇い主は、協会の言うとおり戦をしなくなりポケモンソルジャーと言う名は、いつしか消えてなくなっただけで今でもごく一部まだ残っているっていう話を母さんから聞いたんだ」

マサト「そんなことが過去に・・・」

ヤストシ「それとこれは、あくまでもエブチ博士から聞いた話だけ
ど実は、ポケモンレンジャーの中に特務レンジャーって言う階級が
あるんだ」

カスミ「特務レンジャー？」

ヒカリ「聞いたことがないわ。そんなこと」

ヤストシ「それがあるんだ。これもロケット団の強襲部隊と同じく
表に出ないんだ。内容としては、普段は通常のポケモンレンジャー
と同じだがロケット団絡みの事件等や一般の警察やポケモンレンジ
ャーでは対処出来ない事件が起こると真っ先に派遣される人たちな
んだ。任務も暗殺や破壊工作や諜報活動等の表立って出来ない様な
任務を遂行するのが特務レンジャーと呼ばれる者達でなんだ。その
存在はトップレンジャーとポケモンレンジャーの幹部の関係者しか
知らないんだ。しかも誰が特務レンジャーかは、トップレンジャー
と幹部の人しか知らないんだ。しかも特務レンジャーは、普通にレ
ンジャー学校を卒業した人ではなくポケモンソルジャーの経験があ
る人になるんだ」

ハルカ「そんなのがあるの!？」

ヤストシ「まあ、これは、あくまでエブチ博士が言ったんだ。信憑
性は、0に限りなく近いし」

ヒカリ「それならいいけど・・・」

ヤストシ「さあ、こんなところでいろいろ話してないでさっそく
鍵をとって地下へいきますか」

アカリ「そうだね」

ヤストシは、エレベーターの鍵をとって地下へ行くエレベーターに
向かった。

第35話 謎の人物達の正体（後書き）

まもなく専門学校生活が始まるので更新するスピードは、少し落ちますのでご了承ください。

第36話 ついてきたポケモン

エレベーターの鍵を手に入れたサトシ達は、駅舎の入口にあるエレベーター到着した。

サトシ「さあ、入ろうぜ」

そしてサトシ達は、エレベーターに入る。

ハルカ「これ、定員ギリギリかも」

ヒカリ「狭いけど我慢しよう」

アイリス「そうだね」

カスミ「アタシも」

ヒロイン達は、不満であったが我慢することにした。

そしてエレベーターが地下一階に着いたときだった。

「ヒト」

「ランプ」

「ムウ」

エレベーターを開けた瞬間ヒトモシ、ランプラー、ムウマが現れた。

ヤストシ「ぎゃーーーーーあ！！！！」

ケンジ「ヒトモシとランプラーにムウマだあ！？」

タケシ「生命エネルギーを吸い取られる！？」

ヤストシ、タケシ、ケンジは、慌てる。

またサトシ達もヤストシ達同様慌てる。

アカリ「落ち着きなさいみんな」

ベル「これが落ち着いていられますか」

マサト「あの炎は周囲の人やポケモンの生命力を吸い取って燃えていると言われているんですよ」

ハルカ「まだ、死にたくないかも」

アイリス「あたしなんて前に死にかけたんだから」

アイリス構えにヒトモシに冥界に連れて行かれそうになったことを言う。

アカリ「心配しないでみんな。確かにヒトモシヤランプラーの特徴として言われてるけどこの子達は、そんなことしないから安心して」
10人「え?!」

そう言われてサトシ達は、ひとまずホツとする。

アカリ「多分、ここは、何年も使われていない地下だ。だからゴーストポケモンたちが住み着いたんだろっね」

デント「そうなんですか・・・」

サトシ「とりあえずスイッチを押そうか」

サトシは、棧橋のスイッチをオンにする。

ヒカリ「これでOKだわ」

サトシ「さあ、引き上げようぜ」

ハルカ「そうだね」

ケンジ「僕、もう疲れたよ」

マサト「同じく」

タケシ「待てよみんな」

ベル「置いていかないでよ」

ヤストシ「そうだぞ」

サトシ達は、エレベーターになり1階に戻り駅舎を出る。

駅員「みんな、ありがとう。おかげで棧橋が降りた。これでヒカリーシティへ行けるよ。本当にありがとう」

サトシ「そんなことありませんよ」

駅員「それとこの駅舎は、しばらく開ける事をしないことにするよ」
ハルカ「え!？」

駅員「中に住んでいる野生のポケモンたちに迷惑かけるからね」

ヒカリ「それならポケモンたちは安心ね」

駅員「さあ、早く列車に乗りなさい。もうすぐ出発だよ」

10人「はい」

サトシ達は、急いで列車に乗ろうとした。

アカリ「(それにしてもあの部屋にいたロケット団。なにを企てて

いるんだろう・・・」

アカリは、そう考えながら列車に乗る。

ピ、ピ、ピーーーーイ。

車掌が笛を吹きドアが閉まる。

それと同時に一匹のヒトモシが乗る。

そして列車は、ピカリーシティへむけて走り始めた。

第36話 ついてきたポケモン（後書き）

いよいよ列車の旅も最終章です。

第37話 サトシと寝るのは私よ(前書き)

今回は、争奪戦要素を濃くしました。

*サトヒカ要素あり

第37話 サトシと寝るのは私よ

電車は、ピカリーシティへ向けて再び走り始めそろそろ寝ようとした時だった。

ヒカリ「今日は、私がサトシと寝る」

ハルカ「いいや、私が一緒に寝るわ」

アイリス「なに言ってるの。サトシと一緒に寝るのは、わ・た・し・よ」

ベル「違うよ、私よ」

カスミ「あんた達なに言ってるのよ。サトシの部屋で寝る権利は、あたしがあるのよ」

ヒカリ「それは、ヤストシの策略でカスミがサトシの部屋で寝ることになったんでしょ」

ヒカリの言葉にカスミは、返す言葉がない。

ベル「寝るのは私よ」

ハルカ「違うわ、私よ」

アイリス「わたし」

ヒカリ「絶対に私」

カスミ「あたしだってば」

サトシの部屋で誰が寝るので争うヒロイン+ベル。

サトシ「（誰でもいいから、決めてくれ。眠いんだけど俺・・・）」

サトシは、あくびをしながら心の中で言う。

マサト「どうするタケシ？」

タケシ「どうするって・・・」

ケンジ「ヤストシ、責任とってなんとかしてよ」

ヤストシ「わかったよ。責任とって腹を・・・」

デント「無理だと思っけどそれ」

タケシ「じゃあどうするんだ？」

男達は、考え始める。

ベル「しょうがない」

アイリス「こうなったら」

ハルカ「正々堂々と」

カスミ「じゃんけんで決めるわ」

ヒカリ「賛成！」

ズーン

あまりにも低レベルな解決方法にタケシたちは、ずっこける。

アイリス「それじゃ行くわよ」

ハルカ「恨みっこなしかも」

ベル「絶対勝つわ」

カスミ「（サトシと寝るのは、あたしよ）」

ヒカリ「最初は、グー、じゃんけん」

ヒロイン+ベル「ポン」

はたしてじゃんけんで勝ったのは……

ヒカリ「サトシ 早く寝よう」

じゃんけんで勝ったのは、ヒカリであった。

ヒカリは、カスミ並みにサトシに対する独占欲が強いそのためヒカリのご機嫌は、いいのだ。

ヒカリ「お休みサトシ」

サトシ「はいはい、お休みヒカリ」

そう言つてサトシは、眠りにつく。

サトシは、カスミのおかげか（？）年頃の女の子のそばにいても今日は、ぐっすり寝れた。

サトシが熟睡したあとヒカリは、寝ようとしたがなかなか寝れなかった。

ヒカリ「ふふふ、サトシの寝顔可愛い」

ヒカリはサトシを起こさないように顔をつついたりする。

するとヒカリは、あることをおもいつく。

ヒカリ「（そうだ！どうせ二人きりなんだからサトシに抱きついて・
・ふふふ）」

ヒカリは不敵な笑みを浮かべとんでもない妄想を膨らませながらサトシを起こさないように抱きついた。そして・・・

ヒカリ「サトシ・・・」

ヒカリは、サトシの顔に触れるだけのキスをした後、うれしそうに顔をし眠りについた。

第37話 サトシと寝るのは私よ（後書き）

ヒカリ「作者、やるわね」

あんまり褒めるなよ。俺は、サトカスファンなんだから。
ヒカリ「それよりこれからサトヒカの要素よろしくね」
わかったわかった。と言うことで次回もお楽しみ」

第38話 列車の屋根の上での決戦

翌日は、サトシは、起きるとヒカリの姿が見当たらなかった。

サトシ「ヒカリのやつどこ行っただ？」

サトシは、廊下ろうかに出るとタケシ、ケンジ、デント、マサト、ヤストシ、アカリがやってきた。

タケシ「サトシ！カスミとハルカ知らないか？」

サトシ「カスミとハルカ？知らないぞ俺。それよりヒカリ、どこ行っただか知らないか？」

マサト「ヒカリも！」

サトシ「ヒカリもと言うとカスミやハルカ以外もいるのか？」

デント「ああ。アイリスやベル、アヤノさんが部屋にいないんだ」

ケンジ「しかも消えたのは、カスミ達だけじゃないんだ」

ヤストシ「ミジュマル号とピカチュウ号の乗客やドン・ジョージさん・ジョーイさん・レストランの関係者、車掌さんの姿がないんだ」

サトシ「なんだって!？」

ケンジの言葉にサトシは、驚きを隠せない。

アカリ「それでもみなでお客さん達を探していたのよ」

ヤストシ「それよりみんなどこに消えちゃったんだろっ？」

そんな時だった。

「ヒトヒト」

サトシ「あ！ヒトモシじゃないか」

マサト「なんでヒトモシがここに？」

ヒトモシ「ヒトヒト」

ヤストシ「ついてこ言っているのか？」

ヒトモシ「ヒト」

そう言つとヒトモシがサトシ達を案内する。

サトシ達は、ずっと歩きミジュマル号の一番後ろにやってきた。

ヒトモシ「ヒト」

ヒトモシは、一番後ろのドアを指に指す。

ヤストシ「このドアか？」

ヤストシは、ドアを開けるとそこには、誰もいなかった。

ヒトモシ「ヒト」

ヒトモシは、横のはしごを指す。

そしてヤストシがはしごを登る。

ヤストシ「なんだあれ!？」

デント「どうしたんだ？」

ヤストシの大きい声にデントたちは、はしごを登って来る。

サトシ「あれつてもしかして・・・」

マサト「ロボット!？」

そこには、少し大きめのロボットが車両をぎつちりと捕まっていた。

タケシ「なんなんだあのロボット!？」

タケシがそう言うと突然BGMが流れた。

「???」『なんなんだあのロボット!？』と聞かれたら

「???」名乗ってあげるのが当たり前

「???」宇宙の破壊を防ぐため

「???」宇宙の平和を守るため

「???」恋と成熟の悪を貫く

「???」お茶目で恋の敵役

「???」カミオタイ

「???」ナカオタイ

「???」シモオタイ

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」

カッコよく決めたロケット団。

サトシ「ロケット団だと?!」

デント「でも、いつもの人達じゃないな」

カミオタイ「お前達ここへ何しに来たんだ？」

ナカオタイ「聞かなくてもわかるか」

シモオタイ「消えた乗客たちを探しに来たんだろっ」

タケシ「そうだ」

マサト「お姉ちゃん達は、どこにやった!!」

ナカオタイ「お客達は、ここさ」

真ん中のカーテンが取り外されるとそこには、ヒロイン+ベルは、もちろんアヤノ、乗客やジョーイさん、ドン・ジョージ、車掌がいた。

サトシ「カスミ! ヒカリ!」

デント「アイリス! ベル!」

タケシ「アヤノさん!」

マサト「お姉ちゃん!」

シモオタイ「この乗客たちは、昨夜オダワラ様が捕まえたんだ」

サトシ「何故捕まえた」

そう言うその張本人が出てきた。

オダワラ「何故捕まえたか? 昨夜我々の行動を見られて捕らえたのです」

???「しかし、殺すと面倒なことになるのでこうして捕まえたのだ」

オダワラ「さて、我々の任務は、すでに完了した」

オダワラがそう言うとヘリコプターがやってきてはしごを下ろした。

???「それじゃあ、カミオタイ達後は、君達の好きにしていっそ」

ナカオタイ「わかりました」

そしてオダワラとその相棒は、ヘリに乗り込み飛び去った。

シモオタイ「さて、我々は、この人質を使って」

カミオタイ「お前達のポケモンも頂く」

ナカオタイ「さあ、人質を解放させたければポケモンを渡せ」

ヤストシ「卑怯だぞ、ロケット団」

カミオタイ「ハハハ、卑怯だろうが何だろうが目的は実現させる。

それがロケット団だ！」

ナカオタイ「拒否するなら力づくで奪うのみ」

カミオタイ「シモオタイやっておしまい。」

シモオタイ「お任せを。出てこい、ドラピオン」

シモオタイは、ドラピオンを繰り出した。

カミオタイ「さあ、我ら別名毒使いの3人組の力見せてやる」

ヤストシ「毒使いの3人組？○山線トリオじゃなくて？」

カミオタイ・ナカオタイ・シモオタイ「○○山線トリオって言うな！」「」

ナカオタイ「腹立ってきた」

シモオタイ「ドラピオン、あの生意気な連中にどくばりだ！！！」

シモオタイは、ドラピオンにどくばりを指示する。

タケシ「ルンパツパ、タネマシガン。」

ルンパツパ「ルンパツ！」

マサト「ユキメノコ、シャドボール」

ユキメノコ「ユキ！」

タケシのルンパツパ、マサトのユキメノコによってドラピオンのどくばりは一瞬で消え去った。

サトシ「タケシ！マサト！」

タケシ「話は後だ。今はロケット団から、人質の人達を取り返すことが先だ」

シモオタイ「おのれ」

カミオタイ「まあ、待て。仮にロボットを壊して俺達を倒しても、

ポケモン達は無傷じゃすまされないわよ」

デント「うう、確かに。」

ヤストシ「どこまで卑怯なんだ」

アカリ「ポケモン達を盾にするなんて許せないわ。」

カミオタイの言葉に怒りをあらわにしつつも、手出しできないでいる。

サトシ「くそう、こうなったら・・・。」

サトシは急に落ちていた石を持ってロボットの方へと走り出し、そのままロボットに飛びついた。そして、持っていた石でポケモン達が入っている腹部辺りをたたき始めた。

カミオタイ「随分と無駄な抵抗をしてくれるわね。」

シモオタイ「いや、そうでもないぞ。捕獲装備に資金を費やしすぎたせいか、腹部はかなり脆く作られている。ああ何度も叩かれたらいつか壊れるぞ」

カミオタイ「それを早く言え」
パチン

カミオタイがシモオタイを殴る。

シモオタイ「目障りだ。ドラピオン、あの小僧にどくばり」
ドラピオンのどくばりがサトシに命中する。

サトシ「くっ！」

サトシは痛みをこらえながら、ロボットにしがみつく。

そしてロボットの中で捕らわれていたヒロイン+ベルは・・・
ヒカリ「サトシ!?!」

ハルカ「無茶し過ぎかも」

カスミ「早くサトシを助けないと」

アイリス「でも、どうすればいいのよ〜」

ピンチに陥るサトシを見て、懸命に考えるヒロイン+ベル。

このまま何もしなければ確実にサトシが危ない。助けたい思いとは裏腹に、何もできないもどかしさが募る。

シモオタイ「ドラピオン、ロボットに当てないように小僧にポイズンテール」

サトシ「うわあああ!!!」

ドラピオンのポイズンテールがサトシに命中。さすがにサトシも耐え切れず、そのままたたきつかれそして車両から落ちる。

カスミ「サトシ!?!」

その時サトシのモンスターボールからツタージャとクルマユが出てきてつるのむちといとをかくでサトシをつかむ。それと同時にアイ

リスのエモンガが出てくる。

アイリス「エモンガ!!!」

するとエモンガがツタージャと目を合った。普段は、仲が悪いこの2匹だがピンチの時には、お互い協力する姉妹のようなエモンガとツタージャ。

そしてエモンガは、めざめるパワーを発射し腹部は壊れ、中からとらえられていた人質達が脱出する。ちなみにドラピオンは、マサトのサーナイトですでに戦闘不能にさせてある。

ハルカ「あなた達、よくもサトシに酷いことしてくれたわね!」

ヒカリ「絶対に許さない!」

カスミ「この代償高いわよ・・・」

ハルカとヒカリそしてカスミが怒り心頭にロケット団に言う。自分たちが想いを寄せている人物を傷つけられたのだから無理もない。ハルカやヒカリ、カスミだけではない。他の面々もそうである。

アイリス「アタシ達も行くわよ、エモンガ。」

エモンガ「エーンモ!」

ベル「あなた達だけは絶対に許さないわ。行くわよ、チャオブー。」

チャオブー「チャオチャオ!」

すでに出していたエモンガに加えベルのチャオブーも戦闘態勢をとる。

ベル「チャオブー、ニトロチャージ!」

チャオブーのニトロチャージにより、ロボットのハッチが開いて、

○山線トリオがむき出しの状態になった。所々から火花も散っている。

カミオタイ「なあ、これってもしかして・・・」

ナカオタイ「そのもしかしてだ!」

シモオタイ「そんな!」

ヒカリ「ポツチャマ、最大パワーでうずしお!」

アイリス「エモンガ、最大パワーでめざめるパワー!」

カスミ「サニーゴ、最大パワーでドゲキャン!」

ポツチャマ「ポオオオチアアア！」
エモンガ「エエエエエンモオオオ！」
サニーゴ「サーーーーーニーーーーー！」
とどめのポツチャマのうずしおとエモンガのめざめるパワーとサニ
ーゴのトゲキャン。さらには、
サトシ「俺たちも行くぞ、ピカチュウ。最大パワーでエレキボール」
ピカチュウ「ピイイイカアア！」
ピカチュウのエレキボールもロケット団に襲い掛かる。最大パワー
の4つの技は見事命中し、ロボットは爆発し○山線トリオはふっ飛
ばされた。
カミオタイ・ナカオタイ・シモオタイ「「「やな気分」」」
キラーン
ヒカリ「サトシ、大丈夫!？」
ヒカリ達は、すぐさまサトシの所へ駆け寄っていく。
カスミ「ホント、アンタって無茶するんだから」
ハルカ「心配したかも」
アイリス「何も考えずに行動するなんて。ホント子供なんだから」
ベル「でも、これからは無茶しないでよ。」
全員、心配そうにサトシを見つめる。
サトシ「みんな心配かけてごめん。全員が無事だったんだから。
それに俺は全然・・・」
サトシは大丈夫と言いかけたところで、急に顔を真っ青にしてその
場に倒れそうになった。
カスミ「サトシ、しっかりして！」
ピカチュウ「ピカピカ」。
サトシが倒れそうになったところを間髪で周りにいる女子全員で
支える。ピカチュウも心配そうに見つめる。
サトシ「ハハハ、あんまりだいじょばないかも」
サトシは弱弱しく答える。そして・・・
ベル「サトシ君!?!?!しっかりして!?!?!」

タケシ「いかん！早くサトシを運ぶんだ。」
ジョーイ「いけないわ。早く中へ運んでおいで応急手当を！」
ドラピオンの毒がまわってきたのか、サトシは意識を失ってしまっ
た。ジョーイさんの指示に従いサトシを急いで列車内にあるポケモ
ンセンターへ運ぶ。はたしてサトシの運命は・・・

第38話 列車の屋根の上での決戦（後書き）

サトシは、一体どうなる？

第39話 美人医師ナツコ（前書き）

前回ドラピオンの毒により意識を失ったサトシはいつたいどうなるのか？

そして今回は、サトカス・サトヒカ要素と争奪戦要素が入っています。

第39話 美人医師ナツコ

サトシが意識を失ってから数分後、意識を失ったままのサトシは、ジョーイさんの診察・治療を受けた。しかし、ジョーイさんは、ポケモン専門の医師。人間の診察は、ほぼ専門外であるが基本的なことは、教わっていたので診察は、出来た。しかし治療に関しては、あまり知識がなかった。ジョーイさんは、困っていたときだった。???「あら？ジョーイさん、どうかしたんですか？」

ジョーイ「あ！ナツコさん!？」

とても肌がきれいでロングヘアの美人 ナツコがジョーイさんに話しかけジョーイさんは、驚く。

ハルカ「ジョーイさん、この人を知っているの？」

ジョーイ「ええ、この人は、ナツコさんって言ってピカリーシティの病院の院長よ」

ヒカリ「そんな偉い人がどうしてここに・・・」

ナツコ「出張帰りなの。で？どうしたの？」

アイリス「実は・・・」

アイリスは、先ほどのことを話す。

ナツコ「そんなことがあったの!？」

カスミ「知らなかったですか!」

ナツコ「ごめんなさい、その時、私、爆睡してたから・・・」
笑いながら言うナツコ。

ナツコ「さて、早速治療に取り掛かりますか。ミミちゃん、ヨウちやんでてらっしゃい」

ナツコは、ミミちゃん（ミミロル）とヨウちゃん（ヨウテリー）を出しサトシの治療に当たる。

カスミ達は、外で待機する。

そして待つこと30分。

ナツコが出てきた。

ベル「ナツコさん、サトシは、サトシは」

ナツコ「心配しないで、命に別状はないから。ただ今日と明日の2日間安静が必要よ。安静していれば時期に元気になるわ」

その言葉に、全員安堵の表情を浮かべる。

ナツコ「明日の昼過ぎには、ピカリー駅に到着するみたいだから、もし、何かあったらミジユマル号の201号室に来てね」

そう言つてナツコは、自分の部屋に戻つていった。

そしてしばらくヒロイン＋ベルは、サトシを見ていた。

ハルカ「サトシ、大丈夫よね」

ヒカリ「うん……。ナツコさんも命に別状はないって言つてたし」

カスミ「でも、まだ意識が戻つてないから心配ね。。。」

アイリス「もう、カスミもハルカもヒカリも、そんな顔をサトシに見られたら、余計な心配かけさせちゃうでしょう」

ベ「そうよ。今はサトシ君の意識が戻ることを祈りましょう」

カスミ「そうよね。。。」

カスミ、ハルカ、ヒカリは悲しげな顔を拭い去り、ニッコリと笑顔を見せる。だが、そんな女子人たちよりもっと落ち込んでいる者がいた。

ピカチュウ「ピカ。。。」

サトシの一番の相棒・ピカチュウだ。自分は助けに行けず、そのまま大事な主人であり友達でもあるサトシが傷つけられるところを見ていることだけしか出来なかつたのだ。ピカチュウには自己嫌悪と不甲斐無さが募つていた。2つの目からは涙が溢れている。

カスミ「ピカチュウ。。。」

ハルカ「余程、サトシを助けられなかつたことが悔しかったのね」

ヒカリ「それ程サトシのことが大好きなものね」

アイリス「ピカチュウ、可愛そう。。。」

カスミ達はピカチュウの姿を見て、同情のまなざしで見つめる。

カスミ「ピカチュウ、あなたもそんな顔でいたら、サトシが意識を取り戻した時に余計に心配かけちゃうわよ」

ハルカ「カスミの言うとおりよ。サトシもあなたのことが大好きな
んだから」

ヒカリ「ここはみんなで、笑顔でサトシの意識が回復するのを待ち
ましょう」

ピカチュウ「ピカチュピ、ピピカ、ピカカ・・・、ピカア！」

カスミ達の言葉に、目からあふれていた涙を拭って、とびっきりの
笑顔を見せた。

アイリス「さあ、ピカチュウ。もどりましょう、みんな待ってるわ
ピカチュウ「ピカア！」

カスミ達はピカチュウを慰めることに成功し、みんなのもとへと戻
っていった。

それから数十時間たった夜のこと。

カスミ「ん〜。目が覚めちゃったわね。」

目が覚めたカスミは、自動販売機があるポケモンセンターの入口前
にやってくる病室から明かりがもれていた。そしてカスミは、そ
の病室を覗くとピカチュウが必死でサトシを看病していた。

カスミ「ピカチュウ、まだ起きてんだ」

ピカチュウ「ピカチュピ！」

カスミ「ピカチュウ、本当に偉いわね。でも、あんまり無理しちゃ
ダメだよ」

カスミは、サトシに看病するピカチュウにそう言った。

すると・・・

サトシ「う、うう・・・」

サトシがうなされるように声を出した。額からはかなりの汗が吹き
出ている。

ピカチュウ「ピカア!？」

カスミ「サトシ・・・」

苦しそうにうめき声を上げるサトシを見てカスミは、胸が締め付け
る思いをした。

カスミ「汗を拭いてあげないと」

カスミはそう言うと、近くにあったタオルでサトシの汗を優しく拭き取った。

カスミ「サトシ、心配しないで大丈夫だから」

カスミは、サトシの手を握りながらそう言った。

サトシ「うう……。スウウウウ」

するとサトシのうなるような声は止み、かわりにきれいな寝息を出した。

カスミ「よかったわ。サトシ、落ち着いたようね」

カスミは、サトシの頭をなでながら言った。

ピカチュウ「ピカチュピ……。ピカチュウ」

ピカチュウは、カスミにお礼を言うかのように、首を前に傾けた。

カスミ「いいのよ。あたしは、ただ当然のことしたまでだよ」

素直でないカスミは、ピカチュウにそう言った。

カスミ「あたしもそろそろ戻るわ。ピカチュウ、お休み」

ピカチュウ「ピカ」

そしてカスミは自分が寝ている部屋へと戻り、再び眠りについた。

サトシ「ん、んん。こ、ここは!？」

翌朝、サトシはようやく目覚めた。ところがたった今自分が起きた場所、時間が分からず、少々混乱気味だった。辺りを見ると、ピカチュウがすやすやと眠っていた。

サトシ「そういえば、俺。あの後、気を失って……。」

サトシは昨日のことを思い出していた。するとサトシが寝ていた部屋のドアが開いて……。

ヒカリ「サトシ! やっと、起きたのね」

様子を見てやってきた仲間達が、入ってきた。サトシの姿を見て、全員安堵の表情を浮かべる。

サトシ「なあ、ここはどこなんだ?」

ベル「ここは、ピカチュウ号のポケモンセンターの病室よ」

デント「サトシ、半日以上も意識を失ってたんだよ」

アイリス「ホント、心配したんだから」

カスミ「あんな無茶して。ホント 안타って人は」

サトシ「みんな、心配かけてごめんな・・・」

サトシは素直に謝ると、カスミ達はホントよと言わんばかりの表情を浮かべる。

ベル「私たちよりも、もっと謝らなければならない子がいるんじゃないの？」

ヒカリ「ピカチュウ、アタシ達が寝ている間にもずっと寝ずに看病してたのよ」

サトシ「そうだったのか・・・。心配かけてごめんな、ピカチュウ」
サトシはそう言うと、今は疲れて寝ているピカチュウの頭を起こさないようにそつとなでる。ピカチュウはとても気持ちよさそうに眠っている。

そこへナツコがやってきた。

ナツコ「どうやら目覚めたようね」

サトシ「あの・・・」

ナツコ「あ！そうか、サトシ君は、知らないもんね。私は、ナツコ。ピカリーシテイの病院の院長で病院一の美女、ナツコ様と呼ばれているのよ」

その言葉に周りがドン引きする。

タケシ「お！ナツコさん、どうでしょ　あいたたたたた」

ヤストシ・マサト「はいはい、こんなところでナンパしないで」

二人は、タケシの耳を片方ずつ持ち引つ張って行く。

ナツコは、サトシの診察を始めた。

ナツコ「順調に回復しているわね。これで今日一日安静すれば完治よ。でも、列車は、もうすぐピカリーシテイに到着するからその時は、私の迎えが来てるから私の病院で一日入院してもらおうよ」

サトシ「ええ！でも、俺もうだい・・・」

カスミ「いいから安静していなさい！わかった？」

カスミは、サトシにらみつけながら言った。他の女の子達もカス

「同様にサトシをにらみつけた。

サトシ「はい・・・」

女子たちの雰囲気能耐えられず、おもわずはいと返事をするサトシ。タケシ、ケンジ、デント、ヤストシ、マサトの5人はそれぞれ苦笑を浮かべた。

それから、しばらくしてサトシは昨日から何も食べていないことに気づき・・・、

サトシ「そういえば、お腹すいたなあ・・・」

サトシが呟いていると、ドアが開いた。

ヒカリ「サトシ、ご飯を持ってきたわ」

サトシ「おお、ナイス。ヒカリ」

ヒカリは、気を利かせて、サトシに料理が盛られた皿がのつてあるおぼんを持ってきた。サトシは早速料理に手を付けようするが・・・

サトシ「いただき」

ヒカリ「待つて、サトシ」

ヒカリがサトシの手を止めた。

サトシ「一体なんだ。ヒカリ？」

サトシは、首をかしげながらヒカリに聞いた。

ヒカリ「あたしが食べさせてあげるわ」

突然のヒカリの爆弾発言にサトシは、驚きを隠せない。

そしてヒカリは、おかずの入った皿と箸を持って、サトシに食べさせようとするが・・・

サトシ「いいよ、自分で食べられるから。」

恥ずかしさから、ヒカリの要求を断ろうとした。対しヒカリは・・・

ヒカリ「・・・グス。わたしがサトシの為に持ってきたのに、食べたくないんだ・・・」

ヒカリは、涙目でサトシを見つめる。

サトシ「あつ、いや。別にそういうわけじゃないんだ。もちろん、

ヒカリの気持ちは嬉しいぜ。」

サトシは今にも泣きそうなヒカリを察して、慌てて答える。

ヒカリ「じゃあ、食べて」

ヒカリは途端にニツコリしながら、サトシに言う。どうやら、さっきのはウソ泣きだったようだ。それは、まるでアイリスのエモンガのような行動である。

サトシ「・・・はあ、分かったよ」

サトシは結局折れて、ヒカリに食べさせてもらうことにした。

ヒカリ「じゃあ、はい。アーン」

サトシ「アーン」

ヒカリはこの『アーン』がしたくて、サトシに料理を持ってきたようだ。

そして箸がサトシの口に入ろうとしたその時！

カスミ・ハルカ・アイリス「ちょっと、ヒカリ！」

突然カスミ、ハルカ、アイリスは、ドアを蹴り破るようにサトシの病室へ入ってくる。公共物を大事にしようよ三人とも・・・（汗）

ヒカリ「せっかく、いい雰囲気だったのに邪魔しないでよ！」

3人の突然の登場に怒り交じりで言うヒカリ。

カスミ「何勝手にサトシに食べさせようとしてるのよ！」

ハルカ「ずるいかも！」

アイリス「そうよ、抜け駆けなんてさせないんだから！」

ヒロイン4人による言い争いが始まってしまった。サトシはあまりの雰囲気言い争いをしている4人を止められず、ヒカリに食べさせてもらう予定（？）だった料理を一人で黙々と食べていた。そしてあまりにもうるささに電気ポケモン3匹（サトシのピカチュウ・ヒカリのパチリス・アイリスのエモンガ）が我慢できず3匹は、ヒロインと主人公に電撃を放ったのは、また別の話である。ちなみにこのポケモンセンターは、バトルクラブと同じくポケモンが攻撃しても耐えられるようになっていた。

サトシ「な、なんで、俺まで〜」

巻き込まれたサトシはそう呟いた。今日1日安静のはずがとんだ1日の始まり方だ。ただ騒動はそれだけでは終わらなかった。

ハルカ「今日一日、私がサトシの看病してあげるわ」

ヒカリ「ハルカじゃあ、無理よ。ここは、あたしがやるわ」

カスミ「二人とも無理しないの。アタシがサトシの看病してあげるわ」

アイリス「そんなことで争うなんて子供ね。サトシの看病なら私が相応しいわ」

ベル「サトシ君を看病するだけなら、そこまで難しいことじゃないわ。わたしがやる」

サトシ「……………」

ある時は……

ベル「サトシ君。汗を拭きましょうね」

アイリス「ベル、サトシは、老人じゃないわよ。汗を拭くなら私がやるわ」

ヒカリ「あ！二人とも抜け駆けは、ずるいわよ」

カスミ「許せないわ」

ベル「あなた達に言われたくないわ」

アイリス「そうよそうよ」

サトシ「……………」

またある時は……

ハルカ「サトシ。寂しいなら私が一緒に寝てあげるかも」

ヒカリ「ハルカ、無理しなくていいわよ。あたしがサトシと寝てあげるわ」

サトシ「……………」

そして、またある時には……

カスミ「みんな、もうすぐピカリー駅に到着するから部屋へ戻って荷物の支度してきて。その間あたしがサトシの面倒見ているから」

アイリス「そんなの失礼よ。私がサトシの面倒見るからみんなは、部屋戻って荷物の支度したら？」

ハルカ「そんなに無理しないでアイリス。私がサトシの面倒を見るから」

ヒカリ「アタシが面倒を見るからみんなは、部屋に戻って支度したら？」

ベル「そんなのいつだってできるからさ。面倒なら私が見るわ」
サトシ「……………」

このような状況はしばらく続き、ピカリーシティまであと30分で到着すると言うのに…………

カスミ「アタシがやる！」

ハルカ「私かも！」

ヒカリ「アタシ！」

アイリス「アタシが！」

ベル「みんな無理しないで！」

まだ騒いでいた。

あまりにも騒々しいので、サトシの状態は回復するどころか逆に悪化しそうである。そして一人の男が痺れを切らした。

ヤストシ「お前達…………いい加減にしろ（怒）！！！！！」

ヤストシが怒りを爆発してヒロイン+ベルを叱る。普段あまり怒らないヤストシが怒りヒロインやベル、サトシ達も震え上がる。普段怒らない人が怒ると恐いというのは、本当である。

ヤストシ「お前ら、そこに座れ！」

ヤストシの怒りにヒロイン+ベルは、そこに素直に座りヤストシの長い説教を聞かされる。タケシ、ケンジ、デント、マサト、いつか聞いたのか？ ジョーイさんやナツコもはあまりの恐怖に何もしていないが、しばらくしてアヤノによって仲裁しヤストシの説教が終わる。

ヒロイン+ベル「（ヤストシ、怖い…………）」

普段、半分ふざけたことをするヤストシだがあまりにも恐怖に震え上がったヒロイン+ベルは、ヤストシを怒らせないほうがいいと心に誓った。

チンコンカンコン

アナウンス「まもなく、終点ピカリー、ピカリーです。お出口は、左側です」

列車は、ようやくピカリー駅に到着しサトシ達の列車のたびは、終わった。

そしてサトシは、担架でナツコに連れられ病院まで運ばれたのである。

第39話 美人医師ナツコ（後書き）

ヤストシ「……………」

なんだ、ヤストシ？

ヤストシ「よくも、まあ、あんな騒ぎを起こすような話を作ったな
え！ちよつと待って。もしかしてまだ……」

ヤストシ「ああ、怒っているさ」
……

ヤストシ「作者、覚悟は、いいだろうな」

ま、ま、まさか……。

ヤストシ「そのまさかだ」
に、逃げる」。

ヤストシ「エルフィン、ソーラービーム」

ちよ、ちよ……………」

ドカーン

ぎゃあ〜。何でこうなるのよ？やな感じ〜。

キラーン

ヤストシ「あ〜。スッキリした。それじゃあ、みんな。この小説の
感想をお待ちしています」

第40話 ラルースの貴公子登場（前書き）

今回は、AGの頃、コンテストでよく登場していたあの少年がでます。

バラの似合うあの人です。

第40話 ラルースの貴公子登場

ピカリー駅に到着後サトシは、ナツコの経営しているピカリーシテイ病院に運ばれ1日入院した。

そして翌日、サトシは、無事に退院する。

サトシ「お世話になりました。ナツコさん」

ナツコ「いいのよ、別に。これも仕事なんだから。それよりサトシ君達は、どうするの？」

サトシ「はい。これからピカリージムへ行こうかと」

ナツコ「あら、ならそれなら・・・」

ナツコが何か言おうとしたとき・・・

???「あ！ナツコさんじゃないの」

突然ナツコとサトシ達の前に少女が現れた。

その子は、ナツコより年は、下でサトシ達と近い年齢でポニーテールのスリルな体つきで清楚な服装を着ている美少女である。

ナツコ「誰かと思ったらダイアンじゃないの」

ダイアン「お久しぶりですナツコさん」

ヒカリ「あの・・・お知り合いですか？」

ナツコ「そうよ。彼女は、ダイアン。カッチュウシティのジムリーダーよ」

ダイアン「初めまして 虫を自由自在に操る虫使いの姫、ダイアンです」

カスミ「虫使い!!!」

カスミは、虫と言う言葉に体がゾツとする。

何度も言うがカスミは、かなりの虫嫌いである。 ある特定の虫ポケを除けば・・・

ダイアン「もしかして、あなた。虫嫌いななの？」

カスミ「そうよ。考えただけでゾツとするわ。あんな気持ち悪いのが動きまわったらたまったもんじゃないわ。虫は、無視よ!」

そうはつきりと言うカスミ。

ダイアン「ひどい・・・」

カスミの発言に怒りをあらわにするダイアン。

ダイアン「虫ポケ使いのジムリーダーとか四天王に対して失礼だわ。いますぐ、虫ポケモンに謝りなさい!!」

カスミ「いやよ」

ダイアン「なら、力ずくでも謝らせてその虫嫌いを治して上げますわ」

怒りが頂点に達したダイアンは、モンスターボールを手に取る。

ナツコ「やめなさいダイアン」

ナツコがダイアンを止める。

ナツコ「それより、あなたは、何しにこの街へ来たのよ」

ダイアン「そうでした!ピカリーデパートで、オークションが行われるんです!それでは、ナツコさん、ジムをがんばってください!」
そう言って走り出すダイアン。

ハルカ「ジムって!もしかして、ナツコさんって!!」

ナツコ「そうよ。このピカリージムのジムリーダーよ」

ベル「そうなんですか!」

ナツコ「ええ。挑戦するならあとにしてくれる?仕事もあるし」

サトシ「わかりました」

そう言つてナツコは、病院内へ入る。

サトシ達は、その間街をぶらつくことにした。

そんな時だった。

???「おや?ハルカじゃないか」

ハルカを始めサトシ達が後ろを向くとそこにいたのは・・・

ハルカ「シュウ!」

そこにいたのは、シュウであった。

シュウは、ハルカのコンテストのライバル的存在である。性格は、プライドがとても高く、少し嫌味なやつだが優しいところもある。ハルカ「シュウ、どうしてここに?」

シュウ「この街のデパートで珍しいものを売っているって言うから来たんだ」

サトシ「珍しい物!」

アイリス「一体何なんだろう?」

ベル「なら、私たちも行きましょうよ」

ハルカ「そは、いいかも」

ヤストシ「そうだな。ジム戦にも時間は、あるしな」

ヒカリ「それじゃ、出発」

こうしてサトシ達は、デパートへと歩き出した。

シュウ「……………」

そんな、シュウは、ハルカの方をずっと見ていた。

ヤストシ「どうしたんだシュウ?」

シュウ「え、いや、なんでもない……」

シュウは、何とか誤魔化そうとする。

ヤストシ「いいや、お前、さっきからハルカばかり見ていたぞ。まさか!」

さか!」

シュウ「!!!!!!」

ヤストシ「言わないよ。シュウ、いるならデパートで買い物しているうちだ」

シュウ「……………」

ヤストシ「がんばれよ」

そう背中を叩くヤストシ。

シュウとヤストシの隠し話、一体それは、何なんだろうか?

それは、次回明らかになる。

第40話 ラルースの貴公子登場（後書き）

次回、シュウの隠し話が明らかとなる。

第41話 ピカリーデパート（前書き）

今回は、シュウの秘密とサトアイ要素入れます。

第41話 ピカリーデパート

ピカリーデパートに到着したサトシ達。

しかしここである問題が起きた。

それは・・・

カスミ「サトシ。あたしと一緒にデパートを周らない？」

ヒカリ「なに言っているのよカスミ。あたしがサトシと一緒にデパートを周るの」

アイリス「いゝや、あたしよ」

ベル「3人そろって抜け駆けするなんて許せないわ。サトシ君と一緒にデパートを周るのは、私よ」

ハルカ「私かも」

そうサトシと一緒にデパートを周ることにヒロイン＋ベルがもめていた。彼女たちは直接的な表現は避けているが、別の言い方をすれば誰がサトシとデートするのかということである。

サトシ「(いい加減にしてくれ・・・)」

ケンジ「止めないのかヤストシ？」

ヤストシ「俺を止めれると思うか？」

ケンジ「・・・」

ヤストシの発言は、無責任にも聞こえるが、下手に仲裁に入るのは自殺行為に等しいものである。サトシ達は、ただ見守るしかなかった。サトシのピカチュウやカスミのルリリ、ヒカリのポツチャマ、アイリスのキバゴの4体は、女たちが言い争いをしている間にタケシたちのところへ避難している。

シュウ「(ハルカ、君はやはり・・・)」

サトシ争奪戦を見てシュウは、心の中でそうつぶやいた。

ヤストシ「(シュウ、やはり君は、ハルカのこと・・・)」

ヤストシは、シュウの顔を見て何かを感じる。

カスミ「こうなったら」

ヒカリ「じゃんけんで決めましょう」

ハルカ・アイリス・ベル「賛成」

ズデーネ「!!!!!!」

彼女たちのあまりにも低能な決め方に盛大にズッコケるタケシ達。

マサト「じゃんけんって・・・(汗)」

デント「随分と原始的な方法だね・・・(汗)」

ヤストシ「そういえば前にもあったなこんなこと」

マサトとデントとヤストシは、呆然とつぶやいた。

ヒカリ「じゃあ、いくわよ」

ヒロイン+ベル「最初は、グー。じゃんけん、ポーン」

アイリス「サトシ、少し休憩しよう」

あのじゃんけんで見事勝利したのは、アイリスであった。アイリスは、服やサトシとアイリスは、バトル用のグッズを何点か購入し今、

屋上にて休憩していた。

サトシ「ふう〜、買い物つて結構疲れるもんなんだな。」

サトシは自動販売機で購入したサイソーダをベンチに座って飲んでいる。すると屋上に着いた直後にトイレで用を足していたアイリスが来て・・・

アイリス「あ！サトシだけずるいわ」

サトシが手に持っているサイソーダを見て、頬を膨らませながら不満げに言うアイリス。

サトシ「ごめんごめん。もう一本・・・」

サトシがアイリスのためにサイソーダをもう一本購入しに行こうとしたが・・・

アイリス「お金がもつたいないわ」

サトシ「あ、アイリス！」

アイリスはサトシから奪うようにサイソーダを取ると、それを飲み干した。

アイリス「疲れた後の一杯は、おいしいわ」

サトシ「ハハハ・・・」

サトシはよほど喉が渴いていたんだなと思いつつ、苦笑した。しかしアイリスの心の中は・・・

アイリス「（ふふふ、これでサトシとの間接キスはゲットでドドンガドンね）」

どうやらアイリスは、サトシとの間接キスを狙って屋上へサトシとともに来たようだ。まさに、策士といったところか。何度も言うが超が何個も付くほどの鈍感なサトシがこのアイリスの思惑に気づくことはない。

周りから見れば中のいいカップルに見える。

しかしこの光景に面白くない人たちが3人いた。

カスミ「アイリス、少し調子乗りすぎだわ」

ヒカリ「同感ね」

ベル「同じく」

ヒカリやカスミ、ベルのじゃんけんでは負けた三人は、アイリスを見てそう思った。ちなみに負けた3人が何故ここにいるのかと言うとサトシとアイリスを尾行していたからである。買い物に集中していたサトシとアイリスはそのことに気づくことはなかった。

アイリス「〜」

カスミ・ヒカリ・ベル「……………（怒）」

その後サトシとアイリスは、カスミ達と合流するがそれでもまだこ機嫌斜めである。そんな時。

カスミ「あれ？ハルカがいないわ」

ヒカリ「本当だわ」

アイリス「どこに行っただらう？」

ヤストシ「どうした、カスミ、ヒカリ、アイリス、ベル」

ベル「あ！ヤストシ、どうしてここに？」

ヤストシ「そろそろ、ジム戦の支度が出来たからサトシを呼びに来たんだ」

アイリス「サトシなら、ポケモンセンターへ行ったわよ」

ヒカリ「それよりヤストシ。ハルカ知らない？」

ヤストシ「ハルカならシユウとポケモンセンターの裏手にいるぜ」

カスミ「シユウと！！」

ヒカリ「怪しいわね」

ベル「見に行こうか」

アイリス「そうね」

カスミ、ヒカリ、アイリス、ベルは、ポケモンセンターの裏手に向かった。

その頃集とハルカは、ヤストシの言うとおりポケモンセンターの裏手にいた。

ハルカ「ところでシユウ。私に何か用なの？」

シユウ「ああ。1つ聞きたいことがあるんだ」

ハルカ「聞きたいこと？」

シュウ「ハルカは、サトシのことをどう思ってるんだい？」

シュウは、ハルカにサトシのことをストレートに聞いてみる。

ハルカ「サトシは、私達にもポケモンにも優しくしてくれるとてもいい男よ」

シュウ「そうか・・・」

ハルカ「そんなこと聞いてどうするの？」

ハルカは、サトシのことを聞くシュウに問いかける。

そしてシュウは、何かを決意し口を出す。

シュウ「ハルカ、実は僕、君のことが・・・」

ひと呼吸しそして・・・

シュウ「ハルカのことを好きだ！」

ハルカ「えーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

シュウの突然の告白に驚くハルカ。
はたしてハルカは、一体どんな返事をするのか？

第41話 ピカリーデパート（後書き）

アイリス、他のCPを書いたけどどうだ？

アイリス「さすがね。これからもサトアイ要素よろしくね」

おいおい、俺は、サトカス派だぜ。あんまり期待されても困るぜ。

アイリス「はいはい。それよりシュウがハルカに告白したのには、驚いたわね」

実は、俺こっに見えても隠れシュウハル派なんだ。

アイリス「へえ、初耳だわ」

それじゃあ、アイリス締めをよろしく。

アイリス「次回もポケモンゲットでドドンガドーン」

第42話 ハルカの返事（前書き）

前回の続きです。

第42話 ハルカの返事

シュウ「ハルカ、実は僕、君のことが・・・」
ひと呼吸しそして・・・

シュウ「ハルカのこと好きだ！」

ハルカ「えーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

シュウの突然の告白に驚くハルカ。

カスミ・ヒカリ・アイリス・ベル・ヤストシ「ウソ!!!!!!」

それをいつの間にか隠れて見ていたカスミたちも驚く。

ヤストシ「マジかよ・・・」

ヒカリ「シュウがハルカの事が好きなんて・・・」

カスミ「驚いたわ」

ベル「私も」

アイリス「でも、ハルカ、どう言う返事するのかな？」

カスミ「ハルカもサトシのことが好きだからね」

ベル「なんか複雑だわ」

ヤストシ「いわゆる三角関係？」

アイリス「でも、このままハルカがシュウと、くっつけばサトシの

ライバルが減るわね」

ものすごく腹黒いこと考えるアイリス。

ハルカ「シュウ、私は・・・」

ハルカが返事をしようとした時。

ダイアン「あら、ホウエンの舞姫のハルカちゃんとコンテストプリ

ンス、シュウ君じゃないのよ」

二人の間に入って来たのは、カッチュウシティジムリーダーのダイ

アンである。

ダイアン「あ！もしかしてお邪魔でしたかしら？」

カスミ・ヒカリ・アイリス・ベル・ヤストシ「（邪魔だよ、完全に・

・・・）」

遠くで見ていたカスミたちもそう思う。

ダイアン「ごめんなさい。私、空気を読めないところがありますから」

ハルカ「いえいえ・・・」

ハルカは、真つ赤にしなからダイアンに言う。

ダイアン「それにしても二人がカップルとは、驚きましたわ」
その言葉にハルカが反応する。

ハルカ「カップルとか、そういうのじゃなくて・・・」

何とか誤魔化そうとするハルカだがシュウは・・・

シュウ「（やはり君は、僕よりサトシの方が・・・）」

先ほどの言葉をそんな風に受け止めるシュウ。

シュウ「それじゃあ、僕は、これで失礼するよ」

そう言つてその場を立ち去るシュウ。

悲しい顔をして・・・

ハルカ「あ・・・」

シュウの顔を見てハルカは、少し悪いことをしたと思う。

ハルカ「あの、私、この辺で失礼します」

そう言つてハルカは、シュウの後を追っていた。

ヤストシ「俺達も追ってみようぜ」

カスミ「そうね」

ヒカリ「なんか、すごい雰囲気になってきたしね」

ベル「行こう行こう」

アイリス「ちよつと、待つてよ」

カスミ達は、こっそりとハルカを追って行った。

ハルカは、シュウの後を追つたが見失つてしまう。

ハルカ「シュウ、どこへ行ったんだろう？」

ハルカは、辺りを見渡しました、走り始めた。

ハルカ「（なんだろう、さっきからこの気持ちは？私は、サトシのことが好きなのに、何でシュウのことを考えてしまうんだろう・・・）」

」

そう心の中でサトシよりシュウのことを考えてしまつことに疑問に思つてしまふハルカ。

そして走つて5分、公園あたりに着くとシュウを見つける。

ハルカ「シュウ！」

シュウ「ハルカ・・・」

ハルカは、シュウが座っているベンチへ近づく。

シュウ「ハルカ、何で追つて来たんだい？」

ハルカ「わからない。何故かシュウのことを考えてしまふの・・・。どうしてかわからないの私にも」

シュウ「・・・」

ハルカの言葉に黙つて聞くシュウ。

ハルカ「それでシュウ。さっきのシュウの告白の返事も少し考えさせてくれない？」

ハルカは、シュウにそう言った。

シュウ「わかつたよハルカ。今度会つた時に返事を聞かせてくれ」

ハルカ「うん」

そう言つてシュウは、公園を後にした。

カスミ「返事は、今度か」

ヒカリ「先延ばしするなんて」

アイリス「やつぱり、シュウのこと好きじゃないのハルカ」

ベル「サトシをとるかシュウをとるか、てんびんが揺らいでるわね」
ヤストシ「そうだな」

遠くで見ていたカスミ達は、そう思った。

オマケ

デント「カスミたち遅いな」

タケシ「どこを道草してるのか」

マサト「お姉ちゃんもカスミ達も早く戻ってきてよ」

カスミ達が帰るのが遅いことにイライラしているデント、タケシ、マサトだが・・・

サトシ「ああ、早くジム戦したいぜ」

ケンジ「カスミ達が戻ってきてからだよサトシ」

サトシ「いい加減戻って来い!!!」

ジム戦を早くしたいサトシの機嫌は、ますます悪くなることをカスミ達は、知るよしもなかった。

第42話 ハルカの返事（後書き）

ハルカ「ねえ、作者。どうして私とシュウの告白シーンを入れたの？」

まあ、それは、俺が隠れシュウハル派だから入れたんだ。

ハルカ「そうなんだ」

ヒカリ「それより、作者。サトシの機嫌が悪いわよ」

カスミ「どうするきなよ」

もちろん、今回は、二回目のジム戦を書くから心配するな。

アイリス「それで、機嫌が治ればいいけど」

カスミ「治るわよ、あいつなら」

さてさて、今回も突然ですがこの辺でお開きにしたいと思います。

締めは、ハルカよろしく。

ハルカ「はい。それでは、次回もポケモンゲットかも」

第43話 ピカリージム(前編)(前書き)

ジム戦は、3本に分けてお送りします。

第43話 ピカリージム（前編）

ハルカとこっそりハルカの後を追っていたカスミ達は、ポケモンセンターに戻った。

そしてサトシ達と合流しピカリー病院へ向かった。

ナツコ「いらっしやい、みんな」

サトシ「それで、ジムは、どこに……」

ナツコ「ジムならこの病院の地下よ。そこまで案内するわ」

そう言つてサトシ達は、ナツコの後について行く。

そして病院に入ったサトシ達は、エレベーターに乗る。

カスミ「あの、このエレベーター、地下の階がありませんけど……」

「

ナツコ「ああ。それなら大丈夫だよ」

ナツコがそう言うがサトシ達には、普通のエレベーターにしか見えない。

ヒカリ「どう見ても普通のエレベーターだよね」

ハルカ「どこも変わりはないかも」

ナツコ「このエレベーターだけは、特別な作りになっていてね……」

そうナツコが言つとポケットから鍵を取り出しエレベーターの鍵穴に差し込む。

すると1階〜12階まであるスイッチが裏返り地下1階〜3階が表示される。

ベル「ウソ！」

タケシ「こんなところに隠してあるなんて……」

ハルカ「信じられないかも」

ケンジ「僕も」

デント「同じく」

他のメンバーも驚きを隠せていない。

まあ、当然の反応だよな……。

ナツコ「元々ジム戦専用の階だからジム戦以外は、使わないんだ。だから普段は、隠しているの」

そうナツコが言うとスイッチを押す。

エレベーターは、降りていきすぐにその階に着く。

ナツコ「さあ、ここがジム戦を行うバトルフィールドよ」

サトシ「すげー！」

ベル「ここで、ジム戦するのね」

マサト「頑張るぞ」

実は、サトシの他にベルとマサトもピカリージムに挑戦するのだ。

ナツコ「ジム戦のルールは、使用ポケモンは、3体だけど君達は、1体だけ。それでサトシ君、ベルちゃん、マサト君の3人が私と一人ずつ対決し一体倒した時点で交代し3人のうち二人が勝った時点であなた達の勝利よ」

マサト「それは、つまり1度のバトルで3人でナツコさんの相手をするってことですか？」

ナツコ「そう言う事よ、それじゃあ、早速バトルを始めるけど先っぽは、誰から行く？」

そうナツコが言うとベルが前に出てきた。

ベル「あたしから行くわ」

ナツコ「わかつたわ、じゃあ始めましょうか。審判、よろしくね」

審判「わかりました。それでは、これよりジムリーダー・ナツコとチャレンジャー、サトシ、マサト、ベルによるピカリージムジム戦を開始いたします。使用ポケモンは、3体ですがチャレンジャーの使用できるポケモンは、1体のみ。チャレンジャーが勝負が終わった時点で次の方に交代します。チャレンジャー3人のうち2人が勝った時点で試合終了となります」

ナツコ「正々堂々と頑張らしましょう」

ベル「もちろんです」

審判「それでは、バトル開始！」

ついにバトルが始まった。

ベル「行くのよ、チャオブー」

ナツコ「私の一番手は、この子よ。オオタチ！」

ベルは、チャオブーをナツコは、オオタチを繰り返した。
タケシ「チャオブーとオオタチか・・・」

デント「相性ならチャオブーのほうが有利だね」

ヤストシ「でも、あのオオタチ、なんかあるな」

そんなことをつぶやくヤストシ。

ベル「チャオブー、二トロチャージ」

チャオブーは、オオタチを攻撃しようとする。

しかしナツコは、オオタチに指示を出さずどんどんとチャオブーが近づきそしてその差が1メートルとなった時だった。

ナツコ「オオタチ、アクアテール！」

なんとオオタチは、アクアテールを攻撃しチャオブーは、避けられず
まともにアクアテールを受けてしまう。

カスミ「あのオオタチ、アクアテールを覚えていたいたの！」

ヤストシ「やつぱり、俺の予感が当たったな」

ヒカリ「でも、チャオブー、アクアテールをまともに受けたけど大丈夫かな？」

ヒカリは、心配するがチャオブーは、何とか立ち上がるうとする。

ナツコ「オオタチ、電光石火！」

オオタチは、チャオブーに電光石火を食らわせてチャオブーは、倒れてしまう。

審判「チャオブー、戦闘不能！オオタチの勝ち」

ベル「チャオブー、お疲れ様」

ベルは、チャオブーをしまい後ろへ下がった。

マサト「次は、僕です」

ナツコ「中堅は、あなたね。どんなバトルになるか楽しみだわ」

ジム戦の先ぼう戦は、破れてしまいあとがなくなった。

はたして中堅担当のマサトは、大将のサトシに回せるのか？

第43話 ピカリージム(前編)(後書き)

次回は、中編をお送りします。

第44話 ピカリージム（中編）

3人で挑んだピカリージムジム戦。

先ぼつこのベルが負けてあとがなくなり中堅のマサトに順番が回る。

審判「それでは、中堅戦。開始！」

ナツコ「次は、この子よ。ヨーテリー！」

マサト「行け、ユキメノコ！」

ナツコは、ヨーテリー、マサトは、ユキメノコを繰り出した。

ハルカ「なるほど、ノーマルタイプにゴーストタイプをぶつけてきたのねマサト」

ヒカリ「ノーマルの技にゴーストの技は、効かないからね」

タケシ「しかし、ナツコさんのヨーテリーがかぎわけるがみやぶるを覚えていたら、注意が必要だな」

サトシ「なんでだ？」

デント「かぎわけるを使うとみやぶると同じでゴーストタイプでもノーマルタイプとかくとうタイプの攻撃技が命中するんだ」

カスミ「その点を注意すれば大丈夫だと思うわ」

ナツコ「ヨーテリー、かみなりのキバ」

ヨーテリーは、かみなりのキバをユキメノコに向けて放つ。

マサト「ユキメノコ、ここえるかぜ」

ユキメノコは、ここえるかぜを繰り出しヨーテリーを当てる。

ナツコ「やるわね、マサト君。なら次はこれで行くわよ！ヨーテリー、シャドーボール」

ヨーテリーは、ユキメノコに向けてシャドーボールを繰り出した。

ゴーストタイプであるユキメノコには、同じゴーストタイプの技をまともに食らえば大ダメージは必至である。

マサト「ユキメノコ、れいとうビームでシャドーボールを打ち砕くんだ！」

ユキメノコのれいとうビームがシャドーボールを打ち砕く。

ナツコ「さすがねマサト君。でもここからが本番よ！ヨーテリー、ほのおのキバ」

マサト「ユキメノコ、まもる！」

ユキメノコが守りの体制に入りダメージを受けずにすむ。

ナツコ「なら、ヨーテリー、かぎわける！」

ヤストシ「やつぱり覚えていたな！」

ヨーテリーがユキメノコにかぎわけるを使いこれでノーマル、格闘タイプの攻撃技が命中する。

ナツコ「ヨーテリー、ギガイんパクト！」

ヨーテリーがキガイんパクトを繰り出しユキメノコに向かって来る。当たれば大ダメージは、避けられない。

マサト「危ない、ユキメノコ！」

ユキメノコはマサトの呼び掛けに応えたのかユキメノコの口かられいとうビームやこごえるかせより強力な技を繰り出した。

カスミ「なんなのあの技は！」

デント「あれは、こおりのいぶきだ！」

ヒカリ「こおりのいぶき？」

アイリス「こおりのいぶきって言うのは、必ず急所に当たるとても強力な技よ」

タケシ「あんな技を覚えるなんてマサトのユキメノコ、よく育てられてるみたいだな」

こおりのいぶきは、ヨーテリーの急所に当たり大ダメージを食らう。

ナツコ「まさか、こんな場面でこおりのいぶきを覚えるなんて！」

マサト「今だ！行け、ユキメノコ！こおりのいぶきで攻撃！」

ユキメノコは、勢いに任せて強烈な一撃を繰り出した。

ヨーテリーは、こおりのいぶきをまともに食らい戦闘不能となる。

審判「ヨーテリー、戦闘不能！ユキメノコの勝ち」

ケンジ「これで、1勝1敗」

ハルカ「これで王手をかけたかも」

ナツコ「いや」。参った参った。こんなにすごいトレーナーとは、

思っても見なかったわ」

マサト「そんなことありませんよナツコさん」

ナツコ「そうかしら？さてと、いよいよサトシ君。君の番のようだね」

サトシ「はい。必ず勝ってバッジをゲットしてみます」

ナツコに勝利宣言をするサトシ。

はたしてサトシは、勝利しバッジをゲットすることが出来るのか？

第44話 ピカリージム（中編）（後書き）

次回、ピカリージム戦、最終章です。

第45話 ピカリージム（後編）

3人で挑んだピカリージムジム戦。

中堅のマサトが勝ちこれで1勝1敗でこれで五分となり勝負は、ついに大将のサトシに順番が回る。

審判「それでは、大将戦。開始！」

ナツコ「さあ、私の最後のポケモンは、この子よ。エネコロロ」

サトシ「ツタージャ、君に決めた！」

ナツコの最後のポケモンはエネコロロ、サトシは、ツタージャを繰り出した。

タケシ「ナツコさんは、エネコロロ、サトシは、ツタージャか・・・

」
ケンジ「でも、サトシのツタージャはメロメロを持っている。あれは、結構有利な技だよな」

デント「けど、あのエネコロロが同性であったり素早かったりすると効かないという欠点があるから、そこをどうするかがポイントだね」

タケシ、ケンジ、デントがバトルの講評をしていた。

ヤストシ「それより、お前達！なんでチアガールの姿になっているんだ！！！！」

ヒロイン+ベル「いいじゃないのよ別に！」

ヤストシの言葉にそう言い返すヒロインとベル。

実は、ヒロインとベルはサトシがバトルの順番が回るとすばやくチアガール姿になりサトシを応援する。

ヒカリ「サトシ、ファイト！」

ハルカ「頑張れ、サトシ！」

カスミ「ファイトよ、サトシ！」

アイリス「頑張りなさいよ」

ベル「私の分も頑張つて」

ヤストシ「……………」

ヒロインとベルのチアガール姿の応援に呆れるヤストシ。

サトシ「ツタージャ、つるのむち！」

ツタージャは、エネコロロに向けてつるのむちを繰り出す。

ナツコ「エネコロロ、ジャンプして避けるのよ」

そう言うとエネコロロは、ジャンプしてつるのむちを避けていく。

ツタージャは、負けじとつるのむちを繰り出すがエネコロロは、つるのむちを避けていく。

サトシ「こうなったら。ツタージャ、メロメロ！」

ツタージャの得意技で食らえば勝利は、確実となるメロメロを繰り出しそれが見事エネコロロに当たる。ところがエネコロロは、メロメロにならなかった。

タケシ「え！メロメロが効かない！」

デント「あのエネコロロ、なのか！」

メロメロが効かないのでデントは、あのエネコロロを　だと判断するが……。

ナツコ「残念だけこのエネコロロは、　よ」

サトシ「　なのに、何でメロメロが効かないんって……」

ナツコ「この子の特性がミラクルスキンだからよ」

ケンジ「ミラクルスキン！！」

ヒカリ「なんなのその特性！」

ハルカ「聞いたことないかも」

ナツコ「ミラクルスキンって言うのは、変化技を受けにくい体になっているという特性なの。メロメロは、変化技。だから効かないのよ」

そうミラクルスキンの特性を説明するナツコ。

サトシ「どんな特性であろうと俺は、負けない！ツタージャ、リーフストーム！」

ツタージャは、リーフストームを繰り出し動き回るエネコロロに見事に当たる。

ナツコ「エネコロロ、ねこのて！」

エネコロロは、ねこのてを繰り出し口からほのおのキバを攻撃してくる。

サトシ「ツタージャ、つるのむちで避けてエネコロロの足につるのむちを引っ掛ける！」

ツタージャは、エネコロロのほのおのキバを避けてエネコロロの足につるのむちを引っ掛ける。

ナツコ「なっ！」

サトシ「そのまま地面にたたきつけるんだ！」

ツタージャは、つるのむちに引っ掛けたエネコロロを地面に叩きつける。

サトシ「ツタージャ、リーフブレード！」

ツタージャは、すかさずエネコロロに攻撃のチャンスを与えずリーフブレードをエネコロロに当てる。

エネコロロは、目を回していた。

審判「エネコロロ、戦闘不能！ツタージャの勝ち。よって、勝者チヤレンジャー、ベル、マサト、サトシ！」

ベル・マサト・サトシ「やったー！……！！！」

ナツコ「やられたわサトシ君。まさか、エネコロロの足につるのむちを引っ掛けてエネコロロの動きを封じ攻撃のチャンスを与えなかったさすがだわ」

サトシ「そんなことないですよ」

ナツコ「さあ、これはこのジムを勝ち抜いた証、ピカイチバッジよ受け取って」

そう言うってサトシ、マサト、ベルは、ピカイチバッジを受け取る。

サトシ「ピカイチバッジ、ゲットだぜ！」

マサト「ピカイチバッジ、ゲットでGOー！」

ベル「ピカイチバッジ、ゲットよー！」

ピカチュウ「ピッピカチュウ」

こうしてサトシ、マサト、ベルは、2つ目のバッジをゲットした。

サトシ達の冒険は、まだまだ続く。

第45話 ピカリージム（後編）（後書き）

サトシ「作者、バツジゲットしたぜ」

よかったね、サトシ。

ヤストシ「それで、ジム戦を終えたけどこのあとどうなるんだ？」

しばらく、これで行くよ。

ヤストシ「マジですか！」

サトシ「これってなんなんだ？」

それは、知らないほうが言いと思うよサトシ。

ヤストシ「そうそう」

サトシ「なんでだよ！」

それでは、次回もお楽しみに 無視

サトシ「無視するなよ！」

番外編？ ツタージヤの憂鬱（ゆづりつ）

（前書き）

今回は、番外編です。

ツタージヤ視点でお送りします。

番外編？ ツタージャの憂鬱（ゆううつ）

アタシは、ツタージャ、人間達にはくさへびポケモンと呼ばれる存在だ。

今日は、ジム戦でかなり疲れたわ。

いつもならこんなに疲れないんだけど、あのエネコロコには、かなり苦戦したわ。まさか、アタシのメロメロが効かない特性を持つとは、夢にも思っていなかったわ。まあ、アタシは、どこかの誰かさんと違いメロメロを頻繁ひんぱんに使わなくてもアタシには、かなりの実力がある。それは、サトシもピカチュウもそしてサトシの仲間もそれを認めている。

ワアアア・・・眠い。そろそろ寝ようとサトシの部屋へ向かおうとしたときだった。

ミジユマル「おい、ツタージャ！」

アタシに声をかけてきたのは、ミジユマルだった。

ツタージャ「どうしたのミジユマル？」

ミジユマル「ツタージャ、エモンガを見なかったか？」

そうアタシに尋ねるミジユマル。

また、あの子かっとアタシは、ため息をついた。

あの子には、かなりの腹黒いところがあるがある。責められるたり叱られたりするとすぐに嘘泣きをする。逆に叱ったほうの気を咎とがめさせてしまう。おまけにトラブルメーカーである。アタシと同じく覚えているメロメロを使つては、のポケモンから大好物のリンゴを奪ったり演技をして自分に都合のいい作り話にしてしまう。あの子の本性を気づいているのは、アタシだけ。あの子は、アタシをよく思っていないがそれは、アタシも同じである。

ミジユマル「それで、ツタージャ。どうする？サトシ達に言うてこようか？」

ツタージャ「いや、待って。サトシは、今日の昼間、ジム戦で疲れ

ているしもつ寝ているはずよ。それも他の人たちも同様よ」

ミジユマル「じゃあ、どうするのよ!」

ツタージャ「とりあえず、起きているメンバーだけで探しましょう。あんまりサトシ達も心配かけたくないし」

ミジユマル「ツタージャがそう言うなら。俺も従うよ。それじゃあ、起きているメンバーを連れてくるよ」

そう言うってミジユマルは、メンバーを連れてくるため戻っていった。それにしてもあの子は、どこへ行ったんだろう?アタシは、大体あの子の性格を知っているから行き先が皆目見当かいもけんとうがつく。

そうしているうちにミジユマルが起きているメンバーを連れてきた。ミジユマル「ツタージャ、起きているメンバーは、たったこれだけだったの」

ミジユマルがアタシに申し訳なさそうに言う。

ミジユマルが連れてきたのは、カスミのポケモンのルリリとヒカリのポケモンのポッチャマ、そしてアイリスのポケモンのキバゴの3匹である。

ツタージャ「アタシ達を入れて5匹か」

キバゴ「それで、ツタージャ。エモンガは、どこ行っちゃたの?」

ツタージャ「そのことについては、アタシに心当たりがあるわ」

ポッチャマ「心当たり?どこだよ、それ」

ツタージャ「このポケモンセンターの裏手にあるリンゴの木があるだわ」

ルリリ「リンゴの木?なんで、リンゴの木なの?」

ルリリが?マークを立てる。

まあ、ルリリがあの子については、まだ知らないからしょうがないけど……

ツタージャ「あの子は、リンゴが好物だから。きっとそこにいると思うわ」

ミジユマル「そうか!よし、ならあの子に大量のリンゴをプレゼントしよう」

ミジュマルの発言にアタシは、かなり呆れた。

あの子に一目惚れしているようだけどミジュマルがあの子の性格を知らないからこんなことを思うんだ。

ツタージャ「早速行きますか」

ポツチャマ「そうだな。早いところ見つけて寝よおと」

ルリリ「僕も、眠たいです」

2匹ともそうつぶやきながらアタシを先頭に裏手のリンゴ林へ向かった。

ポケモンセンターの裏手に着くとそこには、大量のリンゴの木がありリンゴが数多くなっていた。

ポツチャマ「すごい、こんなにリンゴがたくさんあるぜ」

ツタージャ「ピカリーシテイは、都会だけどこのジョーイさんは、自然好きらしくてポケモンセンターの裏手にリンゴのなる木を植えたとタブンネから聞いたけど」

キバゴ「予想以上だなこれ」

ルリリ「それより、エモンガは？」

ルリリが辺りを見渡す。

キバゴ「あ！いたよ」

キバゴがそう言うところには、リンゴをたらふくに食ったあの子の姿があった。

ポツチャマ「おーい、エモンガ。降りて来いよ」

そう言うにあの子は、気がつきめんどくさそうな顔で・・・

エモンガ「やーだ」

とアタシ達に言う。

するとミジュマルが木に登って行きあの子の元へ行く。

ミジュマル「エモンガちゃん、こんなところで寝たら風邪を引きますよ。さあ、僕がおぶりますから降りましょう」

そうあの子に手をかけた瞬間。

エモンガ「気持ち悪いよあんだ！」

ツタージャー！」

アタシは、何かを察知しその場を離れた瞬間、あの子がほうでんを繰り出しルリリ、キバゴ、ポツチャマ、ミジユマルに直撃する。特にポツチャマとミジユマルは、水タイプだから効果は、かなり抜群だわ。

エモンガ「ハハハハ・・・」

あの子は、息切れをする。

そしてアタシは、つるのむちであの子を木から降ろす。

エモンガ「また、あんたね」

ツタージャ「たく、ほんと、手の焼ける子だわ」

アタシは、あの子に。そう言ってあげた。

エモンガ「何よ、大きなお世話だよ・・・」

あの子は、そう言ったがアタシは、あの子に少しにらみつけてやった。

エモンガ「しょうがないわね。わかったよ、もう寝るよ」

あの子は、何かを感じたのかアイリスの部屋の方向へ歩いていった。

そしてアタシは、起き上がったルリリとキバゴとほうでんで伸び上がったポツチャマとミジユマルを連れてサトシの部屋へ戻っていた。アタシは、サトシの部屋へ着くとポツチャマとミジユマル、キバゴ、ルリリは、眠りに着いた。

アタシは、眠気が襲いアタシは、床で寝ようとしたが一瞬サトシの寝顔が目に入りアタシは、何かに釣られるようにサトシの布団の中に入る。

なんでだろう？アタシは、そんな気持ちでいっぱいだった。

そしてアタシは、眠りに着いた。

番外編？ ツタージヤの憂鬱（ゆうつつ）

（後書き）

ツタージヤの目線で見ただけのポケモンだけの話の番外編、どうでしたでしょうか？

以後、番外編をちよくちよくやりますのでぜひご覧ください。

第46話 幽霊騒動(前書き)

ツタージャ達が寝付いた後の話です。

第46話 幽霊騒動

ツタージャ達が眠りについて1時間後のこと。

ヒカリは、フツと目を覚ます。

ヒカリ「ハアアアアア」

ハルカ「どうしたのヒカリ？」

ヒカリが起きてすぐハルカも目を覚ましてしまう。

ヒカリ「ちよっと、トイレに行つて来る」

ハルカ「あそ」

ヒカリがトイレに行くため部屋を出て行ったあと、ハルカは、そう言つて再び眠りにつく。

部屋を出てトイレに向かうヒカリ。

ヒカリ「ハアアアアア、早く済ましてベットに戻るう」

そして女子トイレに入り、便を済まし部屋へ戻ろうとしたとき事件は、起こつた。

突如、目の前に明かりがフツと見えた。

ヒカリは、この時ジョーイさんの見回りだと思ひ気にしなかつた。

ところがその光の中から影が見えた。

ヒカリは、寝ぼけてた目を擦りとその影の上から炎が見えた。

ヒカリ「キ、キ、キヤーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！
！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！」

それを見たヒカリは、悲鳴声をあげる。

ヤストシ「なんだ！なんだ！」

タケシ「なんだ、今の悲鳴声は！」

ハルカ「あの声、ヒカリのよ！」

ケンジ「ヒカリ！！！」

悲鳴声に起こされたサトシ達は、ヒカリの元へ向かう。

カスミ「どうしたのヒカリ！」

サトシ達がかけつけるとヒカリは、涙目であつた。

サトシ「ヒカリ、何があった」

サトシの問いにヒカリは、言った。

ヒカリ「出たのよ!」

マサト「出たって何が?」

ヒカリ「お、お、お、お化けが!!!」

ヒカリは、震えながら答えた。

ヤストシ「お化けが出ただと!」

ヒカリ「見たのよ。明かりが見えてその影の上から炎が・・・」

タケシ「おいおい。何かの見間違いじゃないのか?」

デント「お化けなんて、そんなものいるはずがないよ。ヒカリが寝ぼけていて何かと間違えたんじゃないのか?」

お化けや幽霊など非科学的な物は、信用しないデントがヒカリにそう言った。

ジョーイ「なんなの騒々しいわね」

そこにジョーイさんがかけつける。

アイリス「ヒカリが幽霊を見たんですって!」

どことなく興奮しながら言うアイリス。

デントは、対照的で祟りや呪いなど、いわゆるオカルト的現象をよく信じるアイリス。

ジョーイ「幽霊ですって!」

アイリス「ジョーイさんは、幽霊とかお化けを信じますよね」

デント「いやいや、そんな非科学的なものは、信じないですよねジョーイさん」

ジョーイ「は、はあ・・・」

デントとアイリスの質問にジョーイは困り果てた顔をしている。

そんな時再び、ヒカリの見た影が目の前に現れる。

カスミ・ハルカ・ヒカリ「出たーーーーー!!!!!!」

ヒカリを始めお化けや幽霊がとても苦手のカスミやハルカも叫ぶ。
ヤストシ「あれが、ヒカリが見たお化けか・・・」

アイリス「どこかで見たことのあるシルエットだわね・・・」
カスミやハルカ、ヒカリとは、逆にヤストシとアイリスは、落ち着いていた。

デント「あれが幽霊か。あれは、幽霊じゃなく何かの反射で見えるんだよ」

相変わらず非科学的なものを信じずどうあっても科学的な根拠で位置づけようとするデント。無理すぎるだろうそれ。

サトシ「おい！ツタージャ！」

突如サトシのツタージャが走り始めて幽霊の方角へと向かう。

そしてその幽霊に向かってつるのむちを発射する。

しかしその影は、すばやく避けられて奥の通路へ逃げ込んだ。

アイリス「待ってー！」

アイリスがツタージャのあとを追いかけて通路を曲がろうとした時黒い塊がアイリスの目の前を通っていった。

ハルカ「何なの今の！」

ジョーイ「あれは、シャドーボールよ！」

タケシ「シャドーボールって言うことは・・・」

ヤストシ「あいつは、ポケモンだね」

アイリス「なんだ、幽霊じゃなかったのか」

それを聞いてガツクリするアイリス。

サトシ「とにかく追いかけてみようぜ」

ケンジ「そうだな」

ハルカ「賛成かも」

ヤストシ「よし、行くぞ！」

そう言ってそのポケモンの正体を見るためサトシ達は、追いかけて始めた。

すると、1キロ離れたところにさっきのポケモンがいた。

サトシ「いたぞ！」

????「ヒト！」

ハルカ「待ちなさい」

しかしそのポケモンは、再び逃亡をするが、どうやらすばやさがありなくなりサトシ達にいよいよ追いつかれそうになったその時だった。

ベル「何の騒ぎ〜」

ようやく目を覚ましたベルがいきおいよく扉を開けた瞬間そのポケモンにぶつかった。

サトシ「おい〜、ベル。そっちにポケモンを見なかったか？」

ベル「いいえ。見なかったけど」

そうベルがそう言った時だった。

???「ヒト〜」

ベル「誰か何か言った？」

ベルがそう言うがサトシ達は、何も言っていないと首を振る。

ベル「じゃ・・・」

???「ヒト〜」

カスミ「その扉から聞こえてるわ」

ベル「え！」

そう言われてベルは、扉を引くとそこには、ろうそくみたいなポケモンがいた。

アイリス「あ！ヒトモシ！！」

そう叫んだアイリス。

ジョーイ「でも、どうしてヒトモシがここに・・・」

そう疑問に感じるジョーイ。

ヤストシ「なあ、サトシ。もしかしてこのヒトモシって列車で見かけたあのヒトモシじゃないのか？」

サトシ「あ！確かに・・・」

そう答えた時、ヒトモシが目を覚ましヒカリに抱きつく。

ヒカリ「え？え？え？」

ヒトモシが抱きついたことに混乱するヒカリ。

ヤストシ「もしかして、そのヒトモシ。ヒカリを気に入れてこまで来たんじゃないの？」

ヒカリ「え！」

マサト「僕もそう思う」

サトシ「俺も」

ヒカリ「そうなのヒトモシ？」

そう尋ねるとヒトモシは、頷いた。

ヒカリ「分かったわ。それじゃあこれからよろしく」

そう言つて空のモンスターボールの中へと入つていった。すぐボ-

ルは点滅したがそれはすぐに止んだ。

ヒカリ「ヒトモシゲットで大丈夫」夫

ポツチャマ「ポツチャマ」

こうしてヒカリは、新しくヒトモシをゲットした。

そして彼らの旅は、まだまだ続く。

第46話 幽霊騒動（後書き）

どうだい、ヒカリ。新しいポケモンゲットした気持ちは？

ヒカリ「イツシユのポケモンだからゲットできてうれしいけど、どうしてヒトモシなの？」

それは、可愛いから。

ハルカ「なんかすごい決め方かも」

悪かったな、すごい決め方で。まあそれは、いいとして次回は、サトシの新たなライバルが登場する予定だ。

ヒカリ「サトシの新たなライバル！一体どんな人かな？」

ハルカ「すごく気になるかも」

まあ、それは、次回のお楽しみって言うことで。それじゃあ、ヒカリとハルカ。締めよろしく。

ハルカ・ヒカリ「次回もポケモンゲットで大丈夫〜夫（かも）」

第47話 サトシの新たなライバル登場

ジム戦から一夜明けてたサトシ達は、とても眠そうである。昨夜の騒動がかなり響いているようだ。

サトシ達は、ポケモンセンターを歩いていた時1枚のポスターを見つける。

アイリス「あ！サトシ、見て見て。この街にポケモンバトルクラブができたらしいよ」

サトシ「本当か！？よし、朝飯食ったら行くぞ」

そう言つて急いで食堂へ向かった。

アイリス「うわあ、あんなにはしゃいじゃってホント子供ね」

カスミ「ホントバトル好きなんだから・・・」

ヒカリ「まあ、それがサトシなんだけどね」

食堂に向かったサトシを見て呆れるカスミ達。

ハルカ「そういえば、ポケモンバトルクラブってどんなところなの？」

マサト「え！お姉ちゃん知らないの。ポケモンバトルクラブって言うのは、イツシュ地方の各所に存在する、トレーナー同士が自由にポケモンバトルすることができる施設のことなんだ。その施設内の掲示板で対戦待ちのトレーナーとそのポケモンのプロフィール等が閲覧でき、そのトレーナーにポケモンバトルを申し込むこともできるんだ。それに、この施設には『ドン・ジョージ』という運営者がいて、その人は、ジョーイさんやジュンサーさんのように沢山の親せきがいて全員同じ顔なんだ」

タケシ「そうなんだ」

ハルカ「ところで、なんでマサトがそんなことを知っているのよ」

ヤストシ「同じ施設がピカチュウ号の中にあつてサトシとそこでバトルしたんだから知っているのは、当然だよねマサト」

マサト「ヤストシ！僕の台詞をとらないでよ！」

マサトは、台詞をヤストシに奪われて怒る。

デント「それで、みんなも行ってみるかい？」

ケンジ「イツシユ生まれの施設がどんなものか結構興味あるから、行ってみようかな？」

ヒカリ「アタシも一度見てみたいわ」

ハルカ「わたしもかも」

タケシ「俺も興味あるな」

全員、ポケモンバトルクラブに興味がわいてきたのか、行ってみたくなったようだ。

ヤストシ「よし、朝食食つたらすぐに行くぞ」

こうして、朝食を食べ終えた後、一行はポケモンセンターを後にして、ピカリーシティに新しく出来たポケモンバトルクラブへ向かった。

サトシ「早速、ポケモンバトルだぜ」

アイリス「うわぁ、バトルの事となるとすぐこれなんだから。ホント子供なんだから」

サトシ「だって、俺しばらく他のトレーナーとバトルしてなかったんだぜ。ほら、ピカチュウだってやる気まんじやないか」

ピカチュウ「ピッカチュウ！」

カスミ「ピカチュウまで……」

ハルカ「ポケモンは飼い主に似るってのはこのことかも」

タケシ「まあ、それがサトシとピカチュウの関係じゃないか」

デント「サトシとピカチュウの関係はいつでも素晴らしいテイストを醸し出してるからね」

サトシのポケモンバトルクラブに入った瞬間の反応やパートナーのピカチュウの反応に呆れつつも、その光景を微笑ましく見守るカスミ達。

ヒカリ「あそこに男の人がいるけど誰なの？」

ヒカリは初めて見るドン・ジョージについて、聞いてみた。

デント「あれがさっきマサトが説明したドン・ジョージさんだよ。」

このポケモンバトルクラブを運営している人だよ」

イツシュ出身のデントが丁寧に答える。

サトシ「すみませーん」

サトシはドン・ジョージに声を掛ける。

ドン・ジョージ「おや？ 君は確かイツシュでも何回か会ったことがあるな」

サトシ「はい。ポスターを見るとホクシン地方でもポケモンバトルクラブが出来たみたいですね」

ドン・ジョージ「うむ。君の言うとおり、ポケモン協会からの要望を受けてポケモンバトルクラブ未開の地でも広める活動を始めたんだ。寝台特急ピカチュウ号とピカリーシティは、その第一歩というところだ」

サトシ「今、利用できますか？」

ドン・ジョージ「少し前にバトルフィールドの方は使用できる状態になったんだ。すでに何人かのトレーナーも集まっているから、良かったら対戦してみると良い」

サトシ「本当ですか！？それじゃあ、早速使ってみます」

ドン・ジョージの答えに、パアアと笑顔を見せるサトシ。するとそこへもう一人、やってきた。

ジョーイ「ドン・ジョージさん。トレーニング場の準備もできましたよ」

はるばるイツシュ地方から手伝いで来ていたジョーイが声を掛けてきた。

ちなみにイツシュのジョーイは、カントー・ジョウト・ホウエン・シンオウ・ホクシンのジョーイに比べるとかなり幼いが知識と医療は、さほど変わらない。

ドン・ジョージ「うむ。これで全ての機能が使えるようになった。本当に助かった」

ジョーイ「いえいえ」

ドン・ジョージとジョーイが仕事の会話をしていると・・・

タケシ「うおおおおお!!! あなたがイツシュ地方のジョーイさんですか!!!」

ジョーイ「は、はい。そうですけど・・・」

タケシが猛スピードで初めて見るイツシュ地方のジョーイの手を取り、いつものごとくナンパを開始した。

タケシ「自分はタケシといいます。あなたのような美しい方と出会ったのもまた何かの縁。これから自分とイツシュ地方のポケモンについて語りませんか？」

ジョーイ「は、はあ・・・」

ジョーイは完全に困り果てた顔をしている。

ケンジ「始まったよ。また」

ヒカリ「相変わらず、早っ!?!」

ハルカ「あの性格治してほしいかも」

アイリス「うわぁ、ある意味凄いわ・・・」

ベル「さっきの素早い動きを別の形で役立てたらいいのに・・・」

カスミ「全く、タケシったら・・・」

マサト「しょうがないなあ・・・」

デント「アハハハハ・・・」

ヤストシ「誰か止めるよタケシを」

久々のタケシのナンパ行動にカスミ達は呆れながら言った。デントは、苦笑を浮かべている。そしてカスミ、マサト、ヤストシがタケシを引きづり出そうと準備しようとした時。

タケシ「ぐはっ!?!?しびれびれ」

グレッグル「ケッ!」

タケシのモンスターボールからグレッグルが飛び出して、タケシにどくづきを喰らわすとんーんーとうなりながらいつものようにタケシを引きずる。近くで見ていたサトシは苦笑を浮かべ、遠目で見えていたカスミ達は呆然としていた。その後、サトシは対戦相手を探すために掲示板を眺めていた。

サトシ「よし! 俺、コイツと戦いたい!」

ヤストシ「ダア〜」

掲示板を眺めて1分もしないうちに対戦相手を決めるサトシ。そのスピードに思わずヤストシがこけてしまう。

ヤストシ「早すぎるだろう決めるの!」

ケンジ「もうちよつと、ゆっくり考えようよサトシ」

サトシ「だって、俺今すぐ戦いたいんだ。悩んだって仕方ないだろ。」

サトシがどうだと言わんばかりに言うので、ヤストシ達は苦笑を浮かべた。

ドン・ジョージ「それではこの子でいいんだね。この子もこの施設内にいてすぐに対戦したがつているから、今すぐにでも対戦できるよ。」

サトシ「それ、最高じゃん。それじゃあ、ピカチュウ。早速準備だ。」

ピカチュウ「ピッカ!」

サトシとピカチュウは間髪入れずにバトルフィールドへと向かっていった。

ヒカリ「相変わらずだねサトシわ」

アイリス「ホント、子供ね〜」

カスミ「おこちゃまね〜」

ハルカ「サトシらしいと言ったらサトシらしいけど」

ヤストシ「しかも、バトルのポケモンをもう決めているしな」

それぞれ苦笑しながら、バトルフィールドに向かうサトシの背中を見る。するとそこに一人の少年がバトルフィールドに現れる。どうやらこの少年がサトシの対戦相手のようだ。

???「お前か。俺を選んだやつは」

サトシ「そうだけ。俺は、マサラタウンのサトシ」

???「俺は、タムムシティのタツヤ。俺も丁度、バトル相手を探してたところなんだ。くうー、腕が鳴るぜ」

タツヤは、サトシ同様にバトル相手を探してたよう。

ヤストシ「げ！タツヤ！」

タツヤ「お前は、ヤストシじゃないか！」

サトシ「ヤストシ、知っているのか？」

ヤストシ「ああ。俺がまだ旅に出始めた頃に出会ったやつでカントリーグ、ジョウトリーグベスト8、ホウエンリーグ、シンオウリーグ、ホクシンリーグベスト4と好成績を残してるんだ」

マサト「そんなにすごい人だったんだ」

タツヤ「そんなことないぜ」

カスミ「あら、サトシだつて負けてないわよ。セキエイリーグでベスト16、オレンジリーグ制覇、ジョウトリーグ、ホウエンリーグでベスト8、シンオウリーグ、イツシュリーグでベスト4の成績を収めているわよ」

タツヤ「本当か？ 俺、そんな強い相手と戦えるなんて夢のようだ」

サトシ「それは俺も同じだよ。いきなりこんな強い相手と戦えるなんて思ってもみなかったぜ」

タツヤ「お互い、正々堂々のいいバトルにしような」

サトシ「ああ、こちらこそ。」

タツヤとサトシはバトル前の握手をする。

するとそこへ。

シュウ「ハルカじゃないか」

ハルカ「シュウ！」

シュウの突然の登場にびっくりするハルカ。

ハルカ「どうしてここにいるの！」

シュウ「たまたま、歩いてたらこの施設が目に入って、入っただけさ」

ヤストシ「（相変わらず素直じゃないな。シュウ）」

ヒカリ「（ハルカもハルカよ。告白されたって言うのに自覚がまったくくないわ）」

そう心の中で思うヒカリだが実際は・・・

ハルカ「（まさかこんなに早く再会するなんて）。返事のひとつも

考えていないかも〜」

ハルカは、頭の中でかなり混乱していた。

サトシ「それじゃあ、始めましょうかタツヤさん」

タツヤ「タツヤさんって〜。タツヤって呼び捨てでいいぜ」

サトシ「そっか、それなら俺のことも呼び捨てでいいぜ」

タツヤ「じゃあ、改めてよろしくなサトシ」

サトシ「こちらこそ、タツヤ」

2人とも同じバトル好きの性格のせいか、すっかり意気投合したようだ。

ヤストシ「サトシ、言っとくがタツヤは、強いぜ。そう簡単には勝てないぜ」

サトシ「分かってるさ。でも俺、強い相手と戦えることにワクワクしてるんだ」

タツヤ「それは俺もだ」

カスミ「なんだかサトシもタツヤもお互い似ているところがあるわね」

タツヤ「早速、バトルしようぜ」

サトシ「そうだな。早速やろうぜ」

こうして、タツヤとサトシによるポケモンバトルが開始されるのであった。

第47話 サトシの新たなライバル登場（後書き）

カスミ「まさか、新しいライバルは、サトシにどことなく似ているキャラを使ってくるとはね」

だって、サトシのライバルのシンジやシューティーは、サトシとは正反対だからな。

ヒカリ「それでサトシと同じ性格のオリキャラを作ったわけね
そう言う事。

ヒカリ「同じ性格同士のバトル。どんな展開になるんだろうね」
カスミ「それは、そうとして、またシュウを出すなんて」

俺は、サトカス派だけど同時にシュウハル派でもあるんだぜ。

ヒカリ「でも、そうするとサトハル派の人たちからクレーム来ない？」

そこは、大丈夫だよ。意外なことにサトハル派よりシュウハル派の人たちが多いんだ。

カスミ「そうなんだ」

ヒカリ「でも、これでライバルが減るかも」

そうなるんだろうね。と言うことで最後になったけどカスミ、ヒカリ締めよろしく。

カスミ・ヒカリ「次回もポケモンゲットしてね（大丈夫）」

第48話 サトシVSタツヤ(前書き)

今回は、サトカス・シュウハル要素が入っています。

第48話 サトシVSタツヤ

ピカリーシティに新しく出来た『ポケモンバトルクラブ』で初対面
早々、バトルすることになったサトシとタツヤ。

ドン・ジョージ「只今より、マサラタウンのサトシとタマムシシテ
イのタツヤによるポケモンバトルを始める。使用ポケモンは両者と
もに1体。どちらかのポケモンが戦闘不能になったとき、終了とす
る」

ポケモンバトルはタツヤの要望で1体のガチンコ勝負になった。サ
トシもそれを快く受け入れて成立した。

タツヤ「俺のバトルスタイルは、ストレート1本槍。俺の一番の相
棒でいくぜ。出てこい、プクリン」

プクリン「プクリン！」

サトシ「タツヤがその気なら、俺も一番の相棒で真っ向勝負だ。ピ
カチュウ、君に決めた！」

ピカチュウ「ピカッ！」

タツヤはプクリン、サトシはピカチュウをバトルフィールド上に出
した。

タケシ「サトシはピカチュウ、タツヤはプクリンか」

ケンジ「あのプクリン、見るからに強そうだな」

ヤストシ「ピカチュウがああプクリンにどう立ち向かうか、そこが
焦点だな」

デント「体の大きさで差があるけど、サトシのピカチュウにはそれ
をはねのけるほどの力があるからね。どっちが勝つか、分からない
よ」

それぞれ、プクリンについての第一印象、ピカチュウがそれにどう
立ち向かうかなどを語っていた。すると、サトシのバトルとなると
当然のごとくこの人が出る。

ヒカリ「サットシ、ファイト！」

ポツチャマ「ポチャ」

ミミロル「ミンミン」

ヒカリがすでにチアガール姿になってサトシを応援していた。

そしてヒカリ以外にも・・・

アイリス「ファイト、ファイト、サ・ト・シ！」

カスミ「ハイパーキュートでスペシャルラブリー！ハナダジムのお転婆人魚のカスミちゃんがついてるわよ」

アイリスとカスミもチアガール姿で応援していた。

しかも前回より見事に意気ピツタリのチアリーダーイングを見せた。

シユウ「なんなんだ、あの子達は・・・」

ヤストシ「ヒカリはサトシのバトルの時は必ずといつていいほど、チアリーダー姿で応援してたんだ。それにつられてカスミとアイリスもチアリーダー姿で応援しているんだ」

ヒカリを不思議そうに見つめるシユウにヤストシが答えた。

タケシ「それにしても、意気ピツタリだな。あの三人」

ケンジ「それより、ヒカリよりカスミの方が大胆な応援だな」

そんな三人の応援姿を遠目で見ていたハルカが・・・

ハルカ「それなら、私もチアガール姿になって応援するかも」
シユウ「えっ！」

ハルカの発言に驚いた顔をするシユウ。

ヤストシ「やめんかい、ハルカ！」

ハルカがチアガール姿になろうとした時ヤストシが止めに入った。

ハルカ「なんで？」

ヤストシ「なんでって。お前のチアガール姿を見て鼻血出して倒れそうな人間がいるからやめたほうがいい」

ハルカ「誰なの？私のチアガール姿を見て鼻血出して倒れそうな人間って？」

ヤストシ「そんなの自分で考えるこの鈍感娘！」

ハルカ「なんですって！」

ヤストシの発言に怒り出すハルカ。

シユウ「（ありがとうヤストシ。それにしても君は、ハルカに対して一言多いよ）」

そう心の中で感謝と嫌味を言うシユウ。

ベル「よし、それならわたしも・・・」

タケシ「やめんかあ！」

ベルもチアリーダー姿になろうとしたところを、悲痛な叫びをあげながらタケシが制止した。

サトシ・タツヤ「（頼むからバトルを見てくれよ。バトルを）」

カスミ達の騒ぎを見て、バトルを見てほしいと心の中でつぶやく二人。

ドン・ジョージ「なんか上のほうで騒がしいがこれよりバトル開始！」

ドン・ジョージの合図により、サトシのピカチュウとタツヤのプリンによるバトルが開始された。

タツヤ「まずは先手必勝だ！プリン、ころがる」

プリンがころがるで先手を取った。

サトシ「かわせ！」

ピカチュウは難なくかわした。

サトシ「ピカチュウ、アイアンテール」

ピカチュウはアイアンテールで反撃をする。

タツヤ「かわすんだプリン！」

プリンもピカチュウのアイアンテールを難なくかわした。

そして再び2体は対峙した状態になる。

サトシ「やるな、タツヤ」

タツヤ「サトシもな。でも負けないぜ」

サトシ「望むところだ」

再び戦闘モードに入った2人。

サトシ「ピカチュウ、エレキボール」

ピカチュウがエレキボールでプリンに攻撃する。

タツヤ「かわんだ、プリン」

プクリンはエレキボールを難なくかわした。

タツヤ「プクリン、シャドーボールだ！」

プクリンは、シャドーボールを繰り出しピカチュウに攻撃する。

サトシ「ピカチュウ、アイアンテールでシャドーボールを打ち返せ！」

タツヤ「なに！」

ピカチュウは、アイアンテールを繰り出しシャドーボールをとらえ、プクリンに向けて打ち返した。

しかしノーマルのプクリンには、シャドーボールは効果がないためダメージはない。

サトシ「今だ、ピカチュウ。エレキボール！」

なんと、シャドーボールを打ち返した直後エレキボールを繰り出した。

放ったエレキボールは、見事プクリンに命中する。

タツヤ「プクリン！」

プクリンは倒れたがすぐさま立ち上がった。

タツヤ「よし、まだ戦えるな。ここから反撃だ」

プクリンは攻撃のため、ピカチュウに素早く近づいた。

サトシ「今だ、ピカチュウ。プクリンに10万ボルト」

ピカチュウは10万ボルトを繰り出しプクリンに攻撃する。

タツヤ「プクリン、まるくなるからころがるで10万ボルトを弾くんだ」

プクリンはよける指示ではなく、そのまま突っ込んで攻撃をする指示を選択した。ころがるの回転によって、ピカチュウの10万ボルトは弾かれ、プクリンはそのままピカチュウに直撃する。

サトシ「ピカチュウ！」

まるくなるの効果で威力が倍になった影響で、大ダメージを受けた。それでも、ピカチュウはサトシ譲りの根性で立ち上がった。

一方の観客席で、サトシを見守るカスミ達は……
ヤストシ「すごいバトルになってきたぞ。おい！」

デント「うん。こんなスパイシーでエキサイティングなテイストのバトルは久々に見たよ」

マサト「ほぼ互角のバトルだよ」

タケシ「これは長期戦になりそうだな。バクフーンもピカチュウもどこまで体力が持つか・・・」

ハルカ「それにしても、バトルを見てると、なんだかコンテストバトルを連想させるかも」

ヤストシ「サトシは、コンテストに何回も出ているからわかるけど、タツヤのプクリン。さっきの軽快なステップといい、コンテストの動きそのものだな。あいつ、どこで覚えたんだろう?」

???「それは、タツヤにはちよくちよくわたしのコンテストバトルの特訓を手伝ってもらってたの。だからよヤストシ君」

突然後ろの方から女の人の声が聞こえてヤストシ達は、振り向く。

ヤストシ「あー！！！！！お前は!」

???「久しぶりだね。ヤストシ」

ヤストシ「誰だっけ?」

ズーン

ヤストシの爆弾発言に少女を始めタケシ達がこける。

???「何よヤストシ!覚えていないのに「あー！！！！！お前は!」はないでしょう?」

ヤストシ「冗談だよ、覚えてるよヒジリ」

ヒジリ「覚えていたならどうしてあんなことを言うの!」

ヤストシ「ギャグ小説のお約束だから・・・」

ヒジリ「そんなことやらなくていいの。第一この小説は、ギャグ小説じゃないわよ!」

その通りだ!

ケンジ「ところで、ヤストシ。この人誰なんだ?」

ヤストシ「こいつは、ヒジリと言ってタツヤの幼馴染でヒカリとハルカ、シユウと同じコーディネーターでなんとジョウトのアイドル兼トップコーディネーターのマリナとは、ライバル関係でまたヒジ

リは、別名イーブイ使いと言われているんだ」
シユウ「君が！」

ヒジリ「あら！誰かと思っいたらルースの貴公子、シユウ君とハウ
エンの舞姫、ハルカちゃんじゃないの！」

二人に気づき声をかけるヒジリにシユウとハルカは、驚いた表情を
浮かべた。

ベル「それにしてもタツヤ君のプクリン。10万ボルトをころがる
で弾くとは驚いたわ」

タケシ「普通なら、避けるところだからな」

ヒジリ「タツヤのバトルスタイルは直球一本槍の真つ向勝負が基本
なのよ。今では避ける戦略も混ぜてるんだけど、トレーナーに成り
立てだったころは避けることよりも逆に自分の攻撃に繋げてたこと
が多かったわ」

ハルカ「攻撃は最大の防御かも」

ヤストシ「それにしても、どうしてここに来たんだ？」

ヒジリ「タツヤと一緒に旅をしてるの今」

ケンジ「タツヤと一緒に？また、どうして？」

ヤストシ「そういえば、ヒジリは、タツヤのことがす

ヒジリ「違ーーーーーうー！！！」

ヤストシ「ギャーーーーーアーーーー！！！！！」

ヒジリに顔を殴られたヤストシであった。

一方、バトルの方はその後一進一退の攻防が続き、プクリンもピカ
チュウも残り体力が僅かとなっていた。

サトシ「次で決めるぞ。ピカチュウ、ボルテッカー！」

タツヤ「そっちがその気ならこっちも真つ向勝負でいくぜ。プクリ
ン、ソーラービーム」

最後の一撃といわんばかりにお互い正面攻撃で迎え撃つ。丁度、バ
トルフィールドの中央で両者がぶつかり合い、爆発とともに煙が立
ち込めた。

マサト「一体、どうなったの！？」

観客席も固唾を飲んで見守る。しばらくして煙が晴れると両者ともにかろうじて立っていた。だが、2匹は、目を回していた。

サトシ「ピカチュウ!?」

タツヤ「プクリン!?」

ドン・ジョージ「両者戦闘不能。よってこの勝負引き分け。」

ピカチュウもプクリンも倒れたため、サトシとタツヤのバトルは引き分けになった。サトシはピカチュウに、タツヤはプクリンにそれぞれ近寄る。

サトシ「惜しかったな、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ・・・」

バトルを終えたピカチュウはサトシにバトル直後とは思えないくらいニツコリしながら声を出す。

タツヤ「お疲れ、プクリン。ゆっくり休んでくれ」

プクリン「プクリン」

そうプクリンを労うとタツヤはプクリンをボールに戻した。

サトシ「いい、バトルだったぜ。タツヤ」

タツヤ「こっちも、こんなに熱くなったバトルは久しぶりだよ。サトシ」

サトシとタツヤはお互いを称えながら、握手をする。

カスミ「サトシ」

ヒジリ「タツヤ」

カスミとヒジリがバトル直後の2人に抱きつく。

サトシ「おい!カスミノノ」

抱きつかれたサトシは、顔を真っ赤にする。

ヒカリ「あ!カスミ、ずるいわよ」

アイリス「あたしも抱かせてよ」

ベル「私も!」

そう言っつてヒカリとアイリス、ベルがサトシに抱きついた。

シユウ「君は、行かなくていいのか?」

ハルカ「今日は、そんな気分じゃないかもノノ」

いつもなら抱きついていくハルカだが今日は、シュウがいたためか？サトシに抱きつこうとせずそれどころかシュウにそう言われて顔が赤く染める。

ヒジリ「タツヤ」

タツヤ「あんまりくっつくなよヒジリ」

ヤストシ「やっぱり二人とも」

ヒジリ・タツヤ「違ーーーーーうーーーー！」

ヤストシ「ギャーーーーーア!!!!!!!!!!」

ヒジリとタツヤに顔を殴られるヤストシ。

本日2度目である。

こうして、サトシとタツヤによるバトルを終えて、翌日、タツヤとヒジリと別れてサトシ一行は次の目的地カッチュウシティを目指しピカリーシティを旅立つのであった。

そんな時、ピカリーシティの人通りのいない路地に怪しい人物がいた。

???A「あれがピカリー塔か」

???B「あの塔は、電波塔としての役目があるそうだ」

???C「あそこを占領すればホクシン、いいや全国に情報を発信しているんだな」

???D「しかもあそこには、われらが探している石が展示されているわ」

???E「それも2つ」

???B「武装をしたやつらも連れてきたしこれで安心だ」

???C「我らロケット団は、目的のためなら手段を選ばない！」

???E「よし、早速突入だ！」

???A「まあ、あせるな。今は時期尚早。時が来るまで待とう」

???D「鳴かぬなら 鳴くまで待とう ホトトギス」ですか」

???C「わかったぜ。焦ったら終わりだからな」

???A・B・C・D・E「「「「我らロケット団の未来のため

に「「「「

秘密裏でロケット団が工作活動をしていた。このことが今後の展開に影響を与えるとはピカリー市民は、もちろんサトシ達も知るよしもなかった。

第48話 サトシVSタツヤ（後書き）

と言うわけで、オリキャラのタツヤの幼馴染のヒジリです。

ヒジリ「それより作者。なんであんなの入れたのよ。わたし物凄く恥ずかしい思いましたじゃない」

いいじゃないか、別に。

ヒカリ「それよりサトカスよりシュウハルが今回二人と同じく目立ったね」

俺は、サトカスの作者でありながら、シュウハル派の作者でもあるからな。

ヒジリ「だって、ハルカ」

え！いたのかハルカ！

ハルカ「いちやあ悪い！」

悪くはないけど。それより、ハルカもシュウに告白されてかなり気にしているんじゃないか。

ハルカ「そんなこと……ないかも……ノノノ」

（分かりやすい反応……やっぱり気にしてるんじゃないか）安心してろ、ハルカ。シュウとは両思いだから

ハルカ「え！それは、どういう意味」

さて、最後になりましたが感想の方をよろしくお願いします。
タタタタタタタタ

ヒジリ・ヒカリ・ハルカ「逃げた……」

第49話 襲撃(前書き)

今回もシュウハル(と言うよりシュウハル マサト)要素を入れています。

キバゴ「キバ!？」
ポッチャマ「ポチャ!？」
ルリリ「リリルル!？」
どこからか、8つのアームが現れ、ピカチュウ、キバゴ、ポッチャマ、ルリリを掴んでどこかへ連れ去るように動いた。
サトシ「一体なんなんだ!？」
ピカチュウが連れ去られた方向に目を向けるとそこにロケット団がいた。

???「『一体なんなんだ!？』と聞かれたら」

???「名乗ってあげるのが当たり前」

???「宇宙の破壊を防ぐため」

???「宇宙の平和を守るため」

???「恋と成熟の悪を貫く」

???「お茶目で恋の敵役」

???「カミオタイ」

???「ナカオタイ」

???「シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」「」

ベル「ロケット団!」

カミオタイ「久しぶりだな」

カミオタイ「しかし、今日は我々だけではない」

そう言うその他の方向から台詞が聞こえてきた。

???「なんだかんだと聞かれても」

???「答えないのが普通だが、特別に答えてやるっ」

(長くなるので以下省略いたします)

???「???」カットするな作者!」

ヤストシ「誰かと思ったらヤマトとコサンジか」

コサブロウ「コサブロウだー！いい加減覚える！」

ヤストシに怒鳴りつけるコサンジ。

コサブロウ「ナレーションまで、間違えてんじゃねえ！」

ごめんね、ごめんね！

コザブロウ「U 工事のネタで謝るな！」

カミオタイ「コサンジ、ツッコミ入れる暇あつたらさっさと逃げるぞ」

コサブロウ「だからコサブロウだつて言っているだろう！」

ヤマト「とにかく逃げろわよ」

そう言つてピカチュウ、ルリリ、ポツチャマ、キバゴをかごに入れて逃亡を始める。

タケシ「逃げた！」

サトシ「逃がすか！ツタージャ、リーフストーム」

サトシは、ツタージャを繰り出し攻撃をする。

そしてリーフストームが見事5人に当たった。

ヤマト「いたたたた・・・」

カミオタイ「よくもやってくれたな！」

ナカオタイ「俺達、毒使い3人組を怒らせたな！」

ヒカリ「毒使い3人組じゃなくて 山線トリオの間違いじゃないの？」

シモオタイ「断じて違う」

ナカオタイ「 山線トリオとか言うな！」

カミオタイ「もお、怒つたぞ。行け、ドラピオン」

ナカオタイ「ニドキング！」

シモオタイ「ペンドラー！」

カミオタイ達が毒タイプのポケモンを繰り出す。

ナカオタイ「おい！ヤマト、コサンジ。お前達も戦うんだ」

コサブロウ「だからコサブロウだー！」

ヤマト「それと命令口調で言わないでほしいわね」

そう言つてヤマトとコサブロウは、デルビルとグラエナを繰り出し

た。

ナカオタイ「作戦に時間がかかるから暇でお前たちを襲ったが」

シモオタイ「こんなことになるとは、夢にも思ってもなかったぜ」

マサト「作戦!？」

カスミ「一体何をたくらんでいるの。あんた達!」

一部始終を聞いたマサトとカスミがカミオタイたちに問いかけるが・
・。

カミオタイ「そんなの教えるわけないだろう。バーカー」

ナカオタイ「さあ、やるぞ。ニドキング、ベノムシヨック」

シモオタイ「ペンドラー、ポイズンテール」

ニドキングとペンドラーがサトシたちに向けて攻撃を仕掛ける。

マサト「行け、サーナイト。サイコネシスでサトシたちを守って」

マサトは、サーナイトを繰り出しサイコネシスを指示し攻撃する。

サイコネシスは、ニドキングのベノムシヨックとペンドラーのポイズンテールを打て消ししかも2匹のポケモンにあたる。2匹とも毒タイプのためエスパータイプの技のサイコネシスには、効果抜群である。

コサブロウ「グラエナ、サーナイトにかきつく」

ヤマト「デルビル、あなたもサーナイトにイカサマ」

グラエナとデルビルがサーナイトを攻撃しようとする。

サーナイトは、エスパータイプ、悪タイプのグラエナとデルビルの攻撃をまともに受ければ戦闘不能は確実である。

ハルカ「アゲハント、ぎんいろのかげ」

シュウ「フライゴン、マッドショット」

その二匹に横からハルカのアゲハントとシュウのフライゴンが攻撃する。

二匹ともグラエナとデルビルに対し効果抜群の技なので二匹とも戦闘不能となる。

マサト「サーナイト、サイコネシスでピカチュウたちを助けるんだ」

そう言つてサーナイトがサイコネシスを繰り出しピカチュウたちを助ける。

カミオタイ「しまった！」

サトシ「よし。ピカチュウ、エレキボール」

マサト「サーナイト、サイコネシス」

ハルカ「アゲハント、あなたもサイコネシス」

シュウ「フライゴン、だいちのちから」

4匹のポケモンが一斉攻撃しドラピオン、ニドキング、ペンドラーに当たり、その攻撃がカミオタイ、ナカオタイ、シモオタイ、ヤマト、コサブロウに向かつてくる。

コサブロウ「なあ、これっていつもの……」

ヤマト「そうみたいね……」

カミオタイ「覚悟を決めよう」

ナカオタイ「そんな〜」

シモオタイ「それじゃ……」

ドガーーン

ヤマト・コサブロウ「やな気持ち〜」

カミオタイ・ナカオタイ・シモオタイ「やな気分〜」

キラーン

ヤストシ「よく飛ぶな〜」

5人の姿を見てそう思うヤストシ。

ヒカリ「ありがとう、サトシ、ハルカ、マサト、シュウ」

カスミ「ルリリたちを無事に取り返してくれて」

ハルカ「そんなことないかも〜」

アイリス「それにしても、二人とも意気ピッタリだったわね。まるで、恋人みたい」

シュウ・ハルカ「!!!!!!」

アイリスの言葉に思わずハルカとシュウが赤くなる。

ハルカ「そんなことないかも！」

シュウ「……」

ハルカは、赤くなりながら答え逆にシユウは、答えることができなかった。

マサト「……………」

そんな二人をマサトは、厳しい目で見ていた。

マサト「（なんだろう、この雰囲気。お姉ちゃん、サトシのことがあんなに好きだったのにいつの間にかシユウに心を入れ替えるような気がする。それにシユウの様子も明らかに変だ。まさか！シユウ、お姉ちゃんのことか……。そんな、もしそうだとしたらシユウの事を義兄さんって呼ばなきゃいけなくなっちゃうかもしれない。それだけは、嫌だ！」

マサトは、シユウとハルカが結婚を想定し義兄さんと呼ぶのを絶対に嫌だと心の中でつぶやく。

サトシ「なあ、タケシ、デント。シユウとハルカが赤くなっているけど大丈夫なのか？」

タケシ「ああ、顔は赤くなってるが、あれは病気じゃないぞ」

サトシ「じゃあ、どうしてシユウとハルカは、顔赤くなってるんだ？」

デント「気にしないほうがいいよ。多分……………」

サトシ「そうか、でも気になる……………」

二人を見てそう思うサトシ。

そして一行はカッチュウシティを目指して再び歩みを始めた。

第49話 襲撃（後書き）

コサブロウ「おい、作者！」

カミオタイ「なんだ、この扱いは！」

うるさいな。警沢言いやがって出してあげただけでもありがたいと思え！コサンジ、山線！

コサブロウ「コサブロウだ！」

カミオタイ「それから、山線って言うな！」

シモオタイ「そんなことより、俺達ひどすぎないか、この役目！しょうがないだろう、こういう役目だったムサシたちは、真面目になってやられても前のように飛んで行かなくなった、だから・・・。ヤマト「だからと言って私たちにその役目を渡さないでほしいわ」ナカオタイ「そうだそうだ」

文句をこれ以上言っと出さんぞ！

ヤマト・コサブロウ・山線トリオ「すみません・・・」

と言うことでロケット団のメンバーが黙ったところでこの辺でお開きにしたいと思います。次回もお楽しみに。

第50話 心理テストで大混乱

カッチュウシティを目指していたサトシ達は、途中ポケモンセンターで休むことにした。

カスミ「こんなところにポケモンセンターがあるなんて」

ヒカリ「今日は、野宿すまずにすんでいいわ」

アイリス「そんなことで喜ぶなんて子供ね」

ハルカ「（アイリスの方がよっぽど子供かも）」

そう心の中で言うハルカ。

サトシ「あの、ポケモン達の回復をお願いします」

????「分かりました。それでは、お預かりします」

と奥からで出来たのは、ジョーイでなくキレイな女性であった。

ケンジ「あなたは、誰なんですか？」

????「私？私は、アユミ。一流のポケモンドクターよ」

デント「それで、ジョーイさんは？」

アユミ「ジョーイさんなら、カッチュウシティに出張診察に行っているわ。カッチュウシティには、ポケモンセンターがないから定期的にジョーイさんがカッチュウシティまで診察しに行くんだ。その間、私がこのポケモンセンターの留守番役しているの」

アユミがそうデントに答えたときだった。

タケシ「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!アユミさんと申しましたね。自分は、タケシと申します。よければ仕事が終わった後お茶なんか」

いつものようにナンパをするタケシ。

いつもならナンパを止めるためカスミ、マサト、ヤストシ、グレッツクルが入ろうとするが・・・

アユミ「ごめんなさい。私、ナンパをする男の人嫌いなので」

タケシ「ガーーーーー」

強烈な言葉にタケシは、落ち込んでしまう。

ベル「撃沈ね」

遠くからそれを見ていたベルがそうつぶやく。

その後、ヤストシがタケシを引きずってロビーへ連れて行く。

アユミ「ところで、あなた達。暇なら、私の心理テスト受けてみない？」

サトシ「心理テストってなんですか？」

初めて聞く言葉に？マークがつくサトシ。

アユミ「心理テストって言うのは、特殊な質問をしてその人の心理を知る医学療法の一つよ。ちなみに私は、ポケモンドクターの学びながらこの心理学も勉強してたの」

ヤストシ「そうなんですか」

アユミ「それで、受けてみたい人は、いるかな？」

カスミ「あたし、受けてみたいわ」

ハルカ「私も」

ヒカリ「アタシも」

アイリス「アタシもアタシも」

ベル「私も」

サトシ「俺も」

シユウ「僕もです」

ヤストシ「俺も」

ケンジ「僕は、遠慮しておくよ」

デント「同じく僕も」

マサト「僕も」

こうしてケンジ、デント、マサト以外の人たちが心理テスト受けることになった。

アユミ「それじゃあ、最初の質問ね。お風呂に入ろうとしたら誤ってバス汁を食べてしまいました。どんな味がしましたか？」

サトシ「なんか変な質問だな」

アユミの質問を理解できていないサトシ。

ヤストシ「心理テストって言うのは、そういうものだよサトシ」

理解していないサトシにそう言うヤストシ。

ハルカ「うん、甘い味かな」

ヒカリ「アタシは、酸っぱい」

ベル「私は、臭い」

カスミ「アタシは、甘酸っぱい」

アイリス「アタシは、辛いよ」

サトシ「俺は、しょっぱい」

ヤストシ「俺は、ドブ汁みたいな香り」

シュウ「僕は、バラの香りだね」

いろいろと答えるサトシ達。

アユミ「ちなみにこの心理テストの回答は、後で言うわね。それじゃあ、次の質問ね。世界で一番長いポッキーがありました。あなたは、それを何分で食べますか？」

アイリス「アタシ、10分で食べるわ」

ハルカ「私なら6分よ」

ベル「私は、15分ぐらい」

カスミ「アタシは、30分」

ヒカリ「アタシは、4分」

ヤストシ「俺、45分」

シュウ「僕は、20分」

サトシ「俺なら5分でいけるぜ」

みんなの答えにアユミは、一瞬笑い顔になるが誰も気づかなかつた。アユミ「それじゃあ、次の質問よ。あなたは、夢の中で空を飛んでいました。しばらくしてどこかに着地しようと思います。その着地点は？」

カスミ「アタシは、ハナダ岬」

ハルカ「私は、海辺よ」

ヒカリ「アタシは、家の中」

ベル「私は、ビルの屋上」

アイリス「アタシは、森の中」

シユウ「僕は、バラ園の中」
サトシ「俺は、ポケモンリーグのスタジアム」
ヤストシ「俺は、電車の中」
みんなの答えにへえ〜という顔をするアユミ。
アユミ「じゃあ、次の質問。あなたの前に魔法使いのおばさんが現れこれを一口食べると美人・美形になると不思議な食べ物と渡されました。あなたは、食べてどんな味がしましたか？」
アイリス「なんだか、最初の質問と似ている部分があるわね〜」
アユミ「そうだけど、回答がかなり違うわよ」
アイリスの問いにアユミは、そう答える。
ヤストシ「俺は、甘い感触かな」
アイリス「アタシは、甘い感じ」
ヒカリ「アタシは、味なし」
シユウ「僕は、桜の香りかな？」
ハルカ「私は、甘酸っぱい」
サトシ「俺は、しょっぱい」
ベル「私は、辛い」
カスミ「アタシは、桃と同じ香り」
アユミ「(なるほどなるほど)」
そう心の中でつぶやくアユミ。
アユミ「それじゃあ、最後の質問よ。あなたは、誕生日プレゼントをもらいその中身を見て感想を一言でどうぞ」
アイリス「最悪・・・」
ヒカリ「アタシは、いらない」
ヤストシ「俺は、ありがとう」
ハルカ「私は、最高かも」
サトシ「俺は、サンキュー」
ベル「私は、ごめんなさい」
カスミ「アタシは、とてもうれしい」
シユウ「僕は、どうも」

そう答えるサトシ達。

アユミ「はい、以上で心理テストは、終わりよ。それでは、回答をするわ。まずは、最初の質問だけどこれは、あなたのファーストキスの味です」

8人「えーーーーー!!!!!!!!!!」

カスミ「(ファーストキスの味!!)」

ベル「(どうしよう)。私、臭いなんて答えちゃったよ」

ヤストシ「オエ」

シュウ「(という事はハルカのファーストキスの味は、バラの香り・・・)」

最初の質問の答えにそれぞれ驚くがその中でシュウは、顔が真っ赤になってしまう。

アユミ「それじゃあ、次の質問の答えだけどこれは、あなたがキスをしている時間です」

8人「えーーーーー!!!!!!!!!!」

ハルカ「(き、き、キスをしている時間!!)」

アイリス「(サトシと10分間キス・・・)」

ベル「(サトシさんと15分間キス・・・)」

カスミ「(サトシと30分間キス・・・)」

シュウ「(ハルカと20分間キス・・・)」

長時間答えたメンバーは、その質問の回答に真っ赤になってしまう。シュウに関しては、さらに真っ赤になる。

アユミ「さて、続いての質問の答えだけどこれは、あなたがキスをした場所です」

ヤストシ「(き、き、キスをした場所だ?!?)」

カスミ「(あ、あ、アタシ、ハナダ岬でサトシと・・・)」

アイリス「(も、も、森の中でサトシと・・・)」

ベル「(ビルの屋上でサトシ君と・・・)」

ヒカリ「(い、い、家の中でサトシと・・・)」

シュウ「(バラ園の中でハルカとキスを・・・)」

ハルカ「(海辺で・・・)」

サトシ「(ポケモンスタジアムで・・・)」

アユミのその質問の回答に全員真っ赤に染まる。

アユミ「さて、次の質問の答えだけど、これは、キスをした瞬間に
感触した唇の味です」

サトシ「(マジかよ、オイ!)」

カスミ「(桃と同じ香り・・・)」

アイリス「(甘い感じ・・・)」

二人は、サトシを見てさらに真っ赤になる。

ヒカリ「(あ、あ、アタシ、味なしって答えちゃったよ)」

ベル「(私は、辛いなんて答えたよ)」

この二人に関しては、へんな答えを言ったのでテンションが一気に
下がる。

シュー「(桜みたいな香り・・・)」

ハルカ「(甘酸っぱい・・・)」

こっちの二人は、お互いを見つめ合い赤くなる。

アユミ「最後の質問の答えだけどこれは、あなたがファーストキス
をしたあとの感想よ」

この回答に天国と地獄を見た人が出た。

ヒカリ「(え!ファーストキスをしたあとの感想!?)」

ベル「(ちよつと待つて!)」

アイリス「(確か、あたしが答えのは・・・)」

この質問に対し3人が答えたのは、アイリスが最悪、ヒカリは、い
らない、ベルがごめんなさい。

ベル・アイリス・ヒカリ「(そんな!)」

3人は、その答えを思い出しめまいを感じそして倒れてしまう。

カスミ「(アタシ、サトシに・・・)」

ハルカ「(そんな!わ、わ、私!)」

シュー「(ぼ、ぼ、僕は!)」

シュー、ボタン!!!!!!

カスミとハルカとシュウの3人は、頭から湯気を出しそうな勢いで倒れた。

サトシ「おい！カスミ！ハルカ！シュウ！」

ヤストシ「アイリス！ヒカリ！ベル！」

カスミ達が倒れて必死に介護するサトシとヤストシ。

そしてカスミ達を借りた部屋に運ぶ。

ジョーイ「あらあら帰ってきてみたら」

アユミ「あ！ジョーイさん」

ジョーイ「まったく、心理テストは、結構だけどもあんまり恋愛に關しての心理テストはやめなさいよ」

アユミ「いいじゃないの、別に」

デント「え！もしかしてアユミさんの心理テストで倒れる人がいるんですか！？」

ジョーイ「ええ、少し刺激が強すぎて倒れるトレーナーやコーディネーターがいるのよ。まったく迷惑な話でしょう」

そうデントに言うジョーイ。

一体これから恋の行方は、どうなるんだろう？

第50話 心理テストで大混乱（後書き）

カスミ・ハルカ・シュウ「／／／／（赤）」

ヒカリ・アイリス・ベル「（T|T）」

なんだ、なんだ。この雰囲気は！

カスミ「作者、なんなのよ。この心理テスト！」

このテスト？ずいぶん前にとあるインターネットラジオの心理テストを写してそのままダンボールにしまっけてそれが昨日出てきて思いついた話なんだ。

ハルカ「だからって、これは、刺激強すぎるかも」

シュウ「僕達は、まだいい方かもしれないけど向こうがちょっとま
ずいよ」

え！

ヒカリ「あ、あ、アタシ、サトシに・・・」

ベル「どうしよう（T|T）」

アイリス「サトシに顔向けできないよ（T|T）」

カスミ「どうするのよこれ」

大丈夫だよ。次回までに立ち直るよ。

ハルカ「なんか、根拠がないかも」

大丈夫だから安心しろ。と言うことで次回もお楽しみに。

カスミ・ハルカ・シュウ「（無理に終わらせたよ、この作者・・・）」

第51話 謎の少年タクヤ

カッチユウシティに目指しているサトシ一行は、途中野原で昼飯を食っていた。

ベル「うーん、さすがデント君の料理。七つ星レストラン並みの味だわ」

デント「そう言ってくれるとうれしいよ」

ヤストシ「ベル。そう言うけど七つ星レストランの味知っているの？」

ベル「知らない」
ズテン

ベルの発言にヤストシがこけてしまう。

カスミ「それよりサトシは？」

ヒカリ「さつき向こうでトレーニングしにいったわよ」

ハルカ「サトシも相変わらずかも」

シユウ「そういう君は、コンテストの練習しているのか？」

ハルカ「シユウ！」

意地悪そうに言うシユウにハルカは、そう言った。

そしてカスミ達から少し離れたところにサトシがトレーニングしていた。

ちなみに現在の手持ちポケモンは、ピカチュウを入れてムクホーク、ミジユマル、ツタージャ、フカマルの5匹である。

サトシ「フカマル、いわくだけ、ムクホーク、つばめがえし。ミジユマルは、アクアジェット、ピカチュウは、アイアンテール、ツタージャは、つるのむち」

5匹のポケモンが一斉に技を出し岩や木に当てていく。

????「君のポケモン、なかなか育っているじゃないか」

そこに一人の少年が現れてサトシのポケモンを見てそう言う。

サトシ「ありがとう。俺は、サトシ、君は？」

???「俺は、タクヤ。ポケモントレーナーさ。ところでサトシ君、僕のポケモンとポケモンバトルしないか？」

サトシ「いいぜ、その勝負受けて立つぜ」

こうしてタクヤとサトシのポケモンバトルが始まった。

サトシ「勝負は、1対1のバトルでどうだ？」

タクヤ「もちろんいいぜ。俺のポケモンは、こいつです。ウォーグル！」

サトシ「ピカチュウ、君に決めた！」

タクヤはウォーグル、サトシはピカチュウを繰り出した。

相性では、ピカチュウが有利である。

タクヤ「ウォーグル、シャドークロー」

サトシ「ピカチュウ、避けてエレキボール」

ウォーグルは、シャドークローを仕掛けてきてそれをピカチュウは、避けてエレキボールを発射し命中する。

タクヤ「ウォーグル、ブレイククロー」

ウォーグルは、ピカチュウにブレイクブローを繰り出しピカチュウに当たる。

サトシ「負けるなピカチュウ。10万ボルト」

ピカチュウは、10万ボルトをウォーグルに向けて発射する。

タクヤ「ウォーグル、フリーフォール」

ウォーグルは、10万ボルトをうまく避けてフリーフォールを繰り出しピカチュウを捕まえて共に飛び上がった。

サトシ「ピカチュウ!？」

タクヤ「そのまま地面に叩きつける」

そしてピカチュウは、そのまま地面に叩き落されてダメージを受ける。しかし、飛行タイプの技のフリーフォールは、電気タイプのピカチュウには、効果はいまいちだがダメージは、かなり与えた。

タクヤ「ウォーグル、ばかぢから」

サトシ「ピカチュウ、アイアンテールではねのける」

ウォーグルは、ばかぢからを繰り出しピカチュウは、アイアンテール

ルでそれをはねのけたが互いにダメージをおう。

タクヤ「ウオーグル、ブレイククロー」

サトシ「ピカチュウ、ボルテッカー」

ピカチュウは、ボルテッカーをウオーグルは、ブレイククローを繰り出した。ピカチュウのボルテッカーは、ウオーグルの攻撃を避けて当てる。

タクヤ「ウオーグル!?」

ウオーグルは、戦闘不能となる。

タクヤ「俺の負けだよサトシ君。君は、とても強いね」

サトシ「そんなことないぜタクヤもとても強いじゃないか」

サトシがそう言った時だった。

アイリス「サトシ、こんなところにいたのね」

カスミ「あら、その子は?」

サトシ「こいつは、タクヤ。さっきポケモンバトルしたんだ」

ハルカ「そうなんだ。私、ハルカよ」

ヒカリ「アタシは、ヒカリ」

ベル「私、ベル」

カスミ「アタシは、カスミ」

アイリス「アタシは、アイリス」

タクヤ「タクヤです。よろしくな。そうだ、サトシ君。僕も君達の旅に同行していいかな?」

サトシ「もちろんいいぜ」

カスミ「大歓迎だわ」

ベル「旅は、たくさんいたほうが楽しいしね」

タクヤ「それじゃあよろしくみんな」

こうしてサトシ達は、タクヤが加わった。

一体これからどんな旅なるか。

続く。

第51話 謎の少年タクヤ（後書き）

新しくメンバーを加えて次回は、いよいよカッチュウシティのお話です。

第52話 男たちの災難（前書き）

今回は、たくさんのキャラが登場します。

無理矢理

第52話 男たちの災難

サトシ達は、ついにカッチュウシティに着き早速カッチュウジムに向かったが・・・

サトシ「えーーーーー！！！！留守!?!」

なんとカッチュウジムのジムリーダーダイアンがまだジムに帰ってきていなかったのである。

マサト「どうする、サトシ?」

ベル「しょうがないから観光でもしない?」

アイリス「そうだね」

ハルカ「そうしようしよう」

デント「それじゃあ、僕は、買出ししてくるよ」

ヤストシ「それじゃあ、二手に分かれますか」

ジムリーダーのダイアンがいないのでサトシ達は、二手に分かれて行動することになった。サトシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、ベル、シュウ、ヤストシは街の観光へ、タケシ、ケンジ、デント、マサト、タクヤは、フレンドリーショップに行くことにした。

サトシ「ところで、観光するって言ったけどどこ行くんだ?」

ヒカリ「は!」

ヤストシ「お転婆か」

ヤストシがヒカリにツッコム。

アイリス「なんかどこかで見たことのあるネタだわ」

ベル「みんな見て、この町に舞妓の衣装を試着できる場所があるわ」

ヒカリ「舞妓の衣装か・・・」

ハルカ「一度来てみたいかも」

ヤストシ「よし、歌舞練場に向けて出発」

サトシ達は、歌舞練場へ向かい5分足らずで到着した。

シュウ「早いな」

ヒカリ「この物語のお約束だからね」

カスミ「入りますか」

サトシ「御免下さい！」

????「は〜いってサトシ君じゃない」

アイリス「あ、ダイアン。どうしてここにいるの!？」

なんと奥からやってきたのは、カッチュウジムのジムリーダーダイアンである。

ダイアン「実は、ここアタシの実家なの」

ベル「そうなんだ」

ダイアン「ここへ来たってことは、舞妓の衣装を着るために来たのね。なら、上がって上がって」

カスミ「それじゃあ、お邪魔します」

サトシ達はダイアンのご厚意で、歌舞練場内へと上がることにした。ダイアンに誘導され、サトシ達は大広間へと入っていった。すると、そこには知っている人物が3名いた。

????「あら、サトシさん」

????「えっ、サトシ君？」

????「ホントだわ」

サトシ「エ、エリカさん。それにスズナさんにミカンさんも。どうしてここに」

そこにはカントー地方タママジムのジムリーダー・エリカとジョウト地方アサギシティのジムリーダー・ミカンとシンオウ地方キツサキジムのジムリーダー・スズナがいた。

ハルカ「ヤストシ、誰なのこの人達？」

ハルカがヤストシにエリカ、ミカン、スズナについてヤストシに聞いてみた。ハルカとアイリス、ベル、シュウは、知らないのでサトシに尋ねる。ちなみにヒカリは、スズナとミカンをカスミは、エリカとミカンと二人のジムリーダーは、知っているがヒカリは、エリカをカスミは、スズナとは、初対面である。

ヤストシ「あの三人は、エリカさんとミカンさん、スズナさんだよ。三人ともジムリーダーでエリカさんがカントーのタママシのミカン

さんがジヨウトのアサギのスズナさんがスズナさんは、シンオウのキツサキのジムリーダーだよ」

ヤストシが丁寧ていねいに説明しハルカ達は、納得したように頷いた。
ハルカ「そうなんだ」

エリカ「ところで、サトシさんは、どうしてここにいらしゃったんですか？」

サトシ「実は、カッチュウジムに挑みに来たんですが留守でいなかっただけでここへ」

ダイアン「それは、申し訳ないわ」

ヤストシ「いいんですよ、別に」

そうヤストシが言う。

マサト「ところでエリカさんとスズナさんとミカンさんとダイアンさんは、知り合いなんですか？」

ミカン「そうなの。私とエリカは、親しい親友でスズナさんとダイアンさんは、この間知り合ったばかりなの」

ヤストシ「そうなんだ」

ヒカリ「ところで、スズナさんはどうしてここに？」

スズナ「あたしは、ノゾッチと観光よ。ここで舞妓の衣装の体験が出来るって聞いたからここに来たの」

ヒカリ「スズナさん、その格好似合ってますよ」

スズナ「ふふふ、ありがとう」

ヒカリに着物姿を褒められたスズナは満面の笑顔で答える。

アイリス「ノゾミって誰なの？」

アイリスがヤストシにたずねる。アイリスだけでなくベル、シュウとは初対面である。

ヤストシ「ノゾミは、ハルカとシュウとヒカリと同じポケモンコイデイナーでヒカリのライバルであり親友であるんだ」

アイリス「そうなんだ」

ハルカ「それで、ノゾミは何処に？」

スズナ「ああ、ノゾッチはね・・・」

スズナがノゾミの行方を言おうとすると。

ノゾミ「スズナ先輩。やっぱり、恥ずかしいですよ〜！」

遠くからノゾミが悲痛な声を発するのが聞こえた。

スズナ「ノゾツチ何やってんのよ。サトシ君やヒカリちゃん達も来てるのよ。ほら、さっさと出て来たら？」

ノゾミ「えっ、サトシ達も来てるんですか。だったら尚更、無理です」

ノゾミはサトシ達の前に今の自分の姿を見せることを頑なに拒む。かたく

スズナ「はあ、仕方ないわね。ノゾツチ、もたもたしないの」

ノゾミの態度に痺れを切らしたスズナは、ノゾミを強引にサトシ達の前へと引つ張る。するとそこには、いつものボーイッシュな雰囲気とは違った着物姿のノゾミが現れた。

ヒカリ「うわあ、ノゾミ可愛い！」

ハルカ「すごく似合ってるかも！」

ヒカリとハルカはいつもとは違う雰囲気ノゾミを見て、興奮しながら感想を漏らす。

ノゾミ「そ、そうかな。アタシ、変じゃない？」

ノゾミは顔を少し赤くしながら、答える。

ヤストシ「そんなことないよ、ねえエリカさん」

エリカ「ええ。わたくしの見込んだとおりでしたわ。ノゾミさん、とてもお似合いですよ」

どうやら、ノゾミに着物姿を提案したのはエリカノゾミのようである。

ノゾミ「そ、そうですか・・・」

エリカに褒められたノゾミは、さらに顔を赤くさせる。またまたさらにノゾミに追い討ちをかけるように

サトシ「ノゾミ、とても似合ってるぞ。なっ、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピッカ！」

そう言われてノゾミの頭の中はショート寸前だった。それはいつもの冷静さは影も形もない状態である。

ちなみにこれは、ベルとヒロイン（ハルカを除いて）には内緒だが

ノゾミもサトシに好意を持っている。

「????」あら、サトシ君」

サトシ・ヒカリ・ヤストシ「あ！コトネ」

そこに現れたのは、以前シンオウで知り合ったコトネである。

カスミ「ねえ、3人とも。コトネって誰なの？」

ベル「それ私も気になるわ」

カスミとベル達は当然の疑問をサトシとヒカリ、ヤストシにぶつけてきた。サトシは淡々と答える。

サトシ「ああ、コトネは以前俺がヒカリとタケシとヤストシとでシンオウを旅してた時に出会ったジョウト出身のトレーナーなんだ」
アイリス「そうなんだ」

ヒカリ「それで、コトネは、どうしてホクシンに？」

コトネ「もちろん、ホクシンリーグに出場するためよ。この大会でベスト4をとればワールドリーグに出場できるだ」

ヒカリ「そうなんだ。実は、ここにいるサトシとマサトとベルもホクシンリーグでベスト4を入れればワールドリーグに出場できるんだ」

コトネ「ふ〜ん、サトシくんも・・・」

コトネは、顔を少し赤くする。

実は、コトネもノゾミ同様サトシのことが好きである。ちなみにこれもベルとヒロイン（ハルカを除き）知らない。

ベル「ねえ、わたしたちも着物姿になつてみない？」

ノゾミの着物姿を見て、ベルが自分達も来てみたいと提案した。

アイリス「それ、いいわね。アタシ、着物着るの初めて」

初めて着物を見たアイリスも来てみたいと興味を示した。

カスミ「それじゃあ、みんなで着物姿になりましょう。」

ハルカ・ヒカリ・アイリス・コトネ・ベル「~~~~」賛成〜！」「」

~~~~

エリカ「わたくしも手伝いますわ」

スズナ「アタシも手伝うわ。ほら、ノゾッチも」

ミカン「私も手伝います」

ノゾミ「はあ、それじゃあアタシも」

カスミ達は着物姿になるために、エリカ、スズナ、ミカン、ノゾミはその手伝いのために隣の部屋へと入っていった。と思ったら、カスミとハルカが顔を出して。

カスミ「サトシ」

ハルカ「シユウ」

カスミ・ハルカ「覗かないでよ」

サトシ・シユウ「しないって（から）」

カスミとハルカに釘を刺されたことに、サトシとシユウは苦笑を浮かべながら言った。

それから15分後。

ハルカ「お待たせかも」

しばらくしてハルカが先に出てきた。他の面々もぞくぞくと大広間へと戻ってくる。

カスミ「ねえ、サトシ。アタシ達、どうかしら」

ハルカ「シユウも見た感想はどう？」

カスミとハルカはサトシとシユウに着物姿になった自分達がどう見えるのか感想を求めた。

サトシ「どうって・・・」

シユウ「別にどうもしないけど」

サトシとシユウはそっけない返事を返す。

カスミ「ちよつと、もう少し気の利いた返事はなかったのかしら」

ハルカ「いかにも興味なさげな顔しないかも。例えば、さすがホウエンの舞姫着るもの全て何でも似合ってるねとか」

ヒカリ「清楚な感じが素敵だよとか」

カスミ「いつもとは違った可愛さがあるよとか言っただけじゃなかったわ」  
女性陣達は頬をプリンのようにぷふふと膨らませて、サトシとシユウに詰め寄る。

シユウ「君達、人に同意を求めるような言い方やめてもらえないかね」



いつものように嫌味を言うシユウ。

サトシ「俺もシユウと同じ」

サトシは、シユウに同調するようにヒロイン達に言う。

カスミ「べ、別にいいでしょ」

サトシとシユウの反応にかなりの不満を漏らす女性陣であった。

ヒジリ「あら、ヤストシじゃないの」

ヤストシ「お！ヒジリとタツヤじゃないか。お前達も着物を着るために着たのか？」

ヒジリ「そうよ。それにしてもタツヤの反応がいまいちでね」

タツヤ「だって、そんなこと言われても困るんだよ俺だって」

そうヒジリに言うタツヤ。すると、エリカが突然、

エリカ「そうですね。4人も、着替えてみてはどうですか。」

エリカはサトシとシユウ、ヤストシ、タツヤに着物に着替えてみてはと提案してみた。

サトシ「そうですね。カスミ達だけがその姿じゃあ、不公平だし」

タツヤ「俺も着替えてみるかな」

ヤストシ「俺も着るか」

シユウ「なら、僕も」

エリカ「それでは、早速」

ダイアン「これがあな名たちが着る着物よ」

ダイアンとエリカはサトシとヤストシ、シユウ、タツヤが着替える予定の着物を差し出した。だが・・・

サトシ「あ、あのダイアン、エリカさん」

ヤストシ「とても言いにくいんですが」

タツヤ「これ、明らかに女物ですよ」

エリカとダイアンが見せた着物を見た瞬間、サトシとヤストシ、シユウ、タツヤは顔を引きつらせた。エリカとダイアンが差し出した着物とは、男物の着物ではなく、それも今カスミ達が着ているものと比べて少し派手目の花魁だった。

エリカ「そうですね、お気に召されなかったのですか」

サトシ「あ、いや、そうじゃなくて……」

ダイアン「はつきりと言いなさい。はつきりと」

タツヤ「それ以前に、俺たち男ですよ」

シユウ「そうですよ」

ヤストシ「それだけは、嫌です」

スズナ「それなら、心配ないわよ。サトシ君たちが来る前に、2人に来てもらってるから。」

サトシ・ヤストシ・タツヤ・シユウ「2人？」

話に割り込んできたスズナの言ったことに首を傾げるサトシとタツヤ、シユウ、ヤストシ。他の面々もサトシとタツヤ、シユウ、ヤストシ同様に、首を傾げる。ノゾミとミカンはその2人を知っているのか、ため息をつく。すると、別の部屋から、サトシ達も知っている2人の少年が女性用の着物、白塗りの化粧といった女形の格好で現れた。

カスミ「う、嘘でしょ!？」

アイリス「ま、まさか……」

その2人を見た瞬間、カスミとアイリスは思わず口に出して驚いてしまった。

カスミ「ヒロシ!」

アイリス「もしかして、隣はシューティー!？」

ヒロシ「僕は……僕は……」

シューティー「……」

スズナが言った二人とは、サトシの2代目ライバルヒロシと4代目ライバルシューティーである。ヒロシは精神的にショックを受けシューティーは、ヒロシよりショックが大きく言葉を失っている。

ヤストシ「まさか、2人とも……」

ヒロシ「断じてそんなことはない」

シューティー「僕たちは男だ」

ヒロシとシューティーはヤストシが言おうとしていたことをきけばり否定した。ただ、今の2人の姿からして、何を言おうがまるで説

得力がない。

ヤストシ「じゃあ、なんで二人ともここにいるんだ？」

ヒロシ「僕は、ワールドリーグの特訓しようとの町に立ち寄った  
ら途中から変な方向に向かって今に至ります」

ベル「それでシューティー君はどうしてここに？」

シューティー「僕は、ピカリーシティにポケモンバトルクラブが  
来たと聞いて向かう途中でね。だけど、彼と同じく途中から変な方  
向になってこんな姿になってしまいました」

ヒロシとシューティーはあまり詳しく話したくないのか少々曖昧な  
答え方をする。簡単に説明すると、ヒロシとシューティーはそれぞ  
れの目的のためにたまたまこの町に立ち寄ったらそこへたまたま来  
ていたエリカとスズナに捕まり、無理矢理女物の着物を着せられた  
わけである。

カスミ「それにしてもよく似合うわねヒロシ」

アイリス「シューティーなんか、頭に刺してる簪可愛いわよ。」

カスミとアイリスは必死で笑いをこらえながら言う。他のメンバ  
ーも同様に必死に笑いをこらえていた。

ヒロシ「悪いけど笑いながら言うのやめてもらえないか？」

シューティー「こっに見えても、結構傷つくんだ。」

ヒロシとシューティーはさらにため息をついた。

そんな時だった。ヤストシがサトシ、シュウ、タツヤの耳元で3人  
に話しかける。

ヤストシ「おい、サトシ、シュウ、タツヤ。逃げるぞ」

サトシ「もちろんだぜ」

タツヤ「あの二人には、悪いが逃げようぜ」

シュウ「あんなものを着せられたら僕のプライドが黙っていないよ  
そう4人は、思い逃亡を図ろうとしたが・・・

カスミ「サトシ！」

ヒカリ「ヤストシ！」

ハルカ「シュウ！」

ヒジリ「タツヤ！」

カスミ・ヒカリ・ハルカ・ヒジリ「……何処に行くの？」「……カスミとヒカリ、ハルカ、ヒジリは超直感（笑）で女性陣がヒロシ、シューティーと会話しているうちに逃走を図ろうとしたサトシとヤストシ、シュウ、タツヤに気づいた。

サトシ「あゝ、俺たちタケシのところに行くこうかと

ヤストシ「そうそう」

タツヤ「俺もだ」

シュウ「僕もだ」

サトシは逃れるための言い訳としてタケシのところへ行くとかスミ達に言った。ヤストシ、タツヤ、シュウもそれに同調して頷く。

ベル「タケシ君達なら、しばらく戻ってこないって言ってたわよ」「カスミ「結構、買い込んでおくって言ってたしね」

ヒカリ「大人数での旅ですものね」

ヒジリ「それに、どうしてタツヤまで行くのよ。

その言葉を聞いて、サトシとヤストシ、タツヤ、シュウは絶望の淵に立たされた気分になった。

サトシ・ヤストシ・シュウ・タツヤ「……」（こうなったら……）

「……」

追い詰められたサトシとヤストシ、シュウ、タツヤは強行突破で歌舞練場から飛び出そうとした。だが、そのうちヒロシがタツヤの肩を、シューティーがサトシの肩をガシツと掴んでだ。

ヒロシ「君たちも同じ格好になってもらうよ」

シューティー「逃さないよ」

ヒロシとシューティーのみちづれ（というよりもくろいまなざし）により、サトシとタツヤはもう逃げられない（笑）

ヤストシ「（タツヤ！）」

シュウ「（サトシ）」

ヤストシ・シュウ「（ごめん！）」

ヤストシとシュウは、サトシとタツヤを見捨てて逃亡する。

スズナ「あ、待ちなさい」

スズナが大きい声を上げる。

シュウ「待てと言って待つ人は、いませんよ」

ヤストシ「アゲハント、フラッシュ、ミミロップ、れいとうビーム、ロズレイド、マジカルリーフ」

ヤストシは、ポケモンを3匹出し3匹がハルカ達に当たらないように攻撃を仕掛けてその隙に逃亡する。

サトシ・タツヤ「（俺達を見捨てるな!）」

サトシとタツヤは、二人に見捨てられてうらむ。

そして二人は、女物の着物を着る羽目になった。どんな姿になったのかは、読者のご想像にお任せします。

さて、見事逃亡に成功したヤストシとシュウは、タケシ達のところにやってきていた。

タケシ「どうしたんだ二人とも!？」

マサト「一体、何があったの?」

ヤストシ「実は、これこれしかじかで」

デント「そんなことがあったんだ」

シュウ「そうなんだ、もう少しでひどい目にあうところだったよ」

ヤストシ「ところでタケヤは?」

タケシ「あいつなら少しそこらへんをうろついて来るって」

ヤストシ「そうか」

そうヤストシが言った時だった。

???「あら、ヤストシじゃないの」

???「それにシュウ君も一緒に」

ヤストシ「し、シロナお姉ちゃん!」

シュウ「サオリさん!」

ヤストシ達の前に現れたのは、シンオウのチャンピオンでこの作品のオリジナル研究所のウチダ研究所のウチダ博士の元助手のシロナとトップコーディネーターの一人でありハルカ、ヒカリ、ノゾミのあこがれの人物でシュウとは深い関係もあるサオリである。

ヤストシ「シロナお姉ちゃん、どうしてここに？」

シユウ「サオリさんも」

シロナ「実は、スズナさんとエリカさんに・・・」

シロナは、二人の名前を上げるとヤストシとシユウは、再び走り出そうとする。二人の肩をガツチリと掴む。

ヤストシ「見逃してくださいシロナお姉ちゃん、サオリさん」

ヤストシの言葉にシユウもうなづく。

シロナ「ごめんなさい。そうしたいのは、山々だけ。ヤストシとシユウ君の着物姿を見てみたの」

サオリ「同じく」

シロナとサオリの言葉がどことなく腹黒さを感じる。

マサト「タケシ、シロナさんとサオリさんってあんなキャラだったけ？」

マサトが耳元でタケシに話しかける。

タケシ「たぶん、あんな風にしたのは、作者だと思うよ」

マサトの質問にそう答えるタケシ。

そして二人は、シロナとサオリによって連行された。

ヤストシ「（助けてくれ）タケシ、デント、ケンジ、マサト」

ヤストシは、心の中で4人に助けを求めるが・・・

タケシ・デント・ケンジ・マサト「（ごめん、ヤストシ。何か作者の陰謀がありそうだから無理）」

そう心の中で答える4人であった。

その後連行されたヤストシとシユウは、すでに女物の着物を着せられたサトシとタツヤ、ヒロシ、シューティーにより女物の着物を着る羽目になった。どんな姿になったのかは、これまた読者のご想像にお任せします。

ヒジリ「タツヤ、かわいいよ」

ハルカ「シユウもよく似合っているわ」

シユウ「ハルカ・・・。褒められてもうれしくないよ」

エリカ「シロナさん、サオリさん。ありがとうございます」

サオリ「そんなことありませんよ」

シロナ「ヤストシの女物の着物も見れましたし」

ヤストシ「お姉ちゃん」

サトシ・タツヤ「・・・」

シユウは、涙目でハルカに言い返しヤストシは、精神的ショックを受けサトシとタツヤに関しては、言葉を失った。

ヒロシ・シユーター「（彼らは本当に男なのか・・・）」

着物姿があまりにも似合ってるので、ヒロシとシユーターはサトシとヤストシ、タツヤ、シユウが男であることを疑った。それが自分達にも当てはまることも知らずに・・・

ヤストシ「嫁さんもらえないよ」（T-T）」

タツヤ「俺もだよヤストシ」（T-T）」

ヒジリ「その時は、わたしが貰ってあげるからタツヤ」

サトシ、ヤストシ、シユウ、タツヤにとんだ災難が降りかかった時であった。

## 第52話 男たちの災難（後書き）

サトシ「作者、なんだあれは！」

タツヤ「恥ずかしいっいたらありゃあしないよ」

シユウ「同じく」

ヒロシ「初めての登場でこれはないだろう作者」

シユーター「僕もだよ」

悪かったなみんな。いろいろ考えた結果こうなったんだ。おかげさまで1話で7800文字書けたんだから。

ヤストシ「そんなことのためにあんなことを（怒）」

デント「まあまあ、みんな。落ち着いて」

とりあえず、サトシ、シユウ、シユーターのファンには謝っておきます。話は、変わるけどデント、この間のポケアニを見たけどすごい釣りさばきだったぞ。ヤナップやイシズマイがいない状態でポケモンをゲットするなんてすごいぞお前は。

デント「お褒めに預かり光栄です」

しかも、ルアーがデント姿とは、これは、カスミ以上の釣り名人かもな。

サトシ「作者、そんなこと言ったらカスミが・・・」

だって本当のことだもん。

7人「ダメだこりゃ」

と言うことでみなさん。こんな駄作ですがどうか感想よろしくお願ひします。



### 第53話 変則的ローテーションバトルでジム戦！

前回、ノゾミとミカンを除く女性陣達とシュウ、シューティーによって、女物の着物を着せられたサトシとヤストシとシュウとタツヤ。サトシ「……………」  
ヤストシ「……………」  
タツヤ「……………」  
シュウ「……………」  
魂が抜けたように元気がなくなっていた。DPでサトシが楽しそうにメイド服姿になっていたこともあった気がしたが、そこはスルーで。

ノゾミ「……ホントにごめんね、4人とも。先輩達を止められなくて」

ミカン「私からも謝ります」

ノゾミとミカンはサトシとヤトシ、シュウ、タツヤに申し訳なさそうに答える。

サトシ「もういいよ。起きたことは仕方ないし。」

と言いつつ、ため息をつくサトシ。

ヒロシ「僕からも謝るよ。少し、悪ノリが過ぎたから」

ノゾミとミカンに続いてヒロシも申し訳なさそうに謝る。

だが、一人だけ反省していない男性がいた。

ガシヤ

タツヤ「シューティーだったけ。お前何やってんだ？」

シューティー「旅の記念に撮っておこうと思って」

シューティーは自前のデジカメでみんなの着物を撮る。

ノゾミ「旅の記念って……（汗）。アンタ、少しは空気読みなさいよ」

シューティーがデジカメで写真を撮るのを見て、呆れながらツッコむノゾミ。

ヤストシ「お前、反省してないだろう！」

シユーティー「しているよ」 棒読み

シユウ「絶対に反省してないだろう」

シユーティー「それは、いいとして君達、その姿、似合いすぎだろ。君は本当に男なのか？」

シユーティーの追い討ちともいえる発言にサトシは・・・

サトシ「今の言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

タツヤ「対抗するなよサトシ」

タツヤがサトシにそうツツコむとそこに・・・

アイリス「そんなことで喧嘩するなんて4人とも子供ね」

アイリスが会話の中に割り込んできた。

サトシ「誰のせいでこうなったと思ってるんだ（怒）」

タツヤ「そうだそうだ（怒）」

サトシとタツヤは怒り交じりにアイリスに言う。

アイリス「アハ？」

ヤストシ「欧米か。何がアハんだよ、謝れよ」

アイリス「ごめんねごめんね」

ヤストシ「U 工事か！」

シユウ「それよりヤストシ。タカア ドトシ風になってるぞ」

ヤストシとアイリスのやり取りにそう言っただけあげるシユウ。

アイリス「それにしても、サトシやヤストシ、シユウ、タツヤもよく似合っているけど、シユーティーもなかなか似合ってるわね。生まれてくる性別間違えたんじゃないの？」

カチン！

今のアイリスの発言に、シユーティーのなかで何かが切れた。BWでもサトシの言葉は無視するくせに、なぜか、アイリスの言葉には異様に反応する描写が多々見られる。

シユーティー「バイバナラ・・・」

シユーティーはボールを取り、バナプッチの最終進化形態・バイバナラを出そうとした瞬間・・・

アイリス「ち、ちょっと止めてよ。い、今は冗談だってば！」  
キバゴ「キバ？」

バニプツチと聞いた瞬間、アイリスは急に挙動不審になる。

シューティー「使う言葉には気を付けて欲しいものだ。基本だろ」  
シューティーはそうアイリスに言いながら、ボールをしまつ。

タツヤ「アイリスの奴、急にどうしたんだ？」

タツヤは急に挙動不審になったアイリスを不思議そうに見つめる。

サトシ「ああ、アイリスは氷タイプのポケモンを見ると寒気がするくらい苦手なんだ」

サトシはアイリスの挙動不審の理由を説明する。

ヒロシ「確か、バイバニラは氷タイプ。そういうことか」

サトシの言うとおり、アイリスは氷タイプのポケモンを見ると寒気がするほど苦手である。竜の里でドラゴンタイプのポケモンと過ごしたせいなのか、ドラゴンタイプが苦手とする氷タイプのポケモンにかなり苦手意識を持っている。ちなみに、アイリスのオババ様も寒いのは苦手である。

サトシ「でもさ、シューティー。今は少しやり過ぎじゃないか？」

サトシはシューティーの今の行動に苦言を呈する。

シューティー「あれくらいやらないと、僕の気が済まないからね」

サトシ「そうか？」

シューティーのSっぷりが垣間見れた瞬間だった。

ダイアン「それは、そうとサトシくん。君は、私のジムに挑戦しに来たのよね」

すぐそばにいたダイアンがサトシにそう問いかける。

サトシ「はい！」

そう返事するとそこへコトネとベルがやって来る。

ベル「ジム戦！」

コトネ「なら、私達も挑戦します」

ベルとコトネもカツチュウジムのジムリーダー・ダイアンに挑戦するらしい。

サトシ「おいおい、俺が先なんだから」

コトネ「そこは、レディーファーストでしょうサトシ君」  
ベル「そうよ」

ダイアン「まあまあ、なら3人いっぺんにバトルしてあげるわよ」

サトシ・ベル・コトネ「え！」

ダイアンの発言に驚くサトシとベルとコトネ。

ヤストシ「三人いっぺんってどうやって・・・」

ダイアン「簡単さ。変則のローテーションバトルよ」

サトシ・ヤストシ・ベル・アイリス・シューティー「ローテーションバトル!？」

サトシ「ってなんだ？」

ズーン

サトシの発言に思わずこけてしまうヤストシ達。

シューティー「君、ローテーションバトルも知らないのか？」

サトシ「知らないしやったことすらないんだから」

そう答えるサトシ。

シュー「ところでローテーションバトルってどんなものなんだ？」

ヤストシ「いい質問ですね」

タツヤ「池 彰さんか」

ヤストシにツツコみを入れるタツヤ。

ヤストシ「ローテーションバトルって言うのは、3体のポケモンを同時に出し、行動するポケモンを1匹選んで戦うルール。基本的にシングルバトルと同じだが、毎回異なる位置でローテーションのように位置を切り替えて行動するポケモンを選べる。特色としては、技だけでなく特性も前に出ているポケモンしか発動しない点、ローテーションはターン消化に含まれず、切り替えたポケモンで即座に技を使える点、ローテーションしただけではかかっている追加効果等が失われない点等があるんだ」

ダイアン「まあ、そう言う事よ。今回は、その変則バージョンで私は、3匹出しサトシ君とコトネちゃん、ベルちゃんは、1体ずつで

して勝負するの。ローテーションバトルは、ほかのバトルと違って駆け引きが必要よ。まあ、説明するよりやったほうが早いわ。早速始めましよう」

こうしてサトシとコトネとベルは、ダイアンに挑む。

サトシとコトネとベルは、ダイアンの実家にあつたバトルフィールドに移つてバトルの準備をしていた。

コトネ「あの、ダイアン。これは、なんなの？」

3人が乗っているのは、ターンテーブルのようなところに乗っていた。

ダイアン「それは、ローテーション専用の機械よ。それから今回は君達もポケモン同様ローテーションするようになってるよ。ローテーションしたくなったらそのボタンを押すのよ。右のボタンは右回りに左のボタンを押すと左回りするよ。わかつたね、ちなみに私のポケモンは、この三匹！」

ダイアンが出したのは、イシズマイ、グレイシア、ハハコモリの3匹である。

カスミ・アイリス「い、いやああああ！」

むしタイプのポケモンが苦手なカスミ、こおりタイプが苦手なアイリスが突如悲鳴を挙げた。

エリカ「あら、お二方ともどうされたのですか？」

エリカはなぜ2人が突如悲鳴を挙げたのか分からず、きよとんとする。

ハルカ「あ、カスミはむしタイプのポケモンが苦手なんです」

ヒカリ「アイリスはどうか、分かりませんが。」

ハルカとヒカリはカスミのむしタイプのポケモン嫌いについてエリカに説明するが、アイリスについては先ほどのサトシ達の会話に加わってなかつたので分からなかつた。

ノゾミ「そのアイリスって子、どうもこおりタイプのポケモンが駄目らしいよ」

先程、サトシ達の会話に加わっていたノゾミが代わりに言った。  
スズナ「それじゃあ、アタシのポケモン達は完全にアウトね・・・」  
シューティー「えっ、それってどういうことなんですか？」  
ノゾミ「スズナ先輩はこおりタイプの使い手のジムリーダーなんだ」  
ハルカ「・・・アイリスにとっては、最悪な組み合わせかも（汗）」  
ハルカが苦笑を浮かべつつ、スズナは今後アイリスと仲良くやって  
いけるか心配になった。一応スズナは、こおりタイプではないチャ  
ーレム、オニドリルを持っていているが今回は連れてきていないようだ。  
バトルフィールドでは・・・  
ダイアン「どうしたんだ一体！」  
サトシ「実は、カスミは、虫がアイリスは、氷がダメなんです」  
そう事情を説明するサトシ。  
ダイアン「そうだったんだ。だったらカスミには、あとでたっぷり  
私が虫を克服させて見せますわ」  
ヤストシ「（そんなことしたら余計に虫嫌いになりそうだ）」  
ダイアン「それじゃあ、審判開始して」  
審判「わかりました、それでは、バトル開始」  
サトシ「ピカチュウ、君に決めた！」  
コトネ「マリル！」  
ベル「チャオプー、行くのよ」  
サトシは、ピカチュウをコトネは、マリルをベルは、チャオプーを  
出す。  
ダイアン「先発は、サトシからよ。私の先発は、ハハコモリよ」  
サトシ「よし、ピカチュウ、ハハコモリに電光石火」  
ピカチュウは、ハハコモリに電光石火を仕掛ける。  
ダイアン「ハハコモリ、むしのていこう」  
ピカチュウの電光石火をハハコモリは、避けてむしのていこうで攻  
撃しダメージを食らわせる。  
エリカ「あのハハコモリ、よく育てられていますわ。わたくしのポケ  
モンにしたいくらいに」

草タイプの使い手・エリカは、八八コモリに興味を持ったようだ。  
ダイアン「続いて、シザークロス」

八八コモリは、シザークロスでピカチュウを攻撃する。

ベル「サトシ、ローテーションローテーション」

ベルがサトシにそう言う。

サトシ「わかった、右回りにローテーション」

サトシは、ローテーションのスイッチを入れて右回りしベルのチャオプーがバトルフィールドに立つ。

ベル「チャオプー、ニトロチャージ」

チャオプーは、ニトロチャージで八八コモリを迎え撃つ。

ダイアン「まずい！八八コモリ、避けるのよ」

しかしチャオプーは、八八コモリに避ける時間を与えず見事命中する。

草と虫の両方のタイプを持つ八八コモリには、炎の技は、効果はかなり抜群である。

そして八八コモリは、チャオプーのニトロチャージ一撃で戦闘不能となる。

審判「八八コモリ、戦闘不能！チャオプーの勝ち」

これでダイアンは、残り2匹となる。

ダイアン「やるわね、なら次は、右回りでイシズマイ！」

ダイアンは、ローテーションでイシズマイをフィールドに立たせる。

ベル「チャオプー、行くわよ。ニトロチャージ」

チャオプーは、ニトロチャージでイシズマイに仕掛ける。

ダイアン「イシズマイ、じしんよ」

ベル「え！」

イシズマイが自身を覚えていることに驚くベル。

そしてじしんは、見事チャオプーに命中し戦闘不能となる。

審判「チャオプー、戦闘不能！イシズマイの勝ち」

ベル「サトシ君、コトネちゃん、あとよろしく（T-T）」

ここでベルが戦線離脱し二人にたくした。

そしてローテーションは、コトネのマリルがバトルフィールドに立つ。

ダイアン「右にローテーションでグレイシア」

ダイアンは、すかさずローテーションしグレイシアをバトルフィールドに立たせる。

ダイアン「グレイシア、あられよ」

グレイシアがあられを繰り出しバトルフィールドがあられ状態になってグレイシア以外のポケモンは、ダメージを与える。

スズナ「コトネちゃんとサトシ君はあられ状態の中、どう戦っているのか楽しみね」

スズナは自分の得意先方の一つであるあられをサトシとコトネがどう乗り越えていくか見物だといった。一方、カスミとアイリスは・

カスミ「ムシハムシムシハムシムシハムシハ・・・」

アイリス「サムイサムイサムイサムイ・・・アタシナンダカネムクナツテキチャッタ」

ハルカ「ちよつと2人ともしっかりして！」

ヒカリ「アイリス寝ちゃ駄目！」

ヤストシ「遭難か。こんなところで寝たって死なないよ」

ヒカリにそうツッコむヤストシ。

ヒロシ「大丈夫かな、カスミちゃんとアイリスちゃん・・・(汗)」

タツヤ「大丈夫だと思うよ。たぶん・・・(汗)」

ヒロシとタツヤは顔を引きつらせながら苦笑した。さらには・・・

シュウ「・・・シューティー、君は一体何をしてるんだい？」

シューティー「彼らのバトルを形あるものに残して参考にしようと思ってる」

シュウ「そうか・・・」

シューティーは自前のデジカメでローテーションバトルの様子を撮っていた。シューティーのこの行動はサトシのミジュマルのアクアジェットがコントロールできなかつた原因を解明しその後いろいろ



あつて克服させたというサトシにとっては皮肉にも役に立つことがある。

ダイアン「グレイシア、シャドーボール！」

グレイシアは、シャドーボールを発射した。

コトネ「マリル、みずてつぽうで打ち消して」

マリルは、みずてつぽうを発射しシャドーボールを打ち消した。

コトネ「マリル、続いてアイアンテール」

マリルは、アイアンテールを仕掛けた当てる。

鋼タイプのアイアンテールに氷タイプのグレイシアには、効果抜群である。

しかし、グレイシアは、耐えた。

ダイアン「グレイシア、ギガインパクト」

グレイシアは、ギガインパクトを繰り出しマリルに当たる。

コトネ「マリル！」

審判「マリル、戦闘不能！グレイシアの勝ち」

コトネ「サトシ君、あとよろしく（Ｔ－Ｔ）」

コトネは、サトシに全てを託した。

サトシ「ピカチュウ、アイアンテール！」

ピカチュウは、アイアンテールを繰り出しグレイシアに当たる。

先ほどのダメージもありグレイシアは、倒れた。

審判「グレイシア、戦闘不能！ピカチュウの勝ち」

これで残り１体ずつとなる。

ダイアン「イシズマイ、がんせきほう」

サトシ「ピカチュウ、エレキボール」

ピカチュウは、エレキボールをイシズマイは、がんせきほうを繰り出し衝突した。

サトシ「ピカチュウ、電光石火」

ダイアン「イシズマイ、きりさく」

イシズマイは、きりさくを繰り出し電光石火でやってくるピカチュウを迎え撃つ。

サトシ「ピカチュウ、そこからエレキボール」

なんとサトシは、途中で技を切り替えてエレキボールをイシズマイに当てる。

しかし岩タイプを持つイシズマイには、効果はいまいちである。

サトシ「続いてアイアンテール」

サトシは、エレキボール発射後アイアンテールを繰り出しイシズマイに当てる。

いわゆる二重攻撃である。

ダイアン「イシズマイ！」

煙が晴れるとイシズマイは、伸びていた。

審判「イシズマイ、戦闘不能！これにより、ジムリーダー・ダイアンのポケモンが全て戦闘不能になったため、この勝負、サトシ・コトネ・ベルサイドの勝利」

サトシ・コトネ・ベル「……やったあああ！」

サトシとコトネ、ベルは勝利の喜びから高く飛び上がる。

ダイアン「私の負けよ。こんな勝負は、久しぶりだね。さて、これがカツチュウジムのバッジ、カブトバッジよ」

そしてサトシとコトネ、ベルは、バッジを受け取った。

サトシ「カブトバッジ」

サトシ・ベル・コトネ「……ゲットだぜ！！！！」

こうしてサトシとベルとコトネは、カブトバッジをゲットすることが出来た。

一方観戦サイドでは……

カスミ「さすが、サトシ。あの女を見事やつつけてくれたわ」

アイリス「ホントホント」

ヒカリ「復活早っ!？」

さつきまで失神寸前だったカスミとアイリスが突然飛び起きてきた。ヒカリはその2人に驚愕し、他の面々は苦笑を浮かべた。その後ヒロシとシューティー、タツヤ、ヒジリの4人は先を急ぐと言って歌舞練場を後にし、ノゾミ、スズナ、ミカン、エリカ、シロナ、サオ

りの6人はもう少しエンジュの街並みを観光すると言って、サトシ達と別れた。ちなみにコトネは、サトシ達についていくことにした。もちろん、サトシ、タツヤ、ヤストシ、シユウ、ヒロシ、シユーターは普段の服装に戻ってます。当たり前か(笑)

宿泊先に戻る直前・・・

サトシ「今日もいろいろあったな・・・って、あれはカスミ?」

サトシは庭の縁側に腰を下ろしているカスミを見つけた。

サトシ「カスミ。まだ着替えないのか」

カスミ「うん、この着物気に入っちゃって。もう少し来てみようと思っただの」

サトシ「そっか。でもそろそろ戻るから早めに着替えてくれよ」

カスミ「わかったわ。」

カスミはそう言うと、そよ風をにわかを感じながら庭を眺めていた。さらに夕日の照らす光がより一層着物姿のカスミを綺麗に引き立てる。

サトシ「・・・・・・・・」

サトシはカスミをじっと見つめている。

カスミ「ん?どうしたの、サトシ」

カスミは自分に向けられるサトシの視線が気になったのか声をかけてみた。

サトシ「あつ、いや何でもない」

サトシは急に視線をそらしながら言った。

カスミ「もしかして、着物姿のアタシに見とれてたとか?」

サトシ「ノノお、俺、先に帰ってるから」

サトシは急に顔を赤くしながら、カスミの元を離れた。

カスミ「(もしかして、サトシ、アタシのこと・・・。まさかそんなわけないか。あのお子ちゃまが気づくわけないか)」

カスミは一瞬サトシが自分の気持ちに気づいたのかと思ったが、恋愛に疎いサトシのことと、サトシほどではないがカスミ自体もどこ

か鈍感があるのでその考えはすぐに一蹴された。

ヤストシ「(二人とも鈍感だな)」

遠くから二人を見ていたヤストシは、そう思った。

ヤストシ「(それから、あちらさんも同じか)」

それは、ヤストシのところから少し離れた場所にシュウとハルカがいた。

ハルカ「ところで、シュウ」

シュウ「う？」

ハルカ「この間のことだけど・・・」

シュウ「!!!!!!」

この間のこと・・・シュウがハルカに告白しハルカの返事を待っていた。

まさかこのタイミングでこの間の返事を言うとは、想像もしなかったシュウ。

ハルカ「シュウ、私・・・」

シュウ「あ！そろそろ戻らないと」

シュウは、我慢できず逃げてしまった。

ハルカ「シュウたら、もしかして心の準備できていなかったかも  
そうつぶやくハルカ。

ヤストシ「さてさて、俺も帰るか」

ヤストシも宿泊先へと戻っていた。

その宿泊先で・・・

サトシ「俺、なんか忘れてるような・・・」

ヤストシ「サトシ、お前もか？実は俺もなんだ」

シュウ「僕もだ」

3人は、何かを忘れているのようなどと思いい生懸命思い出そうとした。

そして数秒間の沈黙の後・・・

サトシ・シュウ・ヤストシ「」「あああああ！」「」

コトネ「一体、どうしたのよ」

サトシとシユウ、ヤストシは思い出したのか突然大声を出した。女性陣達は、突然の大声にびっくりした。サトシ「タケシ達の荷物運び手伝うって言ってたのすっかり忘れてた。」

一方、タケシ達は・・・

タケシ「遅い！ 遅すぎるぞおおおお！」

デント「ハハハハ、イツツ・待ちぼうけ・タアアアイム・・・」  
マサト「（この2人大丈夫なのだろうか・・・）」

その後、慌ててタケシ達に向かったサトシとシユウ、ヤストシが、タケシとデントの説教を喰らったのは言うまでもない。

さて、タクヤはというと・・・

タクヤ「もしもし」

???「タクヤか。で、どうだった」

タクヤ「残念ながらやつらの情報をつかめませんでした」

???「まあ、やつらは、簡単表に出てこないからな。それと少年の行動に変化はないか？」

タクヤ「今のところ変わった様子は、ありません」

???「そうか、引き続き、少年の監視および警護をするんだ。よいな」

タクヤ「あは」

そう言つて電話を切るタクヤ。

???「・・・」

タクヤに電話していた相手は、受話器を置いた後一枚の写真を見る。???「（まさか、お前がこの地方に来るとは・・・お前だけは、このことに巻き込みたくわない）」  
そう心の中でつぶやく一人の男性。

写真には、彼の若き頃の写真でとなれには、彼の奥さんでその隣に彼の従兄弟に当たる女の子、そして髪にくせがある男の子が写っていた。そして彼は、写真をポケットにしまいイスに深く座った。 R

と言つ頭文字が月の光に当たる。

### 第53話 変則的ローテーションバトルでジム戦！（後書き）

カスミ「今回は、ジム戦に加えて随分と意味不明なのが出来上がったわね」

ハルカ「そうよね」

そう言うなよ、無理矢理やけどサトカス要素とシユウハル要素入れたんだから許してくれよ。

ハルカ「まあ、それに免じて許してあげるわ」

カスミ「それより最後のシーンなんなの？それにタクヤは、何者なの？」

そこは、ノーコメントだ。これからの物語にし重要になってくるかな。

カスミ「へえ、それでどうなるのこれから」

しばらくは、次の町を目指しながらロケット団の活発な動きと謎の組織の登場でサトシ達を巻き込んだりと、重要な場面を作ろうと構想を練ってるから。

ハルカ「なんかややこしいかも」

カスミ「それで、謎の組織ってどんな組織なの？」

それもノーコメントや。それからこれからサトカス要素とシユウハル要素を増やしていこうと思うから。

カスミ「じゃあ、楽しみにしているわ。それでは最後になりましたが、次回もポケモンでゲットだぜ！」

## 第54話 釣り名人は誰だ？カスミ対デント

サトシ達は、次のジムのある町へ向かって歩いてきたときだった。発端は、マサトの一言だった。

マサト「ところでデントって今、何を持っているの？」

デント「ボクの今の手持ちポケモンは、ヤナップとイシズマイ、それからマツギョだよ」

マサトにそう答えるデント。

サトシ「ちなみにマツギョは、デントが釣りでゲットしたんだぜ」  
カスミ「！」

釣りと言う言葉にカスミが反応する。

ヤストシ「それもすごいゲットの仕方だぜ」

ヒカリ「すごいゲットの仕方？」

ヤストシ「そうさ。実は、ある事情でヤナップとイシズマイが倒れてね。それでいない状態で釣りをしマツギョを釣り上げて釣竿を振り回しそれでマツギョを行動不能にさせた際にゲットしたんだ」  
まるで自分がやったように話すヤストシ。

ハルカ「それは、すごいかも」

デント「そんなことないよ」

ヤストシ「いいや、デントは、カスミ以上の釣り名人だからな」

ヤストシがそう言うと黙っていない人がいた。

カスミ「デントは、カスミ以上の釣り名人ですって！」

サトシ「カスミ！」

カスミは、怒った状態で後ろを振り向きヤストシを見つめる。

カスミ「アタシよりデントのほうが名人ですって！！！！！」

ヤストシ「だって、本当のことなんだぜ」

ヤストシがそう言うとカスミは、デントを見る。

カスミ「デント、アタシと釣り勝負よ」

デント「ええええええええ？？？？」



いきなりのことにデントは、頭の中が混乱する。

サトシ「ちょ、ちょっとカスミ」

ヤストシ「釣りって言ったって周りは、木だらけだぜ。川なんかないぜ」

サトシトヤストシがカスミを落ち着かせようとした時だった。

????「お！サトシ君たちじゃないか」

ヤストシ「あ、エブチ博士！」

サトシ達の前に現れたのは、エブチ博士であった。

エブチ博士とは、シロナが助手を辞めた後に助手となった元ロケット団の研究員でロケット団を辞めた前にエブチは、ロケット団の予算からロボットを大量に作りその後辞めてロケット団を倒そうとしている。今は、ポケモンの観察や研究、さらに発明をしているがほとんどがくだらないものである。

カスミ「エブチ博士、どうしてここに？」

エブチ「実は、このホクシンにロケット団と怪しい組織が活動しているらしいんだ」

ヒカリ「怪しい組織？」

エブチ「ああ。活動および内部おまけに目的がわからん組織なんだ。それで、この二大組織が行動を起こすまいに我々エブチ隊とポケモン協会のジムリーダーと四天王、チャンピオン、それからGメンにポケモンレンジャーが協力して潰すつもりなんだ」

ケンジ「そうなんですか」

アヤノ「それより、サトシくん達は、どうしてここに？」

アヤノがサトシ達にたずねる。

カスミ「あの、アヤノさん。この辺に湖か川がありませんか？」

アヤノ「あるよ、向かうに大きい湖があるわよ。あそこには、珍しいポケモンもいるって噂よ」

それを聞くとカスミは、デントの腕をつかみ・・・

カスミ「行くわよ、デント」

デント「え？え？え？え？」

カスミは、デントを連れて湖へ猛ダツシユする。

サトシ「待つてよカスミ」

サトシ達もカスミの後を追っていった。

エブチ「う？」

アヤノ「どかされましたかエブチ博士」

エブチ「いや、別に」

そう言つてエブチは、エブチ隊を連れて先へ急いだ。

カスミ「よし、着いたわ」

カスミは、アヤノが言った湖に到着した。

カスミ「さあ、デント。アタシと釣り対決よ」

カスミは、デントに改めて釣り対決を申し込むが・・・

デント「別に、釣り対決したくても・・・」

カスミ「いいからやるのよ。デントよりアタシのほうが釣りの名人だと証明してみせるわ」

デント「わかつたわかつたよカスミ。君との勝負を受けるよ」

デントは、ついに折れてカスミとの勝負を受けることになった。

ヤストシ「どうして、こんなことになるんだらう」

ハルカ「全部ヤストシのせいかも」

ヤストシ「なんで、俺なんだ」

アイリス「だって、デントは、カスミより釣り名人なんていうからよ」

ベル「どうするのよ、この始末」

みんなにさせられヤストシは、しょんぼりしてしまう。

カスミ「それじゃあ、行くわよ。アタシの最新版スペシャルカスミルアーでデントより大物を釣つて見せる」

そう言つてカスミは、釣竿を思いつきり湖に投げ込んだ。

タケシ「スペシャルカスミルアーか・・・」

ヒカリ「そういえば、サトシ。サトシもカスミルアーを持っていたよね」

サトシ「ああ。今でも持っているぜ」

そう言つてサトシは、バックからカスミルアーを取り出す。

ちなみにこのカスミルアーは、バトルフロンティア挑戦中に暑中見舞いということでサトシに送られた物である。なお、このカスミルアーは、ブイゼルを釣ろうとした時に一度使ったことがある。

デント「イツツ、フィッシングタイム！」

デントは、そう言つたと釣竿を取り出す。

デント「きらめくもの、間に挟む。僕とカスミのあ、真剣勝負」

釣竿を伸ばしそしてルアーは、カスミと同じく自分の形のルアー

デントルアーが釣り下がる。

デント「釣りこそ、男の見せどころ」

デントは、かっこよく決める。

ヤストシ「お、デント。かっこいいぞ」

アイリス「相変わらずテイステイングタイムになると性格が変わっちゃうわね」

コトネ「そうなんだ」

ベル「でも、確にかっこいいわね」

ベルは、目をキラキラさせながら言つ。

デント「いざ、勝負。バックハンドキヤースト！」

そう言つてデントは、釣竿を思いっきり湖に投げ込んだ。

デント「ふん、グラスの中でたゆとと豊かなぶどうジュースの中にかすかに感じるおゆのような違和感。ラインが軽やかなメロディにかなでる時リズムに合わせ華麗なダンスを舞い踊る」

そう言いながら釣り糸を引く。

ヤストシ「そ、ソムリエ用語がたくさんならんでいる」

コトネ「ソムリエ用語ってなんなの？」

ヤストシ「1から10まで説明すると日が暮れるから聞かないで」

シュウ「おいおい（汗）」

ヤストシにそうツッコむシュウ。

カスミ「（ふん、どうやらうとアタシの方が釣りに関しては、上な

んだから」

そう心の中で自画自賛するカスミ。  
その時だった。

デント「来た！」

カスミ「え！」

釣りを始めてわずかデントの釣り糸に何かがかかりデントは、引き上げようとする。

それを見たカスミは、自分より早くヒットしたことに驚く。

タケシ「もうヒットしたのか！」

タクヤ「は、早い！」

ケンジ「カスミより早くヒットするなんて・・・」

デントの釣竿に早くもヒットしたことに驚く3人。

デント「チャンク！」

そしてデントが釣り上げたのは、なんと！

???「ドリ」

コトネ「トリトドン！」

なんとデントが釣ったのは、トリトドンであった。

デント「キャッチアンドゲット！」

ヤストシ「すげ、トリトドンを釣るなんて」

トリトドンは、野生で出るのは、珍しいのでそれを見事釣ったデントに絶賛するヤストシ。

デント「行くぞ！マイビンテージ！ヤナップ！」

デントは、ヤナップを繰り出す。

デント「ヤナップ。タネマシンガン！」

ヤナップは、タネマシンガンを発射しトリトドンは、見事命中し一発KOとする。

そしてモンスターボールを投げてトリトドンが入りボールが揺れるがすぐに収まった。

デント「トリトドンゲットで、グッドテイスト！」

ヤストシ「さすが、デント。開始わずかでヒットしてしかもトリト

ドンを釣りゲットするなんて」

デント「そんなことないよ」

そうヤストシに言うデント。

一方カスミは・・・

カスミ「(まさか、デントがアタシより先に釣り上げてゲットする

なんて・・・)」

そう思った時だった。

カスミ「ヒットしたわ」

サトシ「おい、カスミがヒットしたって」

ヤストシ「なんだと！」

カスミは、懸命に糸を引く。

カスミ「かなりの手ごたえだわ。これは、大物よ」

そう言つて糸を引いて・・・

???「タマタマ」

ヤストシ「あ、アメタマ！」

なんとカスミが釣ったのは、アメタマだった。

カスミ「アメタマ!!!!」

タクヤ「何であんなに驚くんだカスミは？」

タクヤは、カスミが虫嫌いつてことは、知らない。

ヤストシ「カスミは、とても虫嫌いなんだ」

タクヤ「そうなんだ」

ヤストシがそう答えてタクヤは、納得した。

ヒカリ「でも、アメタマは、虫タイプだけど同時に水タイプも持つ

ているのよね」

ケンジ「そうだ。でも、カスミにとっては、複雑だな」

タケシ「嫌いなタイプと好きなタイプを両方持っているからね」

そうつぶやくタケシ。

するとアメタマは、サトシ達目掛けてバブル光線を発射。

ヤストシ「うわー！」

さらにアメタマは、マッドショット、れいとうビームを続けて攻撃

する。

デント「あのアメタマ、結構強力な技を覚えてるようだ」  
ハルカ「これはこれで強いかも」

アメタマを見てそう思うデントとハルカ。

タクヤ「あれ？あのアメタマどこかで・・・」

タクヤは、強力な技を使えるアメタマをどこかで見たようなっとう顔をしながら考え込んでいた。

そして、さらにアメタマは、光の塊を集める。

ヤストシ「おいおい、あの技は、まさか！」

ケンジ「そのまさかだよ」

タクヤ「みんな、伏せろ」

そう言つてサトシ達は、一斉に伏せた瞬間アメタマが光の塊を発射する。

ちなみにこの光の塊の正体は、ソーラービームである。

カスミ「しょうがない、ギャラドス。火炎放射よ」

カスミは、ギャラドスを繰り出し火炎放射を発射する。

そして見事命中する。

ところがアメタマは、まだ立っていた。

ヒカリ「嘘でしょう！」

驚くヒカリ。

するとアメタマは、陸地へ近づきそして1つの空のモンスターボールに無言に入っていく。

このモンスターボールは、さっきカスミが落としたボールである。

そしてアメタマはボールに収まった。

ハルカ「どうということなのかしら？」

ヤストシ「俺にもさっぱりだ」

さつき、あんなにヤストシたちに攻撃してきてギャラドスの攻撃が一撃で当たって自分からボールに入ったことにヤストシたちは、わからない。

カスミ「でも、ゲットには、変わらないわよ」

そうヤストシ達に言うカスミ。

ヤストシ「でも、大きさは、デントの勝ちだな」

カスミ「今回は、そうしておくわ。でも、次は、必ず勝つからね」

デント「アハハハハハ・・・」

そう言われて苦笑いするデント。

サトシ「それよりカスミ。どうするんだそのアメタマ？」

カスミ「そのことだけど、育ててみるわ。虫も入ってるけど水も入

ってるから大丈夫だよ」

サトシ「ならいいけど」

アイリス「それじゃあ、先へ進みましょう」

コトネ「行こう行こう」

こうしてサトシ達は、先へ進んだ。

タクヤ「（やつぱりあのポケモン。間違いなくあのアメタマだ。ま

さか、言うことを聞かなかったあのアメタマがまさかあの小娘に・・・

。。後で報告せねば）」

タクヤは、心の中でそうつぶやいた。

タクヤは、一体何者なのか？

この少年の正体を知ったとき物語が急変することにサトシ達は、知るよしもなかった。

第54話 釣り名人は誰だ？カスミ対デント（後書き）

今回は、サトシ達にとんでもないことが起こる。



## 第55話 謎の組織（前書き）

今回は、オリジナルの悪の組織が登場します。

## 第55話 謎の組織

次の町を目指していたサトシ達は、途中で昼食をとっていた。

ベル「デント君の料理も美味しいけど、タケシ君の料理もなかなかだわ」

タケシ「喜んでもらえたら、こっちも作った甲斐があるってものだ」  
ハルカ「でも、サトシは旅先でタケシやデントそれぞれの料理を食べたのね。なんか羨ましいかも」

カスミ「本当ね。だって、こんなに美味しいものが毎日食べられるなんて、アンタって本当に幸せ者ね」

サトシ「ハハハ、でも今こうして食べられるんだからいいじゃないか」

デント「そうだよ。こうして大勢で囲いながら摂る食事。僕達が作った料理のテイストに楽しさのスパイスに加えた絶妙なハーモニー、最高だ」

ハルカとカスミから皮肉混じりのコメントに苦笑するサトシを、いつものテイ스팅タイムに入りながらフオーローするデント。そんな時だった。

「???「ヤド」」

ヤストシ「あ、ヤドンだ」

タケシ「珍しいな。こんなところにヤンドが出るなんて」

ケンジ「でも、なんか様子がおかしいな？」

ケンジの予感、的中した。

なんとその野生のヤドンがたたずんでいるのが見受けられた。よく見ると尻尾が短い。

カスミ「このヤドン、尻尾を切られてるわ!」

シユウ「本当だ」

ハルカ「一体誰がこんなことを・・・」

そうハルカが言った時だった。

「???? 飛んで火に入るヤドンを発見!」  
「???? さつさと尻尾を切るぞ!」  
そこに二人の怪しい男達が出てきた。  
ヤストシ「お前達は、誰だ! ロケット団の下っ端か」  
「???? 誰がロケット団の下っ端か」  
「???? 我々は、ロケット団を敵視するプロペラ団だ!」  
13人「スペース団!?!」  
タクヤ「!?!」  
そう名乗りサトシ達は、驚く。  
スペース団A「我々は、ロケット団をこの地方から追い出すために戦っている」  
スペース団B「そのためにもヤドンの尻尾を売ってそれを軍資金と  
してしているんだ」  
サトシ「ふざけたことを言うな」  
カスミ「ヤドンの尻尾を売るなんて」  
ヤストシ「許さんぞ、お前達」  
スペース団A「やる気か、俺達に」  
スペース団B「相手が誰だろうと容赦はしない!」  
スペース団A「お前達もまとめて片付けてやる!」  
ヤストシ「行け、ミニロップ!」  
カスミ「行くのよ、マイ、ステディ!」  
サトシ「ミジュマル、君に決めた!」  
シュウ「バタフリー!」  
ハルカ「アゲハント!」  
マサト「行け、サーナイト!」  
ヤストシとサトシ、カスミ、シュウ、ハルカ、マサトがポケモンを  
繰り出す。  
スペース団A「面白い。やってやろうじゃないか。行け、ズバット  
! ちょうおんぱだ!」  
スペース団B「ドガース、どくガスだ!」

ズバットがちょうおんぱを、ドガースがどくガスを放ってサトシ達に襲いかかる。

マサト「サーナイト、サイコキネシス！」

ハルカ「アゲハント、あなたもサイコキネシス！」

シユウ「バタフリー、ねんりきだ！」

3匹は、毒タイプに効果抜群のエスパータイプの技を繰り出し勢いよく放たれた技はちょうおんぱとどくガスをたちまちのうちに吹き飛ばしていった。

スペース団A「くっ、さすがだな。ならこれでどうだ！アーボック、ヘドロばくだん！」

スペース団B「ヤミカラス、あくのはどうだ！」

続いて現れたアーボックがヘドロばくだんを放ち、さらにヤミカラスがあくのはどうを放って攻撃した。

サトシ「ミジュマル、アーボックにアクアジェット！」

カスミ「ギャラドス、あなたもアーボックにハイドロポンプ！」

ヤストシ「ミミロップ、ヤミカラスにかみなりパンチだ！」

ミジュマルとギャラドスは、アーボックにミミロップは、ヤミカラスに攻撃し2匹とも一撃で戦闘不能となる。

スペース団A「何なんだ、こいつらは！？」

スペース団B「しょうがない、援軍だ！」

そういつて一人の下っ端が笛を吹きそれを聞いて下っ端達が続々とやってくる。

スペース団C「どうした！」

スペース団A「こいつらが我々の邪魔をしに来た」

スペース団D「なんだと、我々を邪魔するとは、いいどきょうしているな」

スペース団E「よし、やっちまえ」

スペース団F・G「おー！！！！」

援軍は、コロモリ、タマゲタケ、ニドリーナ、スカンプー、ゴクリンを繰り出した。

デント「僕たちも行くぞ」

ケンジ「もちろんだ」

タケシ「俺もやってやる」

タクヤ「俺もだ」

ヒカリ「アタシも」

アイリス「アタシもよ」

コトネ「私も」

ベル「私も」

デント達は、ポケモンを出しデントはマツギョ、ケンジとコトネはマリル、タケシはウソツキー、タクヤはキレイハナ、ヒカリはポツチャマ、アイリスはキバゴ、ベルはチラーミイを繰り出しサトシ達を援護する。

スペース団D「たくさんポケモン出したって無駄だ」

スペース団E「最後に勝つの俺たちなんだ」

スペース団C「そうだそうだ」

サトシ「悪いことするやつが勝つわけがない」

ヒカリ「サトシの言うとおりよ」

ヤストシ「よし、みんなで一斉攻撃だ！」

デント「マツギョ、どろばくだん！」

アイリス「キバゴ、りゅうのいかり！」

タケシ「ウソツキー、アームハンマー！」

タクヤ「キレイハナ、マジカルリーフだ！」

ヒカリ「ポツチャマ、ハイドロポンプ！」

ベル「チラーミイ、ハイパーボイス！」

ケンジ「マリル、みずてっぼう！」

コトネ「マリル、あなたもみずてっぼう！」

カスミ「ギャラドス、火炎放射！」

ハルカ「アゲハント、ぎんいろのかぜ！」

ヤストシ「ミミロップ、れいとうビーム！」

シュウ「バタフリー、ねんりき！」

マサト「サーナイト、シャドーボール！」

サトシ「ミジュマル、みずてっぼう！」

サトシ達のポケモンは、一斉攻撃しスペース団の下っ端とそのポケモンに襲いかかる。

トガリーーン

スペース団全員「うわゝ、覚えてるよーーーーー!!!!!!」  
キラーン

スペース団の下っ端達は、ロケット団のように星のかなたまで飛ばされた。

ヤストシ「ひえゝ、ロケット団と同じく飛んで行ったなあの人たちハルカ「それにしてもまさか、エブチ博士が言った怪しい組織の目的が明らかになったかも」

シユウ「これからあのスペース団とロケット団はと言う手段で僕達を邪魔するか、そう言うことにも気を付けた方がいいようだね」

デント「シユウの言うとおりだ」

サトシ「どんな悪事を企んでいるか知らないが俺は、それを食い止めるのみ」

カスミ「サトシらしい発言だわ」

コトネ「私もやってやるわ」

ベル「私もよ」

アイリス「みんな子供ねゝ。でも、あたしもあの人たちがやったことを許せないわ」

マサト「僕もやつつけてやる」

ケンジ「意気込んじゃだなタケシ」

タケシ「ああ。でも、これがみんなの良い所じゃないかな？」

ケンジ「そうかもしれないな」

ヤストシ「とりあえず、このことをあとでエブチ博士に報告しななきゃ」

デント「ここだと、小さな港町のアカサキタウンがあるよ」

サトシ「よし、そこを目指して行くぞ！」

12人「おー！ー！ー！！！」  
サトシ達は、急いでアカサキタウンを目指した。

## 第55話 謎の組織（後書き）

アイリス「ねえ、作者少し駄作じゃない、今回の話？」

ハルカ「確かにスぺース団を退けるシーンは、なんか無理矢理だし・

・・  
」

ヒカリ「しかも、手抜きが多いわ」

そこは、勘弁してよ。考えた末にこうなっちゃったんだから。

ハルカ「もう少し考え作ってほしいかも」

わかっているよ。次からは、もう少しましな話を作るからさ。

カスミ「ならいいけど」

さて、カスミ達が納得したところでお開きにしたいと思います。皆

さんの感想をお待ちしています。



番外編？ 一匹のポケモンがきっかけで・・・(前書き)

このお話は、54話と55話の間のお話です。

番外編？ 一匹のポケモンがきっかけで・・・

サトシ達は、次の町に行く途中で夜になってしまいそこで一晚野宿することになった。

そして、一夜明けてサトシ達は、起きて朝飯を作っていた。

タケシ「おーい、みんな。朝飯だぞ」

ヤストシ「今行く！」

そう言っつてヤストシ達は、タケシとデントが用意した朝食が置いてあるテーブルにそれぞれ付く。

サトシ「あゝ、腹減った。腹減った」

ハルカ「私も」

ヒカリ「アタシもよ」

アイリス「同じく」

ヤストシ「さあ、食べようぜ」

ヤストシがそう言っつて飯に手をつけようとした時。

ケンジ「その前にみんな。ポケモンを出したら？」

デント「そうね。ポケモン達のためにポケモンフーズとフルーツを用意したんだ」

サトシ「そうか。それじゃあ、出すか！」

そう言っつてサトシ達は、ポケモンを出す。

ベル「それじゃあ、改めて！」

全員「いただきます！」

そう言っつてサトシ達は、朝食を取り出す。

カスミ「美味しい！」

シュウ「さすが、デントの料理だな」

マサト「ホント！」

デント「お褒めに預かり光栄です」

デントがそう言っつ。

さて、サトシ達が食事を取っつている場所から少し離れると、ポケモ

ン達も同じく食事を摂っていた。そんな中、一匹のポケモンが問題を引き起こした。

エモンガ「エモ・・・。」

そう、アイリスのエモンガであった。

エモンガは、がまだ食べ足りないのか、口惜しそうな顔になる。

ポッチャマ「ポチャポチャ」

ルリリ「リルルル」

ミジュマル「ミジュミジュ」

そんなエモンガから少し離れた場所にミジュマルとルリリ、ミジュマルがタケシ特製のポケモンフーズを美味しくそうに食べている光景が目に入った。

エモンガ「エモ。エモモモモ。」

何か閃ひらめいたのか、エモンガは不敵な笑みを浮かべ、ポッチャマとルリリ、ミジュマルに近づいた。そして・・・

エモンガ「エモ〜」

ポッチャマとルリリ、ミジュマルの目の前で、ゆっくりと倒れた。

ベストウィッシュを見ている人ならご存じだろう。これは、イタズラ好きのエモンガの演技である。

ポッチャマ「ポチャ!?!」

ミジュマル「ミジュ!?!」

ルリリ「リルル!?!」

突然倒れたエモンガを心配してポッチャマとミジュマル、ルリリが近づいた。

エモンガ「エモ・・・。エモ」

エモンガは3体に気づかれないようにニヤリと笑い、3体がかけてウインクをした。

そう、これはエモンガのメロメロである。性別の違う相手のみメロメロ状態にして、時々相手の技を出させなくするという技である。

エモンガは、ポッチャマとミジュマル、ルリリは、なので、メロメロは効く。

ポツチャマ「ポチャー!!!」

ミジュマル「ミジュー!!!」

ルリリ「リルルー!!!」

案の定、ポツチャマとミジュマル、ルリリはメロメロ状態になり、目をハートマークに変える。

エモンガ「エモ・・・、エモエモ。」

ポツチャマ「ポチャ、ポチャポ」

ミジュマル「ミジユミジユ」

ルリリ「リルルリ」

エモンガがポケモンフーズが欲しいと懇願こんがんすると、ポツチャマとミジュマル、ルリリはどうぞどうぞと言わんばかりに自分のポケモンフーズをエモンガに差し出す。

エモンガ「エモ・・・。エモー!」

エモンガは目にもとまらぬスピードでポツチャマとミジュマル、ルリリのポケモンフーズを平らげた。そして、食べ終わった後、エモンガはすぐにその場を離れた。

ポツチャマ「ポチャ・・・」

ミジュマル「ミジユ・・・」

ルリリ「リルル・・・」

未だ、メロメロ状態から覚めずに空の皿を持ってボーと立っているだけのポツチャマとミジュマルとルリリ。そして、数秒の沈黙の後・

ポツチャマ「ポチャ・・・、ポチャ!？」

ミジュ「ミジ・・・、ミジュマ!？」

ルリリ「リルル・・・、リル!？」

ようやくメロメロ状態から覚めた3体は自分の持っているポケモンフーズが入ってたはずの皿が空になっていることに気づいた。そして・・・

\*ここからポケモンの言葉を翻訳してお送りします。

ポツチャマ「おい！ミジュマル、ルリリ。僕のポケモンフーズを食べたろう！」

ミジュマル「それは、こっちの台詞だ。ポツチャマとルリリこそ、僕のポケモンフーズを食ったんだろう！」

ルリリ「なに言っているんだ。二人が僕のポケモンフーズを食べたんだろう！」

自分のポケモンフーズを相手が食べたと、喧嘩を始めるポツチャマとミジュマルとルリリ。

ポツチャマ「何だと！僕は知らないぞ！」

ミジュマル「僕だって知らないぞ！」

ルリリ「僕も！」

どうやら、3体は、エモンガのメロメロを受けていたことに気づいていないようだ。

ポツチャマ「知らないなら、力づくで吐かせてやる！」

そう言ってポツチャマは、バブル光線をミジュマル、ルリリに向けて攻撃する。

ミジュマル「よくもやったな。食らえ、みずてっぽう！」

ルリリ「僕もみずてっぽう！」

ミジュマルとルリリは、反撃と言っばかりにポツチャマに攻撃するのであった。

\*以上、ポツチャマとミジュマルとルリリの通訳終了。

サトシ「おいおい、どうしたんだ。ミジュマル」

ヒカリ「一体、何があったのよ。ポツチャマ」

ルリリ「ルリリもやめなさい」

3匹がケンカしているところに慌てて止めに入るサトシとヒカリとカスミ。

ポツチャマ「ポツチャー—————！！！！！」



スポケモンから、メロメロでポケモンフーズを横取りしてるのよ」  
ロズレイド「そうなんですか……」

シウウのロズレイドがツター ज्याの話聞いてそう言った。

ハトーボー「でも、メロメロならツター ज्याだつて使えるでしょ？」  
そう問いかけたのは、ガマガル、ベイリーフと同じくサトシの手持ちの入れ替えて一緒に同行することになったハトーボーがツター ज्याに言う。

ツター ज्या「アタシはそんな無駄な事には使わないわよ」

ハトーボー「さすが、冷静で気高く大人びた性格を持っているお姉さまですわ」

ツター ज्या「お姉さまつて……」

ハトーボーにお姉さまと言われてツター ज्याは、少し呆れる。

ミミロル「あのエモンガ、メロメロが使えるのね。はっ、このままではピカチュウがあの魔性の女に……！そうは、行きませんわ！  
エモンガにピカチュウがとられるのではと不安になる恋するミミロルは、エモンガのところへ行く。それにしても、一体、どこで『魔性の女』という単語を覚えたのだろうか？  
エモンガ「何、ミミロル？」

ミミロル「あなた、メロメロを使えるようですね。でも、ピカチュウは、絶対にあなたには、渡しませんわ」

エモンガ「はあ？」

ミミロルの言葉にエモンガは、はあ？という顔になる。

エモンガ「何勘違いしてるのよあんた！私は、そんな気はないわ」  
ミミロル「本当かしら？もし、ピカチュウに手を出したら、れいとうビームで凍らしてあげるから」

エモンガに、そう警告したミミロルは、その場を離れる。

エモンガ「あの女……」

ミミロルをにらみながら見送ったエモンガであった。

以上、ポケモン達の会話の通訳終了。

サトシ「落ち着けつて、ミジユマル」

ヒカリ「おとなしくしてて、ポツチャマ」

カスミ「ルリリもよ」

三体のポケモンは、混乱が解けて再びケンカを始めた。

ピカチュウ「ピカピカ」

そして、とうとう、ピカチュウまでもが間に割って入って3体の喧嘩を止める始末。

ベル「どうしたの三人とも？」

デント「一体何が起きてるんだい？」

そこへデントとベルがやってきた時だった。

ポツチャマ「ポオオオチャ！」

ミジユマル「ミイイイジユ！」

ルリリ「ルルルル！」

ピ「ピカピカ・・・」

ポツチャマはバブルこうせん、ミジユマルとルリリはみずてっぼうを放った。それが3体のちょうど真ん中にいたピカチュウに当たる。

ピカチュウ「ピカ・・・。ピイイイカチュウウウ！」

サトシ・デント「ギャアアアアア！」

ヒカリ・カスミ・ベル「ギャアアアアア！」

怒ったピカチュウは、電撃を繰り返しポツチャマ、ミジユマル、ルリリのみならず、サトシとカスミにヒカリそれにデントとベルまでも巻き込んだ。

ちなみにガマガルは、サトシ達のそばにいたが地面タイプを持っているので電撃のダメージはない。

ヒカリ「イヤアアア！もう、なんなのよ」

ヒカリは自分の爆発した髪形を見て悲鳴を挙げ、不満を漏らす。

ベル「あら！これ、結構似合っているわ」

ヒカリとは、対照的にベルは、自分の髪型を鏡で見て似合っているとそう述べる。



デント「前向きだねベルは・・・」  
ベルをも見てそうつぶやくデント。

アイリス「どうしたのよ5人とモ」

ヤストシ「なんだ、なんだ！今の悲鳴声は？」

サトシ達の悲鳴を聞いて駆け付けたほかの面々とポケモン達が続々とやって来た。

サトシ「実はポツチャマとミジュマルとルリリが急に喧嘩しだしたんだ。」

マサト「えっ、なんで？」

ヒカリ「それがアタシ達にもよく分かんないのよ。」

すると、ポツチャマとミジュマルとルリリが自分たちの空の皿を持つてきて、必死に何かをアピールした。

コトネ「えっ、お皿？」

コトネは首を傾げる。すると今度は、デントが・・・

デント「もしかして、ポツチャマとミジュマルは自分たちのポケモンフーズを誰かが食べたんじゃないかって言ってるんじゃないかな？」

ポツチャマ「ポチャポチャ」

ミジュマル「ミジュミジュ」

ルリリ「ルリルリ」

デントの推測に、ポツチャマとミジュマルとルリリはうんうんと首を縦に振る。

ベル「自分で食べたんじゃないの？」

ポツチャマ「ポチャー、ポチャー！」

ミジュマル「ミジュミジュ！」

ルリリ「ルリルリ！」

ベルの一言に、ポツチャマとミジュマルは語尾を強めて否定する。

ヤストシ「じゃあ、一体誰が食べたんだ？」

犯人が誰なのか悩んでいたサトシ達の元へ、見るに見かねたツタージャがやって来た。

サトシ「ん？ どうしたんだ、ツター ज्या？」

ツター ज्या「ツター ज्या」

ツター ज्याは自分のつるで、遠くに隠れていたエモンガをサトシ達のところへ差し出した。差し出されたエモンガは不機嫌な顔をする。アイリス「うわあ、いったいどうしたのその体」

今のエモンガは3体分のポケモンフーズを食べたせいか、まんまるに太っている体型である。あたかも、自分がやりましたといわんばかりの決定的な証拠である。

アイリス「まさか、エモンガまたあなたなのね」

エモンガ「エモ」

アイリスはため息をつきながら、呆れた表情を浮かべる。エモンガはケロツとした顔でアイリスに笑顔を見せる。

アイリス「一体どうすれば……。あつ、そうだね。ねえ、サトシ。ポケモン図鑑貸してくれない？」

サトシ「えっ、別にいいけど何に使うんだ？」

アイリス「ちよつと閃いたの。まあ、見てて」

アイリスは笑顔でそうサトシに言うと、ポケモン図鑑を操作し始めた。他の面々もアイリスがどうするのか様子をうかがっている。

アイリス「エモンガ、あまり食べてばかりいるとこんなものになっちゃうわよ」

アイリスはエモンガに向けて、ポケモン図鑑を見せる。

すると……

エモンガ「エモ！？エモ」

エモンガは少し青ざめた顔をして、その場でうつむいてしまった。そして、エモンガをボールに戻す。

アイリス「サトシ、ありがとう。はい、これ」

サトシ「あ、ああ。役に立てたならよかつたぜ」

サトシはアイリスから返されたポケモン図鑑を見てみる。すると、そこにはマクノシタのページが開かれていた。

サトシ「ハハハ、アイリスも考えたな」

サトシは思わず苦笑を浮かべた。横から、カスミやヒカリ達も覗きに来て、全員苦笑を浮かべた。

ヤストシ「アイリスって、結構冴えてるところあるんだな」  
ちよっとした一混乱が起こった朝食時であった。

そして、サトシ達は、次の町へ目指し歩き始めた。

番外編？ 一匹のポケモンがきっかけで・・・(後書き)

番外編？、いかがたでしょうか？  
本編は、近いうちに更新します。

第56話 誰が酒なんかもって来た（前書き）

今回は、かなりサトカス、シュウハル要素は、もちろんケンヒカ（正確にはヒカリ ケンゴ）要素を入れてあります。

## 第56話 誰が酒なんかもって来た

サトシ達は、アカサキタウンについてポケモンセンターへ行くと、そこにエブチとアヤノ、そしてエブチ隊のメンバーがいた。

サトシ達は、先の出来事を話す。

エブチ「そうか。ロケット団と対立していたのは、スペース団って言う組織か・・・」

アヤノ「それで、その人達を退けさせたわけね」

ヤストシ「そういうことです」

アヤノの問いにヤストシが答える。

エブチ「それは、いいとして。みんな、疲れているだろう。とりあえず、ワシが持ってきた飲み物を飲むといいよ。おーい、持ってきてくれ」

ロボットA「はい！」

そう言つてエブチ隊の1体がたくさん入った瓶を持ってくる。

エブチ「さあ、みんな。飲んでいいぞ！」

そう言つてグラスに飲み物を入れた時だった。

???「ヒカリ〜！」

ヒカリを呼ぶ声があったので、サトシ達は声のする方へ振り返ってみた。するとそこにはシンオウで出会った人物が立っていた。

ヒカリ「ケ、ケンゴ!？」

その人物とはヒカリの幼馴染でありポケモンコーディネーターであるケンゴだった。ヒカリはサトシ達とともにケンゴに近づいた。

ケンゴ「久しぶりだな、ヒカリ！」

ヒカリ「ナギサシティ以来ね」

そんな時、ヒカリとケンゴが会話している間に・・・

エブチ「おー！ケンゴ君じゃないか。君も飲むか？」

エブチが会話の中に入り込んでケンゴにそう言った。

ケンゴ「飲みたいのは、山々しいですが、ちょっとトイレに・・・」

サトシ「俺も」

シュウ「僕もだ」

ヤストシ「同じく」

デント「僕もです」

そう言つてサトシ、シュウ、ケンゴ、ヤストシ、デントは、トイレへ向かった。

ヒカリ「それにしても、ケンゴ。何であたしの事をジロジロ見ていたんだらう？」

カスミ・ハルカ・アイリス・ベル・コトネ「「「「えっ！？」「」」」

ヒカリは思っていた疑問を口に出した。その言葉にヒカリ以外のサトシ好きの面々はきよとんとした。

ヒカリ「やっぱり、しばらく会つてなかったからかな。ケンゴに言わずにホウエンに行つてしまつたし。まっ、いつか」

ヒカリはあまり深く考えないことにした。そして、ヒカリは、グラスの飲み物を飲み始める。

ハルカ「ねえ、カスミ。ヒカリつてもしかして、鈍感なのかしら」

カスミ「うん、サトシ程じゃないけどあれはかなりのだわ」

アイリス「それに、あのケンゴつて子。絶対、ヒカリのこと好きだろうと思う」

コトネ「明らかにそれっぽいこと言つたのにそれに気づかないヒカリン。ある意味凄いつてことね」

ベル「なんか、ケンゴ君が可哀そうに思えてきた」

彼女たちの会話からも分かるように、ヒカリはサトシ程ではないがかなりの鈍感な性格である。以前、ケンゴがシンオウでの旅が終わつたら一緒に旅をしないかと提案した時もその意図が全く分からなかつたくらいである。ちなみに、ケンゴは幼稚園児の頃からヒカリに好意を持っているが、ヒカリが好意を持っているサトシ（ケンゴからすれば恋敵になる）との関係も大切にしたいと思つてるため、心の中で随分と葛藤かっとうしている。それにしても、自分の恋敵には気づ

いたのに、自分に好意を持っている人物には全く気付かないとは、  
どうい神経なんだろう（汗）  
マサト「ねえ、タケシ。ヒカリって、あんな性格だったんだね」  
タケシ「まあな。サトシもそうだったけど、ヒカリもあんなに鈍い  
性格だったと初めて知ったときは正直驚いたなあ」  
タクヤ「そうなんだ・・・」  
そうつぶやいたタクヤであった。

さてさて、トイレに行ったら5人のうちヤストシとケンゴとシュウが  
トイレの入口前に突っ立っていた。

ヤストシ「なあ、ケンゴ。お前、ヒカリのことが好きなのか？」

ケンゴ「えっ!?!」

ヤストシの質問にケンゴは、思わず顔を赤く染める。

ヤストシ「やっぱり、好きなんだ。でも、ヒカリは、恋敵サトシのことが  
好きだからな」

ケンゴ「そうなんだよな。それで、どうしたらいいんだヤストシ？」

ケンゴが真剣にヤストシに問いかけてくる。

ヤストシ「どうだろう、ここは、一度告白してみたらどうだい？」

ケンゴ「えー！ー!?!」

ヤストシの答えに驚くケンゴ。

ケンゴ「なんで、そうなるの」

ヤストシ「そういうことをした人が俺の近くにいるもんだから」

そう言ってヤストシは、シュウのほうを向く。

シュウ「何故、僕のほうを見る」

シュウがそう言うのとヤストシは、再びケンゴに言う。

ヤストシ「男は、直球だ。勇気を出して告白してみる。告白できな  
いならヒカリの唇を奪えばいい話じゃないか」

ケンゴ「ヒカリの唇を奪えばいい話って、ちょっと、ヤストシさん  
!」

ケンゴがさらに顔を赤く染めながらヤストシに言う。



ヤストシ「冗談だよ。冗談」

笑いながらそう答えるヤストシ。

サトシ「お待たせ！」

デント「待たせてすまないね」

ちよとど、ヤストシが言った直後、サトシとデントがトイレから出てきた。

ヤストシ「そんなじゃあ、戻ろうか」

そう言っただけでヤストシ達は、ポケモンセンターのロビーへ向かった。

ヤストシ「なんじゃ、こりゃー！」

ロビーへ戻ってくるとなんと、ヒロイン＋ベルとタケシ、マサト、エブチが倒れていた。

ヤストシ「アヤノさん、一体何があつたんですか!？」

サトシ「俺達がいらない間に」

ケンゴ「何が起こつたんですか?」

ヤストシとサトシ、ケンゴがアヤノにたずねる。

アヤノ「それが、原因は、これなの」

アヤノが差し出したのは、グラスに入つた飲み物だった。

デントは、一口、口の中に入れる。

デント「!これは、ワインじゃないですか!?!しかも、年代物の!」

飲み物を一口味わつただけでワインと見抜き、しかも年代物ワインだと見抜いたデント。

シユウ「と言うことは、ハルカたちが飲んだのは、お酒なのか!？」

デント「そういうことになるね」

シユウの問いにデントがそう答える。

アヤノ「どうやら、エブチ隊の人達がジュースじゃなくてワインを間違えて持ってきたみたいなの」

ヤストシ「そんなバカな。ワイトとジュースの瓶は、大きさも形も違うぞ。そんなことを間違えるわけがないだろう」

確かにそうである。

ワインとジュースの瓶は、かなり違いがありすぎる。

普通なら間違えるはずはないが・・・

アヤノ「ところが、ワインが入ってたのは、ジュースの瓶の中の」  
そう言われてジュースの瓶をデントたちに見せる。

そして、デントが瓶の中に入ったものをグラスに注ぐ。

デント「ホントだ。これは、正しくまさワインだ！」

サトシ「ホントかよ!？」

デント「ああ。間違いないよ」

デントがグラスの中身を一瞬でワインと見抜きサトシにそう言った。  
さすがソムリエだ・・・。

シュウ「これじゃあ、間違えても無理はないな」

ヤストシ「薬品を食用の瓶に入れるのと同じ行為だな」

ヤストシがそんな例えを言う。

アヤノ「それで、どうします?」

ヤストシ「とりあえず、ここままにしておけないからベットにでも  
運んでおくよ」

そうヤストシが言った時だった。

ハルカ「ああーシュウだああー!」

すると突然、ハルカはシュウに抱き付いた。

ハルカ「寂しかったわよーシュウー」

シュウに向かってそう言うハルカ。

カスミ「サトシ」

次にやってきたのは、カスミだった。

カスミは、サトシに抱きついた。

サトシ「おい!カスミ!!!」

いくら、鈍感なサトシでもこの状況は、さすがに赤くなる。

ヒカリ「カスミ、ずるいわよー」

ヒカリも酔いながらサトシを抱きつこうとする。

ケンゴ「・・・」

それを見ていたケンゴは、『ヒカリは、やっぱりサトシのことが・・・

・『つと心の中でそう思った。

ヤストシ「あらあら、あの3人完全に酔っているな」

デント「他のメンバーは、酔いつぶれているようだけど」

それを見ていたヤストシとデントは、くちくちにそう思った。

ハルカ「戻ってきたからご褒美い」

その瞬間、ハルカはシュウの肩を引いて顔を寄せた。

ハルカの熱くなった唇が重なり、シュウは慌てた。

ヤストシ「よかったですな、シュウ。ハルカとキスできて!」

楽しそうに見ていたヤストシがシュウに言う。

カスミ「サトシ」

サトシ「!!!!!!」

サトシは、シュウのほうを見とれていた時、カスミに呼ばれ顔を向けた時カスミは自分の唇をサトシの唇にくっつけた。さらに、大胆にもカスミは、自分の舌をサトシの口内へと入れ込む。いわゆるデイープキスである。

ヒカリ「ずるいよ!カスミ、あたしだって!」

そう言った時ケンゴの中にヒカリの独占欲がわいてきた。

するとヤストシが言った言葉が頭をさいぎる。

ヤストシ『告白できないならヒカリの唇を奪えば』

そんな言葉を思い出しケンゴは、ヒカリの腕をつかむ。

ヒカリ「何するのよ、ケン　!!!!!!」

ヒカリが何かを言おうとした時ケンゴは、ヒカリの唇に自分の唇を重ねる。

ヤストシ「本当にやりやがった」

それを教えた張本人<sup>ヤストシ</sup>がそうつぶやく。

アヤノ「ヤストシ。一体、ケンゴ君に何を教えたのよ」

ヤストシ「いや、ケンゴにトイレの時に『告白できないならヒカリの唇を奪えば』って言ったんだ。ケンゴ、ヒカリのこと好きだから。冗談で言ったの・・・」

デント「冗談で言っている事と悪いことがあるよヤストシ」

アヤノ「まったくだわ」

ヤストシの発言にそう思うアヤノとデント。

ハルカ「シュウ」

カスミ「サトシ」

ケンゴ「ヒカリ」

カスミ・ハルカ・ケンゴ「『好きだよ。大好きだよ』」

サトシ・シュウ・ヒカリ「／／／／／／／／」

カスミトハルカ、ケンゴの告白に思わず赤くなるサトシとシュウとヒカリ。

そう言った時カスミ、ハルカ、ヒカリが倒れてきてサトシ、シュウ、ケンゴの方に体を預けた。

サトシ「カスミ…？」

シュウ「ハルカ…？」

ケンゴ「ヒカリ…？」

名前を呼んでも反応はない。

耳を澄まして聞くと、彼女達の寝息がして、規則正しく彼女達の背中が上下するのに気がついた。

三人の男達は安心し、少し残念だと溜め息を吐いて彼女達を抱き締めた。

サトシ・シュウ・ケンゴ「おやすみ…」

サトシ「カスミ」

シュウ「ハルカ」

ケンゴ「ヒカリ」

口には、彼女達の飲んだお酒の味が残ってる。

三人は、彼女達を寝室へと運んでいった。

ヤストシ「ああ。見ちゃあいけないものを見てしまいましたねアヤノさん、デント」

デント「君の言うとおりだね」

アヤノ「3人のためにも見なかったことにしましょう」

ヤストシ「そうだな。それじゃあ、残りのメンバーをベットまで運

びますか」  
そう言つてデント、ヤストシ、アヤノは、残つたメンバー アイリス、ベル、コトネ、マサト、タケシ、エブチを部屋まで運んでいった。

翌朝。

ジョーイ「カスミさん、ハルカさん、ヒカリさん、アイリスさん、ベルさん、コトネさん、マサト君、タケシ君、エブチ博士、持つて来たわよ」

ジョーイが持つてきたのは、二日酔い止めの薬だった。

実は、カスミ達は昨夜かなりワインを飲みすぎたらしい。

そのせいで9人は、完全に二日酔いをしてしまった。ちなみに比較的症状は軽いけど初めてだからやっぱり辛いようだ。まあ、大半が未成年だからしょうがないけどね。

なお、昨夜のことは、覚えていないようである。

それは、サトシ、シュウ、ケンゴにとって助かったような、悲しいような気持ちである。

ヤストシ「おい、大丈夫か？お前達？」

ヤストシは、カスミ達にたずねる。

ヒカリ「ダイジョバないよ」

カスミ「頭が痛くて痛くて」

コトネ「つらいわ」

ハルカ「気持ち悪い・・・」

シュウ「吐くなよ。こんなところで・・・」

ハルカが吐きそうになったのでシュウがそう言った。

ベル「なんで、こうなるのよ」

ヤストシ「飲みすぎだよみんな。しかも、ワインを何杯もおかわりして。間違えるほうも間違えるほうなら飲むほうも飲むほうだ。急性アルコール中毒になったらどうする気だったんだい？」

そう二日酔いの9名に言うヤストシ。

9名とも返す言葉がなかった。

デント「ところで、みんなは、どこまで覚えているんだい？」

アイリス「あたしは、何杯もおかわりしているうちに睡魔が襲って・・・。そこしか覚えていないわ」

ベル「私も、アイリスちゃんと同じよ」

コトネ「同じく」

タケシ「俺も」

マサト「僕も」

エブチ「ワシもじゃ。どうやってベッドの中にいたのかもわからないのじゃ」

そう答える6名。

ヤストシ「当たり前だ。お前達をベットまで運んだのは、俺達なんだから」

アヤノ「3人で2名ずつ行き来しながら運んだのよ」

デント「少しは、感謝をして欲しいな」

そう答えるヤストシとアヤノとデント。

ヤストシ「ところで、タクヤ。お前は、どうしてあそこにいなかったんだ？」

タクヤ「俺は、さつさと部屋の中で寝ていたよ」

アヤノ「そういえば、いたわね」

ヤストシ「よかったな。二日酔いを回避できて」

そうタクヤに言うヤストシ。

一方、カスミ、ハルカ、ヒカリは・・・

カスミ「ところで、サトシ。アタシが記憶ない間、サトシに会った？」

ハルカ「私も。記憶のない間にシュウに会った？」

ヒカリ「アタシも記憶がない間にケンゴに会った？」

三人は、サトシ、シュウ、ケンゴ以外のメンバー聞こえないように話す。

サトシ・シュウ・ケンゴ「「「え...」「」「」

ハルカ「覚えてる訳じゃないんだけど…そんな感じして」

カスミ「アタシも」

ヒカリ「同じく」

サトシ・シュウ・ケンゴ「…」

ハルカ「ご、ごめんねっ変なこと言っつてっそんな訳ないよね！」

カスミ「そうよね」

ヒカリ「きつと勘違いだわよあたし達の」

そう答えるカスミとハルカとヒカリ。

カスミ「あたし、ちよつとトイレって来るわ」

ハルカ「私も」

ヒカリ「アタシも」

そう言っつて三人は、トイレに向かった。

まだ気分が悪いだろうに、3人の気に遣つて。

残されたサトシ、シュウ、ケンゴと言えば、頭を抱えてしばらく熱を抑えられなかった。

彼女達が行つてくれて本当に良かった。

もしあのまま彼女達と話していたら、口を開いてしまいそうだったから。

昨日の酔つた彼女達にキスをしたことを。

全部、口に出してしまいそうだったからである。

サトシ「弱つたな、シュウ、ケンゴ」

サトシがシュウとケンゴに振る。

シュウ「あれは、思い出しただけで恥ずかしいからな」

ケンゴ「僕も」

三人は、こぞつてそう思った。

シュウ「（本当に、思い出すだけで恥ずかしい。言葉にするのは絶対に無理。彼女に伝える事なんかもつと無理。なんであんな事したんだろう。どうかしてる）」

シュウは、他の二人より心の中がかなり重症であった。

三人は、どうしようかと悩みに悩んだのである。

ハルカ「はあ…びっくりした。すごいドキドキしてる…」

ヒカリ「アタシも」

カスミ「同じく」

胸を押え、ゆっくり息をするハルカとカスミ、ヒカリ。

だけどつるさいほどの鼓動は止まなくて。

ハルカ「シユウのあんな顔見たら…どうしていいか、わかんないじゃない…」

カスミ「それは、アタシも同じだよ。サトシがあんな顔で見られたら…」

ヒカリ「アタシもケンゴがあんな顔をするの」

3人は信じられない夢を見ていて、その所為できっと真っ赤になっている顔、3人は口元を押さえた。

カスミ「言える訳ないじゃない…」

ハルカ「そうよね」

ヒカリ「絶対に…」

カスミ「サトシと」

ハルカ「シユウと」

ヒカリ「ケンゴと」

カスミ・ハルカ・ヒカリ「…キスする夢見たなんて…言える訳ない…」

三人は、重なってそう発言した。

三人は、サトシ、シユウ、ケンゴがしたキスを夢だと思っている。

実際は、夢じゃないんだけどね。

しかし、三人にとっては、ホントにとんでもない夢だったのである。そしてそんな夢を見た自分達が、すごく恥ずかしくて、信じられなかった。

ヒカリ「（何で、ケンゴがキスを？アタシが好きなのは、サトシなのになんで？）」

心の中でそうつぶやくヒカリ。



ヒカリは、サトシのことが好意を持っているがケンゴがヒカリに対し好意を持っていることは、知るよしもなかった。というより結局気づかなかった。

三人は、なるべくあの夢を忘れるようにしようと思いつつ、ついへと向かった。

はたして、三人がサトシ、シュウ、ケンゴの気持ちに気づくのはいつになるのか。

第56話 誰が酒なんかもって来た(後書き)

サトシ・シユウ・ケンゴ「……………」

どうしたんだ、三人とも黙り込んで？

サント「なんなんだよ。この話は！」

シユウ「恥ずかしくつてしょうがないよ」

ケンゴ「僕の初登場がこれなんて、ひどい」

サトシ「しかも、18禁ギリギリだったぞ。今回の話！」

何だよ、三人とも。好きな人にキス出来てうれしいとは、思わないのか？

サトシ・シユウ・ケンゴ「思わない！」

ケンゴ「第一、酔っていてキスされるなんて」

シユウ「うれしいとは、思わないよ。これポツチも！」

サトシ「訴えてやる！！！」

怒るな怒るな。サトカスとシユウハル、ケンヒカ要素を入れたじゃないか。

サトシ「それは、ありがたいけど……」

シユウ「まあ、それで今回は、許そうか」

ケンゴ「そうだな」

はい。というわけで、3人が許したところで今回は、この辺でお開きといたします。次回もお楽しみに

第57話 悪い予感（前書き）

物語が急展開を迎えます。

## 第57話 悪い予感

翌々日。カスミ達の二日酔いがようやく治り、みんな元気になった。なお、ケンゴは、次の街へ向かいタクヤは、少し用事があると昨日どこかへ行ってしまった。

アイリス「あゝ、痛かった」

コトネ「もう、こんな思いするのは、嫌よ」

ベル「私も」

カスミ「同じく」

ハルカ「私も」

ヒカリ「アタシもよ」

二日酔いを経験した女子達は、もう二日酔いになるのは、ごめんだ。なお、カスミ、ハルカ、ヒカリは、この間の件は、すっかり忘れ口を出さずにいた。

ヤストシ「今度からワインを持ち歩かないくださいよ、エブチ博士……」

エブチ「わかっているよ」

シュウ「ところで、エブチ博士はここに何しに来たんですか？」

シュウがエブチにそう問いかける。

エブチ「ああ。実は、この先の森のポケモン達が異常行動が確認されてね。その調査のためにエブチ隊とともにここに来たんだ」

タクシ「異常行動って具体的にどんなのですか？」

エブチ「異常行動というのは少し言い過ぎだけど、飛行ポケモンが達が頻繁に群れをなして周辺の空を飛びまわったり、この森の先にあるユガシマシティに森のポケモン達が出没して草ポケモンと虫ポケモンが住み着いたり、さらにユガシマシティに流れる川から水ポケモンが消えたりと奇妙な現象が起きているんだ」

カスミ「それはちょっと変ね」

エブチ「そうなんだ。ユガシマシティの人たちの一部では天からの

祟りだという人もいるみたいだけど、これは人為的な何かが原因で起きているというのが有力な説なんだ」

デント「超常現象や異常現象には、それなりの科学的根拠があるからね」

こういつた超常現象などをあくまで科学的視点でとらえるサイエンス・ソムリエ（デントが自称しているだけだと思うが・・・）でもあるデント。エブチの意見に賛同したようだ。

エブチ「しかし、エブチ隊の6割強は、二大組織の行動を潰すために借り出してるし2割強は、ハナダの治安を守ってるから無理だから残りの1割弱を連れてやって来たんだがまだ足りなくて、そこで助っ人を呼ぶことにしたんだ」

ヒカリ「助っ人？」

アヤノ「うん。もうすぐ、来る予定なんだが・・・」

そうアヤノが言った時だった。

???「遅くなってすいません！」

ポケモンセンターの入口から少年がやって来た。

サ・カ・タ・ケ・ハ・マ・ヒ・デ・ヤ「ooooooooooooシゲル!？」

「oooooooooooo」

エブチが呼んだ助っ人は、サトシの幼馴染で初代ライバルのシゲルだった。

シゲル「おや、久しぶりだね。サートシ君」

サトシ「その言い方やめてくれないか」

シゲルに言い方をやめるよう指摘するサトシ。

コトネ「ねえ、サトシとシゲルって一体どういう仲なの？見たところ、結構長い付き合いみたいだけど」

コトネはサトシとシゲルの関係について、聞いてみた。

サトシ「俺とシゲルは小さいころから家族ぐるみの付き合いなんだ。今はポケモン研究者として活動してるけど、かつては俺と同じトレーナーだったんだぜ」

ベル・コトネ「それ本当!？」

シゲルが元ポケモントレーナーと知り、いち早くベルとコトネが反応した。

シゲル「えっ、あ、うん」

コトネ「なら、私と勝負してくれない？」

ベル「ちよつと、シゲル君とバトルするのはわたしよ。」

コトネ「ちよつと、待ってよベル。先にバトルを申し込んだのは、私よ」

サトシ「ちよつと待った。俺だって、久しぶりに会ったんだ。シゲルとバトルするのは俺だ」

ベル「ちよつと、サトシ君は幼馴染なんだからいつでもできるでしょ。」

コトネ「そうよそうよ」

シゲルとのバトルをめぐつて、ベルとコトネが言い争いを始め、バトルと聞いてサトシまでもが言い争いに加わってしまった。

ヤストシ「やれやれ。この3名ときたら・・・」

カスミ「サトシも、バトルって聞いたらすぐこれなんだから」

アイリス「ホント、子供よね」

3人の言い争いに3人以外の面々はため息をつく。当のシゲル本人は、突然のバトルの申し込みに呆然としている。そんな3人の言い争いを止めたのは、意外な人物だった。

マサト「ベル、コトネ。シゲルはね、サトシの幼馴染というだけじゃないんだよ」

ベル・コトネ「「どういうこと？」」

マサトの言葉に、すぐに言い争いをやめてマサトのほうへ振り向くベルとコトネ。

マサト「ふふふ」

マサトはわざとらしい笑みを浮かべながら、

マサト「シゲルはあのポケモン研究の権威・オーキド博士の孫なんだよ」

少々自慢げに言う。

コトネ「オーキド博士って、あのラジオのポケモン講座の？」

ベル「そんな有名なポケモン研究者の孫だなんて、凄いわ」

シゲルがオーキド博士の孫という事実には驚愕する者がいる中、

ヒカリ「ふふふ、それだけじゃないんだよ」

今度はヒカリがわざとらしい笑みを浮かべながら言う。

ヒカリ「オーキド博士はポケモン川柳研究家で、その孫である彼もまたポケモン川柳を作るのがうまいのよ」

ズデー

ヒカリの発言に、ほとんどの者（特にサトシ、シゲル、タケシ、ヤストシ）がずっこけた。

ヒカリ「あれ、みんなどうしたの？」

サトシ「ヒ、ヒカリ・・・」

タケシ「ヒカリには、シゲルに対するイメージはポケモン川柳のお孫さんなんだな・・・」

シゲル「できれば、博士の孫ということとポケモン川柳についてはあまり触れて欲しくないんだけどな・・・」

ヤストシ「川柳以外イメージないのか！他に！」

ずっこけた者たちは、ただ苦笑を浮かべた。

エプチ「なんなんだ？」

アヤノ「さあ？」

そんなギャグを含んだ談笑をしている。

ヤストシ「まったく。それより、シゲルが今回の件の助っ人なのか？」

シゲル「まあな」

ヤストシの問いにそう答えるシゲル。

サトシ「なあ、シゲル。俺たちに何かできることはないか？」

シゲル「サトシ、手伝ってくれるのか？」

サトシ「もちろんだぜ。シゲルは最初のライバルでもあり友達でもあるからな」

ヒカリ「それに、困ったときはお互い様ですよ。川柳のお孫さん」

シゲル「（川柳のお孫さんって・・・）どうします、エブチ博士？」  
エブチ「人でも足りないいいだろう。でも、なるべく無茶はしないこと。これだけは約束してくれないかな」

ヤストシ「はい、もちろんです」

シユウ「僕らも、お手伝いいたします」

アイリス「そうそう、サトシじゃあるまいし」

サトシ「俺たちは余計だ！」

こうして、サトシ達は、シゲルとエブチ隊とともにその異常現象が起きている森の中へ向かった。

さて、某日某所

ロケット団員「シラヌイ博士！ただいま、この森周辺の調査の最新データが届きました」

シラヌイ「うむ、ご苦労。度々申し訳ありませんが、バショウとブソンをここに連れてきてはくれませんか？」

ロケット団員「かしこまりました。」

ロケット団員はシラヌイ博士に言われると、すぐにロケット団特務工作部幹部のバショウとブソンをシラヌイ博士のもとへ連れてきた。バショウ「お呼びでしょうか。シラヌイ博士」

シラヌイ「今回、貴方達を呼んだのは他にもない。例の石の探索を始めて欲しい」

ブソウ「例の石ですか?!」

シラヌイ「ああ。この石は、すでにわが手に1つ持っている。そして、そのうち3つは、目星ついている。残るは、2つ。この辺にあるのは、間違いない。我々の野望を達成するためには、必要な石だ。スペース団とやらの組織に奪われてたまるものか！」

バショウ「かしこまりました。では早速、任務に就かせていただきます。」

シラヌイ「後、最後に。我々の要注意人物としてマークしている少年には気を付けるように」



ブソン「少年とは？」

シラヌイ「この少年です。彼は度々我々ロケット団の目的達成を邪魔するので、上層部からかなりの要注意人物として名があげられています」

シラヌイ博士は、一枚の写真をバシヨウとブソンに見せる。

バシヨウ「わかりました。もし、仮に遭遇した場合、その時は何らかの始末方法を講じてもよろしいでしょうか」

シラヌイ「そのところは、あなた方に任せます。では、健闘を祈ります」

影では、ロケット団が本格的な始動に向けて準備段階に入っていた。しかし、シラヌイが見せたその写真の少年。

その少年がロケット団に衝撃を与える事態となるとは、この時誰も知るよしもなかった。

第57話 悪い予感（後書き）

しばらくは、後書きシヨの方をお休みします。

## 第58話 森の中での大搜索へ

サトシ達は、森にてポケモン達の異常行動について調査しにきたエブチ隊とシゲルに協力するため、森へと向かっていた。

マサト「あの、エブチ博士。本当に僕たちが手伝っても良かったの？」

恐る恐るマサトが聞いてみた。

エブチ「いや、むしろ猫の手がほしいぐらい手伝いがほしかったところだよ。前にも言ったが、わが隊の6割強は、ロケット団とスぺース団の組織について捜査をしているからね。それとハナダの治安も守らないといけないからね。だから、こっちに回せる人数がたった30人だけじゃあ、心細かったしシゲル君が来てもまだ足りないぐらいだったから」

ヤストシ「(30人って・・・どこが少ないんだろう?)」

心の中でそう思ったヤストシ。

ケンジ「そうですか。なら、僕たちに出来ることは少ないかもしれないが。できるだけ協力します」

エブチ「ありがとう、みんな」

エブチは、自分に協力すると言ってくれたサトシ達に感謝した。

シュウ「ところで、この車は、どこへ向かっているんですか？」

エブチ「とりあえず、ユガシマの森の入口に向かっているんだ。あそこを拠点に調査する予定なんだ」

ハルカ「ユガシマの森ってどんなところなんですか？」

ハルカがエブチにたずねた。

エブチ「ユガシマの森は、トキワの森、ウバメの森、トウカの森、ハクタイの森、ヤグルマの森、そしてエミモの森より結構複雑で、天然の迷路みたいな森で、しかも、この森は、虫タイプより草タイプのポケモンが多く、またこの森には、きれいな川があって水タイプのポケモンも多く住んでいるんだ」

ヒカリ「そうなんですか」

そうヒカリが言った時だった。

ロボットA「エブチ博士、まもなくユガシマの森に到着しますよ」  
エブチ「わかった」

車は、ユガシマの森入口付近で止まり荷台からエブチ隊とサトシ達が降りて行く。

サトシ「ところで、エブチ博士どこから始めますか？」

エブチ「そうだな。ここは、3つのグループに分かれて調査しよう。この森には、2本の道があるんだ。1本は、ユガシマシティへ直行する道と遠回りだが自然を味わえる道の2つがあるんだ。そして、ここに待機するメンバーだ」

デント「ずいぶん、分けましたね」

エブチ「まとまっていくと目立つし、それに何かあった場合全員でいると耐用出来ないからね。だから3つのグループに分けたんだ」  
アヤノ「さすが、エブチ博士だわ」

シゲル「それじゃあ、早速メンバーわけをしましょうエブチ博士」  
エブチ「そうだな」

エブチがそう言うと、自分を含めたサトシ達を3つにグループ分けした。グループの内訳は以下の通りである。

Aグループ：サトシ・カスミ・シュウ・ハルカ・シゲル

Bグループ：デント・ケンジ・アイリス・コトネ・ベル

Cグループ：ヤストシ・タケシ・ヒカリ・マサト・アヤノ・エブチ  
その後の話し合いで、Aグループは遠回りだが自然を味わえる道をBグループはユガシマシティへ直行する道をそして、Cグループは待機となった。

なお、それぞれのグループにエブチ隊10名をつけた。

エブチ「いいか、お前達。お前達の任務はAグループとBグループとCグループのメンバーの護衛と状況と調査だ、しっかりするように。もし、何かあればこの笛で援軍を呼ぶように。万一の場合は、発砲してもかまわないがこれは、あくまで正当防衛と緊急避難のと

きのみだ。それ以外のときは、わしの発砲命令が出るまで撃ってはならんぞ。命令無視した場合は、今後重要任務には当分つけないことを言っておく。いいな」

エブチ隊「了解いたしました！」

エブチ隊は、銃剣を肩に乗せてエブチに向かって敬礼をする。

ベル「まるで、軍隊みたい・・・」

ヤストシ「そりゃ、そうだよ。エブチ博士、あれでも軍隊マニアでエブチ隊にかなり軍隊の知識と訓練を徹底てうていさせてまた、プログラムを入力してあるんだ。噂だと自衛隊並みの力はあるぞ」

ヤストシがサトシ達にそう言った。

シゲル「それじゃあ、僕たちはすぐに出発します」

エブチ「みんな、けして無理するなよ」

遠回りだが自然を味わえる道とユガシマシティへ直行する道が途中まで一緒のためAグループとBグループは一緒に出発することになった。この時、これがロケット団の作戦の影響だということを知った。サトシ達もエブチ隊も知る由がなかった。

**第58話 森の中での大搜索へ（後書き）**

次回は、Bグループ視点でお送りいたします。

## 第59話 3組のロケット団(前書き)

久しぶりにあの二組を出します。

そして、お待たせしましたあの3人組(正確には、2人+1匹)が登場します。

### 第59話 3組のロケット団

さて、ユガシマの森では、Aグループの遠回りだが自然を味わえる道組とBグループのユガシマシティへ直行する道組は、分かれ道に遭遇しそこからグループで行動しBグループは、歩きながら周りを見て調査をしていた。

デント「別にこれといった変わりはないね」

ケンジ「ホントだね」

ロボットA「しかし、油断は、禁物ですよ」

エプチ隊の一人がデントとケンジにそう言った時だった。

アイリス「あ、痛」

歩いていたらアイリスが何かにつまづき転んだ。

コトネ「大丈夫？アリン？」

心配そうにアイリスにたずねるコトネ。

アイリス「大丈夫よあたしは」

そういつて起き上がるアイリス。

ベル「一体なんだろう？」

ベルは、アイリスがこけたところを手で払うと赤い石が出てきた。

ベル「なんだろう、この赤い石は？」

ロボットB「あー！それは、ルビーじゃないか！？」

エプチ隊の一人がそう叫んだ。

コトネ「ルビー！？」

ケンジ「これがルビーなの！」

コトネとケンジがベルが持っている石を見てそう言った。

ロボットC「間違いない。このつやと言いこの輝き間違はなくルビーだ」

デント「しかし、どうしてこんなところにルビーが埋まっているんだろう？」

そう疑問に思うデント。





アイリス「アイツらは、ロケット団と言ってポケモンを悪いことに使う悪党よ」

コトネ「ロケット団！あのしゃべるニャースと一緒にいたドジな三人組以外にもドジなロケット団がいたの?!」

ナカオタイ「誰がドジなロケット団だよ（怒）」

ヤマト「あんなやつらと一緒にするな！」

シモオタイ「そうだそうだ」

そう、ヤマト達が言った時だった。

???「誰があんなやつと一緒にですって」

???「そつちこそ一緒にするんじゃないよ」

アイリス「なんなのこの声は！」

そう言うのと突然BGMが流れ気球が現れた。

???「何だかんだと聞かれたら」

???「答えてあげよう明日のため」

???「フューチャー 白い未来は悪の色」

???「ユニバース 黒い世界に正義の鉄槌」

???「我らこの地にその名を記す」

???「情熱の破壊者 ムサシ」

???「暗黒の純情 コジロウ」

???「無限の知性 ニャース」

3人「さあ集え！ロケット団の名の下に」

ケンジ「ロケット団！」

コトネ「一番会いたくない人達に会ってしまったわ……」

そうコトネがつぶやいた。

ムサシ「なによ。ようやく、この小説に登場したって言うのに」

コジロウ「なんだよ、そのリアクションは！」

ニャース「そうだニャ！」

ムサシ、コジロウ、ニャースはケンジ達のリアクションに不満を漏らす。

アイリス「いやいや、別に頼んだ覚えはないから」

アイリスが手を振りながら、ツッコミを入れる。

ナカオタイ「こら、ムサシ、コジロウ。何しにきやがったんだ！」  
コサブロウ「俺たちの邪魔をするな」

そう、ナカオタイとコサンジが言った。

ムサシ「うるさいわね。こっちは、ゼーゲル博士に頼まれてやってきたんだよ」

コジロウ「そっちこそ。邪魔をするな」

そう、ヤマト達に言うムサシとコジロウ。

ちなみにゼーゲル博士とは、ロケット団に所属する科学者である。

ムサシとコジロウは、このゼーゲル博士の直属の部下として現在働いている。

ヤマト「ゼーゲル博士ですって！」

カミオタイ「最近成り上がった科学者が」

コサブロウ「こっちは、タンシオ博士に頼まれてやっているんだ」

シモオタイ「そっちこそ、邪魔をするな」

ヤマト達がそう反論する。

なお、タンシオ・・・じゃなくってナンバ博士とは、ヤマトとコサブロウと山線トリオの直属の上司にあたり、コサブロウと同様、よく名前を間違えられる。

ロボットA「ゼーゲル博士にタンゴ博士ね」

ロボットB「でも、ポケモンに関して研究をしている二人がどうしてあんな宝石をほしがっているだろう？」

ロボットC「俺に聞かれても困るよ」

エブチ隊は、ロケット弾3組の話聞きながらそんな会話をしていた。

ナカオタイ「お、お前たちはエブチ隊!？」

コサブロウ「なんで、こんなところにエブチ隊がいるんだ!」

ナカオタイとコサブロウは、エブチ隊を見て驚いた。

なお、エブチ隊とロケット団は、敵対同士と言う設定である。

ロボットA「そんなのどうでもいいよ」

ロボットB「やい、ロケット団。俺たちが成敗してやる」

ロボットC「悪いことをするやつらは、俺たちエブチ隊が黙っていないぜ」

ヤマト「悪いこととは人聞きが悪いわね。」

ナカオタイ「有効活用と言っただけでほしいものだ」

ヤマトとナカオタイの返答に・・・

ロボットC「どこが有効活用だよ！」

ベル「ポケモン達を強引な手で捕まえてるくせに」

怒りを露わに言葉に出すエブチ隊の一人とベル。

カミオタイ「余計なお世話だ！痛い目に合わせてやる。ナカオタイ、やっておしまい」

ナカオタイ「了解！スピアー×5体、いつてらっしゃい」

すると、ナカオタイ達ロケット団の回りにスピアーが5体囲んだ。

デント「行くぞ！マイビンテージ！イシズマイ！」

ケンジ「コンパン、頼んだ！」

ベル「チラーミィ、あなたもお願い！」

対するデント達は、Bグループ代表としてデントのイシズマイ、ケンジのコンパン、ベルのチラーミィを繰り出し応戦する。

ムサシ「どうする。コジロウ」

コジロウ「ひとまず、高みの見物としますか」

ムサシとコジロウは、戦いに介入せず気球から様子を見ることにした。

ナカオタイ「スピアー達、一斉にミサイルばりだ」

デント・ケンジ・ベル「っかわせ（かわして）！」「」

コンパンは、ジャンプしてイシズマイとチラーミィも難なくかわした。

ベル「チラーミィ、くすぐるよ」

チラーミィは、スピアーたちにくすぐるを仕掛けた。スピアー達はあまりのくすぐったさに身動きが取れなくなった。

ベル「今よ、デント君、ケンジ君」

デント「すまない、ベル。イシズマイ、シザークロス！」

ケンジ「コンパン、サイケこうせん」

イシズマイのシザークロスとコンパンのサイケこうせんがスパイア達に命中する。

カミオタイ「ナカオタイ、何をしている。あのチビに一発かましてやるんだ」

ナカオタイ「はい。スパイア、チラーミイを襲え！」

スパイア達がチラーミイに旋破りの1対多の攻撃を仕掛けようとする。

ベル「こうなったら、一か八かよ。チラーミイ、メロメロ」

チラーミイがドククラゲに対して、メロメロを繰り返す。

コサブロウ「ふん、そんな技。性別が同じなら意味がない」

ところが、コサブロウの言葉とは裏腹に、ドククラゲ達は全てメロメロ状態になった。ベルのチラーミイはオス、つまり、ドククラゲ達は全てメスということである。

ヤマト「何!? 一体、どういうことよ」

ナカオタイ「作者にしてやられた！」

コサブロウ「どういうことだ！」

ナカオタイ「いや、実は、前に作者がこれプレゼントだからとスパイアをもらったんだ」

シモオタイ「このスカポインターン！」

カミオタイ「どう見ても作者の企みだろうこれ！」

そうナカオタイに指摘するカミオタイ達。

ロボットA「何を騒いでるんだあいつら？」

ロボットC「さあ？」

遠くから見ていたエブチ隊がカミオタイ達のやり取りを見てそう思った。

シモオタイ「とりあえず、この状況をなんとかしろ」

ナカオタイ「お前達、しっかりするんだ」

ナカオタイが必死でスパイア達に問いかけるが、メロメロ状態のた

め技が出せずにいる。

デント「今だ、イシズマイ。もう一度、シザークロス！」

ケンジ「コンパン。お前もだ。もう一度、サイケこうせん！」

イシズマイとコンパンの攻撃がスパアーに命中する。

すると、その隙にコジロウがカミオタイからルビーを奪う。

カミオタイ「あ！ルビーが！？」

ヤマト「返しなさいムサシ」

ムサシ「やなこった」

そう言つてその場を去ろうとするムサシとコジロウだが・・・

コトネ「マリル、みずてっぽう、チコリーターは、はっぱカッター」

コトネがマリルとチコリーターに攻撃を仕掛ける。

攻撃は、気球に当たり爆発した。

そして、ルビーは、エブチ隊の一人が見事キャッチする。

ニヤース「しまったニヤ！」

ムサシ「しょうがない。一旦引き上げるわよニヤース、コジロウ」

コジロウ「わかった。これは置き土産だ。デスマス、ナイトヘッド」

人組は背中につけていた小型ジェットで空高く逃げていった。その際、コジロウのデスマスでナイトヘッドを放ち、ケンジ達を攻撃する。

ケンジ「全く、なんてやつらだ。」

コトネ「こんな置き土産いらないわよ」

アイリス「ホント、逃げ足だけは早いんだから」

デント「まあ、でもピカチュウは取り返したことだし、いいじゃないかい」

ケンジ、コトネ、アイリスが3人組に対する怒りを露わにする中、それを冷静に宥めるデント。だが、ヤマト、コサブロウ、山線リオは、3人組の去り方に違和感を思っていた。

ヤマト「ねえ、コサブロウ。ムサシ達つて、あんな去り方だったけ？」

コサブロウ「そんなわけないだろうヤマト」

カミオタイ「そうだよ。あいつらは、俺達同様『やな感じ』」って言いながら、いつも飛んで行くはずだ」

ナカオタイ「あいつら、どうりで最近、幹部の方の評価が高いわけだ・・・」

シモオタイ「そんなことは、どうでもいいよ。ここは、俺達も撤退しましょう」

カミオタイ「そうだな」

カミオタイがそう言ってロケット団は、スピアーを置いて森の奥へ逃げていった。

ロボットB「一昨日きやがれ」

ロボットC「そうだそうだ」

手をバンパンするエブチ隊。

コトネ「貴方達が言う資格なんてないわよ!!」

そう、コトネがエブチ隊にツッコミを入れると、ロケット団に見捨てられた格好になったスピアーは、森の奥へ去っていった。

デント「どうやら、ロケット団。野生のポケモンをも悪用していたようだね」

ベル「全く、なんて奴らよ」

ベルはロケット団に対して、さらに怒りを露わにした。

ロボットA「とりあえず、エブチ博士に報告せねば」

ロボットC「そうですね」

ロボットB「ところで、このルビーどうします?」

ロボットD「とりあえず俺達がキチンと管理しようぜ」

ロボットE「そうだな」

エブチ隊は、ルビーを自分たちで管理することに決定しルビーを大事に持ってエブチに報告しながらデント達とともに再び歩き始めた。しかし、それが逆に事態が悪くなるのは、この時誰も知る由がなかった・・・。

一方、ヤマト達は・・・

ヤマト「タンセン博士、申し訳ございません。特別なルビーを奪う任務を失敗しました」

タンセン「ナンバじゃ。それと、作者まで間違えるではない！」

すいません（棒読み） by 作者

コサブロウ「ところで、タンモノ博士。ゼーゲル博士もあのルビーを狙って来ましたがいかなさいますでしょうか？」

ナンバ「ナンバじゃ、何度言わせたら分かる。ゼーゲルのことは、放っておけ。あいつにルビーが奪えこないわい。それより、エブチ隊が一緒ということ、あの男もいるってところだな」

カミオタイ「カカシ博士。エブチ隊ばかり対抗心を燃やすより次の作戦を考えてください」

ナンバ「ナンバだって言ったているだろう。その点については、安心するがよい。すでに次の手は打っておる。その際もお前たちに逝ってもらうがな」

ナカオタイ「逝ってもらって・・・」

シモオタイ「俺達は、まだ死にたくありませんタンク博士」

ナンバ「ナン・・・、もういい。お前たちは次の作戦まで全員待機じゃ」

ヤマト・コサンジ・カミオタイ・ナカオタイ・シモオタイ「・・・はっ！」「・・・」

ヤマト達はナンバ博士の部屋から出て行った。

さて、ムサシ、コジロウは・・・

ムサシ「ゼーゲル博士、申し訳ございません」

コジロウ「あと少しのところでエブチ隊に邪魔をされました」

ゼーゲル「そうか、エブチ隊が・・・。それより、あのナカバ博士も狙ってきたのか・・・」

ナンバじゃ by ナンバ

ゼーゲル「まあよい。ワシは、次の作戦を考える。その間は、お前たちは向こうで待機しておれ」

ムサシ・コジロウ・ニヤース「・・・はっ！」「・・・」



ムサシ達は、ゼーゲル博士の部屋をあとにした。

ゼーゲル「さて、タンモノとシラヌイよりもルビーをゲットせねば・

・・・」

どうやら、シラヌイ博士とナンバ博士とゼーゲル博士は別々にルビー奪取任務の指揮を執っているようである。

ゼーゲル「そうだ！いいことを思いついたぞ。待っておれ、タンバにシラヌイ。必ずお前達より先にルビーを手に入れてやる」

ゼーゲル博士は、笑みを見せながらそう誰もいない部屋でそうつぶやいた。

ようやく本格始動したロケット団。はたして、サトシ達の運命はいかに！？

第59話 3組のロケット団（後書き）

次回、さらにBグループにさらなぬ災難が待っていた。

## 第60話 Bグループの危機（前書き）

ルビーを手に入れた（？）デント達。そんな彼らに再び危機が！  
そして、今回は、ポケスペのロケット団員が登場します。

## 第60話 Bグループの危機

ヤマト、コサブロウ、○山線トリオ、ムサシ、コジロウの襲撃に遭い、ルビーを奪われそうになったBグループ。その後は、エブチ隊が警戒しながら近くにあった洞窟で休憩をとって行った。

ロボットA「とりあえず、この洞窟で休憩しよう」

ロボットB「そうだな。人気もないし」

そつつばやきながら座り込むエブチ隊。

そして、あとからルビーを持ったメンバーとデント達が、洞窟内に入ってくる。

ケンジ「しかし、まさかロケット団がこのルビーを奪いに来るとは・・・」

アイリス「まさか、ナイトメアと言う石のときと同じように。この石にも何か秘密があるのかな？」

コトネ「なーに？ナイトメアって？」

コトネがそうアイリスにたずねて来た。

アイリスは、コトネの問いに答え始めた。

\*なお、放送延期となったためその内容については、わからないので省略いたします。 dy・作者

コトネ「そんなことがあったんだ」

デント「もし、これがナイトメアと同じなら大変なことになる可能性は、きわめて高い」

ロボットC「なら、全力でエブチ隊が守りきってやる！」

ロボットD「そうだな」

エブチ隊がそう決意したその時だった。

????「それはどうですかエブチ隊」

????「その決意も無駄になることでしょう」

「????」その通りだな」

どこからか人の声がルビーを守っている面々の耳に入った。  
ベル「だ、誰!?!」

すると、彼らの目の前に三人の人物が現れた。

ロボットB「お前達は何者だ!」

「???」「俺達は、ロケット団中隊長のケン」

「???」「同じく、ハリー」

「???」「同じく、リョウ」

その三名は、ケン、ハリー、リョウと名乗る。

ベル「ロケット団ですって!?!」

ロボットA「それより、どうしてここがわかったんだ!?!」

ケン「この洞窟を拠点として、ルビー捕獲任務のための準備をして  
いたんだよ」

ケンジ「それじゃあ、さつき俺達を襲ったのは……」

ハリー「あれは、我々とは別行動のロケット団です」

リョウ「さて、そろそろ任務を始めようと思った時にそちらから出  
向いてくれるとはこれは我々としても好都合だ」

ケン「さあ、ルビーを渡してもらおうか?」

アイリス「誰が渡すものですか!」

ベル「渡すぐらいなら戦ったほうがマシよ」

ロボットA「そうだそうだ」

ロボットE「俺達、泣く子も黙るエブチ隊がお前達ごときにルビー  
なんか渡せるか」

アイリス達は、そう言ってロケット団中隊長のケン、ハリー、リョ  
ウを睨む。

ハリー「どうやら、痛い目にあわせないとわからないようだな。ケ  
ン、リョウ」

リョウ「そうみたいだな」

ケン「仕方がない……」

ケン、ハリー、リョウはモンスターボールを取り出し、そして投げ

た。出てきたのは、オクタン、イトマル、キリンリキである。

デント「行くぞ！マイビンテージ！イシズマイ！」

ケンジ「コンパン、もう一度頼んだ！」

ベル「あなたもよ。チラーミィ」

アイリス「頼んだわよ、エモンガ！」

デントのイシズマイ、ケンジのコンパン、ベルのチラーミィ、アイリスのエモンガがオクタン、イトマル、キリンリキの応戦するが4匹のうちイシズマイとコンパン、チラーミィは、先ほどの戦いでかなり消耗していた。残りは、全てポケモンセンターに預けてしまったのだ。こうなると頼りなのがアイリスのエモンガと後ろで待機しているコトネのマリルとチコリーターであるが戦力的には、微妙なラインである。

ハリー「お前達、俺達をなめているのか、ふざけるな。イトマル、サイコキネシスだ！」

イトマルがサイコキネシスを繰り出しイシズマイ、コンパン、チラーミィ、エモンガに襲い掛かる。元氣いっぱいのエモンガは、避けることができたが疲労困憊しているイシズマイとコンパン、チラーミィには、命中してしまう。

デント「イシズマイ！」

ケンジ「コンパン！」

ベル「チラーミィ！」

その後もオクタン、イトマル、キリンリキに応戦するが、どの攻撃もことごとく外れて、逆に相手からの攻撃を受けてしまう一方的な展開となってしまう。こうなると唯一の頼みは、エモンガである。アイリス「エモンガ、めざめるパワー！」

エモンガのめざめるパワーがキリンリキに向けて放つ。

リョウ「キリンリキ、避けてサイコウェーブ！」

キリンリキは、めざめるパワーを避けてサイコウェーブを放ちエモンガに命中させる。

アイリス「こうなったら、ベル！」

ベル「ええ、わかったわ」

アイリス「エモンガ」

ベル「チラーミイ」

アイリス・ベル「メロメロ！」

エモンガとチラーミイがメロメロを繰り返した。2匹は、性別がとなので万一同じ性別でもこれならカバーできる。当たれば、メロメロになって勝ち目が出て来る。

しかし・・・

ケン「オクタン、オクタン砲でメロメロを打ち消せ！」

ハリー「イトマル、いとはくで避ける！」

リョウ「キリンリキ、まもる！」

エモンガとチラーミイが放ったメロメロは、ことごとくイトマルはいとはくで避けられてキリンリキは、まもるで防御されオクタンは、オクタン砲で打ち消される。

ケン「そろそろ、終わりにさせようか」

リョウ「そうだな、予定も狂ってしまったしな」

ハリー「イトマル、サイコネシス！」

ケン「オクタン、オクタン砲！」

リョウ「キリンリキ、シャドーボール！」

イトマル、オクタン、キリンリキの攻撃がイシズマイ、コンパン、

チラーミイ、エモンガに命中する。

デント「イシズマイ！」

ケンジ「コンパン！」

ベル「チラーミイ！」

アイリス「エンモガ！」

とうとう、4体は倒れてしまった。そして、ケン、ハリー、リョウは、コトネとエプチ隊に近づく。

コトネ「こうなったら、マリル、チコリータ」

ハリー「そうは、させない。イトマル、いとはくでその小娘を縛るんだ！」

イトマルは、いとをはくでコトネを縛る。

ロボットA「おのれ、ロケット団中隊長！」

ロボットB「今度は、俺達だ！」

ロボットC「成敗してやる！」

ロボットD「行くぞ！」

エプチ隊が刀を抜きロケット団をロケット団中隊長に襲い掛かる。

リョウ「キリンリキ、サイコネシスでエプチ隊を飛ばせ！」

キリンリキがサイコネシスを繰り出しエプチ隊は、遠くへ飛ばされる。

ロボットA「D」「うわあああ！」「」

ロボットE「K」「やな感じ」「」

エプチ隊は成す術なく、吹き飛ばされてしまった。そして、ルビーを奪取する。

ハリー「最後に置き土産だ」

そう言つて、ハリーは、手榴弾を3つ投げた。そして、爆発とともに、上から岩が次々と落ちてきた。ケン、ハリー、リョウは、オクタ、イトマル、キリンリキを戻して、その場から姿を消した。

ロボットA「まずい、ここは一旦撤収だ！」

エプチ隊とデント達は急いで洞窟を抜けだした。そして、一度体勢を立て直すためにユガシマの森まで戻ることにした。



## 第60話 Bグループの危機（後書き）

ロケット団にルビーを奪取されたデント達。さらなぬ展開がサトシ達を待っていた。

## 第61話 エブチ博士の怒り

ロケット団中隊長のケン、ハリー、リヨウに襲われてルビーが奪取され、傷ついたポケモン達をかばいながらデント達率いるBグループは、一旦ユガシマの森の入口まで引くことにした。

エブチ「この大バカもん！」

エブチが怒鳴りながらBグループに付いて行ったエブチ隊を殴る。

ロボットA「申し訳ございませんエブチ博士」

ロボットB「まさか、あの洞窟がロケット団の拠点とは、知らなかったもんでして・・・」

エブチ「それは、知らなくて仕方がない。しかし、ワシが怒っているのは、そんなことじゃない！ロケット団中隊長に何も出来ずデント達のポケモンを傷つけたことに怒っているんだ！何かして、どうしようもなく逃げて来たならまだ、話はわかるが何もせず引いたなんて！エブチ隊の恥だ！！」

ロボットC「エブチ博士落ち着いてください！」

ロボットD「そうですよ、血圧が上がるだけですよ」

エブチに落ち着くよう言い聞かせるエブチ隊Cグループ。

ヒカリ「それは、いいとしてサトシ達、大丈夫かな？」

マサト「僕もなんだかお姉ちゃん達が心配になってきた」

森の入口を見ながらそう思うマサトとヒカリ。

アヤノ「はい、これでイシズマイとコンパンとチラーミィ、エモンガは、元気になったわよ」

そう言つてアヤノがモンスターボールをデント達に渡す。

ロボットE「よかったですね。ポケモン回復期を持ってきておいてアヤノ「ええ、これがなかったら今頃イシズマイたちをアカサキタウンまで運ばなければならなかったから・・・」

エブチ隊の一人にそうつぶやくアヤノ。

ヤストシ「それで、エブチ博士。これからどうするんですか？」

エブチ「そうだな、ゼーゲルとタンシオとロケット団中隊長がウロウロしているなら。とりあえず、Aグループの部隊に引くよう連絡を入れておけ」

ロボットF「それが、エブチ博士。先ほどからAグループに連絡を入れてるんですが応答がないんです」

ヒカリ「まさか、サトシ達のみになんか……」

そう心配そうな顔で言うヒカリ。

ロボットF「そうじゃなくて……」

エブチ「じゃあ、なんだって言うんだ！」

ロボットF「はい！実は、この森から特殊な電波が先ほどから流れていましてそれで連絡が出来なくなってます……」

エブチ「電波干渉か！」

ロボットF「その可能性は、高いです」

エブチ隊の一人がエブチにそう答える。

アヤノ「そうになると、サトシ君達の身が心配ですね」

エブチ「そうだな」

そう言うエブチ。

ヒカリ「ねえ、マサト、ヤストシ、タケシ。サトシ達のところに行つて見ない？」

マサト「そうだな、お姉ちゃんが心配だし」

タケシ「わかった、行こうか！」

ヤストシ「その意見に俺は、賛成だ！」

デント「僕も行くよ」

アイリス「あたしも！」

ベル「私も！」

コトネ「私も行くわ！」

ヤストシ「よし、行くぞ。みんな！」

ヤストシが先頭にヒカリ達がついて行った。

アヤノ「エブチ博士、ヤストシ達が言ってしまったけど……」

エブチ「よし、支度をしろ！ワシらも行くぞ！お前達も支度しろ」

エブチ隊全隊員「了解！」

エブチは、隊員達全員を支度をし始める。  
はたして、サトシ達は、無事なのか？

第61話 エフチ博士の怒り（後書き）

さてさて、どうなるか？次回に続く。

## 第62話 異変(前書き)

今回はサトシ達Aグループの視点でお送りします。

## 第62話 異変

デント達がヤストシ達がいるユガシマの森に着く少し前、Aグルー  
プは、遠回りの道を調査をしていた。

ハルカ「見て、川の中にいるはずの水ポケモンが一匹もないわ」  
カスミ「本当だ・・・」

シュウ「でも、どうして・・・」  
そう言うとシゲルが川の水をくみ上げる。

シゲル「別に川の水に変わりはないようだが・・・」  
ピーカーに組み入れた水を見てシゲルはそう言った。

ロボットA「どれどれ？」

エプチ隊の一人が懐から紙を取り出しそれをシゲルが汲んだ水へと  
入れる。すると、入れた紙の色が青から赤に色が変わった。

ロボットA「この水、酸性が混ざっているぞ」  
サトシ「酸性？」

理科用語を知らないサトシが首を傾げる。

シゲル「サトシ、酸性って言うのは、酸としてはたらく性質のこと  
で化学において、塩基と対になってはたらく物質のことで酸の一般  
的な使用例としては、酢酸（酢に3〜5%程度含有）、硫酸（車の  
バッテリーの電解液に使用）、酒石酸（ベーキングに使用する）な  
どでこの三つの例が示すように、酸は溶液、液体、固体であること  
ができるんだ。塩化水素など気体の状態でも酸であることができる  
だよ」

そう、シゲルが説明するがサトカスとシュウハルは、シゲルが理科  
用語でしかも難しい用語を並べているためチンプンカンプンであっ  
た。

ロボットB「簡単に言うと酸性は、溶かすんだよ」

エプチ隊の一人が簡単にサトシ達にそう言った。

ハルカ「そうなんですか！」

ロボットC「ああ、酸性が含まれているのは、温泉とか酢などがあ  
るんだ。また、工場からよく廃棄物にも酸性が混じっていてねこれ  
を川に垂れ流すと水ポケモンの生態を脅かすことになるんだ。今は、  
垂れ流しする場合は必ずアルカリ性が入った液体を酸性と混ぜて流  
すって言うのが義務付けられているんだ」

ロボットA「アルカリ性と酸性は、中和する。中和すると普通の水  
とほとんど変わらないし水ポケモンたちにも影響がないんだ」  
カスミ「そうなんですか」

サトシ「どこかの誰かさんとは、大違いだ」  
そう言つてサトシがシゲルを見る。

ロボットA「ただ、どのぐらいの濃度があるかは、このリトマス紙  
からは、わからないんだ。どのぐらい濃度があるのかは、もう少し  
詳しい機械を使わないとわからないが水ポケモンがいなくなるほど  
から多分、酸性の濃度は、かなり高いな」

シゲル「そうなりますね」

エブチ隊の一人の答えに同調するシゲル。

ロボットD「とりあえず、川の上流を遡ってみますか」

ロボットA「そうだな」

そう言つてサトシ達とエブチ隊10名が川を遡ることにした。

ロボットC「こんなところから流れているんだ・・・」

川を遡ってきたサトシ達だが川の水は、自動販売機の間隙ぐらいの  
ところから流れてくるためこれ以上進むことは出来なかった。

そんな時だった。

ロボットE「おーい、みんな。大変だ！」

ちょうど崖の上で調査していたエブチ隊の一人がサトシ達に向けて  
大きい声を出した。

ロボットA「どうしたんだ？」

ロボットE「崖の上にある洞窟のポケモン達が外にいるんだ！」

そう、エブチ隊の一人がそう答えた。



ロボットB「なんだと!」

シゲル「洞窟にいるポケモンが外にいるのか。調べてみる必要があるようだな」

サトシ「そうだな」

シユウ「僕もそう思うな」

カスミ「あたしも」

ハルカ「私も」

シゲルの発言に同調するサトシ達。

ロボットA「よし、今から上に行くからロープを下ろせ」

ロボットE「了解!」

そう言つて上にいたエブチ隊の一人がロープを下ろす。

シゲル「どうするか?」

シユウ「ここは、レディーファーストだ。ハルカたちを先に登らせましょう」

ロボットA「そうだな。それじゃあ、カスミちゃん、ハルカちゃん、君達が先に登りたまえ」

カスミ・ハルカ「はい!」

そう言つてカスミとハルカは、崖を登り始めた。

ロボットD「しかし、よかったですね」

ロボットB「なにが?」

ロボットD「ほら、カスミちゃんは短パンでハルカちゃんはズボンだろう。ヒカリちゃんは、ミニスカだから見えていたよ。今頃」

シゲル「!」

エブチ隊の話にシゲルが「ヒカリ」という単語に敏感に反応した。

ロボットA「そこ、変体発言していない」

ロボットB・D「はい」

その後、ハルカとカスミが登り終わるとサトシ、シユウ、シゲルが登りそのあとをエブチ隊が登った。

カスミ「ホントだ。洞窟の中にいるはずのポケモン達が外に出てるかも」

普段は洞窟内に潜んでいるはずのズバットやコロモリや岩ポケモンの大群が洞窟の外に出ていたのである。

サトシ「イツシユのポケモンもいるんだ」

シゲル「でも、おかしいな。このホクシンには、イツシユのポケモンはいないはずだから・・・」

シゲルがそうつぶやいた。

ロボットF「そういえば、ここ最近イツシユのポケモンがホクシンに現れる話を聞くな」

ロボットC「でも、どうしてイツシユのポケモンがいるんだろう・・・」

ロボットA「それがわかれば、苦労はしないよ」

エブチ隊の一人がそう言う。

サトシ「とりあえず、真相を確かめに洞窟に行ってみるしかないよ  
うだな」

サトシ達が洞窟に向かって歩を進めていると、

ハルカ「見て、あれ」

サトシ「どうしたんだ、ハルカ？」

ハルカの指さす方を向くと、そこには、一匹のチェリネが倒れて蹲ひづつていた。

ロボットG「お、おい、このチェリネ怪我してるじゃないか」

カスミ「ホントだわ」

チェリネは見ただけで分かるくらいの傷をつくっていた。

シゲル「大変だ、すぐに手当てしないと」

チェリネ「チェリ！」

そう言うとシゲルはバッグからいい傷薬を取り出して、チェリネの傷の手当てを試みる。だが、チェリネは抵抗して、シゲルが持っているいい傷薬をはたき落とす。

シゲル「チェリネ、僕は君に危害を加えるつもりはないんだ」

カスミ「ただ、あなたの傷の手当てをしたいだけなの」

ハルカ「だから、落ち着いて」

チエリネ「チエリ・・・」

シゲル、カスミ、ハルカがチエリネを説得しようとするが、未だチエリネは警戒している。傷の手当てが出来ずに困り果ててしまいう一。すると、サトシがチエリネに近づく。

チエリネ「チエリ！」

サトシ「ウツ！」

ハルカ・カスミ「サトシ！」

チエリネは近くに落ちていた木の実をサトシに投げつける。サトシは一瞬痛がるそぶりを見せるが、ハルカとカスミの心配をよそにチエリネに再び近づこうとする。

サトシ「ほら、大丈夫だ。俺たちはお前を助けただけなんだ・・・」

サトシは笑顔で近づきながら、チエリネを優しく抱き上げた。

チエリネ「チエリ・・・チエリ。」

チエリネは落ち着きを取り戻し、サトシの腕の中に身を委ねる。

サトシ「シゲル、早くチエリネの手当てを」

シゲル「ああ、分かった。それにしても凄いな、サトシは」

シユウ「さつきまで、抵抗していたチエリネをいとも簡単に落ち着かせるなんてすごいな君は」

サトシ「いやあ、当然のことをしたまでだよ。」

照れながら言うサトシを、改めて凄いと思う一同。その後、チエリネの手当ても終わり、サトシ達は再び洞窟へと歩みを進め、ようやく洞窟の入り口付近に到着した。

カスミ「ここね」

シゲル「ああ、この洞窟にいるべきポケモン達が追い出されるようにして外に出ていた。この洞窟に何か真相があるということは間違いないよ」

サトシ「それなら、早速中に入ってみようぜ」

サトシ達は洞窟付近に洞窟内のポケモン達がいることの真相を探るため、洞窟内へと入っていった。洞窟の中は、薄暗く何ら変哲もな

いものだった。ただ一つ言えることは、ポケモン達の気配が全くと言っていいほどなく、不気味な雰囲気を醸し出している。

ハルカ「ただ今、ハルカ探検隊はポケモン達の異常行動の真相を探るため、ユガシマの森にある洞窟に潜入しております」

シユウ「ハルカ。もう少し緊張感を持つてくれないか？」

シユウは、ハルカのお馴染みのハルカ探検隊の登場にツツコム。こんな状況下でやるのもどうかと思うが、洞窟内の不気味な雰囲気を払拭するためにはありがたいハルカの行動である。するとそんなハルカの行動に触発されたのか、サトシのモンスターボールからミジュマルとカスミのルリリが飛び出す。

ミジュマル「ミジュマ！」

ルリリ「リルル！」

サトシ「ミジュマル？」

カスミ「ルリリ？」

サトシ「ミジュマル？」

ミジュマルとルリリは「僕たちに任せろ！」と言わんばかりに、サトシ達の先を胸を張りながら進んでいき、とうとうサトシ達の視界から消えてしまった。暫しの沈黙し数十秒後。

ミジュマル「ミイイジュ！」

ルリリ「リルルルル！」

2体は血相を変えて戻ってきた。すると今度はサトシのピカチュウにミジュマルがルリリはカスミの足に移動し……

ミジュマル「ミイイジュ！」

ピカチュウ「ピイイイ……」

ルリリ「リルル！」

ミジュマルは、ピカチュウの背中をルリリはカスミの足を押しして自分達より先に行かせようとする。

シユウ「どうしたんだらう、2匹とも？」

ミジュマルとルリリの行動に疑問を抱くシユウ。

するとそこへ……

ゴゴゴゴゴゴ!

サイドン「サアアアイ!」

大きな地響きとともにサトシ達の目の前に数体のサイドンが現れた。サトシ「サイドンだ!」

シュウ「しかし、いくらなんでも多すぎるよ。この数は……」

シゲル「とにかく、ここはいったん引くぞ。」

今のサトシ達の手持ちのポケモンでは到底無数のサイドン達には応戦できないため、サトシ達はいったん引くことにした。

サトシ「戻れ、ミジユマル!ピカチュウも逃げるぞ」

ピカチュウ「ピイカ!」

カスミ「ルリリも!」

ルリリ「ルル!」

一目散に洞窟の出口へと急ぐサトシ達。だが、

サイドン「サアアアアオオオン!」

ここでサイドンの地割れが炸裂した。

カスミ「ハルカ」「キヤア!」

サトシ「カスミ!」

シュウ「ハルカ!」

地割れによつて地面に割れ目ができて、カスミとハルカはそこから落ちそうになる。2人を助けようと、サトシはカスミの腕、シュウはハルカの腕をつかむが……

カスミ「ハルカ」「キヤアアアアア!」

サトシ「シュウ」「うわあああああ!」

ピカチュウ「ピイイイカアアア!」

ルリリ「ルルル!」

ロボットA「E」「」「」「やな感じ」「」「」

カスミ、ハルカを始め二人を助けようとしたサトシとシュウ、ピカチュウにルリリ、そしてエブチ隊5名が洞窟の下層部へ落ちてしまった。

シゲル「サトシ!カスミちゃん!ハルカちゃん!シュウ!」

ロボットF「シゲル君、危ないからここは、脱出するんだ！」

シゲル「でも、サトシたちが……」

ロボットG「ここで、俺たちまで巻き込まれたら誰が助けるんだよサトシ君達を！」

エブチ隊の一人が説得力のある発言をシゲルに言う。

ロボットK「とりあえず、今は脱出することだけを考える！」

そう言ってエブチ隊5名が出口を目指して走り始める。

シゲル「サトシ、カスミちゃん、ハルカちゃん、シユウ。ごめん。必ず助けに来るからな」

下層部へ落ちていった4人に謝りつつ、シゲルとともに出口へと急いで向かうシゲル。

はたして、洞窟の下層部へと落ちていったサトシ、カスミ、シユウ、ハルカの運命やいかに!?

## 第62話 異変（後書き）

洞窟の下層部へと落ちていったサトシ、カスミ、シュウ、ハルカ。  
しかし、4人にさらなぬ災難っていうより悲劇が彼らに待っていた。

### 第63話 無力・・・(前書き)

前回、チエリネを始めイッシュポケモン達ですがどうしてホクシン地方にいるのか、それは、後に判明いたします。今回は、二つの視点でお送りいたします。  
では、どうぞ。



### 第63話 無力・・・

サイドンの地割れによって出来た地面の割れ目から洞窟の下層部に落ちてしまったサトシ達。果たして彼らは無事なのだろうか・・・カスミ「ん、ん。はっ！サトシ、ハルカ、シュウ、みんな無事！」サトシ「ん、何とか・・・」

ハルカ「大丈夫かも」

シュウ「でも、体中は痛い・・・」

ピカチュウ「ピイカ・・・」

ルリリ「リルル」

エブチ隊A「E「「「「俺達も」「」「」

どうやら、落ちたところがたまたま柔らかかな地表だったため、全員比較的軽症で済んだようだ。

シュウ「それで、どうするか」

ハルカ「上に登れそう？」

カスミ「掴むところがないし暗いし、それは無理みたいね」

サトシ「それなら、他の出口を探しにいこうぜ」

ハルカ「そうね」

サトシ達は、上には戻れそうにないので自分たちが落ちた階層を進んでいくことにした。

side in ロケット団

ケン「シラヌイ博士、こちらが例のものです。」

シラヌイ「ご苦労。では早速プロジェクト遂行のため、バシヨウとブソンのもとへ輸送する」

ロケット団下っ端達「はっ！」

ロケット団中隊長が奪取したルビーはロケット団が用意した飛行艇に積みバシヨウとブソンのもとへと輸送された。

ハリー「ところで、シラヌイ博士。シンバシ博士とゼーゲル博士は  
いかがでしょうか？」

ナンバじゃ!!! by ナンバ博士

シラヌイ「ほっとけほっとけ、あの二人は・・・」

リヨウ「かしこまりました。それで、我々はどういたしましょう」

シラヌイ「こちらはバシヨウとブソンに任せる。ケン、ハリー、リ  
ヨウには今回のプロジェクトと同時進行で進めているプロジェクト  
にあたってほしいと上層部から要請があった」

ケン「それでは、我々はそちらの方に向かいます」

シラヌイ「頼んだぞ」

ハリー「かしこまりました」

ロケット団中隊長は、次のミッションにあたるため、ユガシマの森  
をあとにした。

side out

その頃、サトシ達は別の出口を探しに、ひたすら歩みを進めていた。  
ハルカ「ずいぶん奥まで進んだかも」

シユウ「どうやら、僕らは、道に迷ったよだね」

実は、サトシ達は道に迷ってしまったようだ。洞窟の暗闇の中、さ  
らには先程のサイドンの影響で本来の道から外れてしまったのだけ  
ら無理もないだろう。ちなみにサトシ達の手持ちのポケモンに、フ  
ラツシユが使えるポケモンはいない。

カスミ「シゲル達、大丈夫かな？」

ロボットA「心配するな。シゲル君なら無事だったエブチ隊のメン  
バーが助けただろう」

ロボットB「あとは、あいつらがエブチ博士にこのことを伝えてく  
ればいいんだが・・・」

ロボットC「大丈夫だよ。エブチ博士ならきつと俺達を助けに来て  
くれると思うよ」

エブチ隊の一人が言う。

カスミ「とりあえず。今は、自力で出口を探しましょう」

ハルカ「そうかも」

サトシ「進むか」

サトシ、カスミ、ハルカ、シュウ、エブチ隊は、お互いを励ましな  
がら先を進んだ。

side in ロケット団

ロケット団下っ端A「バシヨウ様、何者かがこちらのアジトに侵入  
した模様です」

バシヨウ「そうですか、それは弱りました。」

ロケット団員の侵入者報告に、渋い表情を浮かべるバシヨウ。

バシヨウ「あなたは、他の団員たちとともにここに残ってください。  
侵入者の排除には私とブソンが行きます」

ロケット団下っ端A「アイアイサー！」

バジヨウがそう言うのと下っ端は、元の配置に戻っていた。

バシヨウ「では行きますよ。ブソン。」

ブソン「ふっ、丁度体がなまってたところだ。久しぶりに腕が鳴る  
ぜ。」

バシヨウとブソンは侵入者排除に向かった。

side out

カスミ「ねえ、さっきから誰かに見られている気がするんだけど・  
・」

サトシ「気のせいじゃないのか？」

ハルカ「そうよ。考えすぎだよ、カスミ」

カスミ「そうだといけど・・・」

カスミは、そうサトシ達に向けてつぶやいた。しかし、カスミの予



ブソウ「エアームド、はがねのつばさ！」

エアームドは、はがねのつばさをサトシ達に向けて繰り出した。しかし、ピカチュウがエレキボールを繰り出しでなんとか防ぐことが出来た。

サトシ「サンキュー、ピカチュウ」

そうやってピカチュウは、ピースをして臨海態勢を取る。

シュウ「ロズレイド、頼んだ！」

カスミ「ルリリ、お願い！」

ハルカ「アゲハント、ステージオフ！」

シュウはロズレイド、カスミはルリリ、ハルカはアゲハントを繰り出した。

シュウ「ロズレイド、マジカルリーフ！」

カスミ「ルリリ、みずてっぼう！」

ハルカ「アゲハント、サイコキネシス！」

シュウは、ロズレイドにマジカルリーフ、カスミは、ルリリにみずてっぼうをバジヨウのハガネールにハルカはアゲハントにサイコキネシスをブソウのベトベトンに向けて繰り出した。

ブソウ「エアームド、まもる」

バジヨウ「ハガネール、ストーンエッジで防げ！」

エアームドは、ベとベとんをまもるでハガネールは、ストーンエッジで3匹の技を防いだ。

サトシ「それなら、ピカチュウ。アイアンテール！」

シュウ「ロズレイド、ソーラービーム！」

ピカチュウのアイアンテールとロズレイドのソーラービームでベトベトンは戦闘不能になるが……

バシヨウ「ハガネール、はかいこうせん」

ブソン「エアームド、お前もはかいこうせん」

ハガネールとエアームドのはかいこうせんがピカチュウとロズレイドに命中する。

サトシ「ピカチュウ!？」

シユウ「ロズレイド!?」

さらには、無数のリングがサトシ達めがけて飛んできて、サトシ達はおるかポケモン達の身動きを封じ込んでしまった。

ハルカ「なんなのよ、これ!」

バシヨウ「あなた達に好き勝手やられると困りますのでね。少し、おとなしくしていただきますよ」

サトシ「卑怯だぞ、お前ら!」

ブソン「卑怯も何も、俺たちは最初からお前たちとバトルしようなんざ考えてなかったんだよ。お前たちを始末することが目的だったしな」

シユウ「く・・・」

サトシ達はバシヨウとブソンを睨み続ける。

バジヨウ「しかし、このまま手ぶらで帰るのもなんですから、このピカチュウとロズレイドを頂きますか。特にそのピカチュウは、馬鹿三組がよく狙っているらしいですし」

バジヨウがそう言う。

ちなみにバカ三組とは、ヤマト・コサブロウとムサシ・コジロウと山線トリオのことである。

そして、マジックハンドは、ピカチュウとロズレイドに向かってきた。

カスミ「ピカチュウ!」

ハルカ「ロズレイド!」

カスミ・ハルカ「危ない!」

カスミとハルカは、捕まりそうになる2体をかばおうと身動きが出来る状態では飛びかかった。

カスミ・ハルカ「キャアアアア!」

サトシ「カスミ!」

シユウ「ハルカ!」

ピカチュウとロズレイドに代わりに捕まってしまったカスミとハルカ。

ロボットC「カスミちゃん！ハルカちゃん！」

離れた場所にいたエブチ隊の一人が手榴弾みたいな物を投げた。  
シューーーーーー。

しかし、それは、手榴弾ではなく煙幕弾だった。煙幕弾は、徐々に広がった。

ロボットD「サトシ君、シュウ君。今のうちだ！」

エブチ隊の一人がそう叫ぶとサトシとシュウは、カスミとハルカを助け出す。

ブソウ「くそ！エアームド、霧ばらいだ！」

ブソウがそう言っただけでエアームドは、霧ばらいを繰り返す。

バジョウ「ハガネール、地面に向けてアイアンテール！」

そう言っただけで地面にアイアンテールを当てたときすごい揺れが発生した。

サトシ「シュウ「うわ！」」

その揺れで、サトシとシュウがこけてしまう。そして煙幕弾が晴れる。晴れた時サトシとシュウは、ブソウによって捕らえられていた。

カスミ「サトシ！」

ハルカ「シュウ！」

ブソウ「くそ、なめた真似を。ウツボット！この小僧二人に眠り粉だ！」

ブソウは、ウツボットを繰り返してサトシとシュウに向けて眠り粉を繰り返す。

サトシ「シュウ「何を……zzzzzzzz」」

ねむりごなを浴びたサトシとシュウは、そのまま眠ってしまった。ブソウ「捕まえる相手を逃がしてしまったが、これはこれでいい。

こちらとしても都合がいい」

カスミ「サトシ、シュウを離して！」

バジョウ「ハガネール、すなあらし」

ブソウ「エアームド、エアスラッシュ」

カスミ「ハルカ「キャアアアア！」」

カスミの叫びを無視するかのように、バシヨウとブソンはすなあら  
しとエアスラツシュをカスミ達にお見舞いした。カスミ達はすなあ  
らしで思わず目を瞑ってしまふ。

そして、その隙に二人は逃げ出す。

ロボットE「逃がすか！」

Eブチ隊は、二人が逃げ出したため追いかけ始めた。

そして、カスミとハルカは目を開けた時には、サトシとシュウは連  
れ去られた後だった。カスミとシュウ、そして連れ去られたサトシ  
とシュウの運命は、やいかに!?



第63話 無力・・・(後書き)

サトシとシュウは、一体どうなる!??

## 第64話 内部騒動

前回、バシヨウとブソンによって、サトシとシユウが連れ去られたカスミとハルカ。

カスミ「やつぱりダメだわ」

ハルカ「きつく締められていて全然外れないかも」

カスミとハルカ、そして、サトシのピカチュウとシユウのロズレイドのポケモン達は今自分たちを縛っているリングを外すのに奮闘していた。

ハルカ「あら？」

カスミ「どうしたの、ハルカ？」

ハルカ「あそこにモンスターボールが」

そう言われてカスミは、そのモンスターボールを足でつかみ出してみると・・・

ミジュマル「ミイイイジュ」

出てきたのは、サトシのミジュマルであった。

ハルカ「ミジュマルだわ！」

カスミ「きつと、サトシが助けた時に落としたんだわ。とにかく、ミジュマル、シェルブレードでアタシたちのリングを壊してくれない」

ミジュマル「ミジュ！」

ミジュマルは任せると言わんばかりに、ホタチをポンツと叩いた。

ミジュマル「ミイイイジュウウ！」

ミジュマルはシェルブレードでカスミ、ハルカ、ポケモン達を縛っているリングを破壊した。

カスミ「ありがとう、ミジュマル」

ハルカ「おかげで助かったかも」

そう言っつてミジュマルにお礼を言う。

ロズレイド「ロズ・・・」

ロズレイドが落ち込んだようにうなだれていた。シユウが捕まった原因は、自分だと思い込んでいるようだ。

ハルカ「ロズレイド、心配しないで！私達が必ずシユウを助けるわ」  
カスミ「でも、普通は、逆なんだけどね」

笑いながらそう言うカスミ。

ハルカ「そうと決まれば一刻も早くサトシとシユウを助けないと」  
カスミ「と言っても、あいつらがどこへ言ったかわからないわ」

カスミがハルカにそう言った。

すると、カスミとハルカは、色つきの粒を見つける。

ハルカ「これは、なんだろう」

カスミ「きつと、エブチ隊が追っていったときにあたし達のために落としたんだわ」

ハルカ「これをたどれば、サトシとシユウが連れ去られた場所がわかるのね」

カスミ「とりあえず、行ってみよう」

そう言うてカスミとハルカは、色つきの粒をたどりながら進み始めた。

その頃、バシヨウとブソンによって捕えられてしまったサトシとシユウは、2人は牢屋のようなどころへ連れていかれていた。

サトシ「・・・ん、んん。はっ、シユウ！大丈夫か」

シユウ「ああ、僕は何とかね、君こそ大丈夫か」

サトシの問いにそう、シユウが答えた。

サトシ「ああ、大丈夫だ。ただ、縛られて思うように動けないが」

シユウ「それは、僕も同じだよ」

サトシとシユウは、がお互いの無事を確認しているところへ。

カタンカタンカタンタ

遠くから足音が聞こえてきた。

そして、足音は、この部屋の前で止まり扉が開いた。

サトシ・シユウ「誰だ!!」

そう、サトシとシユウが言う・・・

ロボットA「サトシ君、シユウ君。無事だったかい」

そこに現れたのは、エブチ隊であった。

ロボットB「今、助けるからな」

そう言つて牢屋の鍵をぶち壊した。

シユウ「ありがとうございます。エブチ隊」

ロボットC「そうと決まれば、逃げるぞ」

ロボットD「ついでにこれを持って逃げますか」

そう言つてエブチ隊の一人が持ったのは、なんとテント達から奪われたルビーであった。

ロボットE「どこからそんなものを」

ロボットD「この部屋の隅に置いてあつたんだ」

ロボットA「とにかく、気づかれる前にとつと逃げるぞ」

エブチ隊B「E「了解!」

そう言つてエブチ隊がサトシとシユウを連れて脱出を試みる。ところか・・・

???「そうは、させないよエブチ隊諸君」

そう言つてエブチ隊とサトシとシユウの前に現れたのは、バシヨウとブソン、バシヨウとブソンの上司・シラヌイ博士、その他ロボット団員が続々と集まっていた。

バジヨウ「ルビーを持って逃げ出そうとしてもそうは、いかないぜ」

ブソン「さあ、大人しくルビーを返してもらおうか」

そう脅しをエブチ隊にするバジヨウとブソン。

ロボットB「大人しく返すぐらいなら」

カチャン

ロボットC「お前達を射殺して逃げた方がまだマシさ」

そう言つてエブチ隊数名が銃剣およびサブマシンガンを取り出す。

シラヌイ「さすが、エブチが作ったロボットだ。だが、我々もただ

撃たれる訳には行かないからね」  
パチッ

シラヌイが指を鳴らした瞬間ロケット団の下っ端達が銃を取り出す。  
ロボットA「おやおや、最近のロケット団は、強襲部隊以外にも武装させているのかね」

シラヌイ「こいつらは、回収部隊と言う強襲部隊の先発隊みたいなもんだ。ただし、能力としては、強襲部隊よりかなり衰えるがね」  
そう笑い顔でエブチ隊に言うシラヌイ。

そして、回収部隊が射撃準備をしたその時だった。

ドカーーーーン

ロケット団下っ端A「F」ぎゃーーーーーあ」

突然横から何かの攻撃をロケット団の下っ端達が食らった。

ブゾン「一体、誰だ！私達の邪魔をするのは！」

そう言うのと向こうから声が聞こえた。

「『一体、誰だ！私達の邪魔をするのは！』と聞かれたら」

「『？？？』答えないのが普通だが」

「『？？？』まあ特別に答えてやろう」

「『？？？』地球の破壊を防ぐため」

「『？？？』地球の平和を守るため」

「『？？？』愛と誠実な悪を貫く」

「『？？？』キュートでお茶目な敵役」

「『？？？』ヤマト」

「『？？？』コサブロウ」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨッキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

なんと、登場したのは、ヤマトとコサブロウ、そして・・・

「『？？？』『一体、誰だ！私達の邪魔をするのは！』と聞かれたら」

「『？？？』名乗ってあげるのが当たり前」

「『？？？』宇宙の破壊を防ぐため」

「『？？？』宇宙の平和を守るため」

「???? 恋と成熟の悪を貫く」

「???? お茶目で恋の敵役」

「???? カミオタイ」

「???? ナカオタイ」

「???? シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」

そう、山線トリオであった。

ブソン「お前達か！よくまあ、無駄に長い使いやがって」

ヤマト「無駄とは、なんだ！無駄とは！」

バジヨウ「とにかく、俺達に何の用だ！」

カミオタイ「もちろん、そのルビーを頂くためにな」

シモオタイ「そして、手柄は、我ら毒使い三人組みとヤマトとコサ

ブロウ、そして、我ら上司のタンシバ博士のものとするのだ」

ナンバ「ナンバじゃ！間違える出ない」

そう言つてシモオタイを叱るナンバ。

シラヌイ「手柄を横取りするとは、落ちぶれとしたの。ヤマト、コ

サンジ、山線トリオ、サンバ」

コサブロウ「コサブロウだ！」

カミオタイ・ナカオタイ・シモオタイ「山線トリオとか言う

な!!!」

ナンバ「ナンバじゃ！」

シラヌイ「まあ、どうでもいいわ。あのルビーは、私の手柄だ」

ナンバ「ふざけるな、あれは、ワシの手柄にするんじゃ。こうなっ

たら、ワシの新兵器　ナンバ・ナンバー5パート2でそのルビー

を奪うまでじゃ！ヤマト、コサンジ、山線。奪つて来い！」

名前と変な呼び名で呼ばれたコサブロウと山線は、いつものよう

に怒鳴るのを辞めてシラヌイたちに襲う。なお、ナンバ・ナンバー

5パート2とは、前にうずまき列島で作ったナンバ・ナンバー5の  
パワーアップバージョン版である。これを付けると攻撃力は、かな  
り上がるという恐ろしい兵器である。

シラヌイ「相手をしてやれバジョン、ブソン」

バジョン・ブソン「了解しました！」

そう言つてハガネールとエアームドを繰り出す。

ロボットC「よし、争っている隙に逃げるぞ。みんな」

そう言つて争っている隙に逃げ出すエブチ隊とサトシとシュウ。

ロケット団下っ端G「あ！シラヌイ博士！逃げました」

シラヌイ「追うんだ、お前達！」

そう言つてシラヌイは、部下を率いてサトシ達を追いかける。

ナンバ「待つて！」

そう言つてナンバもそれを見てナカオタイとコサブロウと部下数名  
を率いて追いかける。

ロケット団下っ端H「ルビーを返せ！エブチ隊」

ロボットA「お前達が言える台詞か！それ！」

そう言い返して走り続けるエブチ隊とサトシとシュウ。

その時だった。

トガーーーーー

突然、光の塊がエブチ隊とサトシとシュウの目の前をスレスレに通  
つていった。

サトシ「一体なんなんだ！」

そう言つて突然ダンプカー並みの大きい車がやって来た。

シュウ「お前達は、一体誰だ！」

そう叫んだシュウ。

はたして、一体この車に乗っているのは、誰だ？

続く

## 第64話 内部騒動（後書き）

手柄を横取りするためルビーをシラヌイから奪いに来たナンバ。そしてさらに手柄を横取りしようとした人達があった。その人物とは一体……



## 第65話 タブンネ砲と拘束

突然、サトシ達の目の前に現れた謎の車・・・

ロボットA「なんなんだ、これ！」

その時だった。

「？？」「『なんなんだ、これ！』聞かれたら」

「？？」「答えてあげよう明日のため」

「？？」「フューチャー、白い未来は悪の色」

「？？」「ユニバース、黒い世界に正義の鉄槌」

「？？」「我らこの地にその名を記す」

「？？」「情熱の破壊者、ムサシ」

「？？」「暗黒の純情、コジロウ」

「？？」「無限の知性、ニヤース」

ムサシ・コジロウ・ニヤース「さあ集え！ロケット団の名の下に」

サトシ達の前に現れたのは、いつもの三人組　ムサシ、コジロ

ウ、ニヤースであった。

コサブロウ「また、お前達か！ムサシ！コジロウ！」

ナカオタイ「何しに来たんだ！」

ムサシ「もちろん、ルビーを奪いに来たのさ」

コジロウ「このタブンネ砲でな」

サトシ「タブンネ砲だと！」

そう言うサトシ。するとそこへゼーゲルが出て来る。

ナンバ「ゼーゲル、なんじゃ、この兵器は！」

ゼーゲル「この兵器　タブンネ砲は、タブンネにはいろいろなた技を覚えられるポケモンじゃ。イツシュ地方のポケモンをぬこそぎ持つて来て実験しタブンネがとても適任して作ったんじゃ」

シュウ「それじゃあ、あの森の周辺にいたイツシュ地方のポケモンは・・・」



そう言つてサトシとシユウは、仕方がなくこの場を引いていった。  
コジロウ「ゼーゲル博士。やつらが逃げました」

ゼーゲル「追うんじゃ！」

ムサシ「はっ！」

そう言つてムサシ、コジロウ、ニヤース、ゼーゲルは、サトシ達を  
追い始めた。

ナンバ「コサンジ、ナカオタイ。ゼーゲルがやつらを追い始めたぞ。  
ワシらも行くぞ！」

コサブロウ「コサブロウです！ナンカイ博士」

ナンバ「ナンバじゃ」

そう言いながらナンバたちもサトシ達を追いかける。

ロケット団下っ端A「シラヌイ博士！やつらが逃げました。追いま  
すか？」

シラヌイ「心配するな、手は、打った」

そう言つてシラヌイは、サトシ達が逃げた方角を見て笑う。

一方、サトシとシユウを助けに来たカスミとハルカは、道に迷つて  
いた。

カスミ「ここは、どこなのよ！」

ハルカ「なんか、複雑な道ばかりかも」

そう言つてピカチュウ、ミジュマル、ロズレイドを先頭に歩いてい  
た。そんな時彼女達を見守る人物が二人いた。

「あの少女達は、確かあの少年達の連れだったな」

「これはこれは、あの少年達を封じる手として使えるな」

「そうだが、どうやってあの少女達を捕まえるんだ？」

「なに、方法がある。これを使えばあの少女達を捕まえて  
ついでにポケモンも捕まえられる寸法さ」

「なら、実行しよう」

そう言つて謎の影がカスミ、ハルカより先回りし始める。

カスミ「ハルカ、さっきから思い始めたんだけどなんか、静だと思

わない？」

ハルカ「私も思ってたところよ。なんか不気味かも」

カスミとハルカは、静かな周辺にそう思った。実は、ロケット団の下っ端達は、サトシとシユウとエブチ隊を追うため下っ端達は、ほとんどそつちに借り出されていて廊下には、ほとんどいなくなっていたのであった。

ただし、怪しい影の二人組みを除いては・・・

???「準備は、いいな」

???「はい！」

???「それじゃあ、作戦開始！」

そう言つて怪しい影は、イトマルを放ちカスミとハルカの口に向かつていとをはくを繰り出すよう命じた。そして、イトマルの糸は、口に当たる。

カスミ・ハルカ「!!!!!!!!!!?」

カスミとハルカは、何が起きたかさっぱりわからなかった。

???「よし、次だ！」

そう言つて怪しい人物が繰り出したのは、虫ポケモンであった。

カスミ「!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

カスミは、口がふさがれているため、何を言ったのかわからないが「虫!!!!!!!!!!」と言っているようだった。そして、カスミは、耐え切れず気絶してしまふ。

ハルカ「ンンン!!!」

ハルカは、「カスミ!!!」と叫んだ。

???「次だ！」

そう言つて怪しい人物が次に繰り出したのは・・・

ハルカ「!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

このぬべぬべした触感・・・そうメノクラゲの触感がハルカに触れる。実は、ハルカは、昔のトラウマでメノクラゲがものすごくダメである。そのため、ハルカは、カスミ同様混乱する。

そして、ハルカは、カスミ同様気絶してしまふ。

すると、何かの異変に気づいたピカチュウとロズレイドとミジユマルは、後ろを向くとカスミとハルカが倒れている姿が目に入った。そして、二人に近づこうとしたその時！

???「おっと！動くな！これ以上近づいたらこの娘の命はないぜ」  
怪しい人物がようやく出てきてカスミとハルカの首に刀を突きつけていた。

???「この娘を助けたければ技を出さず大人しくしろ」

そう言われてピカチュウとロズレイドとミジユマルは、攻撃できず怪しい人物の要求を呑み大人しくした。そして三匹を檻の中へ入れそしてカスミとハルカの手と足を拘束する。

???「うまくいきましたね。兄貴」

???「それじゃあ、さっそく。シラヌイ博士に報告しなければ」

そう言つて二人は、このことをシラヌイに報告をする。はたして、

シラヌイは、一体、カスミとハルカ、そしてピカチュウ達を拘束して何を企んでいるのか？

## 第65話 タブンネ砲と拘束（後書き）

次回、シラヌイのこの捕まえた二人を使ってとんでもない作戦を決定する。

## 第66話 人質と真実（前書き）

一部残酷的シーンがありますのでお気つけてください。

## 第66話 人質と真実

カスミとハルカが捕まってしまった頃、タブンネ砲とナンバから逃げたエブチ隊とサトシとシユウは、疲れを見せていた。さすがに走りつばなしじゃ疲れるのも無理はなかった。

ロボットA「くそ！このままだと、いつかは捕まっちゃうぜ」

ロボットB「緊急避難のために放った弾も残りわずかだし・・・」

ロボットC「どうしますか？」

そう言つて考え込むエブチ隊。

シユウ「あの、ここは、1つ別れて逃げてみたらどうですか？ロケット団は、どうやらそのルビーを欲しがっているみたいですし、偽者をエブチ隊に本物をを僕たちがやります」

ロボットD「そうだな、ここは1つ、この方法でやってみるか！」

ロボットB「これなら、サトシ君たちを危険な目に遭わせる心配はないし、こういう役は俺達が適任だからな」

ロボットE「よし、やってやるぜ！」

ロボットA「それじゃあ、行くぞ！」

エブチ隊B「E」「おーーーーー！！！！」

そう言つてエブチ隊が偽者のルビーを持って廊下にいたロケット団に向かつて・・・

ロボットE「やいやい！ロケット団ども！ルビーは、こつちだぞ」

ロボットB「悔しかつたら奪ってみろ！」

ロケット団に挑発的な行為を見せてそして、逃げ始める。

ロケット団下っ端A「おい！エブチ隊があっちへ逃げたぞ」

ロケット団下っ端B「ルビーは、あいつらが持っているぞ！」

下っ端達がそう言つたとゼーゲルとナンバが反応した。

ゼーゲル「ムサシ、コジロウ、方向転換だ！ルビーは、あいつらが持っている！ナンバより早くルビーを奪うんじゃ！」

ムサシ・コジロウ「了解！」



そう言つてタブン砲は、方向転換してエブチ隊を追いかける。

ナンバ「エブチ隊が持っているんじゃない。ナカオタイ、ヤマトとカミオタイ、シモオタイを呼んでやつらを追つよう命じるのじゃ!」

ナカオタイ「了解しました!!!」

そう言つてナカオタイは、無線で連絡してヤマトとカミオタイ、シモオタイに合流するよう命じる。

ナンバ「ワシらは、先行するぞ。行くぞ、コサンジ!」

コサブロウ「コサブロウですよ。トナカイ博士」

ナンバ「ナンバじゃ。いい加減に覺えた前!!!!!!」

そう言つてコサブロウとナンバもゼーゲル同様エブチ隊を追いかける。

ロボットC「来たぞ!」

ロボットA「とにかく、これを持って急いでエブチ博士の元へ行くんだ!!!!!!」

ロボットE「エブチ博士のもとへ逃げ込めばこっちのものだ」

ロボットD「それまで持ちこたえるんだ!」

そう言い聞かせながら走つて逃げていくエブチ隊であつた。

それから10分後。

エブチ隊を追つたためロケット団員は、全て出払い基地内は、静まっていた。

サトシ「エブチ隊がうまく逃げていったかな?」

シュウ「大丈夫だろう。エブチ博士が作ったロボットだ!ちよつとやさつとじゃ捕まらないと思うよ」

サトシ「そうだな。よし、俺達も早くここから脱出してエブチ隊と合流しようぜ」

シュウ「そうだな」

そう言つてサトシとシュウが本物のルビーを持ってロケット団の基地を脱出しようと歩き始めようとしたときだつた。

????「そうは、行かないよ。君達!」

そう言つてサトシ達の前に現れたのは、シラヌイ達だった。

シラヌイ「私があんな罠に引つかかるとでも思ったのかい？ 甘いね。ケーキ同様甘すぎだよ君達は。それにしても君に、私のプロジエクトを邪魔されたのは、いかりのみずうみ以来だね」

サトシ「シラヌイ！」

シユウ「知っているのかい、サトシ？」

サトシ「ああ。あいつは以前、いかりのみずうみでポケモンを強制的に進化させようとした奴らの首謀者だ！」

シユウ「いかりのみずうみって赤いギャラドスのことか。そういえば、そんなニユースをあつたね」

シユウは、何らかの方法でサトシ達が巻き込まれたいかりのみずうみでの事件は知っていたようだ。

シラヌイ「わたしの事を覚えていたとは、君はなかなかの記憶力だ」  
サトシ「ふん、お前達見たいにポケモンに酷いことをする悪い奴らは嫌でも覚えるぜ」

そう言つてサトシはシラヌイ博士を睨み返す。

シラヌイ「しかし、以前みたいに邪魔をされては困るのでね。バシヨウ、ブソン。相手をしてやりなさい」

バシヨウ・ブソン「はっ！」

シラヌイはバシヨウとブソンにサトシとシユウの足止めを指示して、自分は高見の見物という態度をとった。

バシヨウ「また、あなた達ですか」

ブソン「もう一回痛い目を見ないと分からないようだな。ヒーローボーイ」

サトシ「今度は負けないぜ！」

シユウ「臨むところだ！」

そう言つとサトシとシユウは、ボールに手をかける。

サトシ「ツタージャ、君に決めた！」

シユウ「フライゴン、頼んだ！」

バシヨウ「ハガネール、目にものをみせてやりなさい。」

ブソン「オンドリル、お前もだ。」

サトシとケンタ、バシヨウとブソンによるバトルの火ぶたが切つて落とされた。

サトシ「ツタージャ、ハガネールにリーフブレード！」

ツタージャがハガネールに向かってリーフブレードを繰り出す。

ブソン「オンドリル、エアーカッター」

オンドリルがエアーカッターを繰り出しツタージャに向かって来る。この至近距離では、避けるすべがなく当たれば効果抜群の絶対絶命のとき。

シュウ「フライゴン、りゅうのいぶきでツタージャを援護しろ！」

フライゴンは、りゅうのいぶきを繰り出しエアーカッターを防ぎ、

ツタージャはダメージを受けずに済んだ。

サトシ「サンキュー、シュウ」

シュウ「気を抜くな、サトシ」

サトシ「ああ」

ツタージャとフライゴンは体勢を立て直す。

バシヨウ「ハガネール、フライゴンにがんせきふうじ。」

がんせきふうじとは、たまに外れる技で威力もそこそこだが、当たれば相手のすばやさを下げる事が出来る技である。

シュウ「フライゴン、避けるんだ」

フライゴンは、空へ飛んだしたことにより、がんせきふうじは外れてしまった。だが、フライゴンの目の前にはオンドリルがいた。

ブソン「ふん、避けたことが仇になったようだな。この至近距離からじゃあ、避けられないぜ」

ブソンはシュウを鼻で笑うように言った。

シュウ「誰が避けるって言った。」

ブソン「どついうことだ？」

シュウ「こういうことだ。サトシ、今だ！」

サトシ「ツタージャ、オンドリルに向かってメロメロ！」

ツタージャは、メロメロを繰り出してそのままオンドリルに命中し

メモメロとなる。これでフライゴンとハガネールの1対1となる。  
シュウ「フライゴン、ドラゴンダイブ！」

フライゴンがドラゴンダイブを繰り出してそのままハガネールに命中する。

シラヌイ「（押されているか。このままでは、負けるな。なら・・・）」

シラヌイは、無線を使い誰かを呼び出した。

サトシ・シュウ「行くぜ（よ）、止めの」

サトシとシュウが止めの一撃をッタージャとフライゴンに指示しようとした時。

シラヌイ「おっと、これ以上攻撃したらこの子達がどなっても知らないよ」

シラヌイの言葉がわからなかったサトシとシュウだがシラヌイが指を鳴らして出来た人物を見てシラヌイが言った言葉を理解した。

サトシ「カスミ！ピカチュウ！ミジュマル！」

シュウ「ハルカ！ロズレイド！」

そこには、縛られて口もふさがれていたカスミとハルカと檻の中でリングにはめられていたピカチュウとミジュマルとロズレイドの姿があった。しかも、カスミとハルカの首元には、刀が突き刺さっていた。

シラヌイ「ご苦労であつたお前達。後は、下っ端がやるから下がっている」

????????「ははっ」

そう言つてカスミ達を捕まえた人物は、下がっていった。

シラヌイ「さて、さっきも言ったがそのまま攻撃を続けるとこの子達の首が飛ぶぞ。飛ばしたくなければそのルビー置いてポケモンを大人しくさせる」

そう言われてサトシとシュウは、ルビーを置いてポケモンを大人しくさせた。

シラヌイ「それでよいそれで」

そして下つ端がルビーを持ってくる。

シラヌイ「これで、ルビーは、再び私の手に戻った。さて、この二人これ以上我々の邪魔が出来ないよう痛い目にあわせてやれ」

カスミ・ハルカ「!!!!!!」

その言葉を聞いて驚くカスミとハルカ。

シラヌイ「抵抗するな。こいつらの命がなくなるぞ」

そういわれて手も足も出ないサトシとシュウ。

ロケット団下つ端A「おりゃ！」

一人の下つ端がパイプをサトシに振り下ろす。カスミ達が人質に取られている以上抵抗も出来なかった。そして次々と下つ端達がサトシとシュウをけりやハイプで殴るなどで痛めつける。

カスミ・ハルカ「ンンンン!!!」

二人は、必死で何かを訴えるが口が塞がれていてわからないが「やめて」と言っているようだ。

シラヌイ「愉快じゃ愉快じゃ」

シラヌイは、笑いながらそう言った。

痛めつけられたサトシとシュウは、体中痛くしかも頭から血が流れていた。

このままだとサトシとシュウは、大量出血で死の危険があった。その時だった。

トルトルトルトルトル

突如、シラヌイのケータイに一本の電話が入る。

シラヌイ「はい、もしもし。シラヌイだが」

シラヌイは、いいムードの中で突如の電話に不機嫌でとった。???「君は、この私にそのような態度で電話するのかね」

シラヌイ「これは！筆頭様！」

シラヌイに電話をかけてきたのは、ロケット団の筆頭と呼ばれる人からであった。

筆頭「まあ、よい。そこにいる少年を速やかに解放するんだ」

筆頭の思わぬ発言にシラヌイは、驚きを隠せなかった。

シラヌイ「解放つて！筆頭様、彼は、ロケット団の計画を次々と潰す危険人物ですよ。生かしておくなと・・・」

筆頭「君が知らないのも無理はないか。実は、その少年は・・・」  
筆頭は、少年のことについて全て話した。それを聞いてシラヌイの顔が真っ青になる。

シラヌイ「それは、まことですか!？」

筆頭「私が嘘はつかんよ。とにかく、その少年を万が一、殺せば君の首が吹っ飛ぶことになる。傷つけた時点で責任ものだが、今回は、知らなかったということで大目に見よう。繰り返していうがすぐさまその少年とその仲間を解放するんだ。よいな」

そう言った時だった。ピカチュウがこの隙にアイアンテールを繰り出して檻をぶち壊しロズレイドがマジカルリーフでカスミとハルカを助けそして、ミジュマルがアクアジェットを繰り出してルビーを奪え返す。そしてツタージャがりーフストームでロケット団下つ端達を退けてフライゴンがその隙にカスミとハルカを乗せて二人は、サトシとシユウの腕を持ち乗せてルビーとともに逃げていった。

シラヌイ「しまった!」

筆頭「どうしたんだい?」

シラヌイ「ルビーが例の少年とその仲間達によって奪い返されました」

筆頭「もうよい。君たちは、帰還せよ」

シラヌイ「何故ですか!？」

筆頭「今回の件は、ともかく少年を傷つけたのは、間違いない。その責任を持って帰還せよ。私の命令は、サカキ様の命令であるぞ。わかったな」

シラヌイ「了解しました・・・」

そう言つて電話を切るシラヌイ。

シラヌイ「全軍、引き上げするぞ」

ブソン「何故ですかシラヌイ博士!？」

シラヌイ「しかたがあるまい、筆頭様のご命令だ。それに・・・」

バシヨウ「それに？」

シラヌイ「なんでもない。いいから言うとおりに引き上げるんだ」  
そう言つてシラヌイ一行は、ロケット団本部へ事実上強制帰還させられた。その後ブソンとバシヨウが筆頭から聞かされた話をシラヌイから聞いて驚いたのは言うまでもない。

一方その頃、カスミとハルカは、血だらけのサトシとシュウを見ていた。

カスミ「ハルカ」「……………」

サトシ「ん？どうしたんだ、2人とも」

カスミとハルカの返事がないので、サトシとシュウは首を傾げる。すると突然、カスミはサトシに、ハルカはシュウに抱き付いた。

シュウ「お、おい。一体どうしたんだいいきなり！」

突然のことに2人は慌てる。

カスミ「…………グス、だつて…………あのまま、サトシが…………（泣）

ハルカ「…………シュウが痛い目に遭つたのは…………私達の…………（泣）

「…………どうやら、二人ともサトシとシュウに痛い目に合わされたのは自分たちのせいだと思ひ込んでいるようだ。」

サトシ「そんなことはないぜカスミ」

シュウ「きれいな君にもし女子に怪我でもさせたらいけないから」

二人は、カスミとハルカに優しくそう言いながら2人の頭を撫でる。

カスミ「ホントにありがとうサトシ」

ハルカ「何かお返しをしたい気分かも」

カスミとハルカは涙を拭つて、サトシとシュウに改めて感謝の意を口にした。

サトシ「いって、お礼なんか。」

シュウ「2人が無事だったらそれで……………」

シュウが言いかけたのを遮るようにカスミはサトシの右横に、ハル





## 第66話 人質と真実（後書き）

今回は、エプチ博士達がサトシ達を助けに行った頃の話です。

第67話 エプチ連合軍対ナンバ率いるロケット団（前書き）

サトシ達を探しに行ったB・Cグループに、お馴染みのアイツらが襲い掛かる！？

## 第67話 エブチ連合軍対ナンバ率いるロケット団

今回の騒動がロケット団仕業である事を知りサトシ達に連絡しようとしたが電波干渉の影響で連絡できずBグループのデント達とCグループのエブチ達は、サトシ達Aグループを搜索して近くのポケモンセンターで休憩をしていた時にジケルとAグループのエブチ隊5名と合流し、さらに偽者のルビーを持って囹役をしていたエブチ隊5名も合流している。のだが・・・

ヤマト「アンタ達そこでおとなしくしてもらおうよ」

コサンジ「さつきはよくもやってくれたな。って、作者。俺はコサブロウだって言ってるんだろ！」

ごめんねごめんね

コサブロウ「U 工事のネタで謝るな！」

はいはい。それはさておき、今デント達、シゲル、エブチ、そしてエブチ隊はロケット団に身動きを封じられている。ロケット団側には、ヤマト、コサン・・・じゃなくてコサブロウの他、○山線トリオ、その他ロケット団員、さらには何故かナンバ博士が勝ち誇った姿もある。どうしてこのような状況に陥ったのか？それは、話は遡ること数時間前こと・・・

### 回想シーン

ロボットA「見つかりませんね、博士」

エブチ「ユガシマの森は、トキワの森並みだからな。探索機が電波干渉で使えない以上いつものようにそう簡単には見つからないな」  
デント「しかし、この森にロケット団は何しに来たんでしょうね」  
アヤノ「それに、デント君達が見つけたルビーも気になるわ」

エブチ「どっちにしろ、何かを企んでいるはわかっている。とりあえず、このポケモンセンターで休憩しながらサトシ君達とロケット

団のことについて対策を練らないと」

ケンジ「そうですね」

ロボットB「でも、あいつらどこまで行ったんだろう?」

完全にサトシ達の捜索に手詰まりポケモンセンターで休憩をとっていた彼らのもとに、Aグループに付き添っていたエブチ隊3名が血相を変えてこのポケモンセンターにやって来た。

ロボットC「お前達、一体どうしたんだ!」

アヤノ「そんなに慌てて、何かあったんですか!??」

エブチ隊の一人とアヤノが聞くと・・・

ロボットD「実は、サト・・・」

ロボットE「サイド・・・」

ロボットF「落ちてしまい・・・」

エブチ「おい!お前達。い、いつぺんに話さないでくれ。聖徳太子じゃあないんだから。一人ずつ落ち着いて話せ」

エブチ隊3名は今自分達が置かれた状況を説明しようとするが、慌てているため何を言っているのか分からない。エブチが何とか隊員3名をおちつかせようとする。しばらくして、隊員3名が落ち着きシゲルと残りのエブチ隊の隊員も戻ってきたので、サイド達の襲撃でサトシ、カスミ、シユウ、ハルカ、エブチ隊の隊員5名とはぐれたことを説明した。

コトネ「そ、そんな。サトシ達が・・・」

サトシ達の安否が心配になった面々。

シゲル「・・・僕のせいだ。あれだけ無茶をするなど言っておきながら、サトシ達を危険な目にあわせてるのは僕じゃないか」

シゲルはサトシ達を危険な目に遭わせたことを悔やむ。

デント「シゲル。君の気持ちも分かるけど、今はサトシ達を信じることが大事なんじゃないかな」

シゲル「えっ?」

タケシ「デントの言うとおりだ。サトシ達ならきつと大丈夫だ」

アイリス「アタシ達との旅でもしよっちゅう危険な目に遭って、乗

り越えてきたんだもの」

ヒカリ「それにサトシの幼馴染のあなたがサトシを信じなくてどうするのよ」

デント、タケシ、アイリス、ヒカリが落ち込んでいるシゲルを励ますように言う。

シゲル「・・・そうだね、あのサトシだ。きっと無事に帰ってくる。みんな心配かけてごめん」

アヤノ「謝らなくていいのよ。それより今私達はこの状況下で出来ることをやり遂げましょう」

シゲルが立ち直ったところで、次の行動に出ようとした時だった。

ロボットG「エブチ博士」

大きい声でエブチを呼んだのは、サトシたちとはぐれたAグループのエブチ隊の隊員だった。

エブチ「無事だったか！それで、何があったんだ？」

ロボットG「実は、コレコレシカジカでして」

隊員は、サトシとシユウがブソン、バジヨウに捕まりサトシとシユウを助けた、ついでにルビーを持って逃げようとしたらシラヌイ、ナンバ、ゼーゲルに見つかり攻撃しながら逃げに行ったが弾が底をつき始めた。するとシユウの提案で本物と偽者のルビーを持ち偽者をエブチ隊が持つてここまで逃げてきたことを話す。

アイリス「そんなことが・・・」

ロボットH「そうなんだ。ここまで逃げるのに疲れたよ」

ロボットA「それにしてもよくここがわかったな？」

ロボットG「それは、このポケモンセンターの入り口にエブチ隊の旗があったから・・・」

そうエブチ隊隊員がそう言ったその時！

ガシャ！ガシャ！ガシャ！

ポケモンセンター内にいたタケシ、デント、アイリス、ヒカリ達はもちろんエブチ隊数十名とエブチ、さらにジョーイさんと休憩をしていたトレーナーまで無数のリングが身動きを封じた。

タケシ「一体、なんなんだ!？」  
タケシが驚きの言葉を発したその時。  
「???」『一体、なんなんだ!?!』との声がある  
「???」「ジャイロボールのようにやって来た」  
「???」「スターよ」  
「???」「ムーンよ」  
「???」「スペースよ。」  
「???」「銀河に届けよジャースティス」  
「???」「宇宙に届けよギールティ」  
「???」「天国か地獄かその名を呼べば」  
「???」「誰もがシャキーンと背筋を正す」  
ヤマト「ヤマト!」  
コサブロウ「コサブロウ!」  
ツポツポ「ポツポツ!」  
ヤマト「本当の主演はあたしたち」  
コサブロウ「我ら正統派の」  
ヤマト・コサブロウ「ロケット団!」  
そう、ヤマトとコサン・・・じゃなくてコサブロウと、  
「???」『一体、なんなんだ!?!』と声がある  
「???」「地平線の彼方から」  
「???」「ブラックホールの彼方から」  
「???」「我らを呼んでる声がある」  
「???」「お待たせませ!」  
「???」「健気に咲いたバラの花」  
「???」「お茶目でスイートな敵役」  
カミオタイ「カミオタイ!」  
ナカオタイ「ナカオタイ!」  
シモオタイ「シモオタイ!」  
カミオタイ「時代に主演は俺達」  
シモオタイ「我ら無敵の」

山線「……ロケット団！って、作者。○山線で済ますなあああ（怒）……」

○じゃなくてカミオタイ、ナカオタイ、シモオタイの3人が捕えられている者たちの前に現れた。

コサブロウ「おい、○山線トリオ。俺たちとカブるなよ！」

ナカオタイ「○山線トリオなんて、言うな！そっちこそ俺達とカブるなよ！コサンジ！」

コサブロウ「コサブロウだって言ったいるだろう！口上を変えて登場するとは……」

ナカオタイ「そっちだって口上を変えて登場したじゃないか！」

ヤマト「ちよつと、今は仲間割れなんかしてる場合じゃないでしょ」  
カミオタイ「そうだぞ。今回は俺たちの上司・トウキョウ博士もいらっしやるのだからな。」

ナンバ「ナンバじゃ！」

名前を間違えたカミオタイを一喝するナンバ博士。

ナンバ「それより、久しぶりだなエブチ。今日こそ、お前を叩き潰してやる！」

エブチ「アハ？」

ナンバ「欧米か！ふざけやがって、捕まった自覚を持ちやがれ！」

エブチ「あたいを捕まえてどうするき？」

ナンバ「女子か！おまえ、オネエか！」

エブチ「ナンバ君、コピー頼む」

ナンバ「上司か！いい加減にしるよお前」

エブチがボケてナンバがツツコムと何故か漫才を楽しくやる。

ロボットA「あゝ、エブチ博士」

ロケット団下っ端A「ナンバ博士」

ロボットA・ロケット団下っ端A「何タカア ドトシのネタで漫才してるんですか！」

隊員と下っ端から思わずエブチとナンバにツツコム。

アイリス「それは、言いとしてアンタ達！アタシ達を捕まえてどう

するつもりよ！」  
コサブロウ「決まってるだろ。お前達にうるついてもらうと困るの  
でね」  
ポケモンセンター内にいるデント達とエブチ隊を始めジョーイや休  
息中の人たちまでも拘束して、任務を遂行しようとするナンバ一味。  
なぜナンバ博士もいるのかは、ヤマトとコサブロウ、○山線トリオ  
をはじめとする部下達の度重なる失態を見かねたからである。そん  
なこんなで、現在に至る。

回想シーン終了

シモオタイ「さてと、まずは手始めにポケモンセンターのポケモン  
達を頂くとしますか」

ジョーイ「やめてください。ここには怪我や病気のポケモン達もい  
るのです」

ナカオタイ「黙れ！ そんなこと、我らロケット団の知ったこつち  
やないわ」

カミオタイ「お前達、ポケモンセンターにあるポケモンを全て頂  
くだ！」

ロケット団下っ端A・B・C「アイアイサー！」

そう言つて下っ端達がポケモンを頂くためセンターの奥へ行こうと  
する。

ジョーイ「やめてください！」

そうジョーイが叫ぶ。

シゲル「待ってロケット団！」

ヒカリ「センターにいるポケモンたちは、渡さないわ！」

シゲルとヒカリが縛られながらも立ち上がり、センターにいるポケ  
モン達をロケット団員たちの魔の手から守ろうとする。

ロケット団下っ端B「邪魔するな！」

下っ端の一人が刀を抜きそのままヒカリへ斬りつけようとする。



シゲル「危ない、ヒカリ！」

シゲルがヒカリをかばいシゲルの肩を斬られてそこから出血する。  
ヒカリ「シゲル！アタシの代わって斬られて……」

シゲル「いいんだ。君が無事ならこんなケガ……」

ヤストシ「かつこいいこと言うね、シゲル。（でも、シゲルがあんな行動するなんて、まさかシゲル、ヒカリのことが……）」

ヤストシは、心の中でそう思ったがそれは、正解である。シゲルは、ヒカリに好意を前々から抱いていた。

ヤマト「あたし達にたて突かなきゃあ、こんな目に遭わないのになえ」

コサブロウ「素直に言うことを聞かないと、今みたいに痛い目に遭うぜ」

ヤマトとコサブロウがポケモンセンター内にいる者達を脅す。

ナンバ「それと、エブチ隊。そのルビーを渡してもらおうか？」

ナンバがエブチ隊の隊員が持っていたルビー（正確には偽者）を要求する。

ヤマト「渡さないと……」

そうヤマトが言うと後ろにいたロケット団の下っ端2名が刀を抜きベルとコトネの首元に突きつける。

カミオタイ「この子達の顔に傷を作ることになるぞ！」

そうエブチ隊に脅しながら言うカミオタイ。

エブチ「わかった。おい、ルビーを渡してやれ」

ロボットC「了解いたしました」

エブチは偽ルビーをナンバ達に渡す。

ナンバ「これで、ルビーは我々の元に」

ナカオタイ「これで、俺達の手柄だ！」

コサブロウ「それにポケモンセンターにいるポケモンもゲットできたようだし」

シモオタイ「よし、その盛ってきたもんスターボールの袋を持って退散しますか」

そう喜びながらシモオタイがポケモンセンターに預けられていたポケモンのモンスターボールを入れた袋を持つとうとした瞬間だった。

ロケット団下っ端A「ん？な、なんだこれは！？」

ロケット団下っ端B「体が浮いている！？」

突然、ポケモンセンターに預けられていたポケモンのモンスターボールを入れた袋を持ってきたロケット団下っ端3人の体が宙に浮いた。そして……

ロケット団下っ端A・B・C「くくくあ〜れ〜。」「」「」

ポケモンセンターの天井を突き破って、空の彼方へと飛ばされていた。

ナンバ「い、今のはなんだったんじゃ！？」

ナンバ博士達は驚きの表情を見せ、辺りを見回す。すると、コサブロウが何かに気づき、ヤマトの肩をつついた。

ヤマト「なによ、コサンジ」

コサブロウ「コサブロウだ。じゃなくて、あれを見るよ」

ヤマト「ん？あれってエブチ博士の助手のアヤノと言う美人じゃないか！」

コサブロウ「よく見てみる。おかしいだろ、エブチの助手も俺たちが一緒に捕まえたはずだ。なぜ、平然と立っている」

ナカオタイ「なんだと！どういうことだ！」

ヤマト、コサブロウ、○山線トリオ、ナンバ博士はわけがわからずにいた。

アヤノ「驚いているようね。実は、私はサイキッカーなの」

そうアヤノが答える。本当は、サイキッカーでないがアヤノはセレビの化身。人間の姿のままですぱり系の技が使えることはできる。しかし、自分がセレビの化身だとバレずに済む方法は、エスパーを使える人間　サイキッカーなら誤魔化すことが可能である。カミオタイ「マジかよ！？」

そう言った時カミオタイが持っていたルビーが落ちて割れた。

シモオタイ「あ！ルビーが……ってこれ偽物だ！」  
ようやく、このルビーが偽物だと気づく。

ロボットG「残念でした。本物は、サトシ君達が持っているんだよ」

ロボットH「ざまあ、見やがれ」

そうエブチ隊隊員がそう言った。

アヤノ「さてと、ロケット団覚悟しなさい！」

そう言っただけでアヤノことセレビィはにっこりとした笑顔を引っ込め、睨み付けるように自らの技サイコネシスを繰り出した。

コサブロウ「なあ、やっぱりこれっ……」

シモ「ああ、いつもの……」

ナカ「お約束だな……」

アヤノのサイコネシスは、ヤマト、コサブロウ、○山線トリオ、ナンバ博士に向けて発射した。当然、彼らは避けることが出来ずに直撃、空の彼方へと吹っ飛ばされていった。

ヤマト・コサブロウ「やな気持ち」

○山線トリオ「やな気分」

ナンバ「おのれ、覚えておれ！」

キラーン

捨て台詞を吐きながら、彼らは星になった（笑）

ベル「助かったわ、アヤノさん」

ケンジ「ホントありがとう、アヤノさん」

アヤノ「そんなことないわよ」

アヤノはケンジ達やジョーイ、ポケモンセンターの客を縛っていたリングをサイコネシスで破壊し、ベルとケンジから感謝される。

アヤノは照れくさそうな反応を見せる。

ジョーイ「すごいわね、アヤノさんって」

エブチ「彼女は、こういう場面でやってくれる女ですから」

エブチがジョーイにそう言った。

デント「和んでいるところ悪いけど、これからどうする？」

デントの言葉にみんな真剣な眼差しになる。

コトネ「とりあえず、サトシ、シユウ、カスミン、ハルカンの無事を確認するのが先ってことね」

タケシ「そうだな。サトシ達なら大丈夫だとは思うが」

ロボットB「とりあえず、探しに行こう」

そうエブチ隊の隊員が言った時、ポケモンセンターの自動ドアが突然開いて……

全員「カスミ、ハルカ！」

ロボットA「無事だったか」

アイリス「それより、サトシとシユウは？」

そうアイリスがたずねるがカスミとハルカが血相を変えて、慌てるようだった。

カスミ「み、みんな大変よ。サトシが……！」

ハルカ「シユウが……！」

ケンジ「と、とりあえず落ち着いて！」

一体、サトシとシユウに何があったのか！？

第67話 エプチ連合軍対ナンバ率いるロケット団（後書き）

一体、サトシとシユウに何があつたのか！？

**第68話 災難が悲劇を生む（前書き）**

サトシたちのアジトを脱出の様子をお送りします。



「????」『一体何なんだ!』と聞かれたら

「????」答えてあげよう明日のため」

「????」フューチャー、白い未来は悪の色」

「????」ユニバース、黒い世界に正義の鉄槌」

「????」我らこの地にその名を記す」

ムサシ「情熱の破壊者、ムサシ」

コジロウ「暗黒の純情、コジロウ」

ニヤース「無限の知性、ニヤース」

ムサシ・コジロウ・ニヤース「「さあ集え! ロケット団の名の下に」」

なんと、現れたのは、エブチ隊を追ってたはずのゼーゲル率いるムサシ、コジロウ、ニヤースであった。

ハルカ「なんで、あんた達がここにいるのよ」

カスミ「エブチ隊を追ってたはずじゃなかったの?」

そうたずねると・・・

ゼーゲル「確かにそうだが、どうもエブチ隊の様子がおかしいしシラヌイが何故か追ってこなかったからこっちは来たんだ。どうやらそれが本物のルビーようだな」

サトシ「絶対にルビーは、お前達に渡してたまるものか!」

そうゼーゲルに言うサトシ。

ゼーゲル「(この少年が筆頭様が言っていた少年か・・・)」

心の中でつぶやくゼーゲル。どうやら、少年のことで何かを知っているようだ。

ゼーゲル「しょうがない。なるべく傷つけないが仕方がない。

ムサシ、コジロウ、マシンを起動してルビーを奪うんだ!」

ゼーゲルは、タブンネ砲を起動させる。

ムサシ「いつでも、発射OKです。ゼーゲル博士」

ゼーゲル「そうか。なら、あのフライゴンに向けてタブンネ砲発射!」

ムサシは、タブンネ砲を発射ボタンを押した。今度は、光でなく電



気を練り出しフライゴンにあたる。しかし、地面タイプを持つフライゴンには、効果はない。

コジロウ「電気よ・・・」

ニヤース「電気じゃあ、フライゴンに効かないニヤ」

ゼーゲル「何の技が出るかわからないこれがタブンネ砲の弱点じゃからな」

そうゼーゲルが言う。その言葉は、サトシ達のところにも聞こえた。ハルカ「何の技が出るかわからない・・・」

サトシ「まるで、ゆびをふるみたいだな」

カスミ「しかし、これはこれで恐ろしい兵器だわ」

シユウ「タブンネは、ノーマルだから多種多様の技を覚えることができる。厄介だな」

サトシ「とにかく、あの荷台にいるタブンネ達を助ければただのくず鉄だ」

そう言うて、サトシが荷台に向かって走って行った。

ゼーゲル「あの少年を荷台に近づける出ないぞ」

ムサシ「了解。コロモリ、エアスラッシュュ！」

コロモリは、サトシの足元めがけてエアスラッシュュを練り出し足を止める。

ムサシ「タブンネ砲、エネルギー満タンになりました！」

ゼーゲル「よし、今度こそ、フライゴンを倒すのじゃ、タブンネ砲発射！」

タブンネ砲は、発射して練り出してきたのは・・・

ハルカ「ふぶき！」

タブンネ砲から発射されたのは、ふぶきであった。ドラゴンタイプと地面タイプを持つフライゴンに命中すれば効果抜群で大ダメージは避けられない。

シユウ「避けるんだ、フライゴン！」

フライゴンは、ふぶきを避けようとするが間に合わず命中して戦闘不能となる。

コジロウ「タブンネ砲、恐るべし」

ムサシ「さあ、次は、どいつを狙おうかな？」

そうムサシが夢中になっている間だった。

カスミ「今、助けるからね」

なんと、カスミがゼーゲル達の間隙をついて荷台のところまで回っていた。

カスミ「ピカチュウ、アイアンテールでドアをこじ開けるのよ！」

いつの間にかサトシのピカチュウを連れてピカチュウにアイアンテールを指示する。本来、親以外の人の命令は、ポケモン達はなかなか言うことを聞かないがひたしい関係が出来ていれば言うことは聞く。ピカチュウは、サトシ以外にカスミにかなりなついていてそのためカスミの言うことも聞く。

そして、ピカチュウのアイアンテールは、見事ドアを壊して中にいたタブンネ達を助ける。

コジロウ「ゼーゲル博士！タブンネたちが逃げました！」

ゼーゲル「おのれ・・・」

そして、その隙がゼーゲル達にとって命取りとなった。

サトシ「ダンゴロ、ラスターカノン！」

シユウ「ロズレイド、ソーラービーム！」

ハルカ「エネコ、ねこのて！」

カスミ「ピカチュウ、エレキボール！」

4匹のポケモンは、技を繰り出しタブンネ砲に向けて攻撃を仕掛ける。

ゼーゲル「脱出じゃ！」

そう言うてジェット装置を付けてトラックから脱出する。

そして数十秒後、トラックに当たり爆発した。

ハルカ「逃げられたかも」

カスミ「でも、ルビーを守れたしタブンネ達も助けられただけでいいじゃない」

そうカスミが言った時だった。

ビシビシビシ

壁からヒビが入りそして・・・  
バシャアアアアアア!

辺りを見回すと所々から、水が勢いよく噴き出していた。

ハルカ「暖かいわよこの水」

カスミ「これは、温泉だわ」

そうカスミが言う。実はこのアジト、温泉の水脈だったところを口ケット団が温泉を贅沢に使えるよう建てられたものである。そして、温泉が噴き出しているのに加え、サトシ達の足元から浸水も始まっていた。そして、脱出しようと試みるサトシ達だが・・・

ハルカ「やだ!? もう水がここまで来てるわ」

水位はサトシ達の膝に浸る程度まで上昇していた。

シユウ「このままじゃ、まずいな」

未だ脱出方法が分からず立ち往生していた彼ら。するとカスミが、

カスミ「見て。あそこにハシゴがあるわよ」

アジトの奥にハシゴがあることに気づいた。

サトシ「よし、とりあえずあのハシゴの下まで行ってみようぜ」

サトシ達はルビーと先程救出に成功したタブンネ達を連れて、ハシゴのすぐ真下まで移動した。

シユウ「これで上まで行こう」

ハルカ「でもこのハシゴ、途中で切れてるわ」

脱出の術となるハシゴを見つけたものの、そのハシゴは壊れて途中で切れていた。

サトシ「それなら大丈夫だ。ベイリーフ、ツタージャ、君に決めた」

サトシはアジトの天井近くの足場にベイリーフとツタージャを出した。

カスミ「ハシゴの一番上からはベイリーフとツタージャのつるのムチで吊り上げてもらうってことね」

サトシ「そういうことだ。ベイリーフ、ツタージャ、頼んだぞ」

ベイリーフとツタージャは任せてと言わんばかりに鳴き声を出す。

サトシ「じゃあまずはカスミとハルカが先に上に行ってくれ」

サトシは女の子であるカスミとハルカを先に行かせる。

カスミ「サトシもようやく、レディーファーストをわかっているよ  
うだね」

ハルカ「それじゃあ、お言葉に甘えて」

カスミとハルカは、先にハシゴを上っていった。

カスミ「ふう〜、思ったよりきついわ。ハルカ、大丈夫？」

ハルカ「うん、こっちは大丈夫かも」

カスミとハルカはハシゴが切れるところまでたどり着いた。

サトシ「それじゃあ、ベイリーフ、ツタージャ。つるのムチで2人  
を上まで上げてくれ」

ベイリーフはカスミを、ツタージャはハルカをつるのムチで天井近  
くの足場まで上げた。

カスミ「ふう〜、やっとたどり着いたわ。ありがとう、ベイリーフ」

ハルカ「ツタージャも、ありがとうかも」

カスミとハルカは、ベイリーフとツタージャにひとまずお礼を言う。

その後、タブンネ達を全て天井近くまで引き上げた。

シュウ「カスミ〜、ハルカ〜。上はどうなってるんだ」

シュウはカスミとハルカに上の様子について尋ねる。

ハルカ「う〜ん、ただの足場かと思っただけど洞窟みたいなのがある  
けど・・・」

カスミ「よくわかんないけど、出口につながってるみたいだよ」

カスミとハルカが上った先には、洞窟が続いていた。その先にはう  
つすらではあるが光のようなものが差し込んでるように見える。

シュウ「それじゃあ、僕たちもそっちに行くから待っていてくれ」

ハルカ「分かったわかも」

シュウはそう言うと、ハシゴに足をかけ上り始めた。シュウに続い  
てサトシもハシゴを上り始めた。

シュウ「大丈夫か、サトシ？」

サトシ「こっちは平気だ。ピカチュウも落ちないように俺にしがみ

ついでくれよ」

そう言われてピカチュウはサトシの首にしっかりとしがみ付く。順調にハシゴを上っていくサトシとシユウ。だがその時だった。

シユウ「うわっ!?!」

シユウがハシゴに上るのに集中するあまり、ハシゴのすべりやすい箇所足にかけてしまった。その影響で思わず足を踏み外してしまった。

サトシ「だい・・・うっ!?!」

落ちてくるケンタが乗っかる形でサトシも下に落ちてしまう。さらに、彼らに災難が襲い掛かる。

バシヤアアアアアア!

突然、横の岩場から温泉が吹き出し、サトシとシユウを飲み込んだ。ベイリーフとツタージャは流されていくサトシとシユウをつるのムチで掴もうとするが、2人には届かなかった。

サトシ・シユウ「うわああああ!」

ピカチュウ「ピカピ〜!」

カスミ「サトシ!」

ハルカ「シユウ!」

サトシとシユウそしてピカチュウはそのまま激流に流されてしまい、2人はもがくがカスミとハルカの叫びも空しく水中深くに消えてしまった。さらに・・・

ゴゴゴゴゴゴゴ!

ハルカ「こ、今度は何!?!」

突然の地響き。するとハルカの頭上から大きな岩の塊が落ちてくる。

カスミ「ハルカ、危ない!」

カスミがそれに気づき、ハルカに飛びついて落ちてくる岩から守ろうとする。

ハルカ「あ、ありがとう。カスミ」

カスミに礼を言うハルカ。ベイリーフとツタージャも心配して彼女たちの元に駆け付けた。すると、そこに現れたのは、岩とともに先

程サトシ達を襲ったサイドン達がアジトへの入り口を塞ぐようにカスミとハルカに立ちはだかった。どうやら、サイドン達をも見捨ててシラヌイ達は逃げたようだ。

ハルカ「……とりあえず、逃げるわよ。カスミ」

カスミ「そうだね。ベイリーフ、ツタージャ、あなた達も逃げましよう」

サイドン達から逃げるようにカスミとハルカはサトシのベイリーフ、ツタージャとともにアジトとは反対方向の光が差し込んでいる方へと走り出した。

カスミ「(サトシ……)」

ハルカ「(シユウ……)」

カスミ・ハルカ「(無事でいて……)」  
激流に流されたサトシとシユウを心配しながら無事を祈るカスミとハルカであった。

回想シーン終了

カスミ「……という訳なんなのよみんな」

ハルカ「もし、シユウにもしものことがあつたら私……」

カスミ「サトシ……」

ロズレイド「ロズ……」

ベイリーフ「ベエイ……」

ツタージャ「タージャ……」

思わずマイナス思考になるカスミ、ハルカ、ロズレイド、ベイリーフ、ツタージャ。ちなみにベイリーフとツタージャは、自分たちのモンスターボールを持っている主人が現在いないため、外に出たままである。

アヤノ「カスミちゃん、ハルカちゃん、ロズレイド、ベイリーフ、ツタージャ。そんなにネガティブに考えてどうするのよ。サトシ君達ならきつと大丈夫よ。」

アイリス「ロズレイド、ベイリーフ、ツタージャ。あなた達もよ」  
コトネ「それにカスミンはサトシと一緒に旅をした仲間、ハルリンはシユウとはライバルなんだから、2人のことは良く知ってるでしょ」  
ベル「そうよ。わたし、みんなと違ってサトシ君やシユウ君と旅をする期間は短いけど、それでもあの2人が凄いつてことは分かるわよ」

ケンジ「そうだよ。二人とも」  
サトシ、シユウはどんなピンチに遭ってたとえそれが原因で落ち込むようなことがあっても、必ず立ち直ってあの笑顔が素敵な本来の自分を取り戻す。それを伝えるようにコトネとベルとケンジはカスミとハルカに言う。

カスミ「・・・そうよね、みんな。サトシなら、帰ってくるよね。きつと、そうだよ。あいつが簡単にくたばるやつじゃないしね」

ハルカ「シユウのことがみんなより私の方が知ってるはずなのに・・・。みんな心配かけてごめんね」

アヤノ「お礼なんていいのよ」

アイリス「それよりも、アタシ達が今できることを見つけてそれに取り組みましょう」

そうアイリスが言った時だった。

ロボットA「エブチ博士ーーーーー!!!!!!」

そこにエブチ隊隊員の一人がポケモンセンターに駆け込んできた。

エブチ「どうしたんだ!」

ロボットA「 @ B A \$ % + # \* 」

エブチ「なに言っているかわからんだろう!一体何があつた!」

エブチは、一発エブチ隊の隊員の頭を叩て聞く。なお、エブチ隊は、カスミたちが助けてくれたタブンネ達とシゲルのケガを治療している。

ロボットA「実は、近くの川にて人が浮いているんです。今隊員のほとんどが手が空いてなくて人手が足りないので手伝ってください」

エプチ「水死体じゃないだろうな！」

アヤノ「博士、縁起が悪いですよ」

ロボットA「とにかく、手伝ってください！」

エプチ「わかったわかった、今行くよ」

デント「僕たち、手伝います」

ロボットA「すまないね。それじゃあ、早速だが川辺まで来てくれ」

タケシ「困ったときはお互い様だ。俺たちも微力ながら手伝うよ。」

カスミ「アタシも行くわ」

ハルカ「わたしも」

ベル「わたしも」

アイリス「アタシも手伝うわ」

コトネ「わたしも」

デントに続いて、タケシ、カスミ、ハルカ、ベル、アイリス、コトネも川辺に行つて流されている人の救助に向かった。果たして、川に浮いている人は大丈夫なのか！？



第68話 災難が悲劇を生む（後書き）

川辺にて浮いているのは人は、生きているのか？死んでいるのか？  
あんまり縁起がよくない発言だ。

## 第69話 救出(前書き)

今回は、シュウハル マサトとサトカス要素を含みます。

## 第69話 救出

さて、ハシゴを上っている最中、突然横の岩場から吹き出た海水に飲まれたサトシとシユウ。どうやら、そのまま洞窟の外へと通じる穴に通って洞窟の外へと出ていたようだ。

シユウ「……ぷはっ、サトシ！ピカチュウ！」

なんとか水面に出たシユウは、辺りを見回してサトシとピカチュウを探す。

サトシ「……ぷはあ、ん。シユウ！」

ピカチュウ「ピカピカ！」

サトシが海面に姿を現し、シユウに気づく。続いてピカチュウも姿を現す。

シユウ「今そつちに行くからな！」

サトシ「シユウ、ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカピ、ピピカー！」

2人と1匹はそれぞれ一点に集まろうとする。だが突然、川の流れが速くなった。先を見るとそこには、コンクリート一面の壁が見えた。そう、ここは、ダムであった。しかも、放水中という最悪の事態であった。

サトシ・シユウ「うわあああ！」

ピカチュウ「チャア！」

流れは、だんだん速くなっていた。

シユウ「(サトシ……)」

サトシ「(ケンタ……)」

ピカチュウ「(ピカ……)」

それでも、2人と1匹はなんとか集まろうとする。だが、水面より水中の方の流れが急で思うように近づけない。そして……

シユウ「(……うっ!?)」

サトシ「(……もうだめだ)」

ピカチユウ「・・・ピカ」  
サトシ、シユウ、ピカチユウはそのまま意識を失って放水中のダムから落ちていった。

さて、時を進めて、タケシ、カスミ、ハルカ、ベル、アイリス、コトネはエブチ隊から流されている人がいると聞いて川岸までやってきた。その途中でヒカリとヤストシとマサトも加わり駆け付けていた。すると・・・

コトネ「あ！みんな見て！あそこ」

コトネが何かに気づき、そこを指さす。すると、気を失って水面をプカプカと流されている人がいた。

タケシ「早く助けないとまずいぞ。」

すると今度は・・・

アイリス「ねえ、あれってシユウじゃない？」

流されている人はシユウに似ていた。

ハルカ「間違いないわ。あの髪型と服装、間違いなくシユウよ」

ライバルでとても印象が強くさらに先日、告白されたハルカが流されている人はシユウだと断定した。

ヒカリ「それじゃあ、尚更助けに行かなきゃ」

タケシ達とエブチ隊隊員は、急いでシユウの方へ向かった。幸いこのあたりは流れが穏やかなためシユウを浅瀬まで流されたところでタケシが救出し、とりあえず砂場に寝かせた。

ハルカ「シユウ、しっかりして！」

ハルカは、気を失っているシユウを見つめる。そして次の瞬間、ハルカは意を決して、シユウの気道を確保し、自らの口をシユウの口に近づけようとした。

マサト「お姉ちゃん、何しようとするの！」

マサトがハルカの体を止める。

ハルカ「何って、人工呼吸よ！」

マサト「なんで、お姉ちゃんがする必要があるのよ！」

マサトは、ハルカにそう問いかけた。何故、マサトは必死になつてハルカがシュウに人工呼吸をするのを止めるかというと、ハルカはシュウの事が好きでマサトは、シュウにとつて天敵である。というよりくつつけたくないのが実情である。そんな、ハルカがシュウに人工呼吸すると唇に触れることになりそれは「キスとなる。マサトは、それをとても嫌がった。

ハルカ「必要よ！とにかく、早くシュウに人工呼吸しなきゃ、シュウが死んじゃうわ！」

そう、マサトに言うハルカ。

マサト「でも！」

それでも、ハルカがシュウに人工呼吸を拒むマサト。それを見ていたエブチは、ある決断をして隊員を呼び数人係でマサトを拘束する。マサト「なにすんるんだよ。離してよ！」

マサトは、必死に抵抗をする。

ロボットA「すまないが、マサト君。エブチ博士の命令なんだ」

ロボットB「これ以上、心肺蘇生措置をほつとくシュウ君が危ないから。拘束させてもらうよ」

マサト「離せ！離せよ！」

マサトは、抵抗を続けるが隊員も負けじとマサトを抑えながらポケモンセンターへ強制連行する。

そして、ハルカは、シュウに人工呼吸を行う。

エブチ「よし、あれを持って来い！」

ロボットC「あれですね！」

そう言つて隊員があるものを持って来た。

ロボットC「はい。ATM！」

エブチ「現金自動預け払い機か！違つよ、あれだよあれ」

ロボットC「すいません。はい、ATS」

エブチ「自動列車停止装置か！違つだろつ！」

ロボットC「本当にすいません。はい、TIM」

エブチ「それ漫才のコンビ名だろつ！お前、ワシを怒らりたいのか

！ウシが言ってるあれとは、AED  
自動体外式除細動器だ！じどうたいがいしきじよさいどうつき

ロボットC「すいません〜」

そう言っつて隊員は、改めてAED  
自動体外式除細動器じどうたいがいしきじよさいどうつきを持って  
くる。

エブチ「よし、やるぞ！」

そう言っつてAEDを持ってシュウの胸にパットをつける。そして、  
AEDの指示通りに従い電気ショックをシュウに当たる。そして、  
ハルカが再び人工呼吸をする。

シュウ「・・・ん。んん」

ハルカ「シュウ!？」

丁度人工呼吸を8回目したところでシュウは意識を取り戻した。

シュウ「あれ、ここは？」

ハルカ「ユガシマの森の川岸よ」

タケシ「シュウが気を失って倒れているところを俺たちで救出した  
んだ」

シュウは今の状況を把握しようとする。それにハルカとタケシが丁  
寧に答える。

ハルカ「はっ!? サトシとピカチュウ・・・」

シュウはサトシとピカチュウのことが心配になり、起き上がるうと  
するが・・・

ハルカ「まだ、動いちゃダメよシュウ」

あわてて、ハルカが制止する。

ヒカリ「サトシとピカチュウはまだ・・・」

シュウ「そっか・・・」

シュウは落ち着いて呼吸を整える。その後、シュウは、エブチ隊に  
よって担架で安全な場所へ移送された。

タケシ「あとは、サトシとピカチュウだな」

カスミ「サトシ、ピカチュウ。一体、どこにいるのよ」

ポッチャマ「ポチャア・・・」

キバゴ「キバ・・・」

ポツチャマとキバゴもサトシとピカチュウを心配するように荒れる川を眺める。

アイリス「大丈夫よ、キバゴ。サトシとピカチュウなら無事よ。」  
すると、その時だった。

ピカチュウ「ピ〜カ〜」

どこからかピカチュウの叫び声が聞こえた。

ハルカ「今のつてピカチュウよね」

ヒカリ「うん！」

アイリス「ピカチュウ〜！どこにいるの〜！」

ピカチュウを必死に探す面々。すると・・・

ヒカリ「見て、あれ！」

ヒカリが指さす方向にピカチュウが何かにしがみついて水面に顔を出しているのを見つけた。

カスミ「ピカチュウ、今行くからね！」

カスミがピカチュウを救出しようと、川へ飛び込んだ。そして、荒れる川の中、泳いでピカチュウの元へと向かう。

カスミ「ピカチュウ。アタシに掴まってて！」

ピカチュウ「ピカチュピ！」

ピカチュウは自分が浮くために使っていた何かをしつかりと啜えて、カスミにしがみついた。カスミはピカチュウを肩に乗せながら、再び川岸へと目指す。行き同様、荒れた川を泳ぐカスミ。流れがかなり速いため、思うように泳げなかったが、なんとか川岸へと到着した。

ハルカ「カスミ、大丈夫!？」

カスミ「ハアハア、なんとか大丈夫よ。それより、ピカチュウは？」

タケシ「ピカチュウは大丈夫だ。帽子を啜えているみたいだけどな」

ピカチュウが啜っていたのは帽子だった。

ピカチュウ「ピ〜カ〜」

するとピカチュウは啜っていた帽子を地面に落とした。

アイリス「それって、もしかして、サトシの帽子？」

そうたずねるとピカチュウは、頷いた。

タケシ「それじゃあ、ピカチュウはサトシの帽子を上手く浮かせて、沈まないようにしてたんだな」

ヒカリ「えらいわ、ピカチュウ」

ポツチャマ「ポチャポチャ」

キバゴ「キバキバ」

ピカチュウ「チャア〜」

ヒカリがピカチュウをほめる。ポツチャマとキバゴもさすがと言わんばかりにピカチュウを称える。ピカチュウは照れくさそうな反応を示す。

カスミ「さ、サトシの帽子・・・」

カスミがサトシの帽子を取ろうとしたその時だった。

ピカチュウ「ピカ！ ピカピカ！」

ヒカリ「えっ！？ ちょっとどうしたの、ピカチュウ。」

ピカチュウが川に向かって走り出し、帽子で川を指し示した。

ハルカ「危ないから戻ってきて、ピカチュウ」

ハルカがピカチュウを呼び戻そうとする。だが、ピカチュウはなにかをアピールするように帽子で川の方を指し示し続ける。

アイリス「もしかして、川に何かあるんじゃないかしら」

カスミ「アタシ、確かめてくる」

カスミがまた再び川に潜ろうとする。

ハルカ「カスミ、無茶よ。さっき、ピカチュウを助けに行ったばかりなのに」

ヒカリ「そうよ、危ないわよカスミ」

ハルカとヒカリがカスミを止めようとする。

カスミ「アタシなら大丈夫よ。それにアタシにもサトシみたいになんか茶させて」

ハルカとヒカリの制止を無視して、カスミは再び川へ飛び込んだ。

ハルカ「カスミ・・・」

ヒカリ「あかし達は一体どうしたら・・・」



カスミを心配するハルカとヒカリにタケシが・・・  
タケシ「今はカスミを信じて待つしかないだろう」  
タケシが2人の肩にそつと手を置いて言った。

ヤストシ「（結構責任感を感じているようだなカスミ。本当に好きな人を助けられるなんて、なんだかうらやましいぜ）」

ヤストシが心の中でそうつぶやいた。一方再び川に潜水したカスミは・・・

カスミ「（うっ！？流れが速すぎて思うように泳げないし、視界も最悪だわ）」

水面からは分からなかったが、川の中はダムの放出で流れはかなり急になっているうえに濁っていて大荒れだった。するとカスミは階層に絡まってゆらゆら揺れている何かを発見した。

カスミ「（何かしら？あ、あれは、サトシ！？）」

カスミが見つけたのは、水草に足に絡まって気を失っているサトシだった。

カスミ「（そっか、ピカチュウはあたし達にこれを知らせるために・・・）」

ピカチュウが必死で川を指し示しながらアピールしていた理由が分かった。ピカチュウは水中をさまよっているときにこのような状態のサトシを発見してカスミ達に知らせたかったようだ。

カスミ「（今、助けてあげるからね。サトシ）」

カスミはサトシの足に絡まっている水草を取り除こうとする。だが、思ったより複雑に絡み合っていてなかなか取れない。カスミは息が続かず、水面へと浮上した。そして息を整えた後、再び潜水した。するとサトシのモンスターボール（ボールホルダーは外れずに残っていたようだ）から、ミジュマルとガマガルが飛び出してきた。

ミジュマル「ミイイジュ！」

ガマガル「ガマ！」

カスミ「（ミジュマル、ガマガル！？そっか、ミジュマル、ガマガ

ル。サトシの足に絡まっている水草を取るの手伝って)」

カスミはミジュマルとガマガルにジェスチャーで手伝うよう求めた。  
ミジュマル「ミジュ！」

ガマガル「ガマ！」

ミジュマルはホタチをポンツと1回たたき、ガマガルは、任せると首を縦に振って、了承する。そして、カスミとミジュマルとガマガルは協力してサトシの足の水草を取り除こうとする。だが、ここでまたカスミの息が続かず2度目の浮上。

ミジュマル「ミジュ!？」

ガマガル「ガマ!？」

カスミ「(ごめんね。でも、あなたは続けて)」

カスミはミジュマルとガマガルに申し訳なさそうに思いながら、海面に出て息を整える。そして、また再び潜水した。そこでカスミはふとあることに気づいた。

カスミ「(待つて。どのくらい経っているかは分からないけど、サトシは呼吸をしてないわ)」

そう、サトシは海中で意識を失っているため無呼吸状態だった。このままだと、サトシの蘇生する率は低くなりれ溺死する恐れがある。そこでカスミの脳裏に、先程のハルカがシュウにした人工呼吸の光景が過ぎる。

カスミ「(あたしが少しでもサトシに空気を送り込んだら・・・)」

カスミはサトシを助けようと意を決して、両手でサトシの顔を包み、自らの唇をサトシの唇にくっ付けて人工呼吸を開始した。

カスミ「(サトシ・・・)」

カスミは息が続かなくなると水面へ浮上し、空気を思いっきり吸い込んで潜水した。そしてまた潜水し、サトシの元へ近づき人工呼吸を行う。それを何回か繰り返す。ミジュマルとガマガルは黙々とサトシの足に絡まった水草を取り除く。だが、カスミもだんだんと体力を消耗していく。

カスミ「(・・・もう、駄目)」

カスミも意識を失ってしまった。

ミジュマル「ミジュ！？」

ガマガル「ガマ！？」

ミジュマルとガマガルはどうしていいか分からなくなる。このままだと、二人とも溺死する恐れがある。その時だった。気を失ったサトシとカスミ、そしてミジュマルとガマガルを何か引き上げようとする。ミジュマルとガマガルは、抵抗しようとするが催眠術が当たり眠ってしまう。

一方、川岸では・・・

アイリス「・・・カスミは何やってるの。水面に出たと思ったら、また海の中に潜って・・・」

今、川の中で何が起きているのか状況が把握できないでいる面々。それに加え、カスミを信じるしか出来ない自分たちに歯がゆさを感じている。

ゴゴゴゴゴゴ！

ヒカリ「今度は、何！？」

突然、地響きに固唾を飲む面々。すると水面から水しぶきが飛び、水面から現れたのは、セレビイであった。

コトネ「せ、セレビイ！？」

タケシ「まさか、あのセレビイ。アヤノさん！」

そうたずねるとセレビイは、頷いた。そう、このセレビイは、アヤノの本当の姿である。そしてアヤノことセレビイは、サイコキネシスで諭し、カスミ、ミジュマル、ガマガルを引き上げた。

タケシ「もしかして、アヤノさんがサトシ、カスミ、ミジュマル、ガマガルを助けてくれたのか？」

タケシの質問に、アヤノことセレビイはうんと頷く。

アイリス「ありがとう、セレビイ」

アイリスがセレビイに礼を言うと、タケシはサトシを、ハルカはカスミを背負って、ヒカリはミジュマルをアイリスはガマガルを抱えて、安全な場所へと彼らを運んでいった。セレビイは、それを見送

った後エブチの元へ向かった。

第69話 救出（後書き）

さてさて、サトシとカスミの命運は？

第70話 ちよつとした騒動と事実確認とそして・・・(前書き)

ユガシマの森を舞台にしたロケット団との戦いも、この話で一旦は  
終結です。

第70話 ちよつとした騒動と事実確認とそして・・・

タケシ達によつて、ポケモンセンターの横に仮設的に作ったエブチ隊の医療施設に運ばれたサトシ、カスミ、ミジユマル、ガマガル。

サトシ・カスミ「ん。んん・・・」

ヒカリ・アイリス・コトネ「サトシ、カスミ！」

サトシとカスミが意識を取り戻した。

サトシ「・・・あれ、ここは？」

サトシは今の状況が分からず、頭にクエスチョンマークを浮かべる。ヒカリ「ユガシマの森のポケモンランターの横に仮設的に作られたエブチ隊の医療施設よ」

コトネ「サトシ、今まで海の中で意識を失ってたのよ」

サトシ「そつか、俺・・・」

サトシは意識を失うまでの経緯をヒカリ、アイリス、そしてサトシとほぼ同時に意識を取り戻したカスミに話した。

カスミ「そんなことがあったのね」

アイリス「ロケット団、絶対に許せないわ」

カスミはサトシ達がどんな目に遭っていたのかを思い出し、アイリスはそれに加え、ロケット団に対して怒りを露わにする。

サトシ「ところでなんでカスミが俺と同じく寝込んでたんだ？」

サトシはなぜカスミが今まで寝込んでいたかを聞いてみた。

コトネ「あつ、そうそう。カスミンったら、ホントに心配したんだから」

サトシ「ん？どういうことだ？」

コトネの発言にサトシはさらに頭にクエスチョンマークを浮かべる。ヒカリ「カスミはね、サトシとピカチュウを助けるために危険を承知で海を泳いだのよ」

サトシ「えっ？そうなのか」

アイリス「そうよ。でも、サトシを助けるつもりが自分まで意識を

失うなんて。ホント、カスミも子供なんだから！」

カスミ「アハハハ・・・」

アイリスは、語尾を強めてカスミに言う。さすがのカスミも言い返せず、ただ苦笑を浮かべるだけだった。

コトネ「でも、危険を顧みずにサトシを助けに行ったカスミンはすごいわ〜」

ヒカリ「あたし達はただ見守るだけしか出来なかったですものね。」

サトシ「そっか、俺なんかのためにありがとうな。カスミ」

カスミ「ちよつと、俺なんかとか言わないでよ。アタシ達は、サトシの仲間なんだからこれくらい当然よ」

サトシがカスミに礼の言葉を言ったその時だった。

ピカチュウ「ピッカ！」

ミジュマル「ミイイジユ！」

ガマガル「ガルル！」

ベイリーフ「ベエエエイ！」

ツタージャ「タージャ！」

ピカチュウ、ミジュマル、ガマガル、ベイリーフ、ツタージャが扉を開けてサトシ達の病室に入ってきた。

サトシ「アハハハ、みんなくすぐったいって。」

元気そうなサトシを見て安心したのか、我を忘れてサトシにすり寄るポケモン達。

カスミ「あつ、そうそう。ピカチュウとミジュマルとガマガルに感謝しなさいよ。ピカチュウはアンタの居場所を覚えてくれたし、ミジュマルとガマガルはあたしと一緒にアンタの足に絡まっていた水草を取ってくれたんだから」

サトシ「そうなのか、ピカチュウ、ミジュマル、ガマガル？」

ピカチュウ「ピッカ！」

ミジュマル「ミジユ！」

ガマガル「ガル！」

サトシ「ピカチュウ、ミジュマル、ガマガル。ありがとうな」



サトシはそう言うと、ピカチュウとミジユマル、ガマガルの頭をなでる。2匹とも照れ臭そうな反応を示す。その光景がその場の空気を和ませる。

サトシ「ところで、他のみんなは？」

ヒカリ「他のみんななら、シユウの所に行ってるわ。」

サトシ「それじゃあ、シユウは無事なのか。」

コトネ「ええ、サトシと同じく意識を失ってたけど今は違う病室で寝ているわ。ふふふ、その時のハルリンったら・・・」

サトシ「えっ、ハルカがどうかしたのか？」

アイリス「コトネ、子供なサトシに言ったってわかんないわよ。」

コトネ「それもそうね。サトシ、最後のは何でもないわ。」

サトシ「何だよ。教えてくれたっていいじゃないか。」

サトシは頬を膨らませながら、不貞腐れる。その光景にカスミとヒカリは苦笑を浮かべた。

カスミ「（こんな時に、アタシがサトシに人工呼吸したなんて言えないわね）」

カスミはサトシに人工呼吸をしたことについて自分の心の中にしまっておこうと思った。仮に今言えば、この場は修羅場と化すことが目に見えていたからである。それに、今の状態でそんな修羅場を勝ち抜く自信はカスミにはなかった。その後、サトシとシユウとシゲルの治療のため2、3日、ポケモンセンターの隣に作った仮設的医療施設で療養した。そして、療養を終えてサトシ達は次の目的地に向けて出発することにした。

エブチ「もう、行くのかサトシ君？」

サトシ「はい。ところで、エブチ博士とシゲルは、これからどうするんだ？」

エブチ「私は、今回の一件の後処理とこのルビーについて調査するつもりさ。」

シゲル「僕もこの件の後処理を手伝ってからユガシマシティに向かうつもりさ。」

そうサトシに言うシゲルとエブチ。

アヤノ「ところで、サトシ君、シユウ君、カスミちゃん。もう体調の方は大丈夫なの？」

サトシ「俺は大丈夫だぜ」

ケンタ「僕もです」

カスミ「あたしもよ。心配してくれてありがとうございます。アヤノさん」

アヤノ「どういたしまして」

カスミは自分たちを心配してくれたアヤノに礼を言う。

シゲル「それじゃあ、ヒカリ。元気だな」

ヒカリ「川柳のお孫さんも」

まだ、シゲルのことをそう呼ぶヒカリ。

ヤストシ「（少しは、素直になっただらどうなのかなシゲル）」

シゲルを見てそう思うヤストシ。

ロボットA「シゲル君、どうせなら抱きついて別れなさいよヒカリちゃんと」

ロボットB「そうそう」

エブチ隊員がそう言うつとシゲルとヒカリが顔を真っ赤に染める。

アヤノ「やめなさいよ、まったく、あなた達ときたら」

アヤノがそう言うつとエブチ隊員を叱る。

エブチ「それじゃあ、みんな元気だな」

そう言うつと見送ったエブチと隊員たちとシゲル。

そして、サトシ達一行少し歩いたところでアイリスのとんだ一言で事態は、急変する。

アイリス「サトシ、退院のお祝いにキスしてあげる」

ヒカリ「ちよつと、アイリス。抜け駆けは許さないわよ」

カスミ「ちよつと2人とも、待ちなさい！」

コトネ「サトシって、モテモテってことね。でもこれだけは譲れないわ」

ベル「サトシくん、お互い頑張れるようにキスしよ。」

サトシ「えっ、ちょっとおま……わああああ！」

サトシは少女5人に押し倒されて、顔中にキスされまくった。実にうらやましい。良くない！by・サトシ

ちなみに、ピカチュウはもみくちゃにされる中、なんとか脱出してタケシ達のもとに避難した。

シュウ「ハルカ」

ハルカ「なあに、シュウ？」

シュウ「僕には、キスしないのか？」

ハルカ「え！」

シュウの発言に驚きを隠せないハルカ。

シュウ「ハルカ、君はキスもできないのか？」

シュウの少し挑発的な発言にハルカは……

ハルカ「そ、そのぐらいできるかも！／＼／＼」

赤くしながらハルカは、シュウにキスをしようとした。

マサト「ダメだよ、お姉ちゃん。こんなやつにキスするなんて！」

マサトが間に入りハルカがシュウにキスするのを阻止しようとした。

タケシ「サトシ、シュウ……。羨ましい、実に羨ましいぞおおお

！」

ヤストシ「僻<sup>ひが</sup>まない、僻<sup>ひが</sup>まない。」

デ「今後もサトシを巡るエキサイティングなテストのバトルとハルカをシュウに奪われたくないため阻止するマサトのエキサイティングなテストのバトル……。うーん、怖いな」

ケンジ「アハハハ……」

そんなこんなで、ユガシマの森を抜け次の目的地・ユガシマシティは、すぐ目の前であった。

サトシ達と別れた後、エブチが一人つきりになっている時にエブチ隊員がやってきた。

ロボットA「エブチ博士、例の件で報告があります」

そう隊員が言うとおエブチは、辺りを見渡す。この話は、けしてシゲ

ルやジョーイに聞かれてはいけない重要な報告であった。  
エブチ「そうか。それで、確認は出来たのか？」  
ロボットA「はい。どうやら、この情報は間違っていないです」  
エブチ「……………」  
隊員の言葉にエブチは黙り込んでしまふ。  
さて、読者の皆さんには何がなんだかわからないでしょう。では、  
このお話を遡るほど2、3日前のことである。

## 回想シーン

エブチはシュウを診察を終えてシュウの病室を出た時でした。部屋  
の前でハルカが何かを悩んでいたのが始まりでした。

エブチ「ハルカちゃん、何を悩んでいるんだ？」

ハルカ「エブチ博士！」

エブチ「さては、シュウのことを考えてたんでしょう」

ハルカ「違いますよエブチ博士！」

エブチがそう言うのとハルカは首を振って否定する。

エブチ「じゃあ、何だっ言うんだ？」

そう聞くとハルカは、口を開いた。

ハルカ「実は、ロケット団の基地でシラヌイと行動のことなんです」

エブチ「シラヌイの行動？」

ハルカの言葉にいまいち理解できないエブチ。

エブチ「一体何があったんだい？」

ハルカ「え〜と、私とカスミとピカチュウたちが人質になってそれ  
でシュウとサトシを痛めつけていた時にシラヌイに一本の電話があ  
ったんです」

エブチ「シラヌイに電話？誰からなんだ？」

ハルカ「確か、筆頭様って言っていましたよ」

エブチ「！」

ハルカの言葉を聞いて驚きを隠せないエブチ。

エブチ「（筆頭！筆頭つてもしかしてロケット団最高幹部筆頭のことか！）」

エブチは、心の中でそうつぶやいた。

ロケット団最高幹部筆頭とは、ロケット団のボスの次に偉い地位で軍隊で地位で言えば大将クラスである。ボスが不在時にはロケット団全部隊を指揮がとれる。そしてこの地位はロケット団の総司令的存在で、ボスに次いでこの権力が強いとんでもないポストである。

エブチ「（確か、今の筆頭は、数多くの上級幹部・下級幹部を従えてロケット団ボス・サカキからの信頼が厚く、ロケット団の幹部や団員から『智将』ちしやうとして尊敬されてサカキをも凌ぐカリスマ性を持ち合わせ、部下からの信頼が厚いやつだったな）」

そう心の中でつぶやくエブチ。

ハルカ「・・・博士、エブチ博士！」

エブチ「あ、ごめんごめん。それで筆頭とシラヌイは何を話していたんだ？」

ハルカ「よく聞き取れなかったけど『少年』とか、あと『首が吹っ飛ぶ』ってところしか聞けなかったわ」

エブチ「そうか。でも、あまり気にするなハルカちゃん」

ハルカ「そうね。気にしてても仕方がないわ。それじゃあ、私、シユウの面倒を見えています」

エブチ「がんばりなよ」

ハルカ「はい！」

そう言つてハルカは、シユウの病室へ入っていった。その後、エブチはシユウの病室から離れたところにやってきて一旦そこで止まった。

エブチ「誰か、いるか！」

エブチがそう言つと一人の隊員がやってきた。

ロボットA「エブチ博士、お呼びでしょうか？」

隊員がエブチにそうたずねた。

エブチ「ああ、ロケット団内部へ潜入してほしいんだ」

ロボットA「内部ですか？また、どうしてですか？」

エブチ「筆頭が言った『少年』とか、あと『首か吹っ飛ぶ』という言葉が気になってな。それで調べてほしいんだ」

ロボットA「しかし、エブチ博士。その言葉を聞いて大体は想像ついでるのでは？」

隊員がエブチにそうたずねた。

エブチ「ああ、これはあくまでワシの想像だか筆頭が言った『少年』とは、もしかしたらサカキの実の息子のことじゃないかと思って」

ロボットA「ろ、ロケット団ボス・サカキに息子なんていたんですか！？」

隊員は思わず大きい声を出す。

エブチ「声がでかいぞ」

ロボットA「すいません、つい驚いてしまいました」

エブチ「まあ、驚くのも無理はない。サカキには、二人の子供がいて一人は女の子で一人は男の子だ。女の子の方は、サカキの妻の弟が確か交通事故で亡くなってその子を義理の娘として迎えてたんだ。その5年後にサカキの妻が実子が生まれたんだ。ただ、その実子なんだが生まれてからすぐに行方不明になったと聞いたな」

ロボットA「もしかして、その少年って・・・」

エブチ「ああ。しかし、これは、あくまで想像だ。だから、確認のため調べて来るんだ」

ロボットA「え！筆頭様のところへ・・・」

エブチ「なわけないだろう。ワシでも、筆頭の顔なんてうる覚えしか覚えてないんだから。筆頭でなく上級幹部あたりを探れ。こいつらは、サカキに義理の娘と実子がいることを知っているからな」

ロボットA「かしこまりました」

そう言つて隊員は、ロケット団の基地へ潜入しにいったのである。

回想シーン終了

ロボットA「エブチ博士、どういたしますか？」

エブチ「まあ、監視はつけずしばらく様子を見ようでないか。それから、このことは、けして誰にも言つなよ。もちろん、本人にもな！」

エブチが隊員にそう言った。

ロボットA「了解しました。しかし、まさかサトシ君がサカキの実際の息子とは……」

エブチ「おい！」

ロボットA「す、すいません！」

隊員がそうつぶやき、エブチは叱る。

そう、生まれてすぐ行方不明になったロケット団ボス・サカキの実際の息子とは、なんとサトシであったのである。しかし、エブチはそのことを誰にもしゃべるなど隊員に命令する。

一体どうなる？

第70話 ちよつとした騒動と事実確認とそして・・・（後書き）

とんでもない事実が発覚した。はたして、これがどう物語を左右するの？



番外編？ 密談（前書き）

3回目の番外編です。

## 番外編？ 密談

ここは、とある地方某所。

ここには、ロケットカンパニーグループ（略してRKG）の本部があった。ポケモンの捕獲、売買を主業務はもちろんポケモン協会が初心者に支給するポケモンの半数は、この会社から買い入れられている。他にも鉄道、ホテル業務、IT、自動車産業、不動産業、また石油やレアメタルといった利権も持っているとしてもない会社である。

しかし、その実態は、ロケット団がボスを中心に運営をしている。ボス・サカキが会社の社長を務め最高幹部筆頭が副会長で最高幹部が重要ポストで研究・科学部は、シラヌイ、ナンバ、ゼーゲルなどがついている。もちろん、社員は、ロケット団の下っ端達である。そんな会社の最上階の社長室に二人の人物が将棋をしながらしゃべっていた。

一人は、ロケットカンパニーグループの社長でサトシの実の父親のロケット団ボス・サカキとロケットカンパニーグループ副会長でロケット団最高幹部筆頭がいた。ちなみに筆頭の名は、アポロである。そんな時、一人の女性が社長室へ入ってきた。

「失礼いたします。サカキ様」

サカキ「なんだ、マトリか」

そうマトリに言うサカキ。なお、マトリは、サカキの秘書を務める女性団員で潜入工作員として動く任務を与え眼鏡をかけており、ポーカーフェイスで非常に冷淡な性格の持ち主である。

マトリ「サカキ様、ご報告があります」

サカキ「なんだ？」

マトリ「実は、シルフカンパニーの買収に成功しました」

サカキ「そうか、シルフカンパニーを」

そう言っつてサカキは、駒を打つ。

サカキ「ご苦労であった。下がってよいぞ」

そう言うとマトリは、社長室をあとにした。

アポロ「サカキ様。シルフカンパニーをついに手に入れましたね」

サカキ「ああ、これで我が理想に一步近づくことができた」

駒を打ちながら言うサカキ。

アポロ「次は、デボンコーポレーションか？」

サカキ「ああ」

そうアポロに言うサカキ。

サカキ「ところで、アポロ。サトシは、その後どうした？」

アポロ「サトシ様でしたらすっかり傷も治り元気になりました。今は、ユガシマシティへと向かっています」

サカキ「そうか。それはよかった」

アポロ「それで、サカキ様。今後、サトシ様に二度とこのようない

ことにならないよう他の幹部にも通達しましょうか？」

サカキ「そうしてくれ。ただし、上級幹部だけにとどめる。このことが下級幹部や下っ端たちに知れては漏れる危険性があるからな」

そうアポロに命じるサカキ。なお、サカキの実際の息子がサトシであることを知っているのは、アポロを始め最高幹部とゼーゲルとある一人の人物だけと限定されている。なぜ、限定的だったかというサトシは、ロケット団ボス・サカキの息子でもあるが同時にロケットカンパニーグループの御曹司でもある。これが万一明るみになれば、人質としてロケットカンパニーグループに身代金の要求、またスペース団のようにロケット団と敵対を持っているところから見れば実子であるサトシを暗殺すればロケット団において大きなダメージを与えてしまう。それだけは避けたいためこの情報は、ロケット団において最高機密情報として指定されている。そのため知っている人が限定的となるのだ。

アポロ「心得ましたサカキ様」

サカキ「それから、万が一、サトシと出くわしたら傷一つ付けず拘束するように言っとけ。もし、傷つけたならば首が飛ぶだけじゃす

まないとそれも付け加えておけ」

アポロ「かしこまりました。それで、監視はどのように」

サカキ「引き続きあの子に監視を続けさせると命じた。今、彼はユガシマシティへ向かわせた」

アポロ「彼でしたら、安心できますな。年齢もサトシ様と同じ年でトレーナーなら怪しまれませんからな」

そうサカキに言うアポロ。

アポロ「それから、サカキ様。実は、先日エブチ隊の隊員と思われる人が最高機密情報を盗まれました」

アポロは、そう言うがサカキはそれを聞いても冷静さを保ちながらサカキが口を開く。

サカキ「エブチなら、簡単にあんな情報も盗めるだろう。しかし、ほっというてよいぞ」

アポロ「まだ、どうしてですか？」

サカキ「エブチなら、その情報を聞いて暗殺や身代金をする男ではないし、それにかえて好都合だからな」

アポロ「好都合ですか？」

サカキ「ああ、エブチ隊は我々と違って優秀な武器と情報を一手にもつ部隊だ。すぐに駆けつけサトシを守るだろう。それに彼は口が堅いから絶対にもらすことはないしな」

アポロ「そうですねか、わかりました。それから、娘様については・  
・  
」

サカキ「あの子なら大丈夫だろう、自由気ままな娘だが私似でカンが鋭いしポケモンバトルの實力は私と同じくらいでそれ以上でコンテストマスターの地位と手に入れてテレビの出演料その他の色々な収入を合わせて年収は約30億円しかも近々四天王にも就任するんだ。だから大丈夫だろう」

アポロ「そうですねか、それを聞いて安心しました。それで、サカキ様、エブチ隊に奪われたルビーにつきましてはいかがいたしまししょうか？」

サカキ「そう簡単に奪えるとは思えないからしばらくは他の石を探した前」

アポロ「かしこまりました。それから、サカキ様」

サカキ「なんだ？」

アポロ「王手です」

サカキ「ま、待った！」

アポロ「待ったなしですよサカキ様」

サカキ「アポロ」

そう言うサカキ。

しかし、一体サカキは何をたくらんだいるのか？

続く

番外編？ 密談（後書き）

ロケット団のボスと最高幹部筆頭の視点でお送りしました。一体何をたくらんでいるのか？

第71話 ユガシマシティのジムリーダーと四天王登場(前書き)

新章突入!

ユガシマシティのジムリーダーが登場します。





サトシ「いたたたたた」

「???」「ごめんなさい!前も見ず歩いて・・・」

サトシ「い、いんだよ別に。ところで、君は?」

「???」「私は、ナナミ。ユガシマジムのジムリーダーなの」

ヤストシ「き、君がユガシマジムのジムリーダー!?」

ナナミ「そうよ。と言っても先月なつたばかりの新人ジムリーダー  
だけどね」

笑顔でヤストシに言うナナミ。

タケシ「へえ、君は新人ジムリーダーなんだ」

ナナミ「そうなの。もともとはアキナお姉ちゃんがジムリーダーだ  
つたの」

ヒカリ「お姉ちゃんが?」

ナナミ「そうよ。アキナお姉ちゃんは、ホウエンのチャンピオンミ  
クリさん並みの実力と呼ばれて負けた回数は1年間に50回行くか  
行かないかってところよ」

ハルカ「へえ、そうなんだ」

ハルカがそう言うとナナミは話を続けた。

ナナミ「そんなある日、その実力が認められて四天王になるかと誘  
いが来たの」

ケンジ「四天王に!?!」

ナナミ「半年前にホクシンの四天王が引退して四天王のポストが空  
いたの。なかなか後任が決まらず困っていたみたいなの。その時、  
ポケモン協会の関係者がウチのアキナお姉ちゃんに目をつけたの。

アキナお姉さんは四天王になるのが夢だったから」

デント「すごいお姉ちゃんなんだね」

ナナミ「だけど、アキナお姉ちゃんが四天王になりたかったけど  
お姉ちゃんはあることを心配していたの」

マサト「あること?」

ナナミ「私の家は、アキナお姉ちゃんと私を含めて4姉妹なの。ア  
キナお姉ちゃんが長女で私が四女なの。だけど次女のシオリお姉さ

んとカオリお姉さんが結構遊び好きでジムなんて全部アキナお姉さん任せの。これじゃあ、心配で四天王にもなれないと断ることもしあに入れていたの。でも、せっかくアキナお姉ちゃんの夢がここでつぶされる訳にはいかないから私がアキナお姉ちゃんの後任のジムリーダーに名乗りを上げたの。アキナお姉ちゃんは何とか安心させて四天王の座に座ったの」

ヤストシ「いい話じゃないの」

ナナミ「でも、アキナお姉ちゃんが家からいなくなった今でもシオリお姉さんとカオリお姉さんが仕事も手伝わず遊びほうけているの」  
タケシ「なんか、どこかの誰かさん地と似ているな」

タケシは、その誰かさんに聞こえないほどの声でつぶやいた。

ナナミ「さて、話は長くなっただけどジム戦に来たのよね。それじゃあ、さっそくユガシマジムへ案内するわ」

そう言つてナナミは、笑顔でサトシたちをユガシマジムへ案内した。そして5分後、サトシ達は、ユガシマジムに到着した。

ナナミ「ここが、ユガシマジムよ」

そう言つてサトシ達をジム内に入るとそこに二人の女性がいた。

ナナミ「あ、アキナお姉ちゃん!？」

そこにいたのは、ナナミのお姉さんで先日ホクシンの四天王になったアキナがいた。

アキナ「どこ行っていたのよナナミ。ジムを開けばなしで出かけるなんて!」

ナナミ「ごめんなさい。シオリお姉さんとカオリお姉さんを探してつて・・・」

アキナ「まったく、あの二人と来たらまったく・・・。それより、ナナミ。後ろにいる子達は、ジム戦の挑戦者かい?」

ナナミ「そうよアキナお姉ちゃん。この子たちは、ジム戦に挑戦しに来たんです」

サトシ「初めまして、マサラタウンから来ましたサトシと申します」  
ハルカ「私、ハルカです」

ヒカリ「ヒカリです」

アイリス「あたし、アイリス。ドラゴンマスターを目指しています」  
カスミ「カスミって言います」

デント「僕はポケモンソムリエのデントと申します」

ケンジ「僕はポケモンウオッチャーのケンジです」

マサト「マサトです」

ヤストシ「ヤストシと申します」

ベル「アタシは、ベルです」

コトネ「コトネです」

みんながアキナに挨拶する中この男は・・・

タケシ「自分はタケシと申します。アキナさん。あなた方とこのユガシマシティでお会いできたのは、なにかのご縁があつてこそ。今すぐ、この愛の伝道師・タケシが・・・うっ!？」

タケシはアキナにナンパをするがタケシのグレッグルがタケシにどくづきを喰らわせて・・・

タケシ「しびれびれ」

タケシはお馴染みの台詞を吐きながら、その場に倒れた。さらには、マサト「はいはい、タケシは、あっちに行こうね」

マサトがタケシの耳を引張って、グレッグルと協力してタケシを強制退場させた。見事な連携プレーである。

アキナ「・・・・・・・・」

アキナは、今の光景に言葉を失った。

ヤストシ「気にしないでくださいアキナさん。ところでお隣にいる女性は？」

ヤストシがそうアキナにたずねる。

アキナ「ああ。彼女は、ヒナ。飛行タイプ一筋のホクシンの四天王の一人よ」

ヒナ「初めまして、ヒナといいます」

そう自己紹介をするヒナ。

ナナミ「ところで、アキナお姉ちゃん。何しにここへ来たの？」

アキナ「ジムリーダーを辞めて四天王になったはいいけど、私の代わりにユガシマジムのジムリーダーに就任したナナミが心配でしようがなくて・・・」

そうナナミに言うアキナ。

ヒナ「心配すぎですよアッキーナさん。聞いた話によるとナナミちゃんは、結構アッキーナさんと同じでしっかりものなんですからアキナ「ねえ、ヒナ。そのアッキーナって言う呼び方やめてもらえらる?」

ヒナ「いいじゃないよ別に」

アキナ「まったくヒナときたら。まあ、それは言いとしてナナミ。

あなたのジムリーダーとしてのジム戦を見せてもらおうわナナミ」

ナナミ「わかったわアキナお姉ちゃん。アキナお姉ちゃんが安心して私がジムを守っているとところを見せてあげるわ。サトシ君、よろしくね!」

サトシ「こちらこそ!」

そう言うサトシに握手をするナナミ。

ベル「ちよっと、待ってよ。ジム戦に先に挑戦するのはあたしよ!」

コトネ「何言っているのよ私が先よ」

マサト「僕だよ!」

サトシ「何言っているんだよ三人とも。先に挑戦を受けるのは俺だよ」

サトシは、ジム戦に先に挑戦しようとするベルとコトネ、マサトにそう言う。3人は、不満があつたようだが仕方がなくサトシに最初に挑戦する権利を譲った。

ナナミ「それじゃあ、バトルフィールドで会いましょう」

そう言うナナミは、ロッカールームへ向かったのであった。

4つ目のバッジをかけたジム戦にサトシは、どう挑むのか?

第71話 ユガシマシティのジムリーダーと四天王登場（後書き）

サトシ「いよいよ、4つ目のバッジをかけたジム戦が始まるな」  
勝てるといいね。

サトシ「絶対勝って見せるぜ作者」

気合入ってるねサトシ。と言うことで今回は、この辺でお開きいたします。次回もお楽しみに！

第72話 ユガシマジムの水中家（前書き）

久々のジム戦をお送りいたします。

## 第72話 ユガシマジムの水中家

審判「これより、ユガシマジムジムリーダー・ナナミとチャレンジャー・サトシによるジム戦を行う。使用ポケモンは4体。どちらかのポケモンが、全て戦闘不能となった時点で試合終了となります。なお、ポケモンの交代は、チャレンジャーのみ認められます」  
ナナミ「アキナお姉ちゃんを安心させるためにも全力で行きます。私の一番手は、サクラビス！」

ナナミの最初のポケモンはサクラビスである。

サトシ「サクラビス、だったら俺は、ベイリーフ君に決めた！」

サトシは、水タイプに強い草タイプのベイリーフを繰り出した。

ナナミ「セオリー通りで攻めてきたわねサトシ君。なら、先行はそちらからで」

サトシ「お言葉に甘えて。ベイリーフ、はっぱカッター！」

ベイリーフは、はっぱカッターを繰り出した。

ナナミ「サクラビス、水の中へ！」

サクラビスは、はっぱカッターを避けるように水中の中へ入る。

サトシ「ベイリーフ、気をつける」

そう言っつてベイリーフは、辺りを見渡した。

ナナミ「・・・今よ、サクラビス！」

ナナミがそう言っつとベイリーフの後ろからサクラビスが登場する。

サトシ「しまった！」

ナナミ「サクラビス、サイコキネシス！」

サクラビスは、サイコキネシスを繰り出し見事に命中する。

ナナミ「続いて、れいとうビーム！」

サクラビスは、続いてれいとうビームをベイリーフに向けて発射する。

サトシ「ベイリーフ、避けるんだ！」

ベイリーフは、ジャンプして隣の浮島に避ける。

サトシ「ベイリーフ、マジカルリーフ！」

ベイリーフは、マジカルリーフを発射する。マジカルリーフは、スピードスター、だましうちなどのように必ず当たる技である。そして、マジカルリーフは、サクラビスに命中する。

ナナミ「サクラビス、ダイビング！」

サクラビスは、タイピングを繰り返して水中へ潜る。ダイビングは、あなをほる、そらをとぶのように避けること＋攻撃と一石二鳥の技である。ベイリーフは、辺りを警戒する。

そして……

サトシ「ベイリーフ、はっぱカッターを辺りに散らせ！」

ベイリーフは、辺り一帯にはっぱカッターを繰り返す。すると放った同時にサクラビスが水中から出てきてはっぱカッターは、見事に命中する。そして、サクラビスは目を回しながら浮いていた。

審判「サクラビス、戦闘不能！ベイリーフの勝ち！」

審判がそう宣言する。

さて、カスミ達は、観客席でサトシのジム戦を見守っていた。

カスミ「さすが、サトシだね」

デント「セオリー通りで倒したからね」

マサト「ナナミさん。次はどんなポケモンを繰り返すんだらう」

そうウキウキするマサト。

アキナ「ナナミ、バトル技術が私がいなくなる前よりかなり向上してるわね」

ナナミのジムリーダーとしてのバトルを見ていたアキナはそうつぶやいた。

ナナミ「お疲れ様サクラビス。……サトシ君、最初からいい技を見せてくれるわね」

サトシ「そんなことはないですよナナミさん。ナナミさんのサクラビスもいいコンビネーションでしたぜ」

ナナミ「ありがとう。では、私の2体目のポケモンはこの子よ。トリトドン！」



ナナミの2体目はトリトドンである。

ナナミ「トリトドン、ヘドロばくだん」

トリトドンは、ヘドロばくだんを繰り出した。そして、見事命中してベイリーフは倒れてしまう。

審判「ベイリーフ、戦闘不能！トリトドンの勝ち！」

シユウ「あのトリトドン。ヘドロばくだんを覚えているのか!？」

ハルカ「なんか、すごいかも」

ヒナ「あのトリトドン、結構育っているわね」

アキナ「そりゃあ、私の妹だもん」

そうヒナに言うアキナ。

サトシ「ベイリーフ、ご苦労様。次は、こいつだ！ツタージャ、君に決めた」

サトシの2体目はツタージャである。

サトシ「ツタージャ、つるのむち！」

ナナミ「トリトドン、ニトロチャージ！」

トリトドンは、ニトロチャージを繰り出す。

サトシ「ツタージャ、避ける！」

ツタージャは、つるのむちをうまく使いニトロチャージを避ける。

ヤストシ「あのトリトドン、ニトロチャージを覚えているのか」

デント「さっきのヘドロばくだんといいニトロチャージといい対草タイプを予想した技も持っているね」

カスミ「トリトドンは、すばやさがないけど攻撃を終えた後すばやさ上げてくれるニトロチャージを覚えているとすごいわねあのトリトドン」

アキナ「しかし、2体目からエースを出すなんてさすがわね」

ケンジ「え！あのトリトドン、ナナミさんのエースなんですか!？」

ハルカ「どおりで強いと思っただわ」

ベル「どうするのかな？サトシ君は・・・」

観客席からいろいろと意見を述べ合うヤストシ達。

一方、ヒカリは・・・

ヒカリ「サトシく、ファイト！」

ポッチャマ「ポチャ〜！」

ミニロル「ミンミロ〜！」

いつものようにポケモン達ともにチアリーダー姿で応援していた。

ナナミ「トリトドン、みずのはどう！」

サトシ「ツタージャ、リーフストーム！」

トリトドンは、みずのどうをツタージャは、リーフストームを繰り出し技と技がぶつかり合う。しかし、リーフストームの方が勢いがある。みずのどうは打ち破りトリトドンに命中する。

ナナミ「トリトドン、じこさいせい！」

トリトドンがじこさいせいして体勢を立て直そうとする。

サトシ「ツタージャ、メロメロ！」

ツタージャは、メロメロを繰り出しそれが見事トリトドンに命中してメロメロとなる。

ナナミ「トリトドン！」

アイリス「メロメロが効いてるわ！」

デント「メロメロが効いたってことはどうやらあのトリトドンは、

のようだね」

ヤストシ「よし、今がチャンスだぞサトシ！」

観客席は、白熱する。

サトシ「ツタージャ、つるのむちを連発だ！」

ツタージャは、つるのむちをトリトドンに向かってつるのむちを連発する。

そして、トリトドンは目を回した。

審判「トリトドン、戦闘不能！ツタージャの勝ち！」

ナナミ「エースのトリトドンを負かすなんてそのツタージャ、なかなかやるわね。でも、私は負けないわ。私の3体目この子よ。スターミー！」

ナナミは、スターミーを繰り出す。

カスミ「あの子もスターミーを持っているんだ」

アキナ「あら、カスミちゃんもスターミーを持っているの？」

カスミ「はい。でも今は、ハナダジムに預けてあるので・・・」

アキナ「え、もしかして、カスミちゃんはハナダジムの関係者？」

カスミ「はい、私はハナダジムのジムリーダーで今はお姉ちゃん達にジムを任せています」

アキナ「へえ、ハナダジムのジムリーダーなの」

そう言うアキナ。

ナナミ「スターミー、サイコネシス！」

スターミーは、ツタージャにサイコネシスを繰り出しツタージャに命中する。

サトシ「ツタージャ、リーフブレード！」

ツタージャは、リーフブレードを繰り出しスターミーに命中する。

ナナミ「スターミー、バブルこうせん！」

スターミーは、バブルこうせんを繰り出そうとする。

サトシ「ツタージャ、リーフストーム！」

ツタージャは、至近距離でリーフストームを繰り出しバブルこうせんと打ち消してそのままスターミーに当たる。

ナナミ「スターミー！」

スターミーは、立とうとするがむなしく倒れてしまう。

審判「スターミー、戦闘不能！ツタージャの勝ち」

ツタージャが2連勝して王手をかける。

マサト「サトシが王手をかけたよ」

ヤストシ「ナナミは最後何を出すんだろう？」

ヤストシは、ナナミが最後に出すポケモンはなんだろうと考える。

ナナミ「やるわね、サトシ君。でも、私は、最後まで諦めないわ。

私の最後のポケモンは、この子よ！準エース、マリルリ！」

ナナミの最後のポケモンはマリルリである。

ナナミ「マリルリ、あまごいでアクアテール！」

マリルリは、あまごいを仕掛ける。そしてフィールド内で雨が降り始める。そして、あまごいを仕掛けた後アクアテールを繰り出す。

サトシ「ツタージャ、避けるんだ！」

ツタージャは、つるのむちを使って避ける。

サトシ「ツタージャ、マリルリにメロメロ！」

ツタージャは、マリルリにメロメロを繰り出すがマリルリにはメロメロが効かなかった。

ナナミ「残念でした。このマリルリは、なのでメロメロは効きませんよ。マリルリ、ツタージャに向かってれいとうビーム！」

マリルリは、ツタージャに向かってれいとうビームを繰り出す。

サトシ「ツタージャ、避けるんだ！」

ツタージャは、つるのむちを使ってれいとうビームを避ける。

ナナミ「それを待っていたわ。マリルリ、ギガインパクト！」

マリルリは、ギガインパクトを繰り出しツタージャに当たる。ツター

ジャは、大ダメージを受けてしまい目を回す。

審判「ツタージャ、戦闘不能！マリルリの勝ち！」

サトシ「ツタージャ、ご苦労様。よし、ピカチュウ行ってくれ！」

サトシは、ピカチュウを繰り出す。

ナナミ「ピカチュウね。結局最後までセオリー通りで攻めてくるとは、でも、どんなポケモンを出そうが私は、負けないわ！マリルリ、ころがる！」

しかし、マリルリは、動こうとしなかった。いや、動けないと言った方が正しいだろう。実は、この時ナナミは大きいミスを犯した。

ギガインパクトは、使用した後はしばらくは動けないのである。

サトシ「しめた！ピカチュウ、エレキボール！」

ピカチュウは、エレキボールを繰り出しマリルリに当てる。

ナナミ「マリルリ！」

マリルリは、何とかこらえてようやく動けるようになった。

ナナミ「マリルリ、きあいだま！」

マリルリは、きあいだまを繰り出す。

サトシ「ピカチュウ、ボルテッカー！」

ピカチュウは、ボルテッカーを繰り出しきあいだまを避けてそのま

まマリルリにぶつかる。

ナナミ「マリルリ！」

そして、煙が晴れるとそこには、のびているマリルリの姿があった。審判「マリルリ、戦闘不能！ピカチュウの勝ち！よって、勝者チャレンジャー・サトシ！」

サトシ「やったー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

サトシは、ガッツポーズをとる。

カスミ「サトシ、おめでとう」

アイリス「さすがだね、サトシ」

ヒカリ「ホントホント」

サトシ「そんなことないぜ」

カスミとアイリスとヒカリの褒めにそう言うサトシ。

アキナ「ナナミ。よかったわよ、ジム戦。最後のは、ミスだけど他はとてもよかったわ。あれを見てなんか安心したわ。頑張つてジムを守りなさいよナナミ」

ナナミ「はい！アキナお姉ちゃん」

アキナ「さあ、早いところサトシ君にバッジを渡しなさい」

ナナミ「はい。サトシ君、これがユガシマジムのバッジ、スライダ―バッジよ」

そう言つてサトシは、スライダ―バッジを手を取った。

サトシ「スライダー―バッジゲットだぜ！」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ！」

ナナミ「さて、コトネちゃん、ベルちゃん、マサト君のジム戦はまた後日つてとところでどう」

ヒトネ・ベル・マサト「。。。わかりました」「」

アキナ「さて、今日はうちの旅館で泊まってたらどう？」

シユウ「旅館なんか持っているんですか！？」

アキナ「ええ、私の母が旅館を勤めているの。部屋や料理も豪華で温泉もあるわよ」

ヒロイン「。。。本当ですか！？」「」

アキナ「本当よ」

ヤストシ「サトシ、今日はお言葉に甘えて泊まるつよ」

サトシ「そうだな。お願いしますアキナさん」

アキナ「わかったわ。じゃあ、案内するわ」

そう言っアキナは、サトシたちを旅館へと案内したのであった。

第72話 ユガシマジムの水中家（後書き）

次回、アキナの案内された旅館の温泉で波乱万丈が起こる！

### 第73話 波乱万丈の予感（前書き）

今回は、少しキャラの性格が壊れています。  
ご注意ください。



### 第73話 波乱万丈の予感

ジム戦後サトシたちは、アキナとナナミの母が経営している旅館にやってきた。

アキナ「母さん」

アキナの母「あら、アキナ、帰ってたの?」

アキナ「ええ、それより母さん。ナナミのジムに挑戦してきた子達を泊めて欲しいんだけど・・・」

そう言つとアキナの母は、サトシたちを見る。

サトシ「初めまして、マサラタウンから来ましたサトシと申します」  
ハルカ「私、ハルカです」

ヒカリ「ヒカリです」

アイリス「あたし、アイリス。ドラゴンマスターを目指しています」  
カスミ「カスミって言います」

タケシ「自分は、タケシと言います」

デント「僕はポケモンソムリエのデントと申します」

ケンジ「僕はポケモンウォッチャーのケンジです」

シユウ「シユウです」

マサト「マサトです」

ヤストシ「ヤストシと申します」

ベル「アタシは、ベルです」

コトネ「コトネです」

アキナの母「初めまして、私は、アキナとナナミの母親のマナミと申します」

ナナミ「挨拶はこのぐらいにして、母さん。空いている部屋はある?」

マナミ「ええ、2階の203号室と204号室なら空いてるわよ。

そこにサトシ君達を案内して」

ナナミ「はい!」

そう言つてナナミは、サトシ達を部屋に案内した。

ちなみに203号室を男子が204号室を女子が使うことにした。

サトシ「結構広いなこの部屋」

ヤストシ「しかも和風だしな」

そうヤストシが言つた時だった。

???「あら、あなたがナナミにジム戦にしに来た人達ね」

突然声が聞こえて男性陣は、後ろを振り向くとそこに二人の美人がいた。それを見てタケシは、飛びつこうとするがマサトとヤストシがそれを阻止したのは言うまでもない。

デント「どちら様ですか？」

デントは、二人の美人にたずねる。

???「私は、シオリ。こっちは、カオリよ」

カオリ「よろしく」

シオリとカオリが簡単に自己紹介をする。

ヤストシ「（この人達か。アキナさんとナナミちゃんが言っていた遊びほうけていた次女と三女って言うのは・・・）」

ヤストシは、心の中でそうつぶやいた。

ナナミ「あ！シオリお姉ちゃん、カオリお姉ちゃん。何でここにいるのよ！それより、今までどこにいたのよ！」

ナナミが姉二人を問い詰める。まるで、ハナダ姉妹に見られる光景を見ているようだ。

シオリ「私達は、隣町のトヨキシテイに用事があつたのよ」

ナナミ「どうせ、トヨキシテイのカジノでまた遊んだでしょう」

カオリ「何故、わかつたのよ！」

ナナミ「そのぐらいお見通しよ」

怒りながら二人の姉に言うナナミ。

シオリ「それはそうとナナミ。部屋は空いている？お客さん3名を連れてきたのよ。しかも美人を」

ナナミ「へえ、またどうして？」

カオリ「トヨキシテイで遊んでいたらその人達と出会って意気投合

しちゃって、それでユガシマシティのところがいい旅館はあるかね  
つてたずねてきたからここまで案内したの」

ナナミ「空いてる部屋なら母さんに聞かないとわからないけど20  
5号室はさっきキャンセルが来たから空いてるわよ」

シオリ「そう、わかったわ。それじゃあ、お客様にはそう伝えるか  
らあとはよろしく!」

ナナミ「ちよつと、人任せにしないでよ!」

カオリ「いいじゃないのよ。それにお客様は、カントーのハナダシ  
ティからわざわざ来たんだから。それに私達はやることがあるから、  
それじゃあ!」

ナナミ「あ!こら、お姉ちゃん。．．．しょうがないわね、サトシ  
君、ヤストシ君、タケシ君、ケンジ君、マサト君、シュウ君、デン  
ト君、わるいけど少し接待してくるから、お風呂は、1階の奥にあ  
るから」

そう言つてナナミは、部屋をあとにした。

ヤストシ「なあ、サトシ。カオリさん達が言つていたお客さん達、  
確かカントーのハナダシティでしかも3名つて．．．。まさかと思  
うけど．．．」

マサト「僕もなんかヤストシと同じだよ」

サトシ「ハナダから3名で美人ときたら．．．」

ケンジ「もう、あの3名しかないよな」

タケシ「カスミに知れたら大変なことになるな．．．」

マサト「確かに．．．」

シュウ・デント「?????」

サトシ、ヤストシ、マサト、タケシ、ケンジは、カントーのハナダ  
シティから3名でしかも美人ときたらもうあの3人しかないないとサ  
トシ達は、大体想像がついているようだがシュウとデントは、その  
3名が思い浮かばないどころか話の筋も見えなかったのである。ま  
あ、仕方がないと言つたら仕方がないけどね。

さて、それはいいとしてサトシ達男性組は、風呂場に着いた。ちよ

うど同じように女性陣も風呂場に着いて脱衣所で服を脱ぐ。この旅館は、ポケモンとの入浴OKである。しかし、このお風呂は、他のお風呂とは違うところがあったそれは・・・  
全員「混浴風呂!?!」

そう、サトシ達が泊まっている旅館のお風呂はなんと混浴風呂であった。ちなみにこのユガシマシティのお風呂は、なんと98%が混浴風呂である。まあ、98%が混浴なのだから、ほとんどの確率で混浴風呂である。反対に男女別の風呂がある方が珍しいほうである。そのことを、全く知らなかったサトシたちだがしかし一番驚いていたのは、ヒロイン+コトネ・ベルの女性陣である。サトシが好きなカスミ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベルとシュウにほのじ状態のハルカにとつてはかなり驚くべきことだった。

ヤストシ「まさか、混浴風呂とは・・・」

ケンジ「知らなかったな」

タケシ「きれいなお姉さんはいないかな？」

マサト「タケシ、こんなところでナンパは、しないですよ」

マサトがタケシにそう言う。そしてシュウはと言つと・・・

シュウ「（ハルカの裸姿か・・・。つて、僕はなに嫌らしい妄想をしているんだ）」

そう心の中でつぶやいてシュウは、首を振る。

????「おや、サトシじゃないか」

????「ホントだ!」

サトシ「あ! ケンゴとタツヤ!」

なんとそこには、先客がいてしかもケンゴとタツヤであった。

タツヤ「ここに来たと言うことは、ジム戦しに来たのか?」

サトシ「ああ、さっきな。もちろん勝ったぜ」

ケンゴ「と言うことは、ピカリもいるのか?」

タケシ「そうだけど?」

ケンゴ「（ピカリの裸見たの初めてだな。触りたい）」

と思わずエロい妄想するケンゴ。

ヤストシ「ケンゴ、一応言っとくけどいくらヒカリのことが好きだからといって変な考え起こすのだけは、止めるよな」

ヤストシがサトシたちに聞こえないほどの声でケンゴにそう言う。ケンゴ「！し、してないですよ僕は」

ヤストシ「嘘つけ顔が笑ってたぞ。大方変な妄想したたんだろう？」ヤストシの答えにケンゴは、ドキツとした。ヤストシの答えは、ほとんどあっていた。

一方少し離れた場所にヒロインとベルとコトネ、そして先客のヒジリがいた。また、あとからカスミの姉　サクラ、アヤメ、ボタンが入ってきた。最初は、驚きながら怒っていたカスミだが今はなんと落ち着きを取り戻していた。

カスミ「ところで、お姉ちゃん達はどうしてここに？」

アヤメ「実は、この間デパートの景品に当たってホクシンに来たの！」

サクラ「それでトヨキシテイで歩いてたらカオリさんとシオリさんと出会ってここへ案内されたのよ」

ハルカ「そうなんだ」

ボタン「ところで、みんなはサトシ君のところへ行かないの？」

そうアヤメから言われてハルカを除く女性陣はサトシの名前が出た途端・・・

カスミ「な、なんでサトシのところに行かなきゃあ行けないのよ／／」

ベル「そうですよ／／」

コトネ「同感です／／」

アイリス「誰がサトシなんか／／」

ヒカリ「な、なんでここでサトシが出てくるんですか／／」

急に顔を真っ赤にさせて、慌てふためいた。

ボタン「（ふふふ、この子たちからかい甲斐があるわ）あら、私はサトシ君のところへ行かないの？って言ったけどサトシが好きでしょうなんて言っていないわよ」

そうボタンが言うとカスミとヒカリ、アイリス、ベル、コトネはさらに赤くなる。

サクラ「だったら、頑張つてアプローチしなきゃね」

アヤメ「それとも、わたし達があなた達の気持ちに気づかないでも思った？」

横入りするように会話に参加したサクラ、アヤメも3人をからかうように言う。

カスミ「さ、サトシはあなし達の体を見せても誘惑しても気づかないわよ／／／」

ヒカリ「そ、そうですよ／／／」

アイリス「そ、その通りです／／／」

コトネ「て言うか恥ずかしいですよ／／／」

ベル「・・・／／／」

サクラ、アヤメにそう反論するカスミ、ヒカリ、アイリス、コトネと恥ずかしくつて言葉も出なかったベルであった。

カスミ「あ、あたしも出るわ／／／」

ヒカリ「あ、あたしも／／／」

そう言つてカスミとヒカリは、温泉からあがる。

ハルカ「私も出るわ」

ヒジリ「私も」

ハルカとヒジリは、カスミとヒカリに続いて風呂に出た。

その頃サトシたちは・・・

サトシ「さてと出るか」

そう言つてサトシは、風呂を出る。

シュウ「僕も」

ケンゴ「僕も」

タツヤ「俺も」

シュウ、ケンゴ、タツヤも同じく風呂を出る。

二人は、脱衣所に向かう途中ちょうどカスミとヒカリとハルカとヒ

ジリに遭遇した。

サトシは、普段見れないカスミのタオルを体に巻いた姿に驚いていとき後ろから来たシュウがサトシにぶつかりその拍子でバランスを崩し、お風呂であったこともあり足を滑らせるサトシそれも、運悪くカスミの方に倒れてしまった・・・。

サトシ「ててて・・・ごめんカスミ・・・ん？」

サトシはカスミに覆い被さる様に倒れたのだが大体人が倒れそうになる場合手を地面につく・・・しかしサトシの手は、思いがけない所についていた・・・。

それは・・・カスミの胸だった。

タオルの上からだがしっかり、その手はカスミの胸の上にある

カスミ「ア・・・アンタは・・・どこさわってんのよ！バカア！！！」

カスミは、怒りとあまりの恥ずかしさによりサトシを跳ね除け風呂場から出ていってしまう。

とうの、サトシは跳ね除けられた拍子でお風呂に見事に落ちた。カスミは、胸を触られたこともそうだが、サトシだったこともあり顔を真っ赤にしながら服を着て、その風呂場から走って出ていった。

ケンゴ「いいな。サトシく僕もヒカリの胸を・・・」

つい下心がポロリと言ってしまったケンゴ。

ヒカリ「私の胸がなんですか？」

ケンゴ「あ！ヒ、ヒカリ！？」

ヒカリ「ケンゴの・・・バカア！！！」

ケンゴもサトシと同じくお風呂に見事落ちてしまう。ヒカリもそのまま脱衣所に入っていった。さらに、ハルカとヒジリのタオルがはがれ落ちてシュウとタツヤに見えてしまう。しかし二人としては、あまりにも刺激が強すぎて鼻血出して気絶した。

ハルカ「シュウ！」

ヒジリ「タツヤ！」

ハルカとヒジリは、体より倒れたシュウとタツヤを心配した。

ヤストシ「バカだな」二人とも

物陰から一部始終を見ていたヤストシは、呆れてしまう。

タケシ「うらやましいぜヤストシ、ケンゴ、シユウ、タツヤ。よし、サクラさん、ボタンさん、アヤメさんのところへ行つて……うっ！？」

ナンパモードに入ったタケシがサクラ達のもとに向かおうとした途端、タケシのグレッグルがタケシにどくづきを喰らわせて、

タケシ「しびれびれ」。

タケシはお馴染みの台詞を吐きながら、その場に倒れた。

デント・ケンジ・マサト「……」

デントとケンジとマサトは今の光景に言葉を失った。

そんな時混浴風呂を見渡すことが出来る山の中に……

「撮れたか？」

「撮れた撮れた。カスミさんとハルカさん、ヒカリさん、アイリスさん、コトネさん、ベルさん、ヒジリさん、それにハナダの美人3姉妹まで撮れたけどやっぱりカスミさんとハルカさん、ヒカリさん、ヒジリさんの裸姿だな！」

「これはマニアに高く売れるぞ！」

「それより、ここで可愛いヒカリさんをお目にかかれるとは何かの縁。シンオウでは伝わらなかつた僕の気持ちをあなたに伝えます」

「ヒカリちゃんが好きなんだお前は。俺は、ハルカちゃんだな。可愛いし。お前がやるなら、俺も気持ちを伝えるぞ」

「アイリスちゃんにベルちゃん可愛いな。どっちをとったらいいんだろう？困っちゃう」

露天風呂から女性陣を盗撮していた怪しい3人組。

果たしてこいつらは、何者なのか？



### 第73話 波乱万丈の予感（後書き）

サトシ「作者、何だよこの話は！」

ケンゴ「僕はあんな変態な性格じゃないぞ！」

シュウ「ハルカに合わせる顔がないよ……」

タツヤ「俺もだよ！どうしてくれるんだい！」

お、落ち着け四人とも。

シュウ「今日という今日は」

ケンゴ「絶対に」

サトシ「許さん（怒）」

ひええええええええええええええええ。

シュウ「ロズレイド、ソーラービーム！」

ケンゴ「フローゼル、アクアジェット！」

タツヤ「プクリン、シャドーボール！」

サトシ「ピカチュウ、エレキボール！」

ちよつとま……………うわ……………わわ！

！！！！！！

ドカーン

何でこうなるのよ（T|T）やな感じ〜。

キラーン

ヤストシ「お前が悪いんだよ作者。と言うことでめでたく作者が吹っ飛んだところで次回もお楽しみに」

第74話 勘違いが恋花の芽をつける(前書き)

今回は、新しいキャラを登場させます。もちろんアニメキャラです。

## 第74話 勘違いが恋花の芽をつける

前日ユガシマジムを制覇してバッジを手に入れたサトシ。今日はコトネ、ベル、マサトがユガシマジムに挑戦する予定でサトシ達は、ユガシマジムへ向かっていた。なお、カスミとヒカリの機嫌はもうすっかり直っていた。

そんな時だった。

ハルカ「あれ？」

シユウ「どうしたんだいハルカ？」

ハルカ「あそこにいるのって、エブチ隊じゃない？」

ハルカが指を指した方角を見ると確かにエブチ隊がそこにいた。

ヒカリ「エブチ隊の皆さん」

ヒカリがエブチ隊の隊員に向かって声をかける。

ロボットA「おや、ヒカリちゃん達じゃないか。ここにいるってことは、ジム戦かい？」

サトシ「はい。俺は、この通りバッジを手に入れて今日は、コトネとベル、マサトが挑戦するんです」

そうエブチ隊の隊員に説明するサトシ。

ロボットA「そうか、がんばりたまえ」

アイリス「ところで、エブチ隊がここにいるの？」

アイリスがたずねると隊員が答える。

ロボットB「実は、ここ最近。ユガシマに盗撮するアホどもが出没しているんだ」

ロボットC「そいつら、飛行ポケモンや高いところから女湯をのぞいて写真を撮って売るといいうあくどいやつらがいつてね」

コトネ「盗撮！」

ベル「いやだよそんな人達がうるついでるんなんで・・・」

カスミ「エブチ博士の命令で取り締まっていますか？」

そうカスミが聞くとエブチ隊は・・・

ロボットC「実は、この命令を出したのはエブチ博士じゃないんだ」  
ヒカリ「え！じゃあ、誰が命令したんですか？」

ロボットA「アヤノさん」  
ハルカ「え！アヤノさんが!？」

タケシ「でも、指揮権はエブチ博士じゃあ・・・」  
タケシがエブチ隊にたずねる。

ロボットB「実は、指揮権は、エブチ博士しか持ってないが命令に  
関してはアヤノさんにも俺達に命令することが出来るんだ」

ロボットC「つい先日、ユガシマに盗撮が出没していると聞いてア  
ヤノさんが『女子として許される行為じゃないわ！あなた達、この  
盗撮犯を御用にして来なさい。出来ないなら射殺してもかまわない』  
ってそう言われたんだ」

ロボットA「さすがに射殺はまずいからこうやって取締りをしてい  
るんだ」

タケシ「いかにもアヤノさんらしい命令だな」

ロボットB「それで、俺達は、不審な飛行ポケモンや女湯をのぞく  
ことの出来る場所に行つて怪しいやつがいるかどうか取り締まるん  
だ」

そう言つた時だった。

ロボットC「おい、あそこの飛行ポケモンなんだか怪しいぞ」

隊員が指を指す。そこには、1匹のチルタリスがいた。

ロボットA「よし、威嚇してポケモンをこっちにおびき出せ！」

ロボットB「了解！」

そう言つて隊員が小型ロケットランチャーを用意する。

サトシ「ちよつと、待つてください」

アイリス「そんなのをポケモンに当てたら・・・」

サトシとアイリスがロケットランチャー発射を止めようとする。

ロボットA「心配するな。このロケットランチャーは、眠り薬を入  
れたミサイルだからポケモンを傷つけることはないよ」

そう説明する隊員。

ロボットB「よし、発射！」

隊員は、ミサイルを発射して見事チルトリスに命中する。そんな時だった。

マサト「あれ？誰かが落ちてくるよ」

そうマサトが言うのと確かに誰かが落ちてくる様子が見えた。

ロボットC「なに！？」

そう言われて隊員は、双眼鏡で見る。

ロボットC「ホントだ！人が落ちてくるしかも女性だ！」

そう言うのと女性は地上へと落ちてくる。

ヤストシ「まずい！ミミロップ、あの女性を助けるんだ！」

そう言うってヤストシは、ミミロップを繰り出しミミロップは、女性を見事キャッチし助けた。

ヤストシ「でかしたぞ、ミミロップ」

ヤストシは、ミミロップの頭をなでた。そして、隊員がそこへやって来て女性を見る。

ロボットA「おい！この人、ナギさんじゃないか！」

ロボットB「ホントだ！ヒマワキシティジムリーダーで天才飛行使いのナギさんだ！？」

そう隊員が言うのとサトシたちもやって来た。

ハルカ「ナギさんだわ！」

サトシ「ホントだ」

ロボットC「参ったな。完全に誤射だな」

ロボットA「とりあえず、旅館へ運ぼうか。この辺ポケモンセンターがないからな」

ロボットB「よし、ヤストシ、ナギさんをおぶれ」

ヤストシ「なんで、俺なんですか！」

ナギをおぶるよう隊員に言われて文句を言うヤストシ。

ロボットA「頼むよ。俺達は任務があるしサトシ君とシユウ君は、好きな女の子がいるしタケシ君だとナンパしそうだしまサト君は、体格的に無理があるしデント君とケンジ君はないからヤストシ君だ

けしかないんだよ」

ヤストシ「わかりました。俺がおぶりますよ」

ヤストシがよくよく折れておぶり旅館へと運んだ。

旅館へついたエブチ隊とサトシ達は、マナミさんに訳を話し204号室にナギを運んだ。

その後、コトネとベル、マサトは、ジム戦を行うため旅館を後にしてヒロイン組は、その辺を散歩しに行きタケシはサトシとともにヒロイン組同様散歩に行き部屋には、ヤストシ一人がナギの世話をしていた。

ヤストシ「(何で俺が世話しなくちゃあいけないんだよまったく……。……それにしてもナギさんの寝顔可愛いな……。って！何考えてるんだ俺は！)」

ヤストシは、慌てて頭を振る。そこへ、ヒナが部屋へ入ってくる。

ヒナ「ヤストシ君、ナギさんの様子どう？」

ヤストシ「いまだに目を覚ましていません」

ヤストシがヒナにそう言う。

ヤストシ「それにしてもびっくりしましたよ、まさかヒナさんがナギさんの二番弟子だったとは……」

ヒナ「いいのよ、昔のことだし。それにナギさんにいろいろ技術を教わったからこそ四天王の座に今の私があるんです」

そうヤストシに言うヒナ。何故ヒナも看病しているのかと言うと実は、ヒナは、元々ヒマワキジムの二番弟子であると本人が打ち明けた。ヤストシは、それをさきほど聞いて納得したのだ。

ヒナ「私、飲み物買ってくるからよろしくお願いします」  
そう言うてヒナは、部屋を出て行った。

ヤストシ「さてと、俺はあつちで荷物の整理でも……」

ヤストシが立つ上がるうとしたその時、ナギが目を覚めたのだ。  
ナギ「あら……？ここは？」

ヤストシ「旅館ですよナギさん」

ナギ「あ、あなたは、確か・・・」

ヤストシ「前にヒマワキジムに挑戦しに来たヤストシです」  
そうナギに言うヤストシ。

ナギ「私、どうしてここに・・・」

ヤストシ「すいません、エブチ隊が盗撮犯を探してたら不審な飛行ポケモンがいて催眠ミサイルを撃つたらナギさんが落ちて来てそれで俺のミミロップを出して助けたんです」

ナギ「そうでしたかありがとうございます。それで私のチルタリスは？」

ヤストシ「チルタリスでしたらこのモンスターボールに入れてあります」

ナギ「ありがとうございますヤストシ君」

笑顔でヤストシに言うナギ。そしてナギが立とうとした時。

ナギ「きゃあ!？」

ナギがバランスを崩して倒れそうになってヤストシが捕まえる。

ヤストシ「大丈夫ですかナギさん？」

ナギ「だ、大丈夫です」

ナギがそうヤストシに言う。そして、ヤストシはナギの肩を担ぐ。

ナギ「すいませんヤストシ君」

ヤストシ「どういたしまして」

ヤストシがそう言った時だった。そこへ、ちょうどよくヒナが帰ってきた。

ヒナ「あ!ナギさん、目を覚ましたんですか!？」

ナギ「ヒナ、久しぶりだね」

ヒナ「でも、どうしてここに来たんですか？」

ヒナがナギにそうたずねる。

ナギ「ヒナが四天王になったと聞いて暇を見つけてホクシンまでやって来たのよ」

そうヒナに言うナギ。

ヒナ「それにしてもナギさんちゃんったら随分仲がいいのですね」

ナギ「え？」

ヤストシ「？」

ヒナは突然そんなことを言う。

ヒナ「だって、そんなに寄り添っちゃって！」

ナギ「あ、こ、これは私が倒れそうになった時ヤストシ君が肩を借りているだけです！」

ナギは顔を真っ赤にしてそう反論した。

ヤストシ「（俺の顔は大丈夫かな・・・？）」

ヒナ「ふふ、顔真っ赤にして　もしかしてそれは口実じゃないの？」

ナギ「な、そ、そんなこと！」

ヤストシ「（口実か・・・。それはどちらかと俺の方が・・・なんだかんだでナギさんのことは可愛いと思うし・・・。でも、なんだろうこの感情は？）」

ヤストシは、心の中でそうつぶやく。

ヒナ「ふふ、ヤストシ君は気があるんじゃない？」

ヤストシ「え！？ええっ！？」

ヒナは、いきなりナギに続き今度はヤストシが名指しされる。

完全な不意打ちにヤストシは、予想だにできなかった。

ヒナ「あら、図星だった？」

ナギ「そ、そうなんですか・・・？」

ヤストシ「そ、それは・・・」

顔が火照っている。

ここまで火照ればさすがにヤストシでもわかる・・・。

ヒナ「おお？」

ヤストシ「あるかもしれませんね」

ナギ「え・・・？」

ヤストシ「あ、俺、ちょっと外の空気を吸ってきますのでヒナさん。あとのこと、よろしく願いします」

そう言っつてヤストシは、部屋を出て行った。



ヤストシ「（まだ、心臓のドキドキが止まらない・・・）」

ヤストシは、胸を当てながら心の中でつぶやく。

ヤストシ「・・・言ってしまったんだろうか？今まで十数年ね恋すらしなかった俺がまさかあんなことを言うなんて・・・」

ヤストシはちよつと気まづくになりそうなの気分で廊下を歩き外へ出かけたのであった。

第74話 勘違いが恋花の芽をつける(後書き)

ヤストシに春の予感がしてきました。さて、次回はさらに新たなキ  
ヤラと盗撮犯が姿を現します。

第75話 盗撮犯を捕まえる(前書き)

盗撮犯登場します。そして、久しぶりにあのキャラが登場します。

## 第75話 盗撮犯を捕まえる

ヤストシがナギに恋を抱いた(？)頃、エブチ隊は、盗撮魔を捕まえるためそこら辺をパトロールしていた。

ロボットC「いませんね、盗撮魔」

ロボットA「当たり前だろう、そう簡単に盗撮魔が見つかるわけないだろう」

ロボットC「それもそうだが・・・」

隊員がそうつぶやいた時だった。

ロボットB「おい、あそこの裏路地に怪しい露店があるぞ」

そう隊員が言うのと確かに怪しげな露店があった。

ロボットA「ちょっと、行ってみるか」

そう言つてエブチ隊は、怪しい露店へ行ってみた。

???「いらっしやい、いらっしやい」

???「有名人のプロマイドは、いかがですか」

男2人組がそう言う。どうやら、有名人のプロマイドを売っているようだ。

ロボットB「プロマイドか。どういふのを売っているのかね？」

隊員の一人が男達にたずねる。

男A「はい。こちらには、オーキド博士やウチダ博士、アララギ博士、マコモ博士といった有名研究者のプロマイドを売っています」

男B「特に、オーキド博士とマコモ博士のプロマイドはよく売れまして」

男は、そうエブチ隊の隊員に言う。

ロボットC「どう思います隊長？」

ロボットA「別に普通に市販のプロマイドたがな・・・」

確かにどれも一般のお店でよく売られているプロマイドである。

ロボットB「少し、攻めて見ますか」

そう隊員が小さい声でそう言うのと男に話しかけてみる。

ロボットB「他には、ブロマイドはないかね？」

男C「ありますが、これはお得意様じゃないと売らない商品なので・・・」

そう男が隊員に言う。

ロボットA「（お得意様じゃないと売らない商品？）」「

ロボットC「（臭う、何か臭うぞ）」「

ロボットB「その商品見せてもらえませんか？」

男A「これだけは、無理ですよお客さん」

そう断る男。

ロボットB「頼むよ。もし、いいものなら、500万で買っぞ。ウソじゃないぞ。ほら、現金」

隊員が大金で払うといい、ウソじゃないという証拠を見せるかのよ  
うに大金を男達に見せる。

男B「あ、兄貴。5、500万ですよ！」

男C「ど、どうする兄貴！」

男A「こんだけの大金だ。儲けるチャンスだ！」

男B「そうだな」

男達は、コソコソしながらそう言う。

男A「わかりましたお客さん。お客さんだけ、特別に売りますよ」

ロボットC「どんなものなのかな？」

そう言った時、男はブロマイド・・・と言うより写真が出てくる。

そこには、なんとタオル一枚の女性がたくさん写っている写真であ  
った。

ロボットB「隊長！」

写真を一枚一枚見ながら隊員がそう言った。

ロボットA「間違いなく盗撮写真だ」

そう写真を見るとそこに、なんとカスミ、ハルカ、ヒカリ、ヒジリ  
の裸姿の写真があった。さらにコトネ、アイリス、ベル、ハナダ美  
人3姉妹の写真まであった。

男A「それで、どれが気に入りましたでしょうか？」

男がそうたずねるとエブチ隊は、一斉に頷きそして・・・

ロボットA「お前達、盗撮魔だな」

隊員がそう言うのと男達が戸惑いを見せる。

ロボットB「俺達、泣く子も黙るエブチ隊だ！」

ロボットC「御用だ！お前達」

そう言うのと男達は、冷や汗を流しそして・・・

男達「・・・逃げーーーーーろ!!!!!!!!!!」

男達は、逃亡を始める。

ロボットB「待ちやがれ！」

隊員は、そう言うて追いかけ始める。

ヒカリ「ねえねえ、今度はあそこのお店に行こう」

カスミ「それより、この店なんかいいじゃない」

ハルカ「ここって、結構おいしいまんじゅうがあるって噂のお店だよね」

アイリス「行ってみようか」

そうヒロイン達が喋っていた時だった。男達をエブチ隊が追って行った。

ロボットA「あ！カスミちゃん、ハルカちゃん、ヒカリちゃん、アイリスちゃん。そいつら捕まえて！」

ロボットC「そいつら、盗撮魔だ！」

カスミ・ハルカ・ヒカリ・アイリス「・・・盗撮魔！」

ヒロイン達は、驚く。

男A「あ、ハルカちゃんだ！」

男B「抱きついちゃえ」

男C「賛成」

男達は、ヒロイン達を抱きつこうとする。

カスミ・ハルカ・ヒカリ・アイリス「・・・キャーーーーー  
ーア!!!!!!!!!!」

そう叫ぶヒロイン。そして、男の一人がアイリスに抱きつこうとし

た瞬間。

ロボットA「はきよい！」

エブチ隊の一人が男の後ろに抱きつく。

男A「は、離せ！」

男は、必死でエブチ隊隊員を振り払おうとする。

ロボットA「女に抱きつくこうとする男は、柔道3段の俺が成敗してやる。とりゃあ！」

隊員は、男を川に投げ込み男は、気絶する。

ロボットA「どうだ、俺の上手出し投げは！」

ロボットB「力士か！上手出し投げは、柔道じゃなくて相撲の技なんですけど」

隊員がそうツツコム。

ハルカ「は、離して！」

そんなことをしているうちにもう一人の男がハルカに抱きついていった。

男B「やわらかい頬だな」

男は、まるで抱き枕のようにハルカを扱う。

ハルカ「離して！」

ハルカは、懸命に抵抗する。

男B「それにこの胸に大きな。モミモミしてやるつか」

ロボットC「まずい！」

ロボットA「これ以上ほつといたら18禁だ！」

ロボットB「取り押さえるぞ！」

エブチ隊がハルカに抱きついていて男を取り押さえようとしたその時。

???「ロズレイド、マジカルリーフ！」

突如、男に向けてマジカルリーフが飛んできて男は、吹き飛び気絶する。

ハルカ「シュウ!?」

そう、ハルカを助けたのはほかでもないシュウであった。

シユウ「僕のハルカに抱きつくなこの下賤げせん」

男に向けてそう言うシユウ。ハルカは、思わず顔を真っ赤にする。

ロボットA「好きな女の子を助けるとは……」

ロボットB「愛の力、恐るべし……」

隊員は、シユウを見てそう思った。

男C「まずい！」

男は、そう思い逃げようとした。

???「ウォーグル、ギガインパクト！」

???「ピカチュウ、ボルテッカー！」

突然2匹のポケモンが登場してトレーナーが指示を出して技を放つ。

そして、技は男に命中して気絶する。

カスミ「サトシ!？」

アイリス「タクヤ!？」

そこにいたのは、サトシとタクヤであった。

ヒカリ「サトシ、タクヤ。どうしてここに？」

サトシ「さつき、カスミ達の悲鳴声が聞こえて行く途中、タクヤと会ったんだ」

サトシは、そう説明をする。

カスミ「それじゃあ、タクヤはどうしてここに？」

タクヤ「俺は、この街について散歩したらエブチ隊が「待て、盗撮魔!」と叫んでいたから追いかけてたんだ」

アイリス「そうなんだ」

タクヤの話聞いてそう言うアイリス。

ロボットA「さてと、こいつらを連行しますか」

ロボットB「そうだな」

そう言うてエブチ隊が連行しようとした時、複数の写真が落ちてサトシとシユウが拾い上げる。

サトシ・シユウ「こ、これって!?!？」

そこに写っていたのはカスミとハルカの裸姿の写真であった。さすがにこれには、刺激が強すぎて二人は、倒れてしまう。



カスミ・ヒカリ・アイリス「「サトシ！」」  
ハルカ「シュウ！」

突然倒れたことに戸惑うカスミとハルカとヒカリとアイリス。そして、二人が見ていた写真を見てヒロインたちは、驚くが反面倒れた理由がわかった。

カスミ「（アタシの裸写真を見て倒れるなんてお子ちゃまね〜）」

ハルカ「（シュウ・・・）」

ヒカリ「（カスミの裸の写真で倒れるなんて、なんかある意味うらやましいかも〜）」

アイリス「（子供ね〜）」

ヒロインたちは、心の中でそう思った。

そして、ヒロイン達は、サトシとシュウを背負って旅館へ連れて行った。

第75話 盗撮犯を捕まえる（後書き）

今回は、18禁スレスレだったかな？

さて、次回、さらに大変な展開を迎えます。

## 第76話 宴会所で大波乱（前書き）

あの悲劇がまた起こります。また、サトカス要素・シユウハル要素・シゲル ヒカリ ケンゴ要素を入れています。

\*なお、今回ハーレム要素も入っています。

## 第76話 宴会所で大波乱

盗撮魔は、無事に御用となりコトネ、マサト、ベルは、スライダーバッジをゲットして今、旅館の宴会場にエブチ隊とサトシたちが集まっていた。なお、この宴会にエブチと一緒に行動していたシゲルとケンゴ、ナギ、ヒナ、アキナが呼ばれた。

ロボットA「それでは、無事に盗撮魔を御用とコトネちゃん、ベルちゃん、マサト君のバッジをゲットしたお祝いに乾杯！」

全員「乾杯〜」

隊員の一人がそう言っただけで食事が始まった。

マサト「おいしい！」

ハルカ「このお刺身も最高かも」

アキナ「当たり前だよ。ウチの旅館は、高級レストラン並みの味だから」

ロボットB「さあ、どんどん食った食った」

隊員がそう言う。

ヒカリ「ねえ、サトシ」

サトシ「なんだ、ヒカリ？」

サトシがヒカリにそう言うところ・・・

ヒカリ「はい、サトシあく〜ん」

ヒカリが料理をサトシの口元へ差し出す。

サトシ「ヒカリ、自分で食べられるからいいよ」

サトシが断るが・・・

ヒカリ「・・・グス、サトシ。アタシの食べてくれないんだ・・・」

ヒカリが泣きそうな顔+上目遣いでサトシを見つめる。

サトシ「・・・う、分かったよ。」

ヒカリの顔を見て、なくなるとヒカリに食べさせてもらうことにするサトシ。ちなみにサトシは、ヒカリの悲しそうな顔にやられていたわけではない。 やっぱりエモンガ、そっくりだ by 作者

ヒカリ「ホント！？じゃあ早速、あ〜ん」

サトシ「あ〜ん」

料理がヒカリによってサトシの口へと入って・・・

コトネ「パクッ」

来なかった。サトシの口に入るすんでのところで、コトネが料理を横取りしたのだ。

ヒカリ「ちよつと、コトネ！せつかくいいところだったのに」

コトネ「ヒカリンだけいい思いはさせないわよ」

すると今度はコトネがサトシに・・・

コトネ「じゃあサトシ。あ〜ん」

サトシ「え、ええ！？」

サトシは困惑する。すると・・・

アイリス「ちよつと、抜け駆けは許さないわよ」

カスミ「コトネもなにどさくさにまぎれてんのよ」

ベル「サトシ君が困ってるじゃない」

女子達によるサトシ争奪戦勃発。原因は誰がサトシに「あ〜ん」をするかということである。サトシ本人は、なぜ女子達が言い合っているのか分かっていないようである。その様子を見ていたヤストシ

は・・・

ヤストシ「(相変わらず鈍感だなサトシ)」

呆然と見ている。すると、ヤストシは、自然とナギの方向を見る。

ヤストシ「(俺もナギさんに・・・って、何考えてるんだ俺は!)」

ヤストシは、心の中でそうつぶやき頭を振る。

タケシ・ケンゴ・シユウ・シゲル「(うらやましいよサトシ

(君))」

タケシとケンゴとシユウとシゲルは、見ていてそう思った。

サトシ「・・・」

サトシは為す術なしのご様子である。というよりも女子達が出す雰  
囲気に手を出せない状況になっている。

ハルカ「はい、シユウ。あゝん」

ハルカも自分もやろうとシユウに「あゝん」をさせる。シユウは、  
口を大きく開けて料理を口へと入って・・・

マサト「パクッ」

来なかった。シユウの口に入るすんでのところで、マサトが料理を  
横取りしたのだ。

ハルカ「ちよっと、マサト。何するのよ!」

マサト「お姉ちゃん、こんなやつにあぐんさせて料理を入れさせるなんて神様や仏様が許しても僕が許さない！」

ハルカ「ちよつと、シユウに向かつてあんなやつなんて言って！」

マサト「僕は何が何でも許さないんだから」

マサトがハルカにそう言った。

シユウ「・・・」

シユウは為す術なしのご様子である。というよりも姉弟に出す雰囲気に出せない状況になっている。

サトシ「お、俺ちよつと、トイレに・・・」

シユウ「僕も」

ヤストシ「同じく」

タクヤ「・・・」

サトシ争奪している女子達と姉弟ケンカから逃げるようにサトシとシユウが宴会場を抜けてヤストシもナギを見ていたら理性が保てなくなり同じく抜けてタクヤは、何故かサトシたちの後をついて行き宴会場を出る。

サトシ「はあ、普通に飯を食わせるよな」

サトシは、近くの休憩場のため息を1回つく。

シユウ「それは、僕も同じだよサトシ君」

シユウもサトシの意見に同調する。

シユウ「まあ、僕とサトシ君は、まだわかるけど、どうして君までここにいるんだいヤストシ君？」

シユウがそう言うのと休憩場の入り口で壁に寄りかかるヤストシに声をかける。

ヤストシ「別にいいだろう、俺はのどが渴いたから炭酸飲料を買いに来たんだよ」

ヤストシは、シユウにそう言い訳をする。

シユウ「のどが渴いて炭酸飲料を買いに来たね・・・」

シユウが横目しながらヤストシに言う。

ヤストシ「さあ、みんなのところへ戻ろう」

ヤストシは、逃げるように休憩場をあとにした。

サトシ「何だったんだろう？」

シュウ「さあ？」

ヤストシの行動に理解できなかったサトシとシュウであった。

休憩場から逃げるように宴会場に戻ってきたヤストシ。

ヤストシ「まさか、ナギさんを見ていたら理性か保てなかったなんてシュウとサトシに言えるわけないしな。まあ、それより、早く飯を食おう」

ヤストシは、宴会場の扉を開けると・・・

ヤストシ「なんじゃこりゃ！」

サトシ「どうしただヤストシ？」

そこへサトシとシュウが戻ってきてヤストシが開けた扉を見るとヒロイン＋ベルとコトネ、タケシ、デント、ケンジ、マサト、シゲル、ケンゴ、ナギ、ヒナ、アキナ、エブチ隊員が倒れていた。

シュウ「一体何があったんだ」

ヤストシ「まさかだとは、思うが・・・」

ヤストシは、辺りを見渡すとそこにはワインが数十本転がっていた。

ヤストシ「やつぱり。また、こいつら、酒を飲んだぞ」

ヤストシが大きい声でサトシとシュウに言う。

ちなみにまたとは、アカサキタウンのポケモンセンターでお酒を飲んだことがあるのだ。この時は、間違えてお酒を飲んだが今回は、無理矢理エブチ隊がカスミ達にお酒を飲ませたようだ。何故かわつたかと言うとエブチ隊の一人が「ほらほら、もっと飲めやシゲル君」と寝言を言っているからだ。

するとそこにヒロイン＋ベル、コトネがやってきた。

カスミ「サトシ、どこへ行っていたのよ」

アイリス「抜け駆けは許さないわよ、カスミ」

コトネ「そういうアイリスだって、抜け駆けしているわ」



ベル「サトシく〜ん」

サトシ「えっ、ちよっとおま・・・わああああ！」

4人は、酔っ払いながらサトシを押し倒しキスをする。

ハルカ「シユウ、私もキスしてあ・げ・る」

シユウ「は、ハルカ。ちよっと・・・わああああ！」

ハルカも酔っ払いながらシユウを押し倒しキスをする。

ヒカリ「あ、みんなずるいわよ〜。あ、アタシだってサトシに・・・

」

ヒカリは、酔っ払いながらサトシに近づこうとした。

シゲル・ケンゴ「ヒカリ！！」

そこへ酔っ払っていたシゲルとケンゴは、ヒカリに飛びついた。

ヒカリ「シゲル！ケンゴ！」

突然飛びつかれてヒカリは、戸惑う。

シゲル「ヒカリ、僕、君のことが好きなんだ」

ケンゴ「僕もだよ。ピカリ」

ヒカリに酔っ払いながら告白するシゲルとケンゴ。

シゲル「ヒカリ、僕のものだ！」

ケンゴ「いいや、僕のものだよ！」

酔っ払いながらヒカリを取り合うシゲルとケンゴ。

シゲル「ヒカリは、僕のものだ！」

シゲルは、そう言ってヒカリの唇を奪う。

しかも、普通のキスでなく激しく、強いキスによって。

ヒカリ「！！んっ、ふっっ」

いきなりシゲルの舌がヒカリの口内に入り込んできた。こんなことは初めてでヒカリは思わず離れようとしたが、シゲルの腕が背中から後頭部にかけてしっかりとホールドされていて体は微動だにしないかった。その間にもシゲルはヒカリを侵食していく。

次第にヒカリは頭がボーッとして、抵抗していた体も力が抜けてきた。

ケンゴ「僕の前でヒカリの唇を奪うなんて！なら僕は、ピカリのミ

二・・・」

ゴーリーン

ケンゴが酔っ払いながらヒカリのミニスカを脱がそうとしたがヤストシがどこからかハンマーを持ってきてケンゴの行動を阻止してケンゴは、気絶する。

ヤストシ「やめんかい！18禁になるだろう！」

ヤストシは、ケンゴにそう言う。

シゲル「さあ、邪魔もいなくなったし、部屋のベットでゆ・・・」  
ゴーリーン

ヤストシは、シゲルにもハンマーを叩き気絶させる。

ヤストシ「だから、18禁になりそうな行動は止める」

ヤストシは、シゲルにそう言った。

ヒカリは、ようやく開放されてサトシのほう行った。

その頃、サトシとシユウは、キスされていた。

ハルカ「シユウも飲んで飲んで」

ヒカリ「サトシも飲んだ飲んだ」

ハルカと後からやってきたヒカリがワインを持ってきた。すると、ハルカとヒカリは、ワインを口に入れてそのままヒカリは、サトシにハルカは、シユウに口付けてワインを入れる。いわゆる口移しである。サトシとシユウは、口移しで入れられたワインを飲み込んだ。

アイリス「あ！ずるいわよヒカリ」

コトネ「私も口移しするわ」

カスミ「ちよつと、抜け駆けは許さないわよ。アタシだって、口移しをやるわ」

ベル「私も」

4人は、ヒカリに続いてサトシに口移しする。

ちなみにシユウは、ハルカに何度もワインを口移された。

ちなみに、サトシとシユウは、その後口移されたワインで酔っ払ったことは、言うまでもない。なお、その後酔っ払ったあとどうな

ったかは、読者達の想像にお任せをします。

ちなみにヤストシは、シゲルを叩いたあとナギが酔っ払って抱きそのまま寝てしまった。

ナギ「ZZZZZZZZZZ・・・」

ヤストシ「しょうがない、部屋まで運ぶか」

ヤストシは、ナギをおぶり部屋へ向かおうとした時だった。

ナギ「ヤストシ君、好きだよ・・・」

ヤストシ「!!」

ナギの寝言に思わず反応して赤面となるヤストシだがどうせ寝言だと気にせず部屋へ連れて行った。

ちなみに翌朝、ヤストシ、タクヤを除く全員が二日酔いになったのは、言うまでもなかった。

第76話 宴会所で大波乱(後書き)

サトシ「ちょっと、作者。なんだよこれ！」

ケンゴ「僕は、僕は、あんな変体じゃない！」

シゲル「僕も僕も僕も・・・(T-T)」

シュウ「1度ならず2度まで同じことをやらされて」

だ、だって、これ前に好評だったからもう一回お酒話を入れたんだ  
けだ！

シゲル「だからと言って、僕のファーストキスがディープキスする  
なんて、僕はうれしくない！」

シュウ「前は、許したが今回は・・・」

ケンゴ「許さない！」

まずい！この展開は・・・。逃げーーーーーろ！！！！  
！！

サトシ・シュウ・ケンゴ・シゲル「」「逃げな！！！！」「」「  
やな感じ」

ヤストシ「え、皆さん。お酒は、二十歳から飲みましょうね。それ  
では、次回もポケモンゲットだぜ」

第77話 サトシの姉登場（前書き）

今回は、サトシの姉が登場します。

## 第77話 サトシの姉登場

翌朝、サトシ達は、昨夜のワインをたくさん飲みすぎて二日酔いしヤストシとタクヤがサトシ達を看病する。

ハルカ「痛いよ〜」

ベル「気持ち悪い〜」

ヒカリ「うえ…………死にそう…………」

カスミ「ぐえつぷ…………もうだめ…………」

アイリス「アタシも〜」

コトネ「う…………吐きそ…………」

特にヒロイン4人とベル、コトネは、重症であった。

ヤストシ「つたく、飲みすぎだよ。これで2回目だぞ」

ヤストシがカスミ達にそう言う。

ヤストシ「すまん、タクヤ。手伝ってもらって」

タクヤ「いえいえ」

タクヤは、ヤストシにそう言った。

アヤノ「あらあら、また倒れたのね」

ヤストシ「あ！アヤノさん」

宴会場に現れたのは、アヤノであった。

タクヤ「あの、どちら様ですか？」

タクヤがアヤノにそうたずねる。

アヤノ「私は、アヤノ。エブチ博士の助手よ」

アヤノがタクヤにそう言う。

ヤストシ「ところで、アヤノさん。どうしてここに？」

アヤノ「エブチ隊のメンバーがなかなか帰ってこないから心配してやってきたんだ。けど、こうなっていると、夢にも思わなかったわ」

アヤノは、苦笑しながらヤストシに言う。

アヤノ「で、その途中でこの人と出会ったの」

アヤノがそう言うのと奥から水色の髪に青い服のグラマラスな身体をしていて、胸はかなりでかい美人だとわかる女の人が入って来た。ヤストシ「アヤノさん、その人？」

ヤストシは、アヤノにたずねる。

アヤノ「彼女は、ミライさん。コンテストマスターでTVでもよく出演されている人よ」

アヤノがミライをそう紹介する。

ヤストシ「ああ。よくコンテストの雑誌の表紙に飾られるあの人ね」  
ミライ「意外と冷静なのね」

ミライがそうヤストシにいう。

ヤストシ「いえいえ。ウチには、有名人がよく出入りしていますから」

ヤストシがそう答える。そんな時だった。

タケシ「何！ミライさんだと!？」

そこにやってきたのは、美人に目がないタケシであった。

ヤストシ「タケシ知ってるのか!？」

ヤストシはタケシの行動に驚く。

タケシ「この『お姉様大百科』にかかれば、どんな人でも一発でわかる」

タケシが徐おもむきに取り出したもの、それはかつてサトシが対戦したカエデという女性トレーナーと戦った際に使った『お姉様大百科』であった。

タケシ「ミライさんは、イツシユ地方出身でカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウのグラウンドフェスティバルを制覇し、シンオウでは、行われたコンテストで5連勝して最短グラウンドフェスティバルの出場権を獲得したというコーディネーター界ミクリ、サオリさんに次ぐ大物のコーディネーターで別名『氷の女神』と呼ばれ、さらにポケモンバトルの実力もチャンピオン並みの女性だ」

タケシがヤストシにそう説明する。

タクヤ「そんなにすごい人なんだ」

タクヤは、関心が無さそうに言う。そんなタクヤに、タケシは淡々と説明を続ける。だが、次に出てきたのは、ミライの趣味、特技、得意料理などコンテストやバトルには無関係の事ばかりだった。そんなタケシにヤストシが・・・

ヤストシ「まあた、始まった。そんな情報いらないよ」

ヤストシがタケシにツッコむ。

それを聞いていたアヤノは、苦笑する。

タケシ「さらにミライさんは・・・うっ!？」

キリがないので、ここはグレッグルによるどくづきをお見舞いした。タケシ「しびれびれ」

グレッグル「ケッ!」

痺れながら倒れるタケシをいつも通りに引きづりながら去るグレッグル。

タクヤ「一体、どこへ行くんだい？」

ヤストシ「気にするなタクヤ。いつものことだから」

タケシとともにどこかへ行くグレッグルをタクヤが気にしたが、ヤストシはいつものことだから安心しろと声を掛ける。

ミライ「ふふふ、タケシ君。とても面白そうな会話をするのね」

ミライがヤストシにそう言う。

すると、そこへ。

カスミ「ミライさん!」

ヒカリ「サイン」

ハルカ「お願い・・・ぐえっぶ」

カスミ、ヒカリ、ハルカのコーディネーター3人は、ミライからサインをもらおうとする。

ヤストシ「おいおい、大丈夫か?ただでさえ、二日酔いなのに」

カスミ「だって、ミライさんって!」

ハルカ「超が付くほどの」

ヒカリ「有名なコーディネーター・・・ぐえっぶ」

ヤストシ「おいおい、吐かないでくれよこんなところで・・・」



ヤストシがヒカリにそう言う。

ミライ「どう言う事ですか？」

話の内容が見えないミライがヤストシにたずねる。

ヤストシ「実は・・・」

ヤストシは、ミライに簡単に説明する。

ミライ「そうだったんですか。それじゃあ、ここにいる二日酔いで倒れている人達ってみんな、未成年？」

ミライの言葉に頷くヤストシ。

ミライ「未成年なのによく急性アルコール中毒にならないわね」

ヤストシ「そこは、小説ですからそこまで行くことはないと思いますが・・・」

ヤストシがミライにそう言う。

ヤストシ「それは、言いとして。ミライさんは、どうしてこちらに？」

ヤストシがミライにそうたずねる。

ミライ「実は、久しぶりに弟に会おうと思ってきたの」

ヤストシ「弟？」

ヤストシは、ミライの言った言葉に？マークを付ける。

ミライ「実は、生まれはイッシュ地方だけど私は、ある家に養女として引き取られてマサラタウンでその夫婦の住むことになったんだ。そこで育てられている時にその夫婦に実の子が産まれたんだ。私が10歳の時、旅に出た時以来会っていなくて」

ヤストシ「マサラタウンですか。ちなみに夫婦の名前は、覚えていますか？」

ヤストシは、そうミライに質問する。

ミライ「父の名前は、覚えていませんが母の名前は、ハナコです」

ヤストシ「カスミ・ハルカ・ヒカリ」「」「えーーーーー！！！！！！」

母方の名前を聞いて驚くヤストシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ。驚くのも無理はない。何故ならミライに育てられた母方のハナコの名前



アキナ「(やつぱり凄いわ／＼)」

ヒナ「(わたしやナギさんよりの何万倍も綺麗・・・)」

ベル「(どうすれば、あんな素敵な人になれるんだろう・・・)」

ミライの美しさに圧倒され見惚れていた。まあ、無理もないだろう。それに付け加えてサトシの義理の姉、サトシに好意を持つ人間には、ミライに近づけるチャンスである。

ミライ「ん？私の顔に何かついてるのですか？」

ミライはカスミ達の視線が気になったのか、カスミ達に声を掛ける。カスミ「い、いえ／＼」

ハルカ「なんでもないかもです／＼」

ヒカリ「ど、どうぞ。気にせず／＼」

カスミ達は顔を少し赤らめながら慌ててミライに言う。

ヤストシ「(ミライさんって、意外と鈍感なんだ)」

ヤストシは、心の中でつぶやく。

シュウ「全く、君たちは・・・」

いつの間にか起きたシュウが若干呆れながら、つぶやく。

ミライ「さて、サトシにも会えたいし、私は失礼するわ」

ヤストシ「どこかへ行くんですか？」

ヤストシがミライにそうたずねる。

ミライ「実は、私、バトルの実力が認められてジョウトの四天王にならないかって誘いが来たの」

ヤストシ「それは、おめでたい話じゃないですか」

ミライ「でも、私は、純粹に旅を楽しむのが好きなんだ。だから、断ろうかと考えていたんだ」

ミライがそう言う。

コトネ「コンテストマスターで『氷の女神』呼ばれるぐらいの実力で四天王の座に座らないかと誘いが来るなんてすごいと思いますよ」  
コトネがミライにそう言う。

ミライ「確かに私は、別名『氷の女神』と呼ばれているけど最近、氷以外のポケモンも育てているから別名なんて気にしていないわよ」

ミライがそうコトネに言う。

アイリス「(『氷の女神』か。嫌だな。でも、なんとかしてでもサトシをゲットするんだ!)」

アイリスは、苦手な氷を何とかしてでもサトシを手に入れようとする。

シユウ「そうだ！ミライさん、これを」

シユウは、そう言って1本のバラを出す。

ミライ「あら、ピンクのバラじゃない。ありがとう、シユウ君」  
シユウ「いえいえ、こちらこそ」

ピンクのバラをミライに渡しお礼を言われてそう答えるシユウ。

ヤストシ「アヤノさん、ピンクのバラの花言葉ってなんでしたっけ？」

アヤノ「え」と、確か、美しい少女、上品、気品、しとやかよ」

ハルカ「！」

ハルカは、アヤノの言葉を聞いて思わずビクツとする。

ヤストシ「シユウも相変わらずだな。カッコつけて、バラをプレゼントなんて」

シユウ「ふっ、僕はただ美しい女性に似合うプレゼントをしたままだよ」

シユウはいつものようにキザツぱく振る舞う。

そして、シユウは、ハルカのそばに行き・・・

シユウ「はい」

シユウは、1本の赤バラをハルカに渡す。

ハルカ「あ、ありがとうシユウ」

ハルカは、そうシユウにお礼を言う。

ベル「ねえ、赤バラの花言葉って、確か・・・」

ヤストシ「情熱、愛情・あなたを愛します、貞節、美、模範的だよ、確か」

ベルの問いにヤストシがそう答える。二人の会話がハルカに聞こえてハルカは、思わず赤くなる。

マサト「相変わらずだね。シュウの性格も」

サトシ「そうだな。」

サトシ達はシュウの変わらぬ性格に苦笑を浮かべた。そして、ミライは、宴会場をあとにした。

タクヤ「ミライさん」

ミライ「確か、タクヤ君だっけ？父さんから聞いているわ。サトシの監視役として働いているんだよね」

ミライが笑顔でタクヤに言う。

そう、タクヤの正体は、ロケット団の一員であった。

タクヤ「さすが、サカキ様の義理の娘さんですね」

ミライ「お褒めに預かり光栄だよタクヤ君」

ミライは、タクヤにそう言う。

タクヤ「それで、本当は、何しに来たんですか？」

タクヤは、ミライにそうたずねる。

ミライ「本当にサトシの様子を見に来ただけよ私は」

ミライは、笑顔でタクヤに言う。

そして、ミライは、廊下を歩きタクヤの前から姿を消した。

タクヤ「さすが、サカキ様の義理の娘様だ」

タクヤは、そうつぶやきサトシ達の元へ戻っていた。

## 第77話 サトシの姉登場（後書き）

ヒカリ「サトシのお姉さんが登場するなんて・・・」

ハルカ「しかも設定がすごいかも」

いや、サトシの姉のキャラを考えるのに一苦労したよ。

カスミ「そうだろうね、この設定だから・・・」

ヒカリ「それより、よくバラの花言葉を知っていたわね」

アイリス「きつと、パソコンで調べたんだよ、きつと」

ドキッ！

アイリス「凶星ね」

ハルカ「それで、これからどうするの？」

一応、次回は、二日酔いは治っていた状態で次の街へ行こうとしたらあることが起こるんだ。

カスミ「あること？」

ヒカリ「一体何なの？」

それは、次回のお楽しみに。

カスミ「作者らしいわね」

それでは最後になりましたが、最後の締めは俺担当で締めます。次回もポケモンゲットでドドンガドーン！

アイリス「ちよっと！アタシのセリフ取らないでよ！」

## 第78話 このポケモンは誰のもの？

翌朝、ようやく二日酔いも治ったサトシ達は、次の街、トヨキシテイを目指すためアキナとナナミの母が務める旅館をあとにした。

アキナ「それじゃあ、私は、ヒナと一緒にポケモンリーグに戻るわ」  
ナナミ「そう、元気でね。アキナお姉ちゃん」

ヒナ「じゃあね、ナナミちゃん」

ヒナは、トゲキッスとムクホークを繰り出しヒナとアキナは、それに乗り込み飛んで行った。

ヤストシ「ナギさんは、どうするんですか？」

ナギ「私は、そろそろジムに戻らないと。いつまでもジムを空けておくわけには、行かないしね」

ナギは、ハングライダーのスーツとヘルメットを被ってヤストシに言う。ヤストシは、顔が赤くなる。

ナギ「それから、今度会った時は、二人きりで」

ナギは、サトシ達に聞こえない程度でヤストシに言う。ヤストシは、さらに赤くなった。

ナギ「それじゃあね」

ナギは、チルタリスを繰り出しヒマワキシティへ向けて飛んで行ったのであった。

その後、サトシ達は、ナナミと一緒に歩いていた。

そんな時だった。

カスミ「あれ、あそこにいるのってエブチ隊じゃない」  
ケンジ「本当だ」

そこには、確かにエブチ隊が川で何か作業をしていた。

ヒカリ「エブチ隊の皆さん、何をしていますか？」  
ヒカリがエブチ隊に声をかける。

ロボットA「あ、サトシ君たちじゃないか」

タケシ「何をしていますか、皆さんは？」

タケシがエブチ隊にたずねる。

ロボットB「実は、ロケット団が放り出したイツシユ地方のポケモンの回収をしているんだ」

ロボットC「このままだと、生態系に大きく変わってしまうから回収してそれをエブチ博士が保有しているポケモン保護地区へ運ぶ予定なんだ」

ロボットA「もちろん、このモンスターボールで捕獲するんだ。しかも、ただのモンスターボールじゃないぞ。クイツクボールだ」  
ハルカ「クイツクボール？」

ハルカは、聞かない名前のモンスターボールに首をかしげる。

ロボットB「クイツクボールは、戦闘が始まった直後相手のポケモンを元気なままゲットすることのできるボールさ」

ロボットD「俺達は、捕まえるためのポケモンを持っていないからこれで捕獲しているんだ」

ロボットE「銃や網などのポケモンを傷つける道具を使っちゃあいけないから」

エブチ隊がそうサトシ達に言う。

ロボットB「まあ、とにかく森の中にいたイツシユ地方の回収は、全て終わって川にいる水ポケモンを今、回収してほとんど捕まえただけど・・・」

ロボットA「あと一匹がかなりてこずっているんだ」  
隊員がそうサトシ達に言う。

カスミ「てこずっているポケモンは、何なんですか？」  
カスミが隊員にたずねる。

ロボットA「実は、プルリルなんだ。しかも の」  
隊員がそうサトシ達に言う。

ヤストシ「プルリルの か」  
カスミ「水タイプのポケモンか、欲しいわ。絶対に！」  
ナナミ「私も！」

水タイプを好むカスミとナナミは、はしゃぐぎ始める。





カスミ「このプルリル、おてんば人魚の水マスターを目指すアタシがゲットするわ！」

ナナミ「いいや、ユガシマシティジムリーダー・ナナミがゲットするわ」

ハルカ「抜け駆けは、許さないわよ二人とも。私もあのプルリルをゲットするかも」

ヒカリ「アタシがあこのプルリルをゲットするわ」

コトネ「私よ！」

アイリス「アタシがゲットするわよ」

ベル「私よ、絶対に！」

女性陣がプルリルゲットを巡って争いを始める。

ヤストシ「誰でもいいから、ゲットしろよ……」

ヤストシが呆れた顔をして女性陣に言う。

ナナミ「私がゲットするんだから！マリルリ、あのプルリルにアイアンテール！」

ナナミは、一番手に出てきてマリルリがアイアンテールを繰り出してプルリルに当てる。

ヒカリ「ずるいわよ、ナナミ！」

ナナミ「こういうものは、早い者勝ちよ！マリルリ、もう一回アイアンテール！」

ナナミは、アイアンテールを指示するがマリルリは、動こうとしない。

ナナミ「どうしたのよ、マリルリ！」

デント「そうか！そのプルリル、特性がのろわれボディだ！」

デントがナナミ達にそう言った。

のろわれボディとは、自分に対して相手が使用した技を30%の確率でかなしぱり状態し、直接攻撃でない技や変化技であっても自分が対象であれば発動する特性である。

ちなみにこの特性は、サトシのライバル、シューティーのプルリルも同じ特性である。

カスミ「特性がわかれば十分よ。スターミー、サイコネシス！」  
カスミは、スターミーを繰り出してサイコネシスを指示する。プルリルは、ゴーストタイプを持っているためエスパークタイプのサイコネシスは、効果抜群である。しかし、プルリルは、まもるを繰り出し攻撃を避けられてしまう。

ヒカリ「ポツチャマ、バブルこうせん！」

ハルカ「アゲハント、ぎんいろのかぜ！」

アイリス「キバゴ、りゅうのいかり！」

ポツチャマ、アゲハント、キバゴの3匹が一斉に攻撃をする。ところがプルリルは、ダイビングして避けてしまう。そして出てきてれいとうビームを繰り出し3匹に命中する。

ヒカリ「ポツチャマ！」

ハルカ「アゲハント！」

アイリス「キバゴ！」

すると、プルリルは、サトシと目が合った。

そして、サトシに飛びつき抱く。

サトシ「うわ！」

カスミ・ヒカリ・ベル「……サトシ！」

サトシの声に反応したカスミとヒカリとベルは、サトシを助けようとするが逆に抱きつかれてしまう。

カスミ「は、離してよ……」

ヒカリ「く、苦しい……」

ベル「た、助けて……」

カスミとヒカリ、ベルは、そう言う。一方、ヤストシは、この光景を見て前にヒウンシティで起きたこととかなり似ていると感じる。

ヤストシ「もしかして、このプルリル。前にヒウンシティでサトシに抱きついたプルリルか！」

そう言うとプルリルは、頷いた。

コトネ「ウソでしょう」

シュウ「こんなことがおきるなんて……」

サトシ「そ、それより助けてくれよ!」

サトシが大きい声でそう言う。

すると、モンスターボールからツタージャが出て来る。

サトシ「ツタージャ、このプルリルにリーフストームだ!」

そう指示を出すサトシだが、もしリーフストームをプルリルに向けて攻撃するとプルリルだけでなくサトシ、カスミ、ヒカリ、ベルに直撃してしまう。

カスミ「ツタージャ・・・」

ヒカリ「あたし達のことは、いいから・・・」

ベル「プルリルに攻撃するのよ・・・」

サトシ「ツタージャ!」

4人の声にツタージャは、リーフストームを繰り出しプルリルとサトシ、カスミ、ヒカリ、ベルに直撃する。

サトシ「助かった!」

サトシは、そうつぶやく。一方のプルリルは、まだやる気だったがそこに空のモンスターボールが転がって来た。そして、そのモンスターボールに触れて入りボールは、揺れたがすぐに収まった。

ちなみにこの空のモンスターボールの持ち主は・・・

サトシ「ゲットしちゃった・・・」

そう、サトシのモンスターボールであった。

ケンジ「すごい月との仕方だな」

ケンジがそう言う。

そして、サトシは、ボールを手にして・・・

サトシ「プルリル、ゲットだぜ!」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ!!!」

サトシはお馴染みのセリフと言うとカスミ達が近づいて・・・

カスミ「サトシ、そのプルリル譲って!」

ナナミ「私に譲って欲しいわ」

水ポケモンが好きな二人がそう言う。

アイリス「そこまでしてプルリルが欲しいなんって、子供ね」



第78話 このポケモンは誰のもの？（後書き）

みんな、どうだった今回の話？

ヒカリ「なんかすごい話だったわ」

アイリス「それより、どうしてヒウンで出てきたプルリルを出したの？」

あれを見ていたらそんなネタが思いつきこの話が出来たんだ。

ヒカリ「それで、どうしてサトシがプルリルをゲットしたの？」

あのプルリルがサトシを気に入っていたから女性陣よりサトシに月としたほうがいいなと思ったんだ。

アイリス「相変わらず、すごい発想だよ作者は」

ありがとう、アイリス。さて、今回は、ここまで。それでは、ヒカリ、締めをよろしく。

ヒカリ「はい！みんなもポケモンゲットで大丈夫〜夫」

## 第79話 トヨキシティヘレッツゴ

ブルリルの件が片付いたサトシ達は、ユガシマ駅に来ていた。

ナナミ「ここから、列車に乗ればトヨキシティまで3時間で着くわよ」

カスミ「ありがとう、ナナミ。わざわざ、見送りに来て」

ナナミ「いいのよ、別に。それに次のジムリーダーは、ここで働いているから」

ヒカリ「え？それは、どう言う事？」

ヒカリは、ナナミにそうたずねるが、答えるより先にそれは、やって来た。

???「あら、ナナミちゃんじゃない」

そこに一人の鉄道ガールの女性がやって来た。

タケシ「うおおおお！！とても、グラマー美人の鉄道ガールさん！！」

タケシは、鉄道ガールにいつものごとくナンパを開始した。

タケシ「自分はタケシといえます。あなたのような美しい方と出会ったのもまた何かの縁。これから自分と鉄道について語りませんか？」

鉄道ガール「は、はあ・・・」

鉄道ガールは、完全に困り果てた顔をしている。

タケシ「イテテテテ！」

ヤストシ・マサト「はいはい、あっち行こうね」

ヤストシはタケシの右耳、マサトは左耳を引っ張って、悲痛に叫ぶタケシを鉄道ガールから離れた。

ハルカ「ナナミ、この人は？」

ナナミ「この人は、アイコさん。トヨキ鉄道の車掌兼運転士を務めていて、トヨキシティのジムリーダーよ」

ナナミが鉄道ガールことアイコをサトシ達に紹介する。

ベル「へえ、車掌兼運転士を務めているんですかアイコさん」

アイコ「そうよ。鉄道会社は、基本的に一日仕事をして仕事終わったあとは、お休みというシステムなのよ。ジム戦は、月に5回程度しか開けないけど結構、こっちに挑戦しに来る人が多いのよ」

アイコがベルにそう言う。

ロボットA「さてと、それじゃあ、みんな。俺達は、もう行くから駅まで用事に来ていたエブチ隊の隊員がサトシ達にそう言った。

コトネ「ポケモンをエブチ博士に届けるのですね」

ロボットB「それもあるが、強く言えば大会の仕事を行わないといけないんだ」

サトシ「大会の仕事？なんですかそれ？」

サトシが隊員に聞いた。

ロボットC「実は、トヨキの街で、今度エブチ博士主催のバトル大会が行われる予定なんだ」

ロボットD「俺達は、これを届けた後、その大会運営をしている隊員と合流して手伝う予定さ」

ケンジ「そうなんですか」

ケンジがそう言う。

サトシ「バトル大会か、出てみたいぜ！」

アイリス「そんなに、はしゃいじゃって、子供ね」

アイリスは、サトシに向かってそう言った。

デント「でも、出てみるかいはあるな」

ハルカ「私も、そのバトル大会へ参加したいかも」

ヒカリ「アタシも！」

カスミ「あたしも久しぶりにバトルしたいわ」

ベル「同じく！」

ヤストシ「カスミとベルは、ともかく、ヒカリとハルカは、コーデイナーだけど大丈夫か？」

ヤストシがヒカリとハルカにたずねる。

ハルカ「そこは、心配しなくていいわ」



ヒカリ「そうそう、大丈夫大丈夫」

タケシ「ヒカリが大丈夫って言った時が一番大丈夫じゃないんだけど……」

タケシがヒカリに向かってそう言う。

ロボットA「それは、ともかく。サトシ君達も参加するんなら早くトヨキへ来なさいよ」

ロボットE「それじゃあ」

隊員達は、そう言ってトラックを発車させてユガシマシティをあとにした。

シウウ「さて、僕達も電車に乗ってバトル大会の会場へ行きますか」  
マサト「そうだね」

サトシ「よし、エブチ博士主催のバトル大会が行われるトヨキシティへ向けて出発！」

全員「おー！！！！」

そう言って、サトシたちは、トヨキ鉄道の各駅列車に乗り込んだ。そして、発車時刻となり電車は、走り出した。

カスミ「じゃあね、ナナミ」

ハルカ「元気だね」

コトネ「ジムをがんばるのよ」

カスミとハルカとコトネは、声を出してナナミに言った。

ナナミは、手を振りながらサトシ達を見送ったであった。

第79話 トヨキシティへレッツゴー（後書き）

さてさて、今回は、エプチ博士主催のバトル大会が始まります！

## 第80話 エブチカップ

ユガシマからエブチ博士主催の大会に出場するためサトシたちは、列車でトヨキシティに到着した。

デント「ここがトヨキシティか」

アイリス「ビルもほとんどなく自然の多い街ね」

ヒカリ「ホント」

トヨキの街並みを見てそう感想を述べるデントとアイリスとヒカリ。

サトシ「ところで、アイコさん。ジムは、どこにあるんですか？」

アイコ「え、ジム？」

サトシの問いに何故か、疑問形になって答えるアイコ。

マサト「だって、トヨキシティでしょ」

マサトがアイコにそう言った。

アイコ「みんな、勘違いしていない？」

ヤストシ「え？」

アイコ「ここ、トヨキタウンだよ」

アイコがそう言うのとサトシ達は、しばらく黙り込んで・・・

全員「トヨキタウン!？」

一斉にアイコにそう言った。

ケンジ「ホントだ。ここは、トヨキタウンだ」

ケンジが念のため確認してサトシ達にそう言った。

アイコ「ここは、自然豊かなトヨキタウンだ。一昔なら、ここにジ

ムがあっただけど数年前、ここから離れた大きなところに都会が出来

てジムもそっちへ移しちゃったんだ」

コトネ「そうなんですか・・・」

アイコの答えにそう言うコトネ。

カスミ「それじゃあ、エブチ博士主催の大会は・・・」

アイコ「それなら、多分。向こうにある自然スタジアムだよ。あそ

こは、この街、唯一のバトルスタジアムだからね」

アイコがサトシ達にそう言う。

タクヤ「それじゃあ、参加登録しに行きますか」

全員「おー!!」

そう言うってサトシ達は、大会が開かれる自然スタジアムへ向かった。

そして、5分ぐらいで大会の受付に着いた。

サトシ「あの、すいません。大会の申し込みに来たんですが・・・」  
サトシがそう言うのと奥からエブチ隊隊員がやって来た。

ロボットA「いらっしやい、サトシ君、みんな。よく来てくれたね。  
ところで大会に参加するのは、何名かな？」

サトシ「まず、俺と・・・」

カスミ「アタシも参加します」

ハルカ「同じく」

ヒカリ「参加します」

アイリス「あたしも参加します」

ヤストシ「俺もです」

デント「僕も大会に出場します」

マサト「僕も」

ロボットB「え、サトシ君とカスミちゃんと、ハルカちゃん、ヒカリちゃん、アイリスちゃん、ヤストシ君、デント君、マサト君ね。

他の人は？」

隊員が残りのメンバーにたずねた。

タクヤ「自分は、パスします」

ケンジ「僕は、遠慮します」

タクヤ「同じく、パス」

ベル「私は、参加します」

コトネ「同じく」

シユウ「僕は・・・」

ハルカ「シユウも参加するの？」

シユウが答えようとしたら横からハルカが割り込む。

シユウ「参加します」

シユウは、ハルカの笑顔を見て参加することにした。

ロボットB「コトネちゃんと、ベルちゃんとシユウ君も参加っと。

それじゃあ、これが申し込み用紙だから、ここに名前と出身地と使用ポケモン3体書いてね」

隊員がサトシたちに申込用紙を渡しながらそう言った。

そして、サトシたちは、向こうのテーブルで使用ポケモンは何にするか考えていた。

カスミ「使用ポケモン3体か・・・」

ヒカリ「どうしようかな？」

ハルカ「迷っちゃうかも」

ヤストシ「そこ行くと手持ちが3体しかないアイリスは、考えなくていいよな」

アイリス「余計なお世話よ！」

アイリスがヤストシにそう捨て台詞を言った時だった。

???「あれ、サトシ君じゃない」

サトシ「あ、エリカさん、スズナさん、ミカンさん、ノゾミ!？」

サトシ達の前に現れたのは、エリカ、スズナ、ミカン、ノゾミの4人である。

ヤストシ「どうして、ここにいますか？」

エリカ「実は、わたくし達もエブチカップに参加しようかと思いついて」

ミカン「それで、申込用紙を今から出しに行くんですよ」

スズナ「ポケモンもオシャレも恋愛も全部気合で勝っていくわよ！」

ノゾミ「スズナ先輩、それは無理がありますよ」

スズナの発言にツツコミをいれるノゾミ。

そんな時だった。

???「あれ、誰かっと思っいたら渋いポケモンばかり使っている人じゃない」

後ろからの声にサトシ達が振り向くと・・・

サトシ「カベルネ!？」

そこにいたのは、デントのライバル(?)のカベルネがいた。

ヒカリ「誰なのあの子？」

ヒカリが小さい声でヤストシにたずねた。

ヤストシ「カベルネって言って、元々は、ポケモントレーナーだったけどサンヨウジムでデントに挑戦して敗北して、ポケモンとの相性について指摘されたことを根に持ってちゃって、それでデントを見返すために勉強して、ポケモンソムリエCクラスの資格を取得して、もう一度ジムに挑戦しに来たけど、デントは、その時サトシと旅に出てでいて、仕方なくポッドと戦って勝利したんだ」

コトネ「そうなんだ」

ヤストシ「ところが前にサトシのポケモンの性診断を行ってたら、サトシに「ポケモンとの相性は最悪」という判断を出して、その後デントにバトルを挑んだけど、敗北して。ドンバトルの時は、1回戦でサトシと対決し、敗北したバトルの実力もテイストもいまちな女なんだ」

ヤストシがカベルネに聞こえない程度で答えた。

サトシ「カベルネもエブチ博士主催の大会に出場するのか？」

カベルネ「もちろんよ。あなたもそうだけど、もつとも私が戦いは、デント。あなたよ」

カベルネがデントを見ながらそう言った。

ヤストシ「お前、そう言うけどCランクから上がったのか？」

ヤストシがカベルネにそう言った。

カベルネ「もちろんよ、CランクからBランクにこの間、勉強して上がったのよ」

ズテイン

ヤストシ「1ランク繰り上がったただけかよ!」

アイリス「しかも、この間だし・・・」

ヤストシとアイリスは、呆れながらそう言った。

カベルネ「とにかく、ランクが上がったばかりの私の实力を見せて

やるわ！ボンジュール、テイステイングタイム、シルプブレ」

カベルネは、可愛くみせながらサトシ達にそう言った。

「????「サトシ君！」

サトシ「ヒロシ、シューティ！」

サトシたちの前に現れたのは、2代目ライバルのヒロシと4代目ライバルのシューティであった。

ヤストシ「二人もこの大会に出るのか？」

ヒロシ「もちろんさ」

シューティ「ああ、そうさ」

二人は、ヤストシにそう答えた。

そんな時、ヤストシの肩をベルが叩く。

ヤストシ「なんだよ、ベル。どうしたんだ？」

ヤストシがそう言うがベルは、何も言わない。

ヤストシ「何か言わないかよ！」

ベル「あの、私は、ここにいますんだけど」

なんと、横にもベルがいた。

全員（ベル以外の人間）「べ、ベルが二人!？」

サトシ達は、ベルが二人いることに驚く。

するとヤストシの肩を叩いた方のベルが姿を変えた。

全員「ゾロア!？」

ベルに化けたのは、ゾロアであった。

シューウ「なんで、こんなところにゾロアが・・・」

ヤストシ「なあ、このゾロア。もしかして、ルークのゾロアじゃない?」

そう言うとゾロアは、頷いた。

カスミ「ねえ、ルークって?」

ルークを知らないカスミたちは、デント達にたずねる。

デント「ルークって言うのは、映画製作を行っている少年で脚本から撮影まで全て一人でこなしているんだ。ルークとはゾロアを探している最中に出会って、僕たちも協力を経て映画製作を成功させた

んだ。その後はポケモンバトルドキュメンタリーを作る目的で僕たちと同行し、ドンバトルに参加したんだ」

デントがルークについて説明をしていたら・・・

ルーク「あ、サトシ、ヤストシ、アイリス、デント、ベル、じゃないか！」

そこへルークがやって来た。

サトシ「久しぶりだな、ルーク」

ヤストシ「今日は、どうしてここに？」

ルーク「実は、前のポケモンバトルドキュメンタリーが好評でもう一回ポケモンバトルドキュメンタリーを撮ろうと思って来たんだ」  
ルークがヤストシにそう言う。

カスミ「あなたが、ルークね！」

ハルカ「サトシから聞いたわよ。映画製作しているってね」

ヒカリ「ぜひ、アタシに映画にださせてくれる？」

コトネ「私も映画にでたいわ」

女性陣がルークに押しかけて映画に出演したいと言う。

???「ドラゴンタイプの匂いがすると思ったらあなたね」

アイリス「ラングレー!!」

そこに現れたのは、アイリスのライバル(?)、ラングレーがやって来た。

ハルカ「誰なの、あの子？」

ハルカがヤストシにたずねた。

ヤストシ「あの子は、ラングレーと言って、過去にアイリスの故郷の竜の里のトレーナーと対決して敗北して、それ以来、ドラゴンバスターと名乗ってドラゴンタイプのポケモンを目の敵にしている女の濃さ」

ヒカリ「そうなんだ」

ヤストシ「それで竜の里の出身であるアイリスにバトルを挑んできたんだ。竜の里での大会で優勝した経緯を持つアイリスを簡単に打ち破る等ポケモントレーナーとしての実力は優れているようだけど、



前にサトシとデントがアイリスを呼びに言っている間に朝食を盗み食いた上に悪びれる様子もなくって「また作ればいいじゃない」「次はもつと美味しい朝食を食べさせて」と言うなどワガママな面もあるやつさ。それでドンバトルで再開した時に互いに火花を散らし合うなど、アイリスに対するライバル意識は非常に強いんだ」「ヤストシがラングレーに聞こえない程度でしゃべる。

一回、ドラゴンマスターのジョウトのチャンピオンマスターのワタルにコテンパンにやつけられたらしいのにな」 by 作者  
ラングレー「アイリスったら、相変わらずでかい頭ね」

アイリス「ふん、あなたにこのアグレッシユな髪型には、理解できないでしょうね」

ラングレー「強がっちゃって。まあいいわ、あたしは、知っての通りドラゴンマスター。あんなだけには、負けたくないわ」

アイリス「たつく、子供ね」

ラングレー「そうよ、子供よ。あなたと同じ子供よ」

アイリス「なんですって！」

ビリビリビリビリ

アイリスとラングレーの間に火花が飛ぶ。

これを見ていたサトシ達は、かなり呆れる。

ロボットC「それでは、登録された皆さん方。早速、スタジアムに入場してください」

隊員がそう言くとサトシたちは、自然スタジアムへ入場した。

いよいよ、大会が始まる。

第80話 エプチカップ（後書き）

次回、エプチ博士主催の大会が開幕します。  
どうぞ、お楽しみに。

## 第81話 開幕

エブチ博士主催のバトル大会に出場するサトシ達は、自然スタジアム内に入った。

カスミ「うわ、意外と人が多いわね」

ヤストシ「そうだな」

ヤストシがそう言ったときだった。

シゲル「久しぶりだね、サートシ君」

サトシ「あ！シゲル、どうしてここに！」

シゲル「久しぶりにバトルがしたくなってね、この大会へ出場したんだ」

シゲルがサトシにそう言う。

サトシ「なら、負けないぜシゲル！」

サトシがシゲルにそう言った。

ヤストシ「あ！シンジ！」

ヤストシの目に飛び込んだのは、シンジであった。シンジは、こちらに気づいたようだが無視するようにどこかへ行ってしまった。

ヒカリ「相変わらず、嫌なやつ」

ヒカリがシンジを見てそうつぶやいた。

司会「ただいまより、開会式を始めたいと思います。なお、本日の大会の実況は、テレビピカリーのタケナカがお送りいたします。それでは、この大会の主催者でありますエブチ博士によります開会宣言をしてもらいましょう」

実況がそう言うときエブチが出来た。

エブチ「ご紹介ありがとうございました。私がこのバトル大会の主催者エブチです。さて、ここでルールを説明をいたします。使用ポケモンは、登録した3体で試合に臨みますが試合で使用できるポケモンは、1体のみで交代はなしです。また、ほえる、とんぼがえりなどポケモンを強制的に交代する技の使用は禁止いたします。ポケモンは、

何回でも使ってもかまいませんが必ず1回使うことを条件といたします。試合形式は、シャッフルにて対戦相手を決めます。これを準決勝まで続けます。そして、大会に優勝した方には、賞金と進化の石、炎の石、水の石、雷の石、リーフの石、月の石、光の石、まんなる石、太陽の石、闇の石、目覚める石をセット、さらにかかわらずの石、さらにさらに今回、ポケモン協会と交渉してこの大会の優勝者は、なんとワールドリーグ無条件で出場できます」

エブチの発言に会場が騒ぐ。

サトシ「大会の優勝者は・・・」

ベル「無条件で」

ハルカ「ワールドリーグに」

ヒカリ「出場！」

ヤストシ「と言うことは、ハルカやヒカリのようなコーディネーターもワールドリーグに出場できるチャンスってこと！」

ハルカ「ウソ！」

ヒカリ「よし、優勝してワールドフェスティバルとワールドリーグ出場するわ！」

ヒカリは、気合を入れてそう言う。

エブチ「皆さん、優勝目指してがんばってください。それでは、エブチカップをここに開会を宣言する！」

そう言うって会場は、騒ぐ。

タカナカ「それでは、皆さん。正面モニターをご覧ください。ただいまより、第1回目のエブチカップ出場者の試合の組み合わせをいたします。第1回目の対戦相手は、こうなっています！」

そう言うって画面に対戦相手が表示される。

ちなみに対戦は、以下の通りです。

第1試合   \*\*\*VSラングレー

第2試合   シンジVSミカン

第4試合   ハルカVS\*\*\*

第5試合   カスミVSシューティー

|       |           |
|-------|-----------|
| 第6試合  | ***VSヒカリ  |
| 第9試合  | マサトVSノゾミ  |
| 第10試合 | サトシVSシュウ  |
| 第11試合 | シゲルVS***  |
| 第12試合 | デントVSカベルネ |
| 第13試合 | ヒロシVSルーク  |
| 第15試合 | ***VSヤストシ |
| 第16試合 | ***VSアイリス |
| 第18試合 | エリカVS***  |
| 第20試合 | スズナVS***  |
| 第21試合 | コトネVSベル   |

\* 執筆の都合上、メインキャラ以外は\*\*\*で表記しています。

カスミ「アタシの初戦の相手は、シューティーか。よろしくね」

シューティー「こちらこそ、いい勝負をいたします」

シューティーは、カスミにそう言った。

カベルネ「初戦は、いきなりデントね。どうやらこんなに早く見返すチャンスが訪れるなんて、今度こそ私のテイストが間違っていないことを証明してあげるわ!」

デント「た、楽しみにしているよ・・・」

カベルネがそう言うのとデントは、苦笑しながらそう言った。

ラングレー「おい、アイリスの子供!」

アイリス「それを言うなら子供のアイリスでしょう!」

ラングレー「とにかく、アタシと当たる前に負けないでよね。あんなを倒すのは、このアタシなんだから!」

アイリス「あそ!」

ヤストシ「(二人のほうがよくばど子供だよ・・・)」

ヤストシは、心の中で二人にツツコミを入れる。

サトシ「初戦の相手は、シュウか。負けないぜ」

シユウ「僕もだよ。君に勝ってハルカと対決するんだ！」  
サトシにそう言うシユウ。

マサト「僕の最初の相手は、ノゾミか。よし、がんばるぞ！」  
ノゾミ「ハルカの弟が最初の相手か。いい勝負を期待しているわ」  
マサトとノゾミは、互いそう言う。

コトネ「ベルリンが最初の相手ね。私、絶対に負けないわ」  
ベル「それは、私もよ」

お互いそう言うコトネとベル。

タケナカ「解説は、大会主催者エブチ博士。そして、特別ゲストに  
シンオウリーグチャンピオンマスター・シロナさんとジョウトリー  
グチャンピオンマスターでドラゴンマスター、そしてポケモンGM  
ン捜査官のワタルさんにお越しくございました。本日は、よろしく  
お願いします」

シロカ・ワタル「よろしく申し上げます」

タカナカ「また、このあと素敵なゲストが二人お越しいたしますの  
でお楽しみに。それでは、第1試合、ラングレー選手対\*\*\*のオ  
ーピングバトル、開始です！」

ついに始まったエブチカップ。はたして、優勝を手にするものは、  
一体誰だ！

第81話 開幕（後書き）

カスミ「ついにエブチカップ開幕か」

アイリス「ところで、どうしてこういう組み合わせにしたの？」

初戦から大一番をいれるのもなんだから、あえて少なめにして楽しみな一番は、終盤にぶつけていくつもりさ。

アイリス「かんがえたわね」

カスミ「がんばって、残っていくわよ！」

アイリス「アタシも。あいつは、私が倒すんだから！」

気合入っているねアイリス。それでは、皆さん。感想をお待ちしています。

第82話 カスミVSシユーター(前書き)

い。めんどくさいので1部の試合は、カットいたします。ご了承ください。



## 第82話 カスミVSシユーター

第1試合は、ラングレーが勝利して第2試合、シンジVSミカンは、シンジが勝利して第4試合、ハルカは、勝ち試合は、第4試合、カスミVSシユーターの試合が回ってきた。

タケナカ「さあ、第4試合は、カスミ選手VSシユーター選手の試合がやってきました」

エブチ「これは、面白い試合になりそうですね」

タケナカ「それは、どういう意味でしょうかエブチ博士？」

エブチ「カスミ選手は、ハナダジムジムリーダーで『カントーの<sup>マ</sup>人魚姫』と呼ばれているぐらいの実力がある選手でバトルは、もちろんコンテストもカントーのグランドフェスティバルで準優勝した成績を持っています」

エブチがそう解説をする。

タケナカ「それでは、シユーター選手は、どうでしょう？」

エブチ「シユーター選手は、イツシュリーグで初出場ながらいきなり、リーグ優勝してチャンピオンリーグでイツシュのチャンピオン・アグデさんには、全敗しましたが四天王を倒してチャンピオン対決したぐらいの選手ですから、これはこれですごい選手ですからね」

エブチがそう解説をする。

アヤノ「それでは、これよりカスミ選手対シユーター選手によるエブチカップ第1回戦、第4試合を始めます。使用ポケモンは、1体。交代はなし、一騎打ち勝負です！」

審判役のアヤノがカスミとシユーターにそう言う。

カスミ「リーグで初出場ながらいきなり、リーグ優勝か。どれだけの実力を見せてもらうわ！」

シユーター「ジムリーダーでグランドフェスティバルの準優勝。

こちらあなたの実力を見せてもらうぜ！」

カスミとシユーターは、お互いそう言う。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

アヤノがバトル開始の宣言を言う。

カスミ「行くわよ、ギャラドス！」

カスミは、いきなりエース格のギャラドスを繰り出す。

シューティー「ジャローダ、行くんだ！」

対するシューティーは、ジャローダを繰り出す。

タケナカ「カスミ選手は、ギャラドス。対するシューティー選手は、ジャローダを繰り出しました！」

ワタル「ギャラドスは、飛行タイプも持っていますから草タイプのジャローダの攻撃のダメージは、普通ですが、どういう展開になるか楽しみです」

ワタルがそう言う。

シューティー「シャローダ、グラスミキサー！」

タケナカ「おっと！ジャローダが先制攻撃を仕掛けてきました！」

ジャローダのグラスミキサーは、ギャラドスのほうへ向かってくる。カスミ「ギャラドス、アクアテールでグラスミキサーを打ち消すのよ！」

ギャラドスは、アクアテールを繰り出しグラスミキサーを打ち消した。

タケナカ「これは、すごい！ギャラドスのアクアテールでグラスミキサーを打ち消しました！」

実況のタケナカがそう言う。

カスミ「続いて、ハイドロポンプ！」

ギャラドスは、ハイドロポンプを繰り出す。

シューティー「シャローダ、避けるんだ！」

ジャローダは、ハイドロポンプを避ける。

タケナカ「ギャラドス、ハイドロポンプを繰り出すもジャローダが避けれてしまいました」

シロナ「ジャローダは、すばやさかなりありますからそう簡単には、当たりませんでしょう」

シロナがそう解説する。

シューティー「ジャロード、そこからリーフストーム！」

ジャロードは、リーフストームを繰り出しギャラドスに命中する。

タケナカ「決まった！ジャロードのリーフストームがギャラドスに命中したぞ。大丈夫か、ギャラドス？」

実況がそう言うのとギャラドスは、まだ大丈夫であった。

シューティー「耐えたか。なら、ジャロード、日本晴れ！」

タケナカ「おっと、ここで、シューティー選手。日本晴れを使ってきたぞ！これで、草タイプの技の威力が上がったぞ！対するギャラドスは、水タイプ。水タイプの威力は、半減してしまいました。これは、シューティー選手がかなり優勢になりました！」

エブチ「それは、どうかな？」

エブチがタケナカの発言に異議を申し立てる。

タケナカ「それは、どういう意味でしょうかエブチ博士？」

エブチ「見ていればわかりますよ」

エブチは、タケナカにそう言った。

シューティー「ジャロード、リーフブレード！」

カスミ「避けるのよギャラドス」

ギャラドスは、避けようとするが日本晴れでさらにすばやさが上がったジャロードの攻撃を避けられず命中してしまう。

シューティー「これで、とどめだ！ジャロード、ソーラービーム！」

ジャロードは、ソーラービームを準備する。日本晴れの影響ですぐにでも発射が出来る。命中すれば間違えなくギャラドスは、戦闘不能になる。万事休すかと思われたその時！

カスミ「この時を待っていたわ。ギャラドス、パワー全開で火炎放射！」

シューティー「なっ！！！！！」

カスミの言葉に驚くシューティー。

ギャラドスの口から火炎放射が繰り出される。日本晴れの影響で炎の威力も上がっていた。まさかの予想外な技に対処できなかったシ

ユーター。それと同時にソーラービームも発射されるがパワー負けして火炎放射がジャローダに命中する。効果抜群である。

シューティー「ジャローダ！」

その声をかけるシューティー。煙が晴れるとジャローダは、ぐったり倒れていた。

アヤノ「ジャローダ、戦闘不能！ギャラドスの勝ち！よって、勝者カスミ選手！」

タケナカ「な、な、な、なんと！ギャラドスの火炎放射でリーグ優勝したシューティー選手をあっさり退けて勝ちましたカスミ選手！タケナカがそう言う。

サトシ「やるな、カスミ」

アイリス「まさか、イツシュリーグの制覇したシューティーを退けるなんて」

デント「すごいとしかいえないな、彼女は」

マサト「そうだね」

観戦していたサトシ、アイリス、デント、マサトがそう言う。

カスミ「やつほ、一回戦、勝って来たわよ」

ハルカ「さすが、ハルカ。すごいかも」

コトネ「なにしろ、リーグ優勝者を退けちゃうなんて」

ハルカとコトネがそう言う。

カスミ「そんなことないさ。さあ、ヒカリ。次は、あなたの番よ！がんばってくるのよ」

ヒカリ「大丈夫、大丈夫。必ず、2回戦へ進出してみせるわ」

ヒカリは、そう言ってバトルフィールドへ向かった。

エブチカップは、まだ始まったばかりである。

第82話 カスミVSシユーター(後書き)

まあまあが出来かな？

さて、次回は、新たなキャラが次々登場します。

**第83話 次々と現れるライバル（前書き）**

今回は、5人のキャラが登場します。

### 第83話 次々と現れるライバル

エプチカップの第6試合、ヒカリが勝利し、2回戦に進出した。  
ハルカ「ヒカリ、2回戦進出、おめでとう」

ヒカリ「ありがとう、ハルカ」

ヒカリがハルカにそう言った。

サトシ「さてと、第7試合が始まるぜ」

サトシがそう言うと第7試合の選手が登場する。

すると、エレブース（現実世界で言えば阪神タイガース）のユニホームと帽子を被っている女の子が登場した。その姿は、サトシ、カスミ、ヤストシ、ヒロシには、見覚えのあった人物であった。

サトシ・カスミ・ナナコ・ヒロシ「……ナナコ（ちゃん）！！！！

！！！！！！

そうエレブース（現実世界で言えば阪神タイガース）のユニホームと帽子を被っている女の子は、ジョウトのワカバタウン出身のナナコである。

コトネ「あれ、サトシ達、ナナコちゃんを知っているの？」

サトシ「ああ、俺達がジョウトリーグ出場を目指している途中で出会ったんだ」

ヒロシ「僕は、こう見えて隠れエレブースファンでエレブース甲子園球場に観戦しに行った時に会ったんだ」

ヒロシがエレブースファンだと告白するとみんな、へえ〜と言った。ただし、一人だけ不愉快な人がいた。

ヤストシ「ヒロシ、エレブースファンなんだ……」

そう、ヤストシであった。

ヒカリ「ねえ、カスミ。どうして、ヤストシ、ヒロシがエレブースファンだと告白したらあんなに不愉快な顔をするの？」

ヒカリがタケシにたずねる。

カスミ「実は、ヤストシ。大のミミロップズファンなんだ」

カスミがヒカリの問いに答えるとヒカリは、なんとなく納得する。ミミロップズ（現実世界で言えば読売ジャイアンツ）は、エレブースとは天敵関係である。

アヤノ「ミネズミ、戦闘不能！メガニウムの勝ち！よって、勝者ナナコ！」

ナナコ「よっしゃ、まずは、1勝目！」

ナナコは、ガッツポーズをしてこっちへ向かって来る。

カスミ「ナナコ」

ナナコ「あ、カスミはん。それにヒロシはん、タケシはん、コトネはん、師匠」

ナナコは、サトシたちを見つけて呼ぶ。ちなみにサトシのことは、師匠と呼んでいる。

コトネ「久しぶりね、ナナコちゃん」

コトネがナナコにそう言う。

サトシ「ナナコ、コトネのこと知っているのか？」

コトネ「ええ、ナナコちゃんの家、私の家の隣なの。昔は、よく遊んだこともあるんだ」

コトネがサトシにそう言う。

すると、ナナコは、ヤストシを見て・・・

ナナコ「おやおや、これはこれは。今年は、投手陣が振るわず、外人は使えなくトレードで選手補強している現在5位のミミロップズファンのヤストシはん」

ヤストシ「なんだと！若手をあんまり起用しないエレブースファン！」

ナナコ「なんともいえ、ウチが応援しているエレブースは、今3位なんやんだから」

ヤストシ「ふん、そうほざけ。後半戦で絶対に巻き返して優勝してみせる」

ナナコ「自力優勝が消えた今、どうやって優勝するんだい」

ヤストシ「首位のスバメーズ（現実世界で言えば東京ヤクルトスワ



ローズ）を引きずり降りして自力優勝を復活させてみるさ！」

ナナコ「無理やって」

ヤストシ「無理じゃない」

二人は、くだらないことでけんかをする。

????「あ、コトネちゃん」

コトネ「ケンタ君！」

コトネの前に現れたのは、ケンタという少年である。

ハルカ「コトネ、誰なのこの人？」

ハルカがコトネに聞く。

コトネ「彼は、ケンタ君って言ってナナコちゃんとは、同世代で私の幼馴染なの」

コトネがケンタのことをそう紹介する。

コトネ「ところで、ケンタ。マリナちゃんは？」

ケンタ「マリナなら、観客席に座って観戦していると思っぜ」

ケンタがコトネにそう答える。

ハルカ「マリナって！」

ヒカリ「あの有名なトップコーディネーターでいろいろな雑誌とテレビに出演しているアイドル的存在のマリナ様のこと！」

ハルカとヒカリがそういうとコトネは、頷く。

そんな時だった。

タツヤ「あ、サトシ！」

サトシ「タツヤ！」

コトネとヒカリとハルカが話している時にやって来たのは、ヤストシの親友のタツヤであった。

シュウ「タツヤもこの大会に出ているのかい？」

タツヤ「もちろんさ」

タツヤは、そう答えた時だった。

????「カスミさん！」

カスミ「ツトム！」

カスミに声をかけてきたのは、ツトムであった。

アイリス「ねえねえ、ヤストシ。誰なの少年？」

アイリスがヤストシにたずねる。このとき、すでにけんかは収まっていた。

ヤストシ「彼は、ツトムって言って、昔、カスミがジムリーダーに就いてまもない頃にラブレターを送った少年なんだ」

アイリス「ラブレターを!？」

ヤストシの発言に驚くアイリス。

ヒカリ「でも、カスミのことでしょう。読まずにゴミ箱に捨てちゃったんじゃないの？」

いつの間にか会話の中に入ってきたヒカリ。

ヤストシ「いや」

ハルカ「え!じゃあ読んだの!？」

ヤストシの答えにそう言うハルカ。

ヤストシ「読んだのは、確かだけど、カスミは、その手紙を決闘状と勘違いをして待ち合わせ場所に行っちゃったんだ」

ヤストシが苦笑いしながらハルカとヒカリとアイリスに言う。

アイリス「それで、どうなったの？」

ヤストシ「そのあと、ツトムの発言でその手紙が決闘状じゃなくてラブレターだと気づき、ツトムは、勝ったら付き合ってくださいと宣言したんだ。でも、勝負はカスミが勝ちなかったことになったけど。本人は、諦めが悪くてね・・・」

ヤストシがハルカとヒカリとアイリスに言う。

ヒカリ・アイリス「そうなんだ」

ヒカリとアイリスが不気味な顔をしながらそう言った時だった。

????「お久しぶりですね。ヒカリさん」

近くからヒカリの名を呼ぶ声が聞こえた。

ヒカリ・ヤストシ・ハルカ・アイリス「誰?」「」

ヤストシ、ヒカリ、ハルカ、アイリスが振り返るとそこには、一部の人間のみ知っている人物が立っていた。

ヤストシ・ヒカリ「コウヘイ!？」

そこにいたのはサトシ、ヒカリ、タケシ、ヤストシがシンオウ地方で出会ったメガネのオク風トレーナー・コウヘイだった。

コウヘイ「お2人とも、この僕を覚えていたとはとても光栄に思います。特に、ヒカリさん。あなたのような可愛らしいお方に覚えていただけたのがなによりも幸運です」

ヒカリ「は、はあ・・・(汗)」

コウヘイの執拗なアプローチにヒカリは引き気味だった。コウヘイはヒカリに対して好意を抱いているが当の本人は、コウヘイみたいな人物は、どうも生理的に受け付けられないらしい。

ハルカ「誰なの、あの人？」

ヤストシ「あいつは、コウヘイと言って、ポケモンの知識、バトルの戦術など頭を使う頭脳派の青年なんだ。ヒカリに結構好意を持っているけど本人は、生理的に無理らしいって」

ヤストシが小声でそう言う。

タケナカ「さあ、お待たせしました。第9試合、マサトVSノゾミ戦のバトルが始まります！」

タケナカがそう放送をする。

はたして、このバトルどちらが勝つのか？

次回に続く。

**第83話 次々と現れるライバル（後書き）**

次回、マサトVSノゾミ戦をお送りいたします。

## 第84話 マサトVSノゾミ

エブチカップは、第9試合に突入した。

タケナカ「さあ、1回戦第9試合は、マサト選手対ノゾミ選手の対決ですが、エブチ博士は、この試合どんな勝負になるでしょうか？」

エブチ「そうですね、マサト選手は、トウカシティのトウカジムのジムリーダー・センリさんの息子でハウエンの舞姫でこの大会にも出場しているハルカ選手の弟という家系を持っています。また、ジムリーダーのお子さんと言うこともあり、なかなかレベルが高い試合運びを見せてくれて、リーグでもジョウト、ハウエンの大会でベスト4という成績を残していますから期待は、できるでしょう」

ワタル「私も一度、彼のバトルを見ていますが文句の言いようのないバトルを見せてくれました。この試合でもそう期待とえています」

エブチとワタルは、マサトをそう解説する。

タケナカ「対するノゾミ選手はどうでしょうか？」

エブチ「コンテストでは、シンオウのグランドフェスティバルを制覇し、トップコーディネーターの仲間入りしたほどの実力はありますがバトルに関しての実力はわかりませんがコンテストの技を使つてバトルを挑むコーディネーターがいますから少しは期待できると思います」

エブチは、そう解説する。

アヤノ「それでは、これよりマサト選手対ノゾミ選手によるエブチカップ第1回戦、第9試合を始めます。使用ポケモンは、1体。交代はなし、一騎打ち勝負です！」

ノゾミ「よろしくね、マサト君」

マサト「こちらこそ」

マサトとノゾミは、お互いそう言う。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

アヤノがバトル開始の宣言を言う。

マサト「行け、ガブリアス！」

ノゾミ「ニアルマー、Ready、GO!!」

マサトは、ガブリアスをノゾミは、ニアルマーを繰り出した。

タケナカ「マサト選手は、ガブリアス。ノゾミ選手は、ニアルマーを繰り出してきましたが、同じくガブリアスを持っていますシロナさんは、どうなると思いますか？」

シロナ「それはやってみないとわかりませんが期待したいと思いません」

シロナは、そう答えた。

マサト「カブリアス、かわらわり！」

ノゾミ「ニアルマー、かわしてシャドークロー！」

ガブリアスは、かわらわりを繰り出すがニアルマーは、すばやく避けてシャドークローを繰り出してガブリアスに当てる。

ノゾミ「ニアルマー、アイアンテール！」

ニアルマーは、続いてアイアンテールを繰り出した。

マサト「ガブリアス、りゅうのいかり！」

ガブリアスは、りゅうのいかりを繰り出し、ニアルマーは、避ける暇がなく命中する。

ノゾミ「なかなか、やるわねマサト君。なら、ニアルマーは、みだれひっかき！」

マサト「ガブリアス、避けてドラゴンクロー！」

ガブリアスは、ニアルマーのみだれひっかきを避けてドラゴンクローを繰り出す。

ノゾミ「かかったわね。ニアルマー、ねこだまし！」

ニアルマーは、ねこだましをガブリアスに繰り出す。ねこだましは、100%相手のポケモンをひるませる。ねこだましを食らったガブリアスは、攻撃できず終わる。

タケナカ「これは、ノゾミ選手がマサト選手を押ししています」

エブチ「バトル技術は、かなり上達していますな」

タケナカとエブチは、ノゾミをそう解説する。

ノゾミ「ニアルマー、シャドークロー！」

ニアルマーは、シャドークローをガブリアスに向けて繰り返す。  
マサト「負けるな、ガブリアス、ニアルマーに突っ込め！」

ガブリアスはニアルマーに向かって一直線に突っ込む。やがてガブリアスの周りを数本の渦が飛び交い始めた。

タケナカ「これは!？」

エブチ「ギガインパクト！」

エブチは、そう叫んだ。

ギガインパクトは、ニアルマーに当てる。ギガインパクトをまともに受けたニアルマーは、倒れていた。

アヤノ「ニアルマー、戦闘不能!ガブリアスの勝ち!よって、勝者マサト選手！」

そう宣言するとスタジアムは、わいた。

タケナカ「まさかの展開だ!マサト選手のガブリアスが土壇場どたんばの場面でギガインパクトを覚えて見事な勝利を収めて2回戦進出です」

ハルカ「マサト、すごいかも」

デント「あの場面で新しい技を覚えるなんてすごすぎるティストだね」

ハルカとデントは、マサトを試合を見てそう思う。

シュウ「さて、次は、僕達の番だね」

サトシ「負けないぜ、シュウ」

シュウ「僕もだよ、サトシ」

こうして第9試合は、マサトが勝利して2回戦進出した。

そして、第10試合、サトシVSシュウの試合は、どちらが2回戦に進むのか?

第84話 マサトVSノノミ(後書き)

次回もお楽しみに。



## 第85話 サトシVSシユウ

試合は、ついに前半戦最後の一番がやって来た。

タケナカ「前半戦、最後の一番がやってきました。前半戦、最後のバトルは、サトシ選手対シユウ選手です。サトシ選手は、ご存知の通りカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イツシユのポケモンリーグをすばらしい成績で収めた選手です。対するは、ホウエン、カントー、ジョウトのグランドウエステイバル優秀な成績を収めている別名「ラルースの貴公子」のシユウ選手がフィールドに立ちます」

アヤノ「それでは、これよりサトシ選手対シユウ選手によるエブチカップ第1回戦、第10試合を始めます。使用ポケモンは、1体。

交代はなし、一騎打ち勝負です！」

審判役のアヤノがサトシとシユウにそう言う。

サトシ「いい試合期待しているぜシユウ」

シユウ「ああ」

サトシとシユウは、お互いそう言う。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

アヤノがバトル開始の宣言を言う。

サトシ「プルルル、君に決めた！」

サトシが出したのは、先日ゲットしたばかりのプルルルである。

シユウ「ロズレイド、行くんだ！」

対するシユウは、エース格のロズレイドを繰り出した。

タケナカ「サトシ選手は、プルルル。対するシユウ選手は、ロズレイドを出してきました。相性では、ロズレイドが有利ですがエブチ博士は、どうこのバトルを見ますか？」

エブチ「確かに相性では、有利ですがサトシ君のプルルルは、のろわれボディを持っていきますから直接攻撃の技を受けるとその技がしばらく使えなくなりますからここがこのバトルのポイントになるで

しょう」

エブチは、そう言う。

シュウ「ロズレイド、マジカルリーフ！」

シュウは、サトシのプルリルがのろわれボディを持っていることを知っているため遠距離からの攻撃を仕掛けて来た。

サトシ「プルリル、まもる！」

プルリルは、まもるを繰り返してロズレイドのマジカルリーフを防いだ。

サトシ「みずのはどう！」

プルリルは、すかさずみずのはどうを繰り返出し、ロズレイドに当てるが草ポケモンのロズレイドには、水タイプの技は、効果はいまひとつである。

シュウ「ロズレイド、もう一度マジカルリーフ！」

サトシ「プルリル、かわしてあやしいかぜ！」

プルリルは、ロズレイドの技を避けてあやしいかぜを繰り返出し、ロズレイドに当てる。

シュウ「ロズレイド、メガドレイン！」

ロズレイドは、メガドレインを繰り返してプルリルにダメージをあたえて、ロズレイドは、回復する。

サトシ「くそ、分が悪すぎる。何か、他にプルリルが覚えている技・・・あ、これだ！」

サトシは、凶鑑を見てある技が目に入る。

サトシ「プルリル、じこさいせい！」

プルリルは、じこさいせいを繰り返して回復する。

タケナカ「おっと！プルリルがじこさいせいを繰り返して回復したぞ。これたで勝負の行方がわからなくなってきました」

タケナカが興奮しながらそう言う。

シュウ「ロズレイド、はなびらのまい」

ロズレイドは、はなびらのまいを繰り返して来た。はなびらのまいは、威力はすごいが技を使った後は、混乱するというリスクがある

ためここでという場面以外は、使うトレーナーはいない。

そして、はなびらのまいは、プルリルへ飛んで来た時だった。プルリルは、口かられいとうビームが発射し、それがロズレイドに直撃する。

タケナカ「なんと、プルリルがこの場でれいとうビームを覚えた！そして、その技がロズレイドに当たり効果抜群です」

サトシ「よし、プルリル。もう一度れいとうビーム！」

プルリルは、れいとうビームを繰り出した。ロズレイドは、避けることができず見事に命中して倒れる。

アヤノ「ロズレイド、戦闘不能！プルリルの勝ち！よって、勝者サトシ選手！」

タケナカ「サトシ選手、見事シユウ選手を退けて2回戦進出しました」

実況のタケナカがそう言う。

カスミ「上手い攻めして勝ったわねサトシ」

アイリス「なかなか、やるじゃない」

ヒカリ「ホント」

カスミ、アイリス、ヒカリは、サトシとシユウの試合を見てそう思う。

これで1回戦の前半戦が終わり、後半戦へと突入する。

第85話 サトシVSシユウ(後書き)

まだまだ、エプチカップは、続きます。

第86話 因縁の対決 カベルネVSデント(前書き)

久しぶりの更新です。

アルバイトから帰って来て書いた話です。

## 第86話 因縁の対決 カベルネVSデント

エブチカップは、第11試合まで終わり11試合目で登場したシゲルは、快勝して2回戦進出した。

そして、第12試合は、デントVSカベルネの因縁対決である。

アヤノ「それでは、これよりカベルネ選手対デント選手によるエブチカップ第1回戦、第12試合を始めます。使用ポケモンは、1体交代はなし、一騎打ち勝負です！」

審判役のアヤノがカベルネとデントにそう言う。

カベルネ「ついにこの時が来たわよデント。今度こそ貴方を倒し、私のテイ스팅グが正しいことを証明して見せるわ！」

デント「相変わらずだね君は・・・」

カベルネの発言にあきれながらそうつぶやくデント。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

カベルネ「行っけ、ムーランド！」

デント「行くぞ！マイビンテージ！トリトドン！」

カベルネは、ムーランド。デントは、トリトドンを繰り出した。

カベルネ「ムーランド、たいあたり！」

ムーランドは、トリトドンにたいあたりを仕掛ける。

デント「ドリトドン、どろばくだん！」

ドリトドンは、ムーランドに向かってどろばくだんを仕掛けて見事命中する。

カベルネ「ムーランド、ペッシなさい」

カベルネはそう言ってムーランドは、口から泥を吐き出す。

デント「トリトドン、続けてみずのはどう」

トリトドンは、みずのはどうを繰り出す。

カベルネ「ムーランド、避けてこおりのキバ！」

ムーランドは、みずのはどうを避けてこおりのキバを繰り出しトリトドンに噛み付きトリトドンの体を一部凍らせる。

タケナカ「ムーランドのこおりのキバが決まりトリトドンの体の一部を凍らせたぞ。これは、デント選手ピンチを迎えています」

カベルネ「オホホホ、思い知ったデント。これがBクラスになった私の今の実力よ。この勝負、私の完全勝利だわ」

カベルネは、笑いながら完全勝利宣言する。

しかし、デントは焦る顔を見せなかった。

デント「イツツ、テイステイングタイム！」

デントは、大きい声でそう言う。

エプチ「お、ここでデント選手のイツツ、テイステイングタイムが始まってようですな」

エプチがそう言うが実況担当のタケナカはソムリエ自体知らないため首をかしげる。

デント「カベルネ、確かに君は、強くなっている。ホットでまるやかな肉汁がたつぷりたまったハンバーグのように。だけど君には、まだ甘い。そう、メロンソーダー並にね」

カベルネをそうテイストするデント。

それを聞いたカベルネは、カンカンであった。

カベルネ「なんですって！メロンソーダー並の甘さですって！冗談は、髪の毛だけにしなさいよ。あなたは、追い詰められている方よ。私が勝つに決まっていますわ。そのテイストが間違いだらけよ！」

カベルネは、デントのテイストをかなり否定的に言う。

デント「君は、そう思っているようだけど、まだ勝負は、終わっていないよ。ドリトドン、ねっとう！」

そう言うとドリトドンは、ねっとうを発射してムーランドに当てる。ねっとうは、水タイプの技でありながらややけどの追加効果のある技である。

カベルネ「ムーランド！」

ムーランドを見るカベルネ。

この時ムーランドは、やけどを負っていた。

デント「これでフィニッシュードリトドン、だくりゅうー！」

ドリトドンは、だくりゅうを繰り出してムーランドに当てる。  
カベルネ「ムーランド！」

そして、煙がはれるとムーランドは、目を回していた。

アヤノ「ムーランド、戦闘不能！ドリトドンの勝ち！よって、勝者

デント選手！」

デント「よくやったぞドリトドン」

ドリトドンをなでるデント。

カベルネ「まさか、返り討ちにあうなんて……。デント、次こそ倒すからね！」

そう言つてムーランドをボールに戻しその場を去って行った。

こうして第12試合は、デントが勝利を収めた。

エプチカップは、まだまだ続く。



## 第86話 因縁の対決 カベルネVSデント（後書き）

カベルネ「ちよつと、作者！」

なんだ、カベルネ？

カベルネ「私とデントを初戦からぶつけながら私が負けるなんて！

！！」

まったく、そんなことかよ。子供ね。

デント「それ、アイリスの台詞だよ作者。それで、これからどうするんだい？」

今回は、準々決勝から始まるつもりだ。

デント「また、どうしてだい？」

いつまでもこればかりじゃあ、物語が進まないから準々決勝から始めるんだ。

デント「適当のような計画的なような・・・」

いいだろう別に。とにかく、次回もお楽しみに。

デント「次回もポケモンゲットでグッドテイスト！」

第87話 明日へ向けて（前書き）

ハームレに注意。

そして、シンジの秘密が明らかになります。

## 第87話 明日へ向けて

カベルネ対デントの試合は、デントが勝利を収めた後、第13試合、ヒロシVSルークは、ヒロシが勝利し、第15試合は、ヤストシが勝ち、第16試合は、アイリスが、第18試合は、エリカが第20試合は、スズナが第21試合のコトネVSベルは、ベルが勝利し2回戦進出した。

そして、試合は2回戦、3回戦が行われた。そしてベスト8に進出したのは、サトシ、カスミ、ハルカ、アイリス、ヤストシ、マサト、シンジ、ジケルの8人である。

タケナカ「本日の試合は、ここまでとなります」

エプチ「明日の昼から準々決勝を行います。ベスト8に進出した選手の皆様、ゆっくりと今日は休んでください」

エプチがそう言って1日目を終えた。

サトシ「疲れたぜ、今日は」

サトシがポケモンセンターのソファアに深く座りそう言う。

カスミ「何言っているのよサトシ」

アイリス「疲れているのは、あんたじゃなくってポケモン達でしょう」

カスミ・アイリス「お子ちゃま(子供)ね」

カスミとアイリスが同時にサトシにそう言う。

タケシ「サトシ、カスミ、ハルカ、アイリス、ヤストシ、マサト、ベスト8進出おめでとう」

ケンジ「これは、僕とタケシとデントが作った豪華料理だよ」

デント「どうぞ、ご賞味あれ」

デントが料理をテーブルに置きながらサトシたちに言う。

ハルカ「おいしそうかも」

サトシ「よし、食って食いまくるぜ！」

アイリス「あたしも」

カスミ「お子ちゃまね」

ヤストシ「いただきます!」

いろいろいいながらサトシ達は、デントとタケシ、ケンジが作った飯を食い始める。

その後、ベル、タクヤ、コトネ、ヒカリ、シュウも加わり料理は、ただ30分で一粒残さずたえらげた。

サトシ「はー、食ったー・・・明日の準々決勝は力いっぱいバトルだー」

ピカチュウ「ピーカーチュウー・・・」

そう言つてサトシとピカチュウは、ベッドに倒れこんだ。

カスミ「サトシこれは恐いぞ。一体妊娠何週目の腹よ」

サトシ「うわっ、押すなよカスミ!おえっ」

サトシのお腹を思いつき押しカスミ。

ヒカリ「カスミ、何しているのよ」

アイリス「しかも、サトシと二人きりで」

ベル「遊ぶなら私も入れてよ」

コトネ「私も」

そう言つてヒカリ、アイリス、ベル、コトネは、サトシを押し倒されながらサトシとあんなことやこんなことをしようとする。

タケシ「サトシ・・・。羨ましい、実に羨ましいぞおお!よし、ジョーイさん。一緒に自分と一緒にお茶でも」

サトシの光景を見たタケシは、ジョーイのところへ行こうとしたがヤストシとマサトが止める。

ヤストシ・マサト「ジョーイさんは、仕事だからあっちに行こうね」

そう言つて二人は、タケシの耳を引っ張つて行く。

タケシを引っ張つたヤストシは、自分の部屋へ戻ろうとしたらサトシたちからかなり離れたところにシンジがいるのを見かける。しかも、読書しながら。

ヤストシ「（あいつが読書を読むとは珍しいな）」

シンジの読書をする風景を見て感心するヤストシ。

ヤストシは、少し近づくとヤストシは、ある物を見てびっくりする。

ヤストシ「（僕と君の365日!?)」

ヤストシは、シンジが読んでいる本のタイトルを見て驚く。

何故驚くかと言うとこの「僕と君の365日」は、恋愛小説である。硬派な彼からは想像出来ない光景なのでヤストシが驚くのも無理もない。

するとシンジは、気配に気づいたのか？本を閉じてヤストシのほうを見る。

ヤストシ「すまんシンジ。読書の邪魔をして」

ヤストシがもしわけなさそうにシンジ言う。

シンジ「……………」

しかし、シンジは無言でイスに座り再び本を開く。ヤストシは、シンジが本を読んでいる姿をジッと見る。

シンジ「そんなに珍しいか。俺が読書するところ」

シンジがこつちばかり見ているヤストシにそうたずねる。

ヤストシ「そんなことないよ。ただお前が恋愛小説を読んでいるから……………」

ヤストシが言いにくそうにシンジにそう答えた。

ヤストシ「でも、お前が恋愛小説を読むなんて、好きな女でもできたのか？」

ヤストシがシンジにそう言うのとシンジは、一瞬ビクツとする。ヤストシは、それを見逃さなかった。

ヤストシ「いるんだな」

ヤストシは、すかさずシンジに問いかける。

シンジ「なわけないだろう」

シンジは、そう言うが顔は真っ赤であったがこの位置からヤストシは、シンジの顔が見えないのでそれが不幸中の幸いであった。

ヤストシ「誰にも言わないからさ。教えてよな」

シンジ「断る！」

ヤストシの要求をシンジは瞬時に断る。

ヤストシ「わかったよシンジ」

ヤストシは、諦めて部屋へ戻ろうとした時だった。

シンジ「明るい性格でおしゃれ好きであいつと性格が似ている」

ヤストシ「え！」

シンジの突然の発言にヤストシは、驚く。ヤストシは、確認のためもう一度聞くとするが何かへんな予感がしたのでやめた。

ヤストシ「（明るくておしゃれ好きであいつと性格が似ている女の子？誰だろう？）」

ヤストシは、シンジが言ったことを思い出しながら考え始める。

ヤストシ「（待てよ！あいつと性格が似ている。あいつつてもしかしてサトシのことか？とするとサトシの性格に一番似ている女と言えば・・・）」

そう推理してヤストシは、ある女性を思い浮かべる。

ヤストシ「なるほど・・・」

ヤストシが思い浮かべた女性は、明るくておしゃれ好きでサトシの性格によく似ている。この女性で間違いないだろうと判断した。

ヤストシ「頑張れよシンジ。その女性には、幼馴染と頭脳派と研究員が狙っている。でも、その女性は、お前のライバルに想いを寄せているから一筋縄じゃあいかないからな。まあ、頑張れよ」

ヤストシは、シンジにそう言っただけその場を立ち去った。

そしてシンジは、本を再び読む始めた。

第87話 明日へ向けて（後書き）

シンジに好きな人が判明しました。

この小説を読んでいる方ならもうお分かりでしょう。

そう「大丈夫」という口癖を持つ女の子です。

## 第88話 準々決勝第1試合 姉弟対決

翌日、自然スタジアムではエブチカップ2日目準々決勝が行われようとしていた。

タケナカ「さあ、エブチカップ2日目。今日は、準々決勝と準決勝が行われます。実況は、テレビピカリーのタケナカがお送りいたします。そして、解説には、昨日に引き続きエブチカップ主催者のエブチ博士とシンオウチャンピオンのシロナさん、ジヨウトチャンピオンマスターでドラゴンマスターでGメン捜査官のワタルさんとお届けしてまいります。本日もよろしくお願いします」

エブチ・シロナ・ワタル「……よろしくお願いします」

タケナカ「そして、さらに本日はスペシャルゲストといたしましたホウエン地方のトウカジムのジムリーダーでこの大会にも出場していますマサト選手とハルカ選手の父親でありますセンリさんです。

本日は、よろしくお願いします」

タケナカがそう言うとセンリは、無言で頭を下げる。

マサト「パパがエブチカップの解説に呼ばれたんだ」

マサトは、それを映像を見てそうつぶやく。

タケナカ「さて、本日の準々決勝の組み合わせですがこうなっています！」

タケナカがそう言うとスクリーンに対戦相手の組み合わせが発表された。

タケナカ「第1試合は、ハルカ選手対マサト選手。第2試合は、ア

イリス選手対カスミ選手。第3試合は、シンジ選手対ヤストシ選手。

第4試合は、サトシ選手対シゲル選手です」

タケナカの口から組み合わせが発表される。

ハルカ「私とマサトが対決するのね」

マサト「お姉ちゃんと対決か。僕、絶対に負けないわ！」

ハルカ「それは、私もよマサト」



お互いそう言うハルカとマサト。

アイリス「あたしは、カスミとの対決ね。ドラゴンマスターを目指すあたしの今の実力を見せてやるわよカスミ。貴方<sup>カスミ</sup>を倒して準決勝へ進むわ」

カスミ「それなら水系マスターを目指しているハナダのおてんば人魚が返り討ちにしてやるわよアイリス」

お互いそんなことを言うカスミとアイリス。

シゲル「まさか、準々決勝で君と当たるなんて予想外だよ。でも、ジヨウトリーグの雪辱を今はらしてやる！」

サトシ「俺だつてあの頃より強くなっている。この試合に勝つて、そして優勝ゲットだぜ！」

シゲルは、ジヨウトリーグ本戦1回戦でサトシに敗れていてそれを雪辱するためサトシを倒す宣言する。一方のサトシもあの頃より実力が上がっているのとシゲルに言う。

タケナカ「それでは、試合を始めたいと思います。まずは、第1試合は、コーディネーターとしてコンテストに出場しグランドフェスティバルでは優秀な成績を残しホウエンの舞姫と呼ばれるようになったハルカ選手とジヨウト、ホウエンの2大会でベスト4と言う成績を残したマサト選手の姉弟対決ですがマサト選手とハルカ選手の父親でありますセンリさんは、この試合どうな展開になりますか？」  
タケナカがセンリにそうたずねる。

センリ「そうですね、バトルはやってみないとわからないですがバトルの知識、技術面ならマサトのほうが有利です。しかしコンテストを数多く経験しているハルカには、変則的なコンテスト技を仕掛けてくればまだわからないでしょう」

センリがタケナカにそう言う。

そしてフィールドでは、ハルカとマサトが立っていた。

アヤノ「それでは、ただいまよりハルカ選手対マサト選手によるエプチカップ準々決勝第1試合を行います。使用ポケモンは、1体。交代はなし、一騎打ち勝負です！」

審判役のアヤノがハルカとマサトにそう言う。  
アヤノ「それでは、バトル開始！」  
アヤノがバトル開始の宣言を言う。  
ハルカ「バシャーモ、Stagge On！」  
マサト「行け、サーナイト！」  
ハルカはバシャーモ、マサトはサーナイトを繰り出した。  
タケナカ「ハルカ選手はバシャーモ、マサト選手はサーナイトとお互いエース格のポケモンを繰り出しましたね」  
エブチ「相性ならサーナイトが有利ですがこれをハルカちゃんがどうたいようするかですね」  
エブチがそう言う。  
マサト「サーナイト、でんじほう！」  
タケナカ「おっと！先制攻撃を仕掛けてきたのはマサト選手のサーナイトだ！」  
サーナイトが放ったでんじほうは、バシャーモに飛んでいく。  
ハルカ「ハシャーモ、避けるのよ！」  
しかし、バシャーモは、でんじほうを上手くかわした。  
ハルカ「バシャーモ、ほのおのうず！」  
バシャーモは、ほのおのうずを繰り出す。  
マサト「サーナイト、テレポート！」  
サーナイトは、テレポートでほのおのうずを避ける。  
マサト「お姉ちゃん、僕をあまり見くびらないで欲しいよね。僕がバシャーモが使える技は知っている限り僕の手の内だよ。サーナイト、もう一回テレポート！」  
マサトがハルカにそう言うって指示を出しサーナイトは、テレポートする。  
ハルカ「バシャーモ、気つけて！」  
ハルカがそう言うのとバシャーモは、辺りを警戒するがサーナイトは、バシャーモの後ろを取る。  
ハルカ「しまった!？」

マサト「サーナイト、サイコネシス！」

サーナイトは、サイコネシスを繰り返してバシャーモに見事命中し効果は抜群である。

しかし、バシャーモはなんとか耐えていた。

ハルカ「（何とか耐えたけどあのサーナイトかなり育っているわね。さすがマサトだわ。隙があまりないわ。どうしたら・・・）」  
ハルカが懸命にサーナイトを倒す方法を考えていた時あることを思い出す。

マサト「僕がバシャーモが使える技は知っている限り僕の手の内だよ」

ハルカ「（マサトが私のバシャーモの技を知っている限り・・・、そうか！これなら勝機があるかも）」バシャーモ、走りながらサーナイトに向かってほのおのうず！」

バシャーモは、サーナイトの周りを走りながらほのおのうずを繰り返す。

マサト「サーナイト、レポート！」

サーナイトは、レポートをして避ける。

ハルカ「バシャーモ、ジャンプ！」

マサト「え！」

サーナイトは、レポートをしたと同時にバシャーモはジャンプする。

マサトは、ハルカの不可解な行動に驚く。

そして、サーナイトが姿を現すと・・・

ハルカ「バシャーモ、ねっぷう！」

バシャーモがねっぷうを繰り返してサーナイトに見事命中する。

ハルカ「マサト、1つだけ間違っているわよ。私のバシャーモは、さらに技を覚えているのよ！」

ハルカがマサトに言う。

ハルカ「これで終わりよ。バシャーモ、オーバーヒート！」

バシャーモは、サーナイトがひるんだ隙にオーバーヒートを繰り返す

してサーナイトに命中する。

マサト「サーナイト！」

そして、煙が晴れるとサーナイトは、目を回していた。

アヤノ「サーナイト、戦闘不能！バシャーモの勝ち！よって、勝者ハルカ選手！」

ハルカ「ヤッター！」

ハルカは、おたけびを上げた。

タケナカ「なんと、ハルカ選手。弟のマサト選手を退けて準決勝進出です」

タケナカがそう言う。

ヒカリ「ハルカ、すごいわ」

ヤストシ「マサトを退けるなんて・・・」

アイリス「ハルカが準決勝に進出したってことは、次の試合の勝者がハルカと対決ね」

ラングレー「せいぜい頑張るのねアイリスの子供」

アイリス「それを言うなら、子供のアイリスでしょ！」

相変わらず犬猿の仲の二人であった。

ラングレー・アイリス「誰が犬猿の仲よ作者！！！！」  
誰が見たってそうだろう。

ラングレー「そんなわけないよこんなデカイ頭の女と」

アイリス「アグレッシブな髪型をわからない貴方に言われたくないわ！」

ラングレー「何よ」

アイリス「そつちこそ、何なのよ」

アイリスとラングレーはお互いに睨み合う形になった。心なしか2人の間には火花が散っている。

ヤストシ「睨み合う相手が違うと思うんだけど・・・」

ヤストシは、二人の光景を見て苦笑する。

カスミ「それじゃあ、行って来るわ」

サトシ「頑張れよカスミ、アイリス」

デント「二人とも頑張れよ」

サトシとデントは、アイリスとカスミに言う。

そして、二人はフィールドへ向かったのである。

第88話 準々決勝第1試合 姉弟対決（後書き）

ハルカ、改めて準決勝進出おめでとう。

ハルカ「ありがとうかも」

マサト「まさか、僕がお姉ちゃんに負けるなんて・・・」

まあまあ、マサト落ち込むなよ。

ラングレー「おい、作者！」

ん、なんだラングレー？

ラングレー「何よ、この出し方といい扱い方ひどいわよ」

どんな出し方や扱い方は俺の勝手だよ。

マサト「それはある意味権力乱用だね」

ラングレー「それは言いとして、ハルカ。絶対にアイリスの子供と

勝つてよな」

ハルカ「何、このプレッシャー」

それとアイリスの子供じゃなくて、子供のアイリスだよラングレー。

ラングレー「どんな呼び方をしようが私の勝手よ。本当なら私が残

ってアイリスの子供を倒すはずだったんだから」

それは、いつか入れるから勘弁して。

ラングレー「それはありがたいわニートの作者さん」

お前、一度ドラゴンマスターでジョウトのチャンピオンのワタルさ

んにボコボコにやられればいいんだ（怒）

ハルカ・マサト「怒っちゃった・・・」

ラングレー「なんですって！！！」

痛い目に遭っちゃまえ！

マサト「なんか大変なことになってきたてわよお姉ちゃん」

ハルカ「とりあえずこの辺でお開きにしましょう。次回もポケモン

ゲットかも」

第89話 ヒロイン対決！ アイリスVSカスミ（前書き）

カスミの新たなポケモンでアイリスと対決します。

## 第89話 ヒロイン対決！ アイリスVSカスミ

タケナカ「さあ、エブチカップ準々決勝は続いて第2試合に突入です。まずは、ハナダジムジムリーダーで『カントーの<sup>マーマイド</sup>人魚姫』と呼ばれここまで危なげのないバトルを見せていますカスミ選手と竜の里の出身でドラゴンマスターを目指し勝ち上がってきましたアイリス選手です」

そう紹介するとスタジアムは、盛り上がった。

タケナカ「さあ、エブチ博士。この試合も非常に楽しみな一番ですね」

エブチ「何しろ両者ともに専門マスターを目指している子達ですからね。ただ、実力でいえばカスミちゃんのほうが断然上ですかね」  
タケナカ「そうですね。それでは、ワタルさんは、同じドラゴンマスターを目指しているアイリス選手はどうですか？」

ワタル「そうですね。1回戦は、ドリユウズで2回戦3回戦は、エモンガでここまで来ましたからぜひカスミ選手を倒して準決勝に進んでほしいですね」

ワタルは、タケナカにそういう。

アヤノ「それでは、ただいまよりカスミ選手対アイリス選手によるエブチカップ準々決勝第2試合を行います。使用ポケモンは、1体交代はなし、一騎打ち勝負です！」

審判役のアヤノがカスミとアイリスにそう言う。

カスミ「アクアマスターを目指しかつジムリーダーのあたしの實力を見せてあげるわ」

アイリス「こっちもドラゴンマスターを目指している今のあたしの實力を見せてやるわ」

意地とプライドを見せるカスミとアイリス。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

アヤノがバトル開始の宣言を言う。



アイリス「行くのよキバゴ」

アイリスは、キバゴを繰り出した。

カスミ「行け、My Steady!」

ミロカロス「ミロオオオオオ!」

そして、カスミが繰り出したのはなんとミロカロスであった。

ヒカリ「ミロカロス!？」

サトシ「あいつ、いつの間にミロカロスなんかゲットしたんだ!」

ヤストシ「なんでも俺達がイッシュ地方で旅立った時にあいつホウエンに行く用事があつたらしくつてその時に釣りでゲットしたヒンバスを進化させたらしいんだ。コンテストはもちろんジム戦でも使用して今では2番手エースだってお母さんが言っていたよ」

マサト「そうなんだ」

ハルカ「カスミもホウエンに来たら私に一言声を掛けてくれても良かったのに」

ハルカは、そうつぶやいた。

タケナカ「カスミ選手はミロカロス、アイリス選手はキバゴを繰り出してきましたね」

シロナ「ミロカロスは、水タイプでキバゴは、ドラゴンタイプですがミロカロスが、氷タイプの技を覚えていたらアイリス選手はかなり不利にたたされますね」

エブチ「これをどうするかがアイリス選手の勝利へ導く鍵ですね」

エブチとシロナは、そう解説する。

カスミ「ミロカロス、ハイドロポンプ!」

ミロカロスは、先手を取りキバゴへ向けてハイドロポンプを発射する。

アイリス「キバゴ、避けるのよ」

キバゴは、ハイドロポンプをうまく避けた。

アイリス「りゅうのいかり!」

キバゴは、りゅうのいかりを繰り出しミロカロスに命中する。

カスミ「やるわね、アイリス。なら、これはどうかしら。ミロカロ

ス、れいとうビーム！」

アイリス「キバゴ、避けて！」

キバゴは、すかさずれいとうビームを避ける。ドラゴンタイプは、氷が弱点で当たれば効果抜群である。

アイリス「キバゴ、もう一度、りゅうのいかり！」

キバゴは、りゅうのいかりを繰り返すが今度は、ミロカロスはうまくかわした。

カスミ「そんなんじゃないわよアイリス。ミロカロス、アイアンテール！」

ミロカロスは、キバゴに向かってアイアンテールを繰り返す。

アイリス「キバゴ、避けてミロカロスにひっかく！」

キバゴは、アイアンテールを避けてミロカロスにひっかくを繰り返すしダメージを与える。

カスミ「振り払うのよミロカロス！」

ミロカロスは、キバゴを振り払おとする。

アイリス「キバゴ、そこからりゅうのいかり！」

キバゴは、りゅうのいかりを繰り返した。

超至近距離では避けることができずミロカロスは、まともにりゅうのいかりを食らった。

カスミ「やるわね、アイリス」

アイリス「そっちなこそ」

カスミ「でも、この勝負はあたしがもらうわ。ミロカロス、ねむる！」

カスミがそう指示をしてミロカロスはねむる。

タケナカ「カスミ選手、ねむるを使ってきたぞ！」

エブチ「ねむるは、体力を全回復だけでなく状態異常も治す効果もある。これでキバゴが受けたダメージは、なくなっただけだ」

エブチは、そう解説する。

ヒカリ「カスミ、ねむるを使うなんて」

デント「でも、ねむるは眠っている間は攻撃ができない。そうすれ

ば相手に隙を与えるだけだ」

ヤストシ「でも、カスミのあの顔。なにか秘策がありそうだな」

ヤストシは、カスミの顔を見てそう言う。

カスミ「これでミロカロスは、全回復したわよ」

アイリス「確かにね。でも、ねむるは、かなりのメリットがあるが逆にリスクが大きい技でもある。寝ている間は攻撃ができないわよ。この隙に攻撃するわよキバゴ。ひっかく！」

アイリスは、そう言ってキバゴにひっかくを指示する。

カスミ「確かに寝ている間は攻撃はできないわよ。でも、これがあれば攻撃できるわよ。ミロカロス、ねごと！」

ミロカロスにそう指示を出すカスミ。

ヤストシ「やっぱり秘策を持っていたな」

ヤストシは、声を上げて言う。

ねごとは、眠っている状態でも技が繰り出すことができる技である。そして、ねごとでミロカロスが繰り出したのは、れいとうビームであった。

アイリス「キバゴ、避けて」

アイリスがそう言うのとキバゴは、すばやく避ける。

アイリス「（こうなったら一か八かだわ）キバゴ、げきりん！」

タケナカ「なんと、アイリス選手は賭けにできました！」

シロナ「しかも、あのキバゴ、げきりんを覚えているのね」

エブチ「げきりんは、ドラゴンの技で2番目に強力な技ですから、寝ているミロカロスには大ダメージを与えるでしょう」

ワタル「ただ、げきりんは使った後は、混乱しますから大きな賭けと言えますから」

実況と解説組は、そう言う。

カスミ「ミロカロス、ねごと！」

カスミは、ミロカロスにねごとを指示するが・・・

ミロカロス「zzzzzzzzzz」

何故か技を繰り出さずそして、キバゴのげきりんが命中する。

タケナカ「おっと、カスミ選手ねごを指示するもミロカロスは、技を繰り出さずキバゴのげきりんを受けてしまった！」

シロナ「どうやら、ねごとでねむるを繰り出してしまったようです  
ね」

エブチ「ねごとでねむるを繰り出しても意味はありませんからね」  
エブチは、辛口にそう言う。

するとミロカロスは、目を覚ました。

タケナカ「お、ミロカロスが目を覚ましたぞ」

カスミ「ミロカロス、れいとうビーム！」

ミロカロスは、れいとうビームを繰り出し反撃をする。

しかし、キバゴは、避けてげきりんをミロカロスに当てた。

カスミ「ミロカロス！」

そして、煙が晴れるとミロカロスがグツタリしていた。

アヤノ「ミロカロス、戦闘不能！キバゴの勝ち！よって勝者アイリス選手！」

アイリス「やった！」

アイリスは、ガッツポーズをする。

タケナカ「アイリス選手、見事カスミ選手を退けて準決勝進出です」  
タケナカがアイリスをそうたたえる。

サトシ「すっげえアイリス！」

ヒカリ「カスミのミロカロスを退けて準決勝に行くなんて・・・」

ハルカ「準決勝の相手は、アイリスか。頑張つてやるうかも」

3人がアイリスを褒める中ラングレーは・・・

ラングレー「ふん、また運で準決勝まで進むなんて」

不機嫌そうにそう言うラングレー。

デント「相変わらずだねラングレーは」

マサト「運じゃなくて実力なのにね」

ヤストシ「つたく、逆恨みもいいところだぜ」

デントとマサトとヤストシは、ラングレーに聞こえない程度でそうつぶやく。

ベル「次は、ヤストシ君の番ね」

ヤストシ「ああ、勝って準決勝に進んでやるぜ」

ヒカリ「でも、相手はシンジよ」

ヤストシ「俺は、誰が相手であろうと全力で戦うのみさ」

ヤストシは、そう言っつてフィールドに向かった。

シンジ「……………」

シンジは、読んでいた本を閉じてバトルフィールドへ向かった。

**第89話 ヒロイン対決！ アイリスVSカスミ（後書き）**

今回は、シンジ対ヤストシとサトシ対シゲルの2連戦をまとめてお送りします。

## 第90話 因縁と雪辱（前書き）

今回は長くなりそうなのでバトルシーンを一部カットしながらお送りします。

## 第90話 因縁と雪辱

準々決勝も後半戦に入り、現在第3試合ヤストシ対シンジの試合が行われている。

ヤストシはミミロップ、シンジはドダイトスを繰り返してバトルをしている。

ヤストシ「ミミロップ、ほのおのパンチ！」

シンジ「ドダイトス、ストーンエッジ！」

ミミロップは、ドダイトスにほのおのパンチを繰り返すがドダイトスは、ストーンエッジを繰り返しミミロップに逆にダメージを与える。

ハルカ「ヤストシ、かなり苦戦しているかも」

ヒカリ「シンジはあれ以降さらに実力が増しているわね」

アイリス「でも、ヤストシ。なんかまだ余裕っていう感じしているわ」

ベンチで見ていたハルカ、ヒカリ、アイリスは、そう言った。

シンジ「ドダイトス、ハードプラント！」

シンジは、そう指示を出しドダイトスは、ハードプラントを繰り返す。

そして、ハードプラントは見事ミミロップに決まる。

タケナカ「ハードプラントが決まった！」

タケナカがそう言う。

シンジも勝利を確信した。

しかし、煙が晴れるとそこにはミミロップが立っていた。

タケナカ「なんと、ミミロップが立っています。ハードプラントを耐えました！」

タケナカがそう言う。

ヤストシ「さあ、反撃開始だ。ミミロップ、新技で決めるぞ。ギガインパクト！」



ヤストシがそう指示を出しミニロップがギガインパクトを繰り返す。ハードブランドを使用しその反動で動くことができないドダイトスは避ける手立てなくまともにギガインパクトを受けて倒れた。

アヤノ「ドダイトス、戦闘不能！ミニロップの勝ち！よって、勝者ヤストシ！」

タケナカ「なんと、ヤストシ選手。ギガインパクトを使ってドダイトスを倒して準決勝進出です」

タケナカがそう言う。

シロナ「あの戦法。まるで、私を見ているようだわ。それにしてもギガインパクトを覚えたなんて、さすが私のカブリアスを倒したポケモンだわね」

心の中でそうつぶやく。

タケナカ「さあ、準々決勝は続けて第4試合です。第4試合はサトシ選手とシゲル選手の対決です。この二人の対決はジョウトリーグ本戦1回戦以来となる対決です」

タケナカがそう言う。

アヤノ「それでは、ただいまよりサトシ選手対シゲル選手によるエブチカップ準々決勝第4試合を行います。使用ポケモンは、1体。

交代はなし、一騎打ち勝負です！」

審判役のアヤノがサトシとシゲルにそう言う。

シゲル「ついにこのときが来たようだねサートシ君」

サトシ「こつちも全力で戦うのみだぜ」

お互いそう言う。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

アヤノがバトル開始の宣言を言う。

シゲル「行け、ブラッキー！！」

サトシ「頼んだ、ピカチュウ！！」

サトシはピカチュウをシゲルはブラッキーを繰り返す。

言葉に力を乗せ、二人は行動を同時に起こす。

シゲル「ブラッキー、シャドボール！」

サトシ「ピカチュウ、でんこうせっか！」  
ついに雪辱戦が始まった。

雪辱戦が始まって15分、両者こう着状態が続いた。

マサト「ねえ、お姉ちゃん。なんか、かなりカットされてない？」  
ハルカ「確かに」

ヒカリ「めんどくさがりやの作者」  
悪かったなめんどくさがりやで！

シゲル「ブラッキー、ロケットずつき」

ブラッキーは、ピカチュウに向かってロケットずつきを繰り出す。

サトシ「ピカチュウ、エレキボール！」

ピカチュウは、エレキボールを繰り出した。

ブラッキーは、避けることができずエレキボールをまともに受けた。

シゲル「ブラッキー！」

そして、煙が晴れるブラッキーは、目を回していた。

アヤノ「ブラッキー、戦闘不能！ピカチュウの勝ち！よって、勝者

サトシ！」

タケナカ「なんとサトシ選手。見事シゲル選手を返り討ちにして準  
決勝進出です」

タケナカがそう言った。

こうして準決勝メンバーがでそろった。

果たしてこの4人の中で決勝に進むのは誰か？

第90話 因縁と雪辱（後書き）

シゲル「作者、なんだこの話！」

ヤストシ「手抜きだらけだぞ今回の話！」

しょうがないだろうこつちだっっているいるあつたんだから。

シゲル「とにかく、次回は頼んだよ作者」

わかったよシゲル。それでは最後になりましたが、次回もお楽しみに。

## 第91話 ヒロイン対決?! ハルカVSアイリス

準々決勝の全ての試合が終わり、大会はいよいよ準決勝に突入した。タケナカ「さあ、エブチカップはいよいよ準決勝に突入しました。さて、試合の組み合わせはベスト8からトーナメント方式で行われています。その準決勝第1試合はトウカジムのジムリーダー・セリさんの娘さんで「ホウエンの舞姫」と呼ばれているハルカ選手とドラゴンマスターを目指していますアイリス選手の対決となります」タケナカがそう言うとバトルフィールドには、その二人 ハルカとアイリスが立っていた。

アヤノ「それでは、ただいまよりハルカ選手対アイリス選手によるエブチカップ準決勝第1試合を行います。使用ポケモンは、1体。交代はなし、一騎打ち勝負です！」

審判役のアヤノがハルカとアイリスにそう言う。

ハルカ「ここまで来たんだから、絶対に決勝戦に進むかも」

アイリス「それは、アタシもよハルカ」

お互いそう言うハルカとアイリス。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

アヤノがバトル開始の宣言を言う。

アイリス「行くのよ、ドリユウズ！」

ハルカ「グレイシア、Stage On！」

アイリスはドリユウズをハルカはグレイシアを繰り出した。

相性ならドリユウズの方が有利である。

しかし、1つの問題がある。

それは・・・

アイリス「(う、ハルカ。アタシが氷タイプが苦手だと知っていつて出したわね)」

そう、アイリスは氷タイプのポケモンを見ると寒気がするほど苦手である。

ハルカ「グレイシア、れいとうビーム！」  
先に先制を仕掛けてきたのはグレイシアだった。  
グレイシアは、ドリリュウズに向けてれいとうビームを発射する。  
アイリス「ドリリュウズ、避けてドリルライナー！」  
ドリリュウズは、グレイシアのれいとうビームを避けてドリルライナーを繰り出して見事に命中する。  
ハルカ「グレイシア、シャドーボール！」  
グレイシアは、シャドーボールを繰り出す。  
アイリス「ドリリュウズ、あなをほるで避けて！」  
ドリリュウズはあなをほるでシャドーボールを避ける。  
ハルカ「グレイシア、気づけて」  
グレイシアに気づけるよう指示を出すハルカ。  
するとドリリュウズがグレイシアの後ろから現れる。  
アイリス「ドリリュウズ、そこからメタルグロー！」  
ドリリュウズは、メタルクローを繰り出してグレイシアに攻撃を仕掛ける。  
ハルカ「グレイシア、あなをほるで避けるのよ」  
グレイシアはドリリュウズ同様にあなをほるで避ける。  
しかし、アイリスは比較的に落ち着いていた。  
そして、ドリリュウズに指示を出す。  
アイリス「ドリリュウズ、グレイシアが掘った穴に向けてきあいだま  
！」  
ドリリュウズは、グレイシアが掘った穴に向けてきあいだまを撃ちこ  
んだ。  
そして、撃ちこんでしばらく経つとグレイシアが高く打ち上げられ  
る。  
グレイシアはきあいだまが当たりその反動で高く打ち上げられたの  
だ。  
そして、グレイシアはそのまま地面に叩きつけられる。  
ハルカ「グレイシア！」

煙が晴れるとグレイシアはグツタリしていた。

アヤノ「グレイシア、戦闘不能！ドリュウズの勝ち！よって勝者ア  
イリス選手！」

アイリス「やった！」

アイリスは、ガッツポーズをする。

タケナカ「アイリス選手、見事ハルカ選手を退けて決勝進出です」

そう言う会場は歓声が上がった。

カスミ「アイリス、すごいわ！」

ヒカリ「ハルカのグレイシアを倒して決勝戦へ行くなんて」

ヤストシ「実力をかなりあげたなアイリス」

カスミ、ヒカリ、ヤストシは、アイリスのバトルの姿を見てそう思  
った。

ラングレー「ふん、このぐらいの実力がなきゃあ倒しがいが無いん  
だから」

ラングレーはそうつぶやきながらそう言う。

ヤストシ「さあ、次は俺とサトシの番だな」

サトシ「負けねえぜヤストシ」

ヤストシ「それは、こつちもだよサトシ」

サトシとヤストシは、そう言うてバトルフィールドへ向かう。

アヤノ「それでは、ただいまよりサトシ選手対ヤストシ選手による  
エプチカップ準決勝第2試合を行います。使用ポケモンは、1体。

交代はなし、一騎打ち勝負です！」

審判役のアヤノがサトシとヤストシにそう言う。

タケナカ「さあ、第2試合はシンオウ、イツシュのポケモンリーグ  
でベスト4という成績を収め、現在ホクシンリーグに挑戦中のサト  
シ選手とシンオウリーグチャンピオンリーグでチャンピオン・シロ  
ナのエース格であるガブリアスを倒すもあと一歩のところまで敗れ去  
ったヤストシ選手の対決です」

タケナカがそう紹介する。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

アヤノがバトル開始の宣言を言う。

サトシ「ッタージャ、君に決めた！」

ヤストシ「エルフィン、頼んだよ！」

サトシはツタージャ、ヤストシはエルフィンを繰り出した。

果たして決勝へ進むのはどちらなのか？

第91話 ヒロイン対決?! ハルカVSアイリス(後書き)

このバトルの結果は次回、お伝えします。



## 第92話 決勝前夜

準決勝第2試合が終えて、サトシ達はポケモンセンターで休んでいた。

カスミ「サトシ、決勝進出おめでとう」

ヤストシ「ホント、まさか土壇場で形勢逆転して俺を負かすなんて」  
サトシ「そんなことないぜヤストシ」

サトシがヤストシにそう言う。

そう準決勝第2試合はサトシが土壇場でヤストシを退けて決勝戦に進出したのである。

ヒカリ「決勝戦はアイリスとサトシか」

ナナコ「なんかめっちゃ複雑やなあ」

カスミ「確かにね。でもまあ、今日は2人の決勝進出祝いなんだし。その悩みは抜きにしようね!」

ハルカ「そうだね」

カスミとハルカ、ヒカリ、そしていつの間にか会話に加わっていたナナコがそう言う。

ヤストシ「しかし、サトシとアイリスの二人の直接対決なんてドンバトル以来だな」

ヤストシがそう言う。

ちなみに二人の直接対決したドンバトル決勝戦の時は、アイリスが見事な完勝でサトシを退けて勝利をつかみ優勝したのである。

デント「さあ、みんな。明日の2人の健闘を祈ってささやかなお食事会のもりでキッチンを借りて作ったんだ」

サトシ「さすがデントだぜ!」

アイリス「デントありがとう!」

デント「どういたしまして!」

タケシ「俺も手伝って作ったんだ」

タケシがみんなにそう言う。

デント・タケシ以外のキャラ「いただきまーす」

そう言つてサトシたちは豪勢に食い始めた。

タケシ「そんなに慌てるんじゃないぞ」

デント「料理はまだまだあるから」

二人は、サトシたちに落ち着いて食べるように言つ。

そんな矢先に一難到来。

カベルネ「デントつたらここにいたの」

サトシ達が食事を取っている時に現れたのはカベルネだった。

デント「カベルネ…よかつたら君も一緒にどうだい？」

デントがカベルネにそう言つ。

すると横にいたアイリスとヒカリはカベルネを見て、

アイリス「デントつてば何考えてるのよ！」

ヒカリ「そうよそうよ」

キバゴ「キバキバア」

嫌な目でそう言つ。

しかし、カベルネは・・・

カベルネ「ふんっ、私はもうゴージャスなディナーを頂きました。

それより私からの挑戦を受けてくれる？」

デント「え？」

「もう頂いた」の言葉にアイリスとヒカリは安心のため息をつきデ

ントは「なんだろう」と頭に？マークがつく。

カベルネ「明日の決勝戦でポケモンソムリエ対決をするのよ！」

デント「ソムリエ対決・・・？」

カベルネ「そう！ポケモンソムリエ協会公認、Aクラスの実力を見

せてもらおうじゃないの！」

カベルネがデントに明日の決勝戦でソムリエ対決しようと提案して

きた。

が、しかしカベルネの提案にデントは困った顔をする。

デント「うーん、明日の2人のフレッシュなバトルはじっくりと落

ち着いたテイストで味わいたいんだけど・・・」

カベルネ「とか言つて本当はBクラスに昇格した私との対決するの  
が怖いんじゃない!?」

カベルネがデントにそう挑発的な発言をする。

デント「困つたなあ・・・僕はそんな挑発には乗らない・・・」  
そこまで言つて言葉を詰まらせたデント。

それを見ていたヤストシは「どうしたんだろう」と思つてデントの  
視線を追えば、そこにはいつからいたのか?カメラを持ったルーク  
少年たちがいた。

デント「カメラを向けられたら映画ソムリエとしてやらないわけに  
はいかないね・・・」

デントがそうつぶやいた。

それを聞いたヤストシは思わず呆れ顔になる。

カベルネ「ね」

デント「いいだろう!その勝負受けてたとう!」

すくつ!と立つて言い放つたデントは最早別人。

さすがのカベルネもたじたじだった。

ヤストシ「しょうがない。その対決の審査、俺が引き受けるよ」

ヤストシは呆れながらもそう言った。

ヤストシ「(そういえば、こんなこと前にもあつたような・・・)」

ヤストシが心の中でそうつぶやく。

サトシ「お、よくわかんないけど盛り上がってきたな!」

ピカチュウ「ピカ、ピカ!」

アイリス「あたしも燃えてきた!明日は絶対優勝よ!」

キバゴ「キバキバー!」

タケシ「二人ともがんばれよ」

ケンジ「応援しているよ」

タクヤ「ファイト」

タケシとケンジ、タクヤはそういった。

そして、女子達は。

カスミ「サトシ、がんばりなよ」

ヒカリ「応援しているわよ」

コトネ「頑張って優勝をもぎ取るのよ」

ベル「そうそう」

サトシに好意を持つカスミ、ヒカリ、コトネ、ベルはサトシを応援する。

はたして明日の決勝はどんな戦いになるのか？

そんなサトシたちがいる場所から少し離れた場所にエブチと助手の  
アヤノが何かを話していた。

エブチ「それは、本当かアヤノ」

アヤノ「はい、間違いありません。私はこの目ではつきり見ました」

エブチ「しかし、まさかそのようなことを仕掛けてくるなんて」

アヤノ「どうしますエブチ博士？」

エブチ「それが本当なら大変なことになる。それを防ぐ方法はたった一つ！」

アヤノ「防ぐ方法があるんですか？」

エブチ「ああ」

エブチはそう言ってアヤノの耳元で何かを語った。

アヤノ「それはいい作戦ですけど、上手くいくんですか？」

エブチ「当たり前だ。でなければ取り返しをつかないことになるからな」

アヤノ「そうですね」

アヤノがそうつぶやいた。

エブチ「いいか、このことは隊員以外絶対に秘密だからな。これが洩れればやつらは何を仕掛けてくるかわからんからな」

アヤノ「わかりましたエブチ博士。隊員たちには、私から言っておきます」

エブチ「頼んだぞ」

そう言ってアヤノはその場をあとにした。

一体明日の決勝戦で何が起こるのか？

続く。

第92話 決勝前夜（後書き）

今回はエプチカップ決勝戦。そして、とんでもない事態が待っていた。

### 第93話 エブチカップ決勝戦 サトシVSアイリス

エブチカップも今日で最終日。

今日もスタジアムは満員御礼だった。

タケナカ「バトルトーナメント！エブチカップもいよいよ本日で最終日です！今日の決勝で勝った人には、超豪華進化の石のセットとワールドリーグの出場が得られます。そして、激戦を勝ち抜いた2人がついに優勝をかけて戦います！」

フィールドに立つてる2人を見ればなんかこっちまでもうずうずうしてきてしまう雰囲気である。

そんな中、スタンドで応援するタケシとケンジだが、タクヤだけ違った。

タクヤ「……………」

タケシ「どうした、タクヤ？」

タクヤ「いや、なんでもない」

タケシの問いにそう答えたタクヤ。

しかし、心の中では……

タクヤ「（ここに入っている観客達。昨日と何かが違う気がするんだが…………）」

タクヤは、周りの観客たちにかなりの違和感を感じていた。

しかし、考えすぎたろうとすぐに頭からはずした。

アヤノ「これより、サトシ選手とアイリス選手によるエブチカップ決勝戦を行います。使用ポケモンは1体、交代は一斉認めません」

アヤノがサトシとアイリスにそう言う。

アヤノ「それでは、バトル開始！」

アヤノがそう宣言してエブチカップ決勝戦が始まった。

サトシ「行くぞピカチュウ！」

アイリス「行くよ！ドリュウズ！」

サトシは、ピカチュウをアイリスはドリュウズを繰り出した。

ヒカリ「トシは、ピカチュウをアイリスはドリュウズか」  
ハルカ「相性から言えばドリュウズが完全に有利かも」  
シユウ「ドリュウズは、地面タイプを持っているからサトシのピカチュウの技、10万ボルト、ボルテッカー、エレキボールは完全に封じられたな」  
カスミ「残りのピカチュウが覚えている技、電光石火とアイアンテールでどう耐用するかが焦点ね」  
ヒカリとハルカ、シユウ、カスミは、そう分析する。  
ヤストシ「（これはある意味、ドンバトルの雪辱戦だな）」  
ヤストシは、心の中でそうつぶやいた。  
ちなみにドンバトル決勝戦の時もサトシとアイリスは、ピカチュウとドリュウズを繰り出してバトルをした。なお、バトルの結果は、アイリスのドリュウズが勝利した。  
アイリス「ドリュウズ、ドリルライナー！」  
先に先制を仕掛けてきたのは、ドリュウズだった。  
ドリュウズは、ピカチュウに向けてドリルライナーを繰り出す。  
サトシ「ピカチュウ、電光石火でドリルライナーを避ける！」  
ピカチュウは電光石火を繰り出してドリルライナーを避けた。  
アイリス「そこからメタルクロー！」  
ドリュウズはピカチュウの後ろからメタルクローを繰り出し見事命中した。  
サトシ「アイアンテール！」  
しかし、ピカチュウも負けじとアイアンテールを繰り出す。  
アイリス「ドリュウズ、もう一度メタルクロー！」  
ドリュウズはメタルクローを繰り出す。  
ピカチュウはドリュウズのメタルクローをかるうじて避けてアイアンテールをぶつける。  
そして、ドリュウズはそのまま地面に叩きつけられる。  
アイリス「きあいだまよ！」  
サトシ「エレキボールで迎え撃て！」



ドリュウズはきあいだまをピカチュウはエレキボールを繰り出した。そして二つの技がぶつかり合い相殺し、バチバチという音と煙がフィールドに残った。

ヒカリ「アイリス、すごいわ」

コトネ「でも、サトシ君もやるわね」

カスミ「エレキボールで相殺させるなんて」

ヒカリとコトネ、カスミは、二人のバトルを見ながらそう思う。

一方でテイスティング対決はというと・・・

カベルネ「ジューシな二つの味の塊がドンツとぶつかりあった渋いテイスト」

デント「あゝ、なんて贅沢な豊かさだ。フルバトルを思わせる濃密さと美しい酸味がはじける凝縮され、さらなぬ高みを望ましている」二人の対決を見てカベルネは渋いバトルとテイストするがデントはすばらしいバトルだとテイストする。

カベルネ「（あ、さすがAクラスソムリエ。悔しいけど言葉の選び方が違う・・・）」

カベルネは心の中でデントのテイストをそう痛感させられた。

デント「カベルネ」

カンベネ「っ！」

デント「ソムリエ対決はここまでにして二人のバトルに集中しないかい？」

カベルネ「え、まあ、デントがそう言うなら・・・」

デント「ありがとうカベルネ」

カベルネがそう言ってデントは、ささやかにお礼を言う。

カベルネ「（なんだろう、この気持ちは？）」

デントの優しい言葉に心が突然痛みカベルネはなんだろうと首をかしげる。

その頃、フィールドではお互い一步も譲らない展開となっていた。しかし、ドリュウズもピカチュウも体力がない様子である。

サトシ「ピカチュウ、まだいけるか!？」

ピカチュウ「ピ、カチュー！」

サトシ「よし、ピカチュウ、アイアンテール！」

ピカチュウは、アイアンテールを繰り返す。

アイリス「ドリリュウズ！穴をほる！」

ドリリュウズ「ドーリュ！」

ピカチュウのアイアンテールをドリリュウズはあなをほるで交わした。

アイリス「気合玉！」

ピカチュウ「ピカー！」

サトシ「ピカチュウ！！！」

気合玉が当たって弾き飛ばされたピカチュウ。

舞った砂ぼこりが晴れて勝敗が決まった

アヤノ「ピカチュウ戦闘不能、ドリリュウズの勝ち！よって勝者アイリス選手！」

そう宣言すると会場が騒いだ。

アイリス「ドリリュウズー！やったねドリリュウズー！」

アイリスは、ドリリュウズに抱きつきそう言う。

その後、閉会式ならびに表彰式が行われた。

エブチ「アイリス君、優勝おめでとう。これが進化の石セットだ。

そして、ワールドリーグ出場権認定書だ」

そう言うてエブチは石のセット並びにワールドリーグ出場権認定書をアイリスに手渡す。

ワタル「君は、ドラゴンマスターを目指しているんだってね。懸命に頑張ってるね。私も応援しているよ」

アイリス「ありがとうございますエブチ博士、ワタルさん」

アイリスは、エブチとワタルにそう言う。

エブチ「これにてエブチカップを閉会する」

エブチがそう言った時だった。

????「閉幕…ここからが楽しみだったのに…」

シロナ「えっ！！？」

突然、機械で作られた捕獲リングがエブチ、シロナ、ワタルのそこ

ろに飛んできた。エブチ、シロナ、ワタルはその捕獲リングに拘束された。  
はたして、一体誰の仕業なのか？

第93話 エブチカップ決勝戦 サトシVSアイリス（後書き）

エブチカップ閉幕直後突如、エブチ、シロナ、ワタルを拘束された。  
はたして、サトシ達の運命は？

**第94話 ロケット団！エプチカップ強襲！（前書き）**

今回は、かなり長いお話です。

そして、この話にオリジナルキャラ三人登場します。

少し残虐的なシーンがありますのでご注意ください。

## 第94話 ロケット団！エブチカップ強襲！

エブチカップ決勝戦、サトシ対アイリスの対決は激戦の末、アイリスが勝利してエブチカップを制覇した。そして、表彰式を終えて閉会宣言をした時に突如謎の声が聞こえそれと同時に捕獲リングが飛んできてエブチ、シロナ、ワタルが捕まってしまった。

ワタル「一体、誰の仕業だ！」

ワタルがそう叫んだ時

「？？？あーあー、ポケモンGメンでジユウトのチャンピオン・ワタルとシンオウのチャンピオン・シロナ、それに憎きエブチがこうも簡単に捕まるなんて・・・、まあ、突然の奇襲じゃ対応できないか」

選手の入り口からRマークをつけた服を着る女性がサトシ達の前に現れた。

カベルネ・ラングレー以外「ロケット団！？」

カベルネ・ラングレー「アイツら、誰？」

デント「ロケット団といって、人のポケモンを奪ったり、ポケモン達を悪いことに使う悪党だよ。」

ロケット団とは初対面のラングレーとカベルネはデントの説明を聞く。しかし、目の前にいる女性は、ムサシ、コジロウ、ヤマト、コサンジ、山線トリオのような人ではなかった。

「？？？私は、ベルモット。先日ロケット団上層幹部に就任した女性ロケット団よ」

そう自己紹介するベルモット。

そして、観客席には完全武装をした下っ端達がいた。観客席にはタケシ、ケンジ、タクヤ、マリナの姿があった。

ベルモット「ここからが・・・本当のショーの始まりよ・・・」

こうして、エブチカップ会場はロケット団によって制圧されたのである。サトシたちはロケット団によって拘束された。

このエブチカップの会場がロケット団によって制圧された映像は、ホクシンをはじめカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュにも流れた。

フタバタウンのヒカリの家・・・

アヤコ「な・・・なんてことなの・・・!?・・・ヒ・・・ヒカリ・・・」

ヒカリの母親アヤコはテレビに映っているロケット団によって制圧されたエブチカップの会場を見つめながら、ヒカリの無事を祈っていた。

その一方：トウカシティにあるハルカの実家「トウカジム・・・ミツコ」あなた、ハルカとマサトが・・・」

テレビを見ていたマサトとハルカの家族であるトウカジムのジムリーダー・センリとテレビを見て慌てるセンリの妻のミツコ。センリはどうしようもできず黙ってテレビを見るしかなかった。

サトシの故郷、マサラタウンでは・・・

オーキド「大変じゃ、ハナコさん！」

サトシの家に慌ててやってきたオーキド博士。

ハナコ「どうしたんですかオーキド博士。そんなに慌てて？」

オーキド「大変じゃ、エブチカップの会場がロケット団が制圧されたぞ」

ハナコ「え！」

それを聞いてハナコは、慌ててテレビをつける。

ハナコ「さ、サトシ・・・」

テレビを見て心配するハナコ。

オーキド博士もセンリ同様ただ見守るしかなかった。

そしてホクシンのとある町の電気街・・・

ミライ「(制圧したか・・・)」  
テレビを見てそう心の中でつぶやくミライ。

その口調はまるで知っていたかなのような感じであった。

ミライ「(できる限り犠牲者を最小限にするためこんな作戦を立てたけど、担当者が担当者ね)」

ミライは、心の中でそうつぶやいた。

ミライ「(そういえば、何か忘れているの様な気もするけど・・・、気のせいかきつと)」

ミライは、心の中でそう言って電気街を後にする。

しかし、この計画がある人物のせいで全て狂うとはこの時、ミライは知る由もなかった。

その頃、エブチカップ会場・・・。会場の中央に、捕獲リングで拘束されているエブチ、アヤノ、シロナ、ワタル、タケナカ。そしてロケット団幹部ベルモットによって拘束されたサトシたち。ちなみにサトシたちのポケモンたちは全て拘束あるいは没収されていた。ベルモット「まずは、第1作戦完了ね」

???「そうだな、ベルモット。Gメンのワタル、チャンピオンのシロナ、憎きエブチを拘束に成功してスタジオムの制圧に成功いたしました」

???「まったく、俺達のほうが階級が上なのになんで、指揮をベルモットにやらせるんだよ。わけわからないぜ」

???「しょうがないよあのお方様の指名だ。文句を言つな」

男達がそう言うのと下っ端がやって来た。

下っ端A「ご苦労様です、ネルソン様、マキタ様」

下っ端が言うネルソン、マキタとは、ベルモットと同じロケット団の上層幹部に所属していて、ネルソンは、頭脳派の冷静沈着の性格でマキタは、熱血的で超人の体を持つ男である。

ちなみに同じ上層幹部でも立場が違う。聞いてのとおり、ネルソンとマキタはベルモットより地位は低いほうである。軍の階級で言え



ばネルソンとマキタは、大佐でベルモットは少尉ぐらいだろう。

ちなみにお馴染みのムサシ、コジロウ、ヤマト、コサンジ、山線トリオなら曹長、あるいは上等兵ぐらいだろう。そんなことない

(怒) by・ムサシ、コジロウ、ヤマト、コサンジ、山線トリオ  
エブチ「お前たち、こんなことをするということは何か目的があるんだな」

エブチが強い口調でベルモットにそうたずねる。

ベルモット「そうよ。目的はただひとつ、エブチ博士。この間、我らロケット団から奪った特別なルビーを取り返すためだ！」

ベルモットがエブチにそう答えた。

エブチ「そんなことのために関係ない人まで巻き込んだ作戦を立てるとは・・・」

ネルソン「特別なルビーは警備が厳重すぎて手が出せないが関係ない人まで巻き込めば大人しく石を渡してくれるかと思っただ」

ネルソンがエブチにさういう。

マキタ「それとこの計画を立てたのは我々ではない」

ネルソン「さるお方の人に作ってもらった作戦さ」

ネルソンがエブチにさう言う。

エブチ「(さるお方か？一体誰だ？まさかサカキがこんな大胆な作戦を立てるわけないし、それに筆頭もこんな作戦は作らない。とするとこの作戦を立てたのはあの子か・・・)」  
エブチが消去法しながらある人物を思い浮かべる。

ネルソン「さあ、特別なルビーを持ってきてもらおうか」

マキタ「でなければ、お客とここにいる選手達の頭に風穴が開くぞ」

マキタとネルソンがエブチにさう脅す。

エブチは、しばらく考えて答えを出した。

エブチ「わかった。石を渡そう」

さうエブチが言った時だった。

ベルモット「待ちな」

さう言ったのはベルモットだった。

ベルモット「今まで、エブチに散々我々に邪魔されたんだ。仕返しする絶好のチャンスじゃないか」

そう言っただけベルモットは、エブチの腹を蹴った。

そしてベルモットは、殴ったり蹴ったりした。

ベルモット「楽しいわね」

ベルモットがそう言いながらエブチを殴ったり蹴り続けた。

マキタ「これからどうするんだネルソン？」

ベルモットがエブチを痛めつけられているのを見ていたマキタはネルソンに声をかける。

ネルソン「とりあえず本部に知らせておきましょう。作戦第一段階は終了。第二段階に入ると・・・」

ネルソンはそこにいたロケット団員に本部への報告をするようにと命令をする。

と、その時・・・  
バーン。

突然スタジオに銃声が響いた。

下っ端A「ギャー！」

撃たれたのはロケット団の下っ端だった。

マキタ「どうしたんだ！」

マキタがロケット団員に聞いた。

下っ端B「あの警備員が撃って来ました」

下っ端がマキタにそういった。

マキタ「抵抗しやがって、撃ち殺せ！」

そう言っただけ下っ端達は、警備員に向かって発砲した。

しかし、警備員の体に当たったのにもかかわらず立っていた。

下っ端C「何故だ！当たったはずなのに！」

警備員の不可解なことに戸惑う下っ端達。

エブチ「我慢できなかったか」

そう言っただけエブチは指を鳴らした。

するとタケシ、ケンジ、タクヤ、マリナ以外の観客が立ち上がり下

っ端達の頭に銃を突きつけた。しかもただの銃じゃない。大型のライフルだった。

下っ端C「ら、ライフルだと!」

マキタ「こいつらまさか・・・」

エブチ「そのまさかさ」

エブチがそう言うつと観客人が服を脱ぎ捨てるとその正体が明らかとなった。

ロケット団「えええ、エブチ隊!!!!!!」

観客人に化けていたのはエブチ隊であった。それを見てベルモットもマキタ、ネルソン、そして下っ端は驚いた。もちろんサトシたちも声には出さなかったが驚きの表情をする。

タクヤ「(なるほど、そういうことか)」

タクヤは、観客がおかしいと感じたがその正体がエブチ隊だとわかって心の中で納得した。

マキタ「な、何故エブチ隊が観客に化けていたんだ!」

マキタの戸惑いにエブチが答えた。

エブチ「既にお前たちの作戦はワシのの耳に入っていたよ。だから捕らえられたふりをして観客に混じったエブチ隊がお前たちを射殺する計画だったがワシを殴ったり蹴ったりしたから隊員が我慢できず撃つたんだろがね。まあ、ある意味形勢逆転さ」

エブチがロケット団にそう言った。

ベルモット「作戦を知ってですって!」

マキタ「誰がこんな情報を漏らしたんだ!」

ネルソン「この情報は作戦を立てたあなたの方と我々3人しか知らないはずだ。データも資料も完璧に処理したのに何故だ!」

エブチの発言に完全に疑問に思うベルモット、マキタ、ネルソン。

何故、彼はロケット団の作戦を知ったか?

それは、昨晚のアヤノとのやり取りだった。

回想シーン

エブチ「え！ロケット団が明日の決勝戦に襲撃するだ！？」

エブチはアヤノから聞かされて驚いてしまう。

アヤノ「はい。私がこの目でしっかり見ました」

アヤノがエブチにそう言った。

この目でしっかり見た　この小説を読んでいる人ならわかるだろうがアヤノはセレビイの化身である。普段は人間の姿をしているが時々セレビイの姿となり時渡りしたりエブチを助けたりとしている。ちなみに話はこうだ。アヤノは準決勝終了後、疲れを癒いそうと時渡りをした。その時渡りしたのが翌日の決勝戦だった。決勝戦が終わった後、ロケット団が襲撃して会場にいた人や選手を人質にとつて特別なルビーを要求した。エブチは人の命が最優先だと思いい石を渡すことにした。しかし、何かの手違いで銃撃戦に発展して沢山の死傷者が出てしまった。

それを見たアヤノは慌てて元の時代に戻ったのだ。

どうしますエブチ博士？」

エブチ「それが本当なら大変なことになる。それを防ぐ方法はたった一つ！」

アヤノ「防ぐ方法があるんですか？」

エブチ「ああ。それは、観客席にエブチ隊を一般人に化けてやつらを一網打尽にすることだ」

エブチがアヤノにそう言った。

アヤノ「それはいい作戦ですけど、上手くいくんですか？」

エブチ「当たり前だ。でなければ取り返しのつかないことになるからな」

アヤノ「そうですね」

アヤノがそうつぶやいた。

エブチ「いいか、このことは隊員以外絶対に秘密だからな。これが洩もれればやつらは何を仕掛けてくるかわからんからな」

アヤノ「わかりましたエブチ博士。隊員たちには、私から言ってお

きます」  
エブチ「頼んだぞ」  
そう言つてアヤノはその場をあとにした。こうして、ロケット団の作戦は意外なことでバテてしまったのである。

回想シーン終了

エブチ「さあ、おとなしく降参しな」

エブチがベルモット達に降参するよつに言つ。

そんな時だった。

下っ端D「貴様、何を！」

サトシ「ゴウカザル、かえんぐるまで捕獲リングを破壊するんだ！」

サトシは、盗られたボールのうちゴウカザルの入ったボールを取り返してかえんぐるまを指示し、エブチ、ワタル、シロナをそれぞれ拘束していた捕獲リングを破壊する。そして、サトシはカスミ達の前に立つ。

カスミ・ヒカリ・アイリス・ベル・コトネ「……サトシ（君）  
！……」

カスミ、ヒカリ、アイリス、ベル、コトネが大きい声で言つ。

エブチ「ありがとうサトシ君」

ワタル「おかげで助かったよ」

エブチとワタルがサトシにお礼を言つ。そして、一人のエブチ隊隊員がサトシ達のボールをロケット団の下っ端から取り返し、さらにカスミ達の捕獲リングを破壊した。

その一方でベルモット、マキタ、ネルソンは突然出てきたサトシの行動にビックリして、サトシの方に顔を振り向く。

ネルソン「（サ……サトシ……？）」

だが、ネルソンはサトシの名前を見て疑問を抱いた。ネルソンはポケットから写真を取り出した。その写真にはサトシの顔写真が写っ

ていた。ネルソンはその写真に写っているサトシの顔写真とサトシの顔を見比べたら、完璧に一致した。

ネルソン「(・・・じゃあ・・・あ・・・あの方は・・・!?)」その写真に写っているサトシの顔が、目の前にいるサトシと同じだと知ったネルソンは啞然とした表情を隠せないでいた。

マキタ「誰かと思ったら我らロケット団によく刃向かうヒーローボーイじゃないか！」

マキタが指をパキパキ鳴らしながらサトシに近づいた。しかもマキタはサトシのことをヒーローボーイと皮肉なことを言う。

マキタ「ロケット団特務工作部所属のこのマキタがヒーローボーイをボコボコにしてあげるぜ」

サトシ「特務工作部だって!?!」

ロケット団特務工作部所属の幹部・・・このマキタの言葉を聞いたサトシは驚きを隠せなかつた。特務工作部・・・ロケット団の中でも2番目かなりやばい部隊で前にサトシとカスミ、タケシが同じ特務工作部所属のタツミと対決してかなり大苦戦したという苦い思い出がある。ちなみにこの上にはサトシたちが旅の途中で遭遇したロケット団強襲部隊が控えている。特務工作部は言わば強襲部隊の2軍的存在の武装集団として機能している。

下っ端B「待つてくださいマキタ様!今、攻撃したらエブチ隊の銃撃を受けます!エブチ隊のメンバーの中にはスコープ無しで狙った相手を射撃する人物もいます」

下っ端がマキタにそう言う。

マキタ「構わん!ここで何もしなかつたらロケット団の恥だ!」

マキタは強硬的な発言を言ってボールに手をかけた時だった。

ネルソン「待ちなさいマキタ!」

マキタ「はあ?どうしたんだよネルソン?」

突然、マキタはネルソンに止められる。ネルソンはマキタに近づいて、誰も聞こえないように説明をし始める。

ネルソン「ロケット団本部から、サトシ様に手を出すなと命令され

ています！」

マキタ「はあ！？じゃあこの小僧が・・・！？」

マキタは驚いた表情を隠せなかった。ネルソンは深刻な表情を見せた。

ネルソン「ええ……。サトシ様は・・・ロケット・グループの御曹司でもあります・・・！」

マキタ「マジかよおい！？」

ネルソン「タツミの話によれば、ピカチュウを連れた小僧の名はサトシだと、度々聞かされています」

マキタ「それじゃ・・・タツミが言っていたピカチュウを連れた小僧って・・・！？」

ネルソン「ええ。目の前にいるサトシ様であります。私が持っているサトシ様の顔写真と一致しており、ピカチュウを連れた少年ポケモントレーナーの名がサトシ様……。間違いありません……。目の前にいるお方こそがサカキ様の実の息子……。ロケット・グループの御曹司サトシ様であります……。！」

ネルソンの話しによれば、サトシはロケット団ボス・サカキの実の息子で、あの世界最大の財閥ロケット・グループの御曹司であるとのこと。それを聞いたマキタは驚きを隠せないような表情になっていた。ネルソンはここにサトシがいることが予測できなかったどころか、あのロケット団の上層部でさえも、サトシがここにいること自体が予測できなかったという。

マキタ「どうすんだよおい！？サトシ様に傷一つでも付けてしまつたら俺達の首が吹っ飛ぶぞ！」

ネルソン「ええ……。なんとかサトシ様を外に連れ出さないと……」

：今のサトシ様は彼らを助ける気満々ですね……。！」

マキタ「かと言って……。このまま退いてしまったこの計画を立てたお嬢様と4側近の一人、アテネ様の怒りが爆発するぞ……。！」

ネルソンとマキタは別の意味でピンチに陥っていた。まさかそのサトシがここにいるとは思わなかったのである。近くにいるベルモツ

トは頭上に？マークが出るほど、慌てているベルモットとマキタの状況に理解ができなかった。それはサトシ達も同じである。しかし、ある人物を除いては……

エブチ「（サトシ君がここにいることを知って慌てているなあの人）」

エブチはサトシがサカキの実の息子だと知っているのでこの状況を理解できている。

一方観客席では……

タケシ「一体どうしたんだあいつら……？」

ケンジ「なんか……トラブルが起きたみたいだけど……」

マリナ「そんなことより……早くサトシ達を助け出さないと……」

「  
タケシとケンジとマリナの順に、マキタとネルソンについてこう述べていた。ケンジの言う通り、マキタとネルソンの間にトラブルが起きていた。観客席でエブチ隊にライフルで頭を突きつけられている下っ端達もマキタとネルソンのトラブルが起きたようなやり取りを見て困惑の雰囲気隠せなかった。

タクヤ「とりあえず、このまま様子を見てチャンスをつかがおう」  
タクヤがタケシたちに言う。

そんな時、さらに深刻なトラブルが起きた。

カスミ・ヒカリ・アイリス・ベル・コトネ「……サトシ（君）  
！」「……」

カスミ、ヒカリ、アイリス、ベル、コトネが大きい声を上げる。なんと、下っ端が独断でサトシを突き倒し、頭に自動拳銃オートマチックを突きつけた。

ベルモット「でかしたわよ」

サトシがサカキの実の息子であることをまったく知らないベルモットは、下っ端がやったことを褒めたたえる。しかし、逆にマキタとネルソンはかなり焦っていた。

これ以上事態を深刻にしたらかえってまずくなると思いいネルソンは、



ベルモットの元へやって来た。

ネルソン「ベルモット君」

ベルモット「は．．．はい．．．!?!」

ネルソンは突然、ベルモットをこっちに呼び出した。ネルソンに呼ばれたベルモットはネルソンに近づく。

ネルソン「ロケット団総司令で4側近筆頭様に報告してください．．．ピカチュウを連れてトレーナー・サトシという少年がここにいます．．．」

ベルモット「はあ!?!何故です!」

ネルソン「いいから早く!責任は私が取ります!」

ベネモット「り!?!了解いたしました!?!」

ベルモットは困惑しながらも、ネルソンの命令に従うのであった。

ここはカントー地方ロケット団本部総司令室．．．。そこにはロケット団ナンバー2にして総司令であり4側近筆頭であるアポロがいた。アポロはベルモットからテレビ電話を受けて、ベルモットの報告を受けていた。しかし、アポロの表情は深刻そうな表情になっていた。

アポロ「な．．．!?!それは．．．本当ですか．．．!?!」

ベルモット「はい．．．。ネルソンさんがサトシという少年がここにいると報告してくれと．．．。私にはさっぱり状況が．．．」

アポロ「まあいい。それよりいいですかベルモット君!サトシ様にはけて傷一つを付けてはなりません!」

ベルモット「サトシ様!?!われわれを邪魔するあの少年は何者ですか!?!」

アポロの「サトシ様」という単語を聞いてベルモットはサトシの正体をたずねる。

アポロ「その少年は．．．我らがロケット団ボス・サカキ様の実の息子にしてロケット・グループの御曹司でもあります!」

ベルモット「な．．．なんですって．．．!?!」

アポロの口からサトシがサカキの息子であるという事実を知ったベルモットは驚きを隠せないような表情になった。

ベルモット「これは我がロケット団最高中の最高機密……。幹部となったベルモット君には知る権利があるでしょう……。サトシ様は我がロケット団……。ロケット・グループの御曹司……。もし、この事実が明るみに出たら、サトシ様はスペース団や数多くの悪の組織やテロ組織に命を狙われるでしょう……。サトシ様が捕らえられて、人質にでもなったら大変なことが起こります……。今まで話せなかったのはそのためです！」

アポロはドミノに、サトシについて詳しく話した。この事実はロケット団の最高機密として指定されている。幹部になったばかりのベルモットに、この事実を知る権利がある。あのアポロでも、サトシがエブチカップ会場にいること自体が知らなかったのである。

アポロ「こうなつては仕方ありません。ベルモット君、すぐさま会場からサトシ様とともに部隊を撤収させてください」

ベルモット「石を諦めると言っんですか！そんなことをしたらアテナ様が……」

アポロ「アテナには、私から言っておく。君は、下っ端がサトシ様に銃を突きつけているんですよ。幸いサカキ様は、この件を知りません。もし、この件がサカキ様に知れてしまえば君は首が飛ぶだけじゃあ済まされない話ですよベルモット君。とにかく君は、黙ってサトシ様をロケット団本部へ連れてくるのです。サトシ様には、申し訳ありませんが眠り薬でも催涙ガスでもかまいませんから寝かせて連れてきてください。責任は私が取ります！」

ベルモット「り、了解いたしました！」

アポロはベルモットとの通信を切った。アポロは頭を抱えた。

アポロ「（作戦を立てたお嬢様はサトシ様がエブチカップ会場にいることを知らなかったというのですか……。無理ありません……。サトシ様は旅をしていらっしやる……。どこにいるのか、お嬢様でも突き止めることができませんでしたか……。こんなこと

が起きると想定していればサトシ様のお目付け・監視役をしている  
タクヤに聞くべきでした」

アポロは作戦を立てたお嬢様がサトシがエブチカップにいることを  
知らなかったと思いついていた。

しかし、ある人物は違った。

エブチ「この作戦。サトシ君がこの大会にいてかなり向こ  
うは大混乱しているようだけど。確か、あの子は、サトシ君が大会  
に出ることを知っているはずだ。まさかとは思うが忘れていたんじ  
やないだろうね。まあ、あの子の性格ならきつと忘れてるね」  
エブチは、アポロと違って作戦を立てた人物はサトシが大会に出る  
ことを知っていたがそのことをすっかりベルモット達に伝えること  
を忘れていたと推測する。

その頃、ミライはいつものよう道を歩いていた。そんな時ある大事  
なことを思い出した。

ミライ「そうだ!?何か忘れていたと思ったら、あの人達にサトシ  
がいると言うのをすっかり忘れていたわ・・・!!」

エブチの予想通り計画を立てた人物　ミライは、サトシがエブチ  
カップにいることを今思い出したがもう既に手遅れな状況になつて  
いた。

その頃、スタジアムではお互い硬直状態であつた。

ネルソン「(さてどうする・・・!?サトシ様は下っ端に銃を頭に  
突きつけられているが本人は我らを倒す意気込みだ。万が一、サト  
シ様にカスリ傷一つでも付けたらサカキ様はお怒りなる・・・。我  
々としても、ロケット・グループの御曹司を傷付けるわけにはいか  
ない・・・)」

ネルソンはこの状況をどうやって打開するのか考えていた。

マキタ「(こんなとき…坊ちゃんというヒーローボーイが現れると  
はな…。サトシ様を傷つけたらお嬢様の怒りが落ちかけない。あの

人はかなりの弟思いだ。下手したら殺されかけないぜ)」

マキタははどうやってサトシを外に出すかについて考えていた。しかもマキタはボス・サカキではなく、その令嬢でもあるミライの怒りに怯えていた。これは、内緒だがミライは普段はあんな性格だが怒るとものすごく怖い人なのだ。普段怒らない人が怒ると怒る人より怖いというのがまさにミライはこのてんていのパターンである。

エブチ「(さて、どうするか。あいつらは一刻も早くサトシ君を外へ出したいことで頭がいつぱいだ。となねとやつらが取る方法は1つだけだ。これに全て賭けるか)」

エブチは、ロケット団がサトシを外へ出したいことで頭でいつぱいであると予測してロケット団が次にとる方法を推理しそれに全てを賭けた。

ベルモット「ネルソンさん、アポロ様からの報告です」

ネルソン「そうですか……。それでなんと……」

ベルモット「石を諦め、サトシ様をロケット団本部に連行しろ」と……」

ネルソン「なっ!?!」

ベルモットはネルソンにアポロから受けた報告を伝えると、ネルソンとマキタは驚いた表情をし始めた。そして3人はサトシ達とこの場にいるロケット団員達に聞こえないように話し始める。

ネルソン「ベルモット君、君は幹部になったばかりだ。幹部になったということは……。サトシ様が何者かを知る権利があります……」

ベルモット「その話しはアポロ様から聞いています。アポロ様は……。『サトシ様を本部へ連行し、私が責任を取る』と言っています」

ネルソン「確かに……。この状況を打開する策はそれしかないな」

マキタ「わかった」

ネルソンとマキタはベルモットの話しを聞いてそれしかないと納得する。

マキタ「外の状況は？」

ベルモット「現在、ホクシンの警察隊とSATが控えております」



アヤノは特務工作部についてノゾミとケンタとコウヘイ、そしてハルカ、ヒカリ、アイリス、シユウ達に話す。その話を聞いたメンバーは絶望的な表情へと変えて行った。

ヒカリ「だけどサトシが!？」

ヒカリはロケット団に連行されるサトシを心配している。

アヤノ「チャンスを待つのも……。いくら、隊員達がロケット団の下っ端たちの動きを封じているから行って下手に動かないほうがいいわ。あの人たちなら下っ端を犠牲にしても私達を射殺するつもりだからね」

アヤノがカスミ達にそう言った。連中なら仲間が皆殺しされても銃撃戦をやるつもりだとそう予想するアヤノ。

ロボットA「お前達、わかっているのか!そんなことしたらこいつらの頭に風穴が開くぞ!」

事情をまったく知らないエブチ隊員がそう言う。エブチはそれを見て「知らないから当然か」と心の中でそうつぶやいた。

その時だった。

ドカーーーーーー

スタジアムの外から爆発音が響いた。

マキタ「なんだ、なんだ。スペース団か!それとも新手か!」

マキタは、混乱気味の状態でそう言う。

????「ネルソン、マキタ、ベルモット君、無事でしたか?」

マキタ「ランス!？」

ネルソン「ランスじゃねえか!？」

ベルモット「ランスさん!？」

エブチ「ランスだと!」

ランスと言う名前を聞いてエブチが大きい声で上げる。

シロナ「エブチ博士、知っているんですか?」

エブチ「ええ。彼はランス。ロケット団4側近の一人で最も冷酷と謳うたわれている人ですよ」

エブチがシロナにそう言った。

ランス「これはこれは、お初にお目にかかりますエブチ博士」

エブチ「ロケット団の中で丁寧な口調でしゃべる君に言われても気持ちが悪くなるだけだ。ところで今の爆発はお前達の仕業か？」

ランス「ええ、外にいる警官隊とS A Tを爆撃して殲滅したのです」

エブチ「悪趣味なやり方だな」

エブチがランスにそう言った。

ランス「そうですか？」

ランスは、そう言ってベルモット達の方を見る。

ランス「さて、ネルソン君。報告によれば、我らがロケット・グループの御曹司がここにいると聞きましたが・・・あの御方ですか？」

ネルソン「そうです。アポロ様の命令で、作戦を変更してサトシ様を連行するところです」

マキタ「それはまずいんじゃないですか？ 仮にもあの御方は我らがロケット団ボス・サカキ様の実の息子・・・。傷一つでも付けたらどうなるか・・・」

ランス「わかっています。アポロと私もそれについては責任を取ります」

ネルソンとマキタはランスに任務の状況を説明する。その説明を聞いたランスは納得した表情をする。

ランス「それでは、撤退を開始します！」

ランスは指を鳴らすとランス率いる部隊が煙玉を一斉に投げる。

エブチ「しまった！」

予想外な行動にエブチは、焦りを感じる。煙の状態ではエブチ隊のメンバーは無闇に発砲はできない。ロボットには赤外線を搭載しているが敵味方の区別するところまではできていない。下手に発砲したらカスミ達に当たる恐れがあるのだ。

ネルソン「それでは、我々と一緒に来てもらいますよ。サトシ様・・・」

サトシ「え・・・!？」

サトシはネルソンの言葉に途惑いを隠せなかった。

そして、ネルソンはサトシの腹を殴り気絶させる。

ヒカリ「い・・・今・・・あいつ・・・サトシのことを『サトシ様』  
って・・・」

ヒカリはネルソンの言葉に疑問を抱いた。なぜネルソンはサトシの  
ことを様付けで呼んでいるのかわけがわからなかった。

そして、そんなことをしているうちに煙が晴れる。

しかし、そこにはベルモット、マキタ、ネルソン、ランスはもちろ  
ん、下っ端達やサトシまでいなくなっていた。

カスミ・ヒカリ・アイリス・ベル・コトネ「・・・サトシ（君）  
がない！！！！」

エプチ「連れて逃げたな、あいつら！」

サトシの姿が消えていることに気づいたサトシに好意を持つカスミ、  
ヒカリ、アイリス、ベル、コトネが大きい声でそう言う。エプチは、  
ベルモット達が連れていったと予測する。

エプチ「お前達、外にいるメンバー共にサトシ君を取り返して来い  
！抵抗するロケット団員は射殺してもかまわん。行け！！！！！！  
！！！！！！」

エプチ隊「あ、アイアイサー！！！！！！」

エプチの強気の命令にエプチ隊はロケットだを追い始めた。

カスミ「あたしたちも行くわよ！」

ベル「サトシ君を助けに行くわよ」

コトネ・ヒカリ「おー！！」

カスミ達もサトシを取り返そうとロケット団を追いかける。

それを見ていたタケシたちもカスミ達を追い始めてスタジアムをあ  
とにする。

はたして、サトシを取り返すことができるのか？



第94話 ロケット団！エプチカップ強襲！（後書き）

状況がかなり変な方向へ向かい始めました。

はたして、カスミ達はサトシを取り返すことができるのか？  
そして、サトシの運命はいかに。

## 第95話 サトシ救出大作戦（前書き）

前回到引き続き長いです。

今回も若干残酷的なシーンがありますのでご注意ください。

## 第95話 サトシ救出大作戦

ロケット団がエブチカップ会場を占拠するもエブチ隊が観客に化けていてそのおかげで形勢逆転となった。さらにサトシがこの会場にいることを知ったマキタとネルソンは、慌て始めベルモットに本部へ報告するように言う。そして報告しアポロはサトシを本部へ連行するように通達し、またランスが応援に駆けつけ煙玉を投げてサトシをつれて逃げて行き、エブチ隊とカスミ達はサトシを救出しようと追いかけ始めた。

下っ端A「ランス様、ベルモット様、マキタ様、ネルソン様。向こうに逃走用のトラックを用意しました」

ランス「そうですか。それでは、私達が乗り込んですぐ出発できるようにエンジンをかけるよう言ってください」

ランスは下っ端にそう命令をして下っ端は、トラックへ向かった。外には、警官隊やS A Tがいたがランス率いる部隊がこれを殲滅したためかなり手薄となっていた。

下っ端A「ランス様の命令だ！すぐにエンジンをかける！」

下っ端が運転する下っ端にさういう。

運転手は、エンジンをかけるがなかなかかからなかった。

下っ端A「どうしたんだ、早くかける！」

さうさいそくする下っ端。

下っ端B「それが、エンジンがかからないんだ！」

下っ端A「なんだと！」

それを聞いて下っ端は、驚く。

ガソリンは満タンでガス欠の可能性はない。またバッテリーは上がっていないので動くはず。それが動かないということで下っ端達が焦り始める。

すると・・・

下っ端C「おい、この後輪のタイヤ。二つともパンクしているぞ！」

一人の下っ端がそう言う。  
何故、後輪の二つのタイヤがパンクしているのかわからない下っ端達。

ランス「どうしましたか？」

そこへランス達が到着した。

下っ端C「実は、ランス様。後輪のタイヤが二つともパンクしてしまして動けません！」

ランス「なんですと！」

下っ端からそう聞かれてランスは驚く。

ロボットA「待って！」

ロボットB「サトシ君を返せ！」

そこにエブチ隊がやって来た。

マキタ「ランス様、もう来ましたぜ」

ランス「トラックが動かないんじや仕方ありませんね。その公園を突っ切ってへりにある場所まで走りましょう」

ランスがそう言って下っ端達が公園に向かって走り出した。

ロボットA「やつらが公園の方へ向かったぞ！」

ロボットB「エブチ博士に報告しろ！」

ロケット団が公園の方へ走り出したことを受けて隊員達はエブチに報告する。

エブチ「なんだと！ロケット団が公園の方へ走り出しただと！」

報告を受けてエブチは驚く。

アヤノ「それは、まずいですよエブチ博士。今日は公園にはたくさんの方がたくさんいます！」

アヤノがそう言う。

エブチ「お前達、公園にいる人達を即時避難させる。万一、銃撃戦になった場合、一般人を巻き込む恐れがある。いますぐ避難させる！」

エブチは隊員にそう言い、隊員は急いで公園に向かった。

その頃、公園を走るロケット団は・・・

下っ端A「くそ、まだ追っつけてきているぜ」

下っ端B「こうなったらこの少年を盾に使って・・・」

下っ端がサトシを盾に使おうとするが・・・

ランス「ダメです。そんなこと、私が許しません！」

サトシの正体をしているランスが下っ端にそう言う。万一、サトシを盾にしたらボス・サカキとミライが激怒する恐れがある。

下っ端C「しかし、このまま追撃されたら面倒ですよランス様」

下っ端がそう言うと言つとランスはある決断を出す

ランス「仕方ありません。マキタ、ネルソン、ベルモット、君たちは殿しんがりを担当してください。私達はその少年を連れてヘリに向かいます」

ランスがマキタ、ネルソン、ベルモットにそう言う。

殿しんがりとは、後退する部隊の中で最後尾の箇所を担当する部隊を指す。本隊の後退行動の際に敵に本隊の背後を暴露せざるをえないという戦術的に劣勢な状況において、殿しんがりは敵の追撃を阻止し、本隊の後退を掩護することが目的である。そのため本隊からの戦闘加入を受けないこともできず、限られた戦力で敵の追撃を食い止めなければならぬ最も危険な任務である。

マキタ「承知しました」

ネルソン「必ず、ここでやつらを食い止めて見せます」

ベルモット「私も懸命に抑えます」

マキタ、ネルソン、ベルモットはランスにそう言った。

そして、ランス率いる部隊はサトシを引き連れてヘリへ向かった。

マキタ「撃ち方よーい！」

マキタは、団員達に銃を構えるよう指示する。

ネルソン「放て！」

ネルソンがそう言うと言つと団員達は自動拳銃をエブチ隊に向けて放った！

ロボットC「撃つて来たぞ！」

ロボットA「こっちも撃ち返せ！」

エブチ隊も負けじとライフルをロケット団に向けて放った。

公園にはたくさんの人たちがいたがエブチの命令で隊員達は一般人を公園から退避させたが銃撃戦が思っていた以上早く始まり公園にいる人達はパニックになりかけていた。

ロボットE「皆さん、落ち着いて公園から避難してください！」

隊員達は落ち着くよういいながら避難させる。

ロボットD「斬りこめ！」

そう言つとエブチ隊のメンバーが刀と槍を持ち、ロケット団員に斬りかかる。

エブチ隊と違いロケット団員は斬りこみ戦に慣れておらず次々と討ち取られていく。

マキタ「このままでは、まずい」

危機感を感じたマキタは、モンスターボールからギギギアルを繰り出した。

マキタ「ギギギアル、味方に当たっても構わないほうでん！」

マキタはギギギアルにほうでんを指示した。ほうでんは無差別攻撃に等しく、敵だけでなく味方にも当たる技、それを承知で放ち、エブチ隊と戦っていたロケット団員に命中してダウンする。

ネルソン「おい、マキタ！なんてことしてくれたんだよ。敵を減らしても味方まで減らしたら意味ないだろう！」

ネルソンがマキタにそう非難する。

マキタ「仕方がないだろう。多少の犠牲はやもえなしさ」

マキタはネルソンにそう言い返す。

するとそこへサトシを追いかけて来たカスミ達が追いついた。

ヒカリ「いたわ！」

カスミ「サトシを返しなさい！」

カスミがベルモット達にそう言う。

ベルモット「くそ、あいつらが追いついたわ」

ネルソン「こうなったら、あいつらから痛めつけてやる！いけ、サザンドラ！」

ベルモット「エルレイド、あなたも行くのよ！」

ネルソンとベルモットは、サザンドラ、エルレイドを繰り出す。

ネルソン「サザンドラ、トライアタック！」

サザンドラは、カスミ達に向けてトライアタックを仕掛けてくる。

カスミ「行くのよ、ギャラドス！火炎放射」

タケシ「ウソツキー、アームハンマー！」

デント「行くぞ！マイビンテージ！ヤナップ！タネマシンガン！」

ヒカリ「ポツチャマ、うずしお！」

サザンドラのトライアタックを出した瞬間、カスミ、タケシ、デント、ヒカリがボールからポケモンを繰り出し攻撃を指示する。4匹のポケモンが放った攻撃は見事トライアタックを打ち消した。

マキタ「えい、ギギギアル、でんじほうだ！」

ギギギアルは、でんじほうを繰り出した。

ハルカ「バシャーモ、ブレイズキック！」

アイリス「キバゴ、りゅうのいかり！」

シュウ「フライゴン、ドラゴンクロー！」

ヤストシ「ミニロップ、れいとうビーム！」

ギギギアルのでんじほうを出した瞬間、ハルカ、アイリス、シュウ、ヤストシがボールからポケモンを繰り出し攻撃を指示する。4匹のポケモンが放った攻撃は見事でんじほうを打ち消した。

ベルモット「私達の邪魔しないで欲しいわ！エルレイド、サイコキネシス！」

ケンタ「リーフィア、はっぱカッター！」

マリナ「ムウちゃん、サイコウエーブ！」

シゲル「ウインディ、かえんほうしゃ！」

シンジ「ドダイトス、ハートプラント！」

ベルモットのエルレイドもマキタ、ネルソン同様、ケンタ、マリナ、シゲル、シンジの4人のポケモン達が攻撃を繰り出して打ち消され

た。

その後ろに、マサト、ノゾミ、スズナ、ミカン、エリカがやって来た。

マキタ「おいおい、まずいぞ。次から次へと援軍がやって来たぞ！」  
ネルソン「このままだと、チャンピオンがやっくるのも時間の問題だな」

マキタとネルソンは、何とか時間稼ぎをすることがも援軍がやってこられると持ちこたえられないだろうとそうつぶやいた。

カスミ「今だわ！」

そんな一瞬の間隙についてカスミが走り出す。と、そのとき、そこで見ていたベルモットが行かせるかというばかりに黒い警棒のような固そうなやつを取り出して勢いよくカスミの顔を殴り飛ばした。

タケシ・デント・ヒカリ「カスミツ!!!?」

この光景を見たタケシ、デント、ヒカリは驚愕の表情を隠せなかった。もちろん他のメンバーもそうである。さらベルモットにはカスミの顔を踏みつけた。

ベルモット「あなた、私がこのまま行かせると思ったの？」

ベルモットがカスミにそう言った。カスミの顔を見たら血だらけになっていた。ベルモットに武器で殴りつけられて鼻血が大量に出ているからであった。

ベルモット「あんたみたいな小娘を見てると・・・殺したくて殺したくてしょうがないのよ！」

さらにベルモットはその武器を使ってカスミの体を何度も叩いて痛めつけていた。

ベルモット「まあいいわ。ネルソンさん、マキタさん、この子、殺してもいいですか？」

カスミはベルモットの言葉を聞いて恐怖を感じてしまった。

マキタ「いいんじゃないか？俺はガキを相手にするのは好きじゃねえし・・・」

ネルソン「気が進みませんね・・・仕方ありませんね・・・」



マキタとネルソンはベルモットにカスミを殺す許可を出した。ベルモットは腹黒い笑みを浮かべながら、ナイフを取り出してカスミの首にその刃を当てる。

ヒカリ「カスミ!」

マキタ「おっと、お前の相手は俺だ!」

ヒカリはカスミを助けに行こうとするがマキタのギギギアルによって止められる。そしてベルモットはカスミの前にナイフを振り上げた。

ベルモット「死ぬ・・・!!」

カスミは目を瞑り死を覚悟しようとしたそのときだった・・・。

???「フライゴン、りゅうのはどうだ!」

空から、突然りゅうのはどうが飛んできた。

そして、それがベルモットに直撃してベルモットは気絶する。

ネルソン「誰だ!」

マキタ「あそこだ!」

マキタが指を指すとそこにはフライゴンがいた。

???「そうはいかない、いかのきんたまじゃよロケット団!」

ネルソン「その声は、エブチ!」

エブチ「その通りじゃネルソン」

フライゴンの首にかけているスピーカーからエブチがネルソンのそう答える。

マキタ「一体どうやって技を指示したんだ!」

そう言うとエブチは笑い出した。

エブチ「わしの開発したこのポケモン遠隔指示は360度の映像とポケモンに指示が聞こえるイヤホンで遠くからでも指示ができるように作ったわしの自信作じゃ」

自慢げのようにネルソンとマキタにそう言うエブチ。

マキタ「だけど、残念ながらエブチ。ここには、あの少年はいないぜ」

ネルソン「今頃、ランス様がへりに乗り込んでいるぜ」

マキタとネルソンがエブチにそう言うがエブチは驚かず笑いを出した。

エブチ「あははははははははは」

マキタ「な、何がおかしいんだ！」

笑い出したエブチにマキタがそう言う。

エブチ「甘いんだよ、ケーキのように甘すぎるんじゃないよあの青二才が。そんな作戦、特にお見通しじゃ」

エブチがマキタにそう言った。

ちなみに青二才とはランスのことである。

ネルソン「どう言う事だ！」

エブチ「今頃、わしが送り込んだ勢子達によってサトシ君を救出していると思っっているじゃろう」

エブチがネルソンとマキタにそう言う。

その頃、ランス達はへりへと向かっていた。

ランス「急ぐのです。殿隊しんがりがエブチ隊を抑えて今のうちに」

ランスが下っ端にそう言った瞬間・・・

ダウン

突然、銃声が聞こえて一人の下っ端が射殺される。

下っ端A「な、なんだ」

下っ端B「ど、どこから撃ってきているんだ！」

下っ端達が突然の銃撃に困惑していた。

ランス「どうやら、スナイパーが近くにいるようですね」

ランスが辺りの高いところを見渡す。と、その時・・・

????「突撃！」

そんな声が聞こえると草むらからエブチ隊が現れた。

下っ端C「エブチ隊だ！」

ロボットA「斬りこめ！」

隊員がそう言うと一緒にロケット団員に斬りかかる。

下っ端A「ランス様、この少年は我らが責任を持ってへりまで送り

ます！」

下っ端がランスにそう言う。

ランス「わかりました。頼みましたよ」

そう言つて下っ端がサトシを背負つてへりへ向かう。

ロボットB「逃げたぞ！」

ロボットC「追え！」

下っ端の逃走にエブチ隊が追いかけてようとするが・・・

ランス「ここから先は通しませんよ」

そう言つてランスはゴルバットを繰り出す。

一方、サトシを背負つて逃げていた下っ端だがへりがある場所とは逆のほうへ進んでいた。不審に思ったもう一人の下っ端が声をかけようとした時、突然殴られて気絶する。

そして、下っ端が無線を取り出した。

下っ端A「こちら奪還班。博士、応答願います」

???「成功したか？」

下っ端A「はい、もちろんです。無事に取り返しましたエブチ博士」

そう、この下っ端はエブチ隊の隊員であった。

一方、ランスは渡した相手がエブチ隊とは知らずにいた。

防戦一方の対決であった。そこにエブチ隊から指令が入った。

ロボットA「全軍撤退！博士の命令だ！」

そう言つてエブチ隊は全軍撤退していった。

ランスは、不思議に思いながらもへりへ向かった。

サトシを無事に救出した頃、エブチとネルソン達は・・・

エブチ「さてと、成敗するか」

エブチの一言に隊員が顔を青くする。

ロボットD「全軍、この場から回避しろ。あの技を出す気だ！」

ロボットE「あの技つてドラゴン最強の!?!」

ロボットF「とにかく逃げろ！」

そう言つて隊員達は回避する。

アイリス「みんなも逃げるわよ」

ハルカ「ところで最強の技ってなんなの？」

ハルカがアイリスにたずねる。

アイリス「ドラゴン最強の技、りゅうせいぐんを出す気よきつと」

アイリスがそう言うのとみんな無言で一斉に逃げ始める。

エブチ「フライゴン、チルタリス。りゅうせいぐん！」

アイリスの予想は的中し、エブチはフライゴンといつの間にかいたチルタリスに2匹にりゅうせいぐんを指示し繰り出す。

ロケット団員達「うぎゃー！ーあ、やな感じ」

チルタリスとフライゴンが放つたりゅうせいぐんは、ロケット団員達とギギギアルとサザンドラに命中し全滅する。

エブチ「さあ、どうする？」

エブチがそう言うのとネルソンとマキタは・・・

マキタ「手持ちがやられたぜ」

ネルソン「こうなったら引き上げるのみです」

そう言うってマキタとネルソンは逃げて行った。

その頃、へりに到着したランスは気絶していた下っ端から事実を全て知る。

ランス「おのれ、エブチ。私の部下に化けてサトシ様を奪い返すとは・・・」

怒り心頭状態のランス。そこへ逃げ帰ってきたネルソンとマキタ、そして気絶しているベルモットをつれてやって来た。

ネルソン「申し訳ございませんランス様」

ネルソンは、そう言うがランスはサトシをエブチに取り返されたことで頭がいっぱいであった。

ランス「エブチ、この借りは何十倍にして返してやるからな！」

そう言うってへりに乗り込んだ。

ネルソンとマキタは、ランスに声をかけずそのままへりに乗り込んだ。

夕方 捕まえたロケット団員達は、ジュンサー達に連行されてエブチ隊は、後片付けをしていた。幸いなことに死者はでなかった。とだけでも不幸中の幸いであった。

サトシ「あれ、ここは？」

カスミ・ヒカリ・アイリス・ベル・コトネ「……サトシ（君）

！……」

サトシが目覚ますとカスミ、ヒカリ、アイリス、ベル、コトネがサトシを抱きついた。

サトシは、鈍感なので訳がわからずにいた。

タケシ「うらやましいぞサトシ！」

遠くで見つめていたタケシがサトシを見てそう言う。

こうして事件はこんな形で解決したのであった。

## 第95話 サトシ救出大作戦（後書き）

前回は引き続いて長く書いたので疲れた。  
もう少し更新ペースを速めれるよう努力します。

**番外編？ ロケット団本部での出来事（前書き）**

久しぶりの番外編です。

今回は、前回の特別なルビー奪還作戦に失敗したあとの話です。

## 番外編？ ロケット団本部での出来事

エプチカップに奇襲して特別なルビーを奪おうとしたロケット団だったが思わぬ予想外に作戦は、めちゃくちゃとなり石はおるかサトシを本部へ連行すらできずノコノコと帰って来たランスとベルモット、マキタ、ネルソン。一行は首領　サカキの部屋にやって来た。4人は部屋に入りきちんと整列する。

サカキは無言のままイスを後ろ向きにして座っていた。

そして、数分経つてようやく口を開いた。

サカキ「今回の作戦、見事に失敗したな」

サカキはランスとベルモット、マキタ、ネルソンにそう言った。サカキは普通にしゃべっているが4人にはかなり威圧感のある声だと感じていた。

ベルモット「申し訳ございませんサカキ様。作戦が知らずのうちに漏れていたらしく、おまけにこの会場にサトシ様がおられて作戦がうまく行かずこうなりました」

今回の作戦の指揮官であるベルモットがサカキにそう言うがサカキにしてみればそれは言い訳にしか聞こえなかった。

サカキ「それでまんまと団員の大半を失ったと」

サカキがベルモットにそう言う。

ベルモットは言い返す言葉がなかった。

今回の作戦で送り込んだ下っ端は総勢250名。しかしその大半は、エプチ隊により射殺、あるいは捕まり無事に本部へ戻って来れたのはたったの25名と10倍近くの人間しか帰ってこれなかったのである。

サカキ「これだけ送って石はおるかサトシもここへ連れて来ることさえできず下っ端達を射殺、あるいは捕縛されるとはなんていうざまだこれは！」

サカキは完全に怒り爆発寸前であった。



サカキ「ランス。お前がいながらこんなことになるとはどういふことだ！」

ランス「お、お許しくださいませサカキ様！」

4側近の一人であるランスが土下座をしてサカキに謝る。

サカキ「謝ってすむ問題じゃないんだ！」

サカキはかなり激怒しながらランスに言う。

サカキ「ランス！お前はしばらく重要任務から外れてもらおう！」

サカキはランスにそう処罰をあたる。

ランスも文句を言うことができずただ土下座するしかなかった。

サカキ「それから、ベルモット、マキタ、ネルソン。お前らもしばらく重要な任務から外れてもらい、半年間給料なしだ！」

サカキは三人にも処罰を与えるが内容はランスより厳しいものであった。

サカキ「下がってもいい」

サカキはそう言うってランスとベルモット、マキタ、ネルソンは、黙ってサカキの部屋をあとにした。

アポロ「サカキさま」

ランスとベルモット、マキタ、ネルソンが部屋をした直後、4側近筆頭のロケット団ナンバー2のアポロが部屋に入ってきた。

アポロ「申し訳ございません。まさか、このような事態になるとは思いませんでした」

留守を預かり作戦変更命令を出したアポロは、サカキにお詫びをする。

サカキ「もうすんでしまったことだ。しょうがあるまい」

サカキはアポロにそう言った。

サカキ「それよりアポロ。デボンコーポレーションの買収のほうはどうなっているんだ？」

アポロ「その件ですが、デボンコーポレーションの株の4割がエプチが保有しておりましてなかなか買収が進みません」

サカキ「また、エプチか」

今回の作戦の失敗や特別なルビーを所持しているエブチがここでも関与していた。

アポロ「エブチは、我々の存在をしています。簡単には売ってくれないでしょう」

サカキ「だろうな」

サカキはコーヒーを一口飲み、そして話を続ける。

サカキ「しばらくは放っておくか」

サカキがアポロにそう言った。

サカキ「それより、アポロ」

アポロ「はい？」

サカキ「実は、サトシの嫁候補だが・・・」

アポロ「嫁候補!？」

サカキの発言にアポロは思わず驚く。

サカキ「あいつもこの会社をいずれ継ぐ。そのためには嫁を選ぶべきだが、私はあいにく政略結婚とか好かないから嫁候補としてこの人物のみリストアップしておいた」

そう言つてサカキは紙をアポロに見せる。

そこには、カスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、ベル、コトネとサトシと一緒に旅をしたことのある人物がリストアップされていた。

アポロ「こ、この6名ですか!？」

サカキ「他にも候補がいるがこの6名はサトシにかなりの好意を持っていると報告されている」

サカキがアポロにそう言う。

ちなみにこのことを報告したのは他でもないタクヤであった。

アポロ「あの、もしかしてベルモットとマキタ、ネルソンにランスより厳しい処罰したのは・・・」

サカキ「ああ、将来この中からサトシの嫁となる娘を殺そうとしたからな」

サカキがアポロにそう言った。

実は、サカキは監視役の任務を遂行中のタクヤからベルモットが力

スミを殺そうとし、それをネルソン、マキタが承認したと報告し、それを聞いたサカキはランスより厳しい処罰にしたのだ。

サカキ「それで、この6名のうち3名がサトシの嫁として一番相応ふさわしいとタクヤから報告が入っている」

サカキが赤丸をつけてある紙をアポロに見せる。

ちなみにその3名とは、カスミ、ヒカリ、アイリスである。

アポロ「何故、この3名なんですか？」

アポロがサカキにたずねる。

サカキ「まず、このアグレッシブな髪型の少女　アイリスは、なかなかいい仲で、このミニスカの少女　ヒカリは、サトシと基本的に仲が良くて強気な性格の持ち主で、そして、オレンジ髪の少女

カスミは、1〜10までポケモンバトルの技術を教えておてんば娘と報告されている」

サカキがそう言う。

アポロ「私としましては、ハナダジムジムリーダーがふさわしいですね」

アポロがカスミの履歴書が載っている紙を見ながらそう言う。

サカキ「どっちにしる最終的にはサトシが決めることだ。親が口を出すことじゃないからな」

アポロ「そうですねサカキ様」

サカキとアポロは、窓を見ながらそうつぶやいた。

ガールフレンズ「へ、へ、へ、ヘックシユン！」

カールフレンズ（歴代ヒロインとベル、コトネをまとめた総称）がくしゃみをする。

ヤストシ「風邪でもひいたのか？」

カスミ「違うわよ」

ハルカ「きつと、どこかで私達の噂をしているのよ」

ヒカリ「そうそう」

アイリス「あたしは、風邪なんか一度もひいたことないしね」

歴代ヒロイン達がヤストシにそう言った。

この時、ガールフレンズ達はまさかサカキとアポロがこの中から誰をサトシの嫁にしようかと考えていたなんて知るよしもなかった。

**番外編？ ロケット団本部での出来事（後書き）**

前回よりかなり短く終わりました。

果たして、この中から誰がサトシの嫁になるのかな？。

<通算100話特別企画> 鉄オタとメトロソムリエの違い(前書き)

ついに、「ポケットモンスター ホクシン地方への挑戦」は通算100話目を迎えました。今回は本編つながりのお話をお送りします。

ロケット団がエプチカップを襲撃してから一夜明けてサトシ達はトヨキシテイへ行くため地下鉄トヨキ線でトヨキシテイへ向かおうとした。

しかし、一人だけ騒いでいた人間がいた。

デント「うお！これがホクシン地方の地下鉄の車両か！始めてみたよ」

自称メトロソムリエ（？）のデントが地下鉄トヨキ線の車両を見てテンション上げていた。

カスミ「デント、なんであんなにテンションが高いの？」

ヒカリ「しかも車両を見て」

ハルカ「わけわからないかも」

アイリス「ホント、めんどくさい」

デントの行動を見てカスミ、ヒカリ、ハルカ、アイリスはそう思った。

そんな彼女達の発言が聞こえたのか？デントは、こっちを向いて口を開いた。

デント「君たち、わかっていないね。この車両はダブルトレインと違ってひとつ昔までライモンシティの地下鉄で走っていた車両で、シングルトレインの開発で大半の車両がいろんな鉄道会社に払い下げされたんだ」

サトシ「払い下げって？」

デント「つまり、不要になったものを他の会社に売り渡すことだよ。この列車は部品や点検にかなり時間がかかるのが特徴だけど普通の列車と違って寿命は2倍というメリットを持っているんだ。寿命が長い列車なら買い替えや開発するお金が減らすことができるんだ」

デントが自分の頭にある知識をみんなに話す。

ケンタ「いろいろなることを知っているなデントって」

デント「それは、僕がメトロソムリエだからね」  
全員「メトロソムリエ？」

みんなが一斉にそう言う。

アイリス「めんどくさいのがまた始まったね」

アイリスはそうつぶやいた。

ヤストシ「ようするにデントは鉄道オタクだな」

ヤストシはメトロソムリエ「鉄道オタクだと認識する。」

デント「ノーノー、ヤストシ。メトロソムリエと鉄道オタクはぜんぜん違うよ」

デントがヤストシのメトロソムリエ「鉄道オタクを否定する。」

デント「鉄道オタクは、鉄道、またはこれに関する事象を対象とする趣味（鉄道趣味）を持っている人のことでメトロソムリエは地下鉄限定ことだよ」

ヤストシ「同じじゃないか！」

デントの説明にヤストシは鋭くツツコム。

カスミ「さあ、トヨキシティまでキップを買いましょう」

ハルカ「そうね」

ヒカリ「早くホームへ行きましょう」

アイリス「えつ」と、この路線には特急と急行、快速、各駅があるわ」

コトネ「この駅には特急列車は止まらないみたいだから急行か快速に乗りましょう」

ベル「賛成！」

マリナ「各駅だと遅いしね」

そんなデントの話に女子達は無視する形でキップ売り場に向かった。シユウ「完全に無視されたな」

マサト「なんでお姉ちゃん達は無視するんだらう？」  
疑問に思うマサト。

ヤストシ「しょうがないよ女子の鉄オタはほとんどいないからね」  
ケンタ「女子は鉄道に関しては興味ないか」



ヤストシがそう説明し、ケンタはそうつぶやく。  
デント「だから君達、僕は鉄道オタクじゃなくてメトロソムリエだよ」

デントがそう言う。

ケンジ「とりあえず、僕らもキップ買ってホームへ行こうか」

サトシ「そうだな」

タケシ「ああ」

そう言うってサトシ達もキップを買ってホームへ向かった。

キップを買った後、サトシ達はホームにやってきた。

ヒカリ「次の列車は？」

ケンタ「え」と、次は10分後の快速列車だな」

ヒカリの問いにケンタがそう言った時だった。

キコンカコンキーン

アナウンス「まもなく2番線の特急列車が通過します。危ないので黄色線の内側までお下がりください」

特急列車が通過するというアナウンスが入る。

カスミ「特急列車が通過だって」

ヒカリ「じゃあ、この列車が通過した後か」

マリナ「そうだね」

3人がそう言う。

ヤストシ「お前達、少し離れたほうがいいぞ」

ベル「どうして？」

ベルがヤストシに聞く。

しかし、答える前にそれはやって来た。

遠くから特急列車が汽笛を鳴らしてトヨキタウンの駅に猛スピードで通過して行った。

女子達「きゃあ！」

女子達が一斉に声を上げる。特急列車がものすごいスピードでホームに進入した際に強い風が発生して女子達を襲う。そのさいにヒカ

リのミニスカがヒラリと浮く。

もちろん男子達は別の方角を見たり視線をそらしたりして対処する。マリナ「なによ、今の風！」

ハルカ「すごかったかも」

ヤストシ「ここは、地下だからな。風の逃げ場がないからホームに強い風が吹くんのだ」

ヤストシがマリナ達にそう説明する。

キコンカコンキーン

アナウンス「まもなく2番線に快速トヨキシテイ行きが到着します。危ないので黄色線の内側までお下がりでください」

そこへサトシ達が乗る列車がやってくる。

列車は到着してドアが開く。

そして、サトシ達は列車に乗り込みと列車はドアが閉まり、静かに走り始めた。

車掌「本日も地下鉄トヨキ線をご利用くださいまして、ありがとうございます。この列車は快速トヨキシテイ行きです。トヨキ線からお願いします。駅構内、並びに車内でのポケモンバトルは、周りのお客様のご迷惑となります。また運転に危険をもたらす恐れもありますので、ご遠慮いただきませう、ご協力をお願い致します」

カスミ「そうだよな。確かに車内でバトルしたら周りの人に迷惑では済まされないよね」

ヒカリ「たいあたりやひつかくと言った技でも吹っ飛ばされるときは大変だし、ましてやかえんほうしゃやハイドロポンプ、10まんボルトを使ったら列車が壊れてしまうもんね」

ヤストシ「よく知ってるな。それに、ホームでバトルしたら列車が入ったときに技が列車にぶつかって大事故の原因にもからな。だから、列車内ではポケモンの使用が厳しく制限されているんだ」

ヤストシがそう言う。

列車に乗り込んだサトシ達は、イスに座っていた。

ヒカリ、ハルカ、カスミ、ベル、コトネ、マリナはお喋りをしていて、タケシは見渡しながらきれいな女性を探しているがマサトと遠くからヤストシが目を光らせる。ケンジとケンタとシュウは列車の中で眠りについていた。サトシとアイリスは黙って席に座っていた。しかし、またしてもテンションを上げている人がいた。

もちろんその人とは・・・

デント「やっぱり運転席から見る景色は最高だ〜」

デントであった。

デントは運転席の窓をのぞきながら景色を眺めていた。地下鉄じ

やあ景色なんて見られないよ普通 dy・作者

アイリス「恥ずかしい」

ヤストシ「他人のふりをしろアイリス」

デントの光景を見ていたアイリスはかなり恥ずかしかったがヤストシは他人のふりをしろとアイリスに言う。

そして、列車は時速120キロでトヨキシティへと走って行ったのであった。

超久しぶりのあとがきコーナー！

デント「いや、今回はメトロソムリエとしての僕の血が騒ぐほどの話だったよ作者」

そりゃどうも 棒読み

ヤストシ「やっぱり鉄オタじゃないかデント？」

デント「だから違うって！僕は鉄道オタクじゃなくなってメトロソムリエだよ」

ヤストシ「同じじゃないか！」

デント「ぜんぜん違う！」

ヤストシ「どこが！」

まあまあ、二人とも落ち着いて。

アイリス「ところで作者も鉄オタだよな？」

ああ、俺は列車に乗るのが大好きな乗り鉄の鉄道オタクだよ。

ヤストシ「乗るのだけが趣味だからなこの乗り鉄は」

アイリス「多彩だね。鉄道オタクって」

まあ、そんなもんだよ鉄道オタクは。さて、今回はこの辺でお開きといたします。次回もお楽しみに！

## 第96話 災難再来（前書き）

今回の話は、作者の悪ふざけで女装ネタが入っています。  
苦手な方は、ご遠慮ください。

## 第96話 災難再来

地下鉄トヨキ線でトヨキシティまで乗りようやく到着した。

アナウンサー「ご乗車ありがとうございます。終点トヨキシティ、トヨキシティです。お忘れ物、落とし物なさいませんようご注意ください。本日も地下鉄トヨキ線をご利用いただきありがとうございます。ありがとうございました」

サトシ「よし、早速ジムへ行くぞ！」

サトシはドアが開いた瞬間そう言って全速力で出口へと向かった。

アイリス「子供ね」

カスミ「相変わらず、お子ちゃまね」

サトシの姿を見てそう思うアイリスとカスミ。

ヒカリ「一体、どんな街なんだろう？」

ハルカ「かなり都会の街らしいよ」

マリナ「とにかく、行きましょう」

ベル「行こう行こう」

コトネ「ベルって相変わらずマイペースね」

そう言いながらカスミ達は駅の出口へ向かった。

駅の出口を出るとサトシもカスミ達は街の光景に驚いていた。そこには、モエ系のポスターやメイドさんなどがたくさんいた。

ハルカ「なによ。この街は」

ヒカリ「ここ、アバ？」

タケシ「いや、ここはトヨキシティだよヒカリ」

ヒカリにそうツツコムタケシ。

ヤストシ「トヨキシティは、第2のアバと呼ばれるぐらいに成長した街なんだ」

ヤストシがそう言う。

マリナ「そうなんだ」

カスミ「通りでモエ系のポスターやメイドさんが多いわけだ」

サトシ「それでジムはどこなんだデント？」

サトシがトヨキジムがどこにあるかデントに聞く。

デント「えっと、ここから少し歩いた場所にトヨキジムがあるよ」

デントがサトシにそう答える。

ケンタ「それじゃあ、トヨキジムへ行こうか」

サトシ「ああ、5つ目のバツジゲットだぜ！」

ベル「あたしも」

マサト「僕も」

コトネ「私だつて頑張るわ」

タケシ「そうか、それじゃあ俺達は買い物してくるよ」

シゲル「僕も付き合いますよタケシさん」

ケンジ「ジム戦頑張れつてな」

タクヤ「ゲットしてこいよ」

サトシ「ああ」

そう言つてタケシ、シゲル、ケンジ、タクヤ、デントは買い物に出かけてサトシ達はジムへ向かった。

サトシ達はジム前に着くとそこにトヨキジムジムリーダー・アイコの姿があつた。

アイコ「いらっしやい、サトシ君」

アイコは、いつもの鉄道の制服ではなくメイド服の姿であつた。

サトシ「こんにちわ、アイコさん」

ベル「今日のジム戦、よろしくお願いします」

ベルがアイコにそう言う。

しかし、アイコの様子が少しおかしかった。

アイコ「ごめんなさい、本当ならジム戦したいところだけど・・・」

マリナ「なにか、問題でもあるんですか？」

アイコ「ええ。実は、私のジムはメイド喫茶も兼ねているんだけど、今日は従業員が急用で来られなくなつてね。お店を手伝っているの」

アイコがサトシ達にそう言う。

サトシ「そうですねか・・・」

サトシは残念そうに言う。

アイリス「それにしても、今日は人が多いですね」

アイコ「ホント、チヨロネコの手も借りたいぐらいだよ」

カスミ「なら、あたしたちも手伝います」

コトネ「同じく」

アイリス「右に同じく」

ハルカ「私も手伝います」

ヒカリ「メイド服着た経験もありますし」

ベル「あたしもやります」

マリナ「私も」

アイコ「ありがとう、カスミちゃん、ハルカちゃん、ヒカリちゃん、アイリスちゃん、コトネちゃん、ベルちゃん、マリナちゃん」

手伝ってくれるガールズフレnds達にそうお礼を言う。

アイコ「でも、これでも足りないわね」

アイコがそう言う。

カスミ「それなら大丈夫ですよアイコさん」

マリナ「ここにいい人がいますから」

ハルカ「すぐ近くに」

カスミとマリナ、ハルカがアイコにそう言った。

サトシ・シユウ・ヤストシ・ケンタ「・・・」（なんか、嫌な予感・・・）

サトシとシユウ、ヤストシ、ケンタはカスミ達の会話を聞いて嫌な予感を感じる。

そして、その予感的中してしまう。

カスミ「サトシ」

ハルカ「シユウ」

アイリス「ヤストシ」

マリナ「ケンタ」



カスミ・ハルカ・アイリス・マリナ「……手伝ってくれるよね」「」

4人がはもる形でサトシ、シュウ、ヤストシ、ケンタに言う。

サトシ「手伝って……」

シュウ「第一僕達は男だよ」

ヤストシ「そうそう」

ケンタ「それにメイド喫茶って女の子がメインでしょ。男の俺たちがやるのもどうかと」

男4人は、懸命に言い訳をしながらメイド服を着るのを回避しようとする。

ヒカリ「大丈夫大丈夫。4人とも女装すれば男子だってわからないよ」

ヤストシ「ヒカリの大丈夫は絶対に当てにならない！」

ヤストシがヒカリにそう言う。

ケンタ「それより、俺達にメイド服を着させようとするけどなんでマサトは着せないんだよ！」

ケンタがマサトだけメイド服を着せないことに疑問を抱く。

アイコ「それが、マサト君に似合うメイド服がないのよケンタ君」

アイコがケンタにそう言った。

それを聞いてマサトはホッとする。

サトシ「そんなエコヒーキだぜ。俺は絶対に着ないぜ」

サトシはメイド服を絶対に着ないと言い張る。

するとヒカリがサトシに向かって口を開く

ヒカリ「シュウとヤストシ、ケンタはメイド服は始めてたけどサト

シは前に着たことがあるじゃない」

それを言われてサトシは反論ができなかった。

ヤストシ「とにかく、俺は嫌だぞ！俺のプライドが、自尊心が確実に減る！」

カスミ「そう硬いこと言わないで 減るもんじゃないでしょ？」

カスミは軽くそう言うがヤストシのプライドと自尊心が確実に減る



そしてパンツまでも女の子用にされてしまった。あんまり詳しく書くと18禁になるのでそこは省略させていただきます。by・作者  
ヒカリ「可愛いわよ4人とも」

ヤストシ「うるせい!」(T-T)」

シユウ「かわいいわけじゃないか……。全然美しくないよ。・」

ケンタ「俺もだよ」(T-T)」

サトシ「もう婿にいけないよ」(T-T)」

カスミ「安心しなさい!その時は貰ってあげるから!」

カスミがサトシにそう言うと、

アイリス「あたしももらってあげるわよサトシ」

ベル「なに言っているのよあたしがもらうわよ」

コトネ「私だつて!」

ヒカリ「いいえ、あたしがサトシをもらうわよ」

ヤストシ「おいおい、サトシは物じゃないんだよ」

4人の発言にそうツツコムヤストシ。

アイコ「みんな、そろそろお店のほうに行ってくれない」

コトネ「はい」

ハルカ「それじゃあ、行こうかシユウ」

マリナ「ケンタも行くわよ」

アイリス「ホラ、ヤストシもいつまでも放心状態になってないで行

くわよ。ホント、子供ね」

カスミ「サトシも行くよ」

服から髪まで女物にされた男子一同は動けない状態でしかたがなくハルカがシユウをマリナがケンタをアイリスがヤストシを、そしてカスミがサトシを手をつないで店のほうへと向かった。

マサト「頑張つてね」

マサトは、まるで人事のようにそう言つてサトシ達を見送った。

果たして、一体どうなるのか?

## 第96話 災難再来（後書き）

ヤストシ「おい！作者なんだ今回の話は！」

ケンタ「しかも僕達を女装させるなんて！」

サトシ「あんまりだぜ！」

（予想通り抗議してきたか）前回まで残虐的な話が続いたから雰囲気を変えないといけなかったから。こういう話にしたの。シユウ「政治家みたいな言い訳し方やめてくれないか」

サトシ「そうだぜ。てつきり今回はジム戦かと思っていたのに」  
焦るなよサトシ。焦る過ぎは禁物だよ。

サトシ「どういう意味だよそれ！俺は至って普通だぜ」

だって、この間のライモンジム戦、ガマガル一匹で勝とうとしてガマガルが倒れことを想定せずに2匹目を急遽ツタージャを繰り出しメロメロで相手をメロメロにしようとしたけどカミツレさんのエモンガは なので効かず、しかもツタージャが だって言うことにすっかり忘れてさらにエモンガが飛行タイプの技を持っていることにも忘れてツタージャはストレート負けして結局ピカチュウがエモンガとシビシラスを倒して勝ったからいいけど。こんなライモンジムでの戦いがあつたからトヨキジム戦は持ち越したなって判断したのさ。

サトシ「そんな〜」

ヤストシ「そうだろうな。サトシが40個のジムを挑戦した中で一番最低最悪なジム戦だったからな」

まあ、これを反省してホドモエジムはしっかりやれよ。

サトシ「はい・・・」

と言うわけでサトシがライモンジム戦の戦い方を反省したところで今回は、この辺でお開きといたします。次回もお楽しみに〜

## 第97話 メイド喫茶の来店者！

前回、ガールズフレンズとアイコによって、メイド服を着せられたサトシとシュウとヤストシ、ケンタ。4人の自尊心やプライドはもはやズタズタである。

そんな4人とガールズフレンズは、今メイド喫茶の奥の部屋でアイコにいろいろと指導されていた。

アイコ「いい、お客さまが入店したら必ず最初に『お帰りなさいませ、ご主人様』と笑顔で出迎えること。女子だったら『お帰りなさいませ、お嬢様』とこれも笑顔で出迎えることよ。それと男性陣はどんなことがあっても女性の言葉を使うこといいね」

アイコがサトシ達にメイド喫茶でのサービスの仕方を教える。

しかし、男性陣は魂が抜けたように元気がなくなっていた。

カスミ「サトシ、シュウ、ヤストシ、ケンタ。アイコさんの話し聞いているの？」

カスミが4人に向けてそう聞く。

サトシ「聞いているには聞いているけど・・・」

ヤストシ「聞くより自尊心がズタズタにされて元気ないんだ」

シュウ「そうそう」

ケンタ「・・・」

サトシとヤストシ、シュウはカスミにそう言いつつため息をつき、ケンタにいたっては喋る元気すらなかった。

カスミ「元気出さないよ4人とも！」

マリナ「元気が出ないとお店を手伝えないじゃない」

ハルカ「そうそう」

ヒカリ「元気出して出して」

コトネ「やる気の一つや二つ出さないよ」

ベル「コトネの言う通りよ」

アイリス「ホント、子供ね」

サトシ・ヤストシ・シュウ・ケンタ「……（誰のせいで元気がないと思っっているんだ（のよ）」「……」

ガールフレンズが4人にやる気を出せと言うがその原因を作ったのはお前たちだろうと心の中で怒鳴るサトシ、ヤストシ、シュウ、ケンタであった。

アイコ「それじゃあ、振り分けだけど、カスミちゃんとヒカリちゃん、サトシ君は注文品を席まで運んだり片付けたりする役目、ベルちゃんとハルカちゃん、コトネちゃんは、お客さまの注文をとって来る役をマリナちゃんとケンタ君は、お客さまを席に案内する役を、ヤストシ君とシュウ君、アイリスちゃんは、会計をよろしくね」  
ガールズフレンズ・男性陣「はい！」

アイコの仕事の振り付けしてもらい返事をするサトシ達。

アイコ「それから、このお店は指名されたメイドさんとバトルするの。だから指名されたらその挑戦に必ず受けることよ」

アイコが付け加えてサトシ達にそう言う。

サトシ「バトルか。よし、燃えてきたぜ！」

ヤストシ「相変わらずバトルになると燃えるなサトシは」

シュウ「まあ、それが彼の取り柄だろうな」

ケンタ「確かに」

サトシの姿を見てそう思うヤストシとシュウとケンタ。

アイコ「それと男性陣には悪いけど、名前が男性ばいから今日だけでいいから名前を改めさせてもらおうわよ」

サトシ・シュウ・ヤストシ・ケンタ「……えっ!?」「……」

それを聞いた瞬間サトシとシュウ、ヤストシ、ケンタは驚いてしま

う。  
アイコ「えーと、サトシ君はサトコちゃん。シュウ君はシューちゃん。ヤストシ君はヤスコちゃん。ケンタ君はケンコちゃんって言う名前と呼ばしてもらえるわよ」

そう言われて絶句してしまふサトシとシュウ、ヤストシ、ケンタであった。

アイコ「さあ、行くわよみんな」

ガールズフレンズ「はい」

サトシ・シユウ・ヤストシ・ケンタ「……」

ガールズフレンズはそう言ってお店の方に向かった。

サトシとシユウ、ヤストシ、ケンタはまたしても気力を無くしてしまっただがずっとここに居るわけにはいかずなくなくお店の方へ向かった。

カスミ・ハルカ・ヒカリ・アイリス「……お帰りなさいませ、ご主人様」

歴代のヒロイン4人組が笑顔でお客さんにそう言ってお出迎える。

お店を手伝っているガールズフレンズは、お客さんからかなりの大評判であった。その中で、特にこのヒロイン4人組が人気である。

アイコ「サトコちゃん、1番テーブルにこの注文品を持って行って」  
サトコ「はい」

サトコことサトシはそう言ってお注文品を持っていった。店内では、メイド服を着て女装しているサトシ、シユウ、ヤストシ、ケンタはカスミ達やアイコの前でも女子の言葉で喋らないといけないのである。

サトコ「お待たせいたしました。ご注文のお店自慢のショートケーキです」

サトシは笑顔で注文品をお客さんに渡す。

ケンコ「お待たせいたしました。ご注文は何でしょうか？」

ケンタはサトシ同様笑顔でお客さんの注文を聞く。

シユウ「お会計は、1890円となります」

会計担当のシユウも笑顔でお客さんにそう言う。

そして、会計が済むとヤストシとアイリスとともに、

シユウ・ヤスコ・アイリス「……いてらしゃいませ、ご主人様」

メイド喫茶ならではのあいさつをする。

こんなことでサトシ、シユウ、ヤストシ、ケンタは、ガールフレンズに負けないほど人気であったがお客さんは彼らが男子だとは気づいてはいない。

サトコ「疲れるよ・・・わよね。シユウちゃん、ヤスコちゃん、ケンコちゃん」

サトシが3人にそう言う。

店内にいる間はどこへいても女言葉を使わなくてはならないのだ。

シユウ「まったくかわ」

ケンコ「カスミちゃん達、店内でかなり人気でバトルにも指名されているわね。連戦連勝だけどね全員・・・」

ケンタがそう言う。

お客さんの中には、飯を食うよりメイドさん達とバトルする人もいる。カスミ達も指名を受けている。

ヤスコ「当たり前でしょう。ハナダのおてんばジムリーダーとグランドフェスティバルで上位経験者とポケモンリーグベスト4を飾っている人がそう簡単に負けるはずがないでしょう」

サトコ「それもそうね」

ケンコ「だけどね。今は・・・」

サトコ・シユウ・ヤスコ・ケンコ「……」（早く仕事が終わってほしいことだ）「……」

サトシ達は、早くこの場から解放されたいと心の中でそうぼやく。

アイコ「そこ、なに私語しているのよ。こっちを手伝いなさい」

カスミ「そうよそうよ」

コトネ「お客さまがこんなにいるのに」

マリナ「手伝いなさいよ4人とも」

アイコ、カスミ、コトネ、マリナが4人に小言を言ってサトシ達は、自分たちの持ち場に戻った。

ヤスコ「仕事しますかシユウちゃん」

ヤストシがそう言った時だった。

カンカンカン



ヤスコ・シユー「お帰りなさいませ、ご主人様……!!!」  
ドアの開く音がしたのでヤストシとシユウはあいさつをした時、その来店者の顔を見て驚いた。

???「ここがバトルができると言うメイド喫茶か。よし、やっ  
てやるぞ！」

???「何で、僕まで……」

???「いいじゃねえか。昔からの付き合いじゃねえか」

???「まあ、俺はマリナちゃん一筋だからメイドさんなんて興味ないね」

メイド喫茶に入って来て早々そう会話するのは、フタバタウン出身のトレーナー・ジュンとケンゴ、そして今回が初登場のワカバタウン出身のジュンイチである。

シユー「(ケンゴじゃないか!)」

ヤスコ「(しかも、その隣にいるは、ジュンじゃねえ!)」

心の中でそうつぶやくシユウとヤストシ。

ジュンイチ「すいません、3名です」

ヤスコ「あ!3名様ですか。わかりました。3名様、席までご案内  
ください」

ヤストシがそう言う。

なお、シユウとヤストシはジュンイチとは面識はないので正体がバ  
レずにすんだ。

また、幸運にもジュンとケンゴは話に夢中でバレズにすんだ。

マリナ「はい……って!ジュンイチじゃないの!?!」

席の案内役のマリナが現れ、そこにいたケンタ同様幼馴染であるジ  
ュンイチがいることに気づく。すると、

ジュンイチ「うおおおお、マリナちゃん。一体、どうしたのそ  
のメイド服。すごく、すごくキュートで似合ってるよ!それにしば  
らく会わないうちにすっかり大人びたね!!!」

ジュンイチは興奮気味にマリナに詰め寄る。

マリナ「あ、ありがとう……」

ジュンイチの行動にマリナは引いていた。

ジュン「・・・一体、なんだってんだよ（汗）」

ケンゴ「さ、さあ・・・」

訳がわからず、啞然とするジュンとケンゴだった。ちなみに、ジュンイチはケンタ以上に幼馴染のマリナに好意を抱いている。ケンタとは違って、彼女に対するアプローチは積極的であり、その程度はタケシのナンパ行為と酷似もしくはそれ以上であると天の河さんがおっしゃっていました。ほかの作品の作者を引きずり出して言うな！by・ジュンイチ

ケンタ「一体、どうしたんだマリナちゃん」

サトシ「何かあったの？」

そこへサトシとケンタが、ジュンイチの声を聞きつけてやって来た。

ケンゴ・ジュン「あー！サトシ！？」

サトシ「お、お前はケンゴとジュン！？」

ジュンイチ「隣は、ケンタ！？」

ケンタ「ゲツ！？ジュンイチ・・・」

ジュン、ケンゴ、ジュンイチと鉢合わせになったサトシ、ケンタの運命はいかに！？

第97話 メイド喫茶の来店者！（後書き）

次回、お互いに再会した4人の運命は、一体どうなる！？

第98話 メイド喫茶でバトルだぜ（前書き）

最悪なタイミングで再会を果たした、サトシとケンタ、ジュンとケ  
ンゴとジュンイチ。一体、どうなるのか！？

サブタイ通り、タッグバトルを入れおり、またギャグ要素を入れて  
おりさらに、しばらく離れていたサトカス要素を無理矢理入れ込ん  
でいます。

## 第98話 メイド喫茶でバトルだぜ

前回の終わりにケンゴとジュン、ジュンイチと最悪な再開を果たしたサトシとケンタ。さて、今回は・・・

サトシ「・・・・・・・・」

ケンタ「・・・・・・・・」

ジュン「・・・・・・・・」

ケンゴ「・・・・・・・・」

ジュンイチ「・・・・・・・・」

5人の間には沈黙が流れる。それも当然だろう。こんな形で特にジュンとジュンイチに至っては、自分のライバルがあり得ない格好で現れたのだから、

ケンゴ・ジュン・ジュンイチ「・・・・ぶっ!?!?」「」

すると、ケンゴとジュンとジュンイチは沈黙の後、

ジュン「プハハハハ、なんだよサトシ。メイド服を着て登場なんて

！ば、ば、罰金ものだぜ!?!?!」

ケンゴ「ホントホント!?!?!ししししかも、女子の言葉で喋っているし!?!?!」

ジュンイチ「ケンタもサトシなんだよ!しばらく会わないと思った

ら、こんな格好で・・・・プツ!?!マズ・・・・。腹筋が壊れる・・・・」

サトシ・ケンタ「笑うな(怒)」「」

突然大爆笑をしたケンゴ、ジュン、ジュンイチに対して、怒りを露わにするサトシとケンタ。

ケンゴ・ジュン・ジュンイチ「お前らまさかそんな趣味が・・・・

「」

サトシ・ケンタ「んなわけないだろ!」

サトシとケンタは声を八毛らせて、否定した。ちなみに、マリナは必死で笑いをこらえながら様子をうかがっている。ヤストシとシユウもサトシとケンタと同じ状況なのにまるで他人事のように見つめ

ながら笑いをこらえていた。しばらくすると、他の面々もぞろぞろ集まってきた。

アイコ「ちよつと、サトシ君、ケンタ君。お店では、男言葉は使わっているじゃないわよ！」

アイコはサトシとケンタを叱る。

その後、ジュン、ケンゴ、ジュンイチの3人を人目がつきにくい奥の部屋へと案内された。

そして、事情を3人に説明した。

ジュンイチ「なるほど、4人はメイド喫茶を手伝うためピンからキリまでそうなったのか」

ジュンイチが納得したかのようにそう言う。

ちなみにヤストシとシュウの女装姿もサトシとケンタが3人に暴露して笑われたのは言うまでもない。

ジュン「でもよ。ホントに似合うな（＾Ｏ＾）」

ケンゴ「ホントホント（笑）」

ヤストシ「笑うなよ二人とも！それ以上笑ったらロズレイドを出してマジカルリーフを食らわすぞ！」

ヤストシがそう言うとは二人とも笑うのをやめた。

誰だって、ポケモンの技を食らいたくはないのは当たり前である。

アイコ「それより、ご主人様。ご注文はお決まりでしょうか？」

アイコはジュン、ケンゴ、ジュンイチに聞く。

ジュンイチ「そうだな、この店のおすすめは何ですか？」

ジュンイチがアイコにたずねる。

アイコ「はい。このお店のおすすめ商品は、ポケモンホットケーキとメイドさん達とバトルです」

アイコが3人にそう言う。

ジュン「メイドとバトル!?それじゃあ、それをお願いするぜ！」

ジュンイチ「俺もそれをお願いします」

ケンゴ「僕はお腹空いているからポケモンホットケーキをください」

ジュンとジュンイチは、メイドとのバトルをケンゴはホットケーキ

を注文する。

アイコ「メイドさんとのバトル2名とポケモンホットケーキ1つです。ね。かしこまりました。それでは、メイドさんは誰と戦いますか？」

アイコがジュンとジュンイチに聞く。

ジュン「俺はサトシを指名するぜ！」

ジュンイチ「俺はケンタを指名します」

アイコ「かしこまりました。それじゃあ、サトコちゃん、ケンコちゃん。ご主人様2名があなたたちを指名したわよ。バトルのお相手よろしく」

サトシ・ケンタ「かしこまりました」

サトシとケンタは、そう言う。

ジュン・ジュンイチ「(サトシとケンタ、生まれてくる性別間違えたんじゃないのか?)」

笑いをこらえながら心の中でそうつぶやいたジュンとジュンイチであった。

ジュンとジュンイチは、サトシとケンタをメイド喫茶の奥にあるバトルフィールドに案内して、それぞれのポケモン1体ずつのタッグバトルの火ぶたが切って落とされる。なお、ピカチュウは途中からカスミ達とマリナ、ヤストシ、シユウに預けてサトシを観戦するようでこのバトルには使用しないつもりである。

ちなみに審判は、ジムリーダーのアイコが勤める。

アイコ「それでは、これよりジュン・ジュンイチペアとサトコ・ケンコペアによるタッグバトルを行います。使用ポケモンは1体のみでタッグペアのポケモンを全て戦闘不能になった時点でバトルを終了します」

審判のアイコがルール説明をする。

サトシ「ダンゴロ、君に決めた！」

ケンタ「それじゃあ、俺はコイツで行くぜ。頼むぞ、マニョーラ！」

ジュン「行けっ！ムクホーク！お前の力を見せてやれ！」

ジュンイチ「それじゃあ、俺はコイツで行くぜ！メガヤンマ！」

サトシとケンタ、ジュンとジュンイチは、タッグバトルに使うポケモンを出した。しかし、ケンタとジュンイチは、出したポケモンがまずかった。ケンタは、悪・氷タイプのマニニューラで、ジュンイチは虫と飛行タイプのメガヤンマを出したのだ。こうとなれば観戦しているある2名が、

カスミ・アイリス「い、いやああああ！」

虫タイプのポケモンが苦手なカスミ、氷タイプが苦手なアイリスが突如悲鳴を挙げた。

マリナ「どうしたのよ二人とも!？」

カスミとアイリスの突然の悲鳴にマリナは驚くも訳が分からずにいる。

ハルカ「実は、カスミは虫タイプのポケモンが苦手なんです」

ヒカリ「それで、アイリスは氷タイプが苦手なの」

ハルカとヒカリはカスミが虫タイプがアイリスは氷タイプのポケモン嫌いについてマリナに説明する。

その頃、バトルフィールドでは・・・

ケンタ「一体なんだ、今の悲鳴!!!」

ジュンイチ「どうしたんだろう・・・」

マニニューラ「・・・」

メガヤンマ「・・・」

ケンタとジュンイチは訳が分からず、そしてマニニューラとメガヤンマも自分たちが出てきたことで悲鳴を挙げられたことにどうしたらいいのか分からず、啞然としていた。すると、

カスミ「ちよつと、よりにもよってなんであたし達が苦手なポケモンを出すのよ！」

アイリス「別のポケモンにしてよ。体中がムズムズするわ！」

ケンタ・ジュンイチ「ハア!?無茶言うなよ!」

カスミとアイリスはケンタとジュンイチにポケモンを変えろと言い



出した。ケンタとジュンイチにとっては、迷惑な話である。

カスミ「今すぐ変えなさい。変えなきゃ、ギャラドスの火炎放射を食らわすわよ！」

アイリス「あたしもよ。キバゴのげきりんを食らいたくなければ今すぐポケモンを変えなさい！」

ベル「二人とも！」

シユウ「それはいくらなんでもそれはダメだろう」

コトネ「それは自己中よカスミン、アイリン！」

ヤストシ「やめないかカスミに、アイリスの子供！」

アイリス「それを言うなら子供のアイリスでしょ！」

ヤストシはラングレーの台詞を使ってアイリスにそう言うとアイリスはいつものを返す。

ヤストシ「とにかく、誰か止める！」

カスミとアイリスの無茶な要求をベルとシユウ、コトネ、ヤストシが止めに入る。

サトシ・ジュン「（いつになったら、始められるんだ・・・）  
」

サトシとジュンはため息をつきながらそう思った。結局カスミとアイリスは、ヒカリとハル力達により強制的に退場されて一件落着した。 良くないわよ作者！！！！by・カスミ&アイリス

ケンタとジュンイチは何とかポケモンの入れ替えを免れた。そして、ようやくバトルが開始された。

ジュンイチ「それじゃあ、先制は俺達からだ！メガヤンマ、ダンゴロにはがねのつばさ！」

メガヤンマはダンゴロに向けてはがねのつばさを繰り出して攻撃を仕掛けた。岩タイプを持つダンゴロにとって効果抜群の技である。

サトシ「ダンゴロ、ラスターカノンではがねのつばさを打ち消せ！  
ダンゴロはすばやくラスターカノンを発射してはがねのつばさを打

ち消した

ジュンイチ「やるねサトシ。あの時よりさらに強くなっているな！」

シユンイチがサトシにそう言う。

ちなみに、あの時とは、実はサトシとシユンイチはジヨウトリーグシロガネ大会の予選で対決している。その時は見事サトシがシユンイチを退けて勝利を挙げた。なお、シユンイチは予選突破に必要な勝利数が足りず、予選落ちとなった。(無印編第268話参照)

シユン「隙あり！ムクホーク、ダンゴロにインファイト！」

奏功しているうちにシユンのムクホークがダンゴロにインファイトを仕掛けてきた。これも当たればダンゴロにとっては効果抜群の技である。

ケンタ「マニニューラ、ダンゴロを守れ！ここえるかぜ！」

マニニューラはダンゴロを援護するためここえるかぜでムクホークを攻撃する。

ムクホーク「ムクツッ！」

マニニューラのここえるかぜがムクホークに命中した。効果抜群だがここえるかぜは、威力が弱いためムクホークは耐えたがすばやさか1段階下がったのは確実である。

サトシ「ありがとうなケンタ」

ケンタ「どういたしまして」

タッグバトルでは、シングルバトル、トリプルバトルなど違い相手のポケモンとのコンビネーションをうまく利用すれば、避けずに相手の攻撃を防ぐことが出来る。

シユンイチ「メガヤンマ、マニニューラにむしのさざめき！」

メガヤンマは、マニニューラにむしのさざめきを繰り返し出した。悪タイプを持つマニニューラには、当たれば効果抜群の技である。

ケンタ「マニニューラ、電光石火で避ける！」

マニニューラは電光石火でむしのさざめきを避けた。

サトシ「ダンゴロ、メガヤンマにストーンエッジ！」

ダンゴロはメガヤンマにストーンエッジを繰り返し出した。岩タイプの技は虫と飛行を持つメガヤンマには効果抜群でダメージは4倍である。

ジュン「ムクホーク、ダンゴロにインファイト！」

ムクホークはメガヤンマを助けようとインファイトを繰り返すがこごえるかぜを受けたのですばやさ落ちてしまい間に合うことができずメガヤンマはストーンエッジを食らいメガヤンマは倒れてしまふ。

アイコ「メガヤンマ、戦闘不能！」

アイコがメガヤンマの戦闘不能をコールした。これでジュンのムクホークが残る。ムクホークにとって残りの氷・悪タイプを持つマニユーラと岩タイプのダンゴロは相性がかなり悪すぎである。

ジュン「相性が悪くても絶対に勝ってやる！ムクホーク、マニユーラにインファイト！」

ムクホークがマニユーラに向かってインファイトを繰り返す。悪と氷を持つマニユーラにとって格闘タイプのインファイトは効果抜群でダメージは4倍である。

サトシ「ダンゴロ、ラスターカノン！」

ケンタ「マニユーラ、れいとうパンチ！」

ダンゴロはラスターカノンをマニユーラはれいとうパンチをムクホークに攻撃する。ムクホークはラスターカノンは避けたがれいとうパンチは、避けることができず命中する。

そして、ムクホークは目を回して倒れていた。

アイコ「ムクホーク、戦闘不能！これにより、ジュン・ジュンイチサイドのポケモンが全て戦闘不能になったため、この勝負、サトシ・ケンタサイドの勝利！」

サトシ・ケンタ「やったあああ！」

サトシとケンタは勝利の喜びから高く飛び上がる。

ジュン「ムクホーク、よくやったぜ。」

ジュンはムクホークをボールに戻す。そして、ジュンイチとともにサトシとケンタに近づく。

ジュン「お前ら、さらに強くなったな」

サトシ「そんなことないぜ。そっちなかなり強くなっているぜ」

ジュンイチ「それにしても、凄いな。それになかなかのコンビネーションだったし」

ケンタ「サンキュー、ジュンイチ。お前とジュンもなかなかのコンビネーションだったぜ」

お互いそう言う。一方観戦サイドでは・・・

カスミ「なかなかやるじゃないかサトシ」

アイリス「それにサトシとケンタ。物凄く意気ピツタリだったし」  
ヒカリ「復活早っ!?!」

バトルが終わった直後、強制的に退場されたカスミとアイリスは元気になっていた。ヒカリはその2人に驚愕し、他の面々は苦笑を浮かべた。こうして、サトシ・ケンタVSジュン・ジュンイチのタッグバトルはサトシ・ケンタの勝利に終わった。その後、ジュンイチとジュン、ケンゴはトキヨシテイの隣街、カマタシテイへ向かった。そして、サトシ、ベル、マサト、コトネは明日ジム戦をする予約を入れてメイド喫茶を後にした。

もちろん、サトシ、ケンタ、シュウ、ヤストシは普段の服装に戻っています。

サトシ「さあ、みんなのところへ戻るか・・・ってカスミ?」

着替えを終えたサトシがヤストシたちのところへ行こうとした時、庭の縁側に腰を下ろしているカスミを見つけた。

サトシ「おい、カスミ。まだ着替えないのか?」

カスミ「うん、このメイド服気に入っちゃって。もう少し来てみようと思ったの」

サトシ「そっか。でもそろそろ戻るから早めに着替えてくれよ」

カスミ「わかったわ」

カスミはそう言うと、そよ風をにわかを感じながら庭を眺めていた。さらに夕日の照らす光がより一層メイド服姿のカスミを綺麗に引き立てる。



ヤストシ「ポケセンでタケシとデントが食事を作っておくから17時までには帰ってこいって・・・」

ハルカ「それは、まずいかも！」

マリナ「それじゃあ、早くポケモンセンターへ戻ろう！」

マリナがそう言ってサトシたちは全速力でポケモンセンターまで走り出した。

ヤストシ「デント達カンカンに怒っているだろうな」

ヤストシはそんなことを考えてサトシを追うように走り出した。

その頃、タケシ達では・・・

タケシ「遅い！遅すぎるぞおおお！」

デント「ハハハハ、イツツ・待ちぼうけ・タアアアム・・・」

ヤストシの予想通り（？）。タケシとデントはカンカンに怒っていた。

タクヤ・ケンジ・シゲル「・・・」（これは、サトシたちタダじゃあ、すまないだろうな）「・・・」

その後、慌ててタケシ達に向かったサトシたちだがタケシとデントの説教を喰らったのは言うまでもない。

第98話 メイド喫茶でバトルだぜ（後書き）

今回は、いよいよジム戦です。

はたしてサトシは、一体どんなバトルを見せるか？

第99話 トヨキジム戦(前編)(前書き)

今回は、サトシ、ベル、コトネ、マサトがトヨキジムに挑戦する話です。



## 第99話 トヨキジム戦（前編）

翌朝、サトシ達は、トヨキジム前にやってきた。

サトシ「よし、いよいよトヨキジムでバトルだぜ」

ベル「ぜっーーーーーたい、勝って5つ目のバッジゲツトだわ」

コトネ「私もよ」

マサト「僕だって！」

気合がかなり入っているサトシとベルとコトネとマサト。

ヤストシ「そういえば、ケンタはジム戦挑戦しないのか？」

ケンタ「俺はワールドリーグに出場する基準を満たしているからホクシンリーグには参加しない」

ケンタがヤストシにそう言う。

そして、サトシ達はジムの扉を開けた。

サトシ「頼もう！」

サトシはジムに入った瞬間いつもの台詞を言う。

アイコ「来たわねサトシ君、マサト君、ベルちゃん、コトネちゃん  
出迎えに来たアイコがサトシ達にそう言う。

そして、アイコは一つの扉を開くとそこには、バトルフィールドがあった。バトルフィールドにはサトシとマサト、コトネ、ベルが入り他の人たちは観客席へ回った。

アイコ「さて、サトシ君、マサト君、ベルちゃん、コトネちゃん。

改めてトヨキジムへようこそ。さっそくジム戦のルールを説明するわ。ルールはサトシ君、マサト君、ベルちゃん、コトネちゃんの4人と私で1対4の対決よ！」

コトネ「1対4！」

アイコ「そう。あなた達が一人ずつ私とバトルをして私の手持ちポケモン4匹と対決するの。もし、私のポケモンを全て戦闘不能にさせたならあなた達の勝ちよ」

ベル「それって、一人で4体を倒したら戦わずに終わった他の3人にもバツジを!？」

アイコ「ええ、そうよベルちゃん。ただし、チャレンジャーが使えるポケモンは1体のみ。強制的に交換する技の使用はもちろん厳禁よ。もちろん、ジムリーダーである私には交換はする権利はない。それと、1体倒した時のみ他のメンバーと交代するのはOKよ」

アイコが4人にルールをそう説明する。

アイコ「さて、最初に私と対決するのは誰かな？」

アイコがサトシたちにたずねる。

すると、

コトネ「私が最初に戦うわ!」

なんと名乗りを上げたのは、コトネだった。

アイコ「いいわ。それじゃあ。審判、よろしくね」

審判「はい、お嬢様!」

ちなみに審判を務めるのは、メイド喫茶で働くメイドさんでメイド服はもちろん口調もメイド用語であった。

タケシ「おーーーーー!!!美しいメイドさん。自分はタケシと申します。どうでしょうか、このあと、自分と一緒にお茶でもメイドを見ていつものようにナンパを始めたタケシ。

マサト「はいはい、タケシ。バトルの邪魔になるから観客席に戻って戻って」

しかし、これまたいつものようにマサトがタケシの耳を引っ張って退場させた。

メイド「それでは、バトル開始!」

メイドの審判がバトル開始を宣言する。

コトネ「行くのよ、メガニウム!」

アイコ「私の一番手は、この子です。ライボルト!」

コトネはメガニウム、アイコはライボルトを繰り出した。

コトネ「メガニウム、はっばカッター!」

メガニウムは、はっばカッターを繰り出す。

アイコ「ライボルト、避けて火炎放射！」

ライボルトははっぱカッターを避けるとすぐさま火炎放射を繰り出した。炎技には草タイプのメガニウムには効果抜群である。

コトネ「メガニウム、避けて！」

メガニウムは火炎放射をギリギリで避けた。

コトネ「ひかりのかべ！」

コトネは特殊技の威力を軽減するひかりのかべを繰り出した。

コトネ「マジカルリーフ！」

防御を整えたメガニウムは必ず当たる技、マジカルリーフを繰り出した。マジカルリーフは、見事にライボルトに当たった。

アイコ「やるわね、コトネちゃん。でも、これはどうかしら？ライボルト、はじけるほのお！」

ライボルトがはじけるほのおを繰り出してメガニウムに当てる。しかし、ひかりのかべのおかげでなんとか耐えた。

コトネ「メガニウム、はっぱカッター！」

メガニウムは、はっぱカッターを繰り出した。

アイコ「ライボルト、避けてほのおのキバ！」

ライボルトは、はっぱカッターを避けてほのおのキバをメガニウムに繰り出す。

ほのおのキバは、見事メガニウムに直撃して倒れてしまう。

メイド「メガニウム、戦闘不能！ライボルトの勝ち！」

コトネはメガニウムを戻してサトシ、ベル、マサトの元へ戻る。

コトネ「ごめんね、サトシ君、ベルリン、マサト君。1体も倒さずに終わって・・・」

ベル「気にしないでコトネちゃん」

サトシ「まだ、始まったばかりだぜ」

サトシとベルがコトネにそう言う。

マサト「サトシ、次は僕に行かせて！」

サトシ「いいぜ、マサト！」

そう言うマサトがバトルフィールドに立つ。

メイド「それでは、始め！」

マサト「行くんだ、ガブリアス！」

マサトの繰り出したポケモンはガブリアスであった。

ハルカ「マサトは、ガブリアスね」

ヤストシ「ガブリアスは地面タイプも持っているからライボルトの電気技を完全に封じたな」

デント「それに炎技も効果はいまひとつ。相性では、完全にガブリアスが有利だね」

観客席から見ていたハルカとヤストシとデントが2体のポケモンを見てそう判断する。

アイコ「ライボルト、電光石火！」

ライボルトは電光石火を繰り出した。

マサト「ガブリアス、地震だ！」

ガブリアスは地震を繰り出した。地震は他の地面タイプの技より威力が高い。そして、飛行タイプや特性のふゆう以外は避けることができない。ライボルトは見事に命中して戦闘不能になる。

メイド「ライボルト、戦闘不能！ガブリアスの勝ち！」

アイコ「やられたわ。でも、次はどうか？2番手は、この子よ。

マルマイン！」

アイコが2番手に出したのは、マルマインである。

アイコ「マルマイン、でんじふゆう！」

マルマインは、でんじふゆうを繰り出した。

タケシ「でんじふゆうか」

シゲル「でんじふゆうは、しばらくの間、地面タイプの技を受けないからな」

シュウ「マサト君は、どう対処するかな」

観客席から見ていたタケシ、シゲル、シュウがそう思う。

マサト「ガブリアス、りゆうのいかり！」

ガブリアスがりゆうのいかりを繰り出した。

アイコ「ソニックブームよ、マルマイン」

マルマインは、ソニックブームを繰り出してりゅうのいかりを繰り出す。

2つの技が中でぶつかった。

マサト「ガブリアス、かみくだく！」

ガブリアスは、かみくだくを繰り出してマルマインに当てる。

アイコ「マルマイン、ころがる！」

マサト「カブリアス、まもる！」

マルマインは、ころがるを仕掛けるがガブリアスがまもるを繰り出して攻撃を防いだ。

アイコ「マルマイン、スピードスター！」

マルマインは、スピードスターを繰り出しガブリアスに命中した。

アイコ「続いて、ソニックブーム！」

マルマインは、続けざまにソニックブームを繰り出した。

マサト「ガブリアス、避けてギガインパクト！」

ガブリアスはマルマインのソニックブームを避けてギガインパクトをマルマインに当てる。そして、マルマインは、倒れた。

マサト「マルマイン、戦闘不能！ガブリアスの勝ち！」

こうしてマサトがアイコのポケモンを2体連続で倒してリードを奪った。

果たして、トヨキジムジム戦はどちらが勝つのか？

第99話 トヨキジム戦(前編)(後書き)

次回はジム戦の後編をお送りいたします。

第100話 トヨキジム戦（後編）（前書き）

ついに100話目に入りました。  
そして、今回はジム戦後半です。

## 第100話 トヨキジム戦（後編）

トヨキジムのジム戦にやって来たサトシ達。4対1のバトルは、先ぼうのコトネが敗れてしまったが2番手のマサトがアイコのライボルト、マルマインを退けた。アイコに残されたポケモンは、2体のみであった。

サトシ「頑張れマサト！」

ベル「その調子その調子」

サトシとベルがマサトを応援する。二人は、どうやらこのままアイコの3匹目もマサトを当てるつもりだ。対するマサトも続投満々であった。

アイコ「さて、私の3番手はこの子よ。エモンガ！」

アイコが3番手として出したのはエモンガであった。

コトネ「マサト君。気つけね！」

サトシ「エモンガは飛行タイプを持っているから油断するな！」

コトネとサトシが飛行タイプの技に注意するようにマサトに言った。

マサト「大丈夫だよサトシ。ガブリアスはまだ余裕があるから安心して」

マサトがサトシとコトネにそう言った。

しかし、この時ガブリアスは、さきほどギガインパクトを使用したのしほらく動けない。マサトはガブリアスは体力にまだ十分余裕があるので耐えられると信じている。

アイコ「エモンガ、めざめるパワー！」

エモンガはめざめるパワーを繰り出してガブリアスに当てる。その瞬間、ガブリアスが倒れてしまい戦闘不能となる。

メイド「ガブリアス、戦闘不能！エモンガの勝ち！」

突然の出来事にマサトもサトシ、ベル、コトネも驚きを隠せなかった。

ハルカ「そ、そんな・・・」



ヒカリ「まだ体力に余裕のあるガブリアスが・・・」

デント「めざめるパワー1発で戦闘不能になるなんて・・・」  
ヤストシ「一体、何が起きたんだ!?!」

観客席で見ていたハルカたちも驚きを隠せずそうつぶやいた。  
すると、アイコが口を開いた。

アイコ「驚いているわねマサト君もサトシ君達も。実はこれはマルマインの特性よ」

マサト「マルマインの特性!?!」

コトネ「確か、マルマインの特性は、防音と静電気よ。どれもガブリアスの体力を削るような特性じゃ・・・」

アイコ「確かにね。でもね、コトネちゃん。私のマルマインの特性はゆうばくよ!」

アイコがそう言うつと周りは驚いた。

ベル「ゆうばく!?!」

ベルが驚いてそう言うつ。

ちなみにゆうばくとは、自分のポケモンが「ひんし」になった時、触れた相手にそのポケモンの最大HPの1/4のダメージを与える特性である。

アイコ「みんなは、知らないみたいだけど最近なんだけど本来持っている特性とは違った、珍しい特性のポケモンがいるつてこの間、エプチ博士が学会で発表したんだ」

アイコがサトシ達にそう言った。

コトネ「本来持っている特性とは違った、珍しい特性のポケモンがいるか・・・」

コトネがそう言うつ。

アイコ「さて、これで残るは、サトシ君とベルちゃんね。誰が先に挑戦する?」

アイコがサトシとベルに聞く。

ベル「私が行くわサトシ君!」

ベルはサトシにそう言うつてフィールドへ向かう。

サトシ「頑張つて来いベル」  
サトシがそう言うのとベルは思わず赤くなってしまうた。  
そして、ベルがフィールドに立った。  
ベル「行くわよ、チラーミー！」  
ベルが出したのはチラーミーだった。  
アイコ「それじゃあ、私から行くわよ。エモンガ、アクロバット！」  
エモンガはアクロバットを繰り出した。  
ベル「チラーミー、避けて！」  
チラーミーはエモンガのアクロバットを何とか避けた。  
ベル「チラーミー、ハイパーボイス！」  
チラーミーはハイパーボイスを繰り出して見事エモンガに当てる。  
アイコ「やるわね、ベルちゃん。なら、エモンガ、メロメロ」  
ベル「なら、こっちもメロメロよ！」  
エモンガとチラーミーがメロメロを繰り出した。そしてメロメロが  
お互いに当たった。  
メロメロは、相手が異性ならメロメロになる技だが同姓なら効かな  
いは言うまでもないがライモン戦でカミツレのエモンガとサトシの  
ツタージャが互いにメロメロを出し、結果同姓だったので効かなか  
ったのは記憶に新しいだろうが今回は・・・  
チラーミー「ミー〜」  
エモンガ「エモ〜」  
なんと互い異性同士だった。その結果、エモンガもチラーミーもメ  
ロメロを受けてメロメロ状態である。  
アイコ「エモンガ、しっかり！」  
ベル「チラーミー、スピードスター！」  
アイコはエモンガを必死で正気に戻そうとする隙にベルがチラーミ  
イにスピードスターを指示するがメロメロ状態で技が出ずにいた。  
ヤストシ「あらあら、これは長期戦になりそうだな」  
シユウ「どちらかが先にメロメロ状態から解放されたポケモンがこ  
の勝負を決めるね」

観客席でヤストシとシユウが二人のバトルを見てそう思った。

そうこうしているうちに時間が過ぎていき30分経過しても2匹はメロメロ状態が続いてバトルらしいバトルができずにいた。

アイコ「お手上げね」

ベル「私も」

と言う事で・・・

メイド「チラーミィ、エモンガ両者戦闘放棄！」

ベルとアイコはこれ以上やっても時間が無駄と言う事で二人は戦闘放棄を宣言し、これでアイコは残り一匹となったがサトシたちも残りサトシのみとなった。

コトネ「サトシ君、頑張つて！」

マサト「頼んだぞサトシ！」

ベル「私の敵絶対に討つてね！」

こうしてサトシは、3人の運命を背負いフィールドへ立つ。

アイコ「これでお互い1体ずつとなったわね。だけど、私はジムリーダーとして負けないわ！最後は私のエース！行け、デンリュウ！」

アイコの最後のポケモンは、デンリュウだった。

サトシ「ツタージャ、君に決めた！」

サトシは、ツタージャを繰り出した。

アイコ「行くわよ、デンリュウ。ほのおのパンチ！」

デンリュウはほのおのパンチを繰り出した。

サトシ「かわせ、ツタージャ！」

デンリュウのほのおのパンチにツタージャは避けた。

サトシ「リーフストーム！」

ツタージャは、リーフストームをデンリュウに向けて仕掛けて見事

デンリュウに命中する。

アイコ「やるわね、サトシ君。なら、デンリュウ、シグナルビーム！」

デンリュウは、シグナルビームを繰り出し、ツタージャに当てる。

シグナルビームは、虫タイプの技なのでツタージャにとっては効果

抜群の技である。しかし、ツタージャは何か耐えて立ち続けた。アイコ「根性があるわね、そのツタージャ。なら、体力を削るのみ！デンリュウの本当の力を見せてあげるわ！デンリュウ、げきりん！」

デンリュウが繰り出したのは、ドラゴン技2番目に最強なげきりんである。げきりんは、大ダメージを与えらるとも厄介な技であるが何とかしのげば使用後は混乱するのでツタージャには耐えたいところである。

サトシ「ツタージャ、避ける！」  
アイコ「無駄よ！」

ツタージャは避けようとしたがデンリュウのげきりに直撃する。しかも、1回だけでなく2回、3回とツタージャに当てるが、ツタージャはなんとか耐えた。すると、デンリュウがげきりんを使用を終えたので混乱を始めた。

アイコ「しまった！」  
もちろん、サトシはそれを見逃さず反撃に出た。

サトシ「ツタージャ、先の付けたっぶり返すぞ！リーフブレード連続！」

ツタージャはリーフブレードを何発もデンリュウに当てる。デンリュウは、混乱しているのでわけもわからず自分に当てることもあった。

サトシ「ツタージャ、つるのむち！」  
ツタージャはつるのむちをデンリュウに当てた。

そして、デンリュウは倒れた。  
メイド「デンリュウ、戦闘不能！ツタージャの勝ち！よって、勝者サトシ、ベル、コトネ、マサト！」

サトシ・コトネ・ベル・マサト「やったーーーーー！！！！」

アイコ「まさかの敗北とはね。まあ、いいわ。サトシ君、マサト君、コトネちゃん、ベルちゃん。はい、このジムを勝ち抜いた証、シユ

ートバッジよ」

そう言ってアイコが4つのバッジをサトシ、マサト、コトネ、ベルに差出、4人は受け取った。

サトシ・マサト・ベル・コトネ「……シユートバッジ、ゲットだぜ(よ)(でGO)!!」

こうして、サトシ、マサト、ベル、コトネは5つ目のバッジを手に入れた。

そして、彼らの冒険はまだまだ続く

第100話 トヨキジム戦（後編）（後書き）

サトシ「5つ目のバッジ、無事に手に入れたぜ」  
よかつたな。

ベル「この調子で6つ目もゲットよ」

コトネ「頑張ってホクシンリーグベスト4を狙うぞ」

マサト「おー!!!!」

さて、4人が気合を入れたところでお開きといたします。次回もお楽しみに。

**第101話 新たなロケット団員襲撃（前書き）**

今回は久しぶりにロケット団が登場します。そして、今回は白波さんの作品から3名ゲスト出演します。

## 第101話 新たなロケット団員襲撃

ジム戦を終えたサトシ達は、6つ目のバッジがあるカマタシティへ向かっていた。

その途中で昼飯を探っていた。

ケンタ「美味しいぜ！」

マリナ「デント君の料理も美味しいけど、タケシ君の料理もなかなかだね」

タケシ「喜んでもらえたら、こっちも作った甲斐があるってものだ」  
タケシはマリナにそう言う。

コトネ「そういえば、今まで疑問に思っていたけどカスリンやハリン、ヒカリン、アイリンは料理作らないの？」

コトネの質問にカスミとハルカ、ヒカリ、アイリスは手を止めてしまう。

ヤストシ「そうなんだよコトネ。この4人、料理のりの字も知らないん……」

バシツ

ヤストシがそう言うとかスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリスはヤストシを殴った。

ハルカ「料理がりの字も知らなくて悪かったわね」

ハルカがそう言う。

マリナ「ねえ、料理ができないってホントなの！」

マリナがカスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリスに聞いた。

ハルカ「ええ」

ヒカリ「生まれて10年、本格的な料理は作ったことないの」

アイリス「あたしもよ」

カスミ「料理は男の仕事だっと思ってたの」

カスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリスがそう言う。

シゲル「料理ができない何って……」



シユウ「ひどいの一言だね」  
シゲルとシユウがそう言う。  
ヤストシ「それにさ、お前達。最近は料理ができない女は結婚なんてできないんだぞ」  
ヤストシのこの言葉が聞いたのか4人は固まってしまう。  
ハルカ「本当なの!」  
ヒカリ「料理ができない女は」  
アイリス「結婚できないの!」  
カスミ「タケシ、デント!」  
ヒロイン4人は、台詞を分けてデントとタケシに言う。  
デント「まあ、そうとは言えないけど。確かに、料理ができないのはまずいね」  
デントがヒロインにそう言う。  
ハルカ「お願い、タケシ、デント」  
ヒカリ「アタシたちに」  
アイリス「料理を教えてください!」  
カスミ「お願い!」  
ヒロイン達は、せがんでデントとタケシに言う。  
タケシ「わかったわかった。次の街に着いたら料理を1から10まで教えてあげるから」  
デント「だから、落ち着いてね」  
タケシとデントが料理を1から10まで教えるから落ち着くよう4人に言う。  
サトシ「そういえば、ポケモン達は?」  
マサト「あっちでみんなと一緒に食事しているよ」  
マサトが指を指しながらそう言う。  
指を指した方角には美味しそうにポケモンフーズを食べているピカチュウたちの姿があった。  
ケンタ「美味しそうに食っているな」  
デント「そりゃ、僕とタケシが共同で作った特製のポケモンフーズ

だからね」

デントがそう言った瞬間だった。

突然、ポケモン達の上から網が落ちてきてピカチュウ達が網にかか  
る。

ケンタ「一体何なんだ！」

ケンタがそう言うのと1機のニヤース型気球が現れた。

???「一体何なんだ！と言われても答えないのが常識だが・・・

まあ今回ぐらいは答えてやろう！」

と言うと気球から男女三人が姿を現われた。

???「光よ！」

???「水よ！」

???「ポケモンよ！」

???「天をも震わせるミュージック」

???「海に帰りし美しきビーナス」

???「神か閻魔えんまかその名を呼べば」

???「誰もが立ち止まる重い響き」

???「エリ！」

???「マリコ！」

???「ダイキ！」

エリ「今回も主役は私達！」

ダイキ「我ら天下無双の」

エリ・マリコ・ダイキ「ロケット団」「」

と名乗るとその横からスカンプーとピッピが出てきた。

マリナ「ロケット団!？」

ヤストシ「これはまたヤマトやコサンジ、山線トリオとは違った  
独特の感じたな」

コサブロウだ!!! by コサブロウ

エリ「その通りだ。私達はヤマトやコサンジ、山線トリオのバカ  
な連中とは違う！」

エリがサトシ達にそう言う。

タケシ「おー、美しい女性が二人も。敵じゃなければ自分と付き合  
って欲しかった」

ヤストシ「おいおい」

タケシの発言にヤストシは呆れる。

ヤストシ「そんなことより、どうしてお前達がニャー型気球を持  
っているんだ！」

ヤストシがダイキに聞いた。

ダイキ「これは、コジロウさんがイツシユ地方へ任務に出かける前  
に俺らに譲ってもらった気球なんだ！」

マリコ「昔は、あんなにポンコツだったムサシさんとコジロウさん  
は、今はロケット団メンバーから憧れの的なのよ」

マリコとダイキがサトシ達にそう言った。

カスミ「憧れの的って・・・」

カスミがそうつぶやいた。

ヒカリ「それより、アタシたちのポケモンを返してよ！」

ダイキ「返せって言われて返す奴はどこにもいねーよ！そんじゃあ  
ポチっとな」

とダイキがそう言ってボタンを押すと気球がポケモンたちが入った  
網を持ち上げて飛び去ろうとした。

カスミ「待ちなさい！」

アイリス「逃がさないわよ！」

そう言つてカスミとアイリスはもちろんサトシ達も気球を追い始め  
た。

ベル「ピカチュウ、でんじほうで網を破ってそいつらを倒して！」

何故か、ベルは自分のポケモンではなくサトシのピカチュウに指示  
をする。ちなみにサトシのピカチュウは「でんじほう」をおぼえて  
いない。当然、ピカチュウは困惑している。

ベル「もう、なにやってるのよ。でんじほうよ、でんじほう」

若干怒り交じりにピカチュウに指示を出す自己中ベル。

サトシ「おいベル。俺のピカチュウはでんじほうなんて覚えてない

って」

そんなベルに呆れながら答えるサトシ。

ダイキ「おいおい、マリコ。あいつらが追いかけて来るぞ！」

マリコ「いいよ別にほって置きなさい。それよりこれだけのポケモンを捕獲すればボスも大喜びだわね」

エリ「確かに。これだけあれば出世間違いなしだわ」

マリコ・エリ・ダイキ「」「幹部昇進、支部長就任でいい感じ」

「  
マリコとエリ、ダイキはかなり浮かれていた。まるで、DPの頃までのムサシ、コジロウ、ニヤースを見ているようだ。

サトシ「ピカチュウを、みんなを返せ！」

サトシは勢いよくジャンプをしてポケモンたちが捕らわれている網に飛びついた。

マリコ「あ、ダイキ。ブラックリストに載っている少年が網に飛びついたわよ」

ダイキ「なに！おい小僧！その網から手を離せ！」

サトシ「嫌だ！」

ダイキ「ならば、力づくでやってやる！フワンテ、シャドーボール  
での小僧を叩き落せ！」

そう言つてフワンテは、シャドーボールを繰り出してサトシに当てる。サトシは、手から網が離れて地面へ向かって落下していった。

カスミ・ヒカリ・アイリス・コトネ・ベル「」「」「サトシ（君）

！！！！！！！」

サトシが落ちてくる姿を見たカスミ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベルが走り出してダイビングした。そして、サトシはカスミ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベルを下敷きする形で着地した。

サトシ「いたたたた」

カスミ「サトシ、大丈夫？」

サトシ「ああ、なんとか」

ヒカリ「よかった」

ベル「ケガがなくなつて」

コトネ「安心したわ」

アイリス「それよりあまり無茶しないでよね」

サトシ「ああ。でも、本当にありがとうなカスミ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベル」

サトシが笑顔でそう言うとかスミ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベルは顔を真っ赤に染まる。

マリコ「何よ何よ！あのラブラブな雰囲気は！」

エリ「私達、生まれて以来1度だって彼氏なんてできないのに。何よ、この嫌味みたいなシーンは！」

ダイキ「しょうがないだろう、この作品。俺たちが出ている作品より恋愛要素かなり濃いからな」

ダイキがマリコとエリにそう言う。

マリコ「うるさいわね。こうなつたら、あの雰囲気ぶち壊してやるわ！」

エリ「そして、結婚ができないような顔にしてやるわ！」

マリコとエリがそう言う。

ダイキ「おいおい。やめるよ、そんなことしたらここの小説を書いている作者が怒るぞ！」

マリコ「そんなこと知らないわよ！」

エリ「作者を怖がってたらロケット団なんて勤まらないわ！」

ダイキの忠告を無視する形でマリコとエリはモンスターボールを持ち、ボールからピッピとスカンプーを繰り出した。

エリ「スカンプー、あの女の子達にみだれひっかき！」

マリコ「ピッピ！あなたも女の子達におうふうビンタです！」

そう言うスカンプーとピッピは、カスミ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベルに向かって攻撃を仕掛ける。ポケモン達は現在網の中なのでサトシ達の手元にはポケモンがない。当たるのを覚悟したカスミ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベル。

その時だった。

????「フライゴン、りゅうのいぶき。チルタリス、はがねのつばさ。ラティアス、サイコウエーブ」

空の上から3つの技がピッピとスカンプーに当たり一撃で戦闘不能になった。

マリコ「誰です。私たちの邪魔をしたのは！」

マリコがそう言うと、

????「人のポケモンを強奪した上にトレーナーまで攻撃するとは許せんなロケット団」

エリ・マリコ・ダイキ「「え、エブチ!?」「」

3人の前に現れたのは、エブチであった。

マリコ「ら、ラティアス。こんな珍しいポケモンをエブチが持っているなんて・・・」

マリコはラティアスを見て驚く。

エリ「でも、どうしてここにあなたがいるんですか!??」

エブチ「いや、サトシ君に届け物する途中で作者が「サトシ達がロケット団に襲われている」っていうから助けに来たんだ」

エブチがそう言う。

ダイキ「ホラ、見るよ。お前らが余計なことしたから作者がエブチに通報されたじゃないか!」

ダイキがエリとマリコにそう言う。

二人は、スカンプーとピッピをモンスターボールに戻す。

マリコ「こうなったら、ひとまずこのポケモン達をサカキ様・・・に!??」

マリコが気球の下を見るとそこには網がなかった。

エブチ「残念でした。すでにポケモン達は、チルタリスが救出したんだよ」

エブチがマリコとエリ、ダイキにそう言った。

マリコ「ねえ、この状況、危なくない?」

ダイキ「確かに・・・」

エリ「かなり嫌な予感がするわ」

マリコ、エリ、ダイキはかなり嫌な予言がした。そして、その予言は的中する。

エブチ「フライゴン、かえんほうしゃ！チルタリス、はがねのつばさ！ラティアスは、シャドーボール！」

3体のポケモンが一斉にロケット団の気球に向けて技を繰り出した。そして、技は見事気球に直撃して爆発した。

マリコ「なんでこうなるのよ！」

エリ「せっかくの出演もこんな形で終わるなんて！」

ダイキ「だから余計なことしなきゃあよかったのにな」

マリコ「でも、すでに後の祭りね」

マリコ・エリ・ダイキ「……やな感じー」「」

キラーン

マリコ、エリ、ダイキは星となった。

エブチはサトシ達から御礼を受けていた。

コトネ「ありがとうございますエブチ博士！」

エブチ「いや、なんのなんの」

タケシ「それより、エブチ博士。どうして、ラティアスがいるんですか？」

エブチ「この子か。この子はね、ハナダシティの近郊でかなり弱った状態で見つけてね。わしが丁寧に介護してな。それでケガも回復して野性に返そうとしたけど嫌がってな。そしたら、わしが持っていた空のモンスターボールに入れてゲットしたんだ。それから、人に化けてわしの仕事を手伝っているんだ」

エブチはサトシ達にそう言う。

カスミ「ところで、エブチ博士。サトシに届け物って？」

エブチ「そうじゃたそうじゃた。実は、サトシ君。このポケモンを君にくれようと思って持ってきたんだ」

そう言っただけでエブチはボールからそのポケモンを出すと中から出てきたのはチュリネだった。チュリネはサトシを見た瞬間、サトシに飛

びついた。

ハルカ「ねえ、このチュリネ。もしかしたらユガシマの森で手当てしたチュリネじゃないの？」

そう言っているとチュリネは頷いた。

エブチ「イツシユのポケモン達はわしの保護施設に入れたんじやがこのチュリネはサトシに会いたがっているってアヤノ君が言っていたから、連れて来たんじや」

エブチがサトシにそう言う。

サトシ「分かりました。大事にこのチュリネを育てます」

エブチ「そうか。それなら、このチュリネは幸せだ。あ、そうだ！ついでにこれを渡しておこう」

そう言っているとエブチはポケットの中から太陽の石を取り出した。

エブチ「この太陽の石。もし、チュリネがドレディアに進化したくなった時はこれを使うといいよ」

そう言っているとエブチは太陽の石をサトシに渡す。

サトシ「ありがとうございますエブチ博士」

エブチ「いえいえ、どういたしまして」

エブチはサトシにそう言う。

そして、サトシはチュリネをボールに戻して、

サトシ「よし、チュリネゲットだぜ！」

ピカチュウ「ピッ、ピカチュウ！」

こうしてサトシ達は新たな仲間を手に入れ、次の目的地へと進んでいくのだった。



第101話 新たなロケット団員襲撃（後書き）

よし、できたできた。

マリコ・エリ・ダイキ「「ちょっと待ったー！ー！ー！」「」  
誰かと思ったらおまえらか。一体どうしたんだ？

エリ「何よ、この私達の扱いは！」

マリコ「酷すぎるわ！」

酷いって、悪役なんだからしかたがないだろう。文句を言っなよ。

\*白波さん、キャラの提供ありがとうございます。

ダイキ「それより、俺達の出番って今回だけ？」

いや、白波さんの許可さえもらえば、今後も出していく予定だ。

エリ「そうか。まあ頑張ってね」

はい。と言うことで、今回はこれまでといたします。次回もお楽しみに。

第102話 イーブイの里(前編)

サトシ達はカマタシテイに向けて歩いてきた。が・・・  
ヤストシ「おい、タケシ！ここは、どこなんだよ！」  
ヤストシがタケシに言う。

タケシ「あれ、おかしいな？この先の道を左を曲がればカマタシテイなんだが・・・」

地図を見ながらタケシがそう言う。

すると、デントがタケシに近づいた。

デント「ねえ、タケシ。その地図、逆さまだよ」

タケシ「え！」

デントの指摘にタケシが地図をよく見るとデントの言うとおり地図が逆さまだった。

タケシ「あ、ホントだ」

そう言って地図を元の向きに戻す。

しかし・・・

サトシ「どうするんだよタケシ！」

コトネ「地図を逆さまにするなんて・・・」

アイリス「どうしてくれるのよ、この失態！」

ハルカ「完全に道に迷ったかも！」

ヒカリ「もうずく、カマタシテイだったのに・・・」

カスミ「こんな薄気味悪いところで野宿なんてゴメンだわ！」

ベル「そうよそうよ」

シユウ「僕も同じだね」

ケンタ「どう責任取るんだよ！」

ヤストシ「こんなことになるんだっいたらデントに地図を任せるべきだった」

サトシ達はいろいろとタケシを責めている。

マリナ「よしなさいよね、みんな！タケシ君がかわいそうだわ」

デント「僕もそう思うよみんな」

マサト「それにタケシを責めたところで何も解決にならないよ！」  
マリナ、デント、マサトがタケシの擁護（しゅうご）に入る。

カスミ「それもそうね」

アイリス「今更責めたって意味ないもんね」

ヒカリ「でも、このままだと野宿だよ完全に」

ヤストシ「近くに小屋らしきところはないのかな？」

そう言っつてヤストシは辺りを見渡す。

その時だった。

???「お前たち、そこで何をしている！」

突然声が聞こえてサトシ達は、後ろを振り向くとそこには青年とブ  
ースター、ブラッキー、リーフィアとイーブイの進化系3匹がいた。  
3匹はいつでも攻撃ができるよう戦闘体勢をとっていた。

ケンタ「俺達、怪しいもんではありません」

アイリス「そうそう、ただ道に迷っただけですよ」

ケンタとアイリスが青年にそう言う。

青年はサトシ達をジロジロと見た。

青年「どうやら、本当のようだな」

青年はサトシ達を見てそう言う。青年が手をブースター、ブラッキ  
ー、リーフィアに出すと3匹は戦闘体勢を解いた。

青年「すまないね。突然こんなことをして。申し送れた俺の名前は  
ライタ。君達は？」

サトシ「俺は、サトシ」

カスミ「カスミって言います」

タケシ「タケシです」

ケンジ「ケンジです」

ハルカ「ハルカです」

マサト「僕、マサト」

ヒカリ「ヒカリです」

アイリス「あたし、アイリスです」

デント「デントと申します」  
シユウ「僕はシユウと申します」  
コトネ「私はコトネです」  
ベル「私、ベルです」  
ケンタ「俺は、ケンタです」  
マリナ「私は、マリナです」  
ヤストシ「ヤストシと言います」  
サトシ達はライタに自己紹介をする。  
ライタ「そうか。まあ、とりあえず家まで案内するよ。ついておい  
で」  
ライタにそう言われてサトシ達はついて行った。  
そして、歩いてしばらく経つと自然豊かな草原があつてそこには、  
たくさんイーブイたちがいた。  
アイリス「うわ、イーブイだらけだわ」  
アイリスは辺りを見てそう言う。  
ライタ「ここは、イーブイの里と言ってたくさんイーブイが住ん  
でいるんだ」  
ヤストシ「そうなんだ」  
ヤストシがそう言う  
ライタ「あそこが俺が住んでいる家だ」  
ライタがそう言った時だった。  
「???」ライタ、おかえり」  
サトシ達の前に少女が現れた。  
ライタ「ススミ！」  
ススミ「あら、ライタ、こちらのお客さんは？」  
ススミがそうだずねる。  
カスミ「初めまして、アタシ、カスミって言います」  
サトシ「俺はサトシです」  
ケンジ「ケンジです」  
ハルカ「ハルカです」

マサト「僕、マサト」

ヒカリ「ヒカリです」

アイリス「あたし、アイリスです」

デント「デントと申します」

シュウ「僕はシュウと申します」

コトネ「私はコトネです」

ベル「私、ベルです」

ケンタ「俺は、ケンタです」

マリナ「私は、マリナです」

ヤストシ「ヤストシと言います」

みんながそうあいさつする中。

タケシ「初めまして、自分はタケシと申します。どうでしょうか  
スミさん、自分と一緒にこの後、お茶でも」

いつものようにナンパを仕掛けるタケシ。

タケシ「いてててて！！！！」

ヤストシ「はいはい、あっちに行こうね」

ヤストシがタケシの耳を引っ張り、ナンパを止めた。

ススミ「ところで、サトシさん達はどうしてここに？」

サトシ「実は、道に迷いました」

ヒカリ「ライタに助けられたんです」

ススミ「そうなんだ」

ライタ「とりあえず、こんなところでもなんだから家に入るうか」

ススミ「そうね。丁度仕事も終わったことだしね」

そう言っつてライタが玄関を開けてサトシ達を家の中に入った。

サトシ達が家に入った後、草むらに3つの影があった。

???「見ろよ。あんなにイーブイがたくさんいるぜ」

???「ああ。これは大手柄を立てるチャンスだぜ」

???「イーブイは、今や7種類に進化系がある」

???「これをボスに献上すれば、汚名返上だ！」



第102話 イーブイの里（前編）（後書き）

イーブイを狙うこの3つの影の正体は一体誰なのか？それは、次回、明らかとなる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3658p/>

---

ポケットモンスター ホクシン地方への挑戦

2011年10月28日09時18分発行